

大分の中世石造遺物

第5集 総括編

序 文

本書は、大分県教育委員会が国庫補助事業として平成20年度から平成28年度までの9ヶ年計画で実施している「大分県古代・中世石造遺物分布調査」の調査報告書第5集（総括編）です。

大分県は石造物の宝庫と言われており、平成26年度までに実施した分布調査で県内に3,605箇所の中世石造物所在地と、約28,000基にも及ぶ石造物の存在を確認できました。本書では主要な石造物の実測図と2遺跡の測量調査成果、金石文一覧とともに、特論として各委員の調査報告を掲載しています。また、地域ごと、石造物の塔形ごとにその変遷や地域の特徴を概観し、大分県の中世石造物の特質を明らかにできたと考えています。

都市部での近年の開発による石造物の他所へ移転や滅失、中山間地域での過疎化・高齢化の進行により永く大切に管理されてきた石造物が忘れ去られたり、大気汚染や酸性雨等の環境の悪化により石造物の劣化が急速に進行するなど、石造物を取り巻く環境は厳しさを増しています。今回の調査成果を基に、今後、文化財指定や埋蔵文化財包蔵地として周知するなど、石造物の適切な保護を進めていく必要があると痛感しています。

本書が県内の中世石造物の基礎資料として、これまでに刊行した4冊の分布図・地名表編、写真図版編と併せ、身近な文化財である古代・中世石造物の保護と啓発、さらには地域の歴史や文化、文化財保護への理解の一助になることを願ってやみません。

最後になりましたが、石造物の所有者や管理者、地域の方々には調査への御理解とともに、石造物に関する多くの情報を御提供いただきました。膨大な石造物の調査はこうした地域の方々のご協力なしには成し得なかったものです。また、調査について御指導、御助言、御協力をいただいた調査委員や外部調査員各氏、各市町村教育委員会をはじめ関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成29年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 長 後 藤 一 重

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が国庫補助事業として実施している「大分県古代・中世石造遺物分布調査」の報告書第5集「総括編」である。
2. 本書には、大分県下の古代・中世石造遺物分布調査の成果及び、主要な石造物の実測図、銘文の一覧を掲載している。
3. 各石造物の所在地や概要、塔形及び個体数等については報告書第1～3集「分布図・地名表編」（上・中・下）、写真は報告書第4集「写真図版編」を参照されたい。
4. 本書所収の実測図・拓本その他記録類は大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市牧録町1番61号）で保管している。
5. 実測図の作成は小柳和宏・友岡信彦・綿貫俊一・松本康弘・吉田 寛・小林昭彦・横澤 慈・井 大樹・宮内克己（以上、大分県教育庁埋蔵文化財センター）、坂本嘉弘（元埋蔵文化財センター）、越智淳平・五十川育子（現大分県教育庁文化課）、原田昭一（現大分県立歴史博物館）が行った。また、過去に刊行物等で公表された実測図は再トレースのうえ掲載した。これらのトレース作業は横澤の他、清松 悟・松浦知恵・小名川玲子（埋蔵文化財センター臨時職員）が行った。
6. 本書の執筆は後藤一重（埋蔵文化財センター所長）・小柳・原田・綿貫・横澤の他、田中裕介（別府大学）・渡辺文雄（元別府大学）・江藤和幸（宇佐市教育委員会）・三谷結平（中津市教育委員会）が行い、目次に執筆者を明記した。また、特論として藤澤典彦（元大阪大谷大学）・菊地大樹（東京大学史料編纂所）・飯沼賢司（別府大学）・渡辺文雄・田中裕介の各調査委員の報告を第4章に掲載した。編集は横澤が行い、小柳が全体を総括した。
7. 実測図の作成及び本書作成にあたって、各市町村教育委員会及び石造物所有者・管理者の他、下記の機関、諸氏の協力を得た。

東京大学史料編纂所、大分県教育庁文化課、大分県立歴史博物館

植木和美、大山琢央、川津智子、神崎哲也、神田高士、真田博幸、高野弘之、竹野孝一郎、豊田徹士、野口典良、秦 広之、松本啓子、松本卓也、諸岡 郁、山下俊雄、山田尚志、吉田和彦、吉武牧子

目 次

序文

例言

目次

第1章 はじめに (小柳和宏)	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の方法	2
第4節 調査の組織	5
第2章 大分県の地勢 (原田昭一)	7
第1節 地理的環境	7
第2節 大分県の石造物と石材	7
第3章 調査の成果	9
第1節 大分県の中世石造物の概要 (小柳)	9
(1) 中津市・宇佐市 (江藤和幸)	12
(2) 豊後高田市・国東市・姫島村 (後藤一重)	13
(3) 杵築市・日出町・別府市 (小柳)	15
(4) 日田市・玖珠町・九重町 (小柳)	16
(5) 由布市・大分市 (原田)	17
(6) 竹田市・豊後大野市 (小柳)	19
(7) 臼杵市・津久見市・佐伯市 (原田)	20
第2節 各石造物詳説 (横澤 慈)	23
(1) 五輪塔	26
(2) 宝塔	46
(3) 国東塔	61
(4) 磨崖仏	87
(5) 石仏	89
(6) 宝篋印塔	91
(7) 板碑	113
(8) 無縫塔	151
(9) 石幢	159
(10) 石殿	168
(11) 石鳥居	172
(12) 笠塔婆	180
(13) 角柱塔婆	184
(14) 層塔	191
(15) その他塔婆石碑	197

09) キリシタン関係石造物	200
第3節 測量調査の成果	204
(1) 屋成家墓地 (三谷紘平)	204
(2) 西寒田クルスバ遺跡 (田中裕介)	208
第4節 各塔形のまとめ	216
(1) 五輪塔 (原田)	216
(2) 宝塔・国東塔 (原田)	220
(3) 磨崖仏 (渡辺文雄)	226
(4) 石仏 (小柳)	234
(5) 宝篋印塔 (小柳)	242
(6) 無礙塔 (原田)	246
(7) 板碑・角柱塔婆 (原田)	250
(8) 石幢・石殿 (三谷)	256
(9) 石鳥居 (綿貫俊一)	262
00) 笠塔婆 (原田)	270
01) 層塔 (原田)	274
02) キリシタン関係石造物 (田中)	278
03) 外来系石造物 (原田)	288
第4章 特論	294
第1節 中世における五輪塔造立の展開 (菊地大樹)	294
第2節 石塔の基礎基壇の諸問題 (藤澤典彦)	303
第3節 大分の中世石造物をめぐる二三の問題 (渡辺文雄)	318
第4節 14世紀後半の豊後における石像造立と禅宗幻住派の展開 (飯沼賢司)	328
第5節 キリシタン墓碑の新形式 (田中裕介)	333
第6節 遺跡としての石造物群 (小柳和宏)	341
第5章 総括	344
第1節 大分県における石造物の展開とその意味するもの (原田)	344
第2節 今後の石造物の保護について (小柳)	346
付章 金石文年表 (小柳・横澤)	348
報告書抄録	383

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大分県に中世の石造物が多数存在することは、以前より知られていた。国・県指定物件だけで240件余あり、市町村指定あるいは無指定のものまで含めるとその数は膨大になると考えられる。特に臼杵磨崖仏に代表される磨崖仏は、全国的に見ても、大分県は分布が集中する地域であり、また、国東塔と呼ばれる独特の宝塔も創出されるなど、中世の石造物は大分県が全国に誇れる文化遺産の一つであり、その歴史的・美術的価値は計り知れないものがある。

そのような中、これまで過去大分県内では石造物について幾つもの調査が行われてきた。しかし、それらの調査は対象が限られていたり（例えば「一石五輪塔」など）、特定の地域の石造物であったり（「国東地域」など）、あるいは目的がやや異なっていた（劣化の調査など）りして、必ずしも全県下を見通した悉皆的な調査ではなく、中世の石造物全般の保存に向けた資料となるものではなかった。また、石造物は地下に埋納穴や石組みの遺構を持つものが多いが、そこに注目した調査は突発的な事例を除いては皆無に等しかった。

そのため、その所在が遺跡地図に記入され、その上保護の措置が取られているものは指定物件以外では極めて限られるのが現状であった。また、最近の地域社会の崩壊や限界集落の増加、そして里山の荒廃は、石造物の所在そのものを忘れさせる要因にもなっている。さらに、最近では酸性雨による石材の風化が急速に進み、銘文が判読できなくなってきたものがあることも指摘されている。

そこで、保存に向けた取り組みを進めるため、これらの石造物の分布・種別・個数・立地などの基礎情報を悉皆的に把握し、全県下を網羅した台帳を整備することが喫緊の課題として浮上した。それを受けて、埋蔵文化財センターでは平成20年度から8ヶ年の計画（最終的には1年延期）で「大分県古代中世石造物詳細分布調査」を行うこととなった。

第2節 調査の経過

年度ごとに、調査経過を記す。

【平成19年度】

平成20年度から開始される「国庫補助事業」に向けて、内部で調査方針などについて検討を行う。さらに、石造物の基本データの収集と調査に使用する地図（住宅地図）の収集を行った。

【平成20年度】

平成20年6月5日(木)、6日(金)の日程で調査指導者会を開催し、調査の方針の確認と調査方法の検討を行う。5日には会議に先立って、豊後大野市三重町、千歳エリアの主要石造物について現地視察を行った。

【平成21年度】

平成21年11月19日、由布市

【平成22年度】

平成22年12月13日(水)、14日(木)に調査指導者会を開催。14日には中津市耶馬溪の羅漢寺の現地視察。

【平成23年度】

平成23年12月12日(水)、13日(木)に調査委員会を開催した。13日には臼杵市においてキリシタン関連の石造物の現地調査を行った。

【平成24年度】

報告書第1集「分布図・地名表編(上)」を刊行。調査指導者会を平成24年11月1日(木)、2日(金)に開催した。2日には日出町から杵築市、国東市において石仏の現地調査を行った。

【平成25年度】

報告書第2集「分布図・地名表編（中）」を刊行。調査指導者を平成25年11月18日(日)、19日(火)に開催した。19日には由布市で現地調査を行った。

【平成26年度】

報告書第3集「分布図・地名表編（下）」を刊行。調査指導者を平成26年12月15日(日)、16日(火)に行った。16日には豊後高田市、国東市において石仏の現地調査を行った。

【平成27年度】

報告書第4集「写真図版編」を刊行。調査指導者を平成27年12月19日(土)、20日(日)に開催した。特に19日(土)については、一般向けに調査成果の報告会を行い、約200名の参加者があった。20日(日)は、大分市内の曲石仏と伽藍石仏の現地調査を行った。

石造物の実測調査は臼杵市野津町八里合の一石五輪塔（重要文化財）など、17地点20基を対象に行った。

【平成28年度】

平成27年度に引き続き石造物の実測調査として、48地点54基を対象に行った。平成28年9月2日には調査指導者を開催し、主に報告書「総括編」（本書）の内容、項目立てなどについて検討を行い、さらに昨年度までに判明した事項について、報告書執筆予定者から簡単な報告を頂いた。そして、報告書刊行後の石造物の保護と、文化財指定に向けた考え方について事務局から説明を行った。平成29年3月に報告書第5集「総括編」を刊行し、調査を完了した。

第3節 調査の方法

調査をどのような精度で、どのように行うのか、そして調査結果をどのような形にまとめていくのか、どこまでの情報を公開するのか、といった基本的な事柄が当初から問題になった。委員会で様々な意見が交わされたが、結果的に次の点が確認され、実際の調査に生かされた。

- ① 調査前に、市町村史誌類等を参照することによって「石造遺物データベース」を作成し、基礎資料とする。
- ② 対象とする時期は、平安時代から江戸時代初頭（概ね寛永年間まで）とする。
- ③ 調査する項目は、種別、基数とする。ただし、五輪塔や宝塔、宝篋印塔などが倒れて部材が複数に分かれ、本来の組み合わせがわからなくなっているものについては、部材ごとに点数を数える。
- ④ 調査に持って行く地図は「ゼンリン住宅地図」に統一。周知の石造物の現状確認のほか、地図記載の「神社」、「寺院」、「堂」、「墓地」、「集会所」、「公民館」をくまなく踏査し、石造遺物があった場合にはその種類、基数などを調査カードに記入する（「集会所」や「公民館」は、昔は仏堂であったことが多い）。
- ⑤ 調査カードは、「個体」を記入するものと、「群」を記入するものの2種類を準備する（第1・2図）。
- ⑥ 報告書に記載する分布図には、2万5千分の1地形図を縮小したものを使用し、ドットで位置と番号を記入。番号は市町村ごとに1から振り、番号に対応する形で地名表を作成する。
- ⑦ 悉皆調査時に石造物は基本的にすべて写真に取め、悉皆調査終了後に実測図の必要な石造物を選び、あらためて実測する。実測は、指定物件の内、未実測のものを優先した。また、既存の実測図や拓本は可能な限り集め、報告書に載せることにした。

以上の7点を基本とし、調査を行った。結果的には、全県下を概ね等しい網の目で悉皆的に調査出来たと考えるが、「神社」、「寺院」、「堂」、「墓地」など以外に所在する石造物、例えば山中にぼつりと立つ石造物などは、網の目から漏れている可能性が高い。その最大の要因は、時間的なことから積極的な聞き取り調査を行わなかったことにあるが、山村部の人口減少、廃村化も大きな要因になっている。後者は、住宅地図に記載のある「墓地」や「神社」にすらすらと着けられない要因でもあった。

石造物（個体）基礎カード

所在地	番・区・町	大字	外	番地
種別	石造物の種類	所在地の座標		
現状としての名称	別名	面積	面	
備考	保存状況	保存の理由		
建造年（個体の正確な建造年不明の場合は）				
備考				
写真撮影				
記録				
調査年月日	調査年月日			

次は巻末の付録に収録されている

建造年（個体の正確な建造年不明の場合は）	
備考	
写真撮影	
記録	
調査年月日	

第1図 調査カード(石造物(個体)基礎カード)

なお、悉皆調査（現地調査）は外部調査員から様々な情報を頂きながら、すべて埋蔵文化財センター職員が行った。担当エリアについては、報告書第1集から第3集に記載している。

第4節 調査の組織

調査組織は次のとおりである。

調査委員（肩書きは平成28年度）

藤澤典彦 大阪大谷大学非常勤講師（元大阪大谷大学教授）

菊地大樹 東京大学史料編纂所准教授

飯沼賢司 別府大学教授

田中裕介 別府大学教授（平成25～28年度）

渡辺文雄 元別府大学教授（元大分県立歴史博物館長）

小泊立矢 元別府大学准教授（元大分県立先哲史料館副館長）

外部調査員

江藤和幸 宇佐市教育委員会

三谷純平 中津市教育委員会（平成26～28年度）

三重野誠 大分県教育庁文化課（平成26～28年度）

櫻井成昭 大分県立先哲史料館

友岡信彦 大分県立歴史博物館（平成25・26年度）

原田昭一 大分県立歴史博物館（平成27・28年度）

高宮なつ美 大分県立歴史博物館

事務局・調査員

【平成20年度】

・文化課

吉永浩二（参事）

・埋蔵文化財センター

佐藤英一（所長）、坂本嘉弘（次長）、小柳和宏（主幹）、原田昭一（主幹）

【平成21年度】

・文化課

吉永浩二（参事）

・埋蔵文化財センター

佐藤英一（所長）、坂本嘉弘（次長）、小柳和宏（主幹）、原田昭一（主幹）

【平成22年度】

・文化課

小林昭彦（参事）、後藤晃一（副主幹）

・埋蔵文化財センター

山口博文（所長）、坂本嘉弘（次長）、宮内克己（参事）、村上久和（主幹）、小柳和宏（主幹）、

原田昭一（主幹）、友岡信彦（主幹）、築矢和徳（主査）、越智淳平（主事）

【平成23年度】

・文化課

小林昭彦（参事）、後藤晃一（副主幹）

・埋蔵文化財センター

山口博文（所長）、坂本嘉弘（次長）、宮内克己（次長）、村上久和（主幹）、小柳和宏（課長補佐）、

原田昭一（主幹）、友岡信彦（主幹）、田中裕介（主幹）、福永素久（囑託）

【平成24年度】

・文化課

佐藤晃洋（参事）、越智淳平（主事）

・埋蔵文化財センター

山口博文（所長）、宮内克己（次長）、小林昭彦（参事）、後藤一重（参事）、小柳和宏（課長補佐）、
原田昭一（主幹）、友岡信彦（主幹）

【平成25年度】

・文化課

野尻明敬（参事）、横澤慈（主任）

・埋蔵文化財センター

宮内克己（所長）、小林昭彦（次長）、後藤一重（参事）、小柳和宏（参事）、原田昭一（課長補佐）、
松本康弘（主幹）、坂本嘉弘（囑託）、高橋信武（囑託）

【平成26年度】

・文化課

野尻明敬（参事）、横澤慈（主任）

・埋蔵文化財センター

松村洋一（所長）、後藤一重（次長）、小柳和宏（参事）、原田昭一（課長補佐）、綿貫俊一（主幹）、
松本康弘（主幹）、坂本嘉弘（囑託）、高橋信武（囑託）、宮内克己（囑託）

【平成27年度】

・文化課

三重野誠（主幹）、越智淳平（主任）

・埋蔵文化財センター

後藤一重（所長）、小柳和宏（次長）、綿貫俊一（主幹）、松本康弘（主幹）、吉田寛（主幹）、
小林昭彦（専門員）、横澤慈（主査）、坂本嘉弘（囑託）、宮内克己（囑託）、五十川育子（囑託）

【平成28年度】

・文化課

三重野誠（課長補佐）、越智淳平（主任）

・埋蔵文化財センター

後藤一重（所長）、小柳和宏（次長）、綿貫俊一（課長補佐）、松本康弘（主幹）、
小林昭彦（専門員）、横澤慈（主査）、井大樹（主事）、宮内克己（囑託）



平成27年度 委員会開催状況



田中委員現地調査
（臼杵市鍋田キリシタン墓）



実測調査状況
（豊後大野市早尾原石幢）

第2章 大分県の地勢

第1節 地理的環境

大分県は九州北東部に位置し、北は周防灘、東は豊後水道に面し、北は福岡県、西は熊本県、南は宮崎県に隣接している（第3図）。県土の総面積は約6,300km²で、総面積の70%を超える森林をもつ。

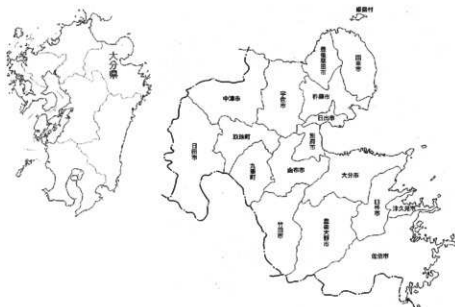
県下沿岸部には、県北の宇佐平野、県央の大分平野、県南の佐伯平野などの比較的広い平野があり、内陸には、日田、玖珠、由布院、竹田などの盆地が存在する。このほか、山稜部が広がり、南北に霧島火山帯が縦走し、これに添って北西部に英彦山々系、南西部に祖母山々系が連なり、起伏に富む地形を形成している。

また、大分県南部の豊後大野市を中心として阿蘇山火砕流の堆積による火山性台地が広がり、山国川、駅館川、筑後川、大分川、大野川、番匠川などの主要河川により、侵食拡大の作用を受けている。河川は周防灘、別府湾、豊後水道に流れ出るものが多いが、筑後川上流部の大山川、玖珠川は日田盆地で合流し三隈川となり、筑紫平野を抜け有明海へ注ぎ、北川水系の中岳川は南流し、延岡で五ヶ瀬川と合流し日向灘へ注いでいる。

海岸については、県の北北部で大きく異なり、瀬戸内海に属する周防灘、別府湾においては遼浅の砂浜海岸、佐賀関以南の豊後水道沿岸にはリアス式海岸が広がり、自然の良港がおおく、また、漁場としても恵まれた環境を作り出している。

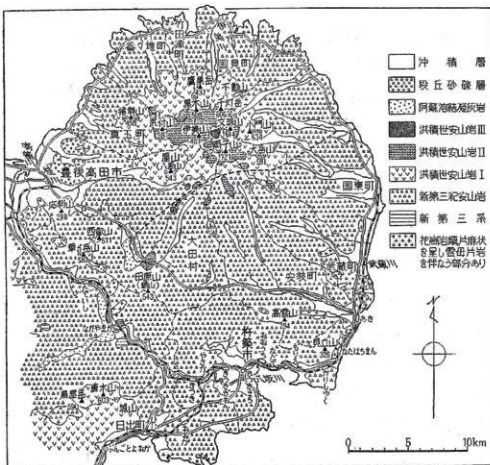
第2節 大分県の石造物と石材

石造物の石材という視点でみれば、大分県における主要な石材は凝灰岩と安山岩にほぼ限定される。これらの石材は、大分県北部の周防灘沿岸一帯から国東半島・別府湾北東岸にかけて安山岩が分布し、大分県中南部一帯から日田盆地にかけて凝灰岩が分布する（第4図）。凝灰岩は豊後高田市田染地区、杵築市山香町においても局部的にその分布が確認できる。これらの石材産出地域にはそこで採れる石材で製作された石造物が分布しており、製作地と分布域がほぼ離れたものではないことを物語っている。例えば、佐伯市では極めて局部的にしか凝灰岩の産出が確認できないが、産出地に近接した場所に質・量ともに充実した凝灰岩製の石造物の分布が認められ、産出地から離れるにしたがって分布密度が薄くなることから、石材採取地と石造物製作地との密接な関係が窺える。

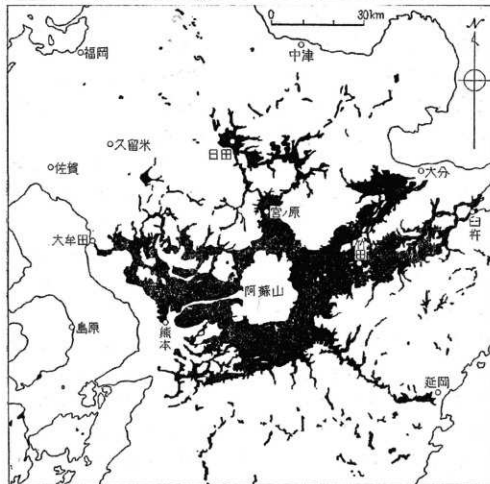


第3図 大分県の位地と市町村配置

安山岩の分布
(国東半島)



凝灰岩の分布



第4図 大分県における安山岩・凝灰岩エリア(緒方町1958「緒方町誌」から引用)

第3章 調査の成果

第1節 大分県の中世石造物の概要

平成20年度から7ヶ年をかけて行った悉皆調査では、約3,600箇所で約28,000基の中世石造物を確認した。ただし、この28,000基という数字には中津市にある羅漢寺関係の膨大な石造物（主に五百羅漢像や地藏像）は含んでいない。現在も中津市による調査が進行中であり正確な数値は後日判明するとしても、おそらく1,000基（体）以上の石造物があることは概ね確認出来るので、大分県内の中世石造物の数としては約30,000基に迫る数であることが想定される。山中深くに佇み今回の調査で確認出来なかったものや地中に埋もれたもの、あるいは破壊されたものなども合わせると、実際に造立された基数としてはおそらく数千基近くはプラスされると考えられる。

まず、この約3万基という数字の算出法について触れておきたい。一石五輪塔のように一石で造られていたものは1基と数えられるが、幾つかの部材で構成される石塔（通常の五輪塔や宝塔、宝篋印塔など）はバラバラな状態であることが多く、しかもそれらの部材が集積されている場合などは、塔としての基数を正確に把握するのは不可能である。そこで今回の調査では、ばらけている部材はあるまゝ（例えば墓地や寺社など）単位でそれぞれの個数を数え（五輪塔ならば空風輪、火輪、水輪、地輪ごと）、その中で最も多い部材の数を、その塔形の基数とした。そうやって導き出された数字が約28,000という数字である。

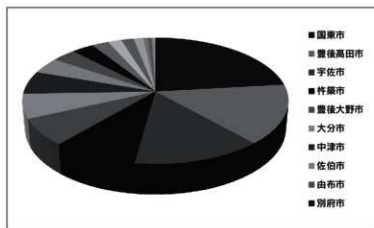
この28,000基が大分県内でどのように分布しているかを見てみると、第5図のように国東市、豊後高田市、宇佐市の3市だけで全体の半数を超える53%を占める。約15,000基がこの地域にあることがわかる。この3市に次ぐのが杵築市であることを考えると、国東半島でいかに多くの石造物が作られたかがよくわかる。ただし、これらの数値は市町村の面積の大小を考慮していないものなので、次の第6図では1平方²あたりの個数を算出したものを掲げる。これを見てもやはり豊後高田市、国東市、杵築市、宇佐市が多いことがわかる。1平方²あたり2基未満のところも6市町村（県南部および玖珠、日田地方）あり、それらと比較すると国東半島ではそれらの市町村より10倍以上の石塔が立てられていたことになる。これらは当時の人口密度もある程度反映したものとも考えられるが、必ずしもそうとばかりは言い切れない。そのことを塔形ごとの割合を見る中で考えてみたい。

塔形ごとに分けて割合を出した結果が第7図の円グラフである。これからわかるように、約4分の3が五輪塔であった。その五輪塔は、国東市、豊後高田市、杵築市という国東半島の3市で51%を占める。さらに隣接の宇佐市まで含めると今回確認された五輪塔の実に64%が国東半島周辺に集中していることが明らかとなった。このことは、県内を五つの地域に分けて地域ごとと同じく割合を出すときさらに明瞭になる。1表を基に計算すると、玖珠・日田や県南部地域では五輪塔の占める割合が66%程度であるのに対し、国東地域では82%が五輪塔である。このことは、国東半島に「六郷山」と呼ばれる天台宗寺院群が展開していたことと無関係ではないだろう。

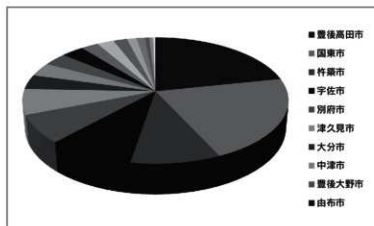
県内全体で見ると、五輪塔に次いで多い塔形は宝塔（国東塔を除く）、次いで宝篋印塔、板碑、石幢、国東塔の順になる。これらも地域によっては順番が入れ替わる。宇佐・中津の豊前地域では宝塔が多いが、逆に玖珠・日田地域は宝塔は少なく、宝篋印塔が多い。一方塔形の方から見てみると、当然ながら国東塔は国東市、豊後高田市、杵築市の3市で全体の93%を占める。その3市に次ぐのが宇佐市、そして日出町、九重町、中津市となる。宇佐市、日出町は中世の六郷山寺院が存在しており、国東塔はまさに六郷山寺院の分布と一致していることがわかる。ごく僅かではあるが、地域的には大きく離れた九重町にも「国東塔」と呼べる宝塔が4基確認されているのは、何らかの影響があったと考えられる。それ以外の地域、例えば大分市や別府市などで国東塔があるのは、近年の移動によるものである。次いで国東塔を除く宝塔を見ると、宇佐市に多いことがわかる。次いで国東市、豊後高田市と国東半島にやはり多い。それらに次いで大分市と佐伯市、豊後大野市など県中部から南部にかけても多く造立されていることがわかる。宝篋印塔と石幢は約4の1

第1表 大分県内中世石造物集計表

世数	市町村名	面積 (km ²)	箇所数	箇所/ 1km ²	個体数	個体/ 1km ²	五輪塔						宝篋印塔																			
							完存		空風輪		火輪		水輪		地輪		推定数		完存		相輪		笠		塔身		基礎		基壇		推定数	
							完存	空風輪	火輪	水輪	地輪	推定数	完存	相輪	笠	塔身	基礎	基壇	推定数													
国東市	杵築市	280.06	365	1.30	2,508	8.96	277	803	1109	897	446	1,653	92	31	29	19	12	1	150													
	日出町	73.33	82	1.12	133	1.81	23	247	242	259	138	53	13	17	17	3	2	0	25													
	開府市	125.29	119	0.98	851	6.79	51	432	533	484	349	713	18	9	20	13	4	1	50													
	大分市	502.39	319	0.64	1,739	3.46	20	741	682	681	479	1,097	67	72	65	47	31	1	200													
	臼杵市	291.2	152	0.52	648	2.23	38	217	216	196	99	372	17	18	37	10	12	0	68													
	豊後大野市	603.14	333	0.55	1,894	3.14	314	580	503	488	246	1,072	156	87	102	122	71	0	384													
	津久見市	79.47	61	0.77	487	6.13	9	265	295	221	141	412	8	1	5	2	5	0	17													
	佐伯市	903.08	178	0.20	1,145	1.27	58	645	437	401	198	838	29	6	27	10	9	0	59													
	日出市	695.03	106	0.16	375	0.56	2	148	183	133	77	265	17	11	28	11	6	0	51													
	玖珠町	557.88	47	0.08	181	0.32	1	74	94	65	38	113	6	8	19	11	7	1	28													
国東市	九重町	271.37	34	0.13	135	0.50	1	39	56	35	16	79	6	7	11	5	5	0	19													
	由布市	319.32	132	0.41	934	2.93	125	361	438	461	375	683	27	37	52	39	26	8	99													
	竹田市	477.53	156	0.33	526	1.10	49	175	183	181	117	317	40	25	35	19	19	6	92													
国東市	中津市	491.54	280	0.57	1,614	3.28	75	823	839	661	361	1,233	36	19	51	18	19	9	94													
	宇佐市	439.05	391	0.89	3,801	8.66	11	1588	1684	2150	1058	2,691	25	62	97	62	49	11	179													
	豊後高田市	206.24	423	2.05	4,201	20.37	596	1285	1472	1295	780	2,490	47	19	40	9	12	4	97													
	郡島村	6.98	7	1.00	16	2.29	0	4	2	2	0	5	2	2	4	1	3	1	8													
	国東市	318.07	429	1.35	6,655	20.92	1150	2010	2398	1923	1274	4,296	73	31	72	18	39	11	166													
合 計	6611.97	3,605	0.55	27,843	4.21	2,805	10,437	11,346	10,553	6,172	18,373	679	402	711	419	331	54	1,280														



第5図 市町村別石塔数



第6図 1kmあたりの石塔数

が豊後大野市で占められる。石幢は2番目の宇佐市を挟んで臼杵市、竹田市が入っており、豊後大野市を含んだこの3市で約4割を占めている。石幢は県中部から大野川中、上流域（県南部）で盛んに造立されたことがわかる。

次に層崖仏を見てみると、豊後高田市、豊後大野市、大分市、杵築市、臼杵市、竹田市の6市で9割を超える。つまりかなり偏在していることを示している。これは従来から言われているように、層崖仏を掘る良好な露頭の有無が大きく作用しているのだろう。しかし、必ずしもそのことだけに取敢できるものでもない。日田市などのように、良好な凝灰岩の露頭があり梵字は刻むものの、層崖仏はほとんどない地域もある。

以上、約3万基にのぼる中世石造物の意味するところについて概略を述べた。次に地域ごとの特徴について、大分県内を7つの地域に分ち説明する。7地域は近隣の市町村をまとめたという意味合いもあるが、それ以上に地域性を語る最小の単位ということでもある。

(1) 中津市・宇佐市

大分県の北部に位置する宇佐市、中津市は、旧豊前国南部に位置する。このため、石造物の文化としては、宇佐市から福岡県豊前市にかけて独自の文化圏を形成しているが、国東半島の石造物の影響及び国東半島で製作された製品の流入が見られる。石造物の種類としては、層塔、宝塔、宝篋印塔、五輪塔、板碑、石幢、無縫塔、自然石製の塔婆が存在する。なお、国東半島に特徴的な石殿は見受けられない。また、刻銘資料が乏しいが、中前田遺跡・寺ノ奥遺跡の調査成果等から墨書銘の存在が指摘されている。

当該地域の石造物の最古の事例は、長寛三年に稲積山山頂に造立された、自然石の角柱の一面を平坦に加工し銘文を刻んだ3基の角柱塔婆（宇佐市138）である。ただし当該石塔は単発的に出現したものであり、同種の事例は他に例を見ない。なお、戦国期以降になると板状もしくは角柱状の自然石の表面を加工して銘文を刻む自然石塔婆が出現し、近世以降、墓石や文字庚申塔として利用されていく。ただし、稲積山角柱塔婆は当該地域でも特に飛び抜けて古い事例であり、当該地域の石造物の出現は13世紀以降、増加するのは13世紀後半の文永・弘安以降で、普遍化するの戦国期以降である。

13世紀前半の石造物としては、最明寺五輪塔（宇佐市262）が紀年銘資料として最古である。このほかは無銘であるため、可能性のある資料を紹介する。県北最大の五輪塔である阿於寺跡五輪塔（中津市182）は、火輪の傾斜が緩い特徴を持つ。宇佐市下高春日神社層塔は、太い塔身と傾斜の緩い屋根が特徴的である。これらはいずれも阿蘇溶結凝灰岩や耶馬溪層中に見られる凝灰岩など軟質石材を用いる点は共通している。なお、五輪塔・層塔は、五輪塔が戦国期から近世初頭に爆発的に数を増やすほかは、いずれも中世から近世にかけて継続的に造立される石塔である。また、国東半島には多く見られる一石五輪塔は、当該地域には少なく稀有な存在である。

13世紀後半以降は石塔の種類も増加する。まず宝塔が出現し、下って南北朝期以降に板碑が、さらに室町時代以降は無縫塔、宝篋印塔が、さらに遅れて石幢が出現する。石材としては阿蘇溶結凝灰岩は引き続き利用されるものの、製品は山間部に偏在する。一方、平野部には安山岩製石塔が増加していく。

宝塔の最古の事例は屋成家墓地宝塔（中津市236）で、同形式（南豊前型）は宇佐市・中津市・上毛町に南北朝期にかけて分布する。山国川中下流域では少し遅れて、入江英親氏が設定した求菩提型宝塔が出現する。終焉については不明な点もあるが、戦国期以降に急速に数を減ずると考えられる。宇佐市域には南北朝期以降に南豊前型から変化した宇佐型宝塔が出現し、戦国期以降に急速に小型化して、かつ分布域が中津市域にも拡大する。近世初頭まで造立されると考えられている。また、山国川上流域には小型の宝塔の一群が見られる。

また、数は少ないものの国東型宝塔（国東塔）が見受けられる。宇佐市の平野部を中心に、今行鳥越宝塔（中津市234）など、中津市域にも分布する。いずれも製品として持ち込まれたものと考えられる。

板碑は南北朝期に出現し、室町期以降に急速に小型化する。最終的には近世墓碑へと変化していくと見ら

れている。南北朝期には善光寺板碑（宇佐市035）のように国東半島の板碑に近似する事例が見受けられ、発生については国東半島の強い影響が想定されるものの、分布域には地域的偏りが著しく、宇佐神宮周辺の平野部や安心院町深見地区には近世初頭の墓石化した事例を除いて、板碑が全く見受けられない。また、宇佐市西部の中津市境界付近から中津市三光には二連の連碑が、中津市耶馬溪町平田周辺には両面板碑の分布が見られる。なお、両面板碑については、耶馬溪町平田周辺以外では、宇佐市の清水寺境内に1基（宇佐市020）存在する。また、四面に板碑を配した角塔婆が存在する。板碑とはほぼ分布域を共にするが、数量的には極めて少ない。小型化した事例が見受けられるため、戦国期までは存続したと考えられる。

無縫塔は羅漢寺開山塔とされる智剛寺無縫塔（中津市202）を端緒として、同形式の無縫塔が宇佐市中津市域に分布する。これは当時臨濟宗であった羅漢寺は多数の末寺を抱えており、この教宣拡大に伴い広く分布したものと考えられる。小型化した事例が見受けられることから、戦国期までは存続したと考えられる。

宝篋印塔は当該地域には普遍的に分布する。在銘資料が乏しいため、時期的な問題については課題があるものの、周辺地域の状況から室町時代以降に出現したと考えられ、近世にも造立が続いている。また、地域により特徴的な様式の宝篋印塔が造立される。宇佐市東部、概ね宇佐神宮より東側には、金丸宝篋印塔（宇佐市191）のように国東半島に見られる様式の塔が分布する。そのほかの地域には小型で露盤上面に反花を刻む宝篋印塔が分布するが、細部には差異が見受けられる。寺ノ奥宝篋印塔（未収録）のように塔身は無地とし、隅飾に月輪を現す事例、蓮華寺跡宝篋印塔（宇佐市228）のように塔身と隅飾に月輪を表す事例、積善寺宝篋印塔（宇佐市107）のように月輪を現さない事例とバリエーションに富む。この他中津市域には飛瀬宝篋印塔（中津市269）のように国東半島の事例に類似する大型の事例が見られる。

石幢は紀年銘資料から戦国期以降に普及すると考えられ、近世にも引き続き造立される。ただし、中世の石幢は笠が深福笠状のむくり屋根で深く垂れ下がるのに対し、近世の石幢は照屋根で、棟が反り返るなど石灯笼に近似した形状に変化する。重制石幢が主流で、単制石幢は宇佐市松崎石幢など類型は稀である。

(2) 豊後高田市・国東市・姫島村

1 豊後高田市

古代から中世の豊後高田市は、宇佐宮及び宇佐宮弥勒寺領の荘園である田染荘、都甲荘、真玉荘、白野荘、香々地荘などとなっていた。しかし、南北朝期以降は、田原氏、真玉氏、古弘氏、松成氏などの武士勢力が台頭する。また、山間部を中心に、長安寺、天念寺、応曆寺、靈仙寺などの六郷山と呼ばれる天台宗寺院が展開する。市域に造立された中世石造物は、県下の石造物総数の約15%である。その数は国東市に次ぎ第2位となっており、県下でも石造物が多数分布する地域といえる。

一石五輪塔を含む五輪塔は、全石造物の中でも圧倒多数を占め、各所で見ることができる。これらは、数基～数十基の群をなす場合が多い。在銘品は少ないが、南北朝前半期以前の例として、長岩屋蓮進坊跡石塔群（豊後高田市302）などの比較的大型で梵字が葉彫りされる例があげられる。しかし、その数は少なく、大部分は15、16世紀の作と思われる高さ1m以下の小型品である。また、戦国期には簡略化された一石五輪塔も急激に増加する。五輪塔は主に墓碑としての役割を担っていたと考えられ、各荘域内の拠点周辺や六郷山寺院周辺に分布が集中する傾向がみられる。

国東塔は塔身を蓮華座上にのせ、相輪上部に火焰宝珠をつける独特な形式から通常の宝塔とは区別される。その分布は国東半島地域に集中しており、同地域を代表する石造物と言える。延慶3年（1310）の銘がある塔ノ御堂国東塔（豊後高田市265）、無銘ではあるが長安寺六所権現国東塔（豊後高田市323）などが鎌倉時代末から南北朝初期に位置づけられ、市域における最も古い例となる。古式のものは塔身に納経のための空隙と納入口を有するものが多く、納経供養を目的としたものであったようであるが、室町期後半以降は塔身に納経施設をもたないものも多くなり小型化する。宝塔は少ないが、その中で国東塔の成立に先行するものとして、平安時代後期の可能性をもつ坊中岩屋宝塔群（豊後高田市151）がある。未法思想に伴い造

営される経塚との関連が想定されるものである。

板碑は、五輪塔を除く石造品の中では比較的多くみられる。在銘品も多く、正中2年（1325）の庵ノ追板碑（豊後高田市344）、建武元年（1334）の其ノ田板碑（豊後高田市362）など、鎌倉時代末から南北朝初期の作例を確認することができる。本来、供養や逆養を目的としたものであるが、室町期以降は小型化し無銘のものがほとんどになる。その多くが五輪塔などと混在することから墓碑として用いられるようになると考えられる。天文4年（1545）から天正4年（1576）の在銘品がみられる寺ノ上殿墓板碑群（豊後高田市243）はその好例である。

宝篋印塔は、五輪塔・国東塔・板碑に比べると出現が遅れ、南北朝後期頃から造立が始まる。阿形家宝篋印塔（豊後高田市331）などが出現期に比定される。室町期までは、比較的大型で各部の刻み出しも緻密で、塔身に納入口を穿つものも多い。しかし、戦国期になると小型で簡略化したものとなる。

石殿、石幢はともに少数である。石殿のうち紀年銘のあるものとして、暦応4年（1341）の中之島旅館石殿（豊後高田市209）、長祿3年（1459）の真玉寺石殿（豊後高田市023）、応仁2年（1468）の延寿寺石殿（豊後高田市387）がある。また、石幢は完存品がほとんどなく、紀年銘があるものとして、永和3年（1377）の荒平葉師堂石幢（豊後高田市380）がある。

以上のほか、市域においては磨崖仏や磨崖石塔が各所においてみられる。磨崖仏は平安後期の熊野磨崖仏（豊後高田市423）、鍋山磨崖仏（豊後高田市418）、鎌倉時代から南北朝期の元宮磨崖仏（豊後高田市388）などをはじめとし、室町から戦国時代にかけてのものがみられる。また、磨崖石塔は、身漣神社磨崖宝塔・種子（豊後高田市197）、梅の木磨崖五輪塔群（豊後高田市148）、道園線刻板碑（豊後高田市145）など、半円形から線刻のものがあつた。このほか石仏も確認されており、半円形の応安元年（1368）銘の富貴寺地藏像（豊後高田市365）、丸形ないしはそれに近い形態の巖屋普賢菩薩三尊像（豊後高田市271）、からじん様石造人物像（豊後高田市187）などがある。

2 姫島村

姫島村の古代から中世は、宇佐宮弥勒寺領であったが、室町時代になると、大友氏の水軍である浦部衆を構成する姫島氏などに支配された。

五輪塔、宝篋印塔、宝塔、板碑がある。多くは部材で、二十数点が確認されているのみである。国東半島地域とは異なり宝篋印塔の割合が多い。部材が多いなかで、南北朝後期～室町期に比定される清正公神社宝篋印塔（姫島村001）と虎ヶ塔宝篋印塔（姫島村002）は完存品である。

3 国東市

古代から中世の国東市は、国衙領である国崎郷、宇佐宮領あるいは宇佐宮弥勒寺領荘園の伊美郷、武蔵郷、安岐郷などとなっていた。しかし、南北朝期以降は田原氏が次第に勢力を強め、戦国期には大友氏に肩を並べるまでになる。また、半島奥部には両子寺、岩戸寺、文殊仙寺、千灯寺などの六郷山寺院が展開する。市域の中世石造物数は、県下の石造物総数の約24%を占め、市町村別石造物数では県下第1位である。

県下で最も濃密に中世石造物が分布する地域といえる。石造品には銘がみられるものも多く、その中で鎌倉時代から南北朝にかけての板碑や国東塔に「紀氏」の名が多くみられる。紀氏は豊後国司や国崎郡司などを務め、国崎郷に係りの深い一族である。その後、開発領主として半島の各地に上着しており、紀氏一族がこの地の石造品造立の一端を担った可能性が考えられよう。

量的には、一石五輪塔を含む五輪塔が圧倒的に多い。これらは群をなす場合がしばしば見られる。なかには、国見町仁聞菩薩墓地石塔群（国東市077）のように千基を超える数が造立されている例もみられる。南北朝期以前の例として、大型一石五輪塔8基からなる国東町浜崎祖形五輪塔群（国東市153）、国東町川原五輪塔（国東市264）、安岐町大蔵一石五輪塔（国東市176）、安岐町護聖寺一石五輪塔（国東市170）、安岐町七郎一石五輪塔（国東市359）、安岐町淨国寺一石五輪塔（国東市401）などあり、一石五輪塔が多い点が注目される。しかし、その数は少なく、多くの五輪塔は15世紀以降の作と思われ、小型の五輪塔や簡

略化した一石五輪塔などは戦国期の作であろう。

板碑は、鎌倉時代から南北朝期にかけて紀年銘を持つ例が比較的多い。最古例は正応4年（1291）銘の安岐町護聖寺1号碑（国東市170）である。これは県下における最古銘の板碑で、額部の出が深く、緩やかな反りをもつ。額部から上部が別材で造られている。また、元亨2年（1322）銘の国東市鳴板碑（国東市132）は総高350cmを超える県下最大規模のものである。15世紀以降になると、小型のものが多く、形態的には額部の出が浅く頂部の山型が直線的になり、身の反りがなくなる。この段階の例として、弘治2年（1556）銘の安岐町蔵神社板碑（国東市171）がある。また、安岐郷の朝野川流域には、郷内の中・大型の板碑が集中して分布している。これらは、半島中央部から郷の中心に至る古道に沿って分布しており注目される。

国東塔は国東半島地域に多くみられる塔形であるが、量的には五輪塔や板碑には及ばない。弘安6年（1283）の国東町岩戸寺国東塔（国東市081）は紀年銘のある最古例で、正応3年（1290）の国見町別宮八幡社国東塔（国東市007）など13世紀代からの造立が確認される。鎌倉時代末から南北朝初めにかけては、元享元年（1321）の国東町長木家国東塔（国東市132）、建武2年（1335）の安岐町釜ヶ迫国東塔（国東市345）、建武3年（1336）の国東町神宮寺国東塔（国東市179）などがみられる。その後室町期になると、基礎の格状間を省略するなどの形骸化と小型化がみられ、安岐町末弘国東塔（国東市161）のように、相輪の九輪を略し、基礎の格状間を連子文様にするなど本来の国東塔から外れるものも現れる。

宝篋印塔については銘のものが少ないが、国東町の朝日観音堂跡宝篋印塔（国東市085）、米浦宝篋印塔（国東市118）、玉林寺宝篋印塔（国東市150）、安岐町の桂徳寺宝篋印塔（国東市223）、中ノ川宝篋印塔（国東市337）などが南北朝期に遡るものである。室町期の作として、安岐町護聖寺宝篋印塔（国東市170）がある。これは、康応2年（1390）銘の日出町下川久保宝篋印塔（日出町036）と同じ特有な相輪をもつ。このような相輪をもつ例は、杵築市と日出町に分布する。

石殿、石幢は中世後半以降に多くみられるようになる。石殿のうち、安岐町報恩寺石殿（国東市160）は応永25年（1418）の紀年銘をもち、国東半島地域では最古銘である。このほか、各部に精緻さがみられる安岐町護聖寺石殿（国東市170）が15世紀前半に、やや形骸化した造りとなる安岐町両子石殿（国東市155）、瑠璃光寺石殿（国東市346）が15世紀後半に比定されよう。石幢では、応仁2年（1468）銘の安岐町両子石幢（国東市155）、文明10年（1478）銘の国東町岩戸寺石幢（国東市081）などの紀年銘をもつものがある。

少数がみられるものとして、無縫塔と層塔がある。無縫塔は、安岐町実際寺開山無縫塔（国東市370）に寂年である貞和5年（1349）の紀年銘がある。国東町泉福寺開山無縫塔（国東市191）は、応永元年（1394）竣工の開山堂に安置されている。このほか、安岐町報恩寺の無縫塔3基（国東市160）は15世紀代のものであろう。層塔としては、鎌倉時代後期の国東町吉木九重塔（国東市283）、戦国期の七重塔である国見町天満社層塔（国東市098）がある。

本地域の特徴として、石仏の存在をあげることができる。国見町松林寺（国東市097）では、永徳元年（1381）銘の地藏と永徳2年（1382）銘の比丘尼が確認されている。また、十王信仰に伴う十王像が各所でみられ、南北朝末から室町時代にかけての作と考えられる。国東町の重藤十王堂石造仏像群（国東市322）、文殊仙寺十王像（国東市083）、安岐町密乗院十王堂十王像（国東市349）などがあげられる。このほか、六郷山寺院の門前に安置された石造仁王像がある。文明10年（1478）銘の岩戸寺仁王像（国東市081）ほか、寺伝に南北朝期の永和年間作とされる文殊仙寺仁王像（国東市083）などが中世の作と考えられる。

(3) 杵築市・日出町・別府市

この地域は、国東半島の南側から別府湾の西側にかけての地域であり、国東半島の東から北、さらに西側

にある国東市、豊後高田市に次いでmあたりの中世石造物の点数が多い地域である。このことは、杵築市に中世六郷山寺院が点在したことが大きな要因であろう。また、杵築市に隣接の日出町12は少なく、さらに離れた別府市で多くなるのは、別府市内で五輪塔が150基近く確認された寺院（蓮台寺・別府市045：廃寺、詳細不明）があったことが大きな要因である。その結果、別府市では五輪塔の占める割合が8割を越えている。

この地域では、国東塔の分布南限を知ることができる。今回確認した中では別府市亀川の観音寺門前（別府市033）に立つものが南限である（ただし、この国東塔については、報告第1集で「宝塔」にしている）。この国東塔は相輪を欠くが、一石で作った返花と格状間を持つ基礎の上に頸部の無いやや縦長の塔身が載る（「国東塔の分布と特色」には別府市の南部にある朝見八幡宮境内にもあるが、未確認）。また、杵築市山香町内での国東塔の分布に触れると、北側は立石峠を越えて宇佐側（北側）に下ったところにある向野地区で多く見られ、逆に大分側に下った立石川の流域ではほとんど見られない。しかし、八坂川本流やその支流である上市川流域には点在している。特徴としては、日出町願成就寺国東塔（日出町035）に見られるような、蓮弁を線で表現したタイプが集中していることである。時代的にも比較的古い14世紀初頭から後半で、願成就寺例とその西側の墓地にある例、さらに中畑国東塔（杵築市096）、下川久保地蔵堂（日出町036）例の4基を確認できる。

この地域で特に取り上げるべき石造物に2種類ある。一つは特徴的な宝篋印塔で、もう一つは丸彫りの十王像である。前者は特に杵築市で顕著に見られる、相輪下部に隅飾り突起を有するものである。詳しくは第4節の宝篋印塔の項で述べるが、このタイプを「速見タイプ」と呼称する。速見タイプで最も古い紀年銘を有するものは「応安6（1372）年」銘があるときれる西仲尾宝篋印塔（杵築市196）であるが、笠の隅飾り突起が極端に小さく、段形の数も多い点や相輪の宝珠下の蓮弁が四角形を呈する、相輪が極端にエンタシス状に太るなどこの地域の宝篋印塔の系譜からは外れている。後につながるタイプでの最古例は、康応2（1390）年銘の下川久保地蔵堂（日出町036）の宝篋印塔である。この宝篋印塔は、納入孔を基礎の下部に穿っており、豊後の通常の宝篋印塔（塔身上部に穴を穿つ）とは異なっている。この宝篋印塔で確認したわけではないが、おそらく他例からすると笠と塔身の接合が柄によっており、塔身内部に空間を作り出すことができないことが要因であろう。この笠と塔身との接合（重ね方）手法も「速見タイプ」の特徴の一つである。ちなみに隣接する国東地域の宝篋印塔は、塔身の一辺より僅かに広く笠の裏側を窪ませて重ねる手法である。この「速見タイプ」の宝篋印塔は、江戸時代前期の墓標にも採用されるなど、250年近くこの地域で作られ続けた。

この地域のもう一つの特徴である丸彫り十王像は、8箇所を確認出来る。最も南に位置するのは日出町願成就寺のもの（日出町035）であり、ほぼ国東塔の分布南限と重なる。この願成就寺例は数体しか残っていないが、その造形は国東市にある文殊仙寺例（国東市083）と共通する点が多く、14世紀末に近い年代が与えられるだろう。同じ系譜にある杵築市轟地蔵例（杵築市118）もほぼ同時期であろう。その他の例は、同じ十王像が多く作られる国東市との共通点は少なく、独自の展開を遂げている。特に鍛冶屋十王堂例（杵築市082）は比較的大型の十王像であり、尊衣婆も加わるなど、系譜を迫ることができない。

このように、この地域は石造物が多数造立される国東半島の隣接地（厳密には杵築市は半島の付け根に位置する）にあって、国東塔の造立などで大きな影響を受けながらも独自の展開を遂げているということができよう。

(4) 日田市・玖珠町・九重町

この地域は筑後川の最上流域にあたる。日田盆地、玖珠盆地と盆地地形が連なり、そこに流れ込む小河川流域に谷底平野が展開する地勢となっている。古代より日田盆地には日田氏、玖珠盆地には清原氏という一族が盤踞し、中世にかけて権勢を振るう。一族は盆地やその周辺各地に根を下ろし、在地武士団を形成した。一方で、旧日田郡域の津江地域のように、水田可耕地が少なく山が連なる地形が広範囲に展開するとこ

ろもあり、おそらく中世当時の人口密度も相当に濃淡があったことが想定出来る。そのような地域に展開した中世石造物を一瞥し、地域性を見てみたい。

この地域は相対的に見て五輪塔の占める割合が小さく、宝篋印塔が大きい。また、もう一つの特徴として角柱塔婆が多いこともあげられる。さらに、国東塔が基礎確認されているのも注意される点である。

まず、この地域の宝篋印塔を見てみると、基本的に全高が1mに満たない小さなものが多いことが特徴である。大型と言えるのは日田市元大波羅社（日出町048）のもの（江戸期以降に新材を加え復原、元の部材も一部残存）くらいであり、中型のものもそれほど多くない。その大型の元大波羅社例、中型の坂口例（玖珠町032）、虎御前例（日田市059）、上旦那例（九重町020）などは相輪下部に隅飾り突起を持ち、このタイプの比率は高い。このタイプは速見郡に特に多く、速見タイプと呼んでいる。特に元大波羅社例は、隅飾り突起に内面を彫り窪めた円相を描く点で、日出町下久保例（日出町036）などと共通しており、速見地域との繋がりが想定出来る。

この地域に国東塔形式の宝塔が造立されるのも、速見地区も含んだ国東方面との強い繋がりが前提となる。この地域の国東塔の最大の特徴は、基礎上の蓮弁が扁平で基礎に吸い付くように刻まれている点である。これと同様の蓮華座を国東方面で探すと、ほとんど類例はないが、杵築市山香町内（速見郡域）で扁平な蓮華座を持つものが点在していることがわかる。浄土寺（杵築市007）例や泉福寺（杵築市029）例である。蓮弁に厚みがあるため、日田・玖珠方面のものとはやや異なるが、類似のものか国東半島ではなく西にはずれた旧山香町内にあることは、宝篋印塔の類似も含めて、日田・玖珠方面との繋がりが狭義の国東地域（旧国東郡）ではなく速見地域（旧速見郡北部）に絞り込まれることを示している。

この地域の板碑は五輪塔、宝篋印塔に次いで多いが、小さなものが多い。しかし、中にはやや大きなものがあり、安楽寺板碑（玖珠町043）のように額が突出したり、堂山薬師堂板碑（日田市087）や宝八幡宮板碑（九重町005）のように額部の両側の角を面取りしたりするなど、国東方面との関連性がうかがえるものが散見出来る。このことは、前記した国東塔の存在や宝篋印塔の形式と合わせ考えると、石工の交流、移動などこの地域が速見から国東方面にかけての地域との何らかの繋がりを有していたことは明らかである。

(5) 由布市・大分市

由布市は大分県のほぼ中央に位置し、市の中央部を流れる大分川流域に広がる段丘や盆地により形成された地域である。大分川源流や由布院盆地に旧湯布院町、大分川中流・河岸段丘に旧庄内町、大分川中流・平野部に旧挾間町が存在する。大分川流域に広がる段丘や盆地の北側には由布岳・城ヶ岳・雨乞岳、南側には花車礼山・時山・冠山など標高の高い山が存在する。

石造物の分布をみると、大分市に隣接する旧挾間町域には最も濃密に石造物の分布がみられる。中でも、扶間氏墓地には、南北朝～戦国期の紀年銘がみられる大型五輪塔をはじめ20基を超える資料が存在し、地域を代表する有力武士の墓地としてその威容を示している。藤原地区の感航寺には、鎌倉～南北朝期の紀年銘がみられる宝塔・五輪塔をはじめ数多くの石造物がみられる。

旧挾間町域から大分川を上流に遡った旧庄内町には拠点的に石塔が点在する。中でも、中世、市の存在が確認され、現在にその景観が残る甲斐田地区には戦国期～近世初頭の五輪塔・宝篋印塔を主体とした石塔が集中して散在する。このほかにも、龍原城山には南北朝期の紀年銘をもつ川廻宝塔・五輪塔などの石塔群がみられる。

大分川の上流域、由布院盆地のある旧湯布院町には比較的石塔は少ない。優品にしても保養地としての土地柄、他所から持ち込まれたものもみられる。香椎荘の宝塔や笠塔婆（由布市009）は由布市を代表する石塔の一例であるが、この両者はいずれも旧庄内町から持ち込まれたことが伝えられており、型式的にも旧庄内町の石塔群の特徴をもつ。

由布市の石塔群は、地元で産出する凝灰岩・安山岩を石材としている。塔形にしても鎌倉末～南北朝期は

五輪塔・宝塔を主体として造立されている。その出現は鎌倉時代末であり、由布市内で最も古い紀年銘をもつ元徳2年（1330）銘の慈航寺宝塔（由布市078）をはじめとして、南北朝期には五輪塔・宝塔が流行する。中でも、出現期の宝塔である建武3年（1336）銘をもつ西鶴宝塔（由布市063）や暦応3年（1340）銘をもつ香椎荘宝塔（由布市009）は背の高い基礎に筒状の塔身をもち独特な地域色がみられる。

以後、貞治3年（1364）銘をもつ香椎荘笠塔婆や応安6年（1373）銘をもつ出雲社板碑のように南北朝期中葉には板碑や笠塔婆が出現する。中でも、南北朝期の笠塔婆は大分県下では稀であり、かつ、この地域特有の形態をもつ。南北朝期に属する中洲板碑（由布市037）は両面板碑であり、両面板碑が大分県と福岡県に接する山稜部の田下毛郡域に多く存在し、その影響は玖珠郡域から当地までおよんでいる。中洲板碑の横を走る道は熊群山への裏参道として英彦山修験者が利用したと伝えられているが、この板碑の存在は遠隔地であっても英彦山修験の影響下にあったことを物語り、興味深い。

加えて、南北朝期後葉以降には宝篋印塔も出現し、応永16年（1409）銘の標原宝篋印塔（由布市027）のように紀年銘をもつものも存在する。このほかには、大分県下においてみられるように、無縫塔が流行する。大友8代氏時の墓とされる大応寺無縫塔（由布市026）や正長2年（1429）銘をもつ北原無縫塔（由布市120）などの優品もみられる。

文明4年（1472）銘をもつ巖雲庵の六地藏（由布市012）や文明18年（1486）銘をもつ長野石幢（由布市029）のように、戦国期には石幢も出現し近世に及び流行する。

由布市の石塔の動向は、出現が若干遅れるものの、塔種も多く、大分県に共通するものである。

大分市は瀬戸内海の別府湾に面し、大分川及び大野川が形成した沖積平野である大分平野と、その周りの丘陵に挟まれた谷部からなる。また、市域東部の旧佐賀岡町域には豊後水道に突出した佐賀岡半島の急峻な丘陵部とその周辺の狭い平野が存在する。

大分市は県都であり、人口48万人の市街地を擁する。この市街地化された地区には現在に残された石造物は極めて乏しく、ほとんどが移設されたものである。近年、中世大友府内町跡の発掘調査が進み、100次を超える実績があがっているが、各調査区とも数多くの石造物が出土し、総数数千基にもおよぶ類例が確認されている（大分市067）。中世都市である豊後府内において、戦国期、石塔部在が廃棄されたり、土木建築部材として再利用された様子が窺い知ることができる成果が得られている。それぞれの部材を観察すると、その時期は鎌倉期から戦国期までの凝灰岩製のものが確認でき、塔種も様々なものが確認できることは豊後に共通する要素である。中には、花崗岩製の五輪塔火輪がみられるが、優品として持ち込まれた特殊性が窺われ、また、重割無縫塔が優品をはじめ多くみられる傾向にあるが、中世、十刹に数えられた万寿寺の膝元である土地柄ならではの様相であろう。現在でこそ、ほとんど石塔が残されていない市域中心地では最も濃密に石塔が分布していたことが近年明らかになってきた。

県都大分市でも、市街地化された地区以外には、未だ農村風景が残る地域も多く、石塔が歴史的環境の中で生き続けている類例も少なくはない。中でも特筆すべきものは磨崖仏であろう。

大分市域には平安時代後期の国指定史跡元町石仏（大分市076）・高瀬石仏（大分市091）をはじめ、県指定史跡である口戸磨崖仏（大分市049）・曲石仏（大分市080）など、大分県中南部特有の凝灰岩の露頭に仏像を刻む遺跡は少なからず確認される。

大分市内における最も古い紀年銘をもつ石塔は正応5年（1292）銘をもつ西光寺五輪塔（大分市055）である。同規模同型式の2基の五輪塔であり、空風輪を欠くが極めて残りのよい塔である。文永～正応期に全国的に石塔造立が根付きはじめ、大分県も例外ではないが、大分市の石塔の嚆矢といえる存在である。

以後、五輪塔に関しては、大友頼泰五輪塔（大分市087）のようなきわめて大型の五輪塔が造立されている。大友頼泰が正安2年（1300）没とされるが、型的にみてもほぼこれを前後する時期に造立されたとみて大過ないと思える。鎌倉期に造立された五輪塔は数が少ないが、南北朝期に至り、数を増やし戦国期には爆発的に流行する。

宝塔に関しても、鎌倉期にはじまる。大分市内で最も古い紀年銘をもつ宝塔として元応元年（1319）銘をもつ円寿寺角宝塔（大分市077）があるが、この宝塔は角宝塔の塔身の各隅を丸く面取した形態に大きな特徴をもつ。同様の形態をもつ宝塔は、市内では康永4年（1345）銘の大分社宝塔（大分市100）をはじめ鎌倉末～南北朝前期のものに確認できるが、この形態は大分市から豊後大野市に流行するものである。

板碑も鎌倉期から出現する。元弘3年（1333）銘をもつ小野家板碑2基（大分市017）や貞和6年（1350）銘をもつ少林寺板碑群5基（大分市045）のように、鎌倉時代末からみられるが、県下各地で戦国期に墓碑化するのと同様に大分市でも小型化・大量生産化の道を歩む。板碑に類する角塔婆についても、大分川採集の貞和4年（1348）銘資料（県立歴史博物館保管、宇佐市138）をはじめ、南北朝以降のものがみられる。

五輪塔・宝塔・板碑のように、鎌倉期から出現する板碑もあれば、宝篋印塔や無縫塔のように南北朝中期以降に出現するものもみられる。

宝篋印塔は紀年銘資料として応安6年（1373）銘をもつ志生木宝篋印塔（大分市173）、応安7年（1374）銘をもつ由布家墓地宝篋印塔（大分市273）、永徳2年（1382）銘をもつ常妙寺宝篋印塔（大分市106）、応永4年（1397）銘をもつ堂山宝篋印塔（大分市301）などがみられるが、南北朝後半～室町期の特徴として、結業の塔婆としての性格をもつため、比較的大型のものが多い。宝篋印塔は形態的な属性が多いため、様々な部位の特徴に工人差が出やすいため、豊後大野市に多く確認できる玄正作・型をはじめ、各地の宝篋印塔に工人差＝形態差が出やすい。

また、同時期に重制無縫塔の流行がみられ、丹川延命寺無縫塔（大分市156）の竿にみられる貞治6年（1367）銘が紀年銘として最も古い。前述したように、中世大友府内町跡から、比較的多くの無縫塔が発見されているが、県下の他地域に比較すれば、無縫塔の確認例は多い。この無縫塔は宝篋印塔とともに、南北朝後半以降に流行するが、当該期は当地をはじめ、全国的に禅宗が教線を拡大していく時期であり、その新たな波として採用された感がある。

これより時代が下り、室町時代には新たな塔種が出現する。六地藏塔とも呼ばれる石幢であり、市内で最も古いものは、応永6年（1399）銘をもつ中間石幢（大分市308）である。以後、戦国期には石幢が流行し、室町期から戦国期にかけて石塔の中では最も大型品として作られている。その背景として、中間石幢の笠の内側には33人の法名が墨書されているように、石幢に交名が確認されることが多いことから、結業の塔婆として造立されていることがわかる。結業の塔婆としての宝篋印塔は室町期から減少をはじめ、戦国期にはみられなくなることと関連し、結業の塔婆としての対象が宝篋印塔から石幢に移行したことが考えられる。

以上、由布市・大分市の石塔についてまとめてきたが、一部、安山岩製石塔もみられるが、その多くは地元で産出する凝灰岩を使用したものであり、大分県中南部の分布圏に含まれる特徴をもつ。県下において最も都市化されている地域ゆえ、失われたものも多いが、質量ともその密度は必ずしも劣るものではなく、石塔が隆盛した地域としての様相を示している。

(6) 竹田市・豊後大野市

この地域は、阿蘇溶結凝灰岩の露頭が各所に見られ、露頭に刻まれた磨崖仏や凝灰岩を使った石塔が多く造られた。このエリアは旧郡名で言えば直入郡と大野郡となり、守護であった大友氏に所縁の地域領主が割拠していた。また、大友氏入部以前は、豊後国に勢力を誇った大神氏の本貫地でもあり、それらのことがこの地の石造物のあり方に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

まず、この地で真っ先に取り上げべき石造物は磨崖仏であろう。国指定重要文化財の菅尾磨崖仏（豊後大野市146）、国指定史跡の犬飼石仏（豊後大野市153）、緒方宮迫東石仏・緒方宮迫西石仏（豊後大野市193.192）など、豊後大野市は県下で豊後高田市に次いで磨崖仏の基数が多いのである（10箇所）。多い

だけではなく、端正な彫りや彩色の鮮やかさなど、国東の厩屋仏とはやや趣の異なる独特の姿を見せている。それら厩屋仏の頂点が臼杵厩屋仏（臼杵市048他）であるが、臼杵は海部沿岸部のエリア（臼杵・津久見。佐伯）にまとめられているので、そちらに譲る。しかし、歴史的には同じ大神一族が盤踞した地であり、何らかの繋がりを有していたと考えられるのである。

次に石塔であるが、この地は先記したように凝灰岩が容易に手に入る地域のため、基本的に石塔の材質は凝灰岩である。そのため細かな細工が可能で、文字を刻むのにも適しており、在銘品が多いのも特徴である。

大分県を代表する石塔は国東塔と呼ばれる宝塔であるが、南北朝期に旧大野郡に出現した「玄正」という1人の石工の手になる石塔は、地域の石塔文化を一変したという意味でも、大きな意味を持つ。主に宝篋印塔を刻むが、他にも宝塔や石鳥居も造った。最も古い紀年銘を持つのは熊野社鳥（豊後大野市082）で正平12年（1357）の造立である。この地に根付く石鳥居の嚆矢となるものである。その後、正平18年（1363）に福正寺宝篋印塔（豊後大野市132）、建徳元年（1370）に法泉庵宝篋印塔（豊後大野市290）があり、最後の年号を持つものは永和2年（1376）の南光寺宝篋印塔（豊後大野市232）となる。つまり、14世紀中頃から20年間の活動であるが、その影響を受けた石塔は一部大分県にも及び、また時間的にも15世紀にも繋がっているのである。突出した技量と美的感覚を持った1人の石工が現したものは、中世という時代の中では特異な部類に入るだろう。これを越えるものは、近世にならないと出現しない。

次に、この地域では「講」組織による造立が広範で見られることも大きな特徴である。銘文で確認出来る最も古いものは貞和2年（1346）の表宝篋印塔（豊後大野市47）で、一結講衆による造立である。次いで、玄正の手になる建徳元年（1370）の法泉庵宝篋印塔（豊後大野市290）があり、さらに15世紀中頃から石幢が普及するとともに、地縁的な信仰集団による造立が盛んになり、多くの人銘を刻むようになる。

この地域の特徴の一つにその石幢をあげることができる。大分県内の最古銘を持つ石幢は暦応2年（1339）の早尾原石幢（豊後大野市168）であるが、八面に板碑型を彫出した独特な形状を持っており、その後に繋がらない。その後に繋がる最も古いものは大分市内にあるが、竹田・豊後大野市エリアでも15世紀の中頃から盛んに造られるようになっていく。この地域の石幢は、円形の笠、円形の中台、円柱の幢身というタイプと、四角形の笠、四角形の中台、四角柱の幢身というタイプの二種類に分けられる。いずれも幢部には地藏像が刻まれる例が多いが、戸崎石幢（豊後大野市020）は幢部に地藏とともに閻魔王とその従者の司命（書記官）が鮮やかな彩色をとともに、浅く浮き出るレリーフで描かれている。この事例からも十王信仰の浸透もうかがえるのである。

また、この地域の板碑の特徴として、額の突出がほとんど無い点をあげることができる。この地域で最も古い銘を持つ天授3年（1377）の三反畑板碑（豊後大野市196）も、額部は切込みのみである。その伝統は中世を通して伝えられていく。

もう一つの特徴は、時期は江戸時代になる可能性が高いが、キリシタン関係の石造物があることである。石製十字架や厩屋の十字架、さらには蒲鉾型の墓碑もある。直入郡に多くいたとされるキリシタン達が、伝統的な石造文化の上に新たに生み出したものである。

このように、この地域には多様な石造文化が根付いていた。国東半島に代表される大分県の石造文化ではあるが、この大野川中上流域の凝灰岩による石造文化も、その位置は決して低くはない。

(7) 臼杵市・津久見市・佐伯市

臼杵市・津久見市・佐伯市は大分県の東南部に位置し、豊後水道に面している。日本有数のリアス式海岸地帯であり、入り組んだ地形と急峻な山稜部からなる地形を形成している。豊後水道には大島をはじめとした島々も多く、海を舞台に活躍の場を求めた地域であるといえよう。また、臼杵市には旧野津町、佐伯市には旧直川村・旧宇目町・旧本匠村・旧弥生町などの内陸部も広がり、これらの地域には入り組んだ谷が広

がつている。

この地域の石造物を語るうえでまず取り上げなければならないのは白杵石仏（白杵市046・048・049・051）であろう。白杵石仏は、国指定特別史跡と国宝の二重指定を受けており、当地だけでなくわが国を代表する石造物である。この背景には大分県中南部に広く置う阿蘇溶結凝灰岩の存在があり、白杵石仏だけではなく、佐伯市弥生上小倉磨崖石塔群（佐伯市025）や白杵市マンダラ石（白杵市008）などのように県下においても類例をみない石造物が存在する。上小倉磨崖石塔群は宝塔8基、五輪塔34基からなる石塔群で岩肌を刻まれた銘文から鎌倉末～南北朝前期葉のものであることがわかる。また、マンダラ石は凝灰岩の岩肌を利用し、胎蔵界大日如来を中心とする種子曼荼羅をはじめとして、色々な彫刻が施されているもので室町期の紀年銘がみられる。このように阿蘇溶結凝灰岩の露頭が多くみられる地域ならではの石造物がこの地域を特徴づけている。

磨崖仏とともに特筆すべきは、五輪塔である。白杵市中尾五輪塔（白杵市047）は嘉応2年（1170）銘をもつものと、承安2年（1172）銘をもつもの2基からなり、在銘資料としては、わが国最古の在銘五輪塔である岩手県平泉積善院五輪塔（1169年）に次ぐ古さをもつ。中尾五輪塔の最も大きな特徴としては一石形成であり、この特徴は白杵市域において受け継がれている。紀年銘をもたない白杵市日吉社五輪塔（白杵市050）は中尾五輪塔とほぼ同時期であろうし、紀年銘資料では弘安8年（1285）銘をもつ白杵市備後尾五輪塔（白杵市101）などもみられ、このほかにも鎌倉期に属すると考えられる一石形成五輪塔が散見できる。加えて、この地域には大型五輪塔の類例が多く、鎌倉期の白杵市野津町松尾五輪塔（白杵市107）をはじめ各時期のものが存在する。

層塔に関しても、優品がみられ、文永4年（1267）銘をもつ白杵市野津町水地九重塔（白杵市111）や同一工人の作と考えられる佐伯市上四十三重塔（佐伯市040）は鎌倉中期に遡るものである。以後の造立はやや時期をおき、正和4年（1315）銘をもつ白杵市満月寺層塔（白杵市059）に続く。以後、大型品が乏しいせいか、類例も少なく応永18年（1411）銘をもつ佐伯市直川栗林正明寺跡層塔（佐伯市105）のように紀年銘資料も少ないが、相対的に層塔は少ない印象を受ける。

一般的に石塔において出現が早い宝塔について、当地においては確認が困難である。鎌倉～南北朝前期葉のものと考えられる白杵市野津町水地宝塔残欠（白杵市111）をはじめ、部材のみのものであれば少数例存在する。しかし、完存品は少なく、紀年銘資料では貞和5年銘（1349）をもつ佐伯市宇目大師庵宝塔（佐伯市094）、永徳2年（1382）銘をもつ白杵市野津町極楽寺跡角宝塔（白杵市112）などがみられるのみである。しかも、形態のバリエーションが多く、地域色としては、上小倉磨崖石塔群にみられる角宝塔をはじめ、特に、佐伯市を中心として戦国期の宝塔には角宝塔がきわめて多い印象を受ける。これは、宮崎県北部に共通する要素であり、石塔文化圏としては祖母山系を挟むものの大分県南部は宮崎県北部に共通する。

板碑は、鎌倉後期に出現する。正和3年（1314）銘をもつ白杵市野津町御堂ヶ原スバ遺跡板碑（白杵市069）、元応元年（1319）銘をもつとされる白杵市野津町備後尾板碑（白杵市102）、元徳2年（1330）銘をもつ佐伯市弥生白山板碑（佐伯市027）など、比較的紀年銘資料も多い。鎌倉期の板碑には元弘3年（1333）銘をもつ白杵市野津町城ヶ平板碑（白杵市152）のように三連板碑もみられ、南北朝には康永2年（1343）銘をもつ白杵市野津町芝尾板碑（白杵市087）のように扁平な自然石の表面を平らに加工しただけの自然石板碑もみられるが、これについても単発的に発生する。明徳3年（1392）銘をもつ白杵市野津町風瀬板碑（白杵市119）以後、紀年銘資料だけでなく板碑が激減する空白期ともいえる時期を迎え、再び登場するのは永正2年（1505）銘をもつ白杵市野津町名塚板碑（白杵市099）以降であり、戦国期～近世初期を通じて数多く造立されている。これらの一群は造立の主旨も墓碑化したものであり、小型化し形態も多様化している。

一般的に宝塔・五輪塔・板碑などに比較して出現が遅れる宝篋印塔については、白杵市深田宝篋印塔（日吉塔）（白杵市053）が傑出した存在として出現する。復元高4.2mを測る完存の宝篋印塔である。塔身

は、正面が深くえぐられた厨子形を呈することや、笠の隅飾が別石でつくられていることなど、全国的にみても他に例がなく、工芸品をモデルにしたことが想定できる。本塔は鎌倉中期に遡る可能性をもつが、これに続く宝篋印塔は周辺はおろか県下にもみられなく、本塔の特殊性が窺える。大分県東南部における宝篋印塔は、深田宝篋印塔を除けば、やはり南北朝後半をさかのぼることはない。南北朝中葉のものと考えられる佐伯市宇目崇園寺宝篋印塔（佐伯市082）をはじめ、紀年銘資料では、臼杵市光照寺宝篋印塔塔身（臼杵市005・嘉慶2年（1388））、臼杵市上通宝篋印塔（臼杵市006・明徳4（1393））、佐伯市直川吹原地蔵院宝篋印塔の塔身（佐伯市113・永享11年（1439））、臼杵市平尾宝篋印塔（臼杵市024・応永32（1425））などのように南北朝後半から室町期にかけて造立されており、比較的大型であることや銘文が残るものの中に交名がみられることから、結衆の塔婆として造立されており、このことは他地域の宝篋印塔と共通する。

宝篋印塔とともに出現が遅れる無縫塔については、興味深い資料がみられる。臼杵市心源寺には大友親繁の墓と伝えられる明応2年（1493）銘をもつ無縫塔（臼杵市037）、臼杵市大友政親公廟所には大友政親の墓と伝えられる天文7年（1538）銘をもつ無縫塔（臼杵市038）、臼杵市野津町には大友義隆の墓と伝えられる天文19年（1550）銘をもつ無縫塔（臼杵市077）など大友氏歴代の当主とされる人物の重制無縫塔がみられる。このほかにも津久見市鍛冶屋には2基の完存の無縫塔（津久見市033）が並べられており、両方とも竿の正面に天正3年（1575）と天正6年（1578）の銘文がみられる。このように戦国時代に限られるが重制無縫塔が充実しているほか、この地域では、県下においては珍しく、単制無縫塔が流行する。佐伯市宇目市園吉祥寺跡単制無縫塔（佐伯市095）には元亀2年（1571）銘が、また、佐伯市福厳寺墓地単制無縫塔（佐伯市052）には天正20年（1592）銘がそれぞれみられ、戦国期～近世初頭に佐伯市周辺において単制無縫塔が流行する。

室町期には県下において確認できるように石幢が出現する。応永33年（1426）銘をもつ臼杵市王座石幢（臼杵市012）、長祿2年（1458）銘をもつ臼杵市野津町竹脇石幢（臼杵市137）など、室町期のものもみられるが、数は少なく本格的に増加するのは戦国期以降である。明応7年（1498）銘をもつ臼杵市野津町老松花原石幢（臼杵市093）、天文17年（1548）銘をもつ臼杵市野津町臨川庵石幢（臼杵市138）、天文18年（1549）銘をもつ佐伯市直川神内釈迦堂石幢（佐伯市003）、元亀4年（1573）銘をもつ佐伯市弥生河野家石幢（佐伯市022）など優品も多いが、これらには交名の刻銘がみられるものが多く、結衆の塔婆である特徴がみられる。それゆえ、同時期の石塔群中最も目を見張る塔形であり、戦国期を最も象徴する石塔であることがわかる。近世でも寛文期には墓碑的機能をもつ五輪塔・宝塔・宝篋印塔・板碑等の中世石塔が一斉に消え、近世の板碑型墓碑に取代わっていくのに比較して、この石幢は墓碑的機能をもつものではなく、結衆の塔婆であるため、近世はおろか明治期まで継続して造立し続ける特徴をもつ。

大分県下において、地域色を最もあらわす石造物はキリシタン関連遺物であろう。元和5年（1619）銘をもつ佐伯市宇目重岡キリシタン墓（佐伯市152）をはじめ、臼杵市播磨キリシタン墓（臼杵市042）、臼杵市野津町御霊園クルスバ遺跡キリシタン墓（臼杵市069）、臼杵市野津町鍋田キリシタン墓（臼杵市073）、臼杵市野津町下藤地区共有墓地キリシタン墓（臼杵市076）などのように中世末～近世初頭のカマボコ形、屋根形、方柱形をした墓石が臼杵市野津町を中心によく残されている。中には、臼杵市野津町寺小路層層クルス（臼杵市078）のように大きさ2.2×1.1mの岩の平らな面に径60cmの陰刻門があり、その中に十字架を浮き彫りする石造物もみられ興味深い。さらには、臼杵市野津町御霊園クルスバ遺跡や臼杵市野津町下藤地区共有墓地などでは既存の仏教系の石造物を破却した痕跡もみられ興味深い。

このように、当地は多様な石造物が隆盛した地域であるが、地理的条件のため、リアス式海岸の沿岸部にはきわめて石塔が少ない。第2章第5節で紹介するように、これらの地域には外来系石塔の存在が目につくが、海を舞台に人々が躍動した側面を裏付けている遺物であり、地元の石材に恵まれた大分県にしては異質な世界が広がる地域でもある。

第2節 各石造物詳説

本節では県内所在の各石造物の実測図を掲載し、その概要を報告する。掲載する実測図は今回の調査事業で作成したものと、行政機関や研究機関・個人等により刊行物として公表されているものを集めた。掲載実測図は579点で、うち新規に実測したのも89点、既存実測図490点である。石造物ごとの内訳は、五輪塔103点、宝塔57点、国東塔66点、磨崖仏2点、石仏2点、宝篋印塔64点、無縫塔30点、板碑165点、角柱塔婆28点、石幢16点、石殿6点、鳥居9点、笠塔婆7点、層塔10点、キリシタン関係石造物10点、その他塔婆等3点である。実測図数量をみると国東塔や板碑の数が多く、こうした特定の石造物に限定した研究が行われてきたことが窺える。また、第2表の市町村別の実測図数量を見ると豊後高田市や国東市、杵築市などが多いことが分かるが、大分県立歴史博物館（旧大分県立宇佐風土記の歴史民俗資料館）による国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査事業や六郷山寺院遺構確認調査といった調査事業の成果が大きい。

調査事業での作図については石造物の保護を最優先とし、地衣類や付着物の除去は極力行わず、各部材の組合せ状況等も観察可能な範囲で行っている。実測図は可能な限り現状を記録し、復元部分は破線で表現した。既存実測図については考古学的な手法で作成されたものを集成対象とし、修理報告書等の建築図的な図面や略測図は除外した。掲載図面は体裁を整えるため再トレスを行った。

実測図版は各塔形ごとにとまとめ、市町村ごとにまず紀年銘のある石造物を順に掲載し、次いで無銘の塔をおおそ想定される年代順に配列するように心がけたが、図面のレイアウト上、若干前後する場合がある。縮尺は20分の1を基本としたが、鳥居や層塔など大型石造物については変更しているものがある。各石造物の名称は地名表編（報告書第1～3集）と対比できるように、名称及び地名表番号を一致させている。地名表に記載のない石造物については地名表番号を付さず、「市町村名＋報告書等に記載の石造物名称」で表現した。各塔の概要及び図の典拠については一覧表としてまとめた。銘文の詳細については巻末の銘文一覧も併せて参照願いたい。銘文の拓影については別冊で掲載の予定である。なお、各塔形の部位等の名称については、各項に掲載している塔形図を参照願いたい。各塔形図は川勝政太郎『日本石造美術辞典（新装版）』（東京堂出版、1998年）から引用した。実測図の典拠文献については以下のとおりである。

第2表 市町村・塔形別石造物実測図数量表

市町村名	合計	五輪塔	宝塔	国東塔	宝篋印塔	無縫塔	板碑	角柱塔婆	石幢	石殿	鳥居	笠塔婆	層塔	キリシタン資料	その他
中津市	37(0)	1	19	2	1	9	3	1					1		
宇佐市	44(3)	2	7		1	5(1)	20	5(1)	1(1)				2		1
豊後高田市	106(1)	22	8	26	11		32	1		4(1)			1		1
国東市	102(3)	28(1)	1(1)	19(1)	17	3	30	1	1	1			1		
船島村	0(0)														
杵築市	74(17)	18(1)	6(2)	14(2)	9(5)	4(2)	16	2(1)		1(1)			1		3(3)
日出町	7(2)			2	2(1)		2				1(1)				
須府市	11(4)	4	2(2)			2(2)	3								
大分市	21(10)	5(3)	2(2)	1	2(2)	1(1)	6		2(1)		1(1)		1		
由布市	12(9)		4(3)		1(1)	2(2)	2		2(2)			1(1)			
臼杵市	36(9)	12(1)	1		2	2(2)	6	1	3(2)		1	1(1)	1		6
津久見市	5(2)				1	2(2)	1						1		
佐伯市	15(9)	1(1)	2(2)				7(1)	1	2(2)				1		1
竹田市	11(1)				2		5	1	1(1)						2
豊後大野市	79(14)	8(3)	5(1)		12(1)		28	13	3(3)		6(9)	1		1	3
日田市	12(7)	2(2)			2(2)		2	2(1)	1						3(2)
九重町	5(4)			2(2)			2(1)						1(1)		
玖珠町	1(0)				1										
合計	579(99)	103(12)	57(13)	66(5)	64(12)	30(12)	165(2)	28(3)	16(12)	6(2)	9(8)	7(5)	10(9)	10(0)	8(3)

() は今回調査事業で作成した実測図数

○石造物実測図出典文献一覧

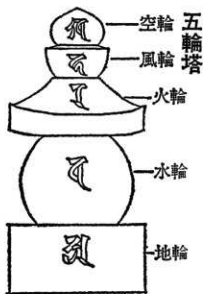
- 1 安岐町教育委員会1988「両子寺講堂跡」
- 2 臼杵市教育委員会1982「臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書」(層塔・鳥居・宝篋印塔)
- 3 臼杵市教育委員会1999「臼杵石仏群地域遺跡」
- 4 臼杵市教育委員会2001「荒田遺跡」
- 5 臼杵市教育委員会2010「臼杵城」
- 6 浦井直幸・村上久和2011「山国川上流域の石造物について―旧山国町・那馬溪町―」『豊前の石塔を考えるⅡ―中津市周辺を中心として―』おおい石造文化研究会
- 7 江藤和幸2003「宝塔・多宝塔の特色とその見方～その成立と展開～」『二豊の石造美術』第22号、大分県石造美術研究会
- 8 江藤和幸2003「市指定文化財「地藏石仏」の調査報告」『二豊の石造美術』第22号、大分県石造美術研究会
- 9 江藤和幸2005「重層塔の特色とその見方」『二豊の石造美術』第24号、大分県石造美術研究会
- 10 江藤和幸2006「国東半島とその周辺の石造仏塔の諸特徴」『石造物、その地域性―豊後における中世石造物の地域性をみる―』石造物研究会
- 11 江藤和幸2011「宇佐・国東からみた中津の石造物―宝塔の地域的特徴を中心に―」『豊前の石塔を考えるⅡ―中津市周辺を中心として―』おおい石造文化研究会
- 12 江藤和幸2012「石造宝塔の編年試案Ⅰ―いわゆる「求菩提型宝塔」を中心として―」『石造文化研究』第30巻、おおい石造文化研究会
- 13 大分県教育委員会1988「大分県内遺跡詳細分布調査概報7」
- 14 大分県教育委員会1994「大分県埋蔵文化財年報2」
- 15 大分県教育委員会2000「千塚西遺跡」大分県文化財調査報告書第108輯
- 16 大分県教育委員会2000「県指定有形文化財其ノ田板碑」大分県文化財調査報告書第⑥輯
- 17 大分県教育委員会2001「尾鼻遺跡」大分県文化財調査報告書第129輯
- 18 大分県教育委員会2001「城前遺跡」大分県文化財調査報告書第130輯
- 19 大分県教育庁埋蔵文化財センター2005「津久見門前・瀬戸遺跡・佐伯門前遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第3集
- 20 大分県教育庁埋蔵文化財センター2007「一般国道57号中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第12集
- 21 大分県教育庁埋蔵文化財センター2012「雄方後遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第60集
- 22 大分県教育庁埋蔵文化財センター2014「西林大迫遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡・今成館跡・木内遺跡・丸尾城跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第71集
- 23 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1986「豊後国田染荘の調査Ⅰ」大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第3集
- 24 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1992「国東六郷山本山本寺 智恩寺発掘調査報告書」大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第9集
- 25 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1992「豊後国都甲荘の調査」資料編、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第10集
- 26 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1994「檜原山正平寺」大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第14集
- 27 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1996「六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ」大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第17集

- 28 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1998「六郷山寺院遺構確認調査報告書VI」大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第20集
- 29 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1998「豊後国香々地荘の調査」資料編、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第21集
- 30 大分県立歴史博物館2002「六郷山寺院遺構確認調査報告書X」大分県立歴史博物館調査報告書第6集
- 31 大分県立歴史博物館2003「豊後国安岐郷の調査」資料編、大分県立歴史博物館報告書第7集
- 32 大分県立歴史博物館2008「豊後国国東郷の調査」資料編、大分県立歴史博物館報告書第10集
- 33 大分県立歴史博物館2009「豊後国国東郷の調査」資料編補遺、大分県立歴史博物館報告書第12集
- 34 大分県立歴史博物館2015「豊後国山香郷の調査」資料編3、大分県立歴史博物館報告書第16集
- 35 大分市教育委員会1997「大分市の文化財」
- 36 大田村教育委員会1994「豊後国田原別符の調査1」
- 37 香々地町教育委員会1995「香々地の遺跡II」
- 38 元興寺文化財研究所1981「国東仏教民俗文化財緊急調査報告書」
- 39 菊田 徹2002「五輪塔の特色とその見方～臼杵地域を中心として～」『二豊の石造美術』第21号、大分県石造美術研究会
- 40 国見町教育委員会1999「鬼籠当中石塔群」
- 41 桑原幸則1994「初期国東型宝塔の様相」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 42 三光村教育委員会1989「三光村の遺跡」三光村文化財調査報告書第1集
- 43 千歳村教育委員会2000「五郎丸近世墓地群」
- 44 田中裕介2014「キリシタン墓と中国人墓にみる大航海時代の外来墓制に関する基礎的研究」別府大学
- 45 長田大輔2003「野津市のキリシタン墓碑とその問題点」『二豊の石造美術』第22号、大分県石造美術研究会
- 46 原田昭一2002「板碑集成（その1、豊後南部）－豊前・豊後における紀年銘を有する整形板碑について－」『古文化談叢』第48集、九州古文化研究会
- 47 原田昭一2003「板碑集成（その2、豊前）－豊前・豊後における紀年銘を有する整形板碑について－」『古文化談叢』第49集、九州古文化研究会
- 48 原田昭一2003「板碑集成（その3、豊後北部 附、補遺）－豊前・豊後における紀年銘を有する整形板碑について－」『古文化談叢』第50集（上）、九州古文化研究会
- 49 原田昭一2005「中世における石造物流通の様相－「玄正（玄聖）」銘宝篋印塔の流通をととして－」『日引』第7号、石造物研究会
- 50 原田昭一2007「豊後府内から出土した無縫塔の新例－中世大友府内町跡九次調査区出土の無縫塔中台の検討－」『考古学に学ぶ（Ⅲ）』同社大学考古学シリーズ刊行会
- 51 原田昭一2009「角塔婆変遷史－豊前・豊後における紀年銘資料を通して－」『石造文化研究』第27巻、おおい石造文化研究会
- 52 日田市教育委員会1994「惣田遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 53 日田市教育委員会1997「牧原遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 54 日田市教育委員会2000「元宮遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 55 豊後大野市教育委員会・緒方宮迫東石仏・緒方宮迫西石仏保存整備委員会2007「国史跡緒方宮迫東石仏・緒方宮迫西石仏保存修理事業報告書」
- 56 豊後大野市教育委員会2010「豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書1」
- 57 三重町教育委員会1999「三重地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ」
- 58 三重町教育委員会2002「三重地区遺跡群発掘調査概報Ⅵ」

- 59 三谷結平・浦井直幸・江藤和幸・原田昭一2011「大分県中津市域の中世石造物」『石造文化研究』第29巻、おおい石造文化研究会
- 60 三谷結平他2016「中世小田原氏の石造文化－カンカン堂国東塔・塔ノ御堂国東塔の調査を通して－」『石造文化研究』第33巻、おおい石造文化研究会
- 61 南島原市教育委員会2012「日本キリシタン墓碑総覧」南島原市世界遺産地域調査報告書
- 62 武蔵町教育委員会1996「宝命寺国東塔」
- 63 村上久和2005「大分県山香町辻小野西明寺石造三重塔の解体調査について」『研究紀要』5 大分県立歴史博物館
- 64 村上久和他1994「大野郡野津町八里合名塚宝塔の調査」『二豊の石造美術』第15号、大分県石造美術研究会
- 65 大分県立歴史博物館1999「豊後国香々地荘の調査」本編、大分県立歴史博物館報告書第1集
- 66 大分県立歴史博物館2009「豊後国国東郷の調査」本編、大分県立歴史博物館報告書第11集

(1) 五輪塔

下から方形の地輪、球形の水輪、台形状の火輪、半球形の風輪、団形の空輪からなる石造物である(第8図)。地・水・火の各輪と空風輪をそれぞれ別材で作る組合せ式五輪塔と、各輪を一石で彫り出す一石五輪塔がある。五輪塔婆についてもここに含めた。各輪には種子を刻むものもある。県内で最も古い五輪塔は嘉応2年(1170)銘を持つ臼杵市中尾五輪塔(臼杵市047)で、岩手県平泉の中尊寺釈尊院五輪塔(仁安4年(1169)銘)について全国でも2番目に古い在銘五輪塔である。嘉応2年銘五輪塔の横にある承安2年(1172)銘五輪塔がそれに次ぐ。以後、中世全般にわたって県内各地で造立され、県内の中世石造物の4分の3を占めるまでになる。掲載実測図は103点である。



第8図 五輪塔解説図

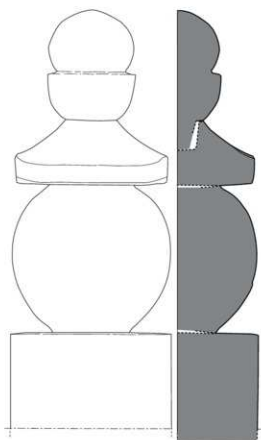
棟号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第9回	中津市 182	青の阿陀寺跡の五輪塔	文献59		221	凝灰岩	完存の大型五輪塔。水輪は大きく、火輪軒口は薄い。空風輪も大振りである。種子・刻路なし。	
第9回	宇佐市 262	最明寺五輪塔群	文献10	正元元年 (1259)			完存の五輪塔。火輪軒口は薄く、上部に露盤が立つ。空風輪は先尖り気味。各輪に円相と種子を刻む。	県有形
第9回	宇佐市 227	蓮華寺跡五輪塔と周辺石塔群	文献10	元徳3年 (1331)	181		完存の五輪塔。水輪は球形で大振り。火輪上には低い露盤が立つ。各輪に葉研形りの種子を刻む。	
第10回	豊後高田市 392	長野観音寺跡石塔群(五輪塔1)	文献23	天正11年 (1583)	112		自然石を利用した墓碑で上部円相内に種子と、その下に細線で五輪塔を彫る。水輪に「息雲」と地輪に紀年銘を彫る。	
第10回	豊後高田市 392	長野観音寺跡石塔群(五輪塔2)	文献23	天正14年 (1586)			五輪塔1と同形の自然石墓碑。水輪に「妙」とその両側に紀年銘を彫る。	
第10回	豊後高田市 407	真木大堂古代文化公園内石塔群	文献23	天正20年 (1592)			地輪は低く、水輪は楕形を呈する。火輪上部には露盤が立つ。風輪は高く、頂部が尖る。	
第10回	豊後高田市 366	妙藏坊五輪塔群	文献38		72.7		方柱材を削り出す一石五輪塔。地輪は高く、水輪は直線的で側面に扇形の面を持つ。火輪は小さい。	
第10回	豊後高田市	五十石田原家庭内五輪塔(五輪塔1)	文献38		89.2		地・水輪と火・空風輪を別材で作る。地輪は高く、火輪軒は薄く直線的。水輪の柄孔は貫通し地輪中位まで達する。	
第10回	豊後高田市	五十石田原家庭内五輪塔(五輪塔2)	文献38		71.6		五輪塔1とはほぼ同形。火輪軒の両端が緩く反る。	
第10回	豊後高田市 186	城前フチ石塔群(五輪塔1)	文献18		120		完存の五輪塔。水輪は球形で、火輪は圓軒が強く反る。空風輪は太い・洗線で区分する。	
第10回	豊後高田市 188	清台寺向かい墓地石塔群(五輪塔1)	文献18				笠上には露盤が立ち、空風輪は円柱状石材に洗線両者を区分する。	
第11回	豊後高田市 188	清台寺向かい墓地石塔群(五輪塔2)	文献18				笠上には露盤が立ち、空風輪は円柱状石材に洗線両者を区分する。	
第11回	豊後高田市 101	施徳寺石造物群	文献38		82		噴合式の一石五輪塔。地輪は低く、水輪は扁平に潰れた形状。空風輪は大きく、両者を洗線で区分する。	
第11回	豊後高田市 154	雲仙寺石造物群(五輪塔1)	文献29				地輪は低く、水輪は高い。空風輪は洗線両者を区分する。	
第11回	豊後高田市 154	雲仙寺石造物群(五輪塔2)	文献29				地・水輪と火・空風輪を別材で作る。地輪は低く水輪は高い。火輪軒両端は反り、棟は直線的。	
第11回	豊後高田市 144	道園石塔群(五輪塔4)	文献65			安山岩	一石五輪塔。地輪は低く、水輪は長方形。火輪は高く棟の傾斜は急である。	
第11回	豊後高田市 144	道園石塔群(五輪塔5)	文献17			安山岩	一石五輪塔。地輪から火輪が扁平に潰れたような形状を呈す。	

種別 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年略	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第11国	豊後高田市 186	城前フチ石塔群 (五輪塔2)	文献18				一石五輪塔。地輪下部は粗割状態を 残す。4面に種子を墨書するが判読不 詳。	
第11国	豊後高田市 186	城前フチ石塔群 (五輪塔3)	文献18				一石五輪塔。	
第11国	豊後高田市 186	城前フチ石塔群 (五輪塔4)	文献18				一石五輪塔。地輪は低く、火輪は高く 直線的。	
第11国	豊後高田市 186	城前フチ石塔群 (五輪塔5)	文献18				一石五輪塔。地輪は低く、火輪は直線 的。	
第11国	豊後高田市 186	城前フチ石塔群 (五輪塔6)	文献18				一石五輪塔。地輪は低く、火輪は直線 的。	
第11国	豊後高田市	観音五輪塔	文献38		59		一石五輪塔。地輪は低く、水輪は底す ばまり状。火輪軒は薄く直線的で、棟 は傾く反る。	
第12国	国東市 038	妙吉寺一石五輪 塔と周辺石塔群 (五輪塔1)	実測 (横澤)		128	安山岩	一石五輪塔。地輪は高く、水輪は扁平 な形状。風輪は大きく空輪は丸い。各 輪4面に葉研削りの種子を刻み、彫り 面には墨の痕跡が残る。種子は1面 に金剛界五仏、他3面に大日三尊言 である。水輪には長方形の納入孔を 穿つ。	県有形
第12国	国東市 038	妙吉寺一石五輪 塔と周辺石塔群 (五輪塔2)	文献10				一石五輪塔。水輪は球状で火輪軒は 傾く反る。種子は1面に金剛界五仏、 他3面に大日三尊言を刻む。	
第12国	国東市 264	川原板碑と周辺 石塔群	文献32				完存の五輪塔。地輪は高く、水輪は球 状。空輪は先尖り。各輪に種子を刻む が配列はずれしている。	
第12国	国東市 075	千灯寺奥の院五 輪塔	文献10				一石五輪塔で空風輪を欠く。火輪が 三角形を呈する三角五輪塔で、県内 では他に例がない。	
第12国	国東市	大上五輪塔	文献38		103		一石五輪塔で全体的に直線的。地輪 は高く、水輪は側面に円形の面を持 つ。空輪は五角形状。	
第12国	国東市	美郷資料館(五 輪塔2)	文献38		63		一石五輪塔で全体的に直線的。地輪 は高く、水輪は側面に円形の面を持 つ。空輪に比べ風輪が大きい。	
第12国	国東市 352	ケイチン五輪塔 (五輪塔1)	文献38		173		一石五輪塔。地輪上に蓮弁を持つ台 座が付く。火輪軒は厚く、裏に垂木を 刻む。火輪上に露盤が立ち、格状間を 配す。風輪は蓮弁を刻む。	
第12国	国東市 359	七郎一石五輪塔	文献31				完存の一石五輪塔。地輪上面に蓮弁 を刻む低い台座が付く。火輪の軒は 厚く、笠裏に垂木を刻む。上部には露 盤が立ち、風輪には蓮弁を刻む。	市有形
第12国	国東市 401	淨国寺石塔群	文献38		75		一石五輪塔。地輪は低く、上部に蓮弁 を刻む台座が付く。水輪・火輪は扁 平。風輪に蓮弁を刻む。	市有形
第13国	国東市 153	ケイチン五輪塔 (五輪塔2)	文献38		111		一石五輪塔。水輪は樽形で上部に首 が立つ。火輪軒は厚く、裏に垂木形を 表す。風輪には蓮弁を刻む。	県史跡
第14国	国東市 080	坊中五輪塔群 (五輪塔1)	文献32				完存の五輪塔。水輪は球形。各輪に 葉研削りの種子を刻む。	
第14国	国東市 080	坊中五輪塔群 (五輪塔2)	文献33				完存の五輪塔。水輪は樽形で火輪の 軒は薄い。風輪は蓮弁を刻む。	

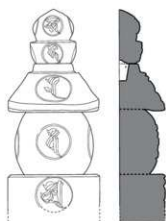
種別 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第14回	国東市	113	迫坊宝篋印塔と 周辺石塔群	文献33			完存の五輪塔。水輪は樽形で上部に 百が立つ。風輪には蓮弁を刻む。火 輪上面の空風輪を受ける柄孔は貫 通する。	
第14回	国東市	127	大日堂石塔群	文献32			基壇上に載る五輪塔で空風輪を欠 く。水輪は球形。各輪に葉研削の種 子を刻む。	
第14回	国東市		美郷資料館（五 輪塔1）	文献38	72		一石五輪塔。地輪は低く、水輪は方形 状。火輪は高く、空風輪は小さい。	
第14回	国東市	243	西光寺石塔群	文献38	81		一石五輪塔。全体のバランスが良く 整った形状を示す。	
第14回	国東市	156	両子寺石塔群	文献38	74		一石五輪塔。地輪は低く、底面に孔を 穿つ。	
第14回	国東市	178	高良阿弥陀堂石 塔群（五輪塔1）	文献32			喉合式の一石五輪塔。水輪は直線 的で火輪軒は大きく反る。空輪は先 尖り。	
第14回	国東市	178	高良阿弥陀堂石 塔群（五輪塔2）	文献32			五輪塔1とはほぼ同形。	
第14回	国東市	242	中日向清原家墓 地石塔群	文献38	77		喉合式の一石五輪塔。地輪は高く、水 輪はやや直線的。	
第14回	国東市	195	中之坊磨崖弘・ 磨崖板敷と石塔 群	文献38	56		小型の一石五輪塔。直線的な形状 で、水輪に納入孔を穿つ。空風輪は沈 線で両者を区分する。	市史跡
第14回	国東市	034	鬼籠当中石塔群	文献39			5基の五輪塔とも本来の組合せでは ない。道路工事に伴い発掘調査を实 施、いずれも原位置になく、過去に移 転されたものと判明。	
第15回	杵築市	093	小武寺石塔群 （五輪塔1）	文献38	161		地輪の高い一石形成の五輪塔。水輪・火輪・風輪は直線的。各輪に葉研削の種子を刻む。	
第15回	杵築市	327	田原家丸山墓地 石塔群	文献10	174		完存の五輪塔。水輪は球形、火輪軒 は両端が強く反る。各輪円相内に葉 研削の種子を刻む。	県史跡
第15回	杵築市	201	生桑寺墓地五輪 塔	実測 （宮内）	132	凝灰岩	生桑寺墓地五輪塔群中の1基。完存で 水輪の4面に葉研削の種子を刻む。	
第15回	杵築市	093	小武寺石塔群 （五輪塔2）	文献38	114		地輪の高い一石形成の五輪塔。空 風輪を欠く。水輪は直線的で側面 に凹形の面を持つ。各輪に葉研削の 種子を刻む。	
第15回	杵築市	058	西福寺五輪塔	文献38	62		空風輪を欠く二石形成の五輪塔。各 輪に種子を刻むが彫りが浅い。	
第15回	杵築市	310	森の木造跡石塔 群	文献36	67.5	安山岩	完存の一石五輪塔。地輪下部は埋め 込むため自然面が残る。	
第15回	杵築市	192	浄土寺五輪塔 （五輪塔1）	文献34			完存の五輪塔。火輪上に低い露盤が 立つ。	
第15回	杵築市	192	浄土寺五輪塔 （五輪塔2）	文献34			完存の五輪塔。地輪上に低い段が付 く。火輪裏に垂木型を持ち上部には 低い露盤が立つ。空風輪は沈線で区 分し、風輪には蓮弁を刻む。	
第15回	杵築市	192	浄土寺五輪塔 （五輪塔3）	文献34			五輪塔2とはほぼ同形。空輪頂部は先 尖りとなる。	
第15回	杵築市	062	妙善坊石塔群	文献30		凝灰岩	完存の五輪塔。地輪は低く、火輪軒は 厚みを持つ。風輪に比べ空輪が大き く、上部が彫り先尖りとなる。	

種別 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第15国	杵築市	077	小屋家石塔群 (小屋家(国東塔))	文献38		55	一石五輪塔で空風輪を欠く。地輪は低く、水輪は球形で高い。火輪は小振りである。	
第15国	杵築市		平野一石五輪塔	文献34			方柱石材を削り出した一石五輪塔。各輪は直線的。	
第15国	杵築市		西福寺道祖神前五輪塔	文献38		72	一石五輪塔で全体が直線的。空輪を欠失する。	
第15国	杵築市		野原小野尾五輪塔	文献38		42	小型の一石五輪塔。水輪は直線的で側面に楕円形状の面を持つ。	
第15国	杵築市		小武寺五輪塔	文献10			地輪上に蓮弁を刻む台座が付く。水輪は球状で上部に短く首が立つ。火輪は厚く、上部に短く高盤が立つ。空風輪は欠失。	
第15国	杵築市		山香町公民館五輪塔	文献38		46	小型の一石五輪塔。水輪は樽形で、火輪は水輪に比べ小さい。	
第16国	別府市	080	別府市美術館石塔群	文献38	正安元年 (1299)	202	一石五輪塔の地輪に方柱を置き足した五輪塔型。各輪及び地輪下方柱に薬研形りの種子を刻む。	県有形
第15国	杵築市	092	小岳一石五輪塔	文献38		75	一石五輪塔で、地輪底面に方形割り込みを持つ。空風輪は沈没で区分する。	
第15国	杵築市	364	広岩家墓地五輪塔群	文献38		80	一石五輪塔。高さに比し幅広の形状である。水輪は扁平で、火輪は高い。	
第16国	別府市	025	龍門氏墓地石塔群(五輪塔1)	文献10	嘉元4年 (1306)	198	基礎上に載る空風輪を欠く五輪塔。地輪は高く、水輪は球形。火輪及び高盤は鋭く反る。	県有形・ 県史跡
第16国	別府市	025	龍門氏墓地石塔群(五輪塔2)	文献10	暦応2年 (1339)	195	完存の五輪塔。水輪は球形で高い。火輪に比べ空輪が小さい。各輪に薬研形りの種子を刻む。	県有形・ 県史跡
第16国	別府市	025	龍門氏墓地石塔群(五輪塔3)	文献10		221	上段に2区画の格状間を配する基礎の上に載る。形状は五輪塔2に似る。	県有形・ 県史跡
第17国	日田市	075	草三郎大神宮五輪塔婆と内柱塔婆	実測 (小林)	貞和3年 (1347)	73	凝灰岩 五輪塔婆で空風輪を欠く。水輪は隅丸形状に切込み、4面に円形の間を作る。火輪には整形のノミ痕がある。各輪4面に種子を刻む。地輪に貞和3年の紀年銘があるが不詳明。	県有形
第17国	日田市	025	星隈山五輪塔	実測 (横澤)	明治7年 (1498)	69	凝灰岩 岩窟内に納められた完存の五輪塔。水輪に明治7年の紀年銘を刻む。地輪は低い。空風輪の境は沈没で表現する。	
第17国	大分市	055	西光寺石塔群2号	実測 (横澤)	正応5年 (1292)	149	凝灰岩 地・水・火輪が残存し、空風輪は別のものを載せる。水輪が大きく、火輪は薄い。地・水・火輪の4面円相内に薬研形りの種子を刻む。種子は4面同種子。基礎に正応5年の銘を刻む。	
第17国	大分市	055	西光寺石塔群3号	実測 (横澤)		160	凝灰岩 2号塔と同型式で、切石を組んだ基礎の上に載る。地・空風輪を欠き別のものを組み合わせる。水輪は樽形で大きく、火輪の軒は薄い。水・火輪の4面円相内に薬研形りで種子を刻む。種子は4面同種子。	
第18国	大分市	053	横超寺石塔群	文献21	応永20年 (1413)		凝灰岩 基礎の上に空風輪を欠く五輪塔が載る。水輪は球形で笠は軒両端が反る。水輪に紀年銘を刻む。	
第18国	大分市	087	大友頼奉墓	文献34		176	凝灰岩 完存の五輪塔。地輪は高く、火輪は軒が薄く椽の反りが強い。各輪の4面円相内に種子を刻む。	市史跡
第18国	大分市	055	西光寺石塔群1号	実測 (横澤)		204	凝灰岩 完存の大型五輪塔。種子や紀年銘なし。水輪が大きく、鎌倉期に遷る可能性がある。	

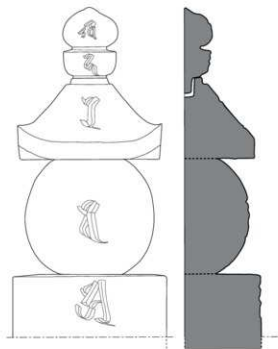
種別 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第18回	豊後大野市 297	石造五輪塔(下赤須五輪塔)および板碑群	実測 (井・横澤)	正安2年 (1300)	153	凝灰岩	道ノ上古墳の後円部墳頂にある完存の五輪塔。水輪は大きく、火輪軒の反りは弱い。空風輪には短い柄が付く。各輪4面に大振りの種子を葉研形りで刻む。地輪に正安2年の銘がある。	県有形
第19回	豊後大野市 103	橋本野五輪塔・宝篋印塔及び石塔群	文献38	貞和3年 (1347)	139	凝灰岩	完存の五輪塔。全体に整った形状で、水輪の4面に葉研形りの種子を刻む。地輪に銘文を刻む。	県有形
第19回	豊後大野市 049	長寿庵五輪塔及び石塔群	文献38	正平11年 (1356)	189	凝灰岩	完存の五輪塔。全体にバランスのとれた形状を取る。水輪はやや削円形状を呈し、4面に葉研形りの種子を刻む。空風輪は大振りで頂部が先尖りとなる。	県有形
第19回	豊後大野市 048	表五輪塔(2号)	文献38	正平23年 (1368)	126	凝灰岩	完存の五輪塔。全体にバランスのとれた形状を取る。水輪は楕円形状を呈し、4面に葉研形りの種子を刻む。	県有形
第19回	豊後大野市 048	表五輪塔(4号)	文献38	正平23年 (1368)	136	凝灰岩	形状は2号五輪塔と似る。	
第19回	豊後大野市 270	中尾五輪塔	文献38	康暦3年 (1381)	214	凝灰岩	完存の五輪塔。地輪に比して水輪は大きく、削円形状を呈する。4面に葉研形りの種子を刻む。火輪軒は短い。空風輪は大振りである。	県有形
第20回	豊後大野市 153	大圓石仏及び周辺石塔群	実測 (宮内)	永徳2年 (1382)	151	凝灰岩	方形の台の上に建つ。地輪と水輪に銘銘があり、永徳2年10月7日に肥後国姫岡で戦死した吉弘一騎の供養塔である。	県有形
第20回	豊後大野市 031	常忠寺能直塔(五輪塔)及び石塔群	実測 (小林)		181	凝灰岩	大友能直の五輪塔との伝承がある。水輪が大きく、火輪の軒は直線的で、大振りの空風輪が載る。各輪4面に葉研形りの種子を刻む。	市有形
第20回	臼杵市 047	中尾五輪塔(五輪塔1)	文献38	嘉応2年 (1170)	126	凝灰岩	一石五輪塔で、空風輪を欠損する。地輪は大きく、水輪は隅丸方形形状を呈する。火輪はやや小振り。各輪に葉研形りの種子を配し、地輪に紀年銘を彫る。嘉応2年銘は在銘五輪塔では国内2番目の古さである。	国重文・ 国特史
第20回	臼杵市 047	中尾五輪塔(五輪塔2)	文献38	承安2年 (1172)	104	凝灰岩	噴合式の一石五輪塔。地輪は高く、水輪は扁平である。火輪は小振り。風輪が大きく空輪は小さく載る。各輪に種子を刻む。承安2年銘は在銘五輪塔では国内3番目の古さである。	国重文・ 国特史
第21回	臼杵市 101	一石五輪塔	実測 (松本)	弘安8年 (1285)	121	凝灰岩	噴合式の一石五輪塔。地輪は高く、水輪は扁平な形状。火輪の軒は直線的である。各輪4面に葉研形りの種子を刻む。火輪に銘を刻む。	国重文
第21回	臼杵市 059	満月寺層塔と周辺石塔群	文献3	建武元年 (1334)	87	凝灰岩	一石五輪塔で空風輪を欠き、火輪も欠損している。水輪4面に種子、地輪の1面に紀年銘を刻む。	
第21回	臼杵市 050	日吉社五輪塔	文献3		105	凝灰岩	完存の一石五輪塔。地輪は低く、水輪は扁平な楕円形となる。火輪隅棟は大きく反り、大振りの風輪が載る。空輪は小さい。	県有形
第21回	臼杵市 057	岩ノ下石塔群(五輪塔1)	文献3		100	凝灰岩	完存の一石五輪塔。地輪は高く、火輪は小振り。空風輪が大きい。各輪に種子を刻む。	
第21回	臼杵市 058	野路一石五輪塔	文献3		112	凝灰岩	完存の一石五輪塔。地輪は高く、水輪は隅切で彫形し側面に円形の面を持つ。風輪と水輪の一部に種子の墨書が残るか判読不詳。	市有形



中津市 182 青の阿於寺跡の五輪塔



宇佐市 262 曇明寺五輪塔群
正元元年 (1259)



宇佐市 227 蓮華寺跡五輪塔
元徳3年 (1331)



豊後高田市 392
長野観音寺跡石塔群 (五輪塔 1)
天正 11 年 (1583)



豊後高田市 392
長野観音寺跡石塔群 (五輪塔 2)
天正 14 年 (1586)



豊後高田市 407
真木大堂古代文化公園内石塔群
天正 20 年 (1592)



豊後高田市 366
妙蔵坊五輪塔群



豊後高田市
五十石田原家庭内五輪塔
(五輪塔 1)



豊後高田市
五十石田原家庭内五輪塔
(五輪塔 2)



豊後高田市 186
城前フ子石塔群 (五輪塔 1)



豊後高田市 188
清台寺向かい墓地石塔群 (五輪塔 1)



豊後高田市 188
清台寺向かい墓地石塔群 (五輪塔 2)



第10図 五輪塔実測図【豊後高田①】(1/20)



豊後高田市 101
施恩寺石造物群



豊後高田市 154
靈仙寺石造物群 (五輪塔 1)



豊後高田市 154
靈仙寺石造物群 (五輪塔 2)



豊後高田市 111
ヒヨドリ石造物群



豊後高田市 144
道園石塔群 (五輪塔 2)



豊後高田市 144
道園石塔群 (五輪塔 4)



豊後高田市 144
道園石塔群 (五輪塔 5)



豊後高田市 186
城前フチ石塔群
(五輪塔 2)



豊後高田市 186
城前フチ石塔群
(五輪塔 3)



豊後高田市 186
城前フチ石塔群
(五輪塔 4)



豊後高田市 186
城前フチ石塔群
(五輪塔 5)



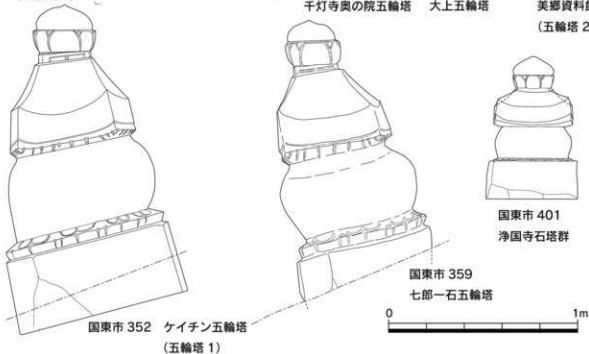
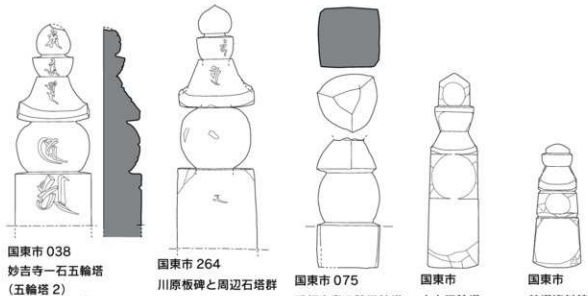
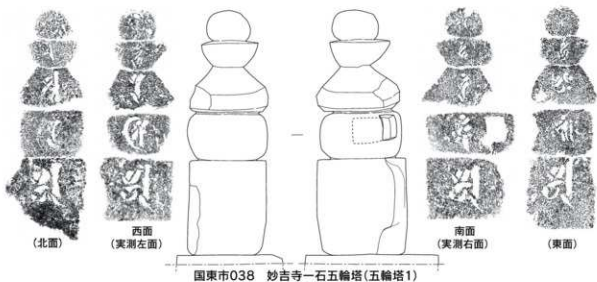
豊後高田市 186
城前フチ石塔群
(五輪塔 6)



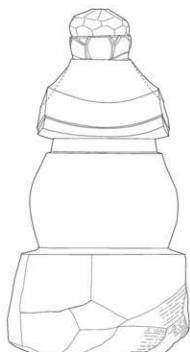
豊後高田市
観音五輪塔



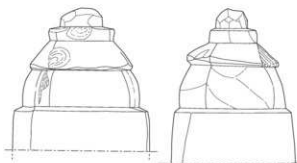
第11図 五輪塔実測図[豊後高田②](1/20)



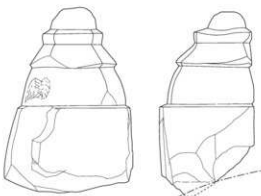
第12図 五輪塔実測図[国東①](1/20)



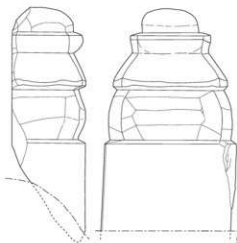
国東市 352 ケイチン五輪塔 (五輪塔 2)



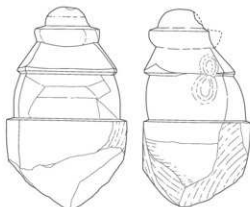
国東市 153 浜崎祖形五輪塔群 (五輪塔 3)



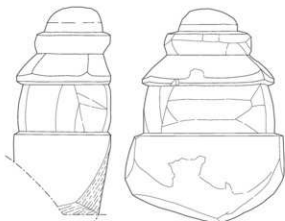
国東市 153 浜崎祖形五輪塔群 (五輪塔 4)



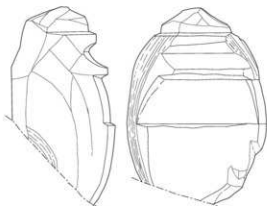
国東市 153 浜崎祖形五輪塔群 (五輪塔 1)



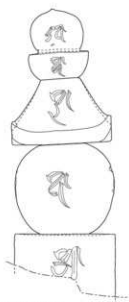
国東市 153 浜崎祖形五輪塔群 (五輪塔 5)



国東市 153 浜崎祖形五輪塔群 (五輪塔 2)



国東市 153 浜崎祖形五輪塔群 (五輪塔 6)



国東市 080
坊中五輪塔群 (五輪塔 1)



国東市 080
坊中五輪塔群 (五輪塔 2)



国東市
美郷資料館
(五輪塔 1)



国東市 243
西光寺石塔群



国東市 156
両子寺石塔群



国東市 178
高良阿弥陀堂石塔群
(五輪塔 1)



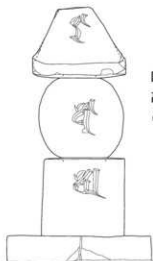
国東市 178
高良阿弥陀堂石塔群
(五輪塔 2)



国東市 242
中日向清原家
墓地石塔群



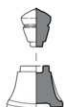
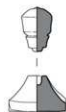
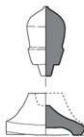
国東市 113
迫坊宝篋印塔と
周辺石造物群



国東市 127 大日堂石塔群



国東市 195
中之坊磨崖仏・磨崖板碑と石塔群



国東市 034 鬼籠当中
石塔群 (五輪塔 1)

国東市 034 鬼籠当中
石塔群 (五輪塔 2)

国東市 034 鬼籠当中
石塔群 (五輪塔 3)

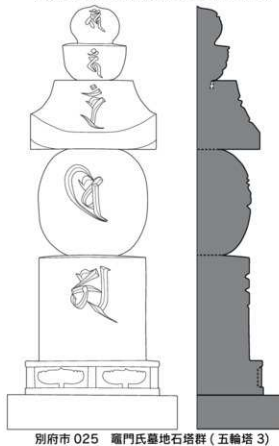
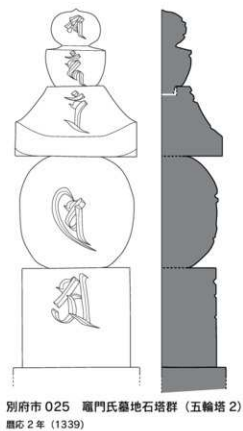
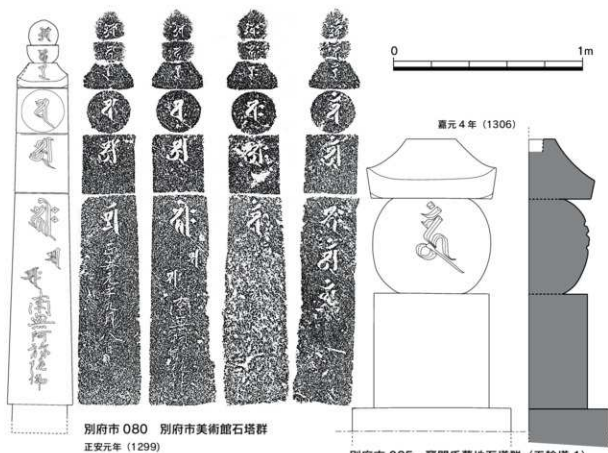
国東市 034 鬼籠当中
石塔群 (五輪塔 4)

国東市 034 鬼籠当中
石塔群 (五輪塔 5)

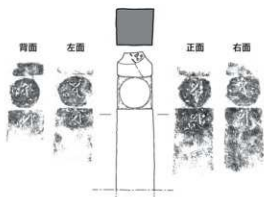
第14図 五輪塔実測図[国東③](1/20)



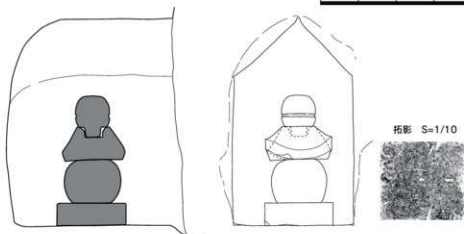
第15図 五輪塔実測図【杵築】(1/20)



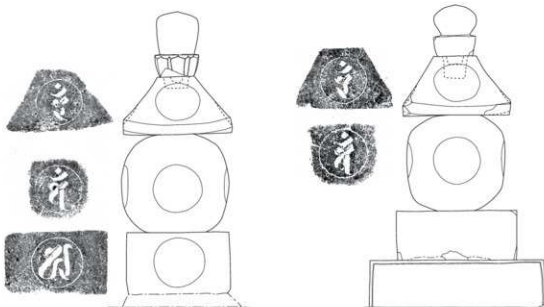
第16圖 五輪塔実測図【別府】(1/20)



日田市 075 草三郎大神宮五輪塔婆
貞和3年(1347)



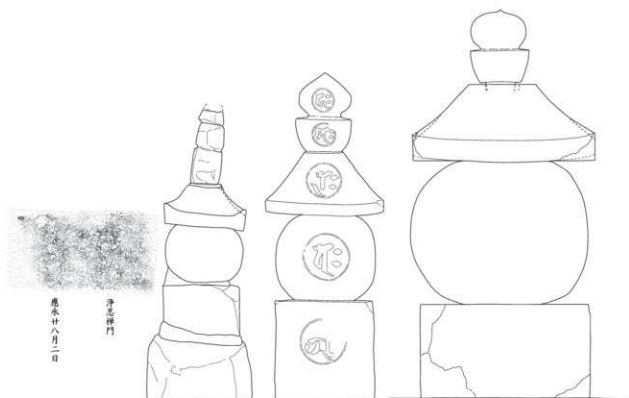
日田市025 星隈山五輪塔 (S=1/20)
明応7年(1498)



大分市055 西光寺石塔群(五輪塔2)
正応5年(1292)

大分市055 西光寺石塔群(五輪塔3)

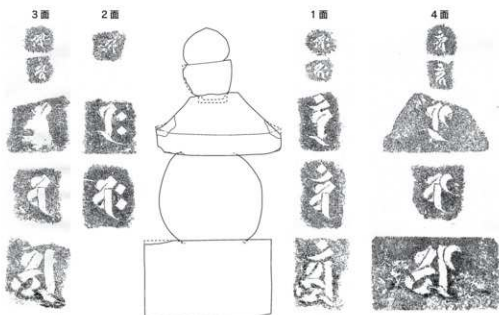
第17図 五輪塔実測図【日田・大分①】(1/20)



大分市 O53 横超寺石塔群
応永20年(1413)

大分市 O87
大友頼泰墓

大分市O55 西光寺石塔群(五輪塔1)



豊後大野市297 石造五輪塔(下赤願五輪塔)及び石塔群
正安2年(1300)



第18図 五輪塔実測図【大分②・豊後大野①】(1/20)



豊後大野市103 楳木野五輪塔
貞和3年(1347)銘



豊後大野市048 表五輪塔(2号)

正平23年(1368)



豊後大野市048 表五輪塔4号
正平23年(1368)



豊後大野市 049 長寿庵五輪塔及び石塔群
正平11年(1356)

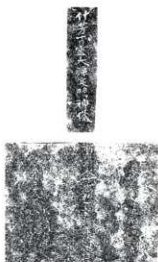


豊後大野市 270 中尾五輪塔
康暦3年(1381)

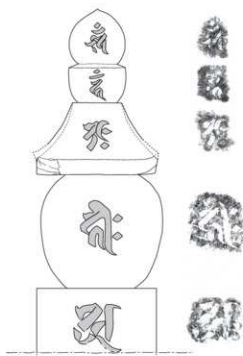
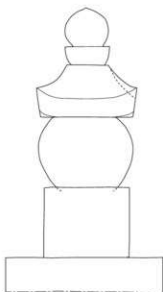


第19図 五輪塔実測図[豊後大野②](1/20)

拓影 S=1/10



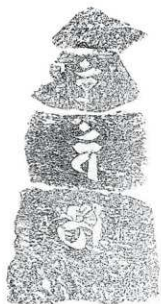
豊後大野市153 犬飼石仏及び周辺石塔群(五輪塔)
 永徳2年(1382)



豊後大野市 031 常忠寺能直塔(五輪塔)

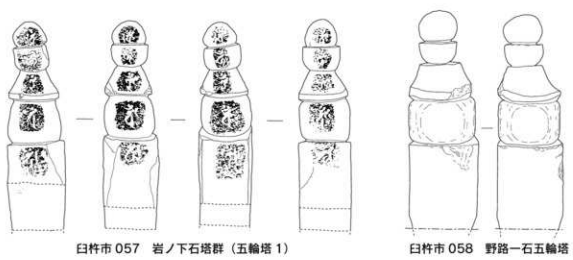
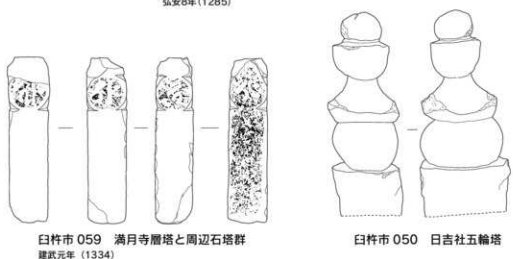
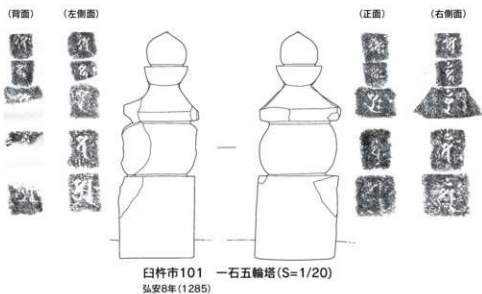


臼杵市 047 中尾五輪塔 (五輪塔 1)
 嘉元2年 (1170)

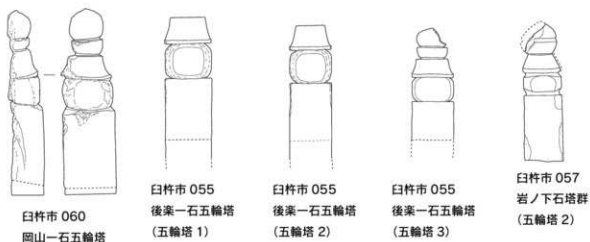


臼杵市 047 中尾五輪塔 (五輪塔 2)
 承安2年 (1172)

第20図 五輪塔実測図【豊後大野③・臼杵①】(1/20)



第21図 五輪塔実測図[臼杵②](1/20)



白杵市 060
岡山一石五輪塔

白杵市 055
後楽一石五輪塔
(五輪塔 1)

白杵市 055
後楽一石五輪塔
(五輪塔 2)

白杵市 055
後楽一石五輪塔
(五輪塔 3)

白杵市 057
岩ノ下石塔群
(五輪塔 2)



佐伯市 121 市福所石塔群【「潜龍」銘五輪塔】

第22図 五輪塔実測図【白杵③・佐伯】(1/20)

種別番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第22図	白杵市 060	岡山一石五輪塔	文献3		97	凝灰岩	一石五輪塔で地輪が高く、水輪は隅切で整形し側面に隅丸形状の面を持つ。風輪に比して空輪が強く延びる。	
第22図	白杵市 055	後楽一石五輪塔 (五輪塔1)	文献3		74	凝灰岩	一石五輪塔で空風輪を欠く。地輪は高く、水輪は方形である。空輪は薄く直線的である。	
第22図	白杵市 055	後楽一石五輪塔 (五輪塔2)	文献3		70	凝灰岩	五輪塔1と同型式で空風輪を欠く。	
第22図	白杵市 055	後楽一石五輪塔 (五輪塔3)	文献3		58	凝灰岩	一石五輪塔で形状は五輪塔1・2と同じ。空輪を欠損する。	
第22図	白杵市 057	岩ノ下石塔群 (五輪塔2)	文献3		73	凝灰岩	一石五輪塔。地輪は高く、水輪は扁平。火輪は小振り。空風輪を欠損する。	
第22図	佐伯市 121	市福所石塔群	実測 (横澤)		195	凝灰岩	完存の大型五輪塔。火輪に「潜龍」、水輪に「墓」の刻銘あり。火輪の軒は厚く、空風輪は大振りである。管理者によると60年ほど前に現地に移したもののという。	

(2) 宝塔

下から基礎、塔身、笠、相輪からなる石造物である(第23図)。相輪の代わりに宝珠が載るものもある。塔身は円筒形を基本とするが、立方体状をなす角宝塔も見られる。宝塔の中には五輪塔との区別が困難なものもあるが、笠に露盤が立つものや、蓮弁を刻む宝珠については宝塔として判断している。また、塔身の下に返花座のつくものもある。県内の在銘資料で最も古いのは中津市屋成家墓地宝塔(中津市236)で、弘安5年(1282)の銘を持つ。以後、県内各地に分布するが、後述する国東塔の分布する国東半島周辺ではその数は少ない。掲載実測図は57点である。



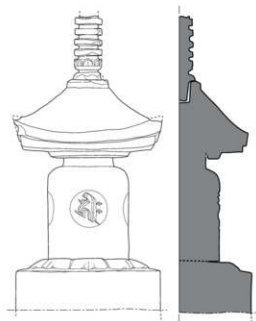
第23図 宝塔解説図

神図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第24図	中津市 236	屋成家墓地国東塔	文献59	弘安5年(1282)	180	凝灰岩	基礎上部に反花座を持ち、その上に筒形塔身を載せる。塔身は4面に円相とキリクの種子を刻む。笠軒は斗型の平坦部に墨書で種子曼荼羅8区を記す。相輪基部は伏鉢、諸花を配し、相輪上部は欠失する。	県有形 県史跡
第24図	中津市 131	長谷寺石塔群(宝塔1)	文献59	貞和4年(1348)	150	安山岩	基礎2段で、上段に納入孔を穿つ。笠軒は両端が強く反る。相輪は欠失。塔身に貞和4年の銘を刻む。	市有形
第24図	中津市 257	山岡支所駐車場石塔群	文献6	文明4年(1472)	118	凝灰岩	基礎の上に寸胴形の塔身を置く。笠軒は隅で強く反る。相輪は4輪を刻みで表現し、宝珠下に相い蓮弁を刻む諸花を配す。	市有形
第24図	中津市 218	羅漢寺鶴足山歴代住職墓地石塔群	文献59		228	凝灰岩	基礎3段の上に塔身を載せる。笠軒は両端が強く反る。相輪基部の反花・諸花には蓮弁を刻み、九輪の上に連珠を配す。宝珠は欠失。	
第24図	中津市 203	古羅漢 法岸寺石塔	文献59		178	安山岩	基礎2段の上に塔身を置く。笠上には2段の露盤が立つ。相輪基部は無地の伏鉢・諸花を配し、それより上は欠失する。	
第25図	中津市 234	今行島越石塔群	文献59		173	安山岩	基礎2段の上に塔身を置く。塔身首に納入孔を穿つ。笠軒両端は強く反る。相輪は伏鉢・諸花・九輪・諸花・宝珠からなり、いずれも無地である。	市有形
第25図	中津市 131	長谷寺石塔群(宝塔2)	文献59			安山岩	基礎1段で圓頭形の台座の上に塔身を載せる。笠軒の両端は大きく反る。相輪基部に伏鉢・諸花を配し、先端の宝珠は欠失する。	市有形
第25図	中津市 195	久福寺門前宝塔	文献6		153		基礎上部に小さな段を持つ。塔身は脚の張る壺形。笠上の相輪基部には伏鉢と蓮弁を刻む諸花を配す。先端の宝珠は欠失。	市有形
第25図	中津市 270	御祖神社宝塔	文献6		109	凝灰岩	基礎・相輪を欠く。塔身は寸胴。笠軒は強く反る。笠上に露盤が立ち2区画の無地の格状開を配す。	市有形
第25図	中津市 162	粉宝塔	文献59		145	安山岩	基礎2段上に塔身を置く。笠軒は厚く両端は強く反る。相輪は欠失。	市有形

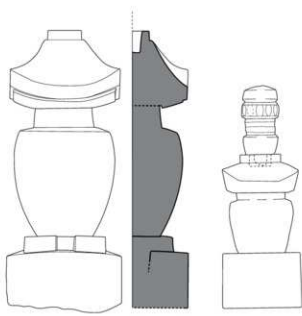
棟号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第25国	中津市	123 猪山神社宝塔	文献59		172	安山岩	基礎2段で上段に納入孔を穿つ。笠は軒裏が大きく反る。相輪は欠失。	
第26国	中津市	118 香葉庵宝塔と周辺石塔群	文献59		132	安山岩	基礎2段の上に塔身を置く。塔身の4面に種子を深く刻む。笠は隅が強く反る。相輪基部は伏鉢・語花を配し、ともに無地。	市有形
第26国	中津市	163 松原山正平寺石塔群	文献26			安山岩	正平寺開山正登上人の墓と伝わる。3段の基礎の上に方形の塔身を置く。塔身の4面に半肉彫りの仏像を配す。笠上の露盤は無地。相輪は反花・語花から上を欠く。	市有形
第26国	中津市	206 古羅瀨北壁石塔群(宝塔1)	文献59			安山岩	小型の宝塔。基礎2段の上に塔身を置く。笠の隅縁は上部に面を持つ。笠上の露盤には2区画の格状間を配す。相輪基部の語花には蓮弁を刻む。	
第26国	中津市	206 古羅瀨北壁石塔群(宝塔2)	文献59			安山岩	宝塔1と同型式。相輪を欠く。	
第26国	中津市	206 古羅瀨北壁石塔群(宝塔3)	文献59			安山岩	宝塔1と同型式。	
第26国	中津市	206 古羅瀨北壁石塔群(宝塔4)	文献59			安山岩	宝塔1と同型式。	
第26国	中津市	209 羅漢寺仏通寺跡石塔群	文献59		105	安山岩	2段の基礎の上に方形の塔身を置く。角宝塔。笠上には露盤が立ち格状間を配し、その上に反花を彫る。相輪は欠失。	
第26国	中津市	212 羅漢寺仁王門上宝塔	文献59		243	凝灰岩	基礎2段の上に圓頭形の台座を置き、その上に塔身が載る。笠軒の端は弧状に厚く作る。相輪基部は蓮弁を刻む。反花・語花を配す。宝珠下の語花にも蓮弁を持つ。近世初期に古羅瀨回車塔を模して作られたものと推測。	
第27国	宇佐市	202 山口家石塔群	文献11	正安3年 (1290)			基礎上に低い反花座が付き、上に筒形塔身が載る。笠軒は厚く反りは弱い。相輪は反花・語花・九輪で上部を欠失する。	市有形
第27国	宇佐市	367 千福宝塔群	文献12	元亨元年 (1321)			基礎上に蓮弁を刻む台座を置き、その上に筒形塔身が載る。笠から上は欠失。	市有形
第27国	宇佐市	笠ノ口1号宝塔	文献11				基礎上に圓頭形台座を配し、上に筒形塔身が載る。笠から上は欠失。	
第27国	宇佐市	348 塔の本宝塔	文献11				基礎3段の上に肩の張る塔身が載る。笠軒は薄く、上部に格状間を持つ露盤が立つ。相輪は語花・九輪で上部を欠失する。	
第27国	宇佐市	292 西原寺跡宝塔と周辺石塔群	文献11				基礎3段に筒形塔身が載る。塔身に納入孔を穿ち、首は高い。笠軒は薄く、両端が強く反る。格状間を持つ露盤上に反花・語花・九輪・宝珠からなる相輪が載る。九輪上には4つの突起が付く。	市有形
第28国	宇佐市	237 塔ノ原宝塔と周辺石塔群	文献11				基礎上に丸みのある塔身が載る。笠軒は直線的で両端が三角形状に跳ね上がる。笠上には露盤が立つ。相輪は語花以外を欠失する。	市有形
第28国	宇佐市	妙楽寺宝塔	文献11				基礎上に筒形塔身が載る。塔身上部に円相と種子を刻む。笠軒は厚く直線的で両端が反る。相輪は反花・語花・九輪で上部を欠失。	

種別 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第28国	豊後高田市 392	長野観音堂跡石塔群	文献23	天正9年 (1581)	117	凝灰岩	基礎上に2段の遣り出しを配し、地蔵像を彫る塔身が載る。笠は直線的で露盤が立ち、上には宝珠が載る。	
第28国	豊後高田市 151	坊中岩屋宝塔群 (宝塔1)	文献29		87	安山岩	扁平な基礎石上に筒型の塔身を置く。首上部にある先尖りの軸を笠に挿し込む。笠は傾斜が緩やかで軒両端は強く反る。笠上には丸い宝珠が載る。	
第28国	豊後高田市 151	坊中岩屋宝塔群 (宝塔2)	文献7			安山岩	塔身のみで形状は宝塔1と同じ筒形を呈する。	
第28国	豊後高田市 189	別十字堂磨崖宝塔と石塔群	文献18				扉面に宝塔を半肉彫りする。笠上露盤上に請花・九輪・請花・宝珠からなる相輪が付く。	
第28国	豊後高田市 186	城前フチ石塔群	文献18		150		基礎上に底すばまりの塔身を置く。笠は隅軒が反る。露盤上に無地の請花と九輪・粗い蓮弁を刻む請花・宝珠が載る。九輪は一部欠損。	
第28国	豊後高田市 067	東智庵石塔群	文献29				基礎上に筒型の塔身を置く。首部に納入孔を穿つ。笠軒は傾く反り、上部に露盤が立つ。相輪は反花・請花・九輪で上部を欠失する。	
第29国	豊後高田市 185	清台寺石塔群	文献18		143	安山岩	基礎上に寸胴形の塔身が載る。笠は大きく、軒の両端が大きく反る。笠上露盤上に宝珠が載る。塔身の跡は後刻の可能性もある。	市有形
第29国	豊後高田市 190	福内家墓地石塔群	文献18				基礎上に蓮弁を刻む反花座が付き、上に縦長の塔身が載る。笠軒は厚く、露盤上に宝珠が載る。	
第29国	国東市 070	千燈寺石造宝塔	実測 (宮内)		58	砂岩	六所権現施にあつたとされる小型の宝塔。塔身には方形の納入孔を穿ち、蓋石を嵌める。笠は直線的で軒は薄く、笠上には相輪を受ける納孔を穿つ。	県有形
第29国	杵築市 032	堂野尾地藏堂石塔群 (宝塔1)	大分県立歴史博物館提供	本禄10年 (1567)	148	凝灰岩	2段の基礎の上に竜形の塔身を置く。笠の隅棟は上部を切断したようなし字状となる。笠上の露盤は無文。基礎基部の請花と宝珠請花には蓮弁を刻む。塔身に銘文と4面に種子を彫る。首には納入孔を穿つ。	
第29国	杵築市 032	堂野尾地藏堂石塔群 (宝塔2)	大分県立歴史博物館提供	慶長2年 (1597)	78.5	凝灰岩	1号宝塔と同型で、相輪を欠き別材が載る。塔身には刻銘と4面の上部に種子を刻む。	
第29国	杵築市 072	何松家墓地石塔群	実測 (越智)	慶長9年 (1604)	116	凝灰岩	2重の基礎の上に方形の塔身を載せた角宝塔。塔身4面には小さい円形内に種子を刻む。笠軒は厚く、両端が大きく反り上部は切断したようなし字状となる。相輪基部と上部に蓮弁を刻む請花を配し、先端に宝珠を載せる。	
第29国	杵築市 180	奈多氏墓地石塔群	実測 (小柳)		130	凝灰岩	基礎上部に反花座をもち、その上に塔身を載せる。反花座は方形に作る。笠は丸みをもち、露盤には2区画の無文の格状間を配す。笠上には宝珠を載せ、下半部には蓮弁を刻む。	
第29国	杵築市 062	妙善坊石塔群 (宝塔1)	文献30			凝灰岩	基礎上に低い反花座が付き、上に竜形塔身が載る。笠軒は薄く両端が反る。相輪は欠失。	
第29国	杵築市 062	妙善坊石塔群 (宝塔2)	文献30			凝灰岩	基礎上に反花が退化した輪状の台座が付く。塔身は丸みをもち、笠軒は厚く上端は弧状。相輪は欠失。	
第30国	別府市 014	御嶽権現宝塔	実測 (小林)	元亨2年 (1322)	184	凝灰岩	2段の基礎の上に塔身を置く。塔身4面に舟形の光背と、その中に半肉彫りの仏像を彫る。笠は直線的で厚みがあり、笠表には垂木を刻む。露盤には2区画の格状間を持つ。相輪基部には反花と請花があり、上部は欠失。	県有形

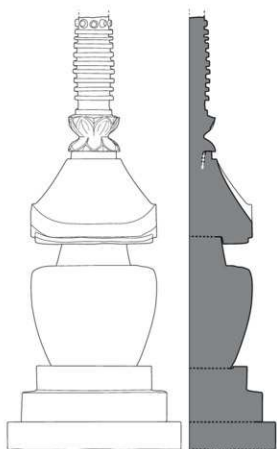
棟号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年路	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第30回	別府市	097 松音寺石塔群	実測 (横澤)	貞和2年 (1346)	96.5	凝灰岩	小型の宝塔。基礎は無文。笠上には無地の露盤が立つ。相輪を欠き宝珠を乗せる。塔身には貞和2年と「開山塔」を組く廻むが後刻と思われる。	市有形
第30回	由布市	078 慈航寺石造宝塔と石塔群	文献7	元徳2年 (1330)		安山岩	基礎2段上にやや削張り筒形の塔身を置く。塔身4面に葉研形りの同種子を刻む。笠は軒両端が強く反り、上部に露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪で上部は欠失する。	県有形
第30回	由布市	063 西鶴宝塔(宝塔1)	実測 (横澤)	建武3年 (1336)	120	凝灰岩	別石で組んだ台の上に宝塔2と並べて置かれている。基礎には2重方形区画内に格状間を持つ。塔身は直線的で首は太い。建武3年路と4面に葉研形りで同種子を刻むが、「建武」は判読困難。笠軒は4隅が大きく反る。露盤には格状間を持つ。相輪は反花から上を欠損。基礎と露盤の格状間には赤彩が残る。	県有形
第30回	由布市	063 西鶴宝塔(宝塔2)	実測 (横澤)		111	凝灰岩	宝塔1と同規模・同型式。	県有形
第30回	由布市	117 元宮石塔群	実測 (横澤)		151	安山岩	2重の基礎の上に丸みのある塔身を載せる。笠上には露盤が立つが無文。相輪基部の反花と諸花には蓮弁を刻む。相輪上手は欠失。	
第31回	大分市	077 円寿寺石塔群	実測 (小林)	元応元年 (1319)	255	凝灰岩	基礎2重で上段に2区画の格状間を配す。塔身は筒状で4面に種子を刻む。笠は直線的で、露盤に2区画の格状間を配す。相輪は伏鉢・反花・諸花・九輪・諸花・宝珠で、宝珠下諸花の基部に連珠文を施す。	
第31回	大分市	100 大分社宝塔	実測 (横澤)	康永4年 (1345)	196	凝灰岩	基礎は3重で上段には格状間を配す。中段正面側には無数の円形窪みがある。塔を覆った物を飲む民間信仰の痕跡か? 塔身は隅丸方形を呈し、首部先端は丸みを持つ。笠上は露盤が立ち格状間を配す。相輪は欠失し別の宝珠を載せる。	
第32回	豊後大野市	282 永仁宝塔及び石幢	文献7	永仁4年 (1296)		凝灰岩	基礎上面に蓮弁を薄く陽刻し筒型の塔身を置く。塔身輪部に柱や扉、長押等、首部に柱や欄干、斗拱を陽刻し、4面の扉形内に種子を刻む。笠軒は直線的で両端が反る。相輪は諸花と九輪で、伏鉢と宝珠を欠損する。	県有形
第32回	豊後大野市	222 馬骨畑宝塔	文献7	文保2年 (1318)	177	凝灰岩	基礎には格状間を配す。塔身は隅丸方形の筒形。笠上には格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火輪宝珠で、上部諸花基部と火輪形と宝珠の間に連珠文を施す。	市有形



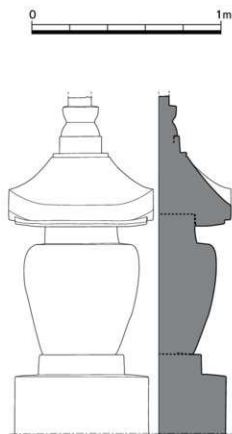
中津市 236 屋成墓地国東塔 (宝塔)
弘安 5 年 (1282)



中津市 131 長谷寺石塔群 (宝塔 1) 中津市 257
真和 4 年 (1348) 山国支所駐車場石塔群
文明 4 年 (1472)

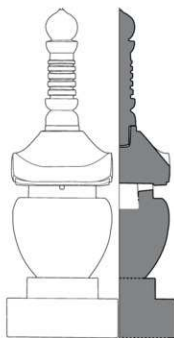


中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群

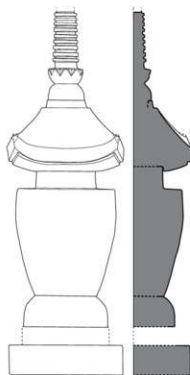


中津市 203 古羅漢 法岸寺石塔

第24図 宝塔実測図1【中津①】(1/20)



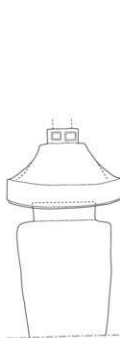
中津市 234 今行鳥越石塔群



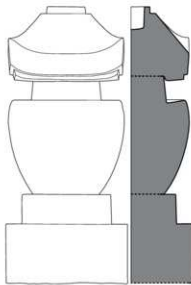
中津市 131 長谷寺石塔群 (宝塔 2)



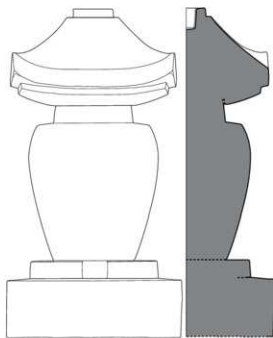
中津市 195 久福寺門前宝塔



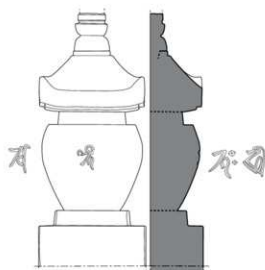
中津市 270
御祖神社宝塔



中津市 235 粉宝塔



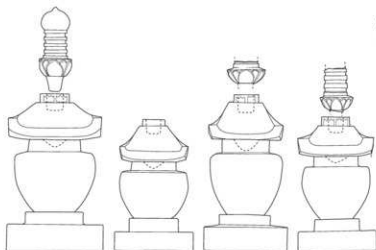
中津市 123 猪山神社宝塔



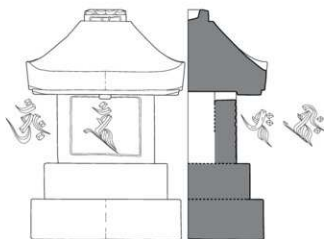
中津市 118 香紫庵宝塔



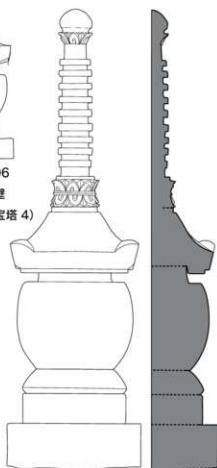
中津市 163 檢原山正平寺石塔群



中津市 206 古羅漢北壁石塔群 (宝塔 1)
 中津市 206 古羅漢北壁石塔群 (宝塔 2)
 中津市 206 古羅漢北壁石塔群 (宝塔 3)
 中津市 206 古羅漢北壁石塔群 (宝塔 4)

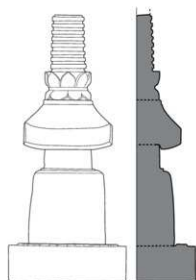


中津市 209 羅漢寺旦過寺跡石塔群

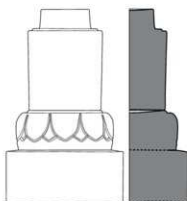


中津市 212 羅漢寺仁王門上宝塔

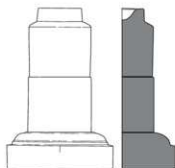
第26圖 宝塔実測図3【中津③】(1/20)



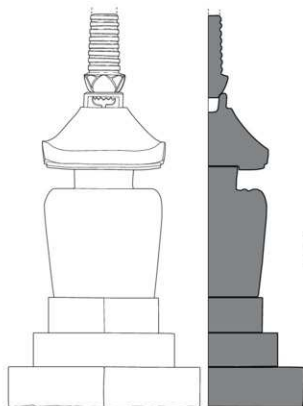
宇佐市 202 山口家石塔群
正安3年 (1290)



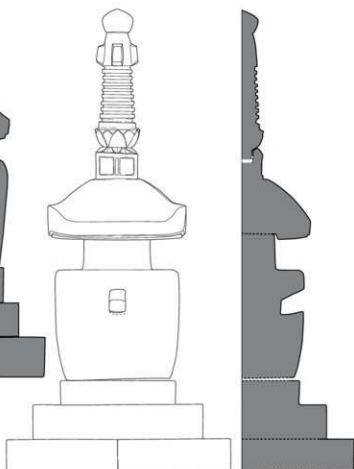
宇佐市 367 千福宝塔群
元亨元年 (1321)



宇佐市 釜ノ口1号宝塔

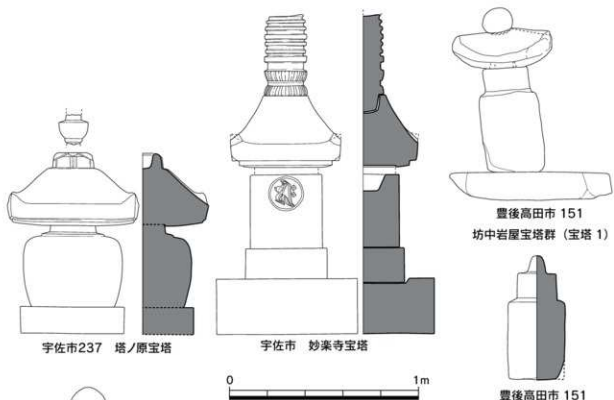


宇佐市348 塔の本宝塔



宇佐市292 西原寺跡宝塔

第27図 宝塔実測図4【宇佐①】(1/20)



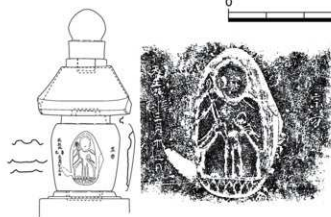
宇佐市237 塔ノ原宝塔

宇佐市 妙楽寺宝塔

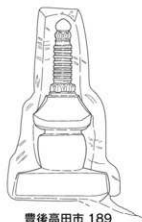
豊後高田市 151
坊中岩屋宝塔群 (宝塔 1)



豊後高田市 151
坊中岩屋宝塔群 (宝塔 2)



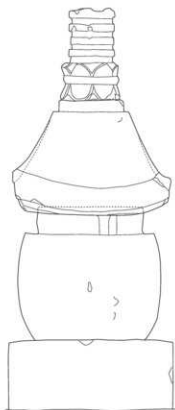
豊後高田市 392 長野観音寺跡石塔群
天正9年(1581)



豊後高田市 189
別十字堂磨崖宝塔と石塔群



豊後高田市 186
城前フ子石塔群



豊後高田市 067 東智庵石塔群

第28図 宝塔実測図5【宇佐②・豊後高田①】(1/20)



永永徳石工門之塚

中興開墓
雲峰了機居士

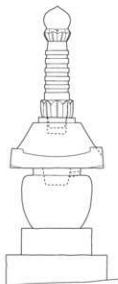
豊後高田市 185 清台寺石塔群



豊後高田市 190 堀内家墓地石塔群



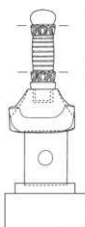
国東市 070
千鑑寺石造宝塔



杵築市 032 堂野尾地藏堂
石塔群 (宝塔 1)
永禄 10 年 (1567)



杵築市 032
堂野尾地藏堂石塔群
(宝塔 2) 慶長 2 年 (1597)



(撮影 S=1/10)

杵築市 072 何松家墓地石塔群
慶長 9 年 (1604)



杵築市 180 奈多氏墓地石塔群

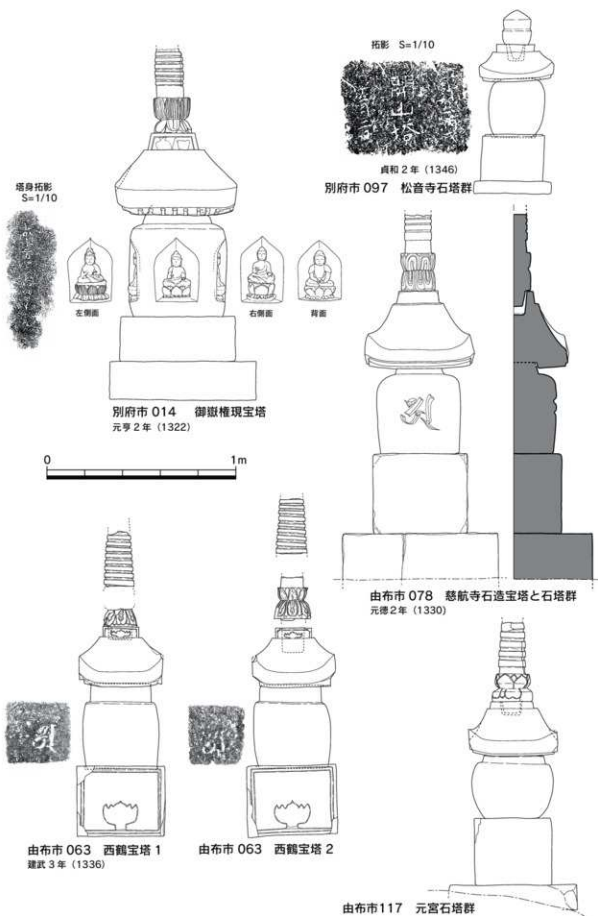


杵築市 062
妙善坊石塔群 (宝塔 1)

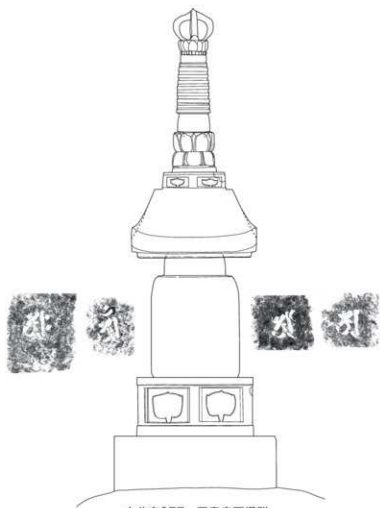


杵築市 062
妙善坊石塔群 (宝塔 2)

第29図 宝塔実測図6【豊後高田②・国東・杵築】(1/20)

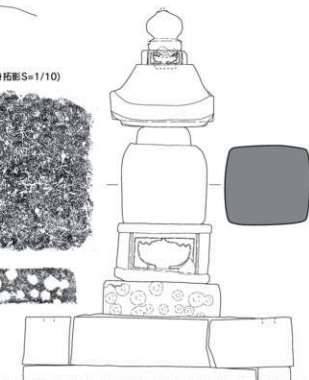
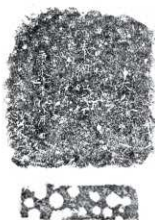


第30図 宝塔実測図7【別府・由布】(1/20)



大分市077 円寿寺石塔群
元応元年(1319)

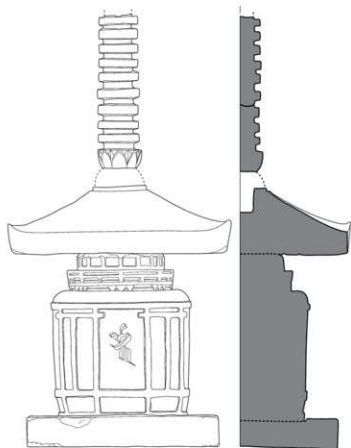
(塔身拓影S=1/10)



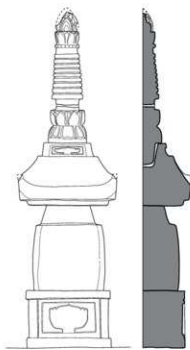
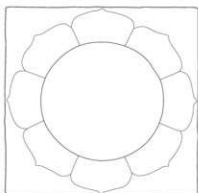
大分市 100 大分社宝塔
康永4年(1345)



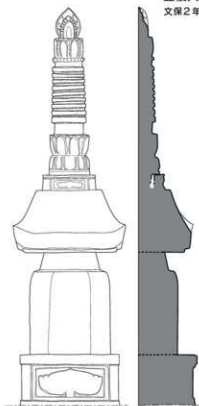
第31図 宝塔実測図8【大分】(1/20)



豊後大野市 282 永仁宝塔及び石幢
永仁4年(1296)

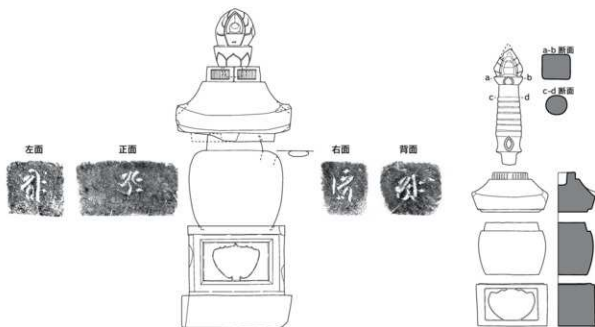


豊後大野市 222 馬背畑宝塔
文保2年(1318)



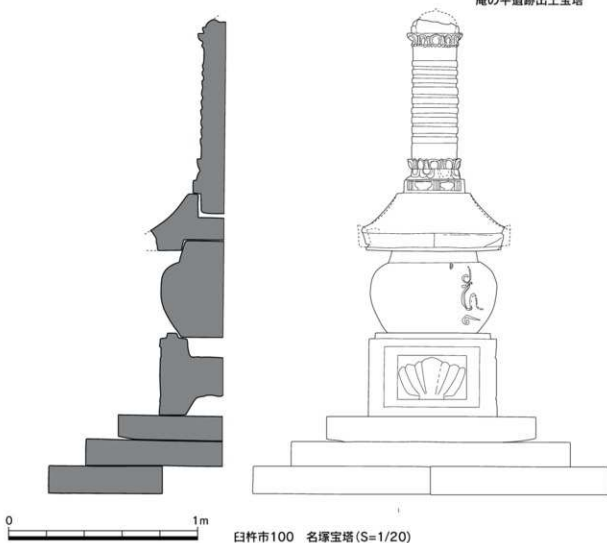
豊後大野市 227 足立家宝塔 嘉祿年間(1326~1328)

第32図 宝塔実測図9[豊後大野①](1/20)



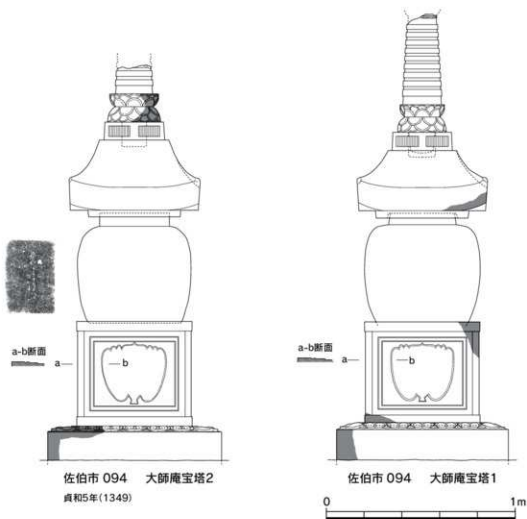
豊後大野市295 下赤嶺宝塔(1345)

豊後大野市
庵の平遺跡出土宝塔



臼杵市100 名塚宝塔(S=1/20)

第33図 宝塔実測図10【豊後大野②・臼杵】(1/20)



第34図 宝塔実測図11【佐伯】(1/20)

棟号 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第32図	豊後大野市 227	足立家宝塔及び 五輪塔	文献7	嘉暦年間 (1326~ 1328)	213	凝灰岩	格状間を持つ基礎上に隅丸方形の筒形塔身が載る。笠上に格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火輪宝珠で、上部諸花基部及び火輪形と宝珠の間に連珠文を施す。	県有形
第33図	豊後大野市 295	石造宝塔(下赤 嶺宝塔)	実測 (横澤)	康永4年 (1345)	168	凝灰岩	基礎2重で上段は格状間を配す。塔身は削が丸みを持ち、一端に納入孔を穿つ。笠上は露盤が立ち、2区画の縦連子を刻む。その上に蓮弁を刻む諸花と火輪宝珠を載せる。	市有形
第33図	豊後大野市	庵の平道跡出土 宝塔	文献20			凝灰岩	部材で本来の組合せてはない。基礎は格状間を持ち、笠軒は軽く反り、露盤には連子を刻む。相輪は九輪と諸花・火輪宝珠からなる。	
第33図	臼杵市 098	名塚宝塔	文献64	文安6年 (1449)		凝灰岩	3重基壇上に格状間を持つ基礎を置く。塔身は丸みを持つ。笠軒は直線的で、2区画の格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・宝珠で、上部諸花下に連珠文を施す。	県有形
第34図	佐伯市 094	大師庵宝塔(宝 塔2)	実測 (原田・越智)	貞和5年 (1349)	211	凝灰岩	相輪上部を欠く以外は完存。基壇上に開散式反花座を持つ。基礎に格状間を配す。塔身に貞和5年の銘を持つ。笠上は露盤が立ち、2区画の縦連子を刻む。相輪基部の反花・諸花は3重の蓮弁を施す。	県有形
第34図	佐伯市 094	大師庵宝塔(宝 塔1)	実測 (原田・越智)		234	凝灰岩	宝塔2と同型式で無銘。相輪の宝珠基部に連珠文を施す。	県有形

(3) 国東塔

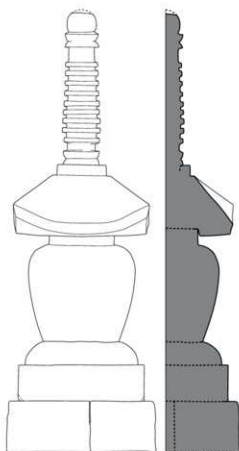
塔の各パーツは宝塔と同じであるが、塔身と基礎の間に反花座や請花、あるいはその両方を持つことが宝塔との最大の相違点である。また、相輪の先端が四方に火輪を刻む火輪宝珠となる点も特徴として挙げられる。この相輪を載せずに宝珠を載せるものは異形国東塔ともいわれる。国東半島を中心に分布することから、天沼俊一が「国東型宝塔」と命名したことでこの名がある。宝塔の地域色を示す石造物であるといえる。紀年銘のある国東塔では国東市岩戸寺宝塔（国東塔、国東市081）が弘安6年（1283）銘で最古である。国東半島を中心に、中津市から日出町にかけて分布する他、県西部の九重町にも数例類例がある。大分市万寿寺国東塔（大分市070）は国東半島から搬入されたものである。掲載実測図は66点である。

挿図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第35図	中津市 205	古羅渡国東塔	文献59		234	凝灰岩	基礎2段で、圓頭形の台座上に塔身が載る。笠は隅棟が直線的で軒口は薄い。相輪は伏鉢・反花・九輪・反花・請花・宝珠で、宝珠の上部を欠損する。	県有形
第35図	中津市 234	今行鳥越石塔群	文献59		186	安山岩	基礎3段。反花座の上に栴檀目を持つため請花を欠失している可能性が高い。塔身は丸みをもち、首部に納入孔を穿つ。笠上には短い露盤が立つ。相輪は反花・請花・九輪・請花・火輪宝珠である。	
第36図	豊後高田市 265	塔ノ御堂石塔群	文献60	延慶2年(1309)			基礎上に反花・栴檀目・請花を配し、壱形の塔身を置く。塔身は4面を形作り、窪め半円形の口縁を形作る。首部には納入孔を穿つ。笠軒は両端が大きく反り、露盤には格状間を配す。相輪は反花・請花・九輪で上部を欠失する。	県有形
第36図	豊後高田市 095	殿屋敷国東塔	文献29	暦応2年(1339)			基礎2段で上段に3区画の格状間を配す。高い反花座の上に壱形の塔身を置く。笠の隅棟は直線的で、露盤には格状間を配す。相輪は反花・請花・九輪・請花・火輪宝珠からなる。	
第36図	豊後高田市 419	金高墓地石塔群	文献23	永和元年(1375)		凝灰岩	基礎は3重で上段に2区画の格状間を配す。ともに蓮弁を刻む反花・請花の上に塔身を置く。塔身首部には納入孔を穿つ。笠上には露盤が立ち、格状間を配す。相輪は反花から上を欠失。	県有形
第37図	豊後高田市 422	熊野墓地石塔群(国東塔1)	文献23	大永7年(1527)			基礎は2重。無地の圓頭型台座上に塔身が載る。笠上露盤は無地で、その上に伏鉢・請花・九輪・請花・宝珠が載る。	
第37図	豊後高田市 071	徳丸国東塔	文献29	天正2年(1574)			基礎上の反花・請花を欠失。塔身は底すばまりで種子を小さく刻む。首部に納入孔を穿つ。笠軒は全体に反り、上部に露盤が立つ。相輪基部は欠失し、先端の宝珠が残る。	
第37図	豊後高田市 422	熊野墓地石塔群(国東塔2)	文献23	天正15年(1587)			基礎は2重。低い反花座の上に塔身を置く。笠軒は細く反り、上部に露盤が立つ。相輪は請花・九輪で上部を欠失。	
第37図	豊後高田市 183	薬師堂石塔群	文献18				基礎は2重で上段に2区画の格状間を配す。反花座の上に底すばまりの塔身が載る。笠上露盤には格状間を配し、上に反花・請花・九輪・請花・宝珠からなる相輪を載せる。	
第37図	豊後高田市 154	靈仙寺石塔群	文献29				基礎3段に反花を配し、胴の張る塔身を置く。笠は丸みをもち上部に格状間を配した露盤が立つ。相輪は伏鉢・請花・九輪・宝珠からなる。	
第37図	豊後高田市 249	東見庵国東塔	文献25				2段の基礎上に圓頭形の台座を配し、壱形の塔身を置く。笠軒両端が反り、隅棟上部は丸みを持つ。露盤は無地。相輪は反花・請花・九輪・請花・火輪宝珠からなる。	

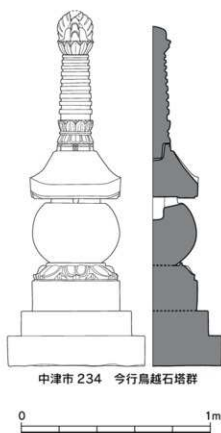
棟号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第38回	豊後高田市 356	原国東塔・石塔群	文献60				基礎2段で上部に3区画の格状間を配す。反花座の上の請花と塔身を欠く。笠軒両端は大きく反り、露盤は2区画の格状間を配す。相輪は反花・請花・九輪で上部を欠失する。	
第39回	豊後高田市 134	中山家国東塔群(国東塔1)	文献29				基礎2段の上に反花と請花を配し、壺形の塔身を置く。首部に納入孔を穿つ。笠上露盤は無地。相輪は反花・請花・九輪・火爐宝珠からなる。	
第39回	豊後高田市 134	中山家国東塔群(国東塔2)	文献29				形状は国東塔1に似る。	
第39回	豊後高田市 133	垣嗣家墓地石塔群	文献29				基礎2段の上に反花と請花を配し、壺形の塔身を置く。首部に納入孔を穿つ。笠は高い。相輪は九輪の上に請花と火爐宝珠が載る。	
第39回	豊後高田市 043	樋ノ口観音堂石塔群	文献29				基礎2段に反花・括り目・請花を配し、上に壺形塔身が載る。笠軒は厚く、上部に2区画の格状間を配す露盤が立つ。相輪は反花・請花・九輪・請花・火爐宝珠からなる。	
第39回	豊後高田市 165	志太波家国東塔	文献29				基礎3段に反花・括り目・請花を配し、壺形の塔身が載る。笠軒は薄く両端が強く反る。相輪は反花・請花・九輪・宝珠からなる。	
第39回	豊後高田市 037	八坂社国東塔	文献29				基礎3段に反花・括り目・請花を配し、底すばまりの塔身が載る。笠軒は薄く、隅棟は強く反る。相輪は反花・請花・九輪で上部を欠失する。	
第40回	豊後高田市 258	知恩寺国東塔・石塔群	文献25				基礎3段で上段に2つの格状間を配す。反花・請花上に塔身を置き、軸上部に納入孔を穿つ。笠上に格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・請花・九輪・請花・火爐宝珠である。	
第40回	豊後高田市 365	富貴寺石造物群	文献23			安山岩	基礎3段の上に無地の反花座と蓮弁を刻む請花、塔身が載る。笠は上部が丸みを持ち、2区画の格状間を配す露盤が立つ。相輪は請花・九輪・請花・宝珠からなる。	国史跡
第40回	豊後高田市 055	中山観音堂石塔群	文献29				基礎3段上に反花・括り目・請花と球状の塔身が載る。笠軒は両端が反り、上部には格状間を持つ露盤が短く立つ。相輪は反花・請花・九輪・請花・火爐宝珠からなる。	県有形
第41回	豊後高田市 365	富貴寺石造物群	文献66				基礎2段上に小さい請花と塔身を置く。首に納入孔を穿つ。笠上露盤には2区画の格状間を配す。相輪は伏鉢・請花・九輪・宝珠からなる。	
第41回	豊後高田市 104	長谷寺跡石塔群	文献29				2段基礎上に反花と塔身を置く。笠上露盤には2区画の格状間を配す。相輪は反花・請花・九輪・請花・火爐宝珠からなる。	
第41回	豊後高田市 245	妙覺寺石塔群	文献25				基礎2段で上段に2区画の格状間を配す。反花上に壺形の塔身を置く。相輪は欠失。	
第41回	豊後高田市 155	実相院石塔群	文献29				基礎2段で上段に2区画の格状間を配す。反花上に壺形の塔身を置く。笠軒は直線的で両端が反る。2区画の格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・請花・九輪・請花・火爐宝珠からなる。	

神国番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第42国	豊後高田市 285	花ノ木国東塔 (国東塔1)	文献25				基礎3段で上段に格状間を2つ配す。反花上に菱形塔身を置き、笠軒両端は大きく反る。相輪基部は伏鉢・請花で両者の間に連珠文を施す。九輪上部を欠失する。	
第42国	豊後高田市 285	花ノ木国東塔 (国東塔2)	文献25				基礎3段で上段に2区画の格状間を配す。反花上に塔身を置き、首に納入孔を穿つ。笠軒両端は強く反り、上に露盤が立つ。相輪は欠失。	
第42国	豊後高田市 323	長安寺六所権現 国東塔	文献25				基礎3段の上段に2区画の格状間を配す。反花上に塔身を置き、笠上に格状間を持つ露盤が立ち、反花・請花・九輪・請花・宝珠の相輪が載る。	県有形
第43国	国東市 081	岩戸寺宝塔と石 塔群	文献32	弘安6年 (1283)	330	安山岩	基礎3重で上段に2区画の格状間を配す。反花・請花上に筒形の塔身を置き、首部に納入孔を穿つ。笠軒は薄く、隅棟は傾く。露盤には2区画の格状間を配す。相輪は反花・請花・九輪・請花・火燧宝珠からなる。	国重文
第43国	国東市 007	別宮社国東塔	文献32	正応3年 (1290)	480	安山岩	基礎3段は後補。反花座の上にやや或すばまりの筒形塔身を置き、首に納入孔を穿つ。笠軒は薄く、上部に2区画の格状間を配す露盤が立つ。相輪は反花・請花・九輪・請花・火燧宝珠からなる。	県有形
第44国	国東市 386	照恩寺国東塔	文献41	正和5年 (1316)	214	安山岩	基礎5重で上段に2区画の格状間を配す。反花座上に塔身を置き、扉部に納入孔を穿つ。笠軒は薄く、両端が傾く。露盤には2区画の縦連子を刻む。相輪は反花・請花・九輪・請花・火燧宝珠からなる。	国重文
第44国	国東市 132	長木家宝塔・鳴 板碑と周辺石塔 群	文献32	元亨元年 (1321)	約400	安山岩	基礎3重で上段に3区画の格状間を配す。反花・括り目・請花上に塔身を置き、笠上露盤には2区画の縦連子を刻む。相輪は反花・請花・九輪・請花・火燧宝珠からなる。	国重文
第44国	国東市 083	文殊仙寺石塔群	文献7	嘉暦元年 (1326)		安山岩	基礎上に反花・請花を配し、後補の塔身が載る。笠は直線的で軒の反りは弱い。2区画の格状間を配す露盤が立つ。相輪は反花・請花・九輪・請花・火燧宝珠からなる。	県史跡
第45国	国東市 345	釜ヶ迫石塔群	文献31	建武2年 (1335)			基礎3段で上段に2区画の格状間を配す。塔身下反花と請花間の首部に連珠文を施す。塔身は菱形で扉部に納入孔を穿つ。笠上露盤に格状間を配す。相輪は反花・請花・九輪・請花・火燧宝珠である。	国重文
第45国	国東市 179	神宮寺国東塔と 周辺石塔群	文献32	建武3年 (1336)			基礎3段で上段に2区画の格状間を配す。反花上に菱形塔身を置き、笠上には2区画の格状間を持つ露盤が立つ。相輪は伏鉢・請花・九輪・請花・火燧宝珠からなる。	県有形
第46国	国東市 156	両子寺石塔群 (国東塔1)	文献1		227	安山岩	基礎3重で上段に2区画の格状間を配す。覆弁蓮弁の請花上に塔身が載る。笠は開軒が大きく反る。上部は露盤が立ち格状間を配す。相輪は欠損し九輪の一部が残る。	
第46国	国東市 156	両子寺石塔群 (国東塔2)	文献1		207	安山岩	基礎は3重で上段に2区画の格状間を配す。蓮弁を刻む反花上に塔身が載る。笠軒は傾く。笠上に2区画の格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・請花・九輪・請花・宝珠からなり、宝珠火燧部を欠損する。	
第46国	国東市 156	両子寺石塔群 (国東塔3)	文献1		350	安山岩	基礎は3重で上段に2区画の格状間を配す。反花座上に長脚の塔身が載る。扉に納入孔を穿つ。笠軒は薄く、両端が傾く。露盤には2区画の格状間を配す。相輪は反花・請花・九輪で上部を欠失する。	県有形

神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第47国	豊後高田市 391	宝命寺観音堂石塔群	文献62		371		基礎は3重で上段に3区画の格状間を配す。反花座の上に塔身を置き、肩部に納入孔を穿つ。笠軒は厚く両端が緩く反る。露盤には2区画の格状間を配す。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火焰宝珠からなる。	県有形
第48国	国東市 076	仁圓国東塔	実測 (版本)		234	安山岩	基礎は3重で上段に方形に彫り窪めた格状間を2つ配す。複弁八葉の反花座の上に塔身を載り、首部に納入孔を穿つ。笠は間幅が大きく反り、上には2区画の格状間を持つ露盤が立つ。相輪は伏鉢・諸花・九輪・宝珠で、先端は折れて基壇上に置かれている。	県有形
第48国	国東市 383	木野石塔群	文献31				基礎3段上に壺形塔身を置く。首部に納入孔を穿つ。笠上露盤に2区画の格状間を配す。相輪は反花・諸花・九輪・反花・火焰宝珠からなる。	市有形
第48国	国東市 134	成仏寺石塔群	文献28				基礎3段で上段に2区画の格状間を配す。台座の上に丸みのある塔身を置く。笠軒の反りは強く、露盤には2区画の連子を刻む。相輪は伏鉢・諸花・九輪で上部を欠損。	
第48国	国東市 157	大吉堂国東塔と 周辺石塔群	文献31				2区画の格状間を持つ基礎の上に低い反花と塔身を置く。首は短い。笠上露盤に格状間を持つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・宝珠で完存。	市有形
第48国	国東市 218	西福寺石塔群	文献31				基礎3段で上段に3区画の格状間を配す。反花上に壺形塔身を置く。笠上露盤には2区画の格状間を配す。相輪は諸花・九輪で上部を欠失。	市有形
第49国	国東市 178	高良阿弥陀堂石塔群	文献32				2区画の格状間を持つ基礎の上に反花を配し塔身を置く。首部に納入孔を穿つ。笠はやや高く、2区画の格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪で上部を欠失する。	
第49国	国東市 036	万福寺石塔群	文献28		195		基礎3段上に筒形塔身を置く。笠軒は薄く直線的。笠上露盤に2区画の格状間を配す。相輪は低い反花・諸花の上に九輪が載り、上部は欠損。	市有形
第49国	国東市 366	恵良石塔群	文献31				3段の基礎の上に低い反花と塔身を置く。笠上露盤は2区画の格状間を配す。相輪は伏鉢・諸花・九輪・諸花・宝珠である。	
第50国	杵築市 260	財前家墓地石塔群 (国東塔1)	文献41	元応3年 (1321)			基礎3段で上段に格状間を2つ配す。反花上の塔身は壺形で首に納入孔を穿つ。笠上露盤に格状間と連子を2区画持つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火焰宝珠で構成。	国重文、 県史跡
第51国	杵築市 338	石丸宝塔(国東塔)	文献7	元徳2年 (1330)			基礎3段で上段に2区画の格状間を配す。反花上に塔身を置く。笠軒両端は強く反り、格状間2つを持つ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪で上部を欠失する。	国重文
第51国	杵築市 029	泉福寺石塔群	大分県立 歴史博物館 提供	観応3年 (1352)	249	凝灰岩	基礎4段の上に反花を配し、肩の丸い塔身を置く。笠上に露盤が低く立ち、諸花・九輪・諸花・宝珠が載る。	県有形
第51国	杵築市 045	小谷国東塔と石塔群	大分県立 歴史博物館 提供	応安5年 (1372)	239	凝灰岩	基礎3段の上に反花・諸花と塔身を置く。肩に納入孔を穿つ。笠軒両端は直線的に反る。低い露盤上に反花・諸花・九輪・諸花・宝珠が載る。	県有形
第52国	杵築市 051	重水国東塔	文献10	永和元年 (1375)			2段の基礎の上に反花と塔身を置く。首部に納入孔を穿つ。笠上露盤上に反花・諸花・九輪が載り、上部を欠失する。	市有形



中津市 205 古羅漢国東塔



中津市 234 今行鳥越石塔群

第35図 国東塔実測図1【中津】(1/20)

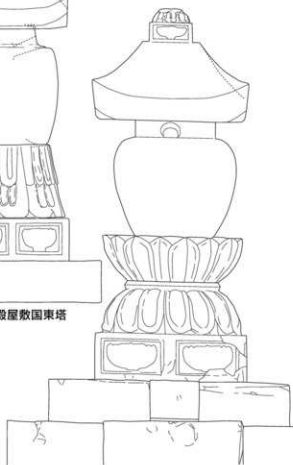
棟号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第52図	杵築市 346	龍蓮寺石塔群	文献10	永和2年 (1376)			基礎3段で上段に3区画の格状間を配す。反花・諸花上に丸みのある塔身を置く。首には納入孔を穿つ。笠上露盤は2区画の格状間を持つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火焰宝珠からなる。	
第52図	杵築市 035	阿弥陀堂石塔群 (鎌倉山宝塔)	大分県立歴史博物館提供		221	凝灰岩	基礎2段の上に反花と肩の丸い塔身を置く。首部に納入孔を穿つ。笠料は反り、格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火焰宝珠からなる。	
第53図	杵築市 096	中畑国東塔	大分県立歴史博物館提供			凝灰岩	基礎3段で上段に格状間を3つ配す。反花・諸花上の塔身は肩に納入孔を穿つ。笠は次第、露盤に2区画の格状間を配す。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火焰宝珠で構成。	市有形
第53図	杵築市 093	小房寺石塔群	大分県立歴史博物館提供		316	凝灰岩	反花・諸花上に塔身を置き、肩に納入孔を穿つ。笠は直線的で格状間を2つ持つ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪・火焰宝珠で構成。	市有形
第54図	杵築市 297	原屋宮八幡国東塔	実測 (松本)		234	凝灰岩	基礎3重で上段に2区画の格状間を配す。反花座の上に塔身が載る。笠上露盤に格状間を2つ持つ。相輪は反花・諸花・九輪で先端を欠く。	県有形
第54図	杵築市 007	向野浄土寺石塔群 (国東塔1)	大分県立歴史博物館提供		244	凝灰岩	基礎3段の上に圓頭形の台座と諸花を配し、上に肩の丸い塔身を置く。軸部上部に納入孔を穿つ。笠軒両端は強く反り、上部に露盤が立つ。相輪は反鉢・諸花・九輪・諸花・宝珠である。	
第54図	杵築市 007	向野浄土寺石塔群 (国東塔2)	大分県立歴史博物館提供		169	凝灰岩	国東塔1と同型式。相輪上部を欠失する。	
第54図	杵築市 007	向野浄土寺石塔群 (国東塔3)	大分県立歴史博物館提供		170	凝灰岩	2段の基礎の上に反花と塔身を置く。笠軒両端は強く反る。露盤は無地で、反鉢・諸花・九輪が載るが上部を欠失する。	



豊後高田市 265 塔ノ御堂石塔群
延慶2年(1309)



豊後高田市 095 殿屋敷国東塔
暦応2年(1339)



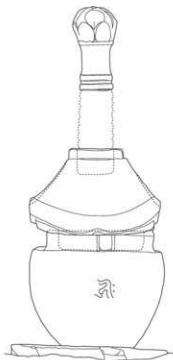
豊後高田市 419 金高藤地石塔群
承和元年(1375)



第36図 国東塔実測図2【豊後高田①】(1/20)



豊後高田市 422
熊野墓地石塔群 (国東塔 1)
大永 7 年 (1527)



豊後高田市 071 徳丸国東塔
天正 2 年 (1574)



豊後高田市 422
熊野墓地石塔群 (国東塔 2)
天正 15 年 (1587)



豊後高田市 183 葉師堂石塔群

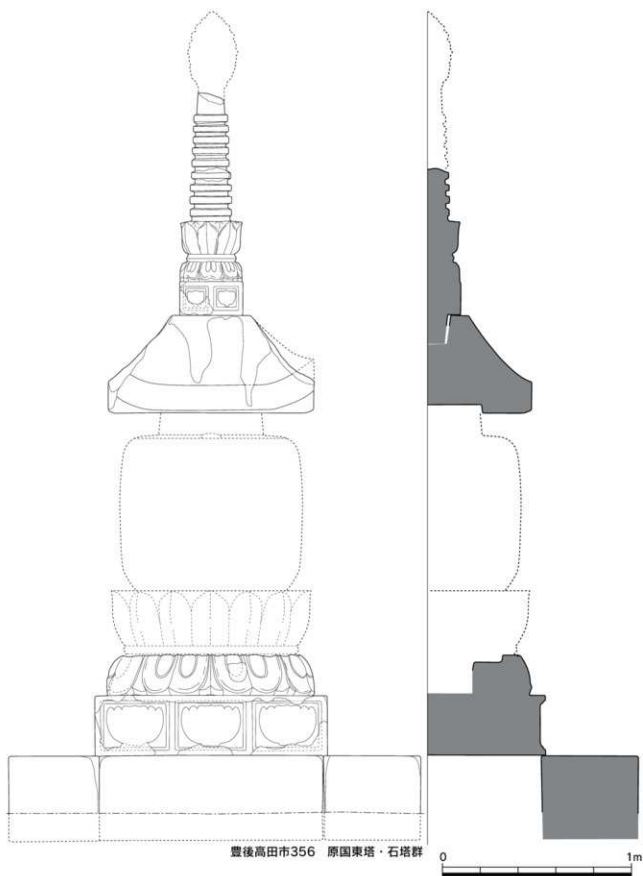


豊後高田市 154 靈仙寺石塔群

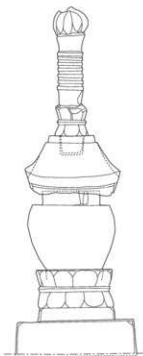


豊後高田市 249 東見庵国東塔

第37図 国東塔実測図3【豊後高田②】(1/20)



第38図 国東塔実測図4【豊後高田③】(1/20)



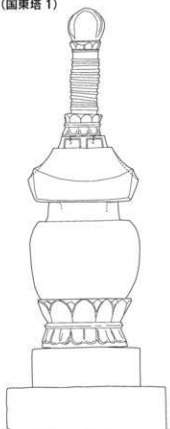
豊後高田市 134 中山家国東塔群
(国東塔 1)



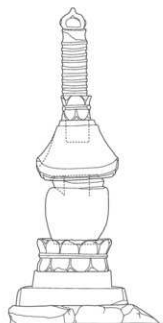
豊後高田市 134 中山家国東塔群
(国東塔 2)



豊後高田市 133 垣副家墓地石塔群
(国東塔 2)



豊後高田市 043 樋ノ口観音堂石塔群



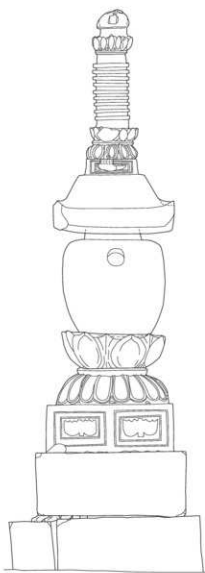
豊後高田市 165 志太波家国東塔



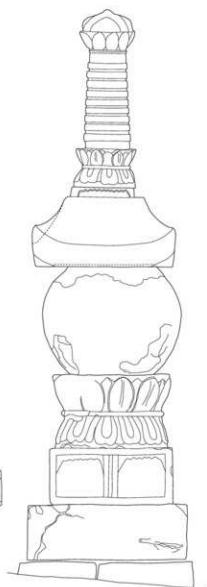
豊後高田市 037 八坂国東塔



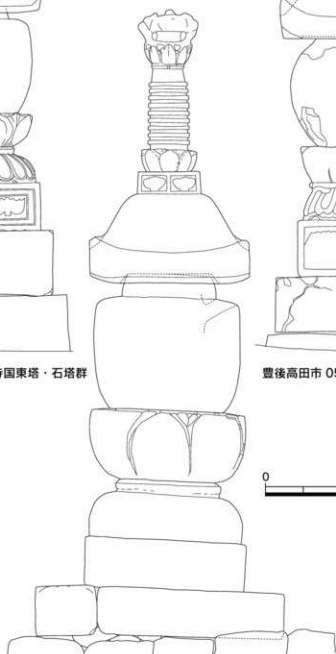
第39図 国東塔実測図5【豊後高田⑤】(1/20)



豊後高田市 258 知恩寺国東塔・石塔群



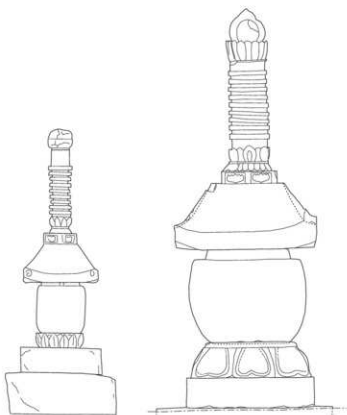
豊後高田市 055 中山観音堂石塔群



豊後高田市 365 富貴寺石遺物群

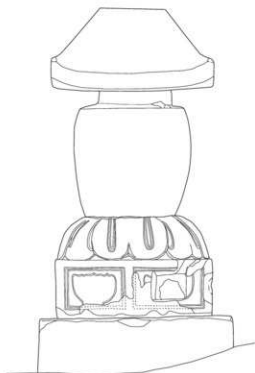


第40図 国東塔実測図6【豊後高田⑥】(1/20)



豊後高田市 365 富貴寺国東塔

豊後高田市 104 長谷寺跡石塔群

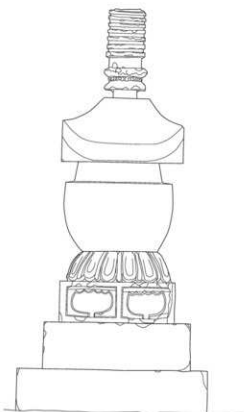


豊後高田市 245 妙覺寺石塔群

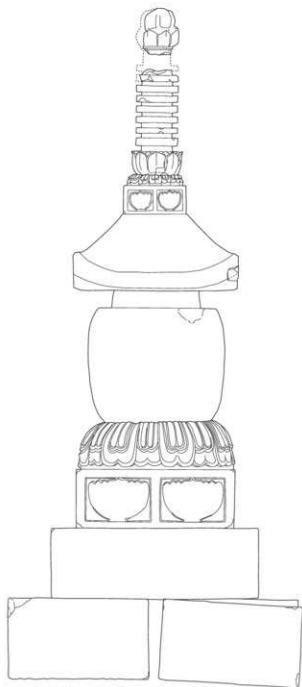


豊後高田市 155 実相院石塔群

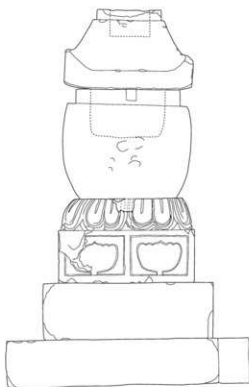
第41図 国東塔実測図7【豊後高田⑦】(1/20)



豊後高田市 285 花ノ木国東塔 (国東塔 1)

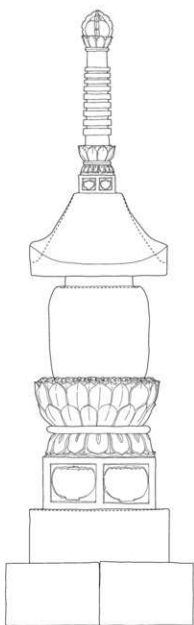


豊後高田市 323 長安寺六所権現国東塔

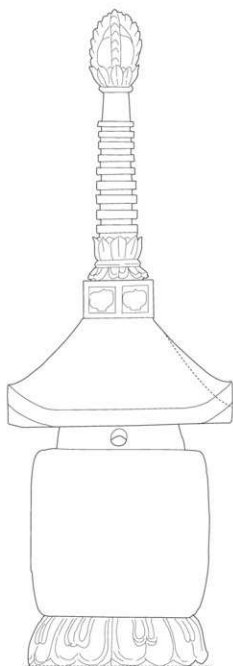


豊後高田市 285 花ノ木国東塔 (国東塔 2)



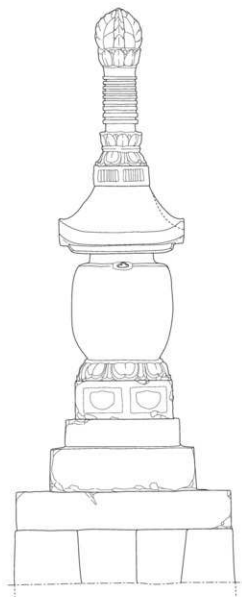


国東市 081 岩戸寺宝塔と石塔群
弘安6年(1283)

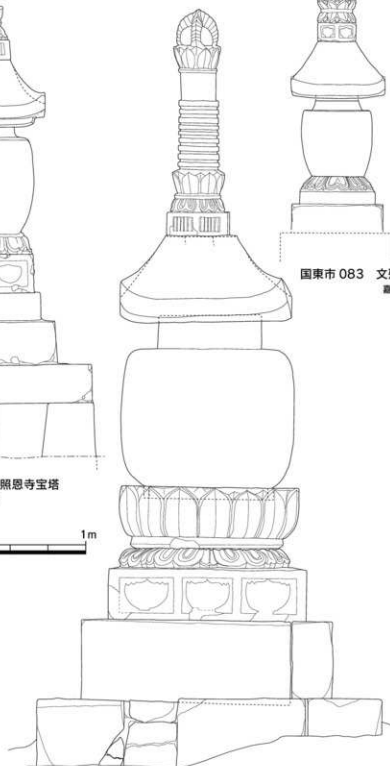


国東市 007 別宮社国東塔
正応3年(1290)

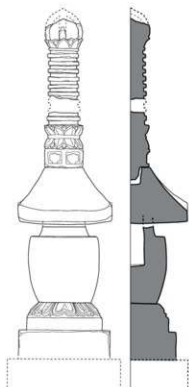
第43図 国東塔実測図9【国東①】(1/20)



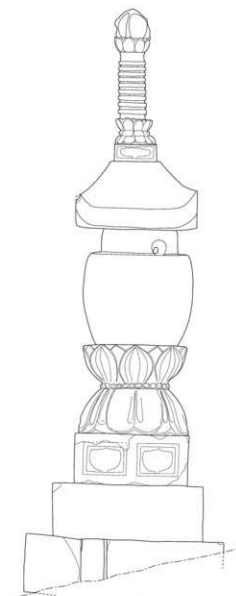
国東市 386 照恩寺宝塔
正和5年 (1316)



国東市 132 長木家宝塔・唱板碑と周辺石塔群 元亨元年 (1321)



国東市 083 文殊仙寺石塔群
嘉暦元年 (1326)



□ 北

大願主
 紀友房 同守房
 紀中子 同乙子
 右為慈父悲母所
 奉造立如件
 建武二年乙亥二月十二日
 各敬白

国東市 345 蓋ヶ迫石塔群
 建武2年(1335)

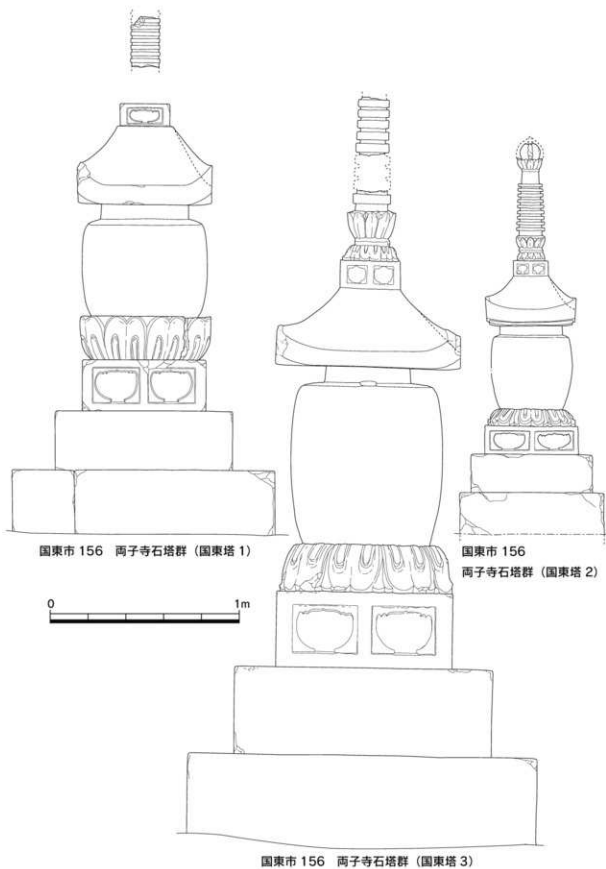


右志趣者為天
 下太平万民安
 寧当山繁昌所
 願成就乃至法
 界平等利益也
 建武三年八月二日
 造立者良法
 敬白

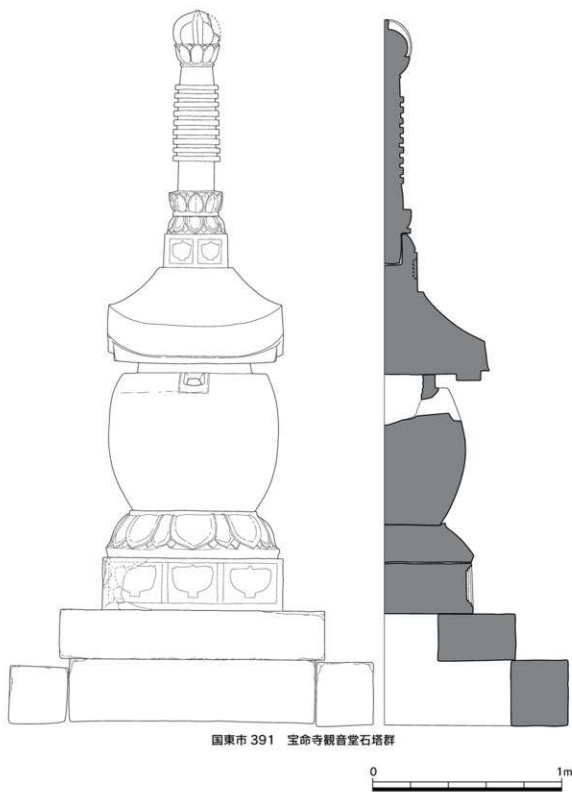
国東市 179 神宮寺国東塔と周辺石塔群
 建武3年(1336)



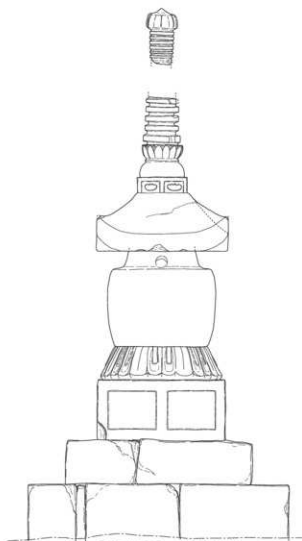
第45図 国東塔実測図11【国東③】(1/20)



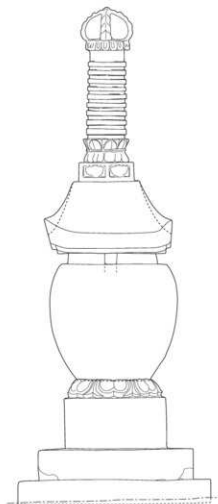
第46図 国東塔実測図12【国東④】(1/20)



第47図 国東塔実測図13【国東⑤】(1/20)



国東市 076 仁聞国東塔



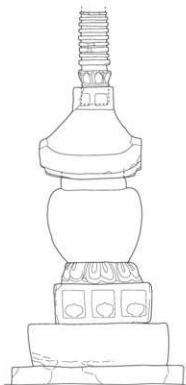
国東市 383 木野石塔群



国東市 134 成仏寺石塔群

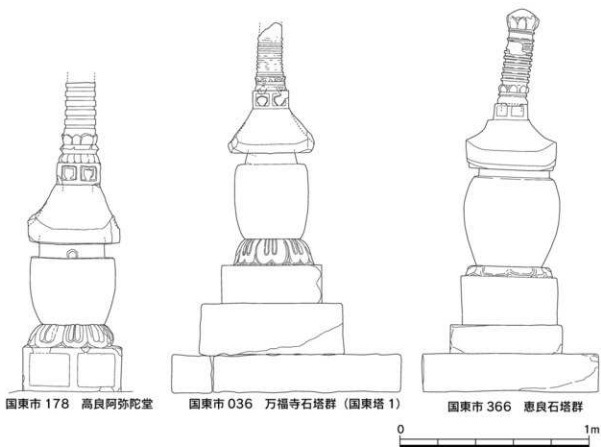


国東市 157 大吉堂国東塔



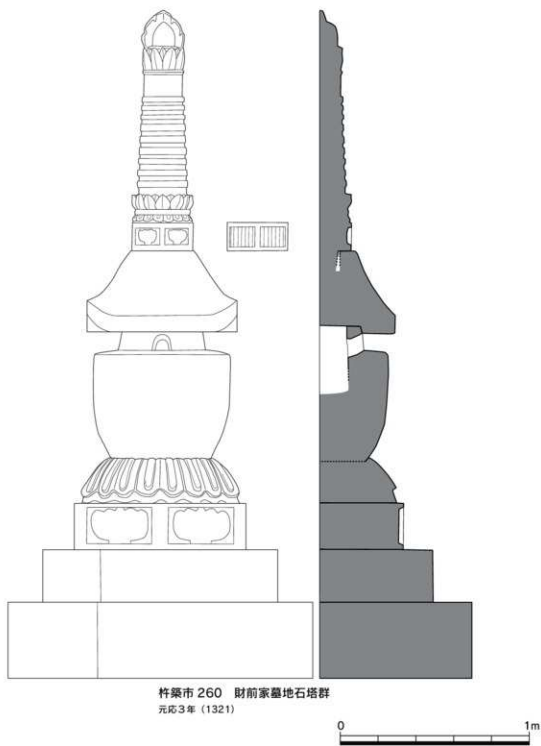
国東市 218
西福寺石塔群

第48図 国東塔実測図14【国東⑥】(1/20)

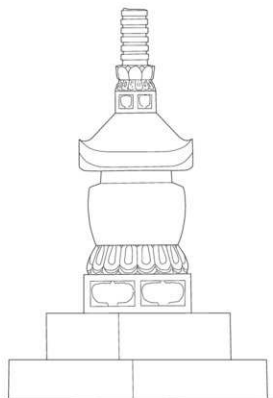


第49図 国東塔実測図15【国東⑦】(1/20)

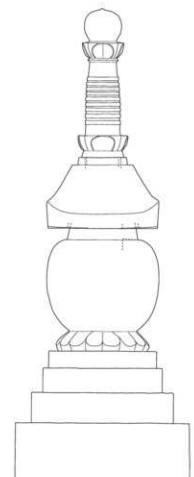
神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第55国	杵築市 260	財前家墓地石塔群(国東塔2)	実測 (横澤)		98.5	凝灰岩	中心国東塔の北列東端にある国東塔。基礎3重で上段に2区画の格状間を配す。反花座は平面が方形状を呈す。塔身3面に鳥居状の扉型を彫刻し、正面には二仏並座を表す。笠上露盤には2区画の格状間を配す。露盤上は宝珠が載る。	県史跡
第55国	日出町 035	願成就寺石塔群	文献41	応長元年 (1311)	350	安山岩	基礎3重で上段に3区画の格状間を配す。諸花上に丸みのある塔身を置く。笠軒は薄く、露盤には2区画の格状間を配す。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火輪宝珠からなる。	県有形
第55国	日出町 036	下川久保宝篋印塔・国東塔	文献10	永和4年 (1378)			基礎3段で上段に2区画の格状間を配す。反花・諸花上に丸い塔身を置く。首部は短く立ち、納入孔を穿つ。笠上には2区画の格状間を持つ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火輪宝珠からなる。	県有形
第56国	大分市 070	万寿寺国東塔と周辺石塔群	文献25				基礎3段で上段に2区画の格状間を配す。反花上に塔身を置き、肩に納入孔を穿つ。笠軒両端が反り、上に2区画の格状間をもつ露盤が立つ。相輪は反花・諸花・九輪・諸花・火輪宝珠で構成。他所からの搬入品。	
第56国	九重町 011	下辻異形国東塔	実測 (宮内)		138	安山岩	基礎は3重で上段には格状間を2つ配す。反花座の上に首のない球体の塔身が載る。塔身4面は扇形状に形を理めた中に仏像を彫る。笠は隅棟が強く反り、露盤が立つ。頂部は宝珠が載る。	県有形
第56国	九重町 005	宝八幡宮国東塔・板碑及び周辺石塔群	実測 (小林)		167	凝灰岩	基礎2重で上段に2区画の格状間を配す。反花上に首のない球体の塔身が載る。笠上露盤は無地で、反花・諸花・九輪・諸花・宝珠が載る。	県有形



第50図 国東塔実測図16【杵築①】(1/20)



杵築市 338 石丸宝塔 元徳2年 (1330)



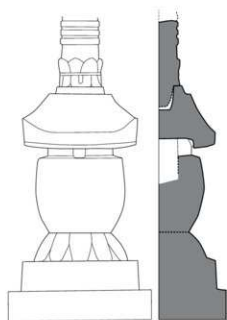
杵築市 029 泉福寺石塔群 観応3年 (1352)



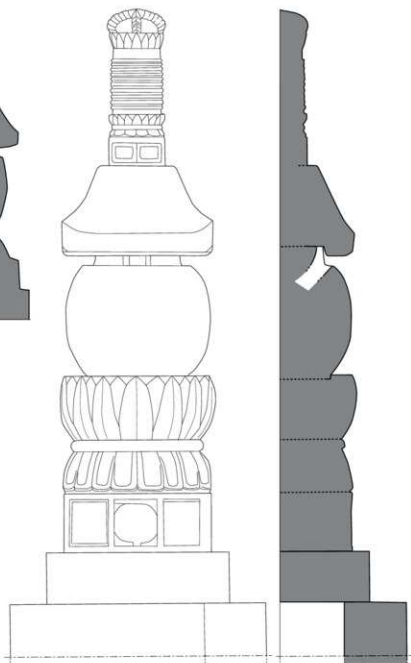
杵築市 045 小谷国東塔 応安5年 (1372)



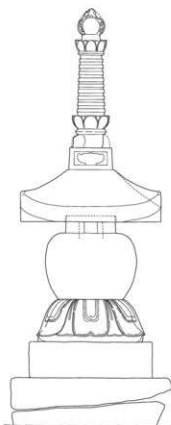
第51図 国東塔実測図17【杵築②】(1/20)



杵築市 051 重永国東塔
永和元年 (1375)



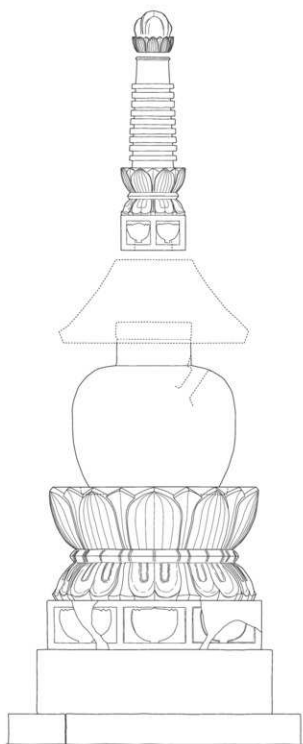
杵築市 346 龍蓮寺石塔群 永和2年 (1376)



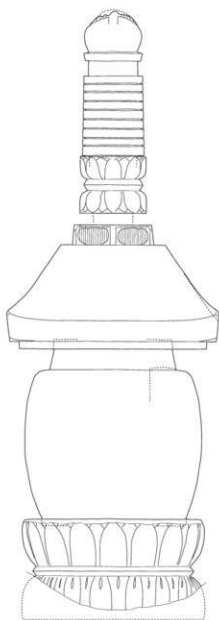
杵築市 035
阿弥陀堂石塔群 (鎌倉山宝塔)



第52図 国東塔実測図18【杵築③】(1/20)



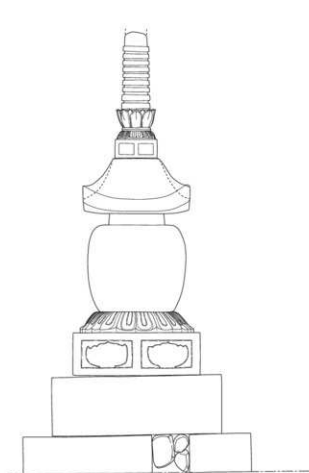
杵築市 096 中畑国東塔



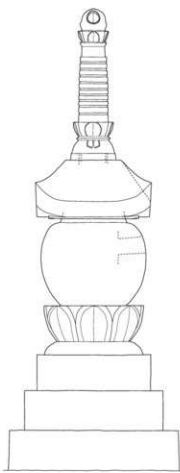
杵築市 093 小岳寺石塔群



第53図 国東塔実測図19【杵築④】(1/20)図



杵築市297 田原若宮八幡社国東塔



杵築市 007 向野浄土寺石塔群 (国東塔 1)



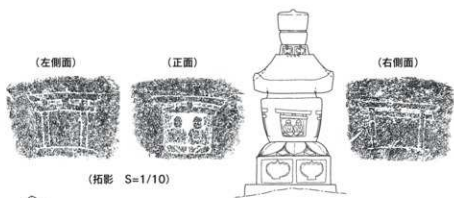
杵築市 007
向野浄土寺石塔群 (国東塔 2)



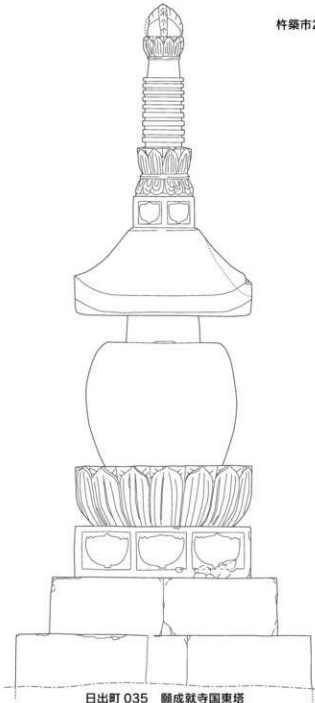
杵築市 007
向野浄土寺石塔群 (国東塔 3)



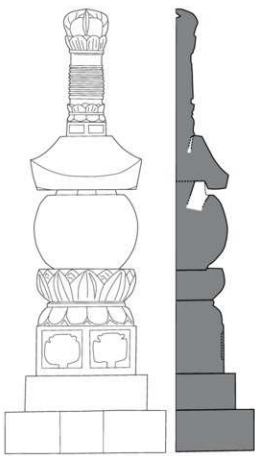
第54図 国東塔実測図20【杵築⑤】(1/20)



杵築市260 財前家器地国東塔

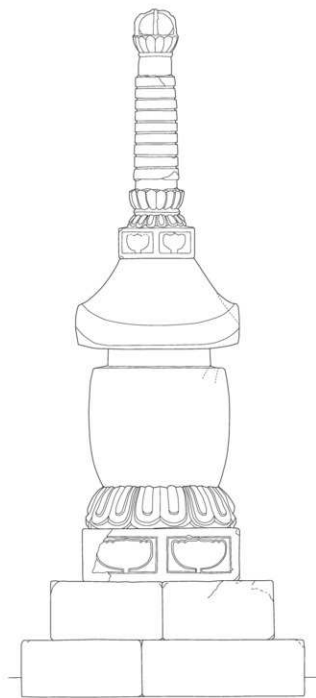


日出町 035 願成就寺国東塔
応長元年 (1311)



日出町 036 下川久保国東塔
永和4年 (1378)

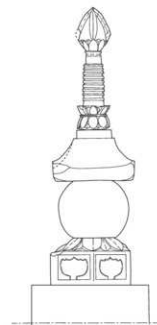
第55図 国東塔実測図21【杵築⑥・日出】(1/20)



大分市 070 万寿寺国東塔と周辺石塔群



九重町 011 下辻異形国東塔



九重町005 宝八幡宮国東塔



第56図 国東塔実測図22【大分・九重】(1/20)

(4) 磨崖仏

岩壁に刻まれた石仏で、国宝・特別史跡の白杵磨崖仏や重要文化財・国指定史跡熊野磨崖仏はその代表格といえる。第2章でも示したとおり県北部では安山岩、県中部～南部にかけては凝灰岩の露頭が多く見られ、こうした岩壁を利用して磨崖仏が作られている。豊後大野市緒方宮迫石仏（豊後大野市192・193）のように鮮やかな彩色が残るものもある。また、日田市片山磨崖仏（日田市026）のように、種子を大きく彫り出すものもある。掲載実測図は2点である。

採図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第57図	豊後大野市 192	方宮迫西石仏	文献55			凝灰岩	仏龕中央に釈迦如来、右に阿弥陀如来、左に薬師如来の各坐像を彫る。各像及び光背に彩色を施す。	国史跡
第57図	豊後大野市 193	緒方宮迫東石仏 (磨崖仏1)	文献55			凝灰岩	仏龕中央に如来坐像、脇に不動明王と武装した天部立像を配す。各像及び光背に彩色を施す。	国史跡
第58図	豊後大野市 193	緒方宮迫東石仏 (磨崖仏2)	文献55			凝灰岩	窟外にある仁王の立像。像の脇に2基の宝塔を隔刻する。	国史跡



豊後大野市 192 緒方宮迫西石仏



豊後大野市 193 緒方宮迫東石仏（磨崖仏1）



第57図 磨崖仏実測図1【豊後大野①】(1/60)



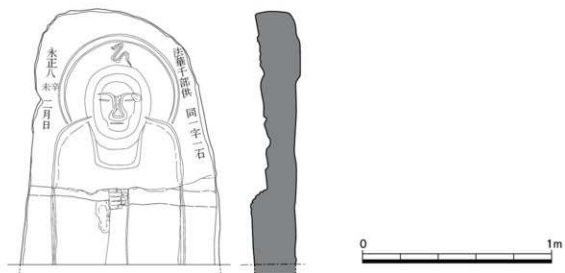
豊後大野市 193 緒方宮迫東石仏（磨崖仏 2）

第58図 磨崖仏実測図2【豊後大野②】(1/30)

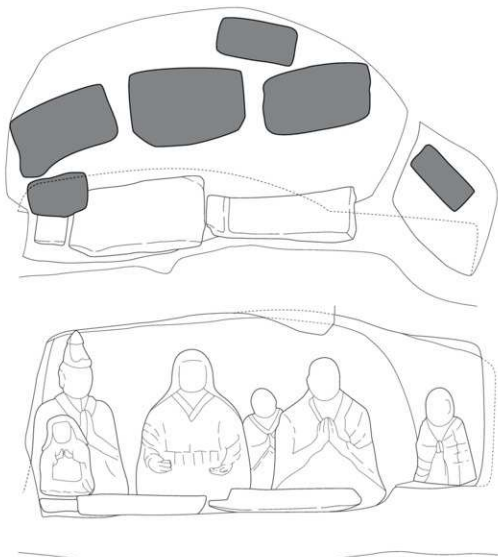
(5) 石仏

ここで石仏としたのは前項の磨崖仏とは異なり、丸彫りの石仏や人物像である。県内では県北～国東半島のエリアにかけて多く認められ、中でも先年重要文化財に指定された中津市羅漢寺の五百羅漢などの石仏をはじめ、羅漢寺周辺には多くの石仏が認められる。羅漢寺石仏は1360年頃から造立されたものと考えられる。また、国東半島を中心としたエリアでは石造十王像も多く分布する。こうした石仏はこれまであまり調査研究対象となっておらず、今後の調査研究の深化が期待される。掲載実測図は2点である。

採図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第59図	宇佐市 117	任聖寺地藏石仏と周辺石塔群	文獻8	永正8年(1511)	134	安山岩	安山岩板石を素材とし正面に比丘形像を半肉彫りする。光背は頭光のみで、頭上に種子を刻む。像の両側に銘文を刻む。	市有形
第59図	豊後高田市 187	からじん様と城前道跡石造物群	文獻18				「からじん様」と呼ばれる岩屋内に6体の石造人物像が安置。烏帽子を被る男性像1、女性像2、磨形像3体からなる。近世に他所から集められたものという。	



宇佐市 117 任聖寺地藏石仏と周辺石塔群
永正8年 (1511)



豊後高田市 187 がらじん様と城前遺跡石造物群

第59図 石仏実測図【宇佐・豊後高田】(1/20)

(6) 宝篋印塔

下から基礎・塔身・笠・相輪からなる石造物である(第60図)。平面形状は方形で、基礎上部及び笠の上下に段型を持ち、笠の四隅には隅飾突起を配する。名称は「宝篋印陀羅尼經」を納めたことに由来する。塔身には種子を彫るものが多い。基礎下部に反花を持つものもある。大野郡を中心とした地域には大工「玄正」(玄聖)及びその系譜に連なる石工により裝飾性に富む宝篋印塔が作られるなど、地域性も認められる。掲載実測図は64点である。



第60図 宝篋印塔解説図

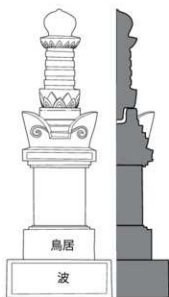
棟号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第61国	中津市 213	羅漢寺 不動取石塔群	文献59				基礎に波、基礎に鳥居を刻む。笠桁に方形文、隅飾に蓮手文を施す。相輪基部に請花、先端は請花と宝珠が付く。	
第61国	宇佐市 228	住吉社石塔群	文献10				基礎上に反花を持ち、格状間を持つ基礎が載る。塔身は円相と種子を刻む。笠の隅飾に月輪を彫り中に種子を密書する。相輪は欠損。	
第61国	豊後高田市 257	智恩寺院主墓所 石塔群	文献24	天文24年 (1555)	116	安山岩	基礎上に4段の段形。塔身に種子と銘文を刻む。笠の隅飾は無文で、蓋盤に蓮子を刻む。相輪基部は反花・請花で上部は欠失。	
第61国	豊後高田市 326	長安寺本堂脇石 塔群	文献25	天正12年 (1584)			2段基礎上に2区画の格状間を持つ基礎を置く。塔身には種子と「宗公」の銘を刻む。笠上蓋盤に格状間を配す。相輪は基部に反花と請花、先端は請花と宝珠が付く。	市有形
第61国	豊後高田市 145	道圓線刻板碑・ 磨崖五輪塔と石 塔群	文献29	慶長14年 (1605)			3段基礎上に格状間を2つ持つ基礎を置く。塔身に種子を刻む。隅飾に蓮手文を刻み、蓋盤に基礎と同じ格状間を持つ。相輪基部に反花と請花、先端は請花と宝珠が付く。	
第62国	豊後高田市 158	影平宝篋印塔	文献29				基礎に2区画の格状間を配す。隅飾は欠損。蓋盤に基礎と同じ格状間を持つ。相輪基部は反花と請花、先端は請花と火焔宝珠が付く。	
第62国	豊後高田市 113	梅松寺石塔群	文献29				基礎は無地。塔身に円相を持つ。笠上蓋盤に蓮子を刻む。相輪基部は反花と請花、先端は請花と火焔宝珠が付く。	市有形
第62国	豊後高田市 066	竹田津家墓地宝 篋印塔	文献29				基礎は無地。塔身に銘を刻む。隅飾は無文。相輪基部は伏鉢と請花、先端は請花と火焔宝珠が付く。	市有形
第62国	豊後高田市 185	清台寺石塔群	文献18				基礎は無地。塔身上部に納入孔を穿つ。隅飾は無文で大きい蓋盤に蓮子を刻む。相輪基部は反花と請花で、先端は欠損。	
第62国	豊後高田市 331	阿形家板碑と宝 篋印塔	文献25				2段の基礎上に無地の基礎が載る。塔身上部に納入孔を穿つ。笠上蓋盤に格状間を配す。相輪基部に反花と請花、先端は請花と宝珠。	
第63国	豊後高田市 402	大内若屋宝篋印 塔・五輪塔群	文献25				2段の基礎上に無地の基礎が載る。塔身上部に納入孔を穿つ。隅飾には蓮手文を施し、蓋盤に格状間を配す。相輪基部に反花と請花、先端は請花と宝珠が付く。	

神宮番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第63国	豊後高田市 338	櫻山神社宝篋印塔	文献25				2段の基壇上に基礎が載る。塔身上面に納穴を穿ち笠を置く。隅飾には蕨手文を墨書する。相輪基部に請花、先端は請花と火爐宝珠が付く。	
第63国	豊後高田市 108	中村地藏堂石塔群	文献29				基礎に格狭間を配す。隅飾は上部を欠損。相輪基部は反花と請花で、相輪先端は欠損。	市有形
第64国	国東市 150	玉林寺宝篋印塔と周辺石塔群	文献32				2段の基壇上に2区画の格狭間を持つ基礎が載る。隅飾は3弧。露盤には基礎と同じ格狭間を配す。相輪は基部に反花と請花、先端に請花と火爐宝珠が付く。	市有形
第64国	国東市 081	岩戸寺宝塔と石塔群	文献32				2段基壇上に格狭間を2つ持つ基礎が載る。隅飾は上部を欠損。露盤には基礎と同じ格狭間を配す。相輪基部は反花と請花で上部は欠損。	
第64国	国東市 113	迫坊宝篋印塔と周辺石塔群	文献32				2段基壇上に格狭間を2つ持つ基礎が載る。隅飾は縁取り線を刻む。露盤に格狭間を2つ配す。相輪は基部に反花と請花、先端に請花と火爐宝珠が付く。	市有形
第65国	国東市 118	米浦宝篋印塔	文献32				基壇3段に格狭間を2つ持つ基礎を置く。塔身に円相と種子を刻む。隅飾は3弧で蕨手文を施す。露盤の格狭間は基礎と同じ。相輪下に反花と請花、先端は請花・宝珠が付く。	県有形
第65国	国東市 223	桂徳寺石塔群	文献31				2段の基壇上面に穴を穿つ。基礎は格狭間を2つ配す。塔身は円相と種子を刻む。隅飾は3弧で蕨手文を施す。露盤には格狭間を2つ配す。相輪は基部に反花と請花、先端に請花と宝珠が付く。	市有形
第65国	国東市	成仏山神社宝篋印塔(1)	文献28				2段基壇上の基礎は格狭間を2つ持つ。塔身は円相と種子を刻む。隅飾に蕨手文を施す。相輪に反花と請花、先端に請花と火爐宝珠が付く。	
第66国	国東市 337	中ノ川観音堂石塔群	文献31				3段基壇上に格狭間を2つ持つ基礎を置く。塔身に種子を刻む。隅飾に縁取りを刻む。露盤に基礎と同じ格狭間を持つ。相輪基部に反花と請花、先端は請花と火爐宝珠が付く。	
第66国	国東市 085	朝日観音堂跡宝篋印塔	文献28		約350		2段基壇上に格狭間を2つの基礎を置く。隅飾は無文。露盤に2区画の種子を刻む。相輪基部は反花と請花、先端は請花と火爐宝珠が載る。	市有形
第66国	国東市 115	観音堂宝篋印塔	文献32		225		基礎に2区画の格狭間を配す。塔身上面に納穴を穿つ。隅飾に蕨手文を施す。露盤には種子を刻む。相輪基部は反花と請花、先端は低い請花と宝珠が付く。	
第67国	国東市 351	泉正寺宝篋印塔	文献31				2段基壇上に格狭間を2つ配す基礎を置く。塔身に円相を形する。露盤に格狭間2区画を配す。相輪は基部に反花と請花を置き、上部は欠損。	
第67国	国東市 216	蔵神社宝篋印塔	文献31		207		基壇上に格狭間を2つの基礎を置く。隅飾は欠損。露盤には格狭間を配す。相輪は基部に反花と請花、先端に請花と火爐宝珠が付く。	
第67国	国東市 170	護聖寺石塔群	文献31				2段基壇上に格狭間を持つ基礎を置く。塔身に仏像を形する。隅飾は上部を欠損。相輪基部に隅飾を配し、先端に請花と火爐宝珠が付く。	市有形
第67国	国東市 160	報恩寺石塔群(宝篋印塔1)	文献31				基礎は無文。隅飾は縁取りを施す。笠上露盤に格狭間を2つ持つ。相輪基部は反花と請花で、上部は欠損。	
第67国	国東市 160	報恩寺石塔群(宝篋印塔2)	文献31				基礎は無文。隅飾は上部を欠損。笠上露盤は無地で、相輪は欠損。	
第67国	国東市 374	實際寺石塔群	文献31				基壇3段で基礎は無地。隅飾にはハート形文を刻む。露盤に相輪を挿し、先端は請花と低い宝珠が付く。	
第68国	国東市 134	成仏寺石塔群	文献28				2段基壇上に2区画の格狭間を持つ基礎を置く。隅飾は上部を欠損。露盤には種子を刻む。相輪は欠損。	

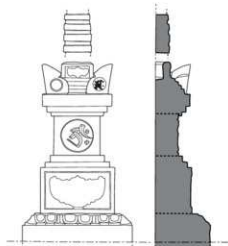
棟号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定	
第68回	国東市	127	大日堂石塔群	文献32			2段基壇上に2区画の格状間を持つ基礎を置く。塔身上部に納入孔を穿つ。隅飾に三日月形(月輪?)を嵌青。露盤に格状間を2つ配す。相輪基部は反花・語花で、先端は欠失。		
第68回	杵築市	050	下中尾宝篋印塔	大分県立歴史博物館提供	永徳3年(1383)	198	凝灰岩	基壇は2重。基礎格状間に銘文を刻む。塔身は二重方形内に円相と種子を刻む。隅飾は上部を欠損。相輪は基部に反花と語花。先端に語花と火焰宝珠が付く。	市有形
第68回	杵築市	178	雪江院石塔群	実測(小柳)	永禄12年(1569)	102	凝灰岩	伝奈多郡基供養塔。基壇下段と塔身に種子を刻む。隅飾は反り。腕手文を施す。相輪基部は欠失。先端に宝珠が付く。基壇・基礎・空側面に獣形や蓮華、流水状の文様を刻み、表飾に富む。	
第69回	杵築市	182	報恩寺石塔群	実測(小柳)	天正15年(1587)	145	凝灰岩	伝奈多郡基供養塔。基礎上に二重方形内に円相を彫る塔身が載る。空下段に語花を配し、隅飾には腕手文を施す。相輪基部は伏縁と語花。先端は語花と宝珠が付く。基壇及び基礎側面に獣形文を彫る。	
第69回	杵築市	039	下山の御堂石塔群	大分県立歴史博物館提供		192	凝灰岩	2重基壇上に無地の基礎が載る。塔身は二重方形内に円相を刻む。空下段に納入孔を穿つ。隅飾に腕手文を施す。相輪は基部に反花と語花。先端に語花と火焰宝珠が付く。	
第69回	杵築市	280	大内家墓地石塔群	実測(版本)		215	安山岩	基礎は2区画の格状間。塔身上部に納入孔を穿つ。空段形は下3段、上4段。空上露盤には基礎と同じ格状間を配す。相輪は反花・語花・九輪・語花・宝珠からなる。	市史跡
第69回	杵築市	175	奈多宮宝篋印塔	文献31			基壇・基礎は無地。笠は小さい隅飾が付く。相輪は先端に語花と火焰宝珠が付く。		
第70回	杵築市	196	西仲尾宝篋印塔/板碑	大分県立歴史博物館提供		185		基壇・基礎は無地。笠は小さい隅飾が付く。相輪は基部に隅飾を配し、先端に語花と宝珠が付く。	市有形
第70回	杵築市	153	小狭間虚空蔵石塔群	実測(小柳)		180	安山岩	2重基壇の上に格状間を持つ基礎を置く。塔身は方形区画内に円相を刻む。隅飾は外反・腕手文を施す。相輪基部に隅飾を配し、先端に語花と火焰宝珠が付く。	
第70回	杵築市	072	何松家墓地石塔群	実測(小柳)		105	凝灰岩	基礎上部に低い反花が付く。塔身は方形形り窪め内に円相を彫る。空下段は蓮弁を刻む語花となり、斬・隅飾刺先の文様を施す。上面に納を設け笠に飾し込む。露盤には蓮子を刻む。相輪は宝珠を欠失し、基部には隅飾を配すが欠損する。	
第70回	日出町	036	下川久保宝篋印塔・国東塔	文献10	康応2年(1390)	190		2重基壇に格状間を持つ基礎を置く。基礎下端に納入孔を穿つ。塔身は円相と種子を刻む。空の隅飾に月輪を施す。相輪基部に隅飾を配し、先端は語花と火焰宝珠が載る。	県有形
第70回	日出町	001	上川久保宝篋印塔	実測(小柳)		190	安山岩	2段の基壇上に格状間を持つ基礎を置く。塔身は二重方形内に円相を窪め黒書種子の痕跡が残る。上下に納を設け基礎と笠に差し込む。空の隅飾は無文。相輪は基部に隅飾を配し、先端は語花と宝珠が付く。	
第71回	山市	027	横原の宝篋印塔	実測(横澤)	応永16年(1409)	187	凝灰岩	基礎は3段。塔身は各面方形に彫り窪め葉形彫りの種子を配す。空の隅飾は無文。相輪は欠く。基部に語花、先端には語花と宝珠が付く。	市有形

神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第71回	日田市 018	山下不動様宝篋印塔	実測 (横澤)	文明8年 (1476)	102	凝灰岩	基礎は無地。塔身4面に種子を浅く彫る。隅飾突起には渦巻状の彫刻。笠上蓋盤には方形彫線による2区画の格状間を配す。相輪は伏花・請花・九輪・反花・宝珠からなる。	
第71回	日田市 048	元大波羅神社石塔群	実測 (横澤)		273	凝灰岩	基礎4重の上に格状間を配す基礎を置く。塔身4面に種子を細く刻み、上部に納入孔を穿つ。笠の隅飾に日輪を彫り窪め、周囲に基壇り痕が残る。相輪基部にも笠と同様の隅飾を配す。先端は請花・宝珠が付く。	市有形
第72回	玖珠町 032	宝篋印塔(坂口)	玖珠町 教育委員 会提供	応安7年 (1374)	157	凝灰岩	基礎3段、基礎には2区画の格状間を配す。塔身四面に種子を彫る。笠の隅飾突起は無文。相輪基部に隅飾を付す。九輪部はエンタス状に中位が膨らむ。連見笠に似るが塔身上部に納を持たない点が異なる。	県有形
第72回	大分市 106	常妙寺石塔群	実測 (横澤)	永徳2年 (1382)	264	凝灰岩	基礎2段で上段に格状間を配す。4面に銘文を刻む。塔身は4面に薬研彫りの種子を刻む。笠の隅飾は外に開き、弧線部に赤彩を施す。蓋盤には2区画の連子を刻む。相輪は反花・請花・九輪・請花・火焰宝珠で、上部請花基部に連珠文を施す。	
第73回	大分市 191	石合公民館下石塔群	実測 (宮内)		129	凝灰岩	基礎2段。塔身は4面に細線円相内に種子を小さく刻む。笠上蓋盤と相輪基部隅飾に細線の日輪を彫る。相輪は上部を欠失。	
第73回	竹田市 061	小高野の宝篋印塔と周辺石塔群	文献49			凝灰岩	基礎2重。基礎に格状間と陽刻の反花座を配す。塔身は円相と種子を刻む。笠の上部段形に閉花連を連子。蓋盤に格状間を配す。相輪は基部に反花と請花、先端に請花と火焰宝珠が付く。上部請花下に連珠文を施す。	市有形
第73回	竹田市	有添田遺跡宝篋印塔	平成 27年度 萩教委 発掘調査		167	凝灰岩	基礎2重。基礎に格状間と陽刻の反花座を配す。塔身は4面とも方形区画内に円相と種子を刻む。隅飾に廣字文を施し、間に閉花連を刻む。蓋盤は2区画の連子を刻む。相輪は欠失し後家合せの宝珠が載る。	
第74回	豊後大野市 215	大化宝篋印塔	実測 (小林)	文和2年 (1353)	163	凝灰岩	基礎は無地で上部に3段の段形が付く。塔身4面に種子を刻む。笠の隅飾は無地で小さい。相輪基部にも隅飾を配す。相輪各輪は洗線と区分する。先端に火焰宝珠が付く。	市有形
第74回	豊後大野市 069	大聖寺宝篋印塔	文献49	貞治5年 (1366)		凝灰岩	基礎に格状間と反花座を配す。塔身は方形内に円相と四隅に連弁状文を刻む。笠の隅飾間に山形文を連続させ、上段に連子。蓋盤に格状間を配す。相輪基部に反花と請花、先端に請花と火焰宝珠が付く。上部請花下に連珠文を施す。	県有形
第74回	豊後大野市 132	福生寺薬師堂境内宝篋印塔及び五輪塔	文献49	正平18年 (1363)		凝灰岩	基礎に格状間を配し、下に反花座が付く。塔身は欠失。笠の隅飾間に閉花連を刻み、段形上段に連子。蓋盤に格状間を配す。相輪は基部に反花と請花、先端基部に連珠を施し、請花・宝珠を欠失する。	市有形
第74回	豊後大野市 229	妙見宝篋印塔	文献49	正平23年 (1368)		凝灰岩	基礎に格状間を配し、下に反花座が付く。塔身は円相内に種子と、周囲に連弁を刻む。欠失。笠の隅飾間に閉花連を刻み、段形上部・蓋盤・相輪基部と九輪を欠く。先端は請花と火焰宝珠が付く。	市有形
第75回	豊後大野市 271	西岸寺宝篋印塔	文献49	建徳元年 (1371)		凝灰岩	基礎に格状間を配す。塔身は円相と種子を刻む。笠の隅飾間に閉花連。段形上に連子。蓋盤に格状間を配す。相輪基部は反花と請花、先端は請花と火焰宝珠で、基部に連珠文を施す。	県有形

神国番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第75国	豊後大野市 290	石造宝篋印塔(法皇庵宝篋印塔)及び石塔群	文献49	正平25年(1370)		凝灰岩	基礎に格状間と陽刻の反花座を配す。塔身は円相と種子を刻む。笠の隅飾間に開花蓮、段形上段に蓮子。露盤に格状間を配す。相輪基部は反花、請花。先端は請花と火焰宝珠で、基部に連珠文を施す。	県有形
第75国	豊後大野市 232	東平宝篋印塔	文献49	永和2年(1376)		凝灰岩	基礎に格状間と陽刻の反花座を配す。塔身は円相と小振り種子を刻む。笠の隅飾間に3連弁、段形上段に蓮子。露盤に格状間を配す。相輪は先端の請花と火焰宝珠以外を欠き、請花基部に連珠文を施す。	市有形
第75国	豊後大野市 233	西白寺石塔群	文献49	応永17年(1420)		凝灰岩	基礎下部に陰刻の反花座を配す。塔身は欠失。隅飾間に開花蓮、露盤に蓮子を刻む。相輪は欠失。	
第76国	豊後大野市 141	正福寺天文宝篋印塔及び石塔群	文献58	天文15年(1546)	255	凝灰岩	基礎に格状間を配し、下に請花を配す。塔身は円相と種子を刻む。笠の隅飾間に連続の山形文、段形上に蓮子。露盤に格状間を配す。相輪基部は反花と請花。先端は請花と火焰宝珠で、基部に連珠文を施す。	市有形
第76国	豊後大野市 296	明照院宝篋印塔及び石塔群	文献57	永禄10年(1567)	約170	凝灰岩	基礎に二重方形区画を配す。塔身は方形内に円相と種子を刻む。露盤に蓮子を配す。相輪基部に反花と請花。先端に請花と火焰宝珠が付き、上部請花下に連珠文を施す。	市有形
第76国	豊後大野市 031	常忠寺徳直塔(五輪塔)及び石造物	文献49			凝灰岩	基礎は無地。笠の隅飾間に開花蓮の退化文様を刻む。露盤には格状間を配す。相輪は欠失。	
第76国	豊後大野市 032	勝光寺石塔群	文献49			凝灰岩	基礎下部に線刻の反花を施す。塔身は方形区画に円相と種子を刻む。笠の隅飾間に開花蓮を刻む。露盤には2区画の蓮子を配す。	
第76国	臼杵市 053	宝篋印塔(日吉塔)	文献2		420	凝灰岩	基礎に2区画の格状間を配す。塔身正面は中空で、別材で蓋がされていたと思われる。隅飾は別石で野に置く。相輪基部は伏鉢・請花。先端は小さい宝珠が付く。	国重文・国特史
第77国	臼杵市 072	平野宝篋印塔	文献15			凝灰岩	基礎に格状間と線刻の反花座を持つ。塔身は方形区画に円相と種子を刻む。笠の隅飾は大きく、段形最上段に蓮子。露盤に格状間を配す。相輪は反花・請花・九輪・請花・宝珠で、上部請花基部に連珠文を施す。	市有形
第77国	津久見市 030	井無田石塔群	文献19				2段基壇上に格状間を持つ基礎を置く。塔身に種子を刻む。笠の隅飾は大きい。露盤に蓮子を2つ配す。	



中津市213 羅漢寺 不動坂石塔群



宇佐市228 住吉社石塔群



豊後高田市257
智恩寺院主龕所石塔群
天文24年(1555)



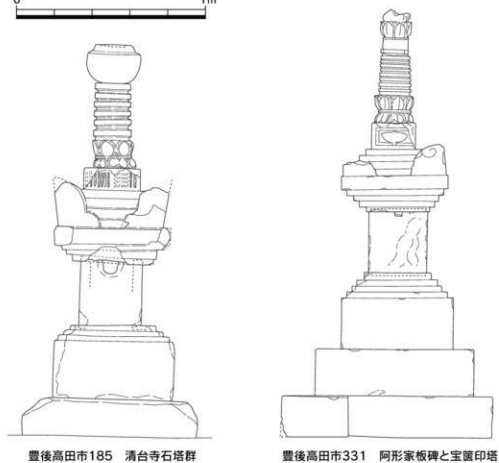
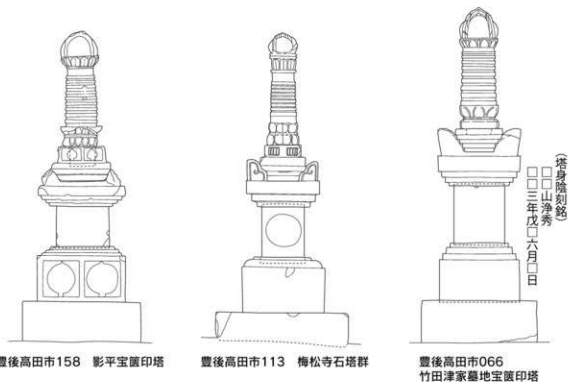
豊後高田市326 長安寺本堂脇石塔群
天正12年(1584)



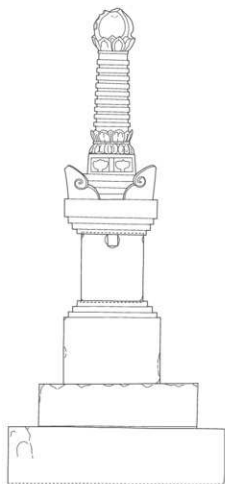
塔身陰刻銘
慶長十四月日敬白

豊後高田市145 道圓線刻板碑・
磨崖五輪塔と石塔群
慶長14年(1605)

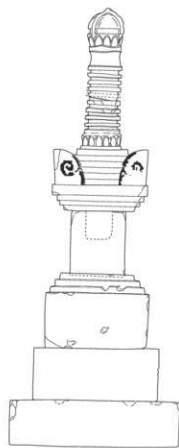
第61図 宝篋印塔実測図1【中津・宇佐・豊後高田①】(1/20)



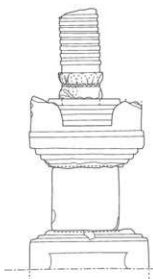
第62図 宝篋印塔実測図2【豊後高田②】(1/20)



豊後高田市402 大内岩屋宝篋印塔・五輪塔群



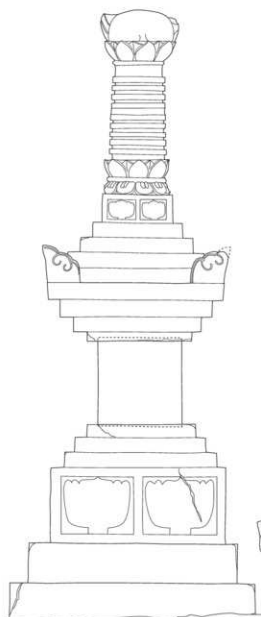
豊後高田市338 樺山神社宝篋印塔



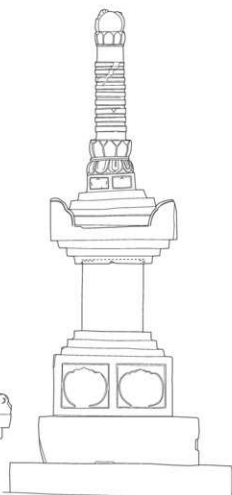
豊後高田市108 中村地藏堂石塔群



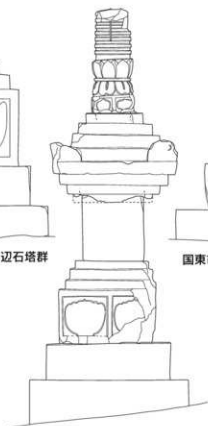
第63図 宝篋印塔実測図3【豊後高田③】(1/20)



国東市150 玉林寺宝篋印塔と周辺石塔群



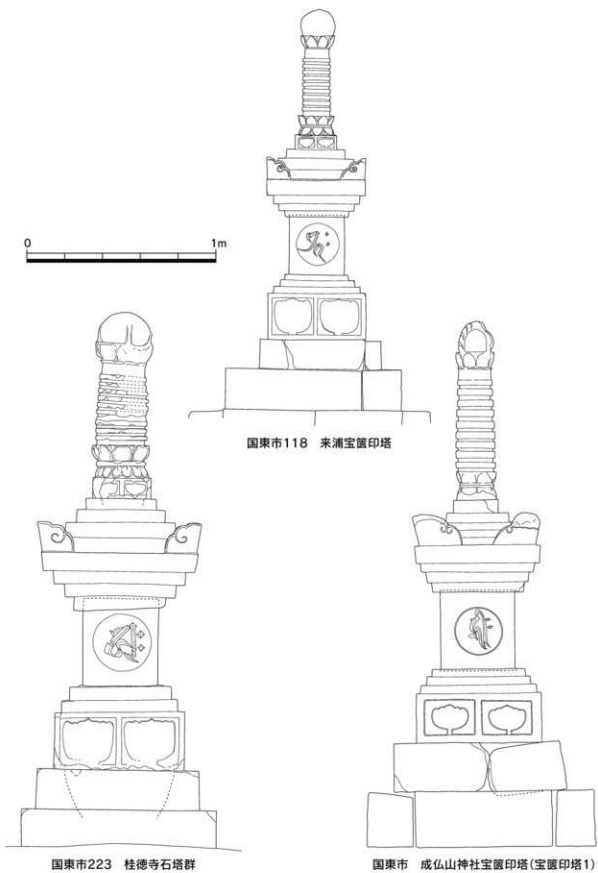
国東市113 迫坊宝篋印塔と周辺石塔群



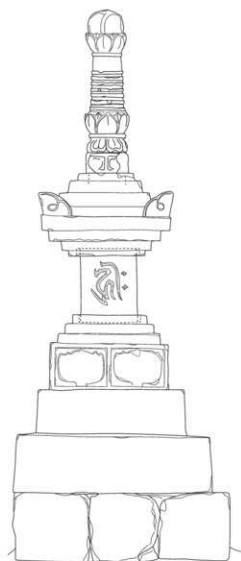
国東市081 岩戸寺宝塔と石塔群



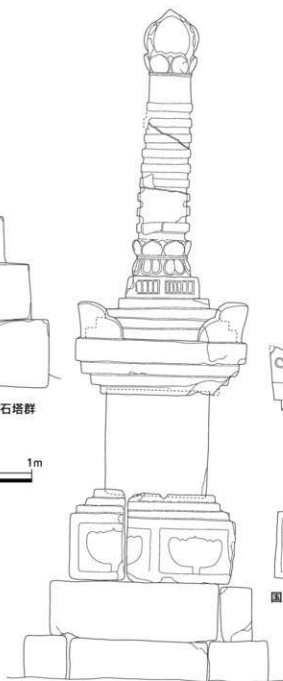
第64図 宝篋印塔実測図4【国東①】(1/20)



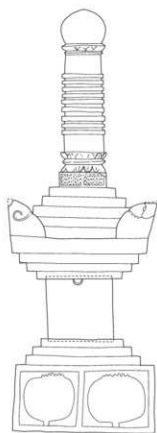
第65図 宝篋印塔実測図5【国東②】(1/20)



国東市337 中ノ川観音堂石塔群

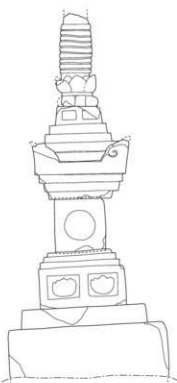


国東市085 朝日観音堂跡宝篋印塔

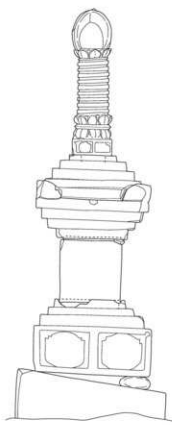


国東市115 観音堂宝篋印塔

第66図 宝篋印塔実測図6【国東③】(1/20)



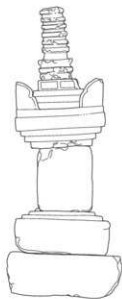
国東市351 泉正寺宝篋印塔



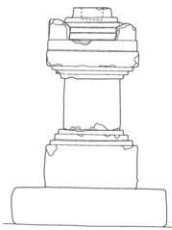
国東市216 歳神社宝篋印塔



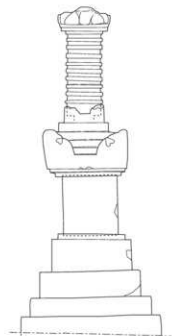
国東市170 護聖寺石塔群



国東市160 報恩寺石塔群
(宝篋印塔1)



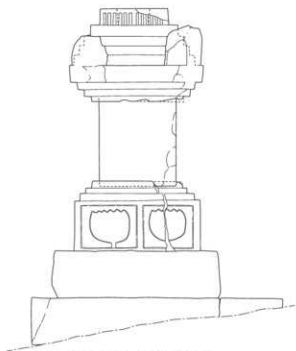
国東市160 報恩寺石塔群(宝篋印塔2)



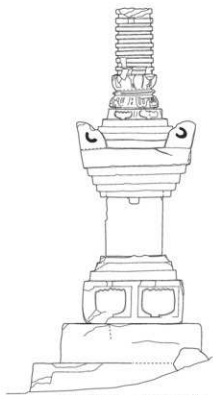
国東市374 實際寺石塔群



第67図 宝篋印塔実測図7【国東④】(1/20)



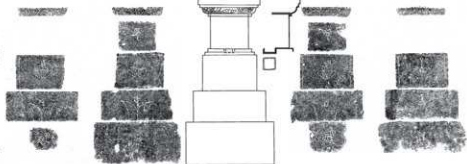
国東市134 成仏寺石塔群



国東市127 大日堂石塔群

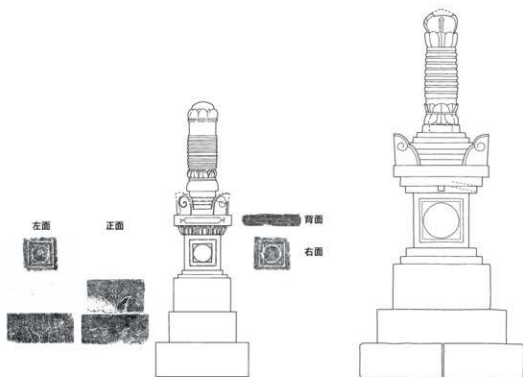


杵築市050 下中尾宝篋印塔
永徳3年(1383)



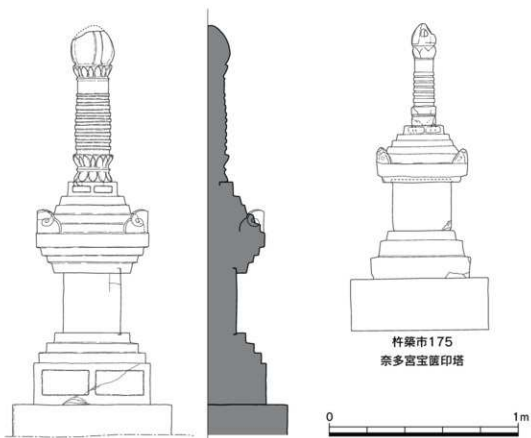
杵築市178 雪江院石塔群宝篋印塔
永祿12年(1569)





杵築市182 報恩寺石塔群
天正15年(1587)

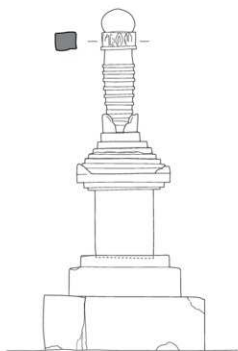
杵築市039
下山の御堂石塔群



杵築市 280 大内家墓地石塔群

杵築市175
奈多宮宝篋印塔

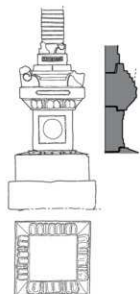
第69図 宝篋印塔実測図9【杵築②】(1/20)



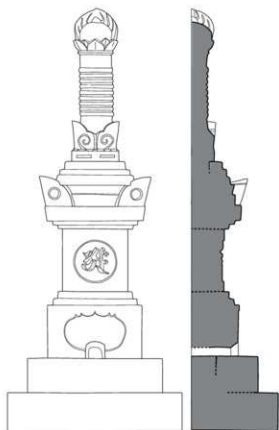
杵築市196 西仲尾宝篋印塔



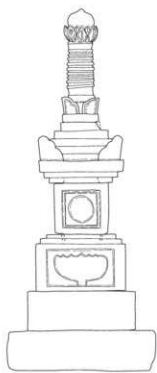
杵築市153
小扶間虚空藏宝篋印塔



杵築市 072 何松家墓地石塔群



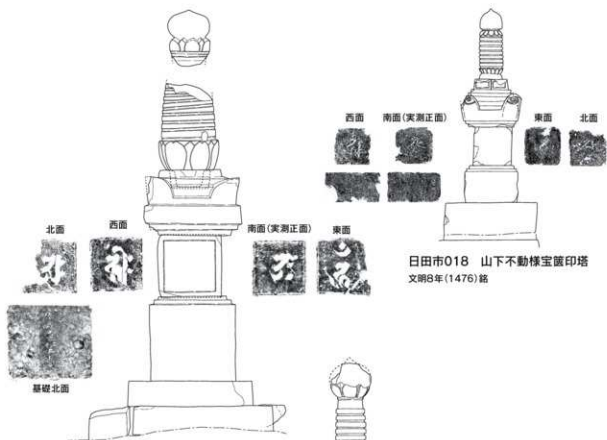
日出町 036
下川久保宝篋印塔・国東塔 康応2年(1390)



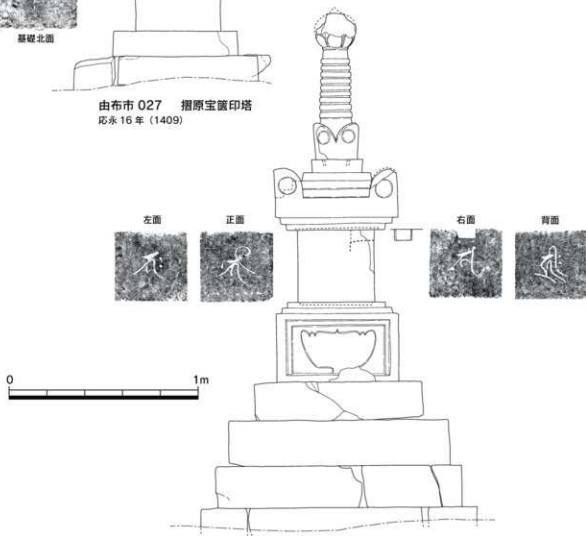
日出町001 上川久保宝篋印塔



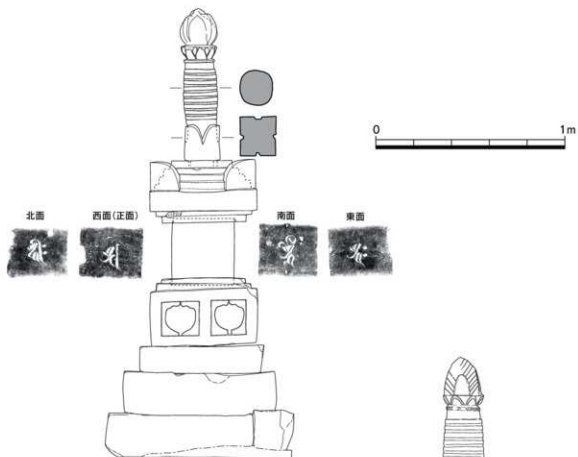
第70図 宝篋印塔実測図10【杵築③・日出】(1/20)



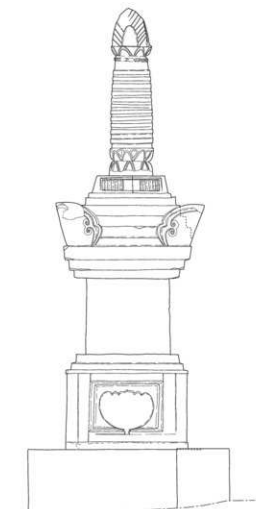
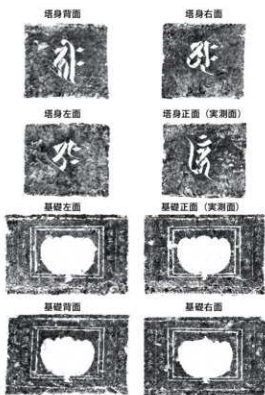
由布市 027 摺原宝篋印塔
応永16年(1409)



第71図 宝篋印塔実測図11【由布・日田】(1/20)

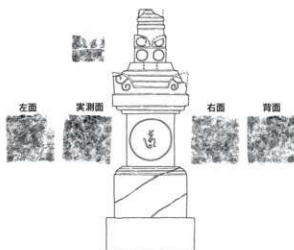


玖珠町032 宝篋印塔(坂口)
 応安7年結(1374)

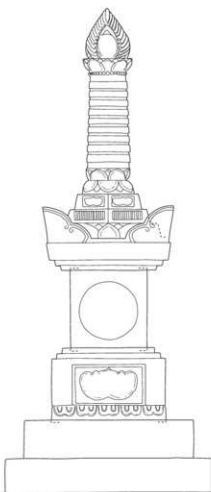


大分市 106 常妙寺石塔群
 永徳2年(1382)

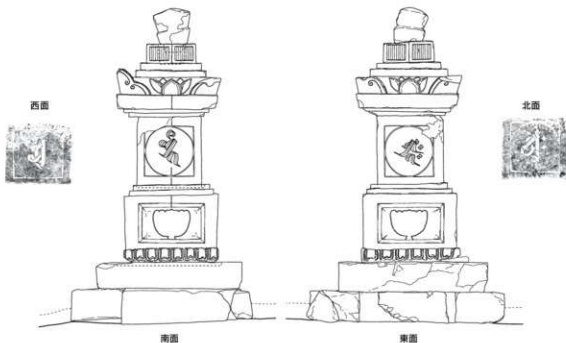
第72図 宝篋印塔実測図12【玖珠・大分①】(1/20)



大分市 191 石合公民館下石塔群

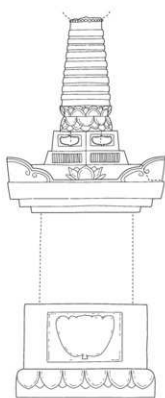
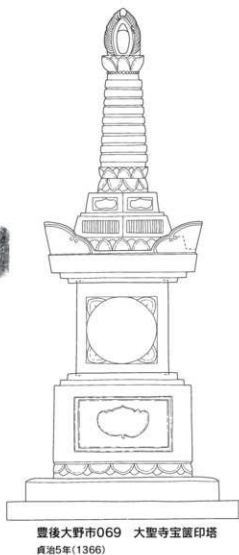
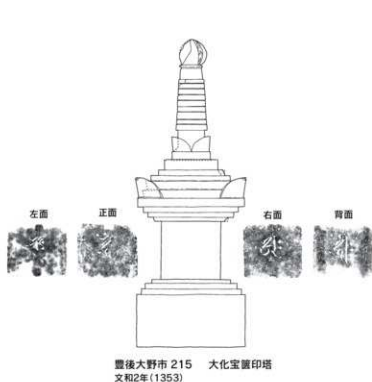


竹田市061 小高野の宝篋印塔と周辺石塔群



竹田市 有添田遺跡宝篋印塔

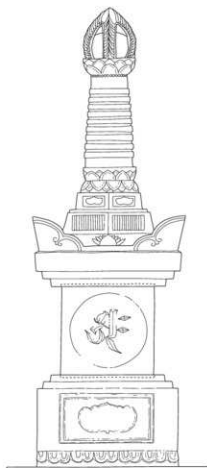
第73図 宝篋印塔実測図13 [大分②・竹田] (1/20)



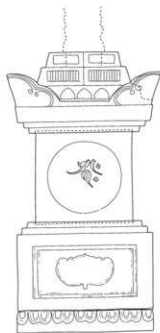
第74図 宝篋印塔実測図14【豊後大野①】(1/20)



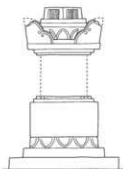
豊後大野市271 西岸寺宝篋印塔・
西岸寺石幢及び石塔群
建徳元年(1371)



豊後大野市290 石造宝篋印塔
(法泉庵宝篋印塔)及び石塔群
正平25年(1370)



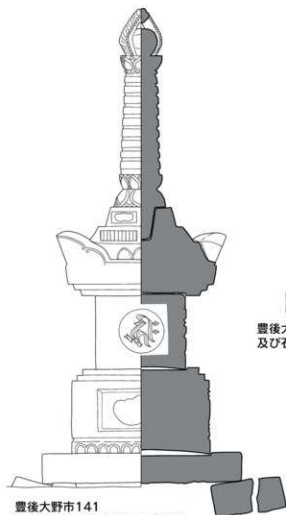
豊後大野市232 東平宝篋印塔
永和2年(1376)



豊後大野市233 西白寺石塔群
応永17年(1420)



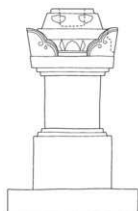
第75図 宝篋印塔実測図15【豊後大野②】(1/20)



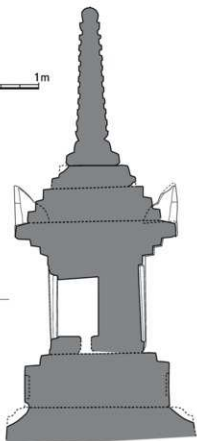
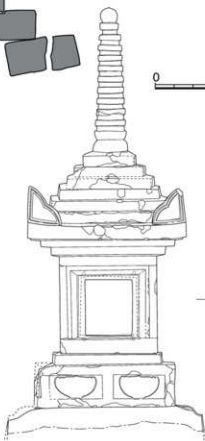
豊後大野市141
正福寺天文宝篋印塔及び石塔群
天文15年(1546)



豊後大野市296 明照印宝篋印塔
永禄10年(1567)



豊後大野市031 常忠寺能直塔
(五輪塔)及び石造物



臼杵市053 宝篋印塔(日吉塔)

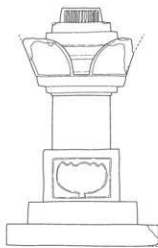


豊後大野市032 勝光寺石塔群

第76図 宝篋印塔実測図16【豊後大野③・臼杵①】(1/20、臼杵市053は1/40)



臼杵市072 平野宝篋印塔



津久見市030 井無田石塔群

第77図 宝篋印塔実測図17【臼杵②・津久見】(1/20)

(7) 板碑

頭部を山形に作り、その下に切込み、額部を持つ整形板碑（第78図）と、自然石を利用した自然石板碑がある。整形板碑は碑面に種子を彫り銘文を刻むものも多いが、種子や銘文ともに見られないものもある。頭部の切込みは2条を基本とするが、それを欠くものや額部を作り出さないものもある。大分県の板碑の多くは整形板碑であり、図化されたもののほとんどが整形板碑であり、自然石板碑の実測図はほとんどない。そのため、図版ではまず整形板碑を地域ごとにまとめ、最後に自然石板碑を掲載した。掲載実測図は165点である。



第78図 板碑解説図

神国番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第79図	中津市 188	尾闕板碑	文献47	康永元年 (1342)		安山岩	整形板碑で頭頂部を欠損。頭部下に2条切込を入れ、額部を突出する。碑面上部に種子を刻む。	市有形
第79図	中津市 154	北谷板碑・石塔群 (板碑1)	文献42				頭部が三角形を呈すが全体的に丸みをもつ。頭部下に2条切込を入れ、額部は低く突出する。碑面に種子と銘文を墨書する。	
第79図	中津市 154	北谷板碑・石塔群 (板碑2)	文献42				整形板碑で頭部は三角形を作る。頭部下に2条切込を入れ額部は低く突出する。額部から碑面にかけて種子と銘文を墨書する。	
第79図	宇佐市	地藏院址板碑	文献47	嘉暦2年 (1327)		凝灰岩	上部を欠失する。碑面両面に葉研形りの種子を大きく刻む。	
第79図	宇佐市 298	佐田社板碑	文献47	正慶元年 (1332)		安山岩	整形板碑で頭部下に1条の切込を入れ、額部は突出する。頭部下に葉研形りの種子を大きく刻む。基部は前方に張り出す。	県有形
第79図	宇佐市 291	大年社板碑群 (板碑1)	文献47	建武元年 (1334)		凝灰岩	整形板碑で頭部は三角形に作り、横はやや反る。頭部下に2条切込を入れ、額部は突出する。頭部下に種子を大きく彫る。	県有形
第79図	宇佐市 035	善光寺板碑と周辺石塔群	文献47	建武4年 (1337)		安山岩	整形板碑で頭部は三角形で先尖り。頭部下に2条切込を入れ、額部は突出する。頭部下に種子を大きく彫る。基部は前に張り出す。	県有形
第79図	宇佐市 291	大年社板碑群 (板碑2)	文献47	暦応4年 (1341)		凝灰岩	板碑1に形状は似るが、基部の張り出しは見られない。	県有形
第80図	宇佐市 197	妙楽寺板碑と周辺石塔群 (板碑1)	文献47	貞和2年 (1346)		安山岩	方形台座上に立つ整形板碑。頭部は三角形で先尖り。頭部下に2条の切込を入れ、額部は突出する。碑面に葉研形りの種子を大きく刻む。基部は前に張り出す。	県有形
第80図	宇佐市 197	妙楽寺板碑と周辺石塔群 (板碑2)	文献47	貞和2年 (1346)		安山岩	板碑1と同型式。頭部を欠損する。	県有形
第80図	宇佐市 203	庄部観音堂板碑 (板碑1)	文献47	応安6年 (1373)		安山岩	整形板碑で三角形の頭部先端を欠く。頭部下に2条切込を入れ額部を突出する。基部は前に張り出す。	市有形
第80図	宇佐市 203	庄部観音堂板碑 (板碑2)	文献47	永徳3年 (1383)		安山岩	板碑1と同形だがそれより一回り小さい。	市有形

神国番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年誌	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第80国	宇佐市 246	阿弥陀堂石塔群	文献47	応永35年(1428)		安山岩	上部を欠失。碑身は方形台座に差し込む。碑面基部は前に張り出す。	
第80国	宇佐市 288	御許山石塔群	文献47	明応4年(1495)			頭部が台形状を呈し、門相内に種子と、碑面を方形に彫り窪めた中に5つの門相と種子を刻む。	
第81国	宇佐市	大塚集落墓地板碑(板碑1)	文献47	永禄10年(1567)		安山岩	碑身は厚手。碑面部を削り込んで頸部と基部を突出させる。碑面には地蔵を彫刻する。頭部は三角形。	
第81国	宇佐市 215	観音寺石塔群	文献47	天正3年(1575)		安山岩	小型の板碑。頭部下に2条の細線を施し、碑面は方形彫り窪め内に地蔵を彫る。	
第81国	宇佐市	大塚集落墓地板碑(板碑2)	文献47	天正7年(1579)		安山岩	形状は板碑1に似るが頸部が狭く、碑面に地蔵の彫刻を持たない。頭部はやや平坦となる。	
第81国	宇佐市 117	任聖寺地蔵石仏と周辺石塔群	文献47	慶長6年(1601)		安山岩	頭部は三角形。碑面は方形に彫り窪め地蔵像を彫る。基部に2条の細線を施す。	
第81国	宇佐市 169	真上家墓地板碑群	文献47	慶長13年(1608)		安山岩	2段の基礎の上に立つ。頭部は三角形で月輪を施す。碑面は方形に彫り窪め種子を刻む。	
第81国	宇佐市	高野家墓地板碑	文献47	元和2年(1616)		安山岩	2段の基礎の上に立つ。頭部は三角形で頸部に月輪を施す。碑面は方形に彫り窪め門相と種子を刻む。	
第81国	宇佐市 032	成門寺石塔群	文献47	元和4年(1618)		安山岩	整形板碑で頭部は三角形。1条切込下に頸部が突出する。頭部下に種子を小さく刻む。基部は張出す。	
第81国	宇佐市 165	到津家墓地板碑	文献47	元和7年(1621)		安山岩	頭部は三角形で碑面は方形に彫り窪め、中に銘文を刻む。	
第81国	宇佐市 055	吉武家墓地前板碑	文献22			安山岩	整形板碑で基部を欠損。頭部は三角形に尖り、種はやや反る。頭部下に2条の切込みを入れ、頸部は大きく突出する。頭部下に葉研彫りの種子を大きく刻む。	
第82国	豊後高田市 344	庵ノ迫板碑	文献25	正中2年(1325)		安山岩	一石の連碑。頭部は三角形で2条切込下に突出する頸部を持つ。頸部と碑面上部に種子を墨書する。	県有形
第82国	豊後高田市 362	其ノ田板碑(板碑1)	文献16	建武元年(1334)	242	安山岩	整形板碑で碑身はやや反る。頭部は三角形で2条切込下に突出する頸部を持つ。碑面に種子2字を大きく刻む。	県有形
第82国	豊後高田市 362	其ノ田板碑(板碑2)	文献16	建武元年(1334)	195	安山岩	整形板碑で頭部は内反の三角形。2条切込下に突出する頸部を持つ。碑面に種子3字を刻む。基部は横が付き台石に挿入する。	県有形
第82国	豊後高田市 369	陽平野園板碑	文献48	建武2年(1335)		安山岩	整形板碑で頭部は内反の三角形。2条切込と頸部を持ち、碑面に種子を刻む。基部は突出する。	
第83国	豊後高田市 403	梅遊寺板碑と周辺石塔群(板碑1)	文献25	建武元年(1334)		安山岩	整形板碑。頭部は三角に尖り、下端に幅広い2条切込と頸部を配す。碑面に葉研彫の種子を大きく刻む。	県有形
第83国	豊後高田市 365	富貴寺石造物群	文献48	延文6年(1361)		安山岩	整形板碑で頭部を欠損。切込はなく突出する頸部を持つ。頭下に種子を刻む。基部は低く突出する。	国史跡、 県有形
第83国	豊後高田市 403	梅遊寺板碑と周辺石塔群(板碑2)	文献25	応永21年(1414)		安山岩	幅広い碑面をもつ整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。碑面に十三仏の種子を刻む。	県有形
第83国	豊後高田市 419	金高墓地石塔群	文献48	文明9年(1477)		凝灰岩	小型の板碑。頭部は三角形で割付線を彫る。2条細線下に頸部が低く突出する。基部は横かに張り出す。	

神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第83回	豊後高田市 243	寺ノ上殿草板碑群(板碑1)	文献48	天文14年 (1545)		安山岩	整形板碑で頭部は内反の三角形。2条切込下に突出する頸部を持つ。基部は高く張り出す。	市有形
第83回	豊後高田市 118	小門家地蔵板碑	文献48	天文18年 (1549)		安山岩	整形板碑で頭部は三角形。頸部に月輪を彫り窪め種子を彫刻する。碑面は舟形に彫り窪めた中に地蔵を彫刻する。	市有形
第84回	豊後高田市 243	寺ノ上殿草板碑群(板碑2)	文献48	天文19年 (1550)		安山岩	整形板碑で頭部は高く突出。2条切込下に突出する頸部を配す。碑面は方形区画内に種子と銘文を刻む。基部は張り出し、段状に1段削り込む。	市有形
第84回	豊後高田市 243	寺ノ上殿草板碑群(板碑3)	文献48	天文21年 (1552)		安山岩	整形板碑で頭部は三角形。頸部下端は連弧状に削り込む。碑面には2つの方形区画内に銘文を刻む。	市有形
第84回	豊後高田市 389	安養寺石塔群	文献48	永祿10年 (1567)		安山岩	整形板碑だが背面は自然面を残す。碑面に五輪塔を彫刻し、各輪に種子を小さく彫る。	
第84回	豊後高田市 243	寺ノ上殿草板碑群(板碑4)	文献48	天正6年 (1578)		安山岩	基礎の上に立つ整形板碑。頭部は三角形で1対の翼手状細線を施す。頸部上端に1条細線を持つ。碑面は方形に彫り窪め種子と銘文を刻む。	市有形
第84回	豊後高田市 278	地持庵石塔群	文献25	天正6年 (1578)		安山岩	厚みのある石材を利用して、頭部は三角形に作り基部に2条の切込を入れる。頸部は突出し、その下に碑面部分を方形に彫りめる。碑面には小さく銘文を刻む。	
第84回	豊後高田市 391	大応寺石塔群	文献48	天正15年 (1587)		安山岩	板状の石材で頭部は三角形に作る。碑面には五輪塔を浮彫りする。	
第85回	豊後高田市 319	長安寺オト楯板碑群(板碑1)	文献48	慶長15年 (1610)		安山岩	整形板碑で頭部は低い三角形。頸部の突出は小さく切込はない。頸部下に種子を刻む。	
第85回	豊後高田市 319	長安寺オト楯板碑群(板碑2)	文献48	慶長15年 (1610)		安山岩	板碑と同型式。	
第85回	豊後高田市 319	長安寺オト楯板碑群(板碑3)	文献48	慶長15年 (1610)		安山岩	上部を欠失する。碑面に蓮華座に載る板碑を彫刻する。	
第85回	豊後高田市 257	智恩寺院主墓所石塔群(板碑1)	文献24	元和8年 (1622)	105	安山岩	方形基礎の上に立つ。碑身は方柱状で頭部は三角形。	
第85回	豊後高田市 257	智恩寺院主墓所石塔群(板碑2)	文献24		96	安山岩	台座の上に立つ整形板碑。頭部は三角形で下に低く突出する頸部を配す。基部は前に少し突出する。	
第85回	豊後高田市 257	智恩寺院主墓所石塔群(板碑3)	文献24		131.5	安山岩	頭部を三角形に整形するが他は自然石。上部に銘文を刻む。	
第85回	豊後高田市 331	阿形家板碑と宝篋印塔	文献25				基礎の上に碑を挿し込む。碑身は前に反り、頭部は三角形で2条の切込を入れ、頸部は大きく突出する。頸部下に大きくキリークの種子を刻み、その下に2字の種子を彫る。	
第85回	豊後高田市 102	川原寺板碑	文献29				整形板碑で碑身は反る。三角形の頭部下に2条切込と頸部を持つ。	市有形
第86回	豊後高田市 101	施恩寺石造物群	文献29				整形板碑で碑身上部が反る。頭部は低い三角形で、下に2条の切込を持つ。頸部下に墨書種子2字あり。	
第86回	豊後高田市 155	実相院石塔群	文献29				整形板碑で頭部は小さい三角形。2条切込下に突出する頸部を持つ。基部はわずかに張り出す。	
第86回	豊後高田市 186	城前フチ石塔群(板碑1)	文献18				整形板碑で頭部は三角形。2条切込の下に突出する頸部を持つ。基部は前に張り出す。	
第86回	豊後高田市 169	山神社板碑	文献29				整形板碑で頭部は丸みを持つ。頸部は突出し、切込は見られない。基部は前に張り出す。	

棟号 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第86国	豊後高田市	小路遺跡出土 板碑	文献37		71.2	安山岩	頭部は丸みをもつ、頸部は突出し、正面上部に2条の切込を入れる。	
第86国	豊後高田市 407	真木大堂古代文化 公園内石塔群	文献27				整形板碑で頭部は丸みを持つ。幅広の2条切込下に頸部が突出する。	
第86国	豊後高田市 186	城前フチ石塔群 (板碑2)	文献18				一石形成の六連碑。三角頭部下に2条の切込を入れ、頸部は突出する。碑面上部に種子を墨書する。	
第86国	豊後高田市 186	前フチ石塔群 (板碑3)	文献18				一石形成の三連碑。三角頭部下に2条の切込を入れ、頸部は突出する。碑面上部に種子を墨書する。	
第87国	国東市 170	護聖寺石塔群 (板碑1)	文献31	正応4年 (1291)		安山岩	整形板碑で碑面と頸部から上を別材で作る。頸部は大きく突出し、上に2条の切込を入れる。碑面に阿弥陀三尊の種子を大きく刻む。	県有形
第87国	国東市 264	川原板碑と周辺 石塔群(板碑1)	文献32	文保3年 (1319)		安山岩	整形板碑で頭部は三角形。2条切込下に突出する頸部を配す。頸部下に薬研形の種子を大きく刻む。	県有形
第87国	国東市 264	川原板碑と周辺 石塔群(板碑2)	文献32	元応2年 (1320)		安山岩	板碑1より一回り小さいかほぼ同形。	県有形
第87国	国東市 132	長木家宝塔・鳴 板碑と周辺石塔 群(板碑1)	文献32	元亨元年 (1321)		安山岩	整形板碑で頭部は三角に尖る。2条切込下に突出する頸部を持つ。碑面に蓮華座と種子を刻む。	県有形
第88国	国東市 165	柳井田板碑	文献31	元亨元年 (1321)		安山岩	台座の上立つ整形板碑。頭部は三角形で下に1条の細い切込を入れ、頸部は突出する。	
第88国	国東市 132	長木家宝塔・鳴 板碑と周辺石塔 群(板碑2)	文献32	元亨2年 (1322)		安山岩	方形台座に立つ整形板碑。頭部は鋭く尖り、頭部下に2状の切込を入れ頸部は突出する。碑面上部に薬研形の種子を大きく刻む。	県有形
第89国	国東市 174	岩尾板碑	文献31	元亨4年 (1324)		安山岩	整形板碑で碑身上部はやや前に反る。頭部は三角形で下に2条の切込を入れ、頸部は突出する。碑面に阿弥陀三尊の種子を大きく刻む。	県有形
第89国	国東市 147	中屋敷板碑(堀 部板碑)	文献32	正中2年 (1325)		安山岩	整形板碑で頭部は低い三角形。2条切込下に突出する頸部を持つ。頸部下に種子を刻む。基部は張出す。	県有形
第89国	国東市 210	左荘板碑	文献32	正中3年 (1326)		安山岩	両面板碑で頸部が両面に突出する。頸部下に種子を大きく刻む。	県有形
第89国	国東市 130	深江板碑と周辺 石塔群(板碑1)	文献32	嘉暦2年 (1327)		安山岩	整形板碑で碑身上部が反る。頭部は内反りの山形。2条切込と頸部の下に種子を刻む。基部は突出。	県有形
第89国	国東市 170	護聖寺石塔群 (板碑2)	文献32	嘉暦4年 (1329)		安山岩	基礎に立つ整形板碑。頭部は三角形で2条切込・頸部下に阿弥陀三尊の種子を刻む。	県有形
第90国	国東市 140	竹の上板碑	文献32	元弘3年 (1333)		安山岩	頭部は内反りの三角形。2条切込と頸部が付き、その下に種子を大きく刻む。基部は突出する。	県有形
第90国	国東市 343	八坂社板碑	文献31	元弘3年 (1333)		安山岩	基礎に立つ整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を持つ。碑面に種子と銘文を刻む。	県有形
第90国	国東市 143	岡板碑	文献32	建武元年 (1334)		安山岩	頭部は三角形で2条切込下に頸部が突出する。碑面上部に種子を刻む。基部の突出部は幅広である。	県有形
第90国	国東市 233	丸小野寺石塔群1	文献48	康永元年 (1342)		安山岩	基礎石に立つ。碑身は前に反る。三角形の頭部下に2条切込と頸部を持つ。基部は突出する。	市有形

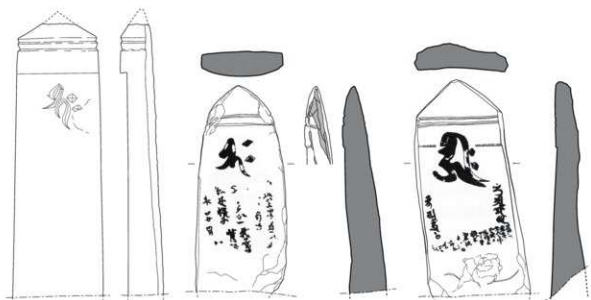
棟号 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第91国	国東市	226	丸小野寺石塔群3	文献48	康永2年 (1343)	安山岩	形状は丸小野寺石塔群1の板碑に似る。	
第91国	国東市	132	長木家宝塔・鳴板碑と周辺石塔群(板碑3)	文献32	延文3年 (1358)	安山岩	整形板碑で頭部は低い三角形。2条切込と頸部を有し、碑面上部に種子を刻む。基部は突出する。	
第91国	国東市	060	十王堂板碑と周辺石塔群	文献48	文和4年 (1355)	安山岩	細長の整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。碑面上部に種子を刻み、基部は突出。	県有形
第91国	国東市	344	塔野板碑	文献48	永相2年 (1376)	安山岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と突出する頸部を配す。碑面上部に種子を大きく刻む。基部は突出。	市有形
第91国	国東市	171	蔵神社板碑	文献48	弘治2年 (1556)	安山岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と突出する頸部を配す。碑面は方形区画内に六地蔵を彫り、下段は墨書銘がある。基部は突出。	市有形
第91国	国東市	163	寺園板碑と周辺石塔群	文献48	天正13年 (1585)	安山岩	頭部は山形で、頸部は頭部同様に連弧状に作る。碑面は方形区画内に円形と3字の種子を彫る。基部は大きく突出する。	市有形
第92国	国東市	363	岩屋堂板碑	文献48	延文5年 (1360)	安山岩	頭部は丸みのある三角形で、2条の切込と突出する頸部を持つ。碑面上部に葉研形りの種子を刻む。	市有形
第92国	国東市	164	金剛院踏笠塔婆と周辺石塔群	文献31			整形板碑で頭部は低い三角形。2条切込と突出する頸部を持つ。碑身基部は厚みを持つ。	
第92国	国東市	116	長福寺踏石塔群	文献32			基礎に碑身を挿す。頭部は三角形で2条切込と突出する頸部を持つ。碑面上部に大きく種子を墨書する。	
第92国	国東市	129	東屋来板碑	文献32			2連碑。頭部は三角形で正面には2条切込と突出する頸部をもち、その下に種子を彫る。背面は頸部が低く、碑面には算線を刻む。	市有形
第93国	国東市	337	中ノ川観音堂石塔群	文献31			方形基礎上に立つ。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。碑面上部に種子を大きく刻む。	
第93国	国東市	131	政友板碑(板碑1)	文献33			整形板碑で碑身は前に反る。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配し、碑面に種子を刻む。	
第93国	国東市	131	政友板碑(板碑2)	文献33			形状は板碑1に似る。碑面上部に種子を墨書する。	
第93国	国東市	130	深江板碑と周辺石塔群(板碑2)	文献32			基礎上に立つ小型の整形板碑。頭部は低い三角形。頭部下に切込を持ち、頸部は狭い。基部は張出す。	
第93国	国東市	081	岩戸寺宝塔と石塔群	文献32			整形板碑で碑身は反る。頭部は低い三角形。2条切込と突出する頸部を持つ。	
第94国	杵築市	260	財前家墓地石塔群	文献48	元亨元年 (1321)	安山岩	上部を欠失。碑身基部は前に突出し、下部には枘を持つ。	県史跡
第94国	杵築市	012	本藤板碑(板碑1)	文献48	建武元年 (1334)	安山岩	大型の整形板碑。頭部は尖り、2条切込と大きく突出する頸部を持つ。碑面上部に種子を大きく刻む。	県有形
第94国	杵築市	284	尾迫板碑・大谷家墓地石塔群	文献48	康永3年 (1344)	安山岩	整形板碑で頭部は低い三角形。2条切込と頸部を配し、碑面上部に種子を刻む。	
第94国	杵築市	042	善門坊石塔群	文献48	康永4年 (1345)	凝灰岩	整形板碑で三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。碑面上部に円形と種子を刻む。基部は突出する。	

神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第94回	作樂市 266	小仏道板碑／小 仏道石塔群	文献48	貞和3年 (1347)		安山岩	整形板碑で頭部は内反の三角形。頭部は高く突出し2条切込を持つ。碑面に種子を刻む。基部は突出。	県有形
第94回	作樂市 261	諸田越板碑	文献48	貞治5年 (1366)		安山岩	整形板碑で頭部は低い内反三角形。2条切込と頸部を持ち、碑面上部に3字の種子を刻む。	県有形
第95回	作樂市 032	堂野尾地蔵堂石 塔群	文献48	永和4年 (1378)		凝灰岩	整形板碑で三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。基部は突出。	
第95回	作樂市 034	東光寺石殿と板碑	文献48	永正13年 (1516)		凝灰岩	頭部は三角形で割付線を刻む。頸部は低く、下に種子3字を刻む。碑面中位は半円形に彫り窪める。	
第95回	作樂市 012	本藤板碑(板碑2)	文献34				整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。碑面基部は突出し、下部には納が付く。	
第95回	作樂市 196	西仲尾宝篋印塔 ／板碑	文献34				整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。	
第95回	作樂市 062	妙善坊板碑(板 碑1)	文献30			凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と幅の狭い頸部を持つ。碑面に3字の種子を小さく刻む。	
第95回	作樂市 062	妙善坊板碑(板 碑2)	文献30			凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を持つ。碑面下部に納が付き、方形台座に挿入する。	
第95回	作樂市 310	森の木道踏石 塔群	文献36				厚みのある小型の板碑。頭部は丸く、1条切込と頸部を持つ。碑面には「如法経」を刻む。基部は突出。	
第95回	作樂市 062	妙善坊石塔群 (板碑3)	文献30			凝灰岩	頭部は三角形。碑面は方形に彫り窪め、中に2基の板碑を彫る。基部は前に張り出す。	
第95回	作樂市 062	妙善坊石塔群 (板碑4)	文献30			凝灰岩	頭部は台形で頸部を持つ。碑面上に種子を小さく刻む。基部は突出。	
第95回	作樂市 062	妙善坊石塔群 (板碑5)	文献30			凝灰岩	小型の板碑で碑身は厚い。頭部は台形で碑面を方形に彫り窪める。基部は方形台座に挿入する。	
第96回	日出町 035	願成就寺石塔群 (板碑1)	文献48	貞和2年 (1346)		安山岩	整形板碑で碑身は反る。頭部は欠損。2条切込と頸部を持ち、碑面上部に種子を刻む。	
第96回	日出町 035	願成就寺石塔群 (板碑2)	文献48	貞和5年 (1349)		安山岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。碑面に種子を刻む。	
第96回	別府市 076	朝見大日種子 板碑	文献48	応永5年 (1399)		安山岩	台座に載る整形板碑。低い三角形の頭部下に2条切込と幅広の頸部を配す。碑面に3字の種子と銘文を刻む。基部は納を台座に挿し込む。	市有形
第96回	別府市 036	神和苑石塔群	文献48	永正11年 (1514)		安山岩	整形板碑。三角形の頭部下に頸部を突出させ、その中央に沈線をも1条施す。碑面上部に種子を刻む。	市有形
第96回	別府市	吉祥寺板碑	文献48	寛永14年 (1637)		凝灰岩	2重の基礎に碑身を挿入する。頭部は三角形で浮彫り月輪内に万字を彫る。基部はやや突出する。	
第96回	日田市 041	永平寺跡石塔群 (板碑1)	文献48	応長元年 (1311)		安山岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と幅の狭い頸部を持つ。碑面に種子を大きく刻む。基部は突出。	市有形
第96回	日田市 041	永平寺跡石塔群 (板碑2)	文献48	正和2年 (1313)		凝灰岩	大型の整形板碑。頭部は低い三角形。2条切込と突出する頸部を持ち、碑面に種子を刻む。基部は突出。	市有形
第96回	九重町 005	宝八幡宮国東 塔・板碑及び周 辺石塔群	文献48	宝徳3年 (1451)		凝灰岩	小型の整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。頭部に1字、碑面に5字の種子を刻む。	県有形

棟号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第97回	大分市 017	小野家石塔群	文献46	元弘3年 (1333)		凝灰岩	頭部を欠損。2条切込と突出する頸部を持ち、碑面上部に種子を墨書する。基部は前方に突出する。	
第97回	大分市 045	少林寺板碑群 (板碑1)	文献46	貞和6年 (1350)		凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配し、碑面に種子を刻む。基部に幅広い突出部を持つ。	
第97回	大分市 045	少林寺板碑群 (板碑2)	文献46	貞和6年 (1350)		凝灰岩	板碑1とはほぼ同形。	
第97回	大分市 045	少林寺板碑群 (板碑3)	文献46	貞和6年 (1350)		凝灰岩	板碑1とはほぼ同形。	
第97回	大分市 045	少林寺板碑群 (板碑4)	文献46	貞和6年 (1350)		凝灰岩	板碑1とはほぼ同形。	
第97回	大分市 045	少林寺板碑群 (板碑5)	文献46	貞和6年 (1350)		凝灰岩	板碑1とはほぼ同形でやや小型。	
第98回	由布市	建長寺跡板碑	文献46	正平11年 (1356)		凝灰岩	頭部を欠損。碑面上部に幅広い頸部が突出し、2条の切込を入れる。碑面上部に2字の種子を大きく刻む。基部は前方に突出する。	
第98回	由布市 062	出雲社板碑	文献46	応安6年 (1373)		凝灰岩	頭部を欠損。碑面上部に種子を大きく刻む。基部は前方に突出する。	
第98回	竹田市 054	筒井板碑	文献46	天授2年 (1376)		凝灰岩	頭部と基部を欠損。頭部下に2条の切込を入れる。	
第98回	竹田市 106	鬼田板碑	文献46	天文10年 (1541)		凝灰岩	整形板碑。頭部は三角形で、2条切込と頸部は削り出しで表す。頸部に細線の凹相と種子を刻む。	
第98回	竹田市 087	折立板碑	文献46	永禄3年 (1560)		凝灰岩	整形板碑。頭部は三角形で、頸部は削り出しで区画する。頸部月輪内に縦書きを刻み、側面と背面の同位置にも月輪と種子を刻む。	
第99回	竹田市	有添田道跡板碑1	平成 27年度 県教委 発掘調査		106.5	凝灰岩	整形板碑で頭部は三角形。上部に2条切込と、その下に頸部をわずかに突出させる。種子・銘文なし。	
第99回	竹田市	有添田道跡板碑2	平成 27年度 県教委 発掘調査		125.5	凝灰岩	整形板碑で頭部は三角形。上部に2条切込と、その下に頸部を低く突出させる。種子・銘文なし。	
第99回	豊後大野市 010	岳川地藏堂板碑	文献46	正慶元年 (1332)	125.5	凝灰岩	整形板碑で頭部は三角形。上部に2条切込と、その下に頸部を低く突出させる。種子・銘文なし。	市有形
第99回	豊後大野市 085	治康庵供養塔・角柱塔礎及び石塔群	文献46	康安元年 (1361)		凝灰岩	上部を欠失。基部はわずかに張り出す。	
第99回	豊後大野市 034	旧大野町中央公民館石塔群	文献46	建徳3年 (1372)		凝灰岩	整形板碑。頭部は丸みをもち、2条切込下に幅広い頸部を持つ。碑面上部に種子2字を刻む。	
第100回	豊後大野市 196	三反畑板碑	文献46	天授3年 (1377)		凝灰岩	整形板碑。頭部は三角形で高い。2条切込はV字で鋭く、頸部は幅広いである。頸部に1字、碑面に数字の種子を大きく刻む。	県有形
第100回	豊後大野市 016	瀬口の板碑	文献46	延徳2年 (1490)		凝灰岩	整形板碑で下部は欠損。三角形の頭部下に頸部を配し、碑面に種子を刻む。	市有形
第101回	豊後大野市 096	五郎丸板碑	文献43	明応2年 (1493)		凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と頸部を配す。碑面に銘文と交名を刻む。基部は張り出す。	市有形
第101回	豊後大野市 127	藤原板碑	文献46	永正9年 (1512)		凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と低い頸部を配す。碑面上部に細線凹相と種子を小さく刻む。	市有形

神田 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第101回	豊後大野市	西ヶ原板碑	文献46	大永6年 (1526)		凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と額部を配す。額部月輪内に種子を刻む。	
第101回	豊後大野市 205	門板碑	文献46	天文3年 (1534)		凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条の細線と額広の額部を配す。額部に細線円相と種子を刻む。	市有形
第101回	豊後大野市 013	塚ノ元板碑(板碑1)	文献46	天文7年 (1538)		凝灰岩	整形板碑。台形の頭部下に2条の細線と額広の額部を配す。額部には月輪を形り窪み中に種子を刻む。	市有形
第102回	豊後大野市 084	高添上板碑(板碑1)	文献46	天文8年 (1539)		凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条細線と額広の額部を配す。額部に細線円相と種子を刻む。碑面下部には露頭状文と対向英文を施す。基部は納を台座に挿し込む。	市有形
第102回	豊後大野市 084	高添上板碑(板碑2)	文献46			凝灰岩	板碑1と同型式。	
第102回	豊後大野市	百枝板碑	文献48	天文10年 (1541)		安山岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条細線と、下に細線を施し額部を区画する。額部には細線円相を刻む。	
第102回	豊後大野市 013	塚ノ元板碑(板碑2)	文献46	天文19年 (1550)		凝灰岩	碑面は方形で、上部に2条細線を施し、その下に月輪を形り窪み種子を刻む。基部は台座に挿し込む。	市有形
第102回	豊後大野市	館ノ原墓地板碑	文献46	永祿7年 (1564)		凝灰岩	台座上に立つ方形板状の板碑。上部に細線円相と種子を刻む。基部は低く突出する。	
第102回	豊後大野市 203	小野崎板碑	文献46	元亀2年 (1571)		凝灰岩	三角形の頭部下に額部を持つ。碑面上部中央に月輪と万字、両側に蓮華座と月輪を刻む。	市有形
第103回	豊後大野市 209	井上原板碑	文献46	天正3年 (1575)		凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に2条切込と額広の額部を配す。額部に種子を小さく刻む。	
第103回	豊後大野市 019	平井板碑型庚申供養塔	文献46	天正6年 (1578)		凝灰岩	頭部は三角形。碑面上部に細線円相と種子を刻む。基部は欠損。	市有形
第103回	豊後大野市	旧村役場板碑	文献46	天正8年 (1580)		凝灰岩	三角形の頭部下に額部を持つ。碑面に細線円相と種子を刻む。	
第103回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群)板碑1	文献46	文禄5年 (1596)		凝灰岩	三角形の頭部下に2条の細線を施す。碑面上部に細線円相と種子を刻む。	市有形
第103回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群)板碑2	文献46	慶長4年 (1599)		凝灰岩	頭部は平坦で碑身が台形状を呈す。碑面上部に月輪と種子を刻み、その下の方形区画内に銘文を刻む。	市有形
第103回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群)板碑3	文献46	慶長4年 (1599)		凝灰岩	三角形の頭部下に2条細線を施す。碑面上部に細線円相と種子、その下に位牌を刻む。	市有形
第103回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群)板碑4	文献46	慶長4年 (1599)		凝灰岩	頭部は三角形。碑面上部に細線円相と種子を刻む。	市有形
第103回	豊後大野市 281	文中宝塔及び石塔群	文献46	慶長4年 (1599)		凝灰岩	三角形の頭部下に2条切込を持つ。碑面上部に細線円相と蓮華座、種子を刻み、その下に大型の位牌形を彫る。	
第104回	豊後大野市 046	代三五公民館石輪及び石塔群	文献46	慶長6年 (1601)		凝灰岩	三角形の頭部下に2条切込を持つ。碑面上部に細線円相と蓮華座、種子を2つ刻む。	
第104回	豊後大野市 144	森道石輪及び森迫回春庵墓地石塔群	文献46	慶長14年 (1609)		凝灰岩	三角形の頭部下に2条細線を施す。碑面に細線円相と種子、その下に位牌形を刻む。	
第104回	豊後大野市 136	下津留墓碑群及び石塔群	文献46	慶長17年 (1612)		凝灰岩	三角形の頭部下に細線1条を施す。	

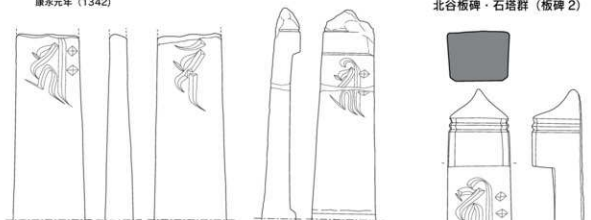
神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第104国	豊後大野市 307	中小坂石幢及び 石塔群	文献46	元和2年 (1616)		凝灰岩	連碑。三角形の頭部下に2条細線を 施し、碑面上部に細線門相と種子、正 面はその下に位牌を刻む。	
第104国	白杵市 095	中山板碑	文献46	元徳2年 (1330)		凝灰岩	整形板碑。三角形の頭部下に幅法の 2条切込と細部を配す。碑面上部に種 子を大きく刻む。	県有形
第104国	白杵市 152	城ヶ平板碑	文献46	元弘3年 (1333)		凝灰岩	三連碑。三角形の頭部下に2条切込 と細部を配し、その下に種子を刻む。 基部は突出する。	県有形



中津市 188 尾園板碑
康永元年 (1342)

中津市 154 北谷板碑・石塔群 (板碑 1)

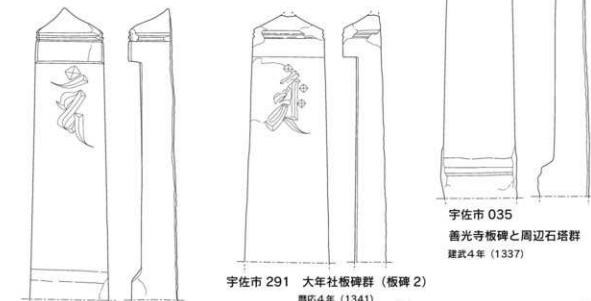
中津市 154
北谷板碑・石塔群 (板碑 2)



宇佐市 地藏院址板碑 嘉應2年 (1327)

宇佐市 298 佐田社板碑
正應元年 (1332)

宇佐市 035
善光寺板碑と周辺石塔群
建武4年 (1337)



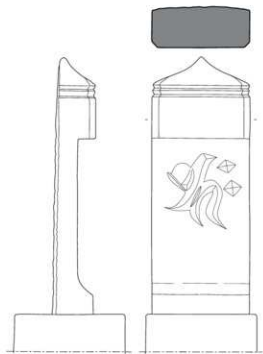
宇佐市 291 大年社板碑群 (板碑 1) 建武元年 (1334)

宇佐市 291 大年社板碑群 (板碑 2)
應元4年 (1341)

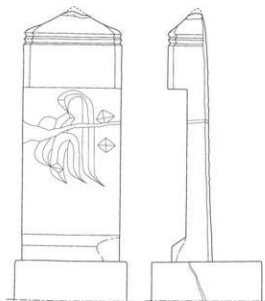
宇佐市 035
善光寺板碑と周辺石塔群
建武4年 (1337)



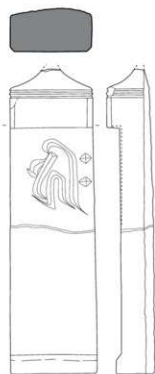
第79図 板碑実測図1【中津・宇佐①】(1/20)



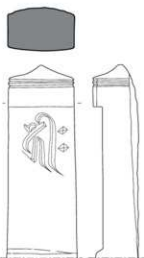
宇佐市 197 妙楽寺板碑と周辺石塔群 (板碑 1)
貞和2年 (1346)



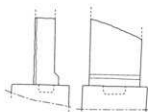
宇佐市 197 妙楽寺板碑と周辺石塔群 (板碑 2)
貞和2年 (1346)



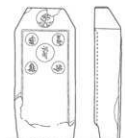
宇佐市 203
庄部観音堂板碑 (板碑 1)
応安6年 (1373)



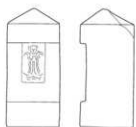
宇佐市 203 庄部観音堂板碑
(板碑 2) 承徳3年 (1383)



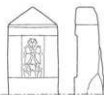
宇佐市 246 阿弥陀堂石塔群
応永35年 (1428)



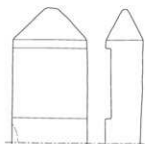
宇佐市 288
御許山石塔群
明応4年 (1495)



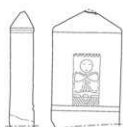
宇佐市 大塚集落墓地板碑
(板碑 1)
永禄 10 年 (1567)



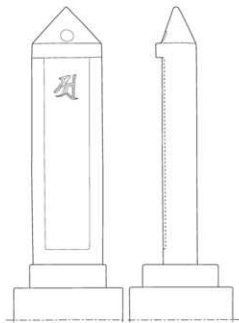
宇佐市 215
観音寺石塔群
天正 3 年 (1575)



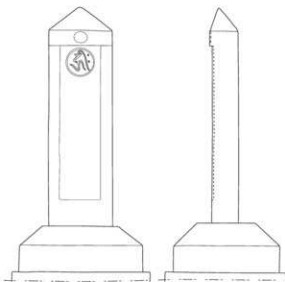
宇佐市 大塚集落墓地板碑
(板碑 2)
天正 7 年 (1579)



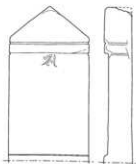
宇佐市 117
任聖寺地藏石仏と
周辺石塔群
慶長 6 年 (1601)



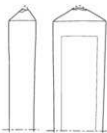
宇佐市 169 真上家墓地板碑群
慶長 13 年 (1608)



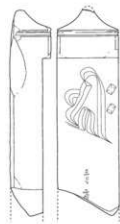
宇佐市 高野家墓地板碑
元和 2 年 (1616)



宇佐市 032 成円寺石塔群
元和 4 年 (1618)

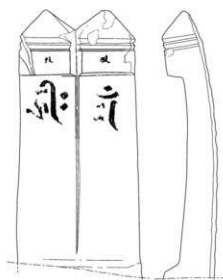


宇佐市 165 到津家墓地板碑
元和 7 年 (1621)

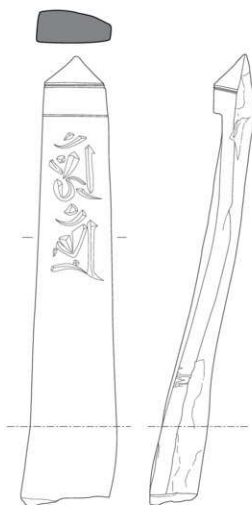


宇佐市 055 吉武家墓地前板碑

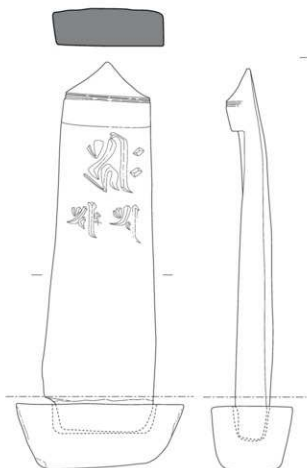
第81图 板碑実測図3【宇佐③】(1/20)



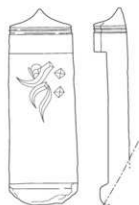
豊後高田市 344 庵ノ迫板碑
正中2年(1325)



豊後高田市 362 其ノ田板碑(板碑 1)
建武元年(1334)

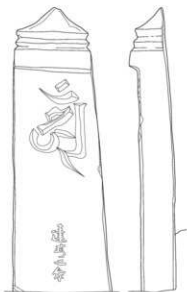


豊後高田市 362 其ノ田板碑(板碑 2)
建武元年(1334)

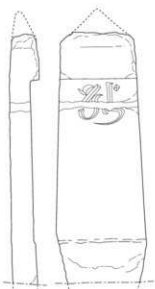


豊後高田市 369 陽平野圓板碑
建武2年(1335)

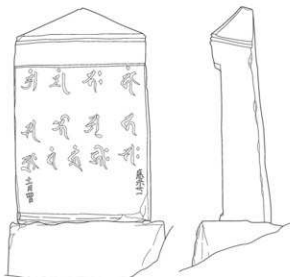
第82図 板碑実測図4【豊後高田①】(1/20)



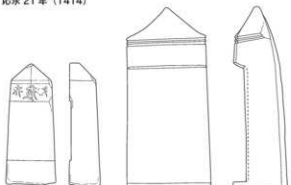
豊後高田市 403 梅遊寺板碑と周辺石塔群 (板碑 1)
建武元年 (1336)



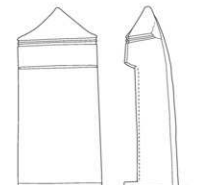
豊後高田市 365 富貴寺石造物群
延文 6年 (1361)



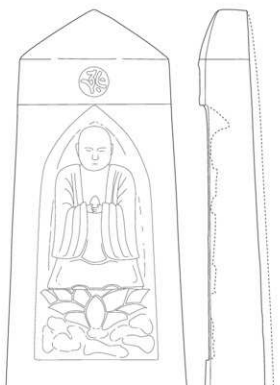
豊後高田市 403 梅遊寺板碑と周辺石塔群 (板碑 2)
応永 21年 (1414)



豊後高田市 419
金高墓地石塔群
文明 9年 (1477)

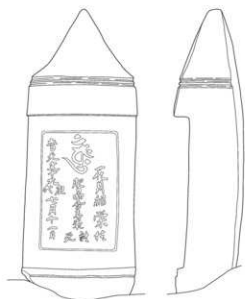


豊後高田市 243 寺ノ上殿墓板碑群
(板碑 1)
天文 14年 (1545)

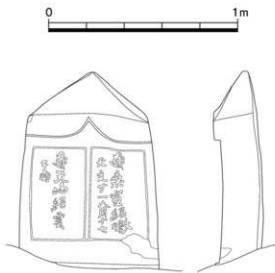


豊後高田市 118 小門家地藏板碑
天文 18年 (1549)

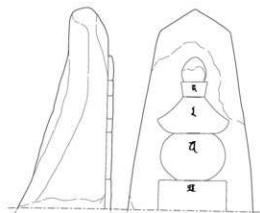
第83図 板碑実測図5【豊後高田②】(1/20)



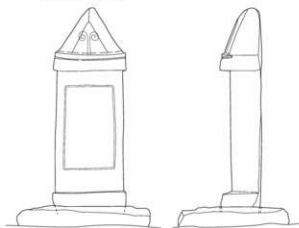
豊後高田市 243 寺ノ上殿墓板碑群 (板碑 2)
天文 19 年 (1550)



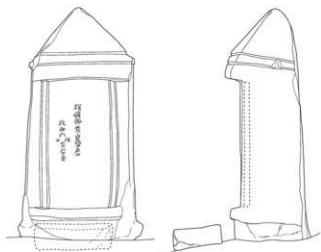
豊後高田市 243 寺ノ上殿墓板碑群 (板碑 3)
天文 21 年 (1552)



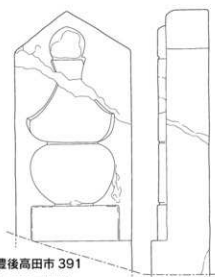
豊後高田市 389 安養寺石塔群
永祿 10 年 (1567)



豊後高田市 243 寺ノ上殿墓板碑群 (板碑 4)
天正 6 年 (1578)

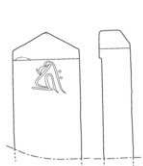


豊後高田市 278 地持庵石塔群
天正 6 年 (1578)

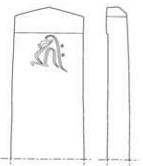


豊後高田市 391
大応寺石塔群 天正 15 年 (1587)

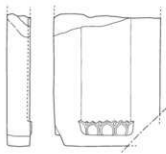
第84図 板碑実測図6【豊後高田③】(1/20)



豊後高田市 319 長安寺オト様板碑群
(板碑 1) 慶長 15 年 (1610)



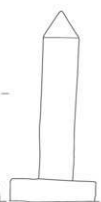
豊後高田市 319 長安寺オト様
板碑群 (板碑 2) 慶長 15 年 (1610)



豊後高田市 319
長安寺オト様板碑群 (板碑 3)
慶長 15 年 (1610)



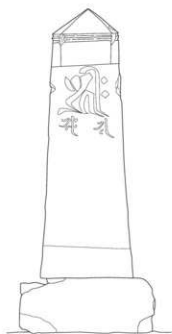
豊後高田市 257 智恩寺院主墓所石塔群
(板碑 1) 元和 8 年 (1622)



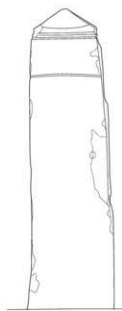
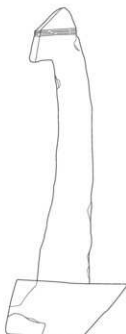
豊後高田市 257 智恩寺院主墓所
石塔群 (板碑 2)



豊後高田市 257
智恩寺院主墓所石塔群
(板碑 3)



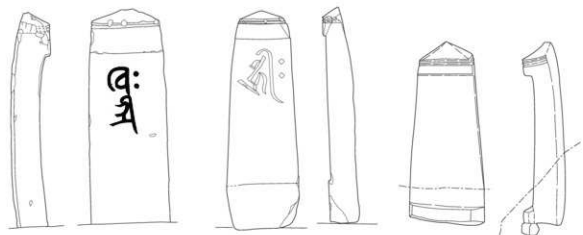
豊後高田市 331 阿形家板碑と宝篋印塔



豊後高田市 102 川原寺板碑



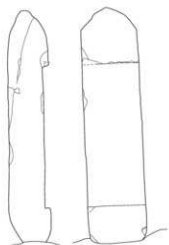
第85図 板碑実測図7【豊後高田④】(1/20)



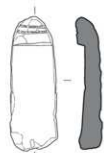
豊後高田市 101 施恩寺石造物群

豊後高田市 155 実相院石塔群

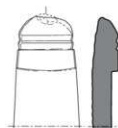
豊後高田市 186 城前フ子石塔群
(板碑 1)



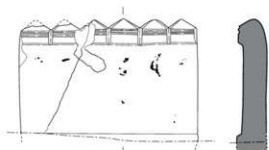
豊後高田市 169 山神社板碑



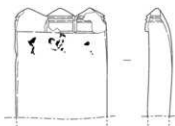
豊後高田市 小路遺跡出土板碑



豊後高田市 407 真木大堂
古代文化公園内石塔群

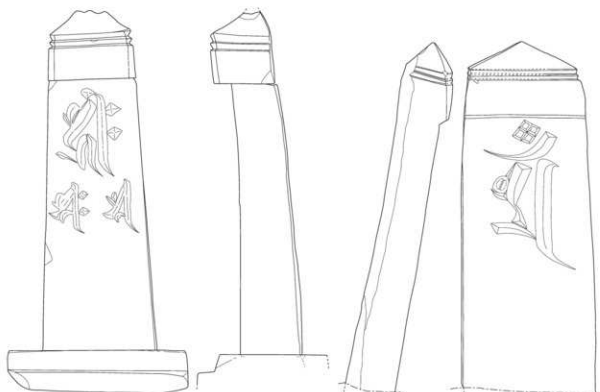


豊後高田市 186 城前フ子石塔群 (板碑 2)



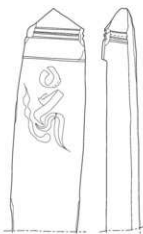
豊後高田市 186 城前フ子石塔群 (板碑 3)

第86図 板碑実測図8【豊後高田⑤】(1/20)

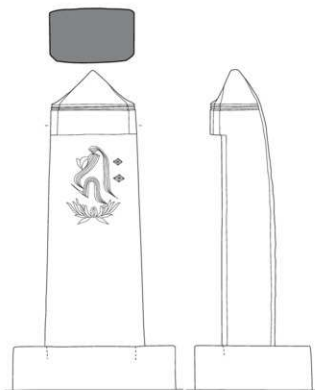


国東市 170 護聖寺石塔群 (板碑 1)
正応 4 年 (1291)

国東市 264 川原板碑と周辺石塔群 (板碑 1)
文保 3 年 (1319)

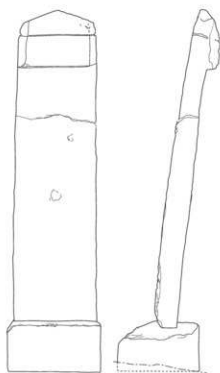


国東市 264 川原板碑と周辺石塔群 (板碑 2)
元応 2 年 (1320)

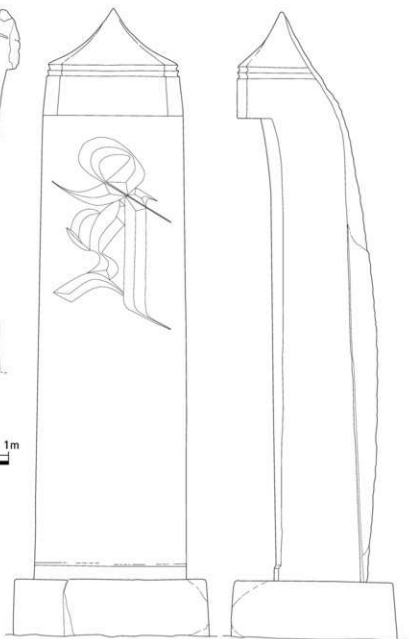


国東市 132 長木家宝塔・囃板碑と周辺石塔群 (板碑 1)
元亨元年 (1321)

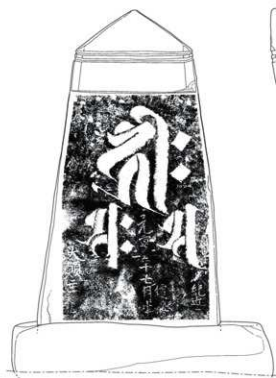
第87図 板碑実測図9 [国東①] (1/20)



国東市 165 柳井田板碑
元享元年 (1321)



国東市 132 長木家宝塔・鳴板碑と周辺石塔群 (板碑 2)
元享 2 年 (1322)



国東市 174 岩尾板碑 元享 4 年 (1324)



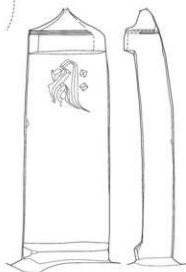
国東市 147 中屋敷板碑 (塚部板碑)
正中 2 年 (1325)



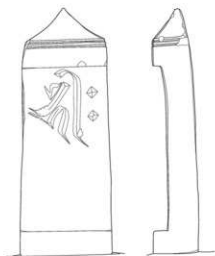
国東市 210 左荘板碑
正中 3 年 (1326)



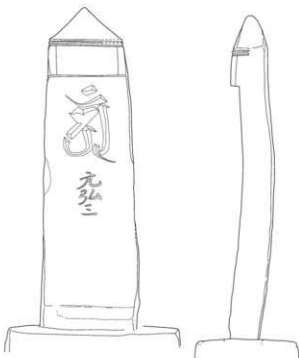
国東市 170 護聖寺石塔群 (板碑 2) (嘉暦 4 年 1329)



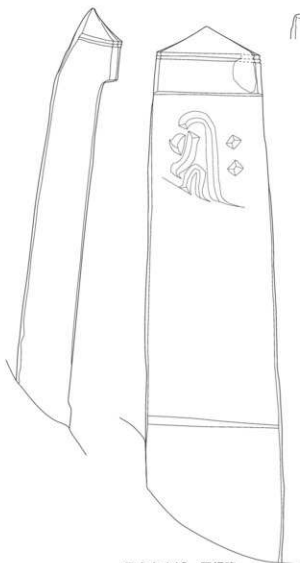
国東市 130 深江板碑と周辺石塔群
(板碑 1) 嘉暦 2 年 (1327)



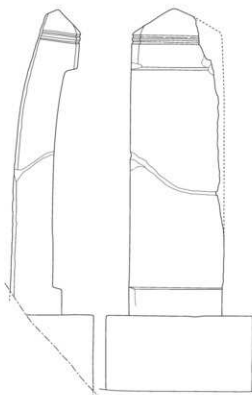
国東市 140 竹の上板碑
元弘3年(1333)



国東市 343 八坂社板碑
元弘3年(1333)

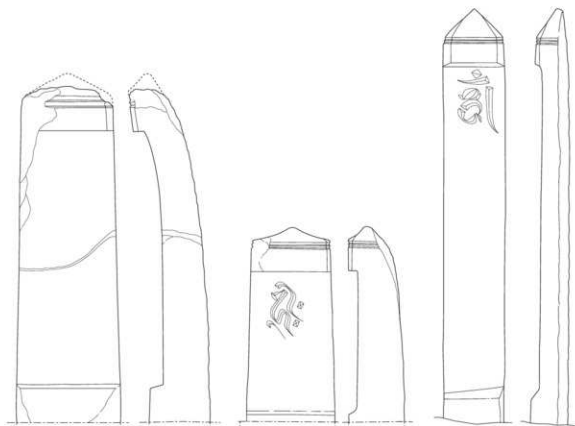


国東市 143 岡板碑
建武元年(1334)



国東市 233 丸小野寺石塔群 1
康永元年(1342)

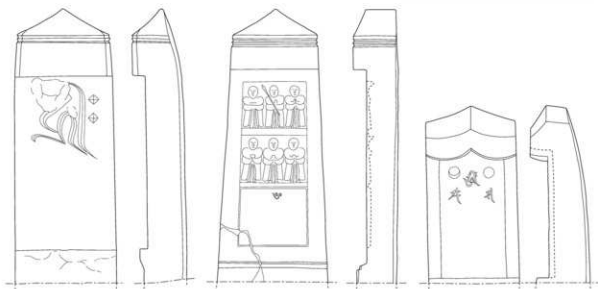
第90図 板碑実測図12【国東④】(1/20)



国東市 226 丸小野寺石塔群
康永 7 年 (1348)

国東市 132 長木家宝塔・鳴板碑と
周辺石塔群 (板碑 3)
延文 3 年 (1354)

国東市 060 十王堂板碑と
周辺石塔群 文和 4 年 (1355)

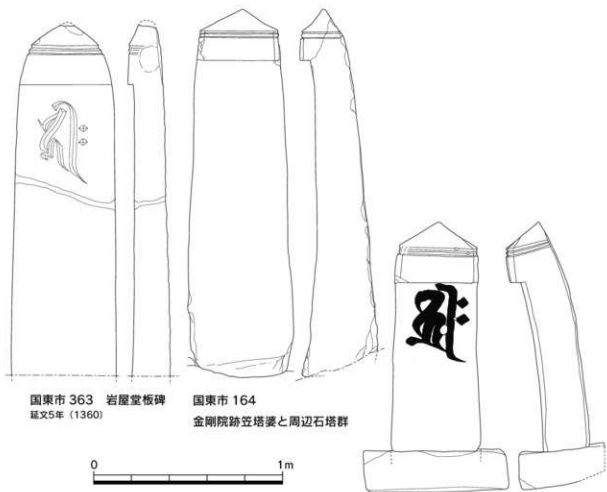


国東市 344 塔野板碑
永和 2 年 (1376)

国東市 171 歳神社板碑
弘治 2 年 (1556)

国東市 163 寺園板碑と周辺石塔群
天正 13 年 (1585)

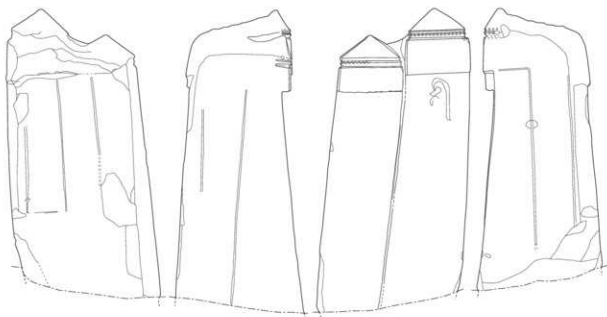
第91図 板碑実測図13【国東⑤】(1/20)



国東市 363 岩屋堂板碑
延文5年 (1360)

国東市 164
金剛院跡笠塔婆と周辺石塔群

国東市 116 長福寺跡石塔群

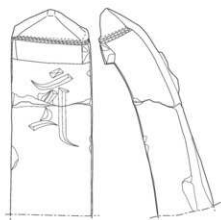


国東市 129 東聖来板碑

第92図 板碑実測図14【国東⑥】(1/20)



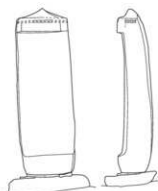
国東市 337 中ノ川観音堂石塔群



国東市 131 政友板碑 (板碑 1)



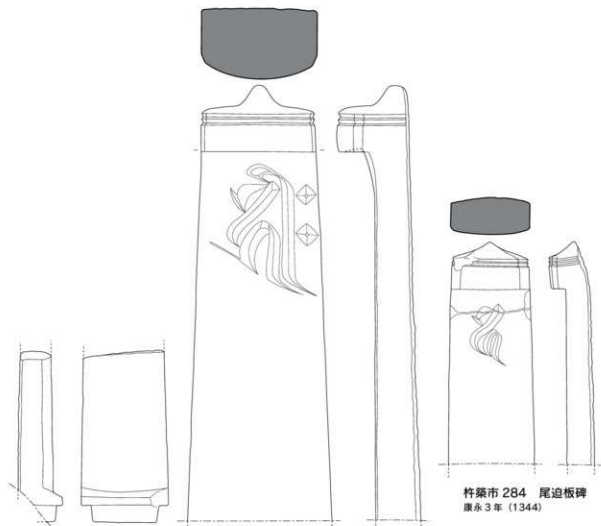
国東市 131 政友板碑 (板碑 2)



国東市 130
深江板碑と周辺石塔群 (板碑 2)



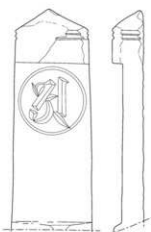
国東市 081
岩戸寺宝塔と石塔群



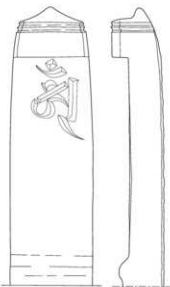
杵築市 260 財前家墓地石塔群
元享元年 (1321)

杵築市 012 本羅板碑 (板碑 1)
建武元年 (1334)

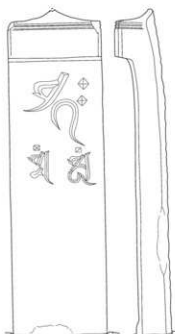
杵築市 284 尾迫板碑
康永 3 年 (1344)



杵築市 042 普門坊石塔群
康永 4 年 (1345)

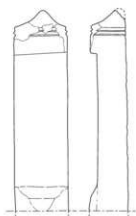


杵築市 266 小俣道板碑
貞和 3 年 (1347)

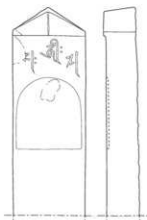


杵築市 261 諸田越板碑
貞治 5 年 (1366)

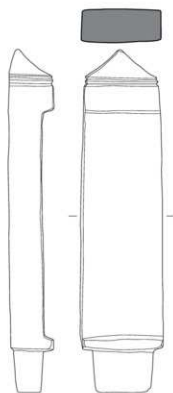
第94図 板碑実測図16【杵築①】(1/20)



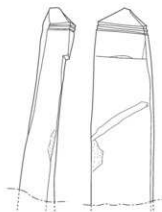
杵築市 032 堂野尾地藏堂石塔群
永和4年(1378)



杵築市 034 東光寺石幢と板碑
永正13年(1516)



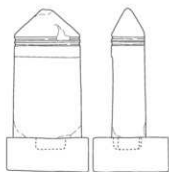
杵築市 012 本蓮板碑(板碑2)



杵築市 196 西仲尾宝篋印塔/板碑



杵築市 062 妙善坊石塔群
(板碑1)



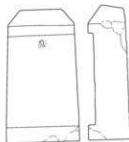
杵築市 062 妙善坊石塔群(板碑2)



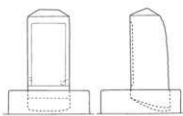
杵築市 310
森の木遺跡石塔群



杵築市 062 妙善坊石塔群
(板碑3)

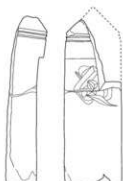


杵築市 062 妙善坊石塔群
(板碑4)

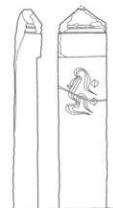


杵築市 062 妙善坊石塔群
(板碑5)

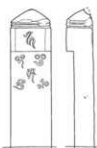
第95図 板碑実測図17【杵築②】(1/20)



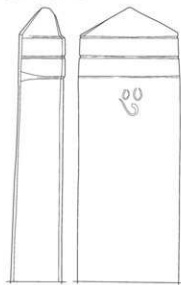
日出町 035 顯成就寺石塔群 (板碑 1)
貞和 2 年 (1346)



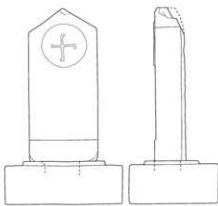
日出町 035 顯成就寺石塔群 (板碑 2)
貞和 5 年 (1349)



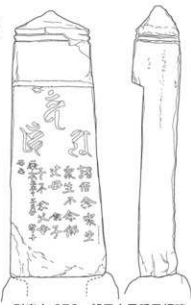
九重町 005 宝八幡宮国東塔・
板碑及び周辺石塔群 宝徳 3 年 (1451)



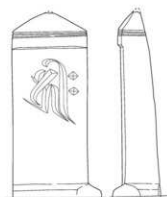
別府市 036 神和苑石塔群
永正 11 年 (1514)



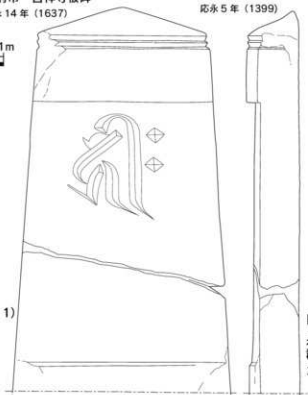
別府市 吉祥寺板碑
寛永 14 年 (1637)



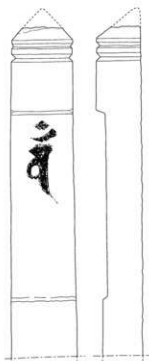
別府市 076 朝見大日種子板碑
応永 5 年 (1399)



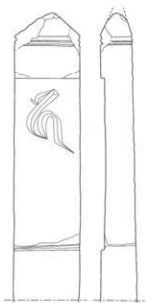
日田市 041 永平寺跡石塔群 (板碑 1)
応長元年 (1311)



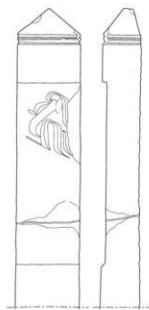
日田市 041
永平寺跡石塔
群 (板碑 2)
正和 2 年 (1313)



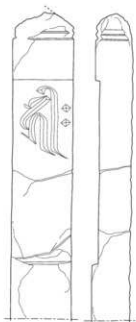
大分市017 小野家石塔群
元弘3年(1333)



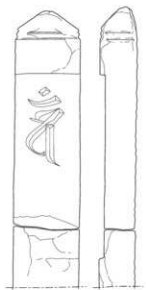
大分市045 少林寺板碑群 (板碑1)
貞和6年(1350)



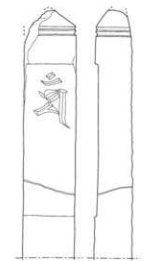
大分市045 少林寺板碑群
(板碑2) 貞和6年(1350)



大分市045 少林寺板碑群 (板碑3)
貞和6年(1350)

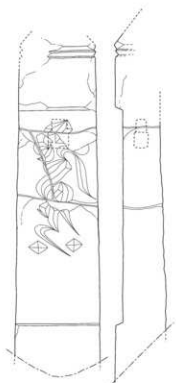


大分市045 少林寺板碑群 (板碑4)
貞和6年(1350)

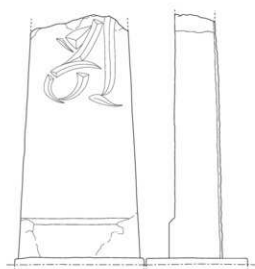


大分市045 少林寺板碑群
(板碑5) 貞和6年(1350)

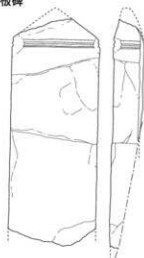
第97図 板碑実測図19【大分】(1/20)



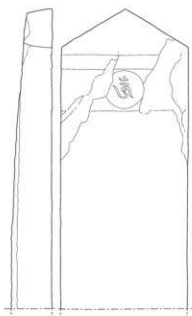
由布市 建長寺跡板碑
正平 11 年 (1356)



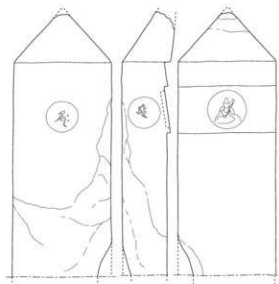
由布市 062 出雲社板碑
応安 6 年 (1373)



竹田市 054 筒井板碑
天授 2 年 (1376)

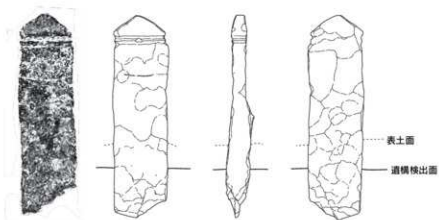


竹田市 106 鬼田板碑
天文 10 年 (1541)

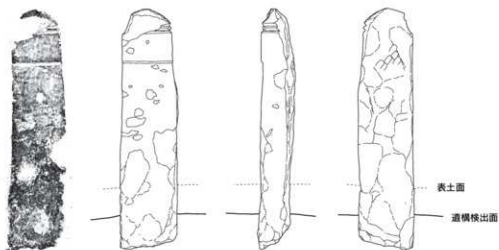


竹田市 087 折立板碑
永祿 3 年 (1560)

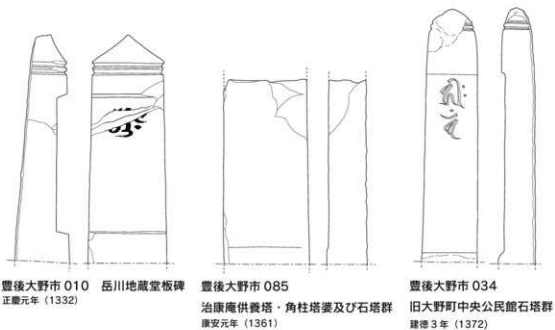
第98図 板碑実測図20【由布・竹田】(1/20)



竹田市 有添田遺跡板碑 1



竹田市 有添田遺跡板碑 2



豊後大野市 010 岳川地藏堂板碑
正慶元年 (1332)

豊後大野市 085
治康庵供養塔・角柱塔婆及び石塔群
康安元年 (1361)

豊後大野市 034
旧大野町中央公民館石塔群
建徳 3年 (1372)

第99図 板碑実測図21【由布・竹田】(1/20)



豊後大野市 016 瀬口の板碑
延徳 2 年 (1490)

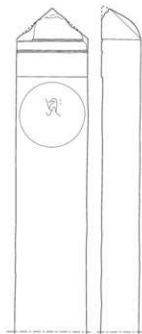
豊後大野市 196 三反烟板碑
天授 3 年 (1377)

第100図 板碑実測図22【豊後大野②】(1/20)

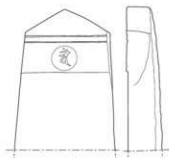
押図 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第105図	臼杵市 119	風潮板碑	文献46	明德3年 (1392)		凝灰岩	三角形の頭部下に2条切込と突出する額部を配す。額部に種子1字、碑面上部に種子4字と蓮華文を彫る。基部は基礎に挿し込む。	県有形
第105図	臼杵市 099	名塚板碑・名塚石造物	文献46	永正2年 (1505)		凝灰岩	三角形の頭部下に額部が突出し、上部に段を削り出す。額部に種子、碑面の方形区画内に地蔵を彫る。	県有形
第105図	臼杵市 117	天手板碑	文献46	大永5年 (1525)		凝灰岩	三角形の頭部下に細線を2条差し額部を区画する。額部には月輪、碑面上部に種子を刻む。基部は欠損。	市有形
第105図	臼杵市	荒田道跡板碑	文献4		58	凝灰岩	積石塚上にあつた整形板碑。頭部は三角形に尖り、正面・側面に2条の切込みを入れる。額部はない。	
第105図	津久見市 017	鬼丸板碑	文献46	元和10年 (1624)		凝灰岩	三角形の頭部に万字を刻む。基部は方形形状に突出する。	市有形
第106図	佐伯市 023	一瀬家石塔群	文献46	文明7年 (1475)		凝灰岩	三角形の頭部下に2条切込と幅広の額部を配す。碑面上部に種子を刻む。	



豊後大野市 096 五郎丸板碑
明応2年 (1493)



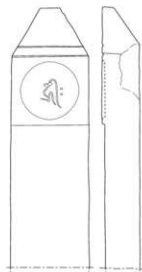
豊後大野市 127 藤原板碑
永正9年 (1512)



豊後大野市 西ヶ原板碑
大永6年 (1526)

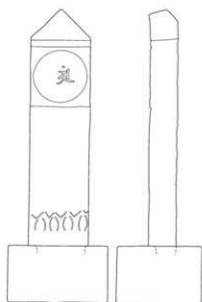


豊後大野市 205 門板碑
天文3年 (1534)

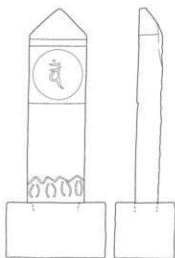


豊後大野市 013 塚ノ元板碑
(板碑1) 天文7年 (1538)

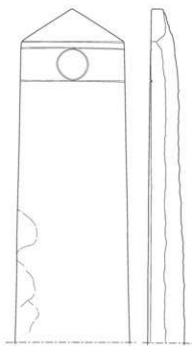
第101図 板碑実測図23【豊後大野②】(1/20)



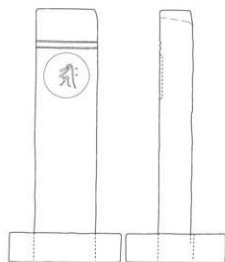
豊後大野市 084 高添上板碑
(板碑 1) 天文 8 年 (1539)



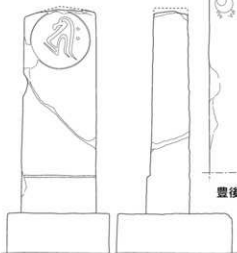
豊後大野 084 高添上板碑
(板碑 2) 天文 8 年 (1539)



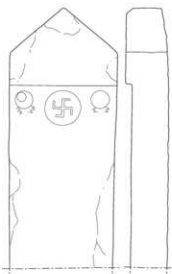
豊後大野市 百枝板碑
天文 10 年 (1541)



豊後大野市 013 塚ノ元板碑 (板碑 2)
天文 19 年 (1550)



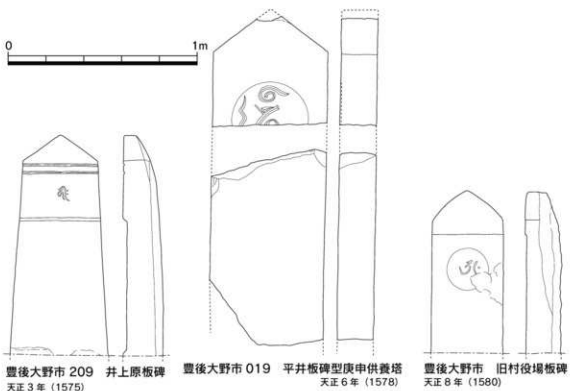
豊後大野市 館ノ原墓地板碑
永禄 7 年 (1564)



豊後大野市 203 小野崎板碑
元亀 2 年 (1571)



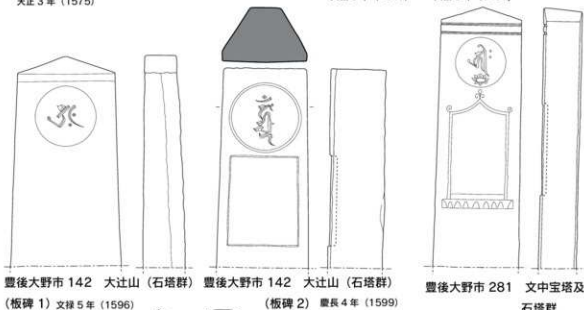
第102図 板碑実測図24[豊後大野③](1/20)



豊後大野市 209 井上原板碑
天正 3 年 (1575)

豊後大野市 019 平井板碑型庚申供養塔
天正 6 年 (1578)

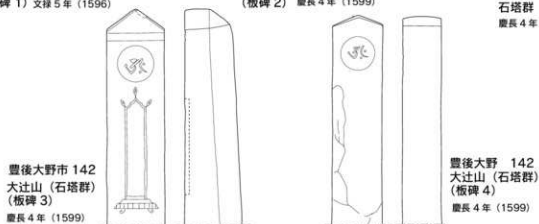
豊後大野市 旧村役場板碑
天正 8 年 (1580)



豊後大野市 142 大辻山 (石塔群)
(板碑 1) 文禄 5 年 (1596)

豊後大野市 142 大辻山 (石塔群)
(板碑 2) 慶長 4 年 (1599)

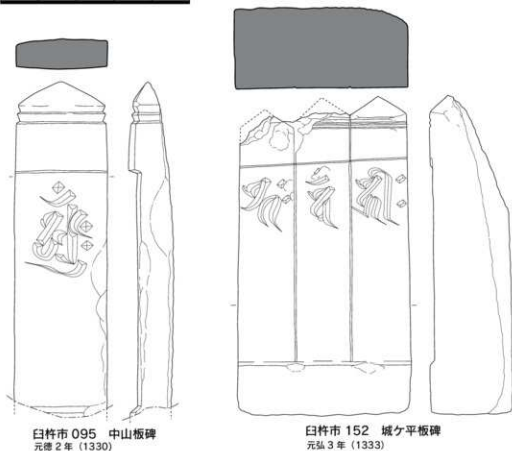
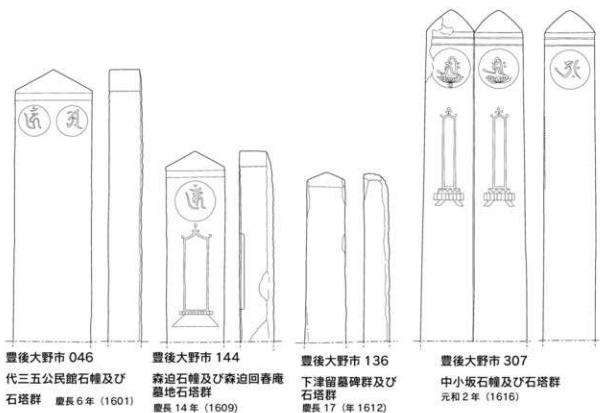
豊後大野市 281 文中宝塔及び
石塔群
慶長 4 年 (1599)



豊後大野市 142
大辻山 (石塔群)
(板碑 3)
慶長 4 年 (1599)

豊後大野 142
大辻山 (石塔群)
(板碑 4)
慶長 4 年 (1599)

第103図 板碑実測図25【豊後大野④】(1/20)

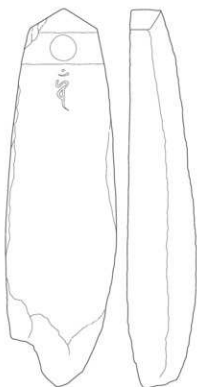


第104図 板碑実測図26【豊後大野⑤・臼杵①】(1/20)



臼杵市 099 名塚板碑
永正 2 年 (1505)

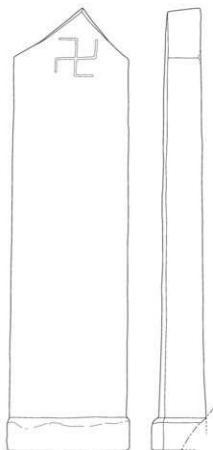
臼杵市 119 風瀬板碑 明徳 3 年 (1392)



臼杵市 117 天手板碑
大永 5 年 (1525)



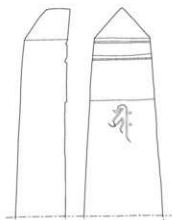
臼杵市 荒田遺跡板碑



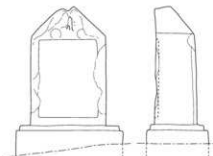
津久見市 017 鬼丸板碑
元和 10 年 (1624)



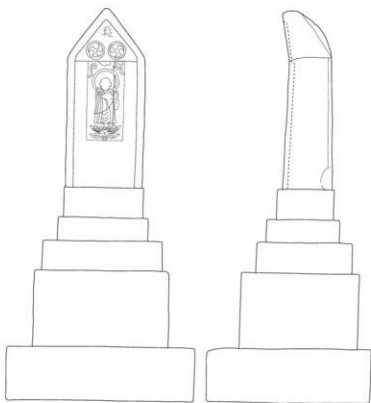
第105図 板碑実測図27【臼杵②・津久見】(1/20)



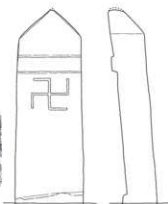
佐伯市 023 一瀬家石塔群
文明 7 年 (1475)



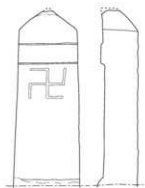
佐伯市 130 地藏/本庚申塔
天正 4 年 (1576)



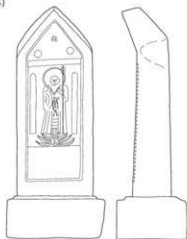
佐伯市 134 延命庵板碑
天正 2 年 (1574)



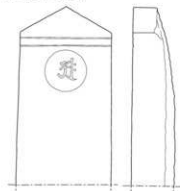
佐伯市 032 稲荷神社石塔群
(板碑 2) 天正 12 年 (1584)



佐伯市 032 稲荷神社石塔群 (板碑 1)
天正 12 年 (1584)



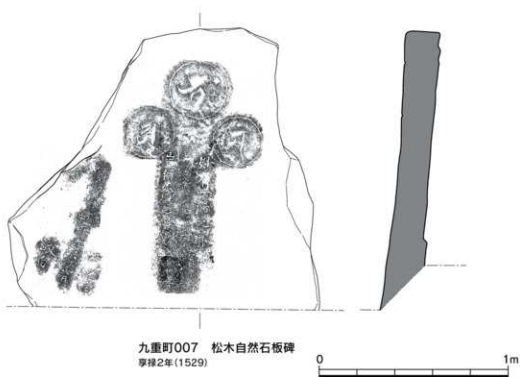
佐伯 117 大川庵板碑群
文祿 4 年 (1595)



佐伯市 088 見明今立板碑
元和 5 年 (1619)



第106図 板碑実測図28 [佐伯] (1/20)

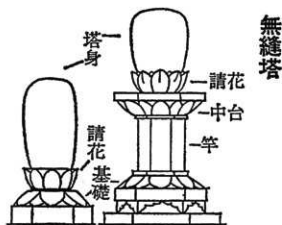


第107図 板碑実測図29【自然石板碑】(1/20)

神図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第106図	佐伯市 134	延命庵板碑	文献46	天正2年(1574)		凝灰岩	5段の基礎上に立つ、三角形の頭部に種子と巴文、碑面方形区画内に地藏像を彫る。	
第106図	佐伯市 130	地藏ノ本庚申塔	文献46	天正4年(1576)		凝灰岩	頭部は先割れの三角形で、種子を小さく刻む。碑面は方形に彫り窪め銘文を刻む。	市有形
第106図	佐伯市 032	福荷神社石塔群(板碑1)	文献46	天正12年(1584)		凝灰岩	三角形の頭部下に頸部を突出する。頸部下に万字と銘文を刻む。基部は張り出す。	市有形
第106図	佐伯市 032	福荷神社石塔群(板碑2)	実測(宮内)	天正12年(1584)	103	凝灰岩	板碑1と同型式。	市有形
第106図	佐伯市 117	大川庵板碑群	文献46	文祿4年(1595)		凝灰岩	三角形の頭部に種子と月輪2つを配す。碑身は方形に彫り窪め地藏像と銘文を彫る。	
第106図	佐伯市 088	見明今立板碑	文献46	元和5年(1619)		凝灰岩	三角形の頭部下に2条の細線を施す。碑面上部に細線円相と種子を刻む。	市有形
第107図	九重町 007	松木自然石板碑	実測(吉田)	享祿2年(1529)	147		板状の自然石表面に円相と釈迦三尊の種子を彫り、その下に銘文を刻む。	県有形

(8) 無縫塔

中国に起源をもち、宋の仏教文化を受容する中で日本にも根付いた石造物で、主に禅宗僧侶の墓塔として用いられた。基礎の上に請花を置き、その上に卵形の塔身を載せた単制無縫塔と、基礎、竿、中台、請花、塔身からなる重制無縫塔の2形式が存在する(第108図)。基礎及び竿、中台は八角形をなすものが多い。基礎の上部には反花座を持つものもある。掲載実測図は30点である。

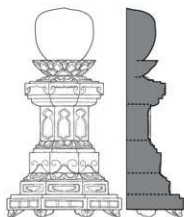


第108図 無縫塔解説図

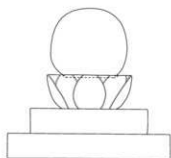
挿図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第109図	中津市 202	智剛寺の石塔群	文献59		110	安山岩	基礎5段で下に脚が付く。基礎は格状間と反花を2段持つ。竿には無縫状文様を彫り埋める。中台上に反花座を持つ。請花は先割蓮弁を刻み、上に卵形の塔身を置く。	
第109図	中津市 218	羅漢寺鷲足山歴代住職墓地石塔群(無縫塔1)	文献59		80	凝灰岩	岡山円童僧侶の墓塔と伝わる単制無縫塔。基礎2段の上に蓮弁を刻む請花と球体の塔身が載る。	
第109図	中津市 206	古羅漢北壁石塔群	文献59			安山岩	単制無縫塔。基礎2段の上に蓮弁を刻む請花と球体の塔身が載る。	
第109図	中津市 218	羅漢寺鷲足山歴代住職墓地石塔群(無縫塔2)	文献59				単制無縫塔。基礎は一石3段の基礎の上に請花と球体の塔身が載る。請花には卵形の彫刻を施す。	
第109図	中津市 218	羅漢寺鷲足山歴代住職墓地石塔群(無縫塔3)	文献59				単制無縫塔。基礎上に一石からなる請花と塔身が載る。塔身は高く削がれる。	
第109図	中津市 218	羅漢寺鷲足山歴代住職墓地石塔群(無縫塔4)	文献59		67	安山岩	基礎に4世明新芸門の銘を持つ単制無縫塔。基礎上に一石の請花と塔身が載る。請花の蓮弁は直線形。	
第109図	中津市 218	羅漢寺鷲足山歴代住職墓地石塔群(無縫塔5)	文献59				単制無縫塔。基礎2段の上に一石の請花と塔身が載る。請花は無文。	
第109図	中津市 218	羅漢寺鷲足山歴代住職墓地石塔群(無縫塔6)	文献59				単制無縫塔。基礎はなく一石の請花と塔身からなり、塔身頂部は平坦となる。	
第109図	中津市 218	羅漢寺鷲足山歴代住職墓地石塔群(無縫塔7)	文献59				単制無縫塔。基礎はなく請花と塔身は別石。塔身頂部が先尖りとなる。	
第109図	中津市 218	羅漢寺鷲足山歴代住職墓地石塔群(無縫塔8)	文献59				形状は無縫塔7に似るが請花と塔身が一石。塔身頂部が先尖りとなる。	
第109図	宇佐市 162	円通寺石塔群	実測(横澤)	天正9年(1581)	99	凝灰岩	重制無縫塔。基礎・竿・中台は八角形。平前面に刻銘あり。うち人名を刻む面は碑形を隔架する。	
第110図	宇佐市 028	天竜寺国東塔七周辺石塔群(無縫塔1)	文献59		156	安山岩	基礎3段で上部に反花を配す。2段目には格状間を持つ。竿には無縫状文様を彫り埋める。中台上に反花を持つ。請花には薄く蓮弁を刻み、球体の塔身が載る。	

神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定	
第110国	宇佐市	028	天竜寺国東塔と 周辺石塔群(無 礎塔2)	文献59		161	安山岩	形状は無礎塔1に似る。塔身基部を 欠損。	
第110国	宇佐市	028	天竜寺国東塔と 周辺石塔群(無 礎塔3)	文献59		109	安山岩	形状は無礎塔1・2に似るが、平文様 が縦列で退化傾向を示す。塔身下の 請花を欠失。塔身は球体。	
第110国	宇佐市	242	小幡戦没者墓地 公園石塔群	文献59			安山岩	部材が不揃いだか形状や特徴は天 竜寺無礎塔3に近い。	
第110国	国東市	370	實際寺開山堂石 塔群	文献31	貞和5年 (1349)			開山自開正徳の墓塔で、2重の基段 上段は高く、1面に銘文を刻む。基礎・ 平・中台は八角形で、基礎上に反花、 下に脚が付く。中台上に丈の高い請 花を配し塔身を置く。	
第110国	国東市	160	報恩寺石塔群 (無礎塔1)	文献31			安山岩	八角形の基壇上に載る。基礎・平・中 台は八角形。基礎上面に高い反花と 下部に脚が付く。平の4面に圓花蓮を 陽刻する。中台上反花の上に請花と 球形の塔身が載る。	市有形
第110国	国東市	160	報恩寺石塔群 (無礎塔2)	文献31				基礎・平・中台は八角形。基礎側面に 縦・横の蓮子を刻む。中台上反花に 楕円形の塔身が載る。本来の組合せ でない可能性が高い。	市有形
第111国	杵築市	181	井門家墓地無礎 塔群(無礎塔1)	実測 (小林)	永禄4年 (1561)	111	凝灰岩	重制無礎塔で、基礎はコンクリートに 埋め込む。平・中台は八角形。反花上 部に連珠文を施し、上に平が載る。平 4面に万字を陽刻し、3面に種子を小 きく刻む。中台は露盤が立ち、基部に 連珠文を施す。塔身は高く、請花との 境にも連珠文を施す。	
第111国	杵築市	181	井門家墓地無礎 塔群(無礎塔2)	実測 (井)		80.5	凝灰岩	重制無礎塔で基礎・塔身・中台は八 角形。2段基壇上に反花と格状間を 持つ基礎を置き、下部に脚が付く。平 4面に万字を陽刻し、他4面に種子を 刻む。請花は蓮弁を刻み、塔身境に 連珠文を施す。塔身は欠失。	
第111国	杵築市	182	報恩寺石塔群	文献50				密室正横の墓塔と伝わる重制無礎 塔。基礎・平・中台は八角形。基礎上 面に反花、下部に脚を配す。平の4面 に圓花蓮を陽刻する。中台上は低い 反花で、上に3段の蓮弁を刻む請花と 球形の塔身が載る。	
第111国	杵築市	318	宝院寺開山塔	文献50			凝灰岩	悟庵智徹の墓塔と伝わる重制無礎 塔。基礎・平・中台は八角形。基礎上 面に反花、下部に高い脚が付く。平4 面に圓花蓮を陽刻。中台上は低い反 花で、上に請花と球体の塔身が載る。	市有形
第112国	別府市	097	松音寺石塔群 (無礎塔1)	実測 (横澤)	弘治3年 (1557)	80	凝灰岩	重制無礎塔で平・中台は八角形。方 形基礎に平が載る。中台上に蓮弁を 刻む反花が付く。露盤が立つ。請花と 塔身は一言で、頂部は尖る。	市有形
第112国	別府市	097	松音寺石塔群 (無礎塔2)	実測 (横澤)	天正3年 (1575)	92	凝灰岩	重制無礎塔で基礎・平・中台は八角 形。中台上に蓮弁を刻む反花が付く。 露盤が立つ。塔身は高く頂部は丸 く膨らむ。	市有形
第112国	由布市	026	大応寺の無礎塔	実測 (横澤)	応安元年 (1368)	98	凝灰岩	大友氏8代氏時の墓塔と伝わる重制 無礎塔で、基礎・平・中台は八角形、 請花・塔身は円形。平の正面側3面と 背面に銘文を刻む他、一部で墨書種 子が見られる。	市有形

神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第112国	由布市 120	北原石造無縫塔 と周辺石塔群	実測 (宮内)	正長2年 (1429)	76	安山岩	重制無縫塔で基礎・竿・中台は八角形。基礎上に反花を持ち、下部に脚が付く。竿4面には赤色形の鏤形が付く。中台の脚は蓮子を削み、反花上に丸みのある塔身を載く。	県有形
第112国	大分市 001	田ノ浦石塔群	実測 (横澤)	大永5年 (1525)	115	凝灰岩	重制無縫塔で基礎・竿・中台は八角形。基礎上に反花座を配し、下部には脚が付く。竿は4面に鏤形が付く。中台上部に反花を配し、上に一石の請花と塔身が載る。	
第113国	臼杵市 077	大友義隆墓と周 辺石塔群	実測 (横澤)	天文19年 (1550)	97.5	凝灰岩	重制無縫塔で基礎・竿・中台は八角形。基礎上に反花座、下部に脚が付く。竿2面に方形の鏤形が付く。残り6面に鏤を刻む。内4面に細腰二重円内に種子を墨書するが、多くは不鮮明。別銘は白下地に朱を塗る。中台上に刺菱と単弁の反花を配し、上に一石の請花と塔身が載る。	市有形
第113国	臼杵市 113	千光寺跡無縫塔	実測 (横澤)	永祿7年 (1564)	115	凝灰岩	重制無縫塔で基礎・竿・中台は八角形。基礎2重で反花上に竿が載り、4面に赤色形の鏤形が付く。中台は上下に蓮弁を刻む。塔身は縦長で先端が尖る。	市史跡
第113国	津久見市 033	鍛冶屋無縫塔1	実測 (横澤)	天正3年 (1575)	93	凝灰岩	重制無縫塔で基礎・竿・中台は八角形。基礎上反花に竿が載り、2面に蓮実の鏤形を隔刻する。中台上反花に一石の請花と塔身が載る。	
第113国	津久見市 033	鍛冶屋無縫塔2	実測 (横澤)	天正5年 (1578)	89	凝灰岩	無縫塔1とはほぼ同形。請花に蓮弁を削み、塔身頂部は丸い。	



中津市 202 智剛寺の石塔群



中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群 (無縫塔 1)



中津市 206 古羅漢北壁石塔群



中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群 (無縫塔 2)



中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群 (無縫塔 3)



中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群 (無縫塔 4)



中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群 (無縫塔 5)



中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群 (無縫塔 6)



中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群 (無縫塔 7)



中津市 218 羅漢寺鷄足山歴代住職墓地石塔群 (無縫塔 8)

平部拓影 S=1/10



4面

5面

6面

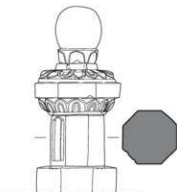


3面

2面

1面(実測正面)

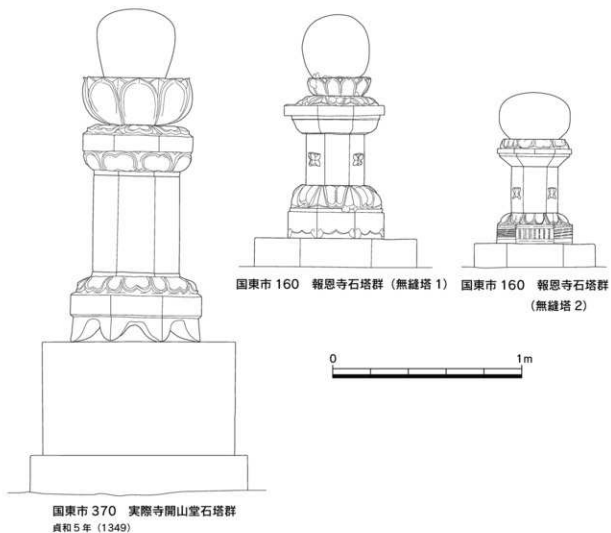
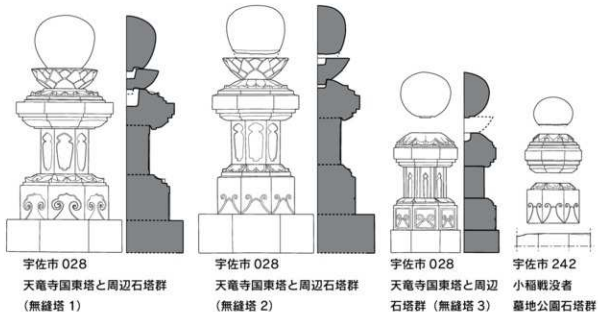
8面



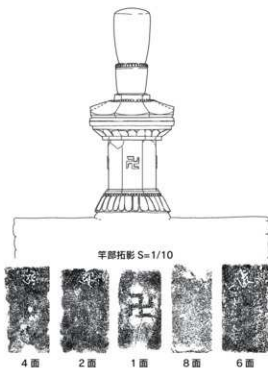
宇佐市 162 円通寺石塔群
天正9年(1581)



第109図 無縫塔実測図1【中津・宇佐①】(1/20)



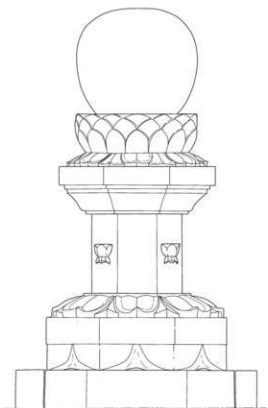
第110図 無縫塔実測図2【宇佐②・国東】(1/20)



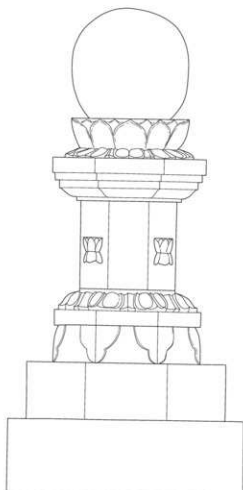
杵築市181 井門家墓地無縫塔群(無縫塔1)
永祿4年(1561)



杵築市 181 井門家墓地無縫塔群(無縫塔2)

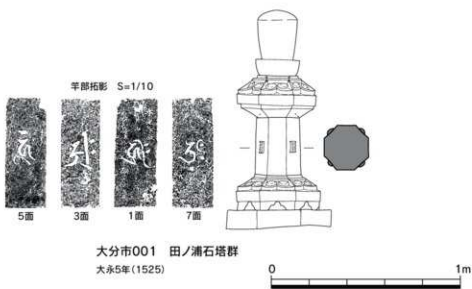
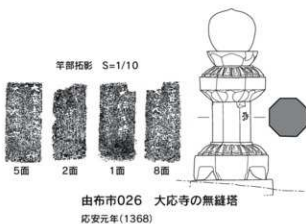


杵築市182 報恩寺石塔群無縫塔

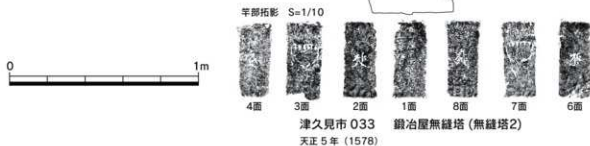
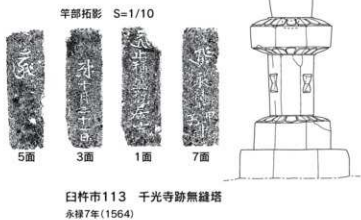
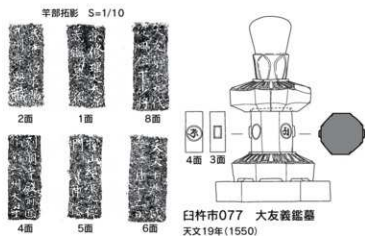


杵築市318 宝陀寺開山塔

第111図 無縫塔実測図3〔杵築〕(1/20)



第112図 無縫塔実測図4【別府・由布・大分】(1/20)

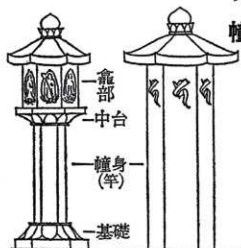


第113図 無縫塔実測図5【臼杵・津久見】(1/20)

(9) 石幢

下から基礎、竿（幢身）、中台、龕部、笠、宝珠からなる重制石幢と、中台・笠を欠く単制石幢がある（第114図）。県内では単制石幢はほとんど無く、重制石幢が主流である。単制石幢は暦応2年（1339）銘を持つ豊後大野市の早尾原石幢（豊後大野市168）が最も古いが、幢身に板碑形を呈する特異な形状で、他に例を見ない。重制石幢は大分市中間石幢（大分市308）が応永6年（1399）銘で最も古く、15～16世紀に一般化する。竿や中台・龕部の形状は円形・方形・六角形・八角形のものが見られる。龕部には六地藏や十王を刻出することから、六地藏や十王信仰との関係で捉えられる石造物である。掲載実測図は16点である。

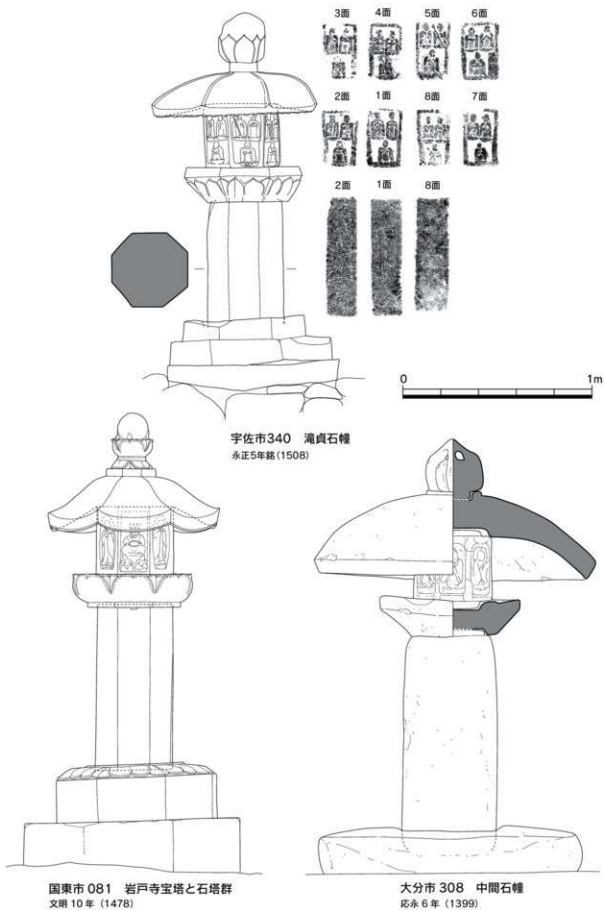
石
幢



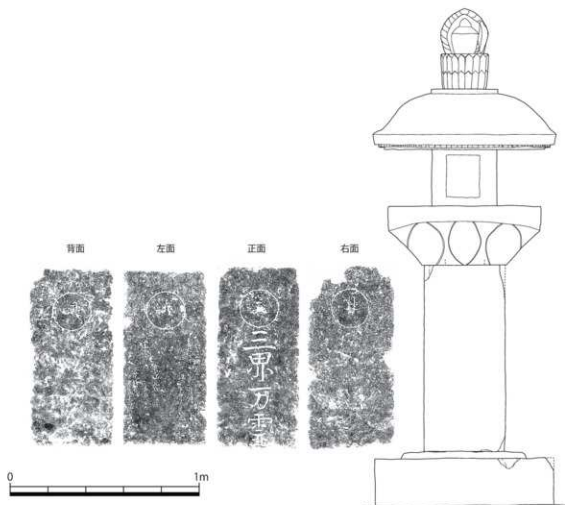
第114図 石幢解説図

神図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第115図	宇佐市 340	滝貞石幢	実測 (横澤)	永正5年 (1508)	199	凝灰岩	基礎・竿・中台・龕部・笠とも八角形を基調とする。幢身各面に上段2体、下段1体の計3体、全24体の比呂像を彫る。竿に永正5年と「本願久次」の銘文がある。中台と宝珠には蓮弁を刻む。	県有形
第115図	国東市 081	岩戸寺宝塔と石塔群	文献32	文明10年 (1478)	253	安山岩	基礎・竿・龕部・笠は八角形、中台は円形。基礎上面に蓮弁を刻む反花を配し竿を載せる。龕部には六地藏と阿彌陀三尊像、圓座像を彫刻する。笠上には露盤が立ち、その上に反花・請花・宝珠を載せる。	県有形
第115図	大分市 308	中間石幢	文献35	応永6年 (1399)	222	凝灰岩	龕部は八角形の他、竿・中台・笠は円形を基調とする。笠裏に応永6年銘と造立に関わった34人の名前が墨書で記される。笠上には火災宝珠を載せる。	県有形
第116図	大分市 211	福城寺石幢・宝塔と周辺石塔群	実測 (井)	大永6年 (1526)	267	凝灰岩	龕部を欠き、代わりに火袋が載る。基礎・竿・中台は方形で笠は円形。笠裏には垂木を彫る。宝珠は火災形。	市有形
第116図	由布市 029	長野石幢と周辺石塔群	実測 (坂本・横澤)	文明18年 (1486)	165	凝灰岩	基礎・竿・中台・龕部・笠とも六角形。竿・中台の1面に割付線がある。龕部に六地藏を彫る。笠裏には垂木を刻む。笠上は露盤が立ち、その上に蓮弁を刻む宝珠が載る。	県有形
第117図	由布市 003	仏光寺六地藏石幢と周辺石塔群	実測 (藤貫・吉田)	大永4年 (1524)	138	凝灰岩	竿・中台・龕部・笠は八角形で、龕部の6面に六地藏を刻む。笠裏には垂木を表現する。銘文に「大徳主守佐阿彌長弘公」とあり、宇佐神宮の水弘氏と関係する塔である。	県有形
第117図	日田市 040	上野町石幢	文献52	長禄4年 (1460)	148	凝灰岩	竿・中台・龕部・笠は六角形で、幢身各面に六地藏を刻む。六地藏には彫り色が残る。竿の1面に長禄4年銘と3行に亘る刻路あり。	市有形
第117図	竹田市 114	円福寺石幢	実測 (宮内)	天文18年 (1549)	230	凝灰岩	基礎・竿・中台・龕部・笠とも方形。竿の4面上部四角内に種子を浅く彫る。龕部3面には六地藏を2体ずつ、残り1面には不動明王を彫る。笠裏には垂木を持ち、笠上には露盤が立ち、蓮蓮子を刻む。	県有形

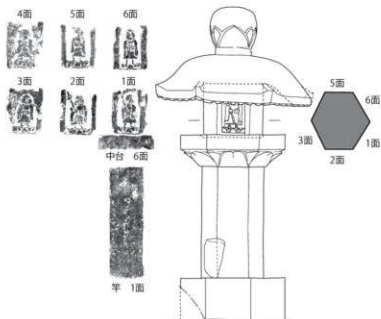
神岡 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第118回	豊後大野市 168	早尾原石幢	実測 (横澤・ 五十川)	暦応2年 (1339)	204	凝灰岩	単制石幢で、八角形の幢身各面は整形板碑の形状で、突出した頸部や2条の切込も表現する。笠は方形で上に宝珠が載る。正面に「浄土三部経一石一字」、背面に「説法華経三十二部」(光明真言万三千字)書写法華経七分)とともに暦応2年の銘を刻む。	県有形
第118回	豊後大野市 311	地藏原石幢	実測 (横澤)	永正5年 (1508)	236	凝灰岩	基礎・卒・中台・産部・笠とも方形。卒の4面上部に円相と蓮華座に垂る種子を彫る。産部には六地藏と十王2体を各面2体ずつ彫る。笠裏には垂木を刻む。露盤の上に諸花と宝珠を載せる。	県有形
第119回	豊後大野市 120	紫山石幢及び石塔群	実測 (小林・ 宮内)	天文2年 (1533)	230	凝灰岩	基礎・卒・中台・産部は方形。笠は円形をなす。中台軒には縦連子を刻む。産部4面に2体ずつ六地藏と十王2体を彫る。笠裏には二重垂木を刻む。宝珠は欠失。	県有形
第119回	臼杵市 012	王座石幢と周辺石塔群	実測 (坂本・ 五十川)	応永33年 (1426)	254	凝灰岩 (中台は 安山岩)	産部は八角形で、その他卒・中台・笠は円形を基調とする。幢身8面に六地藏と二王を彫る。卒に応永33年の銘を刻む。笠の上には火災宝珠が載る。	県有形
第120回	臼杵市 093	老松花原石幢と 周辺石塔群	文献14	明応7年 (1498)	255	凝灰岩	基礎は凝灰岩岩盤を利用し、納穴を穿ち方形の卒を挿す。卒の4面に種子を彫る。中台・笠は円形。笠上に方形の諸花と火災宝珠を載せる。	県有形
第120回	臼杵市 142	細枝石幢	実測 (原田)	元亀3年 (1572)	272	凝灰岩	産部は八角形。基礎・卒・中台・笠は円形。基礎は中位が膨らむエンタシス状。産部に六地藏と二王を彫る。笠裏には垂木を刻む。笠上には諸花と火災宝珠を載せる。	市有形
第121回	佐伯市 103	神内釈迦堂石幢	実測 (原田・ 友岡・ 越智)	天文18年 (1549)	239	凝灰岩	基礎・卒・中台・産部・笠とも方形。産部には六地藏と二王を各面2体ずつ彫る。笠裏には垂木を刻む。笠上露盤には横と縦の陰刻線で退化した格状間を表す。火災宝珠下の諸花には細線で蓮弁と、その間に葉脈状の線刻を施す。	県有形
第121回	佐伯市 022	河野家石幢	実測 (原田・ 越智)	元亀4年 (1573)	214	凝灰岩	佐伯市直川床木字尾島地旧在。基礎・卒・中台・産部・笠とも方形。卒4面上部に円相と種子を刻む。産部各面に2体ずつ六地藏と二王を彫る。笠上露盤には3区画の3重方形を彫る。火災宝珠下の諸花には細線で圓花蓮を陰刻する。	県有形



第115図 石幢実測図1【宇佐・国東・大分】(1/20)

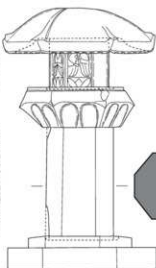
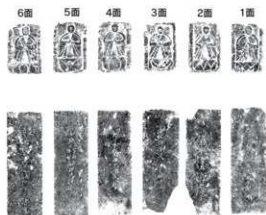


大分市 211 福城寺石幢 大永 6 年 (1526)



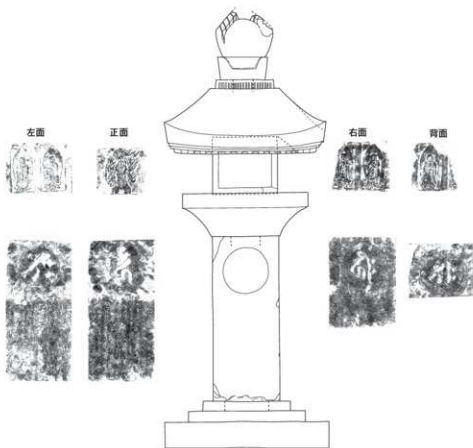
由布市 029 長野石幢と周辺石塔群
文明 18 年 (1486)

第116図 石幢実測図2【大分②・由布①】(1/20)



由布市003 仏光寺六地藏石幢
大永4年(1524)

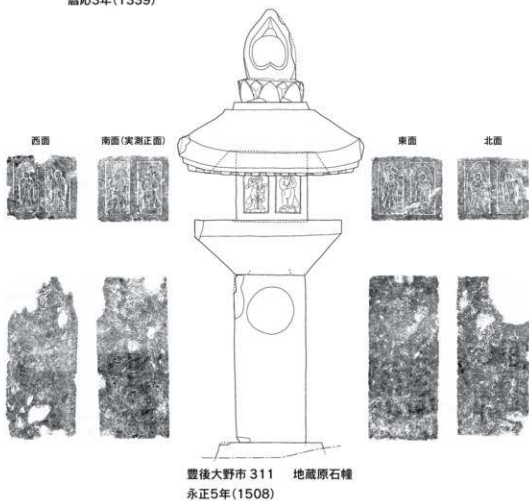
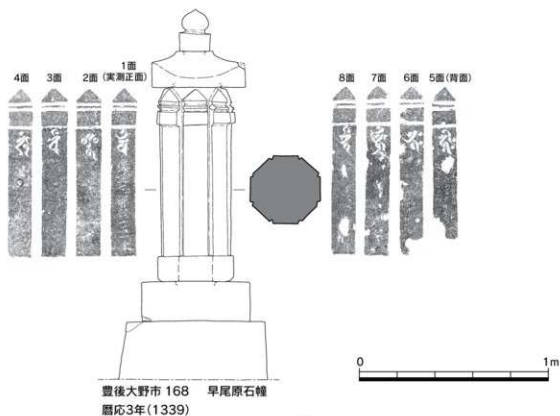
日田市 上野町石幢
長祿4年(1460)



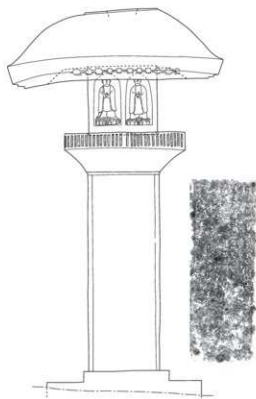
竹田市114 円福寺石幢
天文18年(1549)



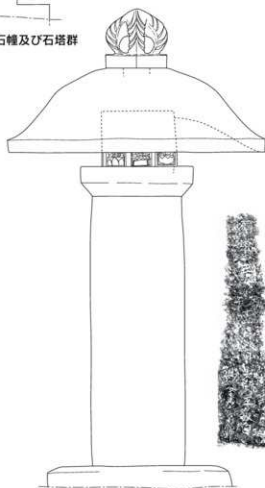
第117図 石幢実測図3【由布②・日田・竹田】(1/20)



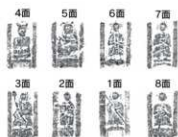
第118図 石幢実測図4【豊後大野】(1/20)



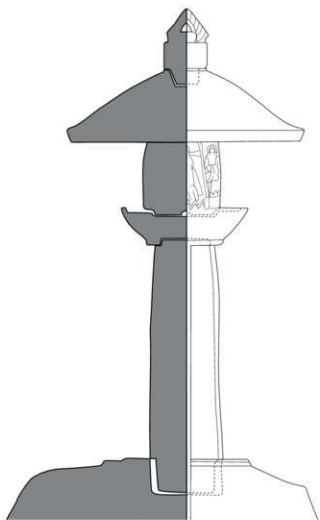
豊後大野市120 柴山石幢及び石塔群
天文2年(1533)



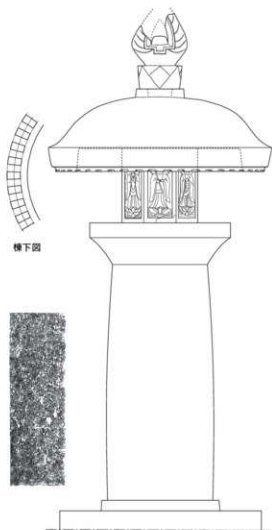
臼杵市012 王座石幢と周辺石塔群
応永33年(1426)



第119図 石幢実測図5【臼杵①】(1/20)



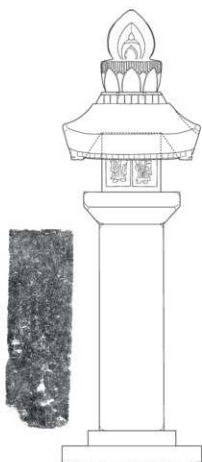
臼杵市 093 老松花原石幢之周边石塔群
明応7年(1498)



臼杵市 142 細枝石幢(1-20)
元龜3年(1572)



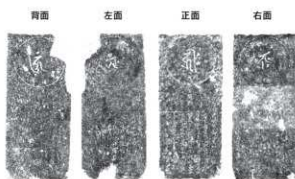
第120図 石幢実測図6【臼杵②】(1/20)



佐伯市 103 神内祇遶堂石幢
天文 18 年 (1549)



佐伯市 022 河野家石幢 元龜 4 年 (1573)



第 121 图 石幢实测图 7 [白杵②·佐伯] (1/20)

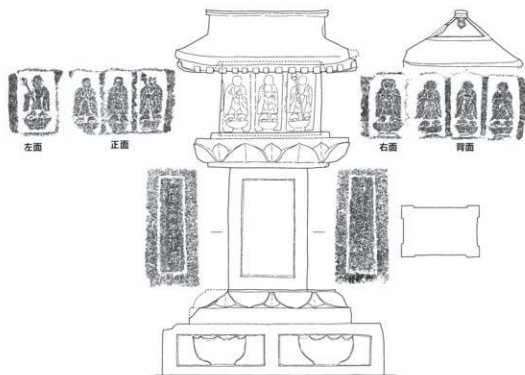
④ 石殿

石塔の構造は石幢と共通するが、笠の代わりに入母屋形式の屋根が載る木造建築形式の石造物である。基礎・龕部・入母屋屋根からなる単制石殿と、それに竿と中台が付加された重制石殿がある。竿や中台、龕部は方形を基調とし、龕部には六地藏や十王を刻む。石幢と同様に六地藏や十王信仰との関係が深い石造物である。分布状況としては石幢がほぼ全県下に認められるのに対し、ほぼ国東半島周辺に限定される状況である。紀年銘資料から15～16世紀にかけて造立されたことが分かる。掲載実測図は6点である。

排図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第122図	豊後高田市 209	中之島旅館石殿・石塔群	文献25	暦応4年(1341)			基礎上に1面に銘文を刻む竿を置く。中台は板状。軸部には種子と銘文を刻む。上に入母屋の低い屋根が載る。	
第122図	豊後高田市 023	真玉寺石殿	実測(横澤)	長祿3年(1459)	192	凝灰岩	2区画の格状間を配し、上部に反花を持つ基礎上に竿を置く。竿の各面は方形に彫り窪め、短軸側面に銘文を刻む。中台には蓮弁を刻む。軸部2面に六地藏を3体、2面に尊像2体を彫る。屋根は入母屋で側面に懸魚、裏に垂木を刻みだす。	県有形
第123図	豊後高田市 387	延壽寺石塔群	文献23	応仁2年(1468)	127.5	凝灰岩	2段の基礎上に中台が載る。中台下部は蓮弁を刻む請花とする。軸部は正面・背面に六地藏、側面に虚空蔵菩薩と脇侍を伴う聖観音菩薩を彫る。像には赤・白・黒・褐色の彩色を施す。屋根は入母屋で椽に化粧椽を配し、裏には垂木を刻む。	県有形
第123図	豊後高田市 422	熊野草地石塔群	文献23	天文10年(1541)			2段の基礎上に方形区画内に2体の地藏を彫る軸部を置く。笠は寄棟で上部に2条の沈楹を入れる。軸部側面に銘文を刻む。	県有形
第123図	国東市 160	報恩寺石塔群	文献30	応永25年(1418)	245		2段の基礎上に反花を配し、上に軸部が載る。軸部正面・背面には十王を5体ずつ、両側面に地藏像・観音像を各1体彫る。屋根は入母屋で裏に垂木を刻む。中台は欠失。竿は別があり、表面に蓮卒の鬼と銘文を彫る。	
第124図	杵築市 034	東光寺石幢と板碑	実測(横澤)	大永5年(1525)	132	凝灰岩	1石2段の基礎上に載る。竿3面に十王を各3体、1面に十王と尊像を彫る。中台上の軸部各面には各2体ずつ六地藏と蓮華座に立つ尊像を彫る。屋根は入母屋で裏に垂木を刻む。懸魚には赤彩を施す。	市有形



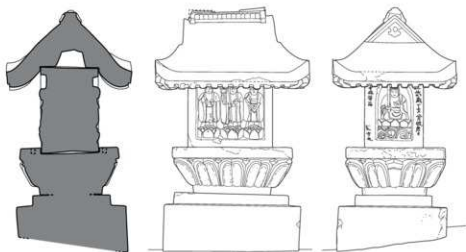
豊後高田市 209 中之島旅館石殿・石塔群
 暦元 4 年 (1341)



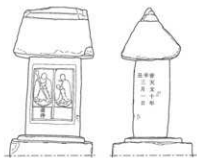
豊後高田市 023 真玉寺石殿
 長祿 3 年 (1459)



第122図 石殿実測図1【豊後高田】(1/20)



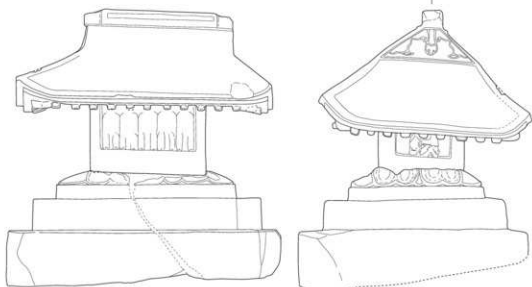
豊後高田市 387 延壽寺石塔群 応仁2年(1468)



豊後高田市 422 熊野巖地石塔群
天文10年(1541)

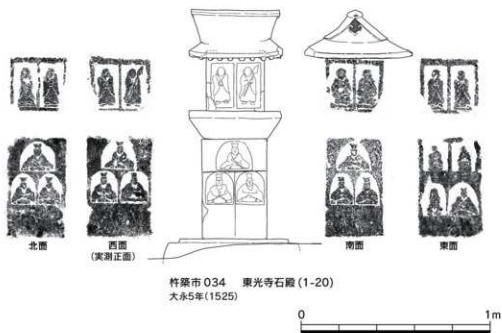


(平部)



国東市 160 報恩寺石塔群 応永25年(1418)

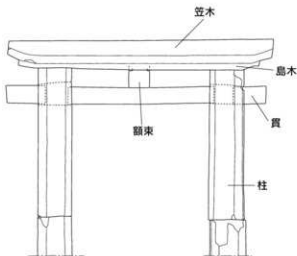
第123図 石殿実測図2【国東】(1/20)



第124図 石殿実測図3【杵築】(1/20)

(1) 石鳥居

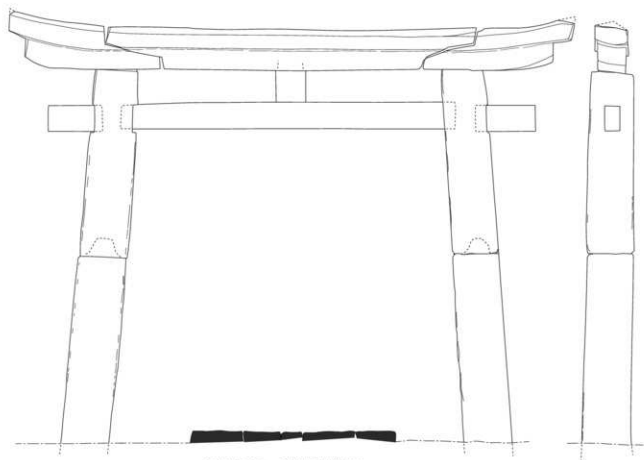
2本の柱の上部に鳥木・笠木を載せ、その下に貫を渡して柱を固定した石造物である。鳥木と貫の間に額束を嵌め込む。笠木と柱の間に台輪を嵌めるものもある(第125図)。柱の断面形状は方形で四隅を面取りした八角形状を呈するものや楕円形状、円形のものが見られる。県内の中世石鳥居の類例は必ずしも多くないが、大野川中流域周辺(豊後大野市)に多く分布が認められ、臼杵市や大分市、日出町でそれぞれ1例ずつ認められる。銘文から観応2年(1351)に作られたことが分かる豊後大野市平尾社鳥居(豊後大野市108)が最も古い例となるが、この鳥居は近世に作り直されたことが銘文から判明する。同市熊野神社石鳥居(豊後大野市082)の正平12年(1357)銘がそれに次ぎ、15・16世紀に続いている。掲載実測図は9点である。



第125図 石鳥居解説図

挿図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第126図	日出町 019	八津嶋神社鳥居と宝篋印塔	実測(藤貫)		340	凝灰岩	八津嶋神社二の鳥居で、柱は2材、笠木・鳥木は3材を接ぎ合わせる。柱は円柱。笠木と鳥木の厚みにあまり差がない。柱の貫孔は貫通せず、貫は3材を嵌め込む。笠木・鳥木の1材と貫の2材、額束は後補である。鳥居に銘はないが城内文書から永禄7年(1564)11月5日に大友宗麟が寄進したことが判明する。	町有形
第127図	大分市 201	竹ノ内神社石塔群	実測(横澤)		245	凝灰岩	柱及び笠木・鳥木をそれぞれ1石で作る。貫及び額束を欠く。柱は四隅を面取りした八角形で、貫孔は貫通する。柱の上部には八角形の台輪を持つ。笠木の両端は縦く反る。柱と鳥木下面に割付線を刻む。	
第127図	豊後大野市 108	平尾社鳥居	実測(宮内・五十川)	観応2年(1351)	304	凝灰岩	観応2年に作られ、以後中世から近世にかけて数度の補修を受けているが、古い形式を保つ。柱は八角形で2材を接ぐ。笠木は直線的で両端下部が縦く反るが上部は直線的。貫は3材を柱に嵌める。柱及び鳥木下面に刻路あり。	県有形
第128図	豊後大野市 082	熊野神社石鳥居	実測(藤貫)	正平12年(1357)	258	凝灰岩	解体された部材から復元して図化。貫及び額束を欠く。柱と笠木・鳥木はそれぞれ1石で作る。柱の貫孔は貫通する。笠木は直線的で両端がわずかに反る。両側の柱に銘文を刻む。	
第128図	豊後大野市 043	上津神社本殿西側鳥居	実測(藤貫)	至徳3年(1386)	279	凝灰岩	柱は1石、笠木・鳥木は2材を中央で接ぎ合わせる。柱の貫孔は貫通せず、貫は3材を嵌め込む。柱は方形で四隅をわずかに面取りする。裾部は広がりをもつ。左側柱は後補であるが、銘文は以前と同じ文字を刻む。右側柱に至徳3年銘。左側柱に「大願寺藤原朝臣親世遺石」を刻む。願主は大友氏10代親世である。以前は「菱形山」と書かれた額束があったが現在は紛失する。	

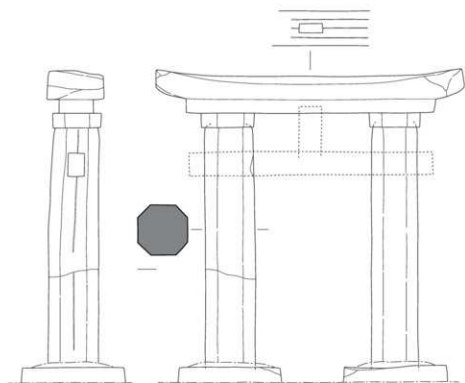
神国 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第129回	豊後大野市 044	上津神社一ノ鳥居	実測 (聊費)	寛正3年 (1462)	272	凝灰岩	完存の石鳥居。柱及び笠木・島木をそれぞれ1石で作る。笠木・島木は直線的で、両端部がこくわずかに反る。柱は円形で、上部をやや細くして島木に挿入する。額東表には「八幡宮山」、背面には寛正3年銘を刻む。	県有形
第129回	豊後大野市 149	下熊笠社鳥居及び下熊笠社宝篋印塔	実測 (聊費)	天文7年 (1538)	232	凝灰岩	柱及び笠木・島木をそれぞれ1石で作る。笠木・島木は直線的で、両端部が反る。貫は欠失し、現状では島木の下に後補で接いでいるが、本来は貫孔の位置にくる。貫孔は貫通せず、3材を嵌め込む。柱は方形で、四隅をわずかに面取りする。	市有形
第130回	豊後大野市 068	黒松阿蘇社鳥居	実測 (聊費)		337	凝灰岩	柱及び笠木・島木をそれぞれ1石で作る。笠木・島木は直線的で、両端部が反る。貫は欠失し、現状は新材で補う。貫孔は貫通せず、3材を嵌め込む。額東の中心に円形の目輪をあしらひ、正面・背面ともに赤彩を施す。柱は八角形であるが額部は方形で台石に押し込む。銘文はないが阿蘇社由緒書によると延文6年(1361)4月5日に阿蘇惟村によって作られたことが分かる。	市有形
第131回	臼杵市 044	深田の鳥居	文献3			凝灰岩	柱は2材、笠木・島木は3材を抜き合わせる。笠木・島木は緩く反る。柱は円柱で、枿を押し込んで接ぐ。貫は3材。額東の下半に「王」字を刻む。	県有形



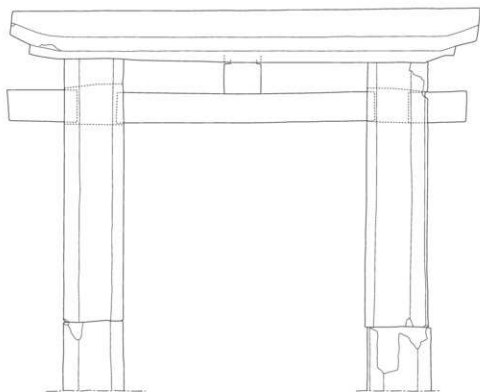
日出町019 八津嶋神社鳥居
永禄7年(1564)寄進文書



第126図 鳥居実測図1【日出】(1/30)



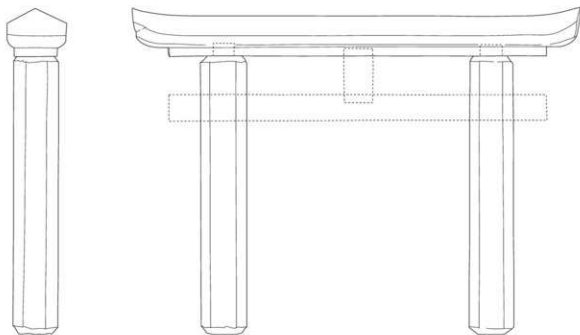
大分市201 竹ノ内神社石塔群



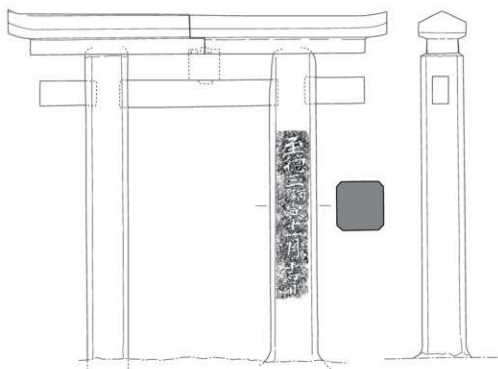
豊後大野市 108 平尾社鳥居
 観応2年(1351)



第127図 鳥居実測図2【大分・豊後大野①】(1/30)



豊後大野市082 熊野社石鳥居
正平 12 年 (1357)



豊後大野市043 上津神社本殿西側鳥居
至徳3年(1386)

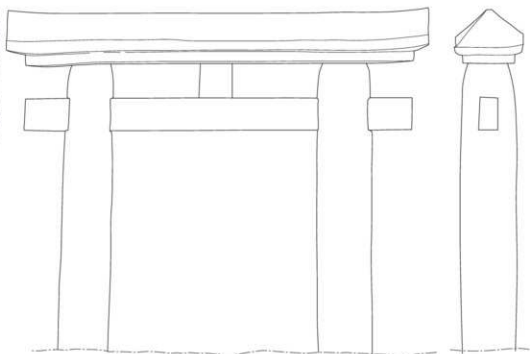


第128図 鳥居実測図3【豊後大野②】(1/30)

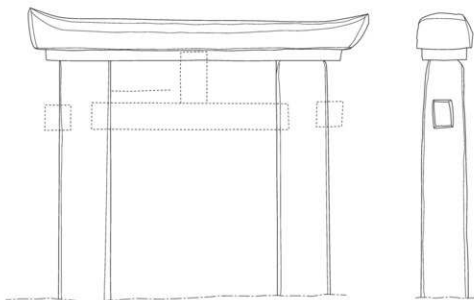
額束拓影
S=1/15
(正面)



(背面)



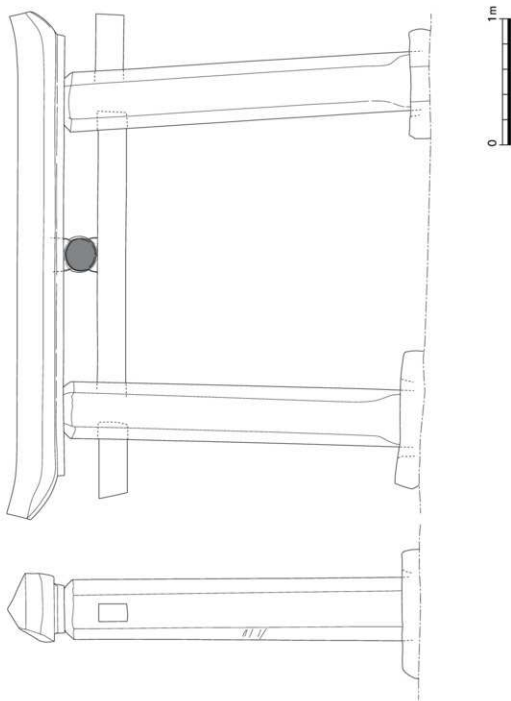
豊後大野市044 上津神社一ノ鳥居
真正3年(1462)



豊後大野市149 下熊壁社鳥居
天文7年(1538)銘

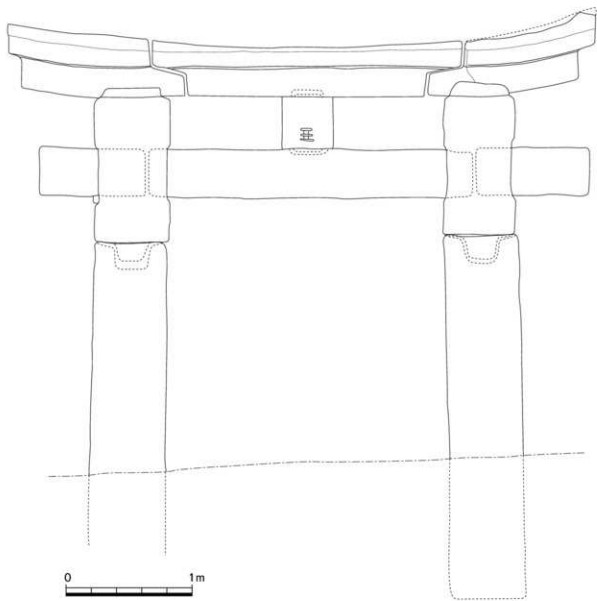


第129図 鳥居実測図4【豊後大野③】(1/30)



豊後大野市068 黒松阿蘇社石鳥居

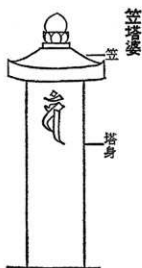
第130図 鳥居実測図5【豊後大野④】(1/30)



臼杵市 044 深田の鳥居

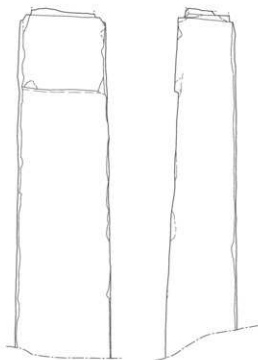
(2) 笠塔婆

板状や柱状の塔身の上に笠と宝珠を載せた石造物である(第132図)。中には塔身に整形した石材ではなく自然石を使用するものもある。県内では豊後高田市高貴寺(豊後高田市365)の笠塔婆群が最も古く、仁治2年(1241)銘を筆頭に5基の笠塔婆が存在する。14世紀には日田市元大波羅神社笠塔婆(日田市048)や由布市柿原笠塔婆(由布市061)は塔身に複数の種子を薬研形りで大きく刻み出すものもある。戦国期には塔身に地藏などを刻んだ小型化した笠塔婆が多く認められる。掲載実測図は7点である。

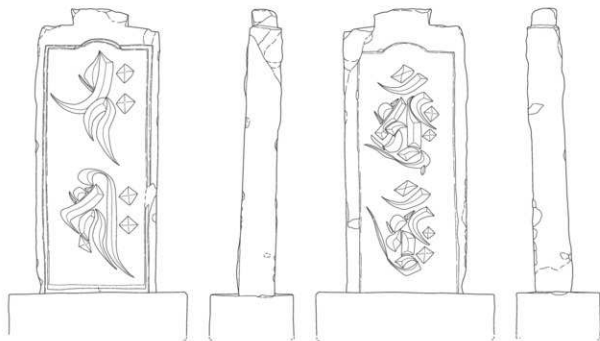


第132図 笠塔婆解説図

挿図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第133図	由布市 061	柿原笠塔婆	実測(横澤)	応安元年(1368)	184	凝灰岩	塔身は方柱で正面上部は頸部を突きさせる。頸部下に2段の種子を大きく彫り、その下に銘文を刻む。塔身上部には納が立ち、笠が載っていたと推定されるが笠を欠失する。	県有形
第133図	日田市 048	元大波羅神社石塔群	文献54	観応元年(1350)	150	凝灰岩	元大波羅神社北の塚の上に建てられており、開発に伴い発掘調査後に現地に移転したもの。観応元年銘や塔の由来とともに3年銘を刻んだ基壇上に塔身を置く。塔身は両面を方形2段に彫り窪め、その中に大きく2字の種子を薬研形りで刻む。塔身上部には納が立つが笠を欠失する。	市有形
第134図	日田市 105	西雄谷笠塔婆(笠塔婆1)	実測(坂本)	元亀元年(1570)	96.5	凝灰岩	基礎の上に直方体の塔身を置く。塔身上部には円相と弥陀三尊の種子を彫り、その下に銘文を刻む。塔身表面の調整は粗く剝離痕が多く残る。笠は欠失。横に同形同銘の笠塔婆2があるが、そのオリジナルであろう。	県有形
第134図	日田市 105	西雄谷笠塔婆(笠塔婆2)	実測(坂本)	元亀元年(1570)	144	凝灰岩	コンクリート基礎の上に塔身を置き、笠塔婆1と同じ種子・銘文を刻む。笠は奇棟で笠裏には垂木を刻む。元亀元年銘を持つが近世頃に笠塔婆1を模して造られたものか。	県有形
第134図	九重町 025	慈雲寺跡庚申塔	実測(坂本)	天正11年(1583)	138	安山岩	台形状の自然石の基部に蓮華座を彫り、その上に3区画に銘文を刻む。上部には円相内に万字を刻む。笠は長方形で軒は薄い。	県有形
第135図	豊後大野市 104	漆生笠塔婆及び石塔群	文献20	永禄4年(1561)		凝灰岩	基礎2段の上に塔身を置く。塔身上部に2体の仏像を彫り、その下に4つの種子と銘文を刻む。笠上には蓮弁を刻む宝珠が載る。	市有形
第135図	臼杵市 091	芝尾笠塔婆・表平石軸	実測(宮内)	明徳5年(1394)	164	凝灰岩	方柱の塔身上部4面に薬研形りの種子を彫り、正面種子の下に紀年銘を刻む。笠軒は直線的で隅棟で大きく反る。笠上には宝珠が載る。	市有形



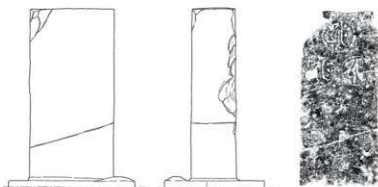
由布市 061 柿原笠塔婆
応安元年 (1368)



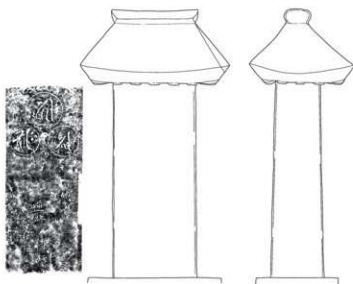
日田市048 元大波羅神社笠塔婆

観応元年 (1350)

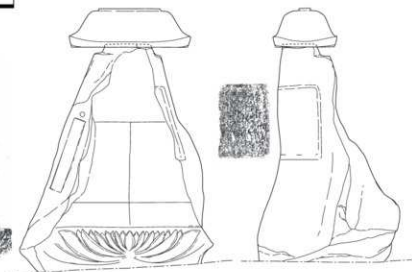
第133図 塔婆実測図1【由布・日田①】(1/20)



日田市105 西雑谷笠塔婆 (笠塔婆1)
元龜元年 (1570)

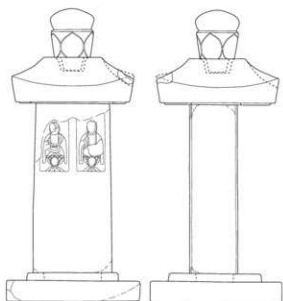


日田市105 西雑谷笠塔婆 (笠塔婆2)
元龜元年 (1570)

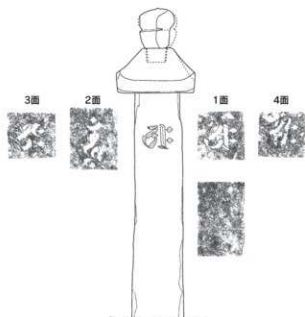


九重町025 慈雲寺跡庚申塔
天正11年 (1583)

第134図 塔婆実測図2【日田②・九重】(1/20)



豊後大野市 104 漆生笠塔婆及び石塔群
永禄 4 年 (1561)



臼杵市 091 芝尾笠塔婆
明徳 5 年 (1394)



第135図 塔婆実測図【豊後大野・臼杵】(1/20)

(3) 角柱塔婆

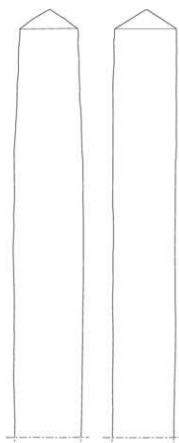
基本的構成は整形板碑と共通する（第78図）が、碑面の断面形状が長方形をなすのに対し、角柱塔婆は正方形形状を呈し、4面に展開する点が異なる。頂部は山形に作り、その下に2条の切込みと頸部を作り出すが、切込みや頸部を省略したのも見られる。また、豊後大野市三重町大辻山の石塔群の中には五角柱、六角柱、八角柱となるものもある。掲載実測図は28点である。

神号番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第136図	中津市 127	箭山神社角柱塔婆	文献51	徳治3年(1308)			碑身は方柱で上部に頸部とその上に2条の切込みを持つ。頸部は三角に尖る。碑面上部に種子を墨書する。	県有形
第136図	宇佐市 138	県立歴史博物館所在石塔群(桶狭山石塔婆)	実測(原田)	長寛元年(1163)	179.5	凝灰岩	3基の石柱塔婆。1は六角柱で上部に5字の種子と刻銘を刻む。2・3は五角柱で碑面に銘文を刻む。	県有形
第136図	宇佐市 298	佐田社板碑(角柱塔婆)	文献51	元弘3年(1333)			碑身は方柱で上部に頸部とその上に2条の切込みを持つ。頸部は三角に尖らせ棟はわずかに反る。碑面には3字の種子を大きく刻む。	
第136図	宇佐市 296	日尾板碑と周辺石塔群	文献51	暦応2年(1339)			碑身は方柱で頸部は三角形。頸部に2条の切込みを入れ頸部は突出する。頸部下に種子を刻む。	市有形
第136図	宇佐市 138	県立歴史博物館所在石塔群(大分川出土)	文献51	貞和4年(1348)			碑身は方柱で上部は三角形に尖る。基部に2条の切込みを入れるが頸部はない。碑面上部に葉形形の種子を刻む。	
第136図	宇佐市 035	善光寺板碑と周辺石塔群	文献51	永正2年(1505)			碑身は方柱で頸部は三角に尖る。基部に1条の切込みを入れ、頸部を突出する。頸部に種子を刻む。	
第136図	豊後高田市 278	地持庵石塔群	文献25	応永3年(1396)			一石形成の塔婆。基部は方形に張り出す。頸部は三角形で、基部に2条の切込みを入れ、突出する頸部を持つ。1面に種子と銘文を刻む。	
第136図	国東市 082	向嶺角塔婆群	文献32				方形の基礎の上に方柱の碑身が続く。頸部は三角形で鋭く尖る。基部に2条の切込みと突出する頸部を持つ。4面とも碑面上部に種子を刻む。	県有形
第137図	杵築市 040	下山角塔婆群	文献51	貞治5年(1366)			碑身は方柱で頸部は三角形。切込みや頸部はない。	市有形
第137図	杵築市 091	總野角柱塔婆	実測(井)	永徳3年(1383)	118	凝灰岩	方柱で上部に頸部とその上に2条の切込みを入れる。頸部は三角形に尖る。4面とも頸部の下に葉形形の種子と銘文を刻む。	県有形
第138図	日田市 075	草三郎大神宮五輪塔婆と角柱塔婆	実測(小林)		68	凝灰岩	方柱で上部に頸部とその上に2条の頸い切込みを入れる。頂部は台形状を呈する。種子・銘文なし。	県有形
第138図	日田市 056	牧原角柱塔婆	文献53	貞治5年(1366)	280		碑身は方柱で頸部は平坦。4面とも碑面上部に種子を刻む。	市有形
第138図	豊後大野市 296	明照院宝篋印塔及び石塔群	文献54	永禄10年(1567)	58	凝灰岩	頸部が方柱状となる小型角柱塔婆。4面に形蔵界四仏の種子を刻む。銘文は永禄10年の年号とともに、同地の宝篋印塔と同じ「海大親大和尚」の銘が見られ、その即身成仏に係る供養塔と考えられる。	
第138図	豊後大野市 142	大辻山(石塔群)角柱塔婆1	文献51	文禄5年(1596)			碑身は方柱で頸部は三角形に尖る。基部に2条の切込みを入れるが頸部はない。碑面上部に細線の円輪と種子を刻む。	市有形

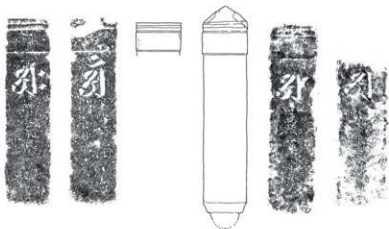
神宮 番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年誌	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第138回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆2	文献51	慶長3年 (1598)			碑身は五角柱で頭部は三角形に 低く尖る。基部に細線による1条の切 込みを持つ。頸部はない。碑面上部に 種子を刻む。	市有形
第138回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆3	文献51	慶長3年 (1598)			碑身は方柱で頭部は三角形に尖る。 切込み及び頸部はない。碑面上部に 細線円相と種子を刻む。	市有形
第138回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆4	文献51	慶長3年 (1598)			角柱塔婆3と同形式。	市有形
第138回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆5	文献51	慶長3年 (1598)			角柱塔婆3と同形式。	市有形
第139回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆6	文献51	慶長4年 (1599)			角柱塔婆2と同形式。	市有形
第139回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆7	文献51	慶長4年 (1599)			碑身が六角柱。その他形状は角柱塔 婆2・6に似る。	市有形
第139回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆8	文献51	慶長4年 (1599)			立面は縦長の五角形で頭部は切妻 形。碑面上部に細線の円相と種子を 刻む。切込・頸部はない。	市有形
第139回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆9	文献51	慶長5年 (1600)			碑身は八角柱で頭部は丸みをもつ。 碑面上部に2条の細沈線を通し、そ の間に種子を彫る。	市有形
第139回	豊後大野市 142	大辻山(石塔群) 角柱塔婆10	文献51	慶長8年 (1603)			碑身は方柱で頭部は方錐形。碑面上 部に種子を刻む。	市有形
第139回	豊後大野市 307	中小坂石幢及び 石塔群	文献51	慶長9年 (1604)			碑身は方柱で方錐形の頭部は高く伸 びる。頭部下に2条の細沈線と、そ の間に円相と種子を刻む。碑面中位 には位牌を陰刻する。	
第139回	豊後大野市	久知良造跡角柱 塔婆	文献54		95	凝灰岩	釈迦堂という寺院伝承地に建つ。方 柱で頭部は方錐状となる。頸部はな く、上部に細い2条の切込を入れる。4 面には月輪内に金剛界四仏の種子 を刻む。	
第140回	竹田市	有添田造跡角柱 塔婆	平成27年度 県教委 発掘調査		188	凝灰岩	直方体で上部を三角形に作る。上部 に2条の切込を持つが頸部はない。 背面には粗いノミ痕が残る。	
第140回	臼杵市	061 臼杵城石塔群	文献5	貞永元年 (1232)	115	凝灰岩	碑面は方柱で上部に2条の切込を入 れる。頂部には後世手水鉢に転用さ れた際の割り込みがある。碑面には 貞和元年銘と「除三千外更先別達」 の刻銘がある。	
第140回	佐伯市	042 門前石塔群	文献51	大永6年 (1526)			碑身は方柱で頭部は三角形に尖る。基 部に2条の切込みを入れるが頸部は ない。碑面上部に細線の円相を刻む。	



第136図 角柱塔婆実測図1【中津・宇佐・豊後高田・国東】(1/20)

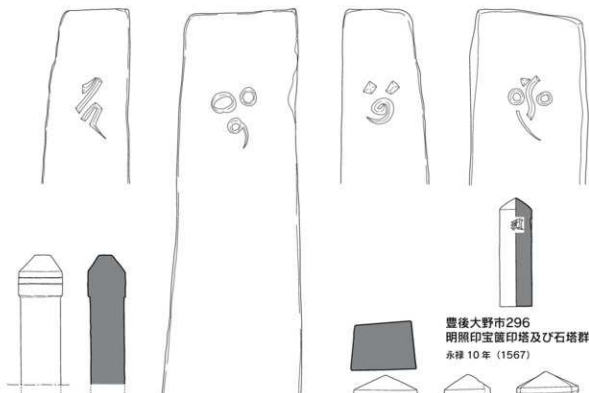


杵築市 040 下山角塔婆群
貞治 5 年 (1366)



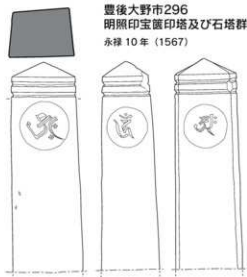
杵築市 091 徳野角柱塔婆
永徳 3 年 (1383)

第137図 角柱塔婆実測図2【杵築】(1/20)



日田市 075
草三郎大神宮五輪塔婆
と角柱塔婆

豊後大野市296
明照印宝篋印塔及び石塔群
永禄 10 年 (1567)

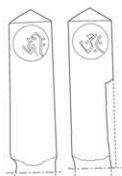


日田市056 牧原角柱塔婆

豊後大野市 142 大辻山 (石塔群)
角柱塔婆 1 文禄 5 年 (1596)



豊後大野市 142
大辻山 (石塔群)
角柱塔婆 2
慶長 3 年 (1598)



豊後大野市 142
大辻山 (石塔群)
角柱塔婆 3
慶長 3 年 (1598)



豊後大野市 142
大辻山 (石塔群)
角柱塔婆 4
慶長 3 年 (1598)

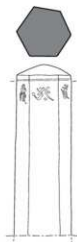


豊後大野市 142
大辻山 (石塔群)
角柱塔婆 5
慶長 3 年 (1598)

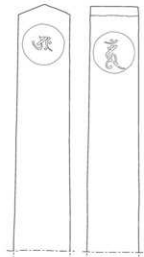
第138図 角柱塔婆実測図3【日田・豊後大野①】(1/20)



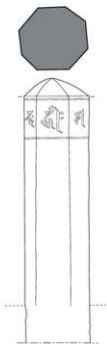
豊後大野市 142
大辻山 (石塔群)
角柱塔婆 6
慶長 4 年 (1599)



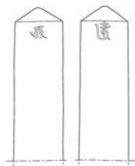
豊後大野市 142
大辻山 (石塔群)
角柱塔婆 7
慶長 4 年 (1599)



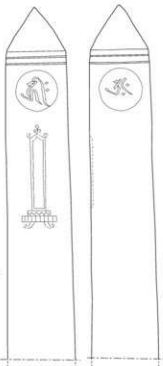
豊後大野市 142
大辻山 (石塔群) 角柱塔婆 8
慶長 4 年 (1599)



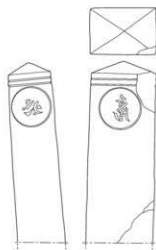
豊後大野市 142
大辻山 (石塔群)
角柱塔婆 9
慶長 5 年 (1600)



豊後大野市 142
大辻山 (石塔群) 角柱塔婆 10
慶長 8 年 (1603)

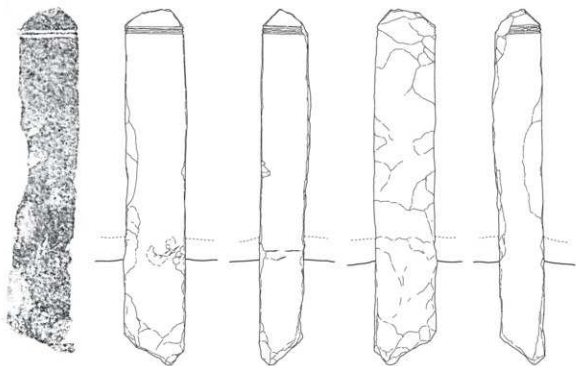


豊後大野市 307 中小坂石幢及び石塔群
慶長 9 年 (1604)

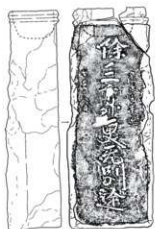


豊後大野市 久知良道跡角柱塔婆

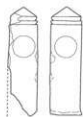
第139図 角柱塔婆実測図4【豊後大野②】(1/20)



竹田市 有添田遺跡角柱塔婆



臼杵市 061 臼杵城石塔群
貞永元年 (1232)



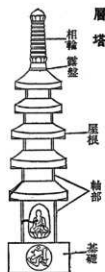
佐伯市 042 門前石塔群
大永6年 (1526)



第140図 角柱塔婆実測図5【竹田・臼杵・佐伯】(1/20)

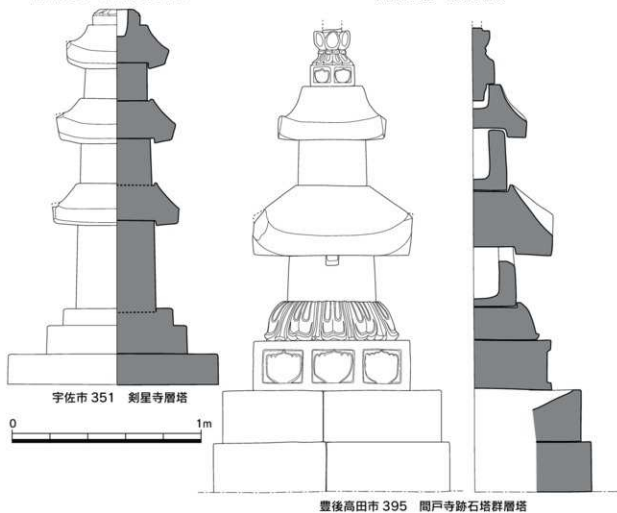
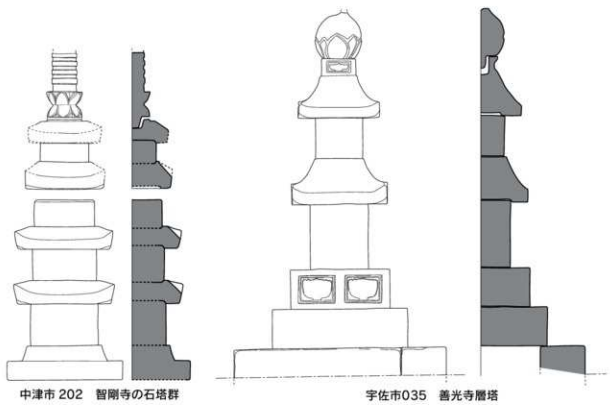
04) 層塔

基礎の上に軸部と屋根を載せ、それを幾重にも重ねた石造物である。最上部には相輪を載せる（第141図）。層数は奇数が原則で、三重、五重、九重、十三重がある。在銘資料では永文2年（1264）の白杵市水地九重塔（白杵市111）が最も古い。水地九重塔や佐伯市上岡十三重塔（佐伯市040）など、軸部には仏像を半肉彫りで表現するものもある。特異なものでは軸部に宝篋印塔の笠を重ねた日田市専念寺層塔（日田市038）がある。掲載実測図は10点である。

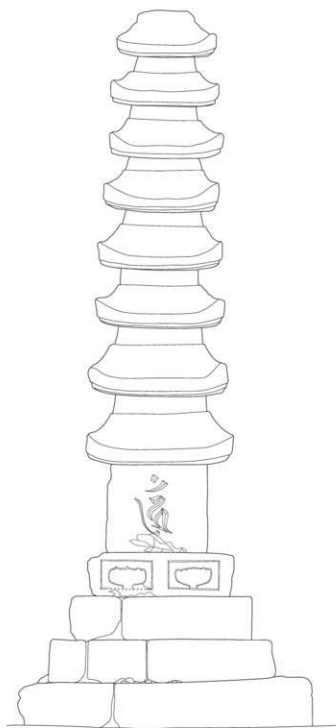


第141図 層塔解説図

神図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高 (cm)	石材	塔の概要	指定
第142図	中津市 202	智剛寺の石塔群	文献59		164	凝灰岩	五重塔であるが3層目の笠と4層目軸部を欠失する。5層目笠上に低い蓋盤が立つ。相輪基部に蓮弁を刻む反花と諸花を持ち、相輪上部は欠失する。	
第142図	宇佐市 035	善光寺板碑と周辺石塔群	文献9			安山岩	基礎3段で最上段に2区画の格状間を配す。層数は2層だが本来は3層と想定される。2層目笠上に蓋盤が立ち、格状間を配す。その上に蓮弁を刻む宝珠を載せる。	
第142図	宇佐市 351	朝星寺層塔と周辺石塔群	文献10				基礎は3重でその上に初層軸部が載る。3層目笠上に蓋盤が立ち、その上に反花が付く。相輪は欠失。	
第142図	豊後高田市 395	関戸寺跡石塔群	文献9			安山岩	現状は二重だが本来は三重塔と推定。基礎3重で最上段に3区画の格状間を配す。基礎上に複弁の反花を置き、その上に初層が乗る。初層軸部上部に納入孔を穿つ。2層目笠上に蓋盤が立ち、2区画の格状間を配す。相輪は反花・諸花から上を欠失する。	
第143図	国東市 283	吉木九重塔と周辺石塔群	文献33				基礎4重で、最上段には2区画の格状間を配す。軸部初層には葉形那耶の種子を刻む。9層目の笠と相輪を欠失。	県有形
第144図	杵築市 046	西明寺石造三重塔と角柱塔婆	文献63	貞和4年(1348)	297	凝灰岩	基礎は3重で最上段に2区画の格状間を配す。基礎上に反花の台座が載り、その上に初層軸部を置く。初層には円相内に蓮華座と種子を刻む。2層軸部には蓮華文、3層軸部には日輪を表す。笠上は蓋盤が立ち格状間を配す。相輪は伏鉢・諸花・九輪で宝珠を欠失する。図がされていないが相輪基部には隅飾突起が付く。	県有形
第144図	大分市 254	楠木生五重塔	文献35	延文5年(1360)	330	凝灰岩	基礎は2重で4面に銘文を刻む。初層軸部には金剛界四仏の種子を彫る。5層の笠上に蓋盤が立ち、方形区画内に縦連子を刻む。相輪は欠失。	県史跡
第145図	白杵市 059	満月寺層塔	文献2	正和4年(1315)			基礎は1重で格状間を配す。初層軸部には蓮華座の上に円相と種子を刻む。2層と5層軸部にも円相と種子を刻む。5層笠上には蓋盤が立ち格状間を配す。反花・諸花の上に相輪を置き、その上に諸花と火輪宝珠が付く。	市有形



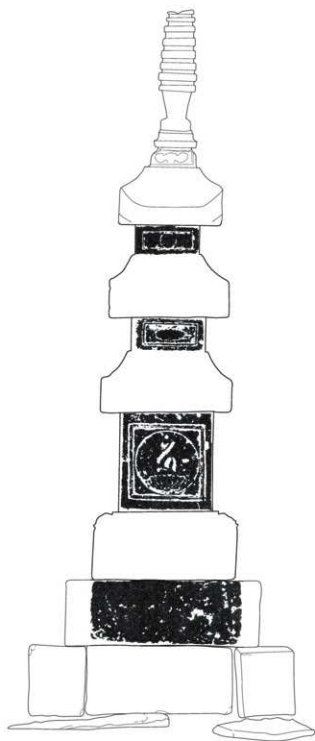
第142図 層塔実測図1【中津・宇佐・豊後高田】(1/20)



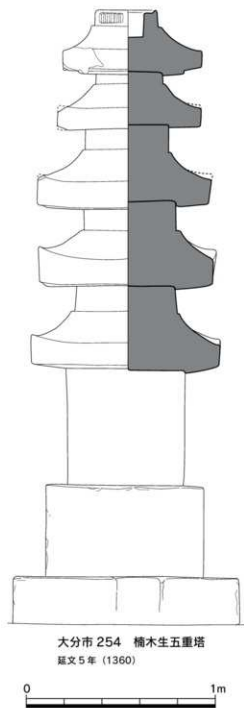
国東市 283 吉木九重塔と周辺石塔群



第143図 層塔実測図2【国東】(1/30)



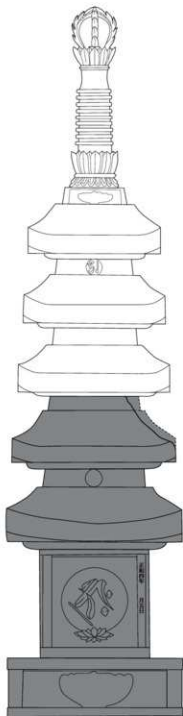
杵築市 046 西明寺石塔三重塔
貞和4年 (1348)



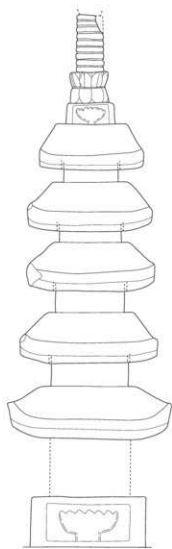
大分市 254 楠木生五重塔
延文5年 (1360)



第144図 層塔実測図3【杵築・大分】(1/20)



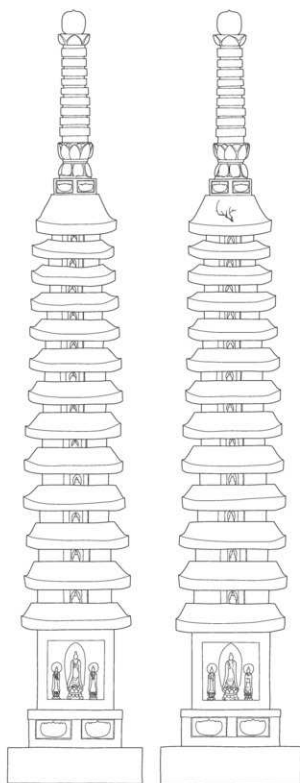
臼杵市 059 満月寺層塔
正和4年(1315)



津久見市 029 世尊寺五重塔



第145図 層塔実測図4【臼杵・津久見】(1/20)



(北面)

(西面)

佐伯市 040 上岡十三重塔と周辺石塔群



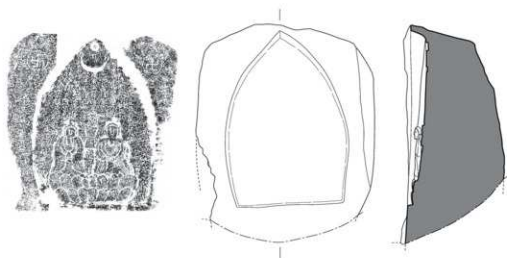
第146図 層塔実測図5【佐伯】(1/40)

挿図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第145図	津久見市 029	世尊寺五重塔	文献19		約300		現状では格狭間を持つ基礎の上に石製の産部と中台が載り、その上に笠及び2～5層目が載る。最上層笠上には露盤が立ち格狭間を配す。相輪は反花・請花・九輪からなり、宝珠は欠失。	市有形
第146図	佐伯市 040	上岡十三重塔と 周辺石塔群	佐伯市 教委提供		826	凝灰岩	基礎2段で上段に2区画の格狭間を配す。初層輪部には三尊立像を彫る。2層目以降の輪部は高く、それぞれ観音開きの扉の中に仏像を彫る。最上層笠上に露盤が立ち2区画の格狭間を配す。相輪は反花・請花・九輪・請花・宝珠からなる。	県有形

(9) その他塔婆石碑

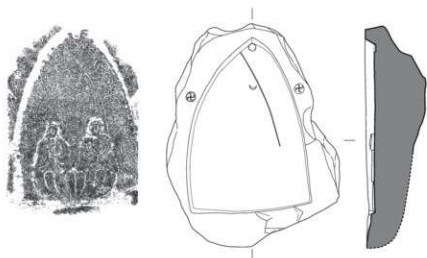
上記(2)～(5)のカテゴリに入らない石塔婆や石碑についてここで取り上げる。実測図は杵築市利益寺にある2基の石塔婆(杵築市234)と杵築市竹ノ尾地藏廟にある宝樹院碑(杵築市130)である。なお、外来系石造物については第3章第4節(3)で取り扱う。

挿図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第147図	杵築市 234	利益寺石塔群 (1号塔婆)	実測 (越智・小柳)	天正18年 (1590)	115.5	安山岩	碑面を舟形に彫り窪め、頂部に日輪と三日月、下部に蓮華座と2体の坐像を半円形形で表す。舟形部に銘文を刻み、周囲に円相内の万字を配し、紀年銘を刻む。	
第147図	杵築市 234	利益寺石塔群 (2号塔婆)	実測 (越智・小柳)		117	安山岩	形状は1号塔婆に似る。舟形に沿って円形で囲む文字と、像の上に銘文を刻む。舟形周囲に円相内の万字を陰刻し、銘文も見られる。	
第148図	杵築市 130	竹ノ尾地藏廟	実測 (横澤)	康応元年 (1389) 応永3年 (1397)	114	安山岩	竹ノ尾地藏廟横にある石碑「宝樹院碑」。方形台座の上には上部が半円形となる板状の碑身を乗せる。碑身下端は枘を設け台座に差し込む。碑面は丁寧に調整し、竹ノ尾地藏の道立経緯などを刻む。	



杵築市234 利益寺石塔婆(1号石塔婆)

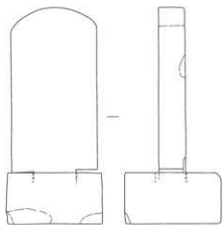
天正18年(1590)



杵築市234 利益寺石塔群(2号石塔婆)



第147図 石塔婆実測図(杵築)(1/20)



杵築市130 竹ノ尾地藏像(宝樹院碑)

康応元年(1389)・応永3年(1397)

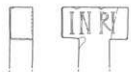


第148図 石碑実測図【杵築】(1/20)

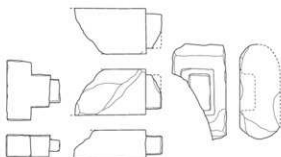
(6) キリシタン関係石造物

大分県ではキリシタン大名として知られる大友宗麟の影響もあり、戦国期には豊後国内でキリシタンに改宗した信徒が数多く存在した。そのため、県内の各地でキリシタン墓の存在が確認されている。特に臼杵市や竹田市、豊後大野市、佐伯市といった県南部にキリシタン関係石造物が多い。資料としては柱状伏碑の形状をとるキリシタン墓と十字架碑がある。紀年銘資料に乏しいが、佐伯市重岡キリシタン墓(佐伯市152)には元和5年(1619)の紀年銘があり、これが唯一である。県内のキリシタン関係資料はいずれも中世末期～近世初頭頃と考えられる。個別石造物の詳細は第3章第4節(12)にも田中裕介委員により詳細にまとめられているので、併せて参照願いたい。掲載実測図は10点である。

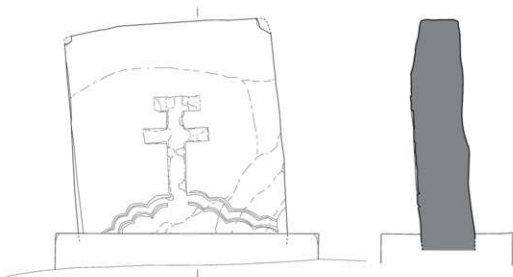
挿図番号	地名表番号	石造物名称	出典	紀年銘	総高(cm)	石材	塔の概要	指定
第149図	竹田市 050	原のキリシタン墓碑	文献61		37.5	凝灰岩	T字形をした十字架碑の頭部。正面に「INRI」銘を刻む。	県史跡
第149図	竹田市 059	日向塚の千十字架残欠	文献61			凝灰岩	十字架碑の残欠で頭部・字部・台石からなる。頭部はT字形で無銘。字は基部に納め持つ。	県有形
第149図	豊後大野市	市万田千字クルス	文献61		112	安山岩	板状の凝灰岩質安山岩に千字十字架を彫刻する。基部には2本の波状線を刻み、ゴルゴダの丘を表す。	市
第150図	臼杵市 078	寺小路磨崖クルス	文献61		140	凝灰岩	凝灰岩の自然石を素材とし、円形に彫り窪めた中に千字の十字架碑を彫刻する。基部には二段山形でゴルゴダの丘を表す。十字架碑には3箇所菱形の窪みがあり、イエスの手足に打ち込まれた釘痕と考えられる。	市有形
第151図	臼杵市 042	揺懐キリシタン墓(キリシタン墓1)	文献61		50	凝灰岩	半円柱形をした柱状伏碑の墓碑。側面に半円形の線取り線とラテン十字架碑を彫刻する。十字架基部には凸字状に台座を刻む。	県史跡
第151図	臼杵市 042	揺懐キリシタン墓(キリシタン墓2)	文献61		34	凝灰岩	方形柱状伏碑の墓碑。小口基部は弧状に突出させゴルゴダの丘を表し、上にラテン十字を彫刻する。	県史跡
第151図	臼杵市 076	下藤地区共有墓地石塔群(キリシタン1)	文献45		28.5	凝灰岩	十字架碑の頭部と考えられるもので、頭部は丸みを持つ。正面の方形に彫り窪めた中に「INRI」銘を刻む。側面には棒子・金輪・釘抜きを受難具を彫刻する。	県史跡
第151図	臼杵市 076	下藤地区共有墓地石塔群(キリシタン2)	文献61		49	凝灰岩	半円柱形をした柱状伏碑の墓碑。小口正面は円形に彫り窪めた中に花十字文を彫刻し、下に「常珍」銘を刻む。背面小口にギリシャ十字を彫刻する。	県史跡、市有形
第151図	臼杵市 069	御霊園クルスバ道碑石塔群	文献44		66	凝灰岩	粗削りされた凝灰岩片に千字十字架と方形台座を彫刻する。台座はゴルゴダの丘の表現である。	
第151図	佐伯市 152	重岡キリシタン墓	文献61	元和5年(1619)	37.5	凝灰岩	板状伏碑の墓碑。側面に銘文を刻む。上面には変形花十字文を施す。	県有形



竹田市050 原のキリシタン墓碑

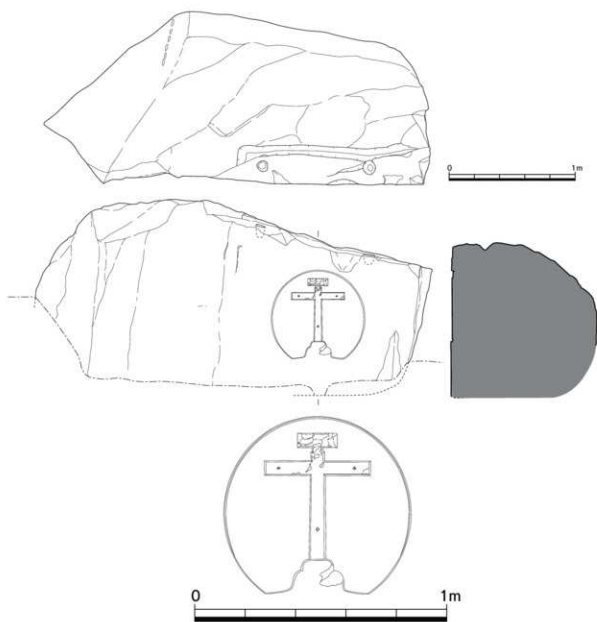


竹田市059 日向塚の千十字架残欠

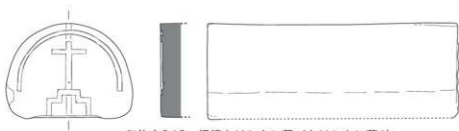


豊後大野市 市万田千字クルス

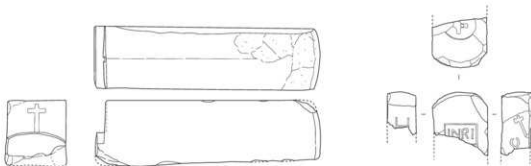
第149図 キリシタン遺物実測図1【竹田・豊後大野】(1/20)



臼杵市078 寺小路窟崖クルス



臼杵市042 播磨キリシタン墓 (キリシタン墓1)

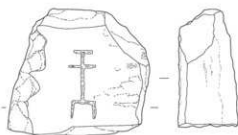


臼杵市042 播磨キリシタン墓 (キリシタン墓2)

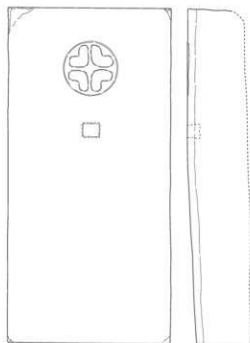
臼杵市076 下藤地区共有墓地石塔群
(キリシタン遺物1)



臼杵市076 下藤地区共有墓地石塔群
(キリシタン遺物2)



臼杵市069 御霊園クルスバ道跡石塔群



佐伯市152 重岡キリシタン墓
元和5年 (1619)



第151図 キリシタン遺物実測図3 [臼杵②・佐伯] (1/20)

第3節 測量調査の成果

(1) 屋成家墓地

1. 立地と環境

中津市街地から国道212号で南の耶馬溪方面に走ると、旧本耶馬溪町に入っすぐ仏坂というトンネルを通る。その先、隣県福岡県の古高町から伸びる県道44号との交差点を左に曲がると屋形の谷である。八面山の裏側になるこの谷は、屋形川によって形成された河岸段丘で、縄文時代早期～後期にかけての洞穴遺跡である粉洞穴や、弥生時代の集落跡が見つかった下屋形遺跡など、古くから人が生活を営んでいたことが知られる。

谷の中程に旧屋形小学校があり、その裏手に屋成家墓地が所在する。付近は後述する中世豪族屋形氏の拠点であった場所で、さらに道を進むと宇佐に抜ける板峠に至り、古くからの交通の要所でもあった。

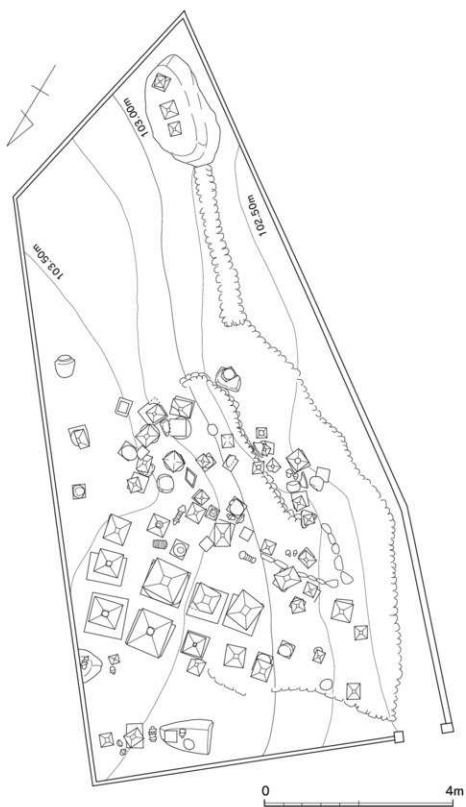
2. 墓地の概要

耶馬溪特有の崖壁を背に、南北約6m、東西約12mの範囲で中世墓地が展開している（第152図）。墓地の中心は北側にあたり、拳大の礫石が敷かれたテラスに、鎌倉～室町期の宝塔・五輪塔が並列する。中心部から南側にかけてなだらかな斜面になり、比較的小さな五輪塔や石塔残欠が散在する。斜面部には石積みが見られ、幾段かのテラス状になっていたと考えられる。

墓地の初現塔であり、唯一の在銘塔である屋成家墓地宝塔（以下1号宝塔）は中心テラスの中央に位置し、その横に並んで、同形式の宝塔（以下2号宝塔）が位置している。1号宝塔はその銘文から、弘安五年（1282）に沙弥運智という人物によって先祖（父母か）供養の為に造立されたもので、大分県最古の石造宝塔である。基礎は一石方形で上面に塔身を受ける八葉の反花が彫出されている。塔身は有頸円筒型で、四面にキリークの種字を月輪内に葉研彫りする。南西隅の一角に銘文を陰刻している（銘文については後掲）。笠は薄く軒口二重の照屋根で上部に露盤を表す。露盤の納穴はこの地方によく見られる四角形。笠裏に八面の種字曼荼羅を墨書する。相輪は請花と九輪の一部を残して欠損。残存高179.9cm、凝灰岩。2号宝塔は、無銘であるが、反花の彫出や有頸円筒型の塔身など、1号宝塔とほぼ同形式であることから、大きく



屋成家墓地全景



第152図 屋成家墓地測量図



1号宝塔



1号宝塔笠裏

時期を開けずに造立されたものと考えて良いだろう。運智自身か近視者による造塔であると思われる。

次にになると、1号2号宝塔の形式は受け継がれず、基礎は一石二重（反花は表さない）、下部が窄まった壺型の塔身など、豊前地方に分布する宝塔の形式が見られるようになる。しかしながら薄造りの笠は鎌倉期のそれを踏襲しているかのように特徴的である。あるいは異なる塔の部材が混入しているのかもしれない。また、卵形無頸の塔身を持つものも見られ、一見すると五輪塔であるが、基礎二重目を薄く造り出し、笠の軒口を二重にするなど、宝塔の特徴を備えているものである。1号2号塔の前後に2基ずつこの形式の塔が並んでおり、1号2号塔と合わせて6基は夫婦を供養する目的の双塔であろうとの指摘もされている。これら中心テラスの塔は、屋形家の惣領クラスの供養塔と考えられる。南側のなだらかな斜面には小型の五輪塔・宝塔が50基程度散在し、中世墓地の景観を良好に保っている。

谷を貫く道路の向かい側の山裾にも中世起源の墓があり、屋形家の所有となっている。屋形家墓地には総高155cmの五輪塔を中心に、宝塔・宝篋印塔など15基程度が残存するが、当初からの組み合わせを保っているものは少ない。屋成家墓地との関係についてもよくわからないが、後述するように、屋形氏は惣領制によっていくつかの庶子家を輩出しているので、これに関係するのかもしれない。

3. 中世の屋形谷と屋形氏について

中世の屋形谷は、宇佐宮の末社である大根川社の社領で、宇佐大宮司宮成家知行の今行名をはじめ、稲男名・稲富名といった名田が設定されていた。この稲男・稲富名主として文獻に現れるのが、大根川社司の屋形氏である。系図によると屋形氏は、平安時代に宇佐大宮司持節に出て、以降、権大宮司と大根川社司職を兼帯する家であった。鎌倉初期頃の当主と思われる九代諸基の時、大根川社惣領校職を得て社領の支配を行うようになった。

諸基から数えて四代にあたる諸成（運智）は、嘉暦三年（1328）に重代相伝の私領として、稲男名田高在家山野並びに惣領職を嫡子である諸清（運覚）に譲り渡している。一方、諸清の子息諸守に約束されていた同名屋形の内を悔い返している。翌年諸守は不忠をしたとして義絶され、彼に同心した子孫らについても同様としている。単子相続への移行であろうか。

屋形諸成は正和の神領興行法によって、武士らに不当に押領されていた大根川社の所領回復に努めたことが史料から認められる。おそらくこの頃、稲男・稲富名のある屋形谷に土着したと考えられ、地盤を固めた結果、惣領職を継ぐ者への私領の単子相続に踏み切ったのであろう。この事と関連付けられるのが屋成家墓地の中心塔である弘安五年銘宝塔である。改めて銘文をみてみよう。

奉造立供養寶塔塔基

為正阿弥陀仏尊靈比丘尼信阿

沙弥蓮智幽靈往生極樂也

弘安五年壬午十一月廿九日孝子等敬白

弘安5年11月29日に造立されたこの宝塔の造立者である「沙弥蓮智」こそ、屋形諸成その人であり、銘文からは先祖の霊（父母か）と自身の往生のため石造宝塔を造立したことが判明する。正和の神領興行から30年ほど前であり、諸成にとってまだ若い時期であったと思われるが、文永・弘安の役をきっかけに downward してきた鎮西御家人らが多くの荘園を押領していく中で、本領の確実な確保・支配を実行すること、この塔の造立はその強い意志の表れといえるだろう。

屋形氏惣領を継いだ諸清は、しばらくして重病にかかり存命も危うくなったようで、元徳2年（1330）に妻・藤原氏女に所領を譲った。これを受け諸成は、元徳4年（1332）に氏女に対して改めて譲状を発行し、氏女は宇佐宮側に証判を求めている。正慶2年（1333）氏女は子息に所領の處分を行ったが、おそらく惣領分である稲男・稲富名は嫡子諸利に、その他を庶子・女子に分配し、残った分は全て惣領分としている。

その後、屋形氏は在地領主として武士化し、元弘3年（1333）には倒幕のため御家人として京都に馳参し、建武3年（1336）の珍珠城合戦では、屋形諸清の後家尼心妙（藤原氏女）の代理として子息諸利が幕府方として参戦し、恩賞に預かっている。観応の擾乱には足利直冬に従い勤功として宇佐郡内の所領を与えられている。室町・戦国期には守護大内氏の被官として名が見え、時の情勢に合わせて大内・大友両雄の間を奔走した。近世には庄屋として何家かに分かれ、その内の屋成家が現在まで墓地を所有管理している。

4. まとめ

県内最古銘の石造宝塔を有する屋成家墓地は、その歴史的背景について伝来の古文書でも裏づけられる貴重な例である。今回実施した測量をはじめとした調査でも、鎌倉～南北朝の造立とみられる中心テラスの石塔が、屋形家の惣領クラスの供養塔であろうことはその構造からも明らかで、蒙古襲来から鎌倉幕府の滅亡をへて南北朝の動乱に突入する時期に著しく成長する在地領主層の痕跡を目の当たりにすることができる。南北朝時代の末に豊前守護が大内氏の手に渡り、豊前国の領国化や宇佐宮への介入によって、在地の勢力はその被官となっていく。屋成家墓地でも室町期の石塔は規模が小さくなり、勢力の落ち着きを見せている。しかしながら、屋形氏は家が分かれながらも在地支配を確実なものとし、近世には庄屋として存続し、中世以来の墓地を現在に伝えている。

（参考文献）

『本耶馬溪町史』1987

『大分県史料第2 宇佐八幡宮文書之二』『屋形三郎文書・屋形米次郎文書・屋成文書』1959

『中津市の中世石造物』（『石造文化研究』第29巻）おおい石造文化研究会 2011

(2) 御霊園クルスバ遺跡

はじめに

西寒田クルスバ遺跡は大分県臼杵市と豊後大野市の境界上に所在し、14世紀から17世紀まで存続したと考えられる宗教遺跡である(第153図1)。所在する場所は旧大野郡戸上村大字西寒田のほぼ中央にあたる。平成5年(1993)刊行の『野津町史』では「御霊園クルスバ」として紹介された遺跡である³¹⁾。臼杵市野津町から豊後大野市犬飼町にはクルスバあるいはフルスポとよばれる地名が多い。クルスバとは「クルス」つまり十字架と「バ」つまり場所の意をあわせて十字架のある場所の意味し、宣教師史料に頻出し「墓地」と訳されることが多い³²⁾。大正時代から研究者によって注目されるようになり、およそ一世紀前にあたる大正年間の初期に旧大野郡三重町の研究者伊東(いとう)東(あずま)氏がクルスバ地名の場所を調査し、遺構と石造物の存在を確認していた³³⁾。

あらためて注目されたのは平成23年(2011)春に臼杵市野津町の下藤(したふじ)キリシタン墓地の調査による。この調査は墓碑や墓上施設と埋葬施設が同一の遺跡に保存された墓地遺構を調査した画期的なものであり、これまでキリシタン墓地の認定材料とは考えられていなかった墓上施設としての石組遺構や粗製の切妻屋根形の板状伏碑、平型の板状伏碑などがキリシタン墓地の標識であることを明らかにした。そこで得た観点をもって周囲の遺跡を見直す作業が必要となり、その一環として当クルスバの踏査をおこなった。すると丘陵の山頂部に一辺20数mの方形の造成された平坦面が存在し、道路に面した一辺には目隠しの土手があった。その平場や周囲に数多くの板碑や宝篋印塔など中世石造物が散らばっていることを発見した。さらにその中には下藤墓地と同じ石組遺構が含まれていた。また伊東氏の報告にも触れられていない石造物がかなりの数存在することが判明した。平坦面や土手が石造物の年代に造られたとすれば、大変保存状態のよい中世から近世初頭の宗教遺跡であると予測された。

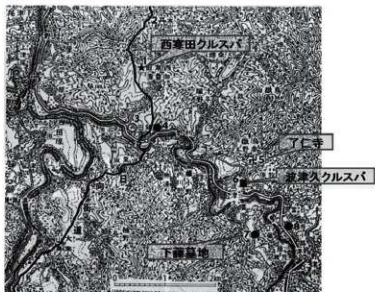
1. 調査の経過と方法

踏査の結果、遺構と石造物の同時性の確認する必要性を痛感した。ちょうどそのころ大分県教育庁埋蔵文化財センターは平成20年(2008)度以来大分県内の古代・中世石造物の分布調査を継続実施しており、その一環として石造物の建立環境が良好に残された遺跡のリストアップと確認調査を計画していた。そこでその石造物調査の一つとして当クルスバ遺跡の測量調査を実施した。

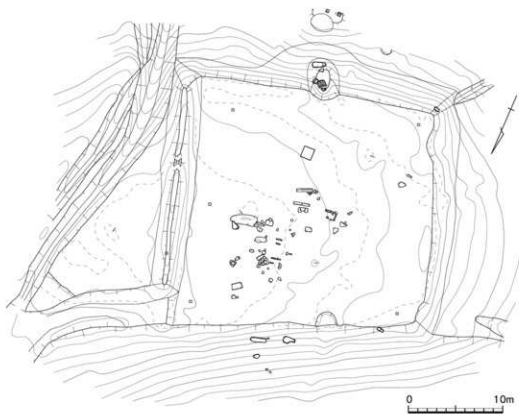
調査は平成23年(2011)11月22日～12月20日の間、現地で行った。調査主体は大分県教育庁埋蔵文化財センター(山口博文所長)。測量調査はセンター職員田中裕介が担当し、同嘱託福永素久を助手に行った。調査に当たっては臼杵市教育委員会神田高士氏、豊後大野市教育委員会高野弘之氏、諸岡郁氏の協力を得るとともに、臼杵市野津町御霊園区長村上慎朗氏、副区長川野光治氏と豊後大野市犬飼町細口(ほそぐち)区長足立むつみ氏と足立完治氏、新川邦明・登美子夫妻をはじめとする土地所有者の方々には特にお世話になった。

調査はまず遺構のひろがる30m四方のさらに周囲5ないし10mを加えた50m四方の竹と枯れた樹木の伐採と除草をおこない、そのご堆積した枯葉の除去と露出していた石材の輪郭を検出する清掃作業をおこなった。そこで現状の地形観察と石造物の観察をおこない、その結果を記録するため100分の1縮尺の平板測量をおこなった。等高線は25cm間隔を基本に起伏の少ない場所は12.5cmの補助線で表現した。その結果が第153図2である。

翌年別府大学に移った田中が科研費の補助を得て石造物の実測調査を実施した³⁴⁾。その成果も併せて報告する。



第1図 一世紀前の野津とクルスバ (現地距離5万分の1「大図」明和36：1903年測量図より)
 1 新富園クルスバ 2 西寒田神社 3 藤田城 4 藤田墓地 5 了仁寺
 6 波津久クルスバ 7 下藤キリシタン墓地 8 寺小路橋十字架



第2図 西寒田クルスバ遺跡測量図 (S=1/400)

第153図 西寒田クルスバ遺跡の位置及び測量図

2. 立地と遺構

西寒田クルスバ遺跡は第153図1にみるように、現在の国道10号線から北に逸れて台地をのぼり、さらに奥の丘陵上に位置する。クルスバ遺構は標高160mほどの独立丘陵の頂上部に位置している。北に延びる尾根が唯一隣接する丘陵と接続する。一見今日の主要交通路からはずれた農村風景であるが、江戸時代以前は異なっていた。クルスバの所在する丘陵直下の台地上を大野郡三重郷から大分郡に抜ける日向街道が通っていたのである。その道路は野津院山奥村から北上し、鍋田村にあたる現在の戸上小学校付近で野津川を渡河し、御堂園、細口、松原を通って、西寒田（さきむた）神社の横から山地を縦断して戸次（へつぎ）に抜ける道路である。この道は戦国末期天正14年（1586）には豊後府内を目指す島津軍の進軍路になり、クルスバの南東1キロに所在する鍋田城はキリシタンの立てこもった城として有名である³⁵⁾。さらにその路線が古代の豊後国府から日向国府にむかう古代駅路路線の可能性が高いことを故波津久文芳氏が指摘しており³⁶⁾、筆者もこの付近のルートについては賛成である。つまりかつて西寒田クルスバ遺跡は古代から近世にいたる幹線道路を一望のもとに見下ろす眺望絶好の場所に立地していると考えられる。

遺構の詳細を、第153図2をみながら記述しよう。①まず一辺25mほどの方形の造成面が目をつく。正確には西辺は約23m、北辺は26m、南辺は25m、東辺は土手の内側で27mとややいびつな台形平面をなし、②丘陵を横切る道路に面する一辺には平坦面からみると高さ1m弱の土手があり、北端の一端が幅3mほど切れて入り口のようにになっている。③南北の斜面は盛土による造成と推定される丁寧な斜面となっている（写真1）。④正面にあたる西側斜面は自然地形がよくのこり法面は低い。⑤中央の平坦面から南北の斜面に、板碑や宝篋印塔、五輪塔など鎌倉時代から戦国時代わたる仏教石造物の部材が散乱している（写真2）。⑥御堂園集落のある東方向の麓に宝篋印塔の笠部（No.3、写真3）が転落しており、クルスバ遺跡の南斜面にある宝篋印塔の基礎（No.2、写真4）と同一個体と考えられる。⑦また東西方向をむいた長方形の石組遺構（No.11など；写真5）が三基以上あり、そのなかには砂利がまかれていた。臼杵市下藤キリシタン墓地で見えられた石組遺構と同一形式の遺構であることを確認した。⑧平坦面の中央部に伊東東氏によって注目された石柱状の安山岩石材（No.9、写真6）があり、その近くに正方形の石材（No.8）が存在した。

方形台状のこの遺構の造成過程を推測すると、まず丘陵中央を削って平坦面をつくり、その削った土で方形の台形地形と土手を造成し、一部道路を除いて土手の東側は自然地形を残したものと推定される。本来この平坦面には次にのべる石造物の内、板碑や宝篋印塔、五輪塔など仏教形式の石塔が配置されていたものと推定される。当然寺院の堂等の建物も存在した可能性が高いと考えられ、本来この方形の造成と土手は西に正面を向けた堂宇を中心とする仏教の小規模な中世寺院であったと推測される。

3. 石造物

現状ではキリスト教十字架碑1基、宝篋印塔1組、小型の宝篋印塔の身らしき石造物2基、板碑4基、石組遺構3基、さらに正体不明の石柱状石材などが発見されている。

最古の石造物は北斜面でみつかった正安2（1300）年銘の板碑である（No.1、第154図3、写真7）。この板碑は残長1.5m以上で額部以上が欠失し、碑身部に刻まれた梵字種子の上半は失われている。正面を上に向けて半ば埋没していた。表面は、かろうじて文字が読み取れるほどに剥離している。わずかに「正安二」と読み取れ1300年の銘がこのことが判明した。

南側の斜面中央には造成部を掘り崩した跡があり、そこに14・15世紀の宝篋印塔2組、16世紀の板碑2基以上などの破片が斜面に散乱していた（写真8）。横列しになった宝篋印塔の基礎部は、二重の方形輪郭のなかに格状間が陰刻され、下部には蓮弁六弁を垂下し各蓮弁間に間弁を陽刻する（No.2、第154図4、写真4）。高さ52cm、一辺62cm。この宝篋印塔の笠と推定される同じ寸法で同一の文様を刻む石製品が、クルスバ遺跡の南へ里道をかなり降りたところに逆さに置かれた状態で発見されている（No.3、第154図5、写真3）。当時の村上区長から、子供のころ祖父に初めて教えられたときと同じ状態であると伺った。



拓本の縮尺は任意

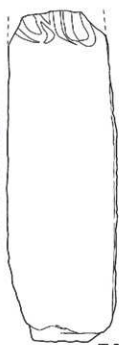


図3

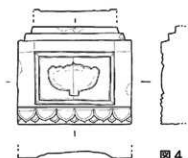


図4

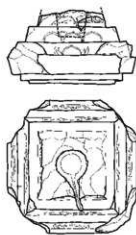


図5

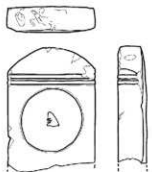


図6

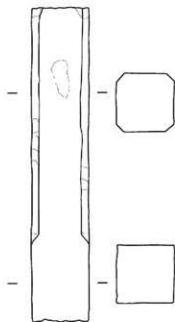


図8

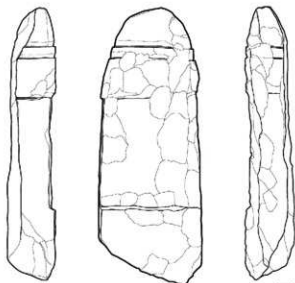


図7



図9 拓影 (縮尺任意)

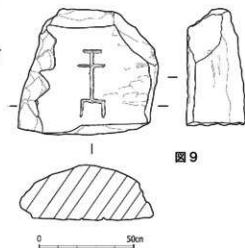


図9

第154図 西寒田クルスバ遺跡石遺物実測図 (S=1/20)



写真1 東斜面と平坦面・土手を望む(南西端から)



写真2 北東入口から平坦面を望む 石造物が散乱している



写真3 ふもとで発見された宝篋印塔の笠部



写真4 南側斜面の宝篋印塔基礎



写真5 長方形の石組遺構



写真6 右に石柱状の石材がみえる



写真7 破壊の跡が著しい板碑 左が頭部



写真8 西寒田クルスバ



写真9 南斜面下の宝篋印塔塔身



写真10 宝篋印塔そばの板碑



写真11 南側斜面の板碑上半



写真12 御霊園クルスバ(No8台石)



写真13 (No13板碑)



写真14 御霊園クルスバ(No10伏碑)



写真15 罪標十字架

下部二段上部二段で上部一段目に間花弁、二段目に上を向いた蓮弁三弁と間弁を配する。露盤には蓮子窓が彫られている。64cm×70cm。原田昭一氏の研究²⁷⁾によると、1380～1400年ごろ製作された玄正（玄聖）系宝篋印塔の新例となり、そのなかでも比較的古いものと推定される。この笠部のもう一つの特徴は破壊の痕跡が明瞭なことである。隅飾りが四隅とも欠け、露盤も大半が損壊している。もうひとつの宝篋印塔はやはり基礎（No4）だが、上下に低く格狭間はつぶれたような表現である。

その地点からさらに遺構外に下った所にもう一つ所掘り起こされたあとがあり、そこには小型の宝篋印塔の身が2点存在している（写真9.No5AとB）。これは後世掘りだしてこのように置かれたようにみえる。表面は丁寧に研磨されているが月輪や梵字は刻まれず、上面に納入孔が彫られている。

さらに大型宝篋印塔のそばには二基の板碑が倒れていた。一基は碑身途中から折れた板碑の上半部である（No6、154図6、写真10）。残長65cm前後、幅47cmをはかり、やや膨らんで三角形をなす山型部、側面は頂部が前方に位置する。額部は突出せず二条の凹線で切り込みを表現する珍しい例で、二条は側面まで伸びる。碑身部の月輪は全体を陽刻で造る。頂部先端にノミ痕が明瞭にはいり、意図的に削られているようである。

もう一基は碑全体が正面を下にして埋もれていたものである（No7、154図7、写真11）が、長さ150cmほど、幅は45cm前後である。額部は突出せず、二条の切り込みはかなり離れ側面まで彫られている。全体に表面の剥離が激しく、本来の研磨面をほとんど残さない。この二基の板碑は原田昭一氏の研究に照らせば、16世紀代の作品で、ともに後半から末の例と考えられる²⁸⁾。

以上がクルスバ遺構の周辺斜面およびその延長にあたる場所で見つかった石造物である。宝篋印塔と板碑からなり、いずれも当初の造立位置から移動し、部材が離れ離れに放置されるとともに、人為的な破壊の痕跡と推定される損壊状況を示す例も多い。

いっぽう平坦面にのこされた石造物には顕著な破壊の痕跡はなく、そのなかにキリシタン十字架碑と石組遺構が残されている。平坦面にはまずおよそ120cm四方の大型の方形の整形された一枚石がある（No8：写真12）。大きさからみて南側斜面の大型宝篋印塔の台石と考えられる。

その北側に石柱状の断面方形で長さ165mの石造物がある（No9、154図8、写真6）。一辺36cm。途中から四隅の角を削って平面を作りだしている。それに対応するように北側に並行に二本の石材を継ぎ足したように並べた石材がある。周囲には五輪塔の水輪が数点（No15～16）散在している。台石とこの配置された石柱は、かつて伊東東氏も注目したものである。

さらにその付近には燈籠の中台のような破片（No14）があるほか、14世紀代の一部損壊した板碑（No13：写真13）が残っていたが、完全に地表面に露出しているため、本来の位置は不明である。

平坦面の中央にはキリシタン墓碑にあたる可能性の高い扁平伏碑状の石材（No10、写真14）や小型の伏碑が数基以上顔を出しており、墓の上部構造物にあたる下藤キリシタン墓地と同一形式の石組み遺構（No11）が複数存在することも判明した。

そのなかで伏碑の破片と考えていた石材を計測のため起こしたところ、下面から葉研彫りで印刻された罪標十字とその下に台形のカリワリオ（ゴルゴダの丘）を接続した彫出十字架を発見した（No12：写真15、154図9）一見下部が欠失しているように見えるが、十字架の彫られた位置が中央にあるので、この形を前提に十字架が彫刻されている。高さ66cm幅70cm、厚さ30センチほどの硬質の凝灰岩を用い側面と背面は荒削りの状態で、細かい調整はない。正面はチョウナで平坦に削り出すが、研磨や細かい調整はなく未完成のような印象をあたえる。その正面に罪標十字架が線刻されている。罪標の幅は8cm、その中央から下に伸びる縦木の長さは26.5cm、横木は幅14センチで、罪標から8.5cmの所で交わる。交点から左は8cm、右は6cmと中央ではない。カリワリオは横線1cm、縦線とともに8cmである。表面がやや凹凸があるので一見稚拙に見えるが、葉研の底線は直線で丁寧に彫られている。

十字架はラテン十字で、罪標とカリワリオが表現され線刻の末端に裝飾がない森脇あけみ分類の1-E1

類にあたる^{註1)}。カリワリオの表現のある十字架は九州のみに分布することがすでに指摘されており、新たに一例を加えることになった。銘文がなくこれまで知られているキリシタン墓碑の型式に類品がなく、あえて分類すれば、自然石立碑にあたるが、この石造物の今後、十字架碑と墓碑の両面から検討されるべきであろう。

以上の石造物はいずれも凝灰岩製の石造物である。板碑・宝篋印塔の多くは故意に破壊あるいは削り取られた痕跡がある。西寒田クルスバ遺跡発見の石組遺構の特徴が、下藤キリシタン墓地の形式と一致するのみならず長軸の方向が東西方向を向いて下藤墓地の方向と一致する^{註2)}。後者は墓地の形式だけでなくそこでとりおこなれた当時の埋葬習俗に共通するものがあるからであろう。

まとめ

測量調査を加えた今回の一連の調査によって想定されることを仮説的にまとめておこう。

西寒田クルスバ遺跡には、①鎌倉時代末期14世紀初頭から戦国時代まで使われた小規模な中世仏教寺院が当初存在し、②その場所が戦国時代末期から江戸時代初期にキリスト教施設に改変され、そこには地名の起源となった十字架や墓地が存在したものと推定される。③江戸時代17世紀30年代にふたたびキリスト教から仏教に改宗したとき、この場所はそのまま放棄され、「クルスバ」という地名のみが伝承された。④仏教からキリスト教に、キリスト教から仏教に改宗するときに、それまでの信仰の拠り所とした石造物を故意に破壊した可能性がある。仏教とキリスト教の両者の石造物が後世に残る遺跡であると同時に、戦国時代末期から江戸時代初期のキリスト教布教によって翻弄された一地方の歴史を刻む貴重な史跡であるといえよう。

註1) 野津町史編纂室1993『野津町史』上 p.376~379橋本操六「野津院のキリシタンとクルスバ」、p.728~731小泊立也「キリシタン関係遺物」野津町 なお現在はこの遺跡は「御霊園クルスバ」と呼称されることが多いが、これは臼杵市側からみた呼称である。遺跡は臼杵市と豊後大野市にまたがって所在し、伊東東氏が調査したころは、たんに「クルスバ」とよばれていたらしい。かつての大字西寒田の中央に位置しているところからも、「西寒田クルスバ遺跡」と呼称したい。

註2) 五野井隆史2012「葬礼と墓地と墓に関する賞画」『キリシタン墓碑の調査』長崎純心大学

註3) 田中裕介2014「伊東東の論文「クルスバ」と子仁寺について」『史学論叢』44 別府大学史学研究会
なおその後この場所を昭和13年(1938)にマレオ・マレガ氏が調査している(日本カトリック新聞)。

註4) 平成24(2012)~25(2013)年度科学研究費補助金研究活動スタート支援(課題番号 24820071)「キリシタン墓と中国人墓にみる大航海時代の外来墓制に関する基礎的研究」の成果。調査は平成24年(2012)12月9日、平成25年(2013)2月3日に実施した実測には田中、馬場昌平、権丈和徳、崎谷雄紀(以上当時別府大学院生)、松浦由佳、宮木貴史、千原和己、村田仁志、鮎川和樹(以上別府大学生)があたり、トレースは奥彩香、北原美希(以上別府大学院生)が行った。

註5) ルイス・フロイス(松田毅一・川崎桃太郎)1978『フロイス日本史』8 p.175 中央公論社

註6) 遠津久文秀2007「三重駅・高取駅と尚賢を結ぶ日向道」『大分県地方史』201 p.9~10 大分県地方史研究会

註7) 原田昭一2005「中世における石造物流通の様相～玄正(玄聖)銘宝篋印塔の流通をうして～」『日引』7 石造物研究会

註8) 原田昭一2004「板碑変遷史-豊前・豊後における紀年銘板碑を通して-」『古文化叢書』51 九州古文化研究会

註9) 森脇あけみ2012「石の十字架」『日本キリシタン墓碑総覧』南島原教区

第4節 各塔形のまとめ

(1) 五輪塔

五輪塔はもともと数多く製作された塔種であり、その分布域もほぼ大分県下全域を覆い尽くしている。総数2万基を越え、中でも国東市・豊後高田市・宇佐市・杵築市等、国東半島周辺に爆発的に流行している。

大分県における五輪塔はほとんど安山岩と凝灰岩に限定できるが、大きく分けて国東半島周辺に安山岩が、また、大分県南部と、大分県北部でも豊後高田市・杵築市山香町周辺に凝灰岩を石材とする地域が存在する。各石材による石造物が分布する地域には、地質学的にその岩層が存在しており、生産地は石材産出地にきわめて近く、また、供給地もさほど離れた地域でないことが考えられる。

大分県における五輪塔の出現は古く、平安期に遡る。紀年銘資料としては最も古く位置付けられる臼杵市中尾に所在する2基からなる五輪塔（臼杵市047）は、嘉応2年（1170）銘をもつものと、承安2年（1172）銘をもつものである。在銘資料としては、わが国最古の在銘五輪塔である岩手県平泉釈尊院五輪塔（1169年）に次ぐ古さをもつ資料であり、出現期の五輪塔の様相を知る上ではきわめて貴重な資料群である。この2例は大分県下の五輪塔のなかでは、きわめて特異な様相をもち、両者とも一石で形成されている。また、嘉応塔には四面に胎藏界五仏・大日如来法身真言・大日如来報身真言・大日如来法身真言の梵字種子が、また、承安塔には四面に大日如来法身真言の梵字種子がそれぞれ刻まれている。

一石形成の五輪塔は、戦国期に流行する一石五輪塔とは異なり、古式の五輪塔の1型式として少数例みられる。それは、臼杵市周辺に分布し、最も新しい紀年銘資料として弘安8年（1285）銘をもつ臼杵市備後尾五輪塔（臼杵市101）に続く。一方、国東半島においても一定の流行がみられ、国東市浜崎祖形五輪塔群（国東市153）に8基の一石形成五輪塔が確認できるが、これについてはその帰属時期について、議論が分かれる状況にある。また、鎌倉中後期のものと考えられる国東市国見町妙吉寺一石五輪塔（国東市038）は空風輪を大きく形成する古式の五輪塔の型式をもち、金剛界五仏・大日如来法身真言・大日如来報身真言・大日如来法身真言の梵字種子が刻まれている。

このように出現期の五輪塔には一石形成のものが比較的多く確認できる特徴をもつ。組合せの五輪塔では、最古の紀年銘をもつものとして、正元元年（1259）銘をもつ宇佐市安心院町最明寺五輪塔（宇佐市262）が最も古く位置付けられる。この五輪塔の各輪には、五輪塔四角門の梵字種子を刻んでいる。

以後、正応5年（1292）銘をもつ大分市西光寺五輪塔（大分市055）など13世紀に属する五輪塔はきわめて乏しく、紀年銘資料をみると14世紀にいたり増加しはじめる。正安2年（1300）銘をもつ豊後大野市下赤瀬五輪塔（豊後大野市297）、嘉元4年（1306）銘をもつ別府市御霊神社五輪塔（別府市025）、延慶3年（1310）銘をもつ臼杵市名塚五輪塔（臼杵市100）、元徳3年（1331）銘をもつ宇佐市院内町蓮華寺跡五輪塔（宇佐市227）など、鎌倉後期に属する五輪塔が各地に確認できる。南北朝期にいたり、五輪塔は数を増やし、造立される。紀年銘がみられないものの、臼杵市野津町松尾五輪塔や大分市大友頼泰五輪塔（大分市087）など、きわめて大型の五輪塔が造立されるのも鎌倉時代後期である。

このような中において、別府市美術館玄関の右側に置かれている西野口五輪塔婆（別府市080）はきわめて特異な様相をもつ。空風輪を一石で、火水地輪を隅切りの一石で刻出する五輪塔の地輪部に高さ110cmの方柱石を継ぎ足した形の総高179cmを測る細身の五輪塔婆であり、正安元年（1299）銘をもつ。国東市安岐町系永田と伝えられているが、他に類例をみないきわめて特異な様相をもつものである。

南北朝期にいたり五輪塔は、より数を増して造立される。康永2年（1343）銘及び貞和7年（1351）銘をもつ由布市挾間町竜神寺五輪塔（由布市105）、正平11年（1356）銘をもつ豊後大野市長寿庵五輪塔（豊後大野市049）、康暦3年（1381）銘をもつ豊後大野市中尾五輪塔（豊後大野市270）、永徳2年（1382）銘をもつ犬飼石仏周辺五輪塔（豊後大野市153）など、完存のものは少ないが部材のみのものは数多く存在する。この時代の特徴として、有力武士の墓地とされる石塔群に五輪塔が多く用いられている。その代表的な類例が杵築市大田の田原家丸山墓地（杵築市327）や由布市挾間町挾間氏墓地である。杵築市

大田の田原家丸山墓地には、永和元年（1375）銘をもつ五輪塔水輪が確認できるほか、南北朝期の五輪塔が林立している。一方、由布市挾間町挾間家墓地でも組合せが疑わしいものが多いが、最古の紀年銘として、康永2年（1343）銘をもつものが確認でき、鎌倉後期から南北朝期にかけて五輪塔が有力武士の墓塔として利用されていることがわかる。




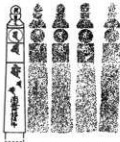
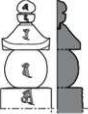



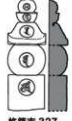





鎌倉後期～南北朝期の五輪塔の特徴として、中・大型であり、形もよく、梵字種子も葉彫り形で丁寧に彫られている特徴をもち、五輪塔の型式変化のなかでは最も秀麗な時期であることがわかる。この時期には、造立数が比較的多い宝塔や宝篋印塔などの四面観をもつ大型の石塔が、総供養塔や結衆の塔婆として造立されているが、このような性格をもつ五輪塔はほとんどみられない。銘文からすれば、逆修・道善とも供養塔としての機能をもつものが、大分県での五輪塔の特徴であると思える。

南北朝期に隆盛する五輪塔も、南北朝期末から室町期にかけて造立数がきわめて減少するとともに、南北朝期と戦国期にはさまれた変革期の様相をもつ。この時期の紀年銘資料はきわめて少なく、大分市横超寺五輪塔水輪部（大分市053）に応永20年（1413）の紀年銘をもつものが存在するが、この五輪塔の組合せが本来のものでないことが象徴するように、激減期である当該期の五輪塔の様相は不明な部分が多い。


















一方、戦国期になると、五輪塔の造立数が爆発的に増加するとともに、小型化・粗雑化の傾向が増す。その形態も多様化し、様々な形態が現れ、それとともに宝塔との折衷形をはじめ、五輪塔という本来の形態を失ったかにも思える特異な様相をもつものもみられる。加えて、空輪から地輪までを一石で作る一石五輪塔が一定量の割合で製作されるようになる。また、銘文にみられる造立主旨についても、戒名や没年月日をあらわしたと考えられる紀年銘が刻まれており、墓碑の機能をもつ石塔に変化している。このことは、他の石造物と同様であるが、塔形間の割合とすれば圧倒的に五輪塔が多い。それは群集という形をとり、国東市千灯寺跡の仁聞国東塔周辺に存在する千基を超える五輪塔群（国東市077）をはじめ、国東市大聖寺石塔群（国東市123）のように200基を超える五輪塔が確認できる石塔群も存在する。戦国期には石塔は群集して存在することがきわめて多くなるが、墓碑化が大きく影響していることが考えられる。この様相は慶長・元和・寛永期の17世紀前半に至っても変わらない。

この様相が一変するのは、板碑形墓碑が出現する寛文期（1661～1672）である。板碑形墓碑は板碑の形式を受け継ぐものであるが、板碑形墓碑の出現により、その他の塔形が一斉に消えてしまう。消滅する代表的な塔形が五輪塔であり、それ以前に爆発的に流行することに比較すれば、消滅への激変化も著しい様相を呈する。

前述した、別府市西野口五輪塔婆のほか、国東市千灯寺跡の奥の院には、火輪が三角錐を呈する三角五輪塔（国東市075）がみられる。三角五輪塔は極めて珍しく、大分県下においては唯一の存在である。三角五輪塔は、鎌倉初期の重源関係のものと考えられ、鎌倉時代前期の奈良市東大寺伴墓三角五輪塔をはじめ、全国的に数が非常に少ない。千灯寺跡三角五輪塔が重源関係のものかどうかは明らかではないが、大分県下においては極めて特異な存在である。

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀		 <p>国東市 153 冨崎形五輪塔 国東市 038 妙吉寺</p>	
13世紀	 <p>宇佐市 262 嚴明寺 (1259)</p>	 <p>国東市 264 川原板碑周辺</p>	 <p>別府市 080 野口原 (1299)</p>
14世紀	 <p>宇佐市 227 蓮華寺跡 (1331)</p>  <p>宇佐市 153 長興寺墓地</p>	 <p>国東市 080 坊中</p>	 <p>別府市 025 堀門氏墓地 (1339)</p>  <p>杵築市 327 田原丸山墓地</p>
15世紀		 <p>姫島村 004 海岸寺</p>	 <p>杵築市 201 生龜寺墓地</p>
16世紀		 <p>豊後高田市 407 真木大堂 (1592)</p>	
17世紀			 <p>白出町 004 吉良彈正供養塔周辺</p>

第155図 五輪塔変遷図① (S=1/60)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	日田・玖珠
	 <p>臼杵市 047 中尾五輪塔 (左: 1170、右: 1172)</p>		
 <p>大分市 055 西光寺 (1292)</p>	 <p>臼杵市 101 一石五輪塔 (1285)</p>  <p>臼杵市 107 松尾</p>		
 <p>大分市 087 大友藤原墓</p>	 <p>臼杵市 059 満月寺 (1334)</p> 	<p>豊後大野市 297 下赤嶺 (1300)</p>  <p>豊後大野市 049 長寿庵 (1356)</p>	 <p>日田市 075 草三郎大神宮 (1347)</p>
 <p>大分市 053 横越寺 (1413)</p>	<p>佐伯市 096 長昌寺</p>  <p>佐伯市 121 市福所</p>	<p>豊後大野市 153 犬飼石仏 (1382)</p>	 <p>日田市 025 巖間山 (1498)</p>
 <p>由布市 105 扶國氏墓地</p>	 <p>佐伯市 091 花木</p>	 <p>豊後大野市 325 下田家 (永祿)</p>	 <p>日田市 015 龍川寺 (1584)</p>

第156図 五輪塔変遷図② (S=1/60)

(2) 宝塔・国東塔

宝塔は、大分県の石塔の中では、もっとも個性的かつ数多く製作された塔形の一つである。中でも代表的なものか国東半島周辺に流行した国東塔（国東型宝塔）である。その分布域も、ほぼ大分県下全域を覆い尽くしているが、国東市・豊後高田市・宇佐市等、国東半島周辺に多く分布する傾向がある。

大分県における宝塔は、豊後高田市香々地町坊中岩屋宝塔にはじまる。細い茶筒状の塔身に長い首がつく形態をもち、平安時代後期におさまるものと考えられる。また、平安時代末～鎌倉時代初のものと考えられる国東市国見町千灯寺宝塔（国東市070）は、本来、千灯寺跡奥の院に置かれていたとされるものである。この塔身には納入孔が穿たれ、塔身横に方形の蓋石が嵌められている特異な形態をもつ。この宝塔は納経のためのものであることがうかがえるが、坊中岩屋宝塔（豊後高田市151）とともに平安期の宝塔は寺院最上部の岩屋におさまられていることは興味深い。

これに続き、宝塔が造立されるのは鎌倉時代後期を待たざるを得ない。弘安5年（1282）銘をもつ中津市本耶馬溪町屋成家墓地宝塔（中津市236）、弘安6年（1283）銘をもつ国東市国東町岩戸寺宝塔（国東市081）、永仁2年（1296）銘をもつ豊後大野市蓮城寺宝塔（豊後大野市282）など13世紀にさかのぼる資料も散見できる。これらはすべて異なる形態をもち、中でも、岩戸寺宝塔は国東半島一帯に分布する国東塔（国東型宝塔）の祖形となるもので、注目できよう。国東塔については後述するが、屋成家墓地宝塔や蓮城寺宝塔はいずれも同規模・同型式の2基が並置されている。屋成家墓地宝塔は鞍馬寺経塚出土銅製宝塔や奈良原経塚出土銅製宝塔などに近似するものであり、金属製宝塔をモデルにしたことが考えられ、蓮城寺宝塔にしても垂木・高欄・扉などをもつ工芸品に特徴的な形態がみられる。国東塔（国東型宝塔）の祖形となる岩戸寺宝塔にしても工芸品を祖形にしていることが考えられ、鎌倉時代後期に流行しはじめる初期の宝塔は他部材にモデルを求めていたことがわかる。これらのうち、蓮城寺宝塔の型式は継承されることなく単発に終わり、屋成家墓地宝塔に至っても周縁部に数少なく受け継がれているにすぎない。

これに対し、岩戸寺宝塔を祖形とする国東塔は国東半島周辺に根付き、中世を通して大流行する。一般の宝塔が塔身と基礎の間に台座を有しないのに対して、国東塔の最大の特徴として基礎と塔身の間に反花・請花のどちらかの蓮華座、あるいは双方もつものであることがあげられる。紀年銘資料でみれば、正応3年（1290）銘をもつ国東市国見町別宮社国東塔（国東市007）や、応長元年（1311）銘をもつ願成就寺国東塔（日出町035）、正和5年（1316）銘をもつ武蔵町照恩寺国東塔（国東市386）など、岩戸寺国東塔に続く資料群は細部の形製も石塔としての型式を確立させている。鎌倉後期から南北朝期の国東塔は、国東半島一帯に広がる天台宗寺院である六郷山寺院に造立されている場合が多く確認でき、旧景観で捉えられる造立地は講堂周辺にみられる場合が非常に多い。国東市国東町岩戸寺（国東市156）・国東市安岐町両子寺（国東市179）・国東市国東町神宮寺などをはじめ、その類例は数多い。この時期の国東塔には塔身内に奉納坑が確認でき、六郷山寺院にとって講堂は鎌倉～南北朝期の中心伽藍であり、中心伽藍周辺にひととき大きな国東塔を納経塔として造立されるものであったことが大きな特徴といえよう。

鎌倉～南北朝期には、国東塔だけではなく県下各地において宝塔の造立が確認できる。中津市長谷寺宝塔（中津市131・1348年銘）・別府市御嶽権現宝塔（別府市014・1322年銘）・大分市円寿寺宝塔（大分市077・1319年銘）・由布市慈航寺宝塔（由布市078・1330年銘）・豊後大野市下赤嶺宝塔（豊後大野市295・1345年銘）・豊後大野市馬背畑宝塔（豊後大野市222・1318年銘）・佐伯市大師庵宝塔（佐伯市094・1349年銘）など、紀年銘資料においても数多く確認でき、宝塔盛行期といえよう。この時期の宝塔は県下各地、大型の傾向があるうえ、多様な型式をもち、整形・調整とも精緻かつ秀麗である。県下各地に宝塔製作が根付き、工人系譜が存在していたことがうかがえる。

このように鎌倉～南北朝に盛行する宝塔であるが、14世紀中葉以降には石塔総体の中においては、宝篋印塔に押されていく傾向がみとれる。この頃になると、結業の塔婆としての石塔に変化してゆき、あらゆる塔形において交名をもつ結果塔婆が多く確認できるようになる。観応3年（1352）銘をもつ竹葉山香町

泉福寺国東塔（杵築市029）には「講衆」、応安七年（1374）銘をもつ杵築市山香町浄栄寺跡国東塔（杵築市072）には「一結十八人」、永和元年（1375）銘をもつ杵築市山香町重永国東塔（杵築市051）には「講衆十三人」、永和2年（1376）銘をもつ杵築市大田竜華寺国東塔（杵築市346）には「一結」、至徳4年（1387）銘をもつ国東市武蔵町西光寺国東塔（国東市243）には「講衆卅七人」などの銘文が確認できる。















加えて、文和3年（1354）銘をもつ竹田市岩瀬観音堂宝塔（竹田市094）には「一結衆」の銘文とともに30名を超える交名が、応安5年（1372）銘をもつ杵築市山香町小谷観音堂国東塔（杵築市045）には「一結講衆」の銘文とともに14名の交名が、応安8年（1375）銘をもつ豊後高田市熊野墓地国東塔（豊後高田市422）には23名の交名が、文中4年（1375）銘をもつ豊後大野市三重町内山蓮城寺宝塔（豊後大野市281）には31名の交名が、永徳4年（1384）銘をもつ杵築市山香町貫井塔ノ元国東塔（杵築市047）には17名の交名が、明徳4年（1393）銘をもつ豊後大野市三重町川辺宝塔（豊後大野市259）には「逆講講之人數」の銘文とともに13名の交名がそれぞれみられる。

このような結衆の塔婆としての宝塔は、村のお堂としての小堂の前にひととき大きく存在感を示すものとして造立されており、集村化に伴い村人が集う信仰の場である小堂前において、村人の紐帯を強める目的のもとに製作されたものと考えられる。このような結衆の塔婆は室町期から戦国期に至り、宝篋印塔とともに石幢（六地藏塔）にその主役を譲り、小庵・小堂前や墓地、さらには何らかの結界の地に造立されている。結衆の塔婆ゆえ、その規模は比較的大きく、当時、大分県下では集村化の動きが南北朝後半以降に見取れるが、このような社会的な変化と石塔の造立が無関係ではないことが考えられる。

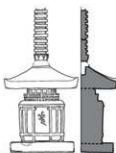






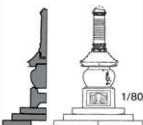




南北朝期の後半に結衆の塔婆としての宝塔の流行は長くは続かず、室町期に激減期を迎える。これは、前述したように宝篋印塔という新たな塔形の流行に押されるとともに、他の石塔と同様に鎌倉期以降の展開に終わりをつけ、新たな役割が石塔に求められたからにはほかならない。激減期以降の宝塔は、型式の退化、粗雑化、小型化が著しく、様相は大きく変化する。

それは、板碑の墓碑化に起因するものが大きく、造立時期も戦国期だけではなく、慶長～寛永期の17世紀前半まで造立され続ける。当該期の宝塔が墓碑機能を有していたことが、銘文から読みとれ、戒名や没年月日が刻まれるものが確認できることは他の塔形と同じである。このような板碑の墓碑化とともに梵字種子の著しい退化傾向が確認でき、きわめて小さい線刻状の梵字種子をみても、主尊を供養することの意義が失われていったことが考えられる。くわえて、五輪塔や宝篋印塔のような四面観の石塔とともに、本来の塔形が忘れ去られ、折衷形とも受け取れる異質な宝塔も確認できる。


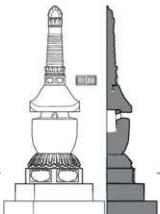
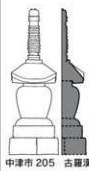
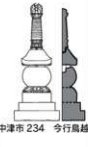

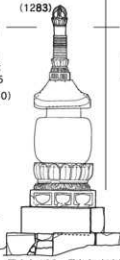
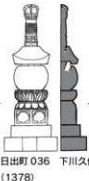




しかし、多くの地域で中世の板碑形式を受け継ぐ近世墓碑が流行することにより板碑以外の石塔は一斉に姿を消していくが、宝塔もその一つに数えられることがわかる。

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀		 <p>豊後高田市 151 坊中岩屋 国東市 070 千畑寺 1/40</p>	
13世紀	 <p>中津市 236 屋成家墓地 (1285) 宇佐市 367 山口家 (1290)</p>	 <p>豊後高田市 185 清台寺</p>	
14世紀	 <p>中津市 131 長谷寺 (1348) 宇佐市 367 千福 (1321)</p>	 <p>豊後高田市 186 城前ノ子</p>	 <p>別府市 014 御嶽権現 (1322) 杵築市 180 宗多氏墓地</p>
15世紀	 <p>中津市 257 山国支所 (1472)</p>  <p>宇佐市 153 長興寺墓地 (1447)</p>	 <p>豊後高田市 190 堰内家墓地</p>	
16世紀	 <p>中津市 209 羅漢寺豆造寺跡</p>	 <p>豊後高田市 392 長野観音堂跡 (1581)</p>	 <p>杵築市 032 堂野尾地藏堂 (1544)</p>  <p>杵築市 070 阿南邸 (1575)</p>
17世紀			 <p>杵築市 072 阿松家墓地 (1604)</p>


第157図 宝塔変遷図① (S=1/60)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	臼田・玖珠
			
 大分市 077 円壽寺 (1319)		豊後大野市 282 永仁宝塔 (1296)	
 由布市 078 慈航寺 (1330)	 佐伯市 094 大師庵 (1349)	 豊後大野市 222 馬背燈 (1318)	 玖珠町 003 下泊瀬神社 (1366)
 由布市 117 元宮	 臼杵市 098 名塚 (1449)	 竹田市 104 榎木多宝塔	
 由布市 058 寛勝寺	 佐伯市 026 平井 (1548)	 豊後大野市 268 大栗寺	

第158図 宝塔変遷図② (S=1/60)

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀		 <p>国東市 081 岩戸寺 (1283)</p>	 <p>杵築市 260 財前家墓地 (1321)</p>
14世紀	 <p>中津市 205 古羅漢</p>  <p>中津市 234 今行鳥越</p>	 <p>豊後高田市 265 塔ノ跡堂 (1310)</p>  <p>国東市 132 長木家 (1321)</p>	 <p>日出町 036 下川久保 (1378)</p>
15世紀		 <p>豊後高田市 095 磨崖敷 (1309)</p>	
16世紀		 <p>豊後高田市 422 熊野墓地 (1527)</p>  <p>国東市 366 恵良</p>  <p>豊後高田市 422 熊野墓地 (1587)</p>	
17世紀			

第159図 国東塔姿遷図① (S=1/60)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	臼田・玖珠
			 <p data-bbox="720 647 787 691">九重町 005 宝八幡宮</p> <p data-bbox="802 647 875 691">九重町 011 下止 (真形)</p>

第160図 国東塔変遷図② (S=1/60)

(3) 磨崖仏

磨崖仏とは、自然の懸崖ないし根付きの巨岩の表面を削平あるいは掘りくぼめ、そこに尊像（仏・神像及び人物像）を刻み表したものをいう。従って、切り出すなどして岩層から離れた単体の石材から刻出された石仏とは明確に区別されるべきである。ただ、通称では「○○石仏」と呼ばれるものでも、例えば「臼杵石仏」のように、実際は磨崖仏であることが多いので注意を要する。ちなみに、磨崖仏の彫り方は、極めて相対的な概念であるが、刻出の深浅に応じて、線彫り・薄肉彫り・半肉彫り・厚肉彫りに分類される。

中世磨崖仏の分布とその数

全国屈指の磨崖仏の宝庫大分県であるが、近世のものまで含めると、その数は80ヵ所、尊像の総数で約400軀にのぼるといわれる。これを今回の調査対象である中世以前の磨崖仏に限っても、65ヵ所、計約350軀の尊像の所在が判明している。

このような大分県の中世磨崖仏も、その県内での分布の状況をみると必ずしも一様ではなく、各地域によって分布に濃淡があり、その様相は複雑である。今、大分県域を①県北部、②県中部、③県南部、④県西部の4ブロックに分けると、その分布の様態は以下のとおりである。

- ① 県北部34ヵ所（中津市1、宇佐市3、豊後高田市21、杵築市8、国東市1、日出町0、姫島村0）
- ② 県中部9ヵ所（別府市0、大分市8、由布市1）
- ③ 県南部21ヵ所（臼杵市6、津久見市0、豊後大野市10、竹田市5、佐伯市0）
- ④ 県西部1ヵ所（日田市0、玖珠町0、九重町1）

これら4区域のうち、磨崖仏が最も多い県北部では、国東半島それも半島西部の豊後高田市から杵築市山香町（8ヵ所すべてが山香町）に集中し、同半島東部の国東市や宇佐市（3ヵ所いずれも同市安心院町）から中津市（同市本耶馬溪町）にかけて散在する。そして国東半島南部の日出町、さらには中津市・宇佐市・杵築市の旧市域には中世磨崖仏は存在しない。

県北部にあっても、中世磨崖仏が宇佐市（安心院町）から豊後高田市、杵築市（山香町）にかけて集中するについては、この地域が県内にあってはいち早く仏教が浸透した区域であり、とくに宇佐八幡宮の勢力が最も拡大した平安時代から中世にいたる時期は、宇佐平野の後背地から国東半島にかけて「六郷満山」と呼ばれる天台系山岳仏教が繁栄し、県下最古の豊後高田市・熊野磨崖仏（豊後高田市423）など、同山岳仏教文化を反映した優れた磨崖仏が造顕されている。

県中部では、大分川中下流域に位置する大分市に集中し、隣接する由布市扶間町に1ヵ所所在する。この地域は、古代以来の豊後国府の所在地で、中世には豊後守護大友氏の拠点ともなった区域であり、ここにも豊後国分寺や金剛宝戒寺、岩屋寺（現円寿寺）など、古代以来仏教の浸透・定着がみられ、国府やそれら寺院の周辺に大分元町石仏（大分市076）や岩屋寺石仏（大分市075）など、その優れた作ぶりの点でいかにも中央との関わりが想定される磨崖仏群が所在する。

県南部の磨崖仏集密地区である臼杵市域及び豊後大野・竹田両市を貫流する大野川中上流域は、これもまた県下にあつては早くから天台山岳仏教が浸透した地域であり、とくに臼杵氏や緒方氏・大野氏など豊後大神一族が緒方開発領主として入部・割拠した平安後期（11～12世紀）には、臼杵石仏（臼杵市041他）をはじめ菅尾石仏（豊後大野市146）、犬飼石仏（豊後大野市153）、宮迫東西石仏（豊後大野市192・193）など県下を代表する大規模かつ優れた造形の磨崖仏が造顕されている。

最後に、県西部の日田市域および玖珠郡（玖珠町・九重町）をとおして唯一の磨崖仏である九重町・瑞巖寺磨崖仏は、これも平安後期、12世紀にこの地に拠点を置いた豊後清原氏による仏教文化の所産であったと考えられる。

以上のように、大分県下における磨崖仏の分布は特徴的であり、それは全県的に広がっているのではなく、県北部の宇佐市南部から国東半島西部にかけての地域、県中部の大分市域および県南部の臼杵から大野

川上中流域に集中しているのが注目される。これらの地域には、県北部が宇佐八幡宮の経済力を背景とした六郷山寺院群、県中部には豊後国府を中核とする国衙とその周辺勢力、県南部には地域の開発領主として強大な支配権を確立した豊後大神氏一族など、いずれも有力な支配者層の存在があり、彼らが支えた仏教文化が早くから醸成されていたことが磨崖仏造像の地下地となったとは言えそうである。しかしながら、有力な支配者層と高度な仏教文化の存在が、磨崖仏の造立が盛行した必要にして十分な条件とはいえず、そこにはもう一つの条件として、これらの地域が磨崖仏の造立に適した素材としての岩層に恵まれていたことがあげられよう。以下では、大分県下における岩層の分布状況と磨崖仏造立の関係について考えたい。

県内の磨崖仏と岩層の分布

磨崖仏は、自然に露出した岩肌を素材としているため、その造形が岩質からくる材質的制約を受けるのは当然であろう。つまり、岩質が硬い・軟らかい、肌理（きめ）が粗い・細かいとは、刻出される尊像の造形もおのずから異なったものとならざるを得ない。大分県内には、奈良や京都・滋賀など近畿地方のような硬質の花崗岩を素材とする磨崖仏は存在せず、基本的には、軟質の凝灰岩を素材としたものがほとんどである。しかし、同じ凝灰岩ではあっても、国東半島を中心とした県北部と、大分市域を含んだ県中部、臼杵および大野川中流域を中心とする県南部の各磨崖仏集積地域の間では、彫刻に用いられた崖面の岩質にかなりの相違が見られる。

県下の磨崖仏に用いられた凝灰岩の岩質を、その組成の違いによって分類すると以下のようである。

凝灰岩 … 堆積岩の一種で、火山活動で噴出した火山灰や火砕流が固まってできた岩石の総称。もろいが軟らかく加工しやすい。

凝灰角礫岩 … 凝灰岩のうち、火山灰の中に直径32ミリ以上の火山岩礫を大量に含みもった岩石。きめが粗く、硬・軟不均質で加工しにくい。

溶結凝灰岩 … 高温の火山灰が大量に堆積し、その重さと高温のために粒子の一部が溶けてくっつき合い固まった岩石で、しばしば柱状節理がみられる。比較的緻密できめが細かく、均質で軟らかく加工しやすい。

混成凝灰岩 … 軽石や小石・砂粒を大量に含んだ火山灰が堆積して固まってできた岩石。軟らかく加工しやすいが、組成が粗くもろい。

県北部の磨崖仏では、熊野磨崖仏（豊後高田市423）や元宮磨崖仏（豊後高田市388）に代表されるように、その多くが凝灰岩とはいっても大粒の安山岩礫を多く含んだ凝灰角礫岩の岩層に刻まれている。凝灰角礫岩は、上記のように、きめが粗く硬・軟不均質という欠点があり、したがって磨崖仏の刻出の度合いも薄肉彫りからせいぜい半肉彫りのものがほとんどで、その造形も省略的にならざるを得ない。ただし、同じ県北部にあって、中津市山国川流域や宇佐市南部の安心院町の一部、さらには国東半島の付根にあたる豊後高田市田染地区から杵築市山香町にかけて阿蘇火山起源の溶結凝灰岩の露頭が見られ、安心院町の下市磨崖仏（宇佐市260）、櫛木磨崖仏（宇佐市365）、栗ノ木磨崖仏（宇佐市264）および山香町の倉成磨崖仏（杵築市088）、棚田磨崖仏（杵築市026）、又井磨崖仏（杵築市063）などが一群を形成している。

このような県北部の磨崖仏に対して、大分元町石仏（大分市076）や臼杵石仏（臼杵市041他）、菅尾石仏（豊後大野市146）など、県中・南部の磨崖仏の多くは、阿蘇火山灰の堆積層である溶結凝灰岩の緻密で軟質の岩肌に刻まれており、少なくとも半肉彫り以上、ほとんど丸彫りに近い厚肉彫りに刻出されている。しかしここでも、同じ凝灰岩でありながら県中部の大分川流域の一部では、岩屋寺石仏（大分市075）や高瀬石仏（大分市091）のように砂や小粒の軽石などを大量に含んだ混成凝灰岩の岩壁に刻まれた例もある。

以上のことは地質学的にみても、県北一帯が国東半島の両子山系から別府市西部に広がる山布・鶴見山系に至る古期第四紀～新第三紀後期の火山噴出物で蔽われ、阿蘇火山の東側から大分県中・南部の、特に大分川・大野川両河川流域に新期第四紀火山初期噴出物である溶結凝灰岩の岩層が広く分布している（その一部は県北部にまで及ぶ）ことと符合する。これは、磨崖仏の造立やその分布の濃淡に、素材としての岩質の適



熊野磨崖仏（大日如来像）

冪ひいては岩層の分布状況が大きく関わっていることを示している。いずれにせよ、大分県の磨崖仏における岩質の多様性、中でも県北部と県中・南部との岩層の相違は、各磨崖仏の造形的特徴の違いをもたらし、それはとりもなおさず磨崖仏製作の技法や製作者ないし製作集団の違いを意味するものと考えられる。

尊像の種類と信仰の変遷

大分県下の磨崖仏は、後述のように、平安後期に天台山岳仏教が県下各地に浸透して以後に造顕されたものばかりであり、造像の対象となった尊像の種類も古くからの信仰に根ざした顕教系の尊像である薬師如来や釈迦如来および観音菩薩に加えて、不動明王や変化観音など密教系の尊像が多いのも特徴である。しかし、密教の主導である大日如来そのものは意外に少なく、例えば県北部では福真磨崖仏（豊後高田市270）、県中部では高瀬石仏（大分市091）、県南部では臼杵石仏中の古園・ホキ第一群（臼杵市051・048）第三龕のそれぞれ中尊が知られるのみである。そして、大日如来と称されるものでも、実際の形の上では薬師如来や釈迦如来、阿弥陀如来など通常の如来像の姿に表される例―熊野磨崖仏（豊後高田市423・写真1）や宮迫東石仏（豊後大野市193）など―があり、地域によってそれらを大日如来と団体とみなす独自の信仰があったようである。

さらには、天台仏教から派生し平安末期から中世にかけて盛行した浄土信仰を反映して、西方極楽浄土の主尊である阿弥陀如来および阿弥陀三尊の造像例が多いのも特徴である。

この浄土信仰は、鎌倉時代以後の中世には往生極楽の対極である墮地獄への恐れを産み、その結果、六道



写真2 大分元町石仏

救済の仏である地藏菩薩や六地藏、ひいては冥官としての閻魔や十王などの造像が盛行することとなった。地藏（あるいは六地藏）および十王の造像例としては、県南部、臼杵石仏中のホキ第一庵第四窟（臼杵市048・平安末期）に先例があり、宇佐市安心院町橋本磨崖仏（宇佐市365）をはじめ、豊後高田市真玉堂ノ迫磨崖仏（豊後高田市192）や杵築市山香町倉成磨崖仏（杵築市088）など、県北部の中世後半期の磨崖仏において本格的に展開する。また、この期の磨崖仏に新たに現れたモチーフの一つに、豊後高田市香々地梅ノ木磨崖仏（豊後高田市148）をはじめ国東半島西部に多く分布する、地藏菩薩を比丘形の人物ないしは俗形の男女が讃仰する姿の図像がある。これは磨崖仏の造立が、人びとにとってより身近なものになったことを示すものにはかならない。この六道救済の信仰は、磨崖仏だけに限らず、大分県下のこの時期を風靡したようで、国東半島を中心に多く分布する地藏・十王石仏、同石殿・石幢および県中・南部に展開した六地藏石幢など独特な石造文化を形成している。

尊像別の実際の造像数としては、地藏菩薩・不動明王・阿彌陀如来の三者が圧倒的な数を誇り、全体の約半数を占め、次いで観音菩薩・毘沙門天（多聞天）・十王・薬師如来などがこれに続いている。なお、浄土ないし阿彌陀信仰と並んで、平安時代から中世にかけて盛行したものに末法思想を背景とした弥勒下生の信仰があり、県下にあっても多くの経塚が造営されたが、こと磨崖仏に関する限り弥勒菩薩ないし弥勒仏の造像例は皆無である。

以上のように、中世後半期における浄土信仰と六道救済の信仰の盛行が、仏教の裾野を広げてその民衆化を促進し、ひいては磨崖仏の造立を促したことは確かであろう。平安～鎌倉期の磨崖仏に比べ規模は縮小し

ながらも、その造立数においては格段に増加していったのである。

磨崖仏の造立時期

大分県内の磨崖仏で、記録や紀年銘によってその造立年代がわかるものはきわめてまれで、平安～鎌倉期の造像例には皆無であり、中世後半期のものに若干の紀年銘をもつものがあるに過ぎない。今、それらを年代の古い順に列挙すると、①長小野磨崖仏（臼杵市116／元弘3年・1333）②谷ノ迫磨崖仏（豊後高田市146／応安7年・1374）③栗ノ木磨崖仏（宇佐市264／応永5年・1394）④植本磨崖仏（宇佐市365／応永35年・1428）⑤小川野磨崖仏（豊後大野市002／大永4年・1524）の5件が知られている。いずれも14世紀以降の中世後半期のものであるが、このうち①長小野磨崖仏は、尊名が不詳なほどに損傷しており、これをもって磨崖仏の基準作例とするには難があるといわざるを得ない。また、②谷ノ迫磨崖仏と④植本磨崖仏はともに墨書銘であり、とくに前者の応安7年（1374）は、その作域からみて追銘の可能性が高い。

なお、以上の在銘磨崖仏とは別に、磨崖仏そのものではないが、それに付随ないし隣接した石造物に記された紀年銘によって、おおよその造立年代を推測させるものがある。すなわち、⑥臼杵石仏ホキ第一群（臼杵市048）の崖上に置かれる一石五輪塔2基（臼杵市047・嘉応2年・1170、承安2年・1172）が同ホキ第一群（第一～第四窟）のいずれかの造立に関わるものと考えられるほか、⑦福寿寺磨崖仏（豊後高田市406）が同じ崖面に刻まれた磨崖国東塔（永享5年・1433銘）と同時期とみられ、同じく⑧臼戸磨崖仏（大分市049）の同磨崖五輪塔（永正6年・1509銘）、⑨又井磨崖仏（杵築市063）の磨崖供養碑（天正6年・1578銘）が、それぞれ磨崖仏の造立に関わるものと考えられる。










以上9件の造像例は例外であって、通常磨崖仏が造像銘をもつことはほとんどなく、その年代判定についてはやはり様式的検討によらざるを得ない。熊野磨崖仏（豊後高田市423）や臼杵石仏（臼杵市041他）、元町石仏（大分市076・写真2）、菅尾石仏（豊後大野市146）など、県下を代表する磨崖仏については、古くは奈良時代遺説説がなされていたが、第二次大戦後から現代にかけて様式的的方法論が確立されるに及んで、平安後期説が定着するようになった。近年では、中・近世のものを含めて磨崖仏の悉皆調査が行われるようになり、平安後期から中世・近世にいたる各磨崖仏の年代的位置づけが総合的に判断されるようになってきている。それによると、県下の磨崖仏のうち、県北部では熊野磨崖仏を唯一の平安時代の作例とし、以下、鎌倉期とみられる鍋山磨崖仏（豊後高田市418）、南北朝期の元宮・福真・下市・倉成の各磨崖仏へと続き、その画期は中世後半期にあつたと考えられる。それに対して、溶結凝灰岩を主要な素材とする県中・南部では、むしろ画期は平安時代にあり、元町石仏を皮切りに臼杵石仏・菅尾石仏・緒方宮迫石仏（豊後大野市192・193）ほか大規模かつ優れた作りの磨崖仏が多く造られている。

磨崖仏の作者













磨崖仏の作者については、これも制作年代と同じく記録や銘文に何ら記すところはなく不明といわざるを得ない。県内の主要磨崖仏の作者として伝えられているものに、県北部の仁間菩薩、県中部の僧日羅、県南部の蓮城法師がある。これら伝説的作者については、おそらく県内各地域の初期仏教の創始・発展をなつた僧侶集団の象徴的存在であつたのが、後に磨崖仏の作者として仮託・伝承されるにいたつたものであろう。ちなみに、熊野磨崖仏（豊後高田市423）の作者として安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』に記される「真明如来」についても、その如来号の呼び方からして、これも仁間と同じく六郷山山岳仏教のなかで形成された伝説的作者像として捉えられるものであろう。

先述のように、県内の磨崖仏の造詣を支えた勢力として、平安時代には県北部の宇佐八幡宮と六郷山山岳寺院群、県中部の国衛およびその周辺勢力、県南部の緒方・大野・臼杵など豊後大神氏一族があり、鎌倉時代以後の中世には、守護大友氏や配下の武將達や在地の土豪たちがいる。県内の磨崖仏、とくに鎌倉時代以後の中世の磨崖仏の多くは、極めて地方色の濃い素朴な作域を示しており、基本的にはこれら在地勢力が抱

える在地の技術者集団の制作になるものと考えられる。しかしながら、磨崖仏造立の最初の画期となった平安時代の作例の中には、例えば大分元町石仏（大分市076）や臼杵石仏の中の古羅石仏（臼杵市051）・ホキ第一群第二窟（臼杵市048）・同第二群第一窟（臼杵市046）など、同時代の中央で活動していた円派や院派の仏師たちの手になる木彫仏に通じる造形を見せるものがあり、中央仏師が下向しての造像、ないしその指導による造顕もあり得たと考えられる。そこには、当時の豊後国新や宇佐八幡宮を介しての中央との関わりを背景に、中央の木仏師にも対応可能な溶結凝灰岩という素材的な適合性が介在しているのではないだろうか。

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀		豊後高田市 423 熊野窟崖仏 	 杵築市 088 曹成窟崖仏
14世紀	 宇佐市 260 下市窟崖仏	国東市 071 千燈石仏  豊後高田市 270 福眞窟崖仏	 杵築市 026 棚田穴地蔵窟崖仏
15世紀	 宇佐市 365 橋本窟崖仏 (1428)	 豊後高田市 292 川中不動尊	
16世紀			 杵築市 063 又井窟崖仏
17世紀			

第161図 窟崖仏変遷図① (縮尺任意)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	日田・玖珠
 <p>大分市 076 元町石仏</p>  <p>大分市 091 高瀬石仏</p>	 <p>臼杵市 051 古瀬石仏</p>	 <p>豊後大野市 192 緒方宮迫西石仏</p>  <p>豊後大野市 153 大脚石仏</p>  <p>豊後大野市 041 木下観音堂磨崖仏</p>	 <p>日田市 026 片山磨崖種子 (1342)</p>  <p>九重町 003 瑞巖寺磨崖仏</p>
 <p>由布市 116 鬼崎磨崖仏</p>		 <p>竹田市 075 上郷の新道堂磨崖仏</p>	
 <p>大分市 049 口戸磨崖仏 (1509)</p>		 <p>豊後大野市 002 小川野磨崖仏 (1524)</p>	

第162図 磨崖仏変遷図②(縮尺任意)

(4) 石仏

石仏というと、岩肌から湧出するように掘られた磨崖仏を思い浮かべるが、ここでは丸彫りの石仏、あるいは人物像（以下、まとめて「石仏」と言う）について述べる。結論から言うと、石仏は国東半島（豊後国）および隣接する宇佐、中津市域（豊前国南部）にほぼ限定して分布していることが明らかになった。この両地域は、大分県内では中世石造物の分布密度が最も高いエリア（高い順から豊後高田市、国東市、杵築市、宇佐市、別府市、中津市）であり、概ね国東塔及びその影響下にある宝塔が多く作られた地域でもある。以下では、まずこれらの石仏がどのような経緯で作られるようになったのかについて考えていきたい。

丸彫り石仏の出現

大分県で丸彫りの石仏が出現するのは南北朝期であるが、その前段階における石仏（磨崖仏と石塔に彫られた石仏）についても一瞥しておきたい。磨崖仏と石塔に彫られた仏像との関係に触れたのは望月友善氏である。大分市内にある曲石仏（大分市080）と伽藍石仏（大分市071）という磨崖仏に共通して見られる光線を刻んだ光背が、佐伯市上岡の十三重塔（佐伯市040）と臼杵市野津町の水地九重塔（臼杵市111）の軸線に彫られた仏像にも見られることを指摘した。この上岡十三重塔と水地九重塔は、豊後における石塔の嚆矢（厳密にはこれより古いものが見られるが、この時期以降急激に造立数が増えることから、このように言える。）であり、水地九重塔には文永4（1267）年の紀年銘が刻まれている。つまり、平安時代後期に始まった磨崖仏の造立が、ピークを越えつつあったこの時期に層塔が造立され、そこに同じ技法を持った仏像が刻まれたのである。望月氏は同一の石工の可能性を指摘している（『大分の石造美術』178頁上段）が、水地九重塔以外に石工に関する銘等も無く、また蓮華座の表現なども異なるので断定は出来ない。しかし、何らかの連関があったことは確かだろう。二つの磨崖仏が、いずれも守護である大友氏が守護所を置いたと思われる「古国府」地区の西方と南方に位置していることは（伽藍石仏の阿弥陀如来は古国府から見たとき西方に当たる。また、曲石仏のある守岡は、国府、あるいは府中（府内）の南の境界に当たる。）、これらの磨崖仏が守護であった大友氏とも密接な関係を持って造立されたことを窺わせる。当然、2基の層塔も同様であろう。

大分県において、塔身（層塔軸部）への仏像彫刻は、鎌倉時代後期にこのように始まった。鎌倉時代末期になると、宝塔塔身へ仏像が刻まれる事例が出現する。元亨2年（1322）別府市の御嶽権現社宝塔（別府市014）は、塔身四面に深い舟形光背を彫り、中に阿弥陀、釈迦、薬師、観音を丸彫りに近い半肉彫りにする。豊後高田市の塔1御堂国東塔（豊後高田市265）は、紀年銘は無いがやや浅いは阿様の舟形光背を塔身四面に刻み、内部にやはり各々三如来と観音を半肉彫りにしている。そして、塔1御堂国東塔のものは、舟形光背に光線が表現されているのである。前時代の磨崖仏や層塔に刻まれた仏像との繋がりが考えられる。

以上が、丸彫り石仏出現直前の状況である。最も古い年号を持つ丸彫り石仏は、応安元年（1368）の銘を刻む豊後高田市の高貴寺にある地藏坐像（豊後高田市365）である。台座を欠くが、小型の地藏像で、ほぼ垂直に立ち上がる尖頭状の舟形光背を持つ。このタイプは、国東市重藤の十王堂にある明徳4年（1393）の銘を持つ地藏像（国東市322）に繋がりが、さらに銘を持たないが杵築市大田の薬師堂（杵築市324）豊後高田市小田原の塔1御堂にある小型の地藏像などに展開していくものと考えられる。おそらく、14世紀後半～15世紀に納まるものと考えられる。

一方、この時期にやや大型の地藏像も造られる。杵築市の轟地藏（杵築市118）と竹の尾地藏（杵築市130）である。伝説ではあるが、元中2年（1385）、竹の尾城主の木付頼直が、轟の淵に身を投げて死んだ娘の供養のために2体の地藏像を造って轟の淵と城の崖下の窟に置いた、という。竹の尾地藏のある窟には宝樹院碑と記された石碑が建っている（第148図）。中世に遡るこの形態の石碑は県内では類例の無いものであるが、その銘文によると、康徳元年（1389）に木付頼直が岩を穿って「宝窟」を造り、石を彫って「地藏」を作った、とある。さらに、応永3年（1396）には、幻住普応国師の石像を安置し、石碑を建て

た、という。地藏はやや大型で、形態的に前後の展開が追えないことから、他所の石工（仏師）によるものであろう。やや小ぶりの幻住国師像は、後述する東国東の石造十王像にも共通する点が多いので、おそらく在地の石工の手になるものであろう。

一方、豊前に属する中津市本那馬浜町の羅漢寺（中津市217）では、1360年頃には五百羅漢をはじめとした石造物群が造営された。この影響で現在の中津市域には同様の形態の石仏が点在する。

このように、1360年代には大分県域、特に豊後に属する国東地域と豊前に属する羅漢寺において石仏の造立が始まった。今のところ、この二つの系譜には接点が見出しがたいが、後述のようにいずれも「法衣垂下像」が多くを占める点で共通し、何らかの関連があったことも否定は出来ない。

十王像の系譜

臼杵石仏のホキ石仏第一群第四窟（臼杵市048）には、地藏像と十王像が比較的浅めに彫られている。これらは、臼杵石仏の中では新しい造像になるもので、鎌倉時代前期と考えられている。この十王像は、後に展開する忿怒形の十王像ではなく、相貌は優雅で気品を漂わせており、仏像的である。この臼杵の十王像を下敷きにした丸彫りの十王像は県内では例が無い。

紀年銘は無いが、1360年頃に作られたものに羅漢寺の十王像がある。この十王像は五百羅漢像と同じ時期に作られたと考えられ、五百羅漢が納まる「無漏窟」からやや下った「千体地藏」堂の中に納められている。懸け造りの室内には室町期以降と考えられる同形の細身の地藏立像（いわゆる千体地藏）で埋め尽くされているが、中央奥にはひときわ大きな地藏坐像と、手前側にはやはり大きな十王像が並べられている。これらが本来1360年前後に作られたものであろう（ただし、後述のように、中央に置かれた石造地藏菩薩像は、型的に若干時期が下がる可能性があるのも、そうなれば十王像もやや時期が下がる可能性が出てくる。）。この十王像の系譜は、以後の展開が追えない。もともと、羅漢寺の石造物群はこの十王像だけでなく、五百羅漢像を初めとした様々な石仏群も突出した存在であり、その後の展開は羅漢寺内やせいで現在のの中津市域で細々と追える程度である。

では、その後につながる十王像はいつ頃から造られるようになったのであろうか。最も古い紀年銘を持つものに国東市文殊仙寺本堂横の窟（十王堂）に永和4年（1378）と永和5年（1379）の2体を含む10体の十王像（国東市083）がある。永和4年銘を含む5体は挿し首になっており木彫仏との関係が窺えるが、永和5年銘を含む5体は一石造りであり、後の石造十王像のスタンダードとなる。この永和4年から5年の時期に豊後における石像十王像が確立した、と言えるだろう。挿し首のものは表情が硬く、一石のものは表情が豊かなもの、確立過程を示すものであろう。

この文殊仙寺の十王像の系譜に連なるもの（以下、「文殊仙寺型」と呼ぶ）に、杵築市の轟地藏横にある十王像（杵築市118）と日出町の願成就寺の十王像（日出町035）がある。これらは比較的大型で、厚みのある衣紋表現、道服の表現、顔の表情などに共通点がある。顔の表情（硬い表情が徐々に豊かな表情になる）や動きの大小（動きの無いものから、動きの大きなものへ）から、文殊仙寺→轟地藏→願成就寺という型式変化を辿る。これらが同一工人の作であれば、願成就寺例も14世紀末～15世紀初頭には納まるものと考えられる。

また、やや小型になり、相対的に頭部が大きくなる系譜がある。代表的なものが国東市にある重藤十王堂（国東市322）の十王像である。中央に置かれた地藏像背面には明徳4年（1393）の銘があり、十王像もこの時期に作られたと考えられる。道服の表現は軟らかく優美であるが、形式的には文殊仙寺型と類似する。これに連なる系譜（以下、「重藤型」と呼ぶ）に、国東市常念寺十王堂（国東市096）のものや国東市永明寺十王堂（国東市109）、野田十王堂（国東市060）のものなどがある。常念寺の十王像は、文殊仙寺例とも近く、あるいは重藤例に先行するかもしれない。野田十王堂のものは表現の形式化が進み、永明寺例はさらに形式化しており、かなり時期が下る。よって重藤型は、常念寺→重藤→野田十王堂→永明寺と変遷することが想定出来る。ただし、常念寺例も文殊仙寺例より遅ることは考えられないので、常念寺例は14世紀末

に置くことが出来るだろう。

また、国東市には、曲泉のような椅子に腰掛けた特徴的な姿の十王像がある。旧安岐町の密乗院十王堂（国東市349）と法雲堂（国東市400）、旧国東町の帝釈寺（国東市199）と旧武蔵町の北向薬師岩窟内（国東市237）の4箇所である。いずれも小型で、数が揃わない帝釈寺を除いて、背面（背骨状になった椅子の表面）に檀拵輪（人頭杖）が彫出されているのが特徴である。この檀拵輪は、十王にその例を見ることが出来る。富貴寺参道下にある石幢（豊後高田市765）は、四面に十王を刻み、間に檀拵輪と浄玻璃の鏡も描いている。密乗院の十王像には浄玻璃の鏡も描かれ、顔もやや丸みを帯びた長顔であるなど、法雲堂のものとともに富貴寺石殿例と類似している。椅子に座らせて表現したのは、檀拵輪や浄玻璃の鏡といった、文殊仙寺型や重藤型では見られなかった小道具（持物）を描くためだったのかもしれない。実際に、大分県内の事例では、独立した形の石製檀拵輪は、江戸期の事例しかない（姫島村海岸寺）。そうすれば、紀年銘は無いが、富貴寺例のような石殿が盛行するのは室町期になってから（特に15世紀後半以降）と考えられることから、密乗院の十王堂には十王に伴う地藏坐像がある。この地藏像は表現が硬く、衣紋表現もしなやかさにはやや欠ける。さらに、組んだ脚部分が表現されないなど、14世紀後半代の地藏像に比して、明らかに後出である。北向薬師の事例では、同時期と思われる釈迦如来坐像があるが、南北朝期までは通らないだろう。

これら、椅子に座った十王像（以下、「密乗院型」と呼ぶ）の中では、法雲堂や密乗院のものが古く、北向薬師例、帝釈寺例と続くと考えられる。15世紀後半から16世紀、あるいは一部江戸期にかけて作られたと考えておきたい。

以上のように、主に旧東国東郡（現国東市）から旧連見郡（現杵築市と日出町）にかけて計22箇所で十王像が見られたが、主な系譜に3系統あることがわかった。それ以外にも、杵築市山香町の鍛冶屋十王堂（杵築市082）のやや大型のものや豊後高田市真玉町施恩寺（豊後高田市101）の直方体から削り出したようなものがあり、まだいくつかの系譜があるかもしれない。しかし、それ以上に重要なことは、この種の丸彫り十王像が東国東郡から連見郡にかけてしか見られない、ということである。地藏・十王信仰そのものは、「地藏十王経」が流布し、白杵石仏例などの磨崖仏にみるように、鎌倉時代前期には日本国内で広範に浸透していたことがわかる。しかしながら、大分県内では先記した地域以外では丸彫りの十王像は作られず、石幢龕部に刻まれた。あるいは、木彫で作られたかもしれない。つまり、丸彫り十王像の有無は信仰の強弱ではなく、あくまで表現方法の違い、ということなのであろう。

法衣垂下式石仏の系譜

国東半島を中心として広がる丸彫り石仏の多くは、法衣が蓮華座に掛かるいわゆる「法衣垂下像」である。法衣垂下式の仏像（木彫）は鎌倉地方を中心として分布するが、南部にもある。また、豊後でも散見されるので、必ずしも地域性や系譜を示すわけではないが、豊後の丸彫り石仏に占める「法衣垂下式」の割合は、該期の豊後における木彫仏のそれと比べて明らかに多い。このことは、やはりモデルとなった石仏あるいは木彫仏の系譜を考える際にポイントとなるだろう。

1360年前後から作られたとされる中津市本耶馬溪羅漢寺の五百羅漢を初めとする石仏群（中津市217）の内、羅漢像以外の諸像で台座を持つものについて見ると、蓮華座は請け花座のみで半球形状を呈し、花卉は無文の魚鱗葺きとなっている。無漏窟の中心に置かれた釈迦如来像の台座は法衣は垂下せず、花卉はあまり影らみを持たず、薄い。一方、古羅漢の観音像（中津市207）などの蓮華座には法衣が垂下し、花卉が丸みを持ち、厚く表現をされている。後者については、古羅漢の観音像は膝内から正平17年（1362）の年号が記された文書と木製五輪塔、歯が見つかっており、蓮華座の差はあるものの、両者はほぼ同時期に作られたとすることができよう。蓮華座の表現の差は、あるいは、製作工人の差かもしれない。

一方、古羅漢の地藏像や、羅漢寺周辺の小堂にある地藏像の蓮華座は、花卉の一枚一枚が大きく、法衣も大胆に蓮華座に掛かっているなど、後出と思われる要素がある。これらは、羅漢寺境内にある延徳3年



羅漢寺旦過寺跡地藏 延徳3年(1491)銘



杵築市 満井 十王石仏(杵築市118)



杵築市 轟地藏(杵築市118)



豊後高田市 堀岩屋石仏(豊後高田市271)



豊後高田市岩脇泉源寺石仏



豊後高田市施恩寺石造頂相(豊後高田市101)

大分県の主な石仏

(1491)の紀年銘がある地藏像(中津市217)よりは、前記した正平17年の観音像に近く、14世紀末から15世紀前半代に位置づけおきたい。このタイプの石仏は旧本耶馬溪町内だけではなく、旧三光村から中津市内にかけて点々と見られ、いずれも法衣垂下像である。

また、大分市の伽藍石仏横の地藏堂に置かれている南北朝期と考えられる石造地藏像(大分市071)は、府内周辺から県南地域では唯一の丸彫り石仏であるが、やはり法衣が垂下している。細線の表現された蓮華座に半跏を組み、踏み下ろした左足も小さな蓮華座に載せている。蓮華座に細線を表現するものは、石塔では御嶽権現宝塔(1322、別府市014)や日出町願成就寺国東塔(1311、日出町035)、豊後高田市塔1御堂国東塔(豊後高田市265)、杵築市山香町の棚田磨崖仏(14世紀後半?、杵築市026)など、鎌倉時代末から南北朝期にかけて見られる。この伽藍石仏例は、丸彫り石仏が盛行する県北・国東地域とはやや離れており単独で存在するが、法衣垂下像となるなど、やはり何らかの影響下にあると考えられる。地藏堂の横にある伽藍磨崖仏は鎌倉時代後期の造立で、先記したように、丸彫り石仏が豊後において出現する福徳期に重要な位置を占める石仏であり、その場所にやや時期が開くとは言うものの、丸彫りの地藏像が造られているのである。伽藍の地藏像は、国東や羅漢寺で石仏が造られ始める1360年代より古く位置づけることが出来るかもしれない。そうすれば、豊後地域では最も古い丸彫り石仏ということになる。伽藍地藏像が南北朝期のものであれば、国東半島を除く豊後地域においてはほとんど唯一の存在になり、その意味するところが重要になる。

さらに、15、16世紀と考えられるものにも法衣垂下像があるなど、一貫して豊後から豊前南部(大分県)の丸彫り石仏の主流となっており、石工集団の強い伝統をうかがうことができる。

その他の石仏

国東半島には地藏像や十王像以外にも優秀な石仏が点在する。それらについて、ここで触れておきたい。

国東市武蔵町吉弘の西光寺薬師如来像(国東市243)は、円形の框の上に数筋子を挟んで反花座、請花座があり、その上に薬壺を両手で持つ薬師如来が結跏趺坐する。法衣が反花座の下まで垂れる。請花は素舟の魚鱗葺きで、反花の花弁は緑が太る。光背は、やや丸みを帯びた舟形で、反りはほとんど無い。頭の後ろには円光が描かれ、内部には蓮弁が描かれている。また、光背面には左右にそれぞれ一つずつ蓮華に乗った宝珠を描く。衣紋表現はやや形式化し、造立は南北朝期であろう。

国東市武蔵町古市にある教善寺の前の御堂(国東市387)には釈迦如来三尊像がある。中尊は、脚を持つ蓮子を刻む八角形(背面は表現されていないので、正面から見える3面のみを成形)の框の上に相似形の返花座(やはり正面から見える3面のみ刻む。)を載せ、その上に敷き筋子を挟んで半球形の魚鱗葺きの請花座が載る。釈迦如来の法衣は左右で請花座まで垂れている。光背は二重円光を刻む舟形で、円光の外側には7体の化仏が円窓の中に浮き彫りされている。光背の背面は大きく扶かれており、台座の背面の省略と合わせて、強い正面観を表すとともに重量の軽減を目的としたものであろう。両側の脇侍は、宝剣を持つ普賢菩薩と蓮華を持つ文殊菩薩がそれぞれ獅子と象と思われる禽獣座に座っている。このような3尊像形式の石仏は、県内では類例を見ない。南北朝期の作と思われる。中尊の請花座の表現は後述の興尊寺(国東市297)や岩脇泉源寺(豊後高田市375)例に類似する。

豊後高田市岩脇泉源寺にある観音堂(豊後高田市375)には石造観音菩薩像がある。台座は波間に開く小さな返り花(ここまでが一石)の上に半球形の魚鱗葺きの請け花(一石)が載る。その上に観音菩薩像が座っているが、腕先が欠損しており印相は不明である。全体的に傷みが激しく、補修もやや雑に行われているのが残念であるが、南北朝期の木彫仏を比較的丁寧に写した石仏ではなからうか。同様の請け花を持つものに国東市興尊寺(国東市297)の菩薩坐像がある。台座と一石ではあるが、ほぼ同様の魚鱗葺きである。頭部の飾りは失われているが、もともと金属など別材で作られていたのであろう。右手に剣印を結んでいる。






豊後高田市の堀岩屋(豊後高田市271)には普賢菩薩を中尊とする三尊像がある。中央には象に乗った普

賢菩薩、両脇に菩薩像がある。いずれの請花座も蓮弁は単弁で平坦となり立体感に乏しい。時間的には室町期のものであろう。象に乗った石造普賢菩薩像は、県内では他に羅漢寺（中津市217）と金比羅宮（中津市）にある。



また、国東半島から離れる大分市には、丈六の曲石仏（大分市080）がある。曲石仏は、岩屋内に納まる像高約3mの凝灰岩製釈迦如来像で、頭部、胴部、腰部、膝部の4つの部分に分けて造られている。製作時期は鎌倉時代初期と考えられており、他の南北朝期に始まる大分の石仏とは一線を画し、むしろ該期の木彫仏との関連を考えるべきであろうか。

まとめ

今回の調査で、丸彫りの石仏は国東半島から豊前地域にかけて、14世紀後半代から盛行したことが明らかになった。逆に、豊後でも中心であった府内から南部にかけてはほとんど丸彫りの石仏は作られていないこともわかった。しかし、この地域では、国東半島や豊前地域に先駆けて、鎌倉時代後期には層塔や宝塔に仏像が刻まれている。これらがどのようにして丸彫り石仏につながっていくのか、あるいはつながらぬのか、それらも今後の検討課題であろう。

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀			
14世紀	中津市 217 羅漢寺石仏 (無漏窟内普賢菩薩)	 国東市 083 文殊仙寺十王像 (1378) (1368)	 杵築市 130 竹ノ尾地藏 (1389)
15世紀		 国東市 081 岩戸寺仁王 (1478)	
16世紀	 中津市 018 妙光寺阿彌陀如来像		
17世紀			

第163図 石仏変遷図① (縮尺任意)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	日田・玖珠
 <p>大分市 071 髹藍石仏 (石造地蔵)</p>		 <p>豊後大野市 204 大涅槃石造地蔵 (1430)</p>	

第164図 石仏変遷図② (縮尺任意)

(5) 宝篋印塔

容器としての宝篋印塔

石塔の場合、経や舍利を納めるためには「塔身」を削って空間を作り出す必要がある。宝篋印塔では、県内で最古と考えられる「日吉塔」の場合、塔身を外形と相似に削り抜いて、一面を開放し、扉をはめ込むという造作を施している。しかし、このやり方はその後には続かない。通常は、塔身上部に方形の切り込みを入れ、そこから塔身内部に落とし込むように塔身上部を浅く削り込んでいるのである（写真1参照）。

一方、塔身ではなく、基礎の下部に方形の穴をあけ、基壇の中に落とし込むようにするタイプがある。こちらは連見郡域に特徴的に見出すことができる。これは、塔身と笠の接合に円柱状の比較的高い納を用いるために、塔身上部を削ることができないことによる。このタイプ（以下「連見タイプ」と呼ぶ）は、さらに笠の四隅にある隅飾り突起と同様の突起を相輪下部に持つことも共通している。

宝篋印塔の地域性

次に、地域を豊前南部から豊後（現大分県）に絞った上で、その中の地域性について考えたい。最も、「地域性」の発露が石塔製作者個人の力量、美術的センス、仏教への理解度などや、同じく製作者集団のそれに係わるものである場合と、製作者集団を越えた地域で、流行から生じたものが混在している。これらに係わると思われる主要要素を順不同で抜き出すと、以下のようなろう。①格状間の有無、②基壇下の蓮華座の有無、③基礎の段数、厚さ、④塔身と笠の重ね方、⑤段型の数、⑥相輪下部の隅飾り突起の有無、⑦裝飾性、の7つをあげることができる。この中で、特に地域性に係わる要素は①、③、④、⑥、⑦である。その点に注目して地域的な特徴について見てみよう。

(連見郡の宝篋印塔)

ここでいう連見郡は、現在の杵築市、日出町、別府市域を指しており、本来の連見郡エリアである由布市は含まない。先述したように、このエリアには「連見タイプ」と呼ぶ宝篋印塔が濃密に分布する。最大の特徴は相輪下部に隅飾り突起を有することである。同様の事例は豊後大野市や竹田市、玖珠郡などにも分布するが、その占める割合はごく僅かに過ぎない。

この相輪下部に隅飾り突起を持つもので最も古いものは、現状では連見郡ではなく豊後大野市緒方町の「大化宝篋印塔」（豊後大野市215）で、文和4年（1353）の銘を持つ。しかし、「相輪下部の隅飾り突起」という点に注目すると、貞和4年（1348）の銘を持つ杵築市山香町の西明寺三重塔（杵築市046）が最も古い。この隅飾り突起は、隅り合う突起の下部がつながっており、類例を探せばかつて国東市長野にあったとされる康安2年（1362）のもの（ただし、地域的には連見郡を外れている。）に近く、この時期あたりが連見タイプの宝篋印塔の出現時期とすることができるであろう。現存するものでは、応安6年（1373）銘の三社八幡宮例（杵築市196）が最も古い。第2章第1節概要で述べたようにやや特異な形状をしており、現在は銘を確認出来ないことと合わせ、今後の検討が必要な資料である。それを除くと、次に古いのが下川久保例（日出町036）の康徳2年（1390）である。この塔は、笠の隅飾り突起に彫り窪めた円窓（無文）を持ち、塔身にも円窓の中に梵字を入れるなど、後の連見タイプの典型例につながる要素を持っている。この時期には様式がほぼ定着し、連綿と江戸時代前期まで作り続けられるのである。

また、この連見タイプの特徴として、それぞれの部材を納めて繋いでいることがあげられる。笠の下部には長い突起が付き、塔身の納穴に差し込むのである。そのため、塔身には経や遺骨を入れる空間を確保することが物理的に不可能であり、下川久保例のように塔身下部に納入孔を穿ち、基礎部分に落とし込む構造となる。

(国東半島の宝篋印塔)

国東半島には大型の宝篋印塔が多い。そのため、基礎の各面に格状間が二つ造られるものが多い。また、隣接地の連見地域の宝篋印塔が納め重なるのに対し、この地域の宝篋印塔の笠と塔身の重ね方は、笠の段型裏面に塔身より僅かに一辺の大きな窪みを彫り、塔身に重ねる方法である。この方法だと塔身内部に空間を

作ることができ、納入孔も塔身上部となる。この重ね方は国東地域に特徴的という訳ではなく、大野郡などでも一般的に見られるものである。

なお、この地域に入る奈多氏に係わる宝篋印塔に、特異な装飾を持ったものが2点のみ知られている。一つは、奈多鑑基の、そしてもう一つはその子である奈多鎮基の「墓」である。後者は奈多氏の菩提寺である報恩寺（杵築市182）にあり、前者はそこから300mほど離れた「雪江院跡」（杵築市178）に立っている。いずれも三段の基礎の上部に二段の段形を持ち、笠下部の段形の代わりに蓮弁文や幾何学的な文様を刻む下向きの楕形座を彫出する。さらに、両者とも基礎の二段目と三段目には四面に隅切り突起を図案化した装飾を刻んでいる。これらの造立は年忌供養の為であり、造立年は紀年銘より当然ながら下る。おそらく造立は江戸期に入ってからであろう。

（「玄正」作の宝篋印塔）

旧大野郡所在の石造物で「大工玄正」や「大工玄型」の銘を持つものが4例確認されており、熊野社石鳥居（豊後大野市082）以外はすべて宝篋印塔である。「玄正」銘の石造物の内、最も古いものが熊野社石鳥居（1357年）で、その6年後に初めて宝篋印塔に名を刻んでいる。原田昭一氏は、これらの玄正作の宝篋印塔と、その影響下に作られた宝篋印塔を「玄正作」、「玄正型」、「玄正系」の三種類に分類している。玄正の手になるものは「玄正作」と「玄正型」で、「玄正系」は、時間的に「玄正作」や「玄正型」に後出し、玄正没後にその影響下に出現したものである。











玄正作と玄正型の宝篋印塔は、①相輪先端部は火災宝珠で、花卉の下に連珠文を巡らせる、②笠の段形は上下2段で、上部一段目に蓮華文、その上段には連子文を持ち、いずれも傾斜を持って立ち上がる、③基礎の下部に直線的に垂下する返花を持つ、といった特徴を有する。さらに、石材が軟らかい凝灰岩であることもあって、格状間の形りはシャープな「片切形り」である。

この玄正の特徴を一言で言い表せば、「華美」と「鈍角」ということになる。「華美」は装飾性が豊かなことで、同時期の国東半島や速見郡、玖珠、日田方面の宝篋印塔がほぼ装飾が無いことと比べ、あきらかに特異な存在である。そして、この影響は大野郡の他の塔形、特に宝塔には現れるが、大野郡を越えては一部大分県への影響が見られるのみで、他地域への影響はほとんど確認されていない。また、「鈍角」とは、笠の上部2段の段形が、垂直ではなく内傾しながら立ち上がることを指す。このことは、段形が大ぶりで装飾が施されていることと相まって、強い印象を与える。これらの諸特徴は、形を崩しながらも「玄正系」と言われる系譜上で戦国期まで命脈を保っている。

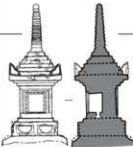

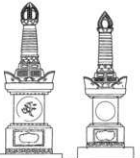
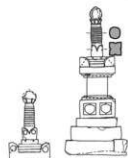



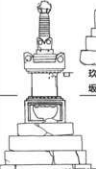



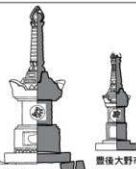
まとめ

玄正という突出した石工を生んだ大野郡の宝篋印塔は、大分県内では他に例を見ない様式美を備えた宝篋印塔である。一方、国東半島に展開する宝篋印塔は大型で、他を威圧するように建てられているものがある。また、速見郡には相輪下部に隅切り突起を4箇所に持つ特徴的なものが江戸時代前期まで300年近くにわたって作られ続ける。このように、宝篋印塔には五輪塔や板碑などと違って石工の技量や美意識などが反映できる余地を持った石塔であるとも言える。それが存分に発揮されたのが玄正と玄正に連なる石工の手になる宝篋印塔であった。

だからこそ、石工集団、あるいは石工の活動範囲や伝統といったものを追うのには適した石塔であるとも言える。残念ながら石工の名前が入った資料は多くないが、今後は実測調査などを通してそれらに迫る調査ができればと思う。

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀			
14世紀		 豊後高田市 397 釈迦堂跡 (1379)	 豊後高田市 397 釈迦堂跡 (1379)
15世紀	 宇佐市 107 横善寺 (1423)	 宇佐市 191 金丸 (1493)	 杵築市 050 下中尾 (1383)
16世紀	 中津市 213 羅漢寺不動坂	 豊後高田市 326 民安寺本堂脇 (1584)	 別府市 101 後畑 (1516)
17世紀		 豊後高田市 145 道園 (1605)	 杵築市 182 報恩寺

第165図 宝篋印塔変遷図(1)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	日田・玖珠
	 <p>臼杵市 053 日吉塔 1/120</p>		
 <p>大分市 106 常妙寺 (1382)</p>		 <p>豊後大野市 290 法泉庵 (1370) 竹田市 061 小高野</p>	 <p>玖珠町 032 坂口 (1374)</p>
 <p>由布市 027 摺原 (1409)</p>	 <p>臼杵市 140 ウサイゼン坊跡 (1508)</p>	 <p>豊後大野市 233 西白寺 (1420)</p>	 <p>日田市 048 元大波羅神社</p>  <p>日田市 018 山下不動様 (1476)</p>
 <p>大分市 191 石合公民館下 (1570)</p>	 <p>臼杵市 072 平野</p>	 <p>豊後大野市 141 正福寺 (1546) 豊後大野市 296 明照院 (1567)</p>	

第166図 宝篋印塔変遷図 (2)

(6) 無縫塔

中世の石造物が供養塔をはじめとして多様な目的をもつことに対し、無縫塔は中国において純然たる墓塔として機能していたものを、鎌倉時代に宋の仏教文化受用の波の中で受け入れられたものである。鎌倉～室町初期の無縫塔は、きわめて寺格の高い禅宗寺院の開山が多く、また、歴世の墓塔としても用いられ、中には名僧として誉れの高い禅僧の墓塔である場合も少なくない特殊な石造物であるといえよう。そのため、開山堂とされる木造建築に安置されていることも多く、現在、屋外に晒されている無縫塔でも、本来は堂舎内に納められていた可能性が高いことも容易に推測がつく。

無縫塔には少数を除き大きく二種の形態が存在する。川勝政太郎の分類に従えば以下のとおりである³¹⁾。

第一類 台座の平面が六角または八面で、基礎・竿・中台の順に積み、上に平面円形の請花即ち蓮座を設け、その上に塔身を安置するもの。

第二類 六角または八面の基礎のみの台座上に塔身を安置するもので、基礎上は反花になるのを普通とする。

研究史を紐解くと、日野一郎は川勝第一類を「重制無縫塔」、川勝第二類を「単制無縫塔」と分類している³²⁾。川勝第一類は鎌倉中期の京都市泉涌寺開山塔を皮切りに少数ながら鎌倉～南北朝に隆盛する形態である。一方、川勝第二類も南北朝に至り、京都市大徳寺開山塔をはじめとして造塔され、二種並存の様相を呈していることがわかる。本稿では日野の「重制無縫塔」・「単制無縫塔」の呼称に従い紹介する。

重制無縫塔に限れば、わが国でも西と東では大いに異なる。東国では無縫塔伝播の拠点となった鎌倉の建長寺開山塔をはじめとして覚園寺無縫塔群などのように、六角の竿石には輪郭で囲み、中台上端より大きく外にはみ出す蓮弁反花上にさらに大きな塔身を据える特徴をもつ³³⁾。

これに対し、近畿地方を中心とした地域では、泉涌寺開山塔の系譜上にある無縫塔がみられる。八角基礎石下に持送り形の脚を刻出し、同じく八角竿石の各面に開花蓮を陽刻している。中台上にはやや小さい蓮華座を載せ、さらに塔身も蓮華座とのバランスよく曲線を描く即塔である。この形態は泉涌寺開山堂横に建てられた無縫塔群だけでなく、名古屋市長慶寺開山塔、遊覧泉甲良町勝楽寺開山塔、岡山県総社市皇の窟無縫塔など鎌倉～南北朝の無縫塔に受け継がれていく³⁴⁾。九州・山口においても例外ではなく、福岡県太宰府市崇福寺開山塔の形態は泉涌寺開山塔の系譜上にある。

このような鎌倉～南北朝の無縫塔の諸例は、いずれも寺格の高い開山及びそれに続く歴世の高僧の墓塔であるという特徴は共通し、大分県内における同時期の無縫塔をみても、全国的な傾向であるが鎌倉期から室町期初頭に属する無縫塔の類例は少なく、県下では比較的多く確認できるとはいえ、数える程しかない。

杵築市大田宝院寺には僧庵智徹の墓塔と伝えられる無縫塔(杵築市318)がある。僧庵智徹は東福寺第十世直翁智胤の弟子である。直翁が豊後万寿寺に下向した際に随行し、観応3年(1351)、宝院寺を開き、正中22年(1367)、示寂したと伝えられる禅僧である。この無縫塔は凝灰岩製であり、中台に関しては、八角台座の各面に向かう方向に複弁蓮華文の八葉反花を刻出し、それぞれの蓮弁間には開弁を覗かせる。一方、中台下部は薄い八角段形を挟み、下面は錐形を呈している。また、国東市安岐町實際寺の開山堂に1基の無縫塔(国東市370)が安置されている。二段の基礎のうち、丈の高い上部基壇正面に「實際開山 貞和五年 丑六月三日」の陰刻名が見られ、貞和5年(1349)に示寂した實際寺の開山自開正聡の無縫塔であることがわかるが、自開正聡は直翁智胤の法弟であり、延慶2年(1309)、實際寺を創建した人物である。基礎・中台・竿とも八角形であり、塔身を丈の高い請花上に乗せ、中台の上面に反花、下面に請花を配している。基礎・中台の大きさに比較して竿石が太く丈も高いため、下半が鈍重な印象を受けるが、全体的に丁寧な彫りであり、蓮弁の表現も精緻である。制作年代も示寂年より、さほど下らない時期の製作であると考えられる。国東市安岐町報恩寺境内及びその背後の石造物集積地に4基分の無縫塔部材(国東市160)がみられる。その組合せは本来のものと断定できないが、直翁智胤の法弟である開山密室正機と伝えられている1号無縫塔に関しては、各部材が型式的に最も古いものであり、本来の組合せと認識してよいものと思

える。この無縫塔は安山岩製であり、中台に関しては、八角中台の各面に向かう方向に先細りの複弁蓮華文の八葉反花を刻出し、それぞれの蓮弁間には八角各隅に向かい幅広い開弁を覗かせる。一方、中台下部は繰形を呈し、上部には基礎上面の蓮弁の形態に近似した蓮弁を配している。また、八角竿石の隅面に開花蓮を肉厚に陽刻している。国東市泉福寺開山堂には無着妙庵像と無著の墓塔と伝えられる無縫塔（国東市191）が安置されている。開山堂は応永元年（1394）に、無著の一周期にあたり墓の覆屋と礼堂を兼ねて建立されたものであるが、無縫塔と開山堂の本来の形を現代に伝える貴重な類例である。丈の高い基壇の上に無縫塔を載せており、開山堂床面と同じ高さに位置する工夫をしている。基礎・中台・竿とも八角形であり、塔身を丈の高い請花に乗せ、中台の上面に反花を配し、下面は繰形を呈する。塔身・中台・竿石の大きさに比較して基礎を大きく製作しているため、安定感のある形態をもつ。全体的に丁寧な彫りであり、蓮弁の表現も精緻である。

大分県下における南北朝～室町初期の無縫塔は、このように、遺構として無縫塔と開山堂との関係を良好に残す泉福寺例や、その影響下にある可能性の高い国東市安岐町報恩寺無縫塔など、曹洞宗下の無縫塔が少数存在する。一方、臨済宗においては杵築市大田宝院寺の開山悟庵智徹、国東市安岐町實際寺の開山自開正聰、杵築市報恩寺の開山密室正機の墓塔がある。彼らはいずれも豊後万寿寺開山直叡智胤門下であり、前述した十門に名を連ねる傑僧たちである。当時の無縫塔は、傑僧の墓塔であるとともに、教縁の拡大に繋がる寺格の高い寺院に存在する傾向がうかがい知れよう。

南北朝～室町初期に比較すれば、室町～戦国期に至り、無縫塔の造立は格段に増加することがうかがえる。杵築市最勝寺無縫塔（杵築市223・室町期）・豊後大野市中小坂無縫塔（豊後大野市308・室町期）・日出町覚雲寺無縫塔（日出町032・室町期）・由布市大友氏時無縫塔（由布市026・1368年没）などは、南北朝期の型式を継承しながらも、やや退化形態をもつ。なかでも、無縫塔としては数少ない県指定有形文化財の由布市北原無縫塔（由布市120・1429年銘）は室町期を代表する無縫塔といえよう。

戦国期に至り、無縫塔の型式は多様化する。南北朝～室町初期の形態的な系譜を受け継ぐものの、塔身が長く伸びる傾向やさまざまな部位が加飾化される傾向、もともと多様化される蓮華模様の退化傾向などが、すべての資料に確認できる。大友親繁無縫塔（臼杵市037・1493年没）・大分市妙観寺墓地無縫塔（大分市098・1497年銘）・大分市田の浦無縫塔（大分市001・1525年銘）・大友政親無縫塔（臼杵市038・1538年銘）・別府市松音寺無縫塔群（別府市097・1557年銘・1575年銘）・臼杵市光寺跡無縫塔（臼杵市113・1564年銘）・2基並立の津久見市鍛冶屋無縫塔群（津久見市033・1575年銘・1578年銘）など数多くの紀年銘をもつ無縫塔が確認できる。このほかにも、紀年銘をもたないものとして、大分市木佐上無縫塔（大分市165・戦国期）・臼杵市大友鑑義墓無縫塔（臼杵市077・戦国期）・杵築市井門家墓地無縫塔（杵築市181・戦国期）などが確認できる。

これらの中には没年月日が明らかかな人物の墓塔であっても、型的に没年月日に近い造立時期とは思えないものも多く、あくまでも型式的な特徴から時期を導き出す必要があるだろう。

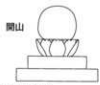
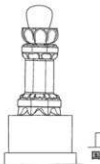



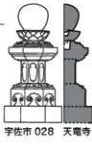



一方、中世に遡る単制無縫塔は、重制無縫塔と比較してはるかに少なく、その出現時期も遅い。これは全国的な傾向と一致し、豊後高田市道脇寺墓所無縫塔（豊後高田市346・1577年銘）・佐伯市市岡吉祥寺跡無縫塔（佐伯市095・1571年銘）・佐伯市福厳寺墓地無縫塔（佐伯市052・1592年銘）など紀年銘を持つものも存在するが、いずれも戦国期のものである。この単制無縫塔は中世では主流とはいえないが、近世に至り数多くの寺院墓地において歴代住職墓碑として採り入れられている。

註1) 川勝政太郎 1981『新版石造美術』誠文堂新光社



註2) 日野一郎 1953『墳墓標識としての石造塔婆』『史迹と美術』236～238号、史迹美術同好会

註3) 藤原節治 1937『無縫塔』『仏教考古学講座』第11巻、雄山閣

註4) 川勝政太郎 1978『日本石造美術辞典』東京堂出版

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀			
14世紀	 <p>関山 中津市 218 羅漢寺躰足山歴代住職墓地</p>	 <p>国東市 160 報恩寺</p> <p>国東市 370 実應寺関山塔 (※)</p>	 <p>杵築市 182 報恩寺※</p> <p>杵築市 318 宝陀寺関山塔※</p>
15世紀	 <p>4世 中津市 218 羅漢寺躰足山歴代住職墓地</p>		 <p>臼出町 032 寛雲寺</p>
16世紀	 <p>宇佐市 028 天龍寺</p>  <p>宇佐市 162 円通寺 (1581)</p>		 <p>杵築市 181 井門家墓地 (1561)</p>  <p>別府市 097 松首寺 (1575)</p>
17世紀			

第167図 無縫塔変遷図① (S=1/40 ※はS=1/60、写真は縮尺不同)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	日田・玖珠
 <p>由布市 026 大応寺 (1368)</p>			
 <p>由布市 120 北原 (1429)</p>			
 <p>大分市 001 田ノ浦 (1525)</p>	 <p>大分市 098 妙観寺 (1497)</p>	 <p>臼杵市 077 大友義隆墓 (1550)</p>	
 <p>大分市 165 木佐上</p>	 <p>津久見市 033 巖治屋 (左 1575、右 1578)</p>	 <p>豊後大野市 308 中小坂</p>	

第168図 無縫塔変遷図② (S=1/40、写真は縮尺不同)

(7) 板碑・角柱塔婆

板碑は、整形された整形板碑と自然石を利用した自然石板碑に分けられる。大分県の整形板碑は、国東半島周辺や豊後南部の大野川流域をはじめとして県下各地に数多く確認できる塔形の一つである。なかでも紀年銘資料の分布をみると、日田・玖珠地域に若干の類例がみられるものの、そのほとんどは国東半島周辺や豊後南部の大野川流域に集中する。もちろん、これは紀年銘資料に限定したものであり、この地域以外に整形板碑が存在しないわけではないが、その密度は、紀年銘資料の分布密度に比例して存在する。

大分県における紀年銘の残る板碑は、ほとんど安山岩と凝灰岩に限定できるが、大きく分けて国東半島に安山岩が、また、大分県南部と、大分県北部でも豊後高田市・杵築市山香町周辺に凝灰岩を石材とする地域が存在する。各石材による石造物が分布する地域には、地質学的にその岩層が存在しており、生産地は石材産出地にきわめて近く、また、供給地もさほど離れた地域でないことが考えられる。

まず、大分県には安山岩及び凝灰岩の両者がみられ、これに加えて日田市には永平寺跡1号板碑（日田市041）のように安山岩とされるもの、明らかに他地域とは異質の石材もみられる。特に集中する国東半島地域にはこの両者が存在し、安山岩を石材とする整形板碑は、国東半島一帯から宇佐・中津地域で確認できるが、凝灰岩製の整形板碑に関しては、康永4年(1345)銘をもつ山香町善門坊跡板碑（杵築市042）以後、杵築市山香町に集中し、一部、豊後高田市・杵築市大田・別府市でも確認できる。しかし、前述したように宇佐市で確認できることにより、豊後北部での凝灰岩産出地である豊後高田市・杵築市山香町地域に隣接する地域でも、その分布域にあることがわかる。

また、凝灰岩製板碑は日田市永平寺跡2号板碑（日田市041）や九重町宝八幡宮板碑（九重町005）にみられるように、日田玖珠地域でも石材として利用されているが、これらの地域の板碑は豊後高田市・杵築市山香町地域や大野川流域地域とも様相を異にする。その場合、第3の分布圏を探索すべきであろうが、豊後高田市・杵築市山香町地域や大野川流域地域にみられる凝灰岩製板碑の絶対量に比較すれば明らかに少ないため、この両者の地域より、その重要性は劣るものかにも思える。しかし、日田市永平寺跡2号板碑は正和2年(1313)銘をもち、これは豊後における凝灰岩を石材とする板碑の中では比較的古い紀年銘となるため、その重要性は無視できない。しかも、日田・玖珠地域における石造物石材は凝灰岩が最も多い。

一方、大分県中南部の紀年銘資料はすべて凝灰岩製であり、紀年銘資料以外でも凝灰岩製以外の製品を探すのが困難なほど石材が限定できる。前述したように、臼杵市御霊園クルスノ遺跡板碑（臼杵市069）が正和3年(1314)銘を持ち最も古く、以後、臼杵市野津町中山板碑（臼杵市095・1330年銘）・豊後大野市朝地町岳川板碑(豊後大野市010・1332年銘)・大分市中村板碑(大分市017・1333年銘)・臼杵市野津町寺小路板碑(臼杵市152・1333年銘)などのように、1330年代前半に集中して凝灰岩を石材とした紀年銘板碑が出現し、板碑が大分県中南部に広範に流行しはじめる。

その分布には空白地は認められないが、大野川流域の凝灰岩地帯に多く確認できる。この傾向は、五輪塔・宝塔・宝篋印塔・板碑・石幢・層塔などの石造物群をはじめ、特に、層崖仏の流行する地域と一致する。板碑のほとんどが、現在、過疎化の波に吞み込まれそうな山間部の小集落地に確認でき、中世、町屋を形成していた府内・臼杵などの都市部では他の中世石造物とあわせて皆無に近いほど確認できないため、都市部においては石造物がつかられなかったのではないかと推測されてきた。しかし、中世大友府内町跡の発掘調査が、近年、急速にすすみ、鎌倉期末～戦国期の板碑をはじめとした石造物は破壊され、単なる土木建築資材あるいは廃棄物として中世末に集中的に廃棄されている状況が確認されてきた（大分市067）。石造物廃棄の要因については、今後、綿密な検討が加えられるものであろうが、豊後の都市遺跡においては、本来、石造物が林立する風景こそ当時の一般的な姿であったことが再認識させられつつある。幸い、農山村部の板碑については現在に至るまで、原位置を離れることなく、きわめて良好な歴史的景観の中で守り続けられているものもみられる。板碑は、出現期から臼杵市野津町風瀬徳瀬板碑(臼杵市119・1392年銘)に至るまで南北朝期を通して、少ないながら連続と製作され続けている。大分市中村板碑（大分市017）・大分市小林寺板碑群（大分市045）のよ

うに複数基が相互に関連しながら、ほぼ同時に立てられているものもみられるが、その多くは板碑として単独で見られる。しかし、原位置を保つ資料の場合、それに先行する石造物に寄り添うようにみられたり、後世の石造物群が周囲に取り巻く遺跡も多い。また、板碑を含む石造物群が特定の仏菩薩を安置する寺院・小堂周辺に位置する場合や、そのような施設が残されていないものの、伝承から何らかの仏教施設が存在していたと想定できる空間にみられる類型が非常に多く確認できる。

南北朝に続く資料でも、紀年銘板碑に限れば佐佐市弥生町床木板碑(佐伯市023・1475年銘)が出現するまで、80年以上の板碑空白期が存在する。もちろんこれは紀年銘板碑に限定するものであり、紀年銘のみ見られない板碑の中に、この空白期に製作された資料が存在したとも限らない。しかし、存在しているとしても、極めて少数であるものと考えられる。また、個々の板碑の造立形態も異なり、近世墓地のはじまりともいえる群集造立の形態をとるものも見られ、豊後大野市三重町大辻山板碑群(豊後大野市142)・豊後大野市三重町回春庵板碑群(豊後大野市144)・豊後大野市三重町下津留板碑群(豊後大野市136)のように板碑群が墓地景観を形成し、また、これらの板碑群が半径2km以内に存在するように、ある特定の工人集団が存在し、また、その工人集団に付託した造立主体が積極的に石造物造園に取り組んだ様子が窺え、他地域との間には大きな地域格差が認められる。

一方、自然石を利用した板碑については、圧倒的に宇佐市周辺に分布が偏ることがわかる。これは、大分県宇佐地域を中心に精力的に資料化に取り組んだ入学正敏の業績(入学正敏1988・1994)のためのものであることは否めないが、それを差し引いても、宇佐市周辺には数多く存在する印象を受ける。これらは、そのほとんどが安山岩を利用しており、ここにおいても地元で産出する自然の石に手を加えず石材としていることがわかる。

当地における特徴として、最も数多く確認できる大分県宇佐市御許山が修験の地であることが注目される。御許山は宇佐神宮の奥の院が存在する聖地であり、奥の院が存在する山頂付近や山麓部に様々な仏教施設がみられる。これらの場所には自然石板碑が多く存在するが、戦国期以降に墓碑として造立されているものが多い(宇佐市288)。豊前において修験の地とされる場所は御許山だけではなく、福岡県でも英彦山や求菩提山などをはじめ、豊前前半を中心とした山後部に多く確認できる。これらの地域では、近世に入り、寛文期以降、一般的に墓碑が造立される時期になると、自然の角礫を利用して墓碑とすることが流行するが、その地域は豊前の範囲を超え、豊後北部の国東半島地域も含まれる。寛文期以前に遡る墓碑については他地域の墓碑と同様に格段に少ないが、修験の地において寛文期以降に自然の角礫を利用した墓碑の流行に先行して自然石板碑が存在することは興味深い事実である。これに比較して大分県中南部は自然石板碑がきわめて少ない特徴をもつ。その石材をみると、安山岩や凝灰岩など、地元で産出される石材が多いことは他地域と何ら変わりはないが、中でも特筆されるのは、大分県佐賀岡町地蔵寺墓地自然石板碑(大分市179)にみられる緑泥片岩を利用した自然石板碑の存在である。当地において最も多く産出する石材が緑泥片岩であるが、中世の石塔の石材として利用されることはほとんどなく、爆発的に墓碑が造立される近世においても、石材として利用されることは少ない。大分県に限らず、九州の緑泥片岩は硬質の石英を多く含み、自然石を石塔の石材として利用するにしても、刻字の作業に難があるものと考えられる。このことは肥前でも同様であり、長崎県にも緑泥片岩が産出されるが、緑泥片岩を石材として利用した自然石板碑がほとんど確認できないことに通じる。

また、大分県杵築市山香町に所在する自然石板碑がいずれも安山岩であることは興味深い。当地には良質な凝灰岩が産出し、中世石塔のほとんどがこの凝灰岩を石材として利用しているが、自然石板碑のみ安山岩の自然石を利用している。

自然石板碑の造立時期に関しては、ほとんどが戦国期以降のものであるが、唯一、紀年銘資料として康永2年(1343)銘をもつ大分県臼杵市野津町芝尾自然石板碑(臼杵市087)のように、南北朝に遡る類型もみられる。この資料は凝灰岩製であり、大分県中南部においては凝灰岩を石材とした板碑が、ほぼ整形板碑に限定して流行しているが、自然石の粗割りの加工面を多く残しながら正面のみ平滑に仕上げている点において、他の自然石板碑とは異なる。

紀年銘資料で板碑の造立期をみると、整形板碑は15世紀前半に極少期を迎える。正応4年（1291年）と、最も古い紀年銘をもつ国東市安岐町護聖寺1号板碑を嚆矢とし、鎌倉期中葉に出現する整形板碑は徐々にその数を増やし、鎌倉期末～南北朝初期頭をピークに減少しはじめ、14世紀末～15世紀中葉の激減期を経て、戦国期に再び流行しはじめることがわかる。整形板碑の造立傾向と近似し、自然石板碑も同様な傾向をもつことがわかる。この整形板碑の造立数は型式変化と連動し、13世紀の整形板碑出現以来、鎌倉期末～南北朝期を通じて、安山岩・凝灰岩を石材とする板碑すべてにおいて、定型化した型式をほとんど逸脱することなく製作され続けているが、その画期をはきみ、1470年代以降にほとんどの属性において多様な変化が生じることが確認できる。

それでは、この画期とはどのような様相をもつものであろうか。銘文からの願意をみると、鎌倉～南北朝期には死者の冥福を祈るため仏事を行う追善供養の板碑が多く確認できる。豊後地域における最古の紀年銘資料に位置付けられている護聖寺1号板碑（国東市170・1291年銘）においても、銘文中には、親の霊を祀る子の意味を持つ「孝子」とあり、これについても追善供養の願意をもつものと解釈できよう。

中には、1周忌（国東市川原2号板碑・国東市264、国東市鳴2号板碑・国東市132）・7回忌（国東市川原1号板碑）・7回忌（豊後高田市富貴寺板碑）・13回忌（宇佐市善光寺板碑・宇佐市035、国東市岡板碑・国東市143）等の忌日・年忌が確認できるものもみられ、忌日・年忌の重要性とともに石塔造立の契機とする意識が資料数に反映されているかのようにみえる。

これに対し、1470年代の画期以後はどのような様相を呈するのであろうか。当該期には以前からの形態を受け継ぎながら、ほとんどの属性において多様な変化が生じる特徴がみられる。それぞれの属性間の対応関係も複雑になり、形態的には混沌とした様相が確認できる。そこには前述した追善供養を明記する整形板碑の激減化とともに、特に墓碑的機能の爆発的流行という特徴が銘文から確認できる。墓碑的機能をもつ板碑を考えれば、近世に受け継がれる墓碑では民俗例から7回忌や13回忌などの年忌を契機として造立される場合が多く、その前身となる1470年代以降の板碑についても同様であることが推測できる。しかし、近世の墓碑と同様に1470年代以降の墓碑的機能をもつ板碑には、刻銘に忌日が記されているものは確認できない。前述したように、1390年代以前の板碑に追善供養を行った年忌の刻銘がみられることは興味深い。

中でも、新たな要素として墓碑に地蔵を刻む板碑の類例は、臼杵市名塚薬師堂板碑（臼杵市099）以来、いずれも15～16世紀の板碑に観察できる。また、児童の戒名も同じく「時宮童男松童女」とある名塚薬師堂板碑にはじまり、墓碑に対する地蔵信仰がこの時点ですでに導入されていることがわかる。このように板碑激少期に伴い、石塔に受容された地蔵信仰は流行の兆しを見せはじめ、墓碑化して以降、ある一定の定着をみせ、近世墓碑まで受け継がれていくが、板碑造立の画期に伴い成立し流行する新たな要素の一つに数えられる。

ところで、大分県における整形板碑にみられる結果塔婆は元亨元年（1324）銘をもつ大分県国東市岩尾板碑（国東市174）を嚆矢とし、応安6年（1373）銘をもつ「一結果」と刻まれた大分県由布市畑田板碑（由布市062）まで、交名を記さない銘文をもつものも確認できる。正慶元年（1332）銘をもつ大分県宇佐市佐田社1号板碑（宇佐市298）には「時衆八十人各敬白」、建武元年（1334）銘をもつ大分県豊後高田市其ノ田1号板碑（豊後高田市362）には「地蔵堂講衆」、康永4年（1345）銘をもつ大分県杵築市普門坊跡板碑には「別時講衆敬白」、応安6年（1373）銘をもつ大分県宇佐市庄部観音堂1号板碑（宇佐市203）には「一結果敬白」とそれぞれ刻まれており、この傾向は南北朝中葉に流行する宝篋印塔や、宝篋印塔の流行に押されて衰退していく宝塔においても同様のことが確認できる。

しかし、板碑空白期を挟んで以降の板碑について、銘文からみて結果塔婆は、大きく様変わりしてしまう。応安6年（1373）以降に姿を消す結果塔婆は、明応2年（1493）銘をもつ大分県豊後大野市五郎丸板碑（豊後大野市096）においてふたたび登場する。当該資料には32名の交名が確認でき、以後、「結果」・「一結果」・「講衆」・「時衆」のみの表現はほとんどみられない。

他の塔形の結果塔婆に目をやると、豊後南部に流行する石大工「玄正」の手による宝篋印塔には、正平18年

(1363) 銘をもつ豊後大野市福生寺宝篋印塔(豊後大野市192)以来、交名が記される結業塔婆が流行し、その始まりは板碑に先行する。これは結業の塔婆を石塔に求める場合、当時、もっとも流行の先端にあった宝篋印塔を選択したことに起因するものであろう。このような結業の塔婆としての宝篋印塔は、村のお堂としての小堂の前にひときわ大きく存在感を示すものとして造立されており、集村化に伴い村人が集う信仰の場である小堂前において、村人の紐帯を強める目的のもとに製作されたものと考えられる。このような結業の塔婆は室町期から戦国期に至り、宝篋印塔から石幢(六地藏塔)にその主役を譲り、小庵・小堂前や墓地、さらには何らかの結界の地に造立されている。

その意味では、結業の塔婆としては板碑の数は少ない。しかし、その変化が板碑激減期を経て確認できることは、板碑の型式変化と造立趣旨の変化が全く無関係であったとはいえないものように思える。

これにもまして板碑激減期を経ての板碑の変化は、やはり、板碑の墓碑化に起因するものが大きい。加えて、15世紀後半以降の板碑の墓碑化は近世墓へと受け継がれており、その中の一つの要素として、墓碑化した板碑の中に位牌の意匠が取り込まれていることは注目に値しよう。多くの地域で中世の板碑形式を受け継ぐ近世墓碑には、位牌の形式をもつものも確認できる。板碑の消滅期から近世墓碑の確立期にかけて、墓碑と位牌には密接な関係がみられることは、位牌研究の立場からも指摘されている(跡部直治1936)。大分県豊後高田市香々地町上平入会墓地においても、近世墓碑の初期形態が極めて良好に確認できる興味深い資料がみられる(原田昭一1999)。当墓地中最古に位置付けられる正保2年(1645)銘の146号墓碑は上部に雲形を彫り出し、明らかに「雲首型位牌」の型式を継承し、また、寛文13年(1673)銘をもつ64号墓碑をはじめとした資料には碑面に唐破風を陽刻し、これについては「廟所型位牌」の形式を継承しているものと考えられる。このように、近世墓碑の初期形態である墓碑の中に当時の位牌にみられる属性の一部が読みとれる資料は、近世墓地景観を非常によく残す大分県においては数多く確認できる。一方、大分県南部の凝灰岩を石材とする地域においては、大分県豊後大野市大辻山2号板碑(豊後大野市142)・回春庵1号板碑(豊後大野市144)など板碑消滅期の墓碑化した資料中に、碑面に線刻による位牌形を彫刻し、その中に戒名をはじめ没年月日を刻む資料が多々確認できる。

これらのことから、当該期の板碑が墓碑機能を有していたことが、銘文だけでなくその形態から読みとれる。このような板碑の墓碑化とともに梵字種子の著しい退化傾向が確認でき、きわめて小さい線刻状の梵字種子をみても、主導を供養することの意義が失われていったことが考えられる。

これに加えて、銘文中に確認できる趣旨として庚申信仰に伴う造立例がある。天正4年(1576)銘をもつ佐伯市地蔵ノ本板碑(佐伯市130)をはじめ、天正6年(1578)銘をもつ豊後大野市平井板碑(豊後大野市019)、慶長6年(1601)銘をもつ豊後大野市三代五板碑(豊後大野市046)など、16世紀後半に少数例確認できる。庚申信仰に伴う石碑は近世にも受け継がれ流行し、その初期には「庚申」の文字が刻まれる特徴をもつ。これに対し、18世紀代には、「庚申」の文字が消滅し、青面金剛が陽刻される庚申塔へと変化していくが、17世紀代の庚申塔は形式的には板碑型墓碑と同じであり、それにもまして自然石を利用したものが多い。板碑を受け継ぐ近世の石塔は墓碑だけでなく庚申塔でも確認できるが、これは、板碑減少期の15世紀前半以降に出現した新たな要素として近世に受け継がれるものである。

跡部直治1936「位牌」『仏教考古学講座』第6巻 雄山閣

入学正敏1988「宇佐市内石造物一覧」『二豊の石造美術』8 大分県石造美術研究会













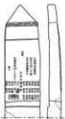









入学正敏1994「宇佐の石造文化財探訪」宇佐文化会館三和文庫運営協議会

原田昭一1999「香々地地域の墓制—長小野集落の近世墓地の検討を通して—」『豊後国香々地荘の調査 本編』大分県立歴史博物館

原田昭一2004「板碑変遷史-豊前・豊後における紀年銘板碑を通して-」『古文化遺産』第51集 九州古文化研究会

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀	●宇佐市 138 歴史博物館 (福積山) (1163) 	国東市 170 護聖寺 (1291) 	
14世紀	●中津市 127 箭山神社 (1308) 	国東市 132 唯 (1321) 	1/80 杵築市 012 本蔵 (1334)
15世紀	宇佐市 197 妙楽寺 (1346) 	●宇佐市 298 佐田 (1333) 	●杵築市 040 下山 (1366)
15世紀	宇佐市 203 庄部観音堂 (1383) 	●豊後高田市 365 高真寺 (1361) 	杵築市 261 鎌田越 (1366)
15世紀	中津市 154 北谷 (永享?) 	●豊後高田市 278 地持庵 (1396) 	
15世紀	●宇佐市 288 御許山 1495 	●豊後高田市 403 梅遊寺 (1414) 	
16世紀	●宇佐市 035 善光寺 (1505) 	●豊後高田市 419 金高墓地 (1477) 	杵築市 034 東光寺 (1516)
16世紀	宇佐市 215 観音寺 (1575) 	●豊後高田市 243 寺ノ上殿墓 (1550) 	●豊後高田市 118 小門家 (1549)
17世紀	宇佐市 032 成円寺 (1618) 	●国東市 163 寺園 (1585) 	●豊後高田市 319 長安寺オト様 (1610)

第169図 板碑・角柱塔婆変遷図① (S=1/60、●は角柱塔婆)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	日田・玖珠
	 <p>●臼杵市 061 臼杵城 (1232)</p>		
 <p>大分市 017 小野家 (1333)</p>  <p>●宇佐市 138 歴史 博物館 (大分川) (1348)</p>  <p>大分市 045 少林寺 (1350)</p>	 <p>臼杵市 152 城ヶ平 (1333)</p>  <p>●臼杵市 083 寺田 (1382)</p>	 <p>1/80 豊後大野市 196 三反畑 (1377)</p>	 <p>1/80 日田市 041 永平寺跡 (左: 1313 右: 1311)</p>  <p>●日田市 075 草三郎大神宮</p>
	 <p>臼杵市 099 名塚 (1505)</p>  <p>●佐伯市 042 門前 (1526)</p>  <p>佐伯市 032 稲荷神社 (1584)</p>	 <p>豊後大野市 096 五郎丸 (1493)</p>  <p>●豊後大野市 296 明照院 (1567)</p>  <p>豊後大野市 013 塚ノ元 (1538)</p>  <p>●豊後大野市 307</p>	 <p>九重町 005 室八幡社 (1451)</p>  <p>●日田市 056 教康 1/80</p>
 <p>●大分市 298 薪尾</p>	 <p>1/80 津久見市 017 鬼丸 (1624)</p>  <p>豊後大野市 144 森迫回春庵 (1609)</p>  <p>中小坂 (1604)</p>		

第170図 板碑・角柱塔婆変遷図② (S=1/60、●は角柱塔婆)

(8) 石幢・石殿

1. 石幢・石殿の出現～集団による造塔～

全国的に鎌倉末期より数人の結業による石造塔婆の造立が行われ始める。関東では板碑を中心にその傾向が見られ、一結業・結業などと称する集団が造立主として現れる。千々和到氏は、村落の構成員が仏神への信仰を背景に結業して造塔を行ったもので、これを金石文における民衆の登場であるとした。

大分県においても、14世紀から結業路による石造塔婆、いわゆる結業塔婆の造立が見え始める。板碑だけでなく宝篋印塔や国東塔などにもそれが認められ、民間信仰の視点や共同体の問題から着目されてきた。その基盤には、念仏講や地藏講といった、在地の信仰集団があり、彼らはまた地縁的に結びついた惣的結合を示すようになる。

信仰を表すシンボルとして様々な石塔形式を用いて造立してきた信仰集団であったが、南北朝期の終わり頃から特に室町時代を中心に、地藏・十王信仰を基にした石造物を造立するようになる。石幢・石殿の出現である。特に石幢には、南北朝期の結業塔婆にわずかに見られた交名がその多くに記され、村落共同体としての結束力がより強く感じられる。

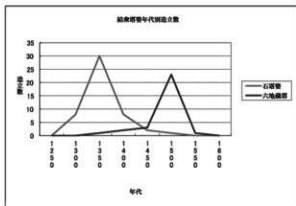
石幢・石殿は、齋部に六地藏や十王を表した石塔で、特に石幢は六地藏幢、石殿は十王石殿などとも呼ばれ現在も信仰されて

いる。六地藏は仏教用語で六道、すなわち全ての衆生が生前の業因によって生死を繰り返す、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六つの迷いの世界それぞれにあって、衆生の苦悩を救済するという六種の地藏菩薩であり、檀陀・宝珠・宝印・持地・除蓋障・日光の総称である。六地藏への信仰は一般に、平安時代から鎌倉時代にかけて広まり、地獄救済の信仰はその裁判官である十王への信仰と結びつき、閻魔大王の本地が地藏であるなどの融合が見られるようになっていく。十王は、冥土にて亡者の罪の軽重をたずねる十人の判官で、秦広王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・變成王・太山王・平等王・都市王・五道転輪王の総称である。次の生が決まらない中宥の亡者は、初七日ないし七七、及び百箇日、一周年、三周年に、秦広王以下順次一々の王の庁を過ぎ、罪の裁断を受け、これによって来世の生まれる所が決まるといふ。石幢・石殿という六地藏信仰・十王信仰による石造物の出現は、遍く救済する地藏・十王への信仰が、中世の民間信仰として広く受け入れられたことを示しているといえよう。

2. 石幢について

石幢の起源は中国唐代の経幢にあるとされ、日本では平安時代に請来され、六面や八面の石柱で造塔された。この思想や形態を引いていると思われるのは、檜橋山角柱塔婆（宇佐市138・1163年）や早尾原石幢（豊後大野市168・1339年）であろう。続いて勝光寺石幢（大分市274・1383年）があり、これには幢身上部に地藏が肉彫りされている。これらは広義で石幢として分類されるが、ここで扱うのは、一般に六地藏塔と称されるもので、基礎・幢身・中台・窟部・笠・宝珠からなる石塔である。幢身は四角、六角、八角、もしくは円柱で、中台・笠もそれにならう。中台に蓮華を表すものもある。窟部は六面を基本とし、四面・八面のものがある。六面のものはそのまま六地藏が肉彫りや線刻で表され、四面・八面のものは六地藏と十王の内の二尊や、閻魔王と眷属、金剛力士などやハリエーションが見られる。

国東半島を中心とした県北では、主に寺院の入り口や参道に置かれ、寺院を強く意識した造立であったことがわかる。六郷山の坊集落など、寺院に起因する集落性が影響しているのではなかろうか。紀年銘や銘文



第171図 結業塔婆年代別造立数

を持つものが少なく、早いもので両子石幢（国東市155・1468年）や岩戸寺石幢（国東市081・1478年）がある。岩戸寺塔は権少部豪隆の菩提と自身の現世安穩のため僧豪範が造立した。民衆による造塔が認められるのは、覚正寺支坊石幢（宇佐市252・1522年）が初見で、念仏講による結果が造立している。しかし、銘文中に寺名が見え



勝光寺石幢



岩戸寺石幢

ることから、やはり寺院が村落の精神的中心をなしたものであろう。

一方県南では、道辻・境界・集落の入り口などに置かれ、その数量は県北よりも圧倒的に多い。さらに銘文を持つ塔がかなりの数残存しており、その造立主層や目的、位置などの背景について一定の考察が可能である。紀年銘がある塔では中間石幢（大分市308・1399年）が初見で、六地藏菩薩として造立した人々の交名が残る。以後、多数の石幢が広く展開するが、その造立目的は、現世安穩後生善処のための逆修供養がほとんどを占める。造立主層は、大神姓や平姓、藤原姓などを持つ在地領主や、僧侶、そして多い場合は30人以上にも上る交名で示される民衆層となる。

交名を記した石幢にはしばしば「大野郷緒方庄宇田枝名」（豊後大野市宇田枝石幢244・1516年）「入田郷神原畑村」（竹田市畑石幢153・1523年）など、名や村の名が記されており、結縁した人々は村の構成員であろうことが読み解ける。これらは六地藏の信仰や冥界思想から、俗世界と異界とを結びつける場所と考えられていた道辻や境界に造立された。

3. 石殿について

石殿は、国東半島にのみ分布する石造物で、基礎・齋部・入母屋屋根からなる単制のもと、基礎と齋部の間に竿・中台を設ける重制のものに分けられる。また、単基で造立されるのが基本であるが、稀に二基並立の例が見受けられる。齋部は四面で、十王・六地藏を基本に、観音や菩薩などが内彫りされる。屋根は入母屋（一部寄棟か）で、多くは垂木や懸魚まで表現しており、木造建築物を強く意識して製作されている。有銘のものを中心に、単制・重制、二基並立の事例を見ていく。

単制の石殿では延寿寺石殿（豊後高田市387・1468年）が初見である。四面の齋部の内、二面に三個ずつの地藏、一面に観音菩薩、もう一面に虚空蔵菩薩を彫刻する。造立願主は宇佐栄忠とあり、当時田染荘の領主であった田染栄忠その人である。十王信仰ではなく六地藏の信仰で製作されている。

重制の石殿の初見は真玉寺石殿（豊後高田市023・1459年）であるが、それに先行すると思われるのが報恩寺石殿（国東市160）である。横に竿石と思われる方柱があり、邪鬼のレリーフと応永25年（1418）の紀年銘を持つ。本来はこれが組み合わされて重制であったと考えられる。四面の内二面に十王を、他二面にそれぞれ地藏を肉



延寿寺石殿



報恩寺石殿



報恩寺石殿竿石

彫りした十王石殿で、重厚な人母屋屋根や均一の垂木表現は、室町初期の作例として十分捉えて良い。真玉寺石殿も竿石に銘を入れ、龕部を支えている。重制石殿の一つの形態であろう。

最後に二基並立の例について。現在、富貴寺石殿（豊後高田市365）と地藏寺石殿（杵築市339）が残存する。このタイプは基礎と龕部の間に請花の中台がない。富貴寺石殿は、国宝富貴寺大堂の参道入り口に左右に安置され、龕部にそれぞれ五軀の十王を肉彫りする。下から向かって左の塔には人頭杖を、右の塔には浄瑠璃鏡を表しているのは他に例がない。

地藏寺石殿もまた、寺の参道左右に向かい合わせで安置される。龕部には四面の内、正面に三軀、側面の一面に二軀の十王、もう一面に半跏踏下げの延命地藏を肉彫りし、裏面は素地で仕上げ。二基ともに、基礎に納入孔が穿たれ内部に通じる。納入孔については、納経・納骨等いくつかの目的が考えられるが、近年多くの石塔で、基礎に穿たれた納入孔が納骨のためであろう指摘がされるようになった。当該石殿についても、逆修供養を行って地藏・十王に結縁し、没後実際に納骨したという可能性を指摘しておく。

また、地藏寺が禅宗寺院であるということにも注目したい。地藏寺の開山は、南北朝に大友氏・田原氏の庇護を受けて国東半島に教諭をはった悟庵智徹の弟子である淳仲智朴という禅僧である。その系統は臨済宗



真玉寺石殿



地藏寺石殿全景



地藏寺石殿奉納孔





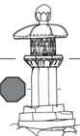




聖一派直翁下と整理されるが（聖一派とは、京都五山の東福寺開山の聖一國師の法系で、近世以降は東福寺派とされる。直翁下とは、聖一國師の法を継いだ豊後万寿寺開山の直翁智胤の法系を意味する）、特に悟庵智徹の法系は悟庵下と称される。地藏寺は田原氏の菩提寺である宝院寺の末寺で、住持の隠居寺であったという。広く石殿の安置される寺院についてみれば、その多くが禅宗寺院であることに気づく。地藏寺と同じ悟庵下に属するものと、国東泉福寺無著妙融の法系（曹洞宗無著派）になるものがある。中世に禅宗が発展した背景に、外護者に対するの逆修供養や追善供養などの年回忌法会を担ったことが挙げられる。悟庵や無著の教線が国東半島に広く展開したのは、このような逆修・追善の法要が民衆に対してもなされていたからではなかろうか。民間信仰と結びついた石殿の存在は、禅宗の民衆への展開を考えさせる。

石殿一覧表

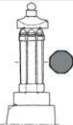

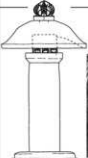












名称	年代	所在市町
中之島旅館石殿	1341	豊後高田市
報恩寺石殿	1418	国東市
真玉寺石殿	1459	豊後高田市
延寿寺石殿	1468	豊後高田市
東光寺石殿	1525	杵築市
地藏寺石殿		杵築市
富貴寺石殿		豊後高田市
安養寺石殿		豊後高田市
東中石殿		国東市
御馳取石殿		国東市
岡子石殿		国東市
瑞晴光寺石殿		国東市
護聖寺石殿		国東市
泉福寺石殿		国東市
縁福寺跡石殿		杵築市
白木原石殿		杵築市
白木原観音堂石殿		杵築市
龍華寺石殿		杵築市

（参考文献）

酒井富蔵『国東半島の石造美術』第一法規 1978
 小泊立矢「石造品からみた中世の地藏信仰」（『大分県地方史』第124号）大分県地方史研究会 1987
 渡辺文雄「国東半島西南部の南北朝期凝灰岩系石造品をめぐる諸問題」（『二豊の石造美術』第5号）大分県石造美術研究会 1988
 千々和到『板碑とその時代』平凡社 1988
 伊藤良久「中世日本禅宗の逆修とその思想背景」（『印度學佛教學研究』第57巻）日本印度学仏教学会 2009
 三谷絃平「結果塔婆の遺立と中世共同体—大分県を事例として—」（『大分県地方史』第206号）大分県地方史研究会 2009
 三谷絃平「六郷山と禅宗寺院—武士の押領と転宗」（『石造文化研究』第31・32巻）おおい石造文化研究 2015

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀			
14世紀		  ●豊後高田市 209 中之島旅館 (1341)	
15世紀		  ●豊後高田市 023 真玉寺 (1459)	
16世紀	 宇佐市 340 満貞 (1508)	 宇佐市 252 寛正寺支坊 (1522)	 ●杵築市 034 東光寺 (1525)
17世紀		 国東市 081 岩戸寺 (1478)	 別府市 098 赤松 (1581)

第172図 石幢・石殿変遷図① (S=1/60、●は石殿)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	臼田・玖珠
		 <p>豊後大野市 168 早尾原 (1339)</p>	
 <p>大分市 308 中間 (1399)</p>	 <p>臼杵市 012 王座 (1426)</p>  <p>津久見市 021 遊尾 (1477)</p>	 <p>豊後大野市 020 戸崎 (1448)</p> 	 <p>臼田市 040 上野町 (1460)</p>  <p>九重町 033 溝上 (1458)</p>
 <p>由布市 079 鬼瀬店 (1555)</p>	 <p>臼杵市 142 網枝 (1572)</p>  <p>佐伯市 103 神内釈迦堂 (1549)</p>	 <p>豊後大野市 311 地藏原 (1508)</p>  <p>竹田市 114 円福寺 (1549)</p>	 <p>玖珠町 001 神原</p>
		 <p>豊後大野市 120 柴山 (1533)</p>	

第173図 石幢・石殿変遷図② (S=1/60)

(9) 石鳥居

鳥居は、神社の参道を跨ぐ門のように建てられた造立物であり、神社であることを象徴するもので、正月の初詣の際に鳥居を滑り歩み始めるとなにかしらの引き締まり感を感じる場所である。「広辞苑」によると、鳥居は「神社の参道入口に建てて神域を示す一種の門」とある。神社は、神の依代のある神殿・幣座を囲む段、櫓、石垣、鳥居などの多重の結界で囲まれた空間/境内から成り立っている。したがって、この場合の神域とは、境内を指している。鳥居は、804年（延暦23）に伊勢神宮の宮司が神祇官に提出した皇太神宮儀式帳に「於不葦御門（うへふかずのみかど）」としてみえることから、8世紀代には現在のような形が成立していたと考えられる。

13世紀に成立した西行物語絵巻（11の8）熊野路八上王子の祠（ほこら）、一遍聖絵第7巻、佐竹本三十六歌仙絵 住吉大明神の祭神の中や14世紀～16世紀に描かれた絵巻に鳥居は描かれているが、全て木製である。しかし、石製の鳥居も数少ないながら作られていたようで、現存する最古の鳥居は山形県の山形市鳥居ヶ丘にある「元木の石鳥居」、同市「成沢の石鳥居」、天童市「清池の石鳥居」は古文書等から10世紀から12世紀初頭までに造立されている。鳥居が石造より木造が多かった背景には、石造の場合、笠木・島木や柱などの部材を巨大な石から削りだし、数百kgに及ぶその部材を選び建てるのに対し、木造の場合は軽くて加工や立てるのが比較的に簡単なことにある。

大分県外の16世紀末までに造立された石鳥居は、暫見で「元木の石鳥居」をはじめとした5基に及ぶ山形県下の石鳥居群、山梨県の7基、その他、大阪府、京都府、岡山県、広島県、香川県、愛媛県、福岡県、佐賀県で各一ヶ所が知られているにすぎない。石鳥居が爆発的に増加するのは、道路、運搬手段等が発達した近世になってからである。おそらく、全国で数千を超えるであろう石鳥居の中で、中世の石鳥居は極めて少ないといえよう。紀年銘等が陸奥・墨書されているものは比較的に中世の石鳥居であることが周知されやすいが、無紀銘の石鳥居の年代は分かりにくい憾みがある。その上、神社の門という目立つ場所にありながら、中世の石鳥居が少ない理由の一つとして、変化の少ない単純な構造である上に、手の届かない高い部分に主要な構造が上部域にあることが、研究者による詳細な実測調査が及ばなかったことにあり、結果的に型式的な編年研究が進展しなかった部分が大いにある。そこで、今回、大分県下の石造物の分布調査などで新たに見つかった中世の石鳥居を含め、紀年銘のある石鳥居を基準資料として、その変化の方向性を試みた。

1. 分布

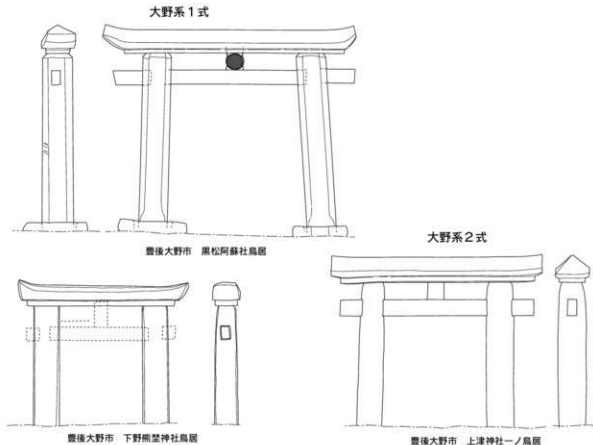
神社の参道に造立された石鳥居は、古くより立てられたと考えられるが、上述したようにその残存数は驚くほど少ない。近年の調査によれば、別府湾北岸の日出町八津島神社の鳥居（日出町019）、七瀬川中流の大分市竹ノ内神社の石鳥居（大分市201）、臼杵川中流の臼杵市深田の石鳥居（臼杵市044）、柴北川の豊後大野市犬飼町黒松阿蘇社の石鳥居（豊後大野市068）・同市犬飼町柴北に所在する熊野神社の石鳥居（豊後大野市082）、同市鹿道原の平尾社石鳥居（豊後大野市108）・同市大野町川北の杵築社石鳥居・同市片島の上津神社の一の鳥居（豊後大野市044）・上津神社土境内の石鳥居（豊後大野市043）・同市深山八幡の石鳥居（豊後大野市022）が確認されており（表1）、上記した県外における鳥居の残存数と比較すると、全国で最も多い。その分布は、大野川中流とその周辺に分布することがわかる。

大野川中流域とその周辺に中世石鳥居が集中分布する状況は、その分布域に阿蘇溶結凝灰岩（灰石）という良質な石材が分布することがその理由として挙げられる。また、石鳥居の各部分の重量が、他の石造物に比べても数百kgを優に超すので、その石切場（石材産地）と設置場所までの間が遠くなるほど運搬にかかる負担は大きい。こうした点が、阿蘇溶結凝灰岩という良質な石材が各所で見られる大野川中流域であれば、その利用に関する地理的な優位性は容易に想像できる。この点については、鳥居以外の石造物、摩崖仏の分布傾向と同様であり、石鳥居の分布と石材分布の関係は相関するといえよう。

2. 石鳥居の分類

ここでは、大野川流域とその周辺の石鳥居の特徴を観察し、その特徴を抽出する。県内に遺存する石鳥居は、大きく二つの系統に区分できる。一つは古くより豊後大野市北部を中心に型式変化を経てきたと考えられる大野系の石鳥居である。もう一つの系統は、近畿地方など豊後以外の場所で発達した外来系の石鳥居である。

まず豊後大野市北部を中心とする石鳥居の系統について柱の横断面形を中心に分類していく(図1)。大野系1式 笠木頂部の反り増しが極僅かで、ほぼ直線的である。反り増しがある場合も、柱からみると外側にあたる部分に数cmの高低差があるにすぎない。笠木の端部小口が僅かに外傾する例(熊野社石鳥居)もあるが、他は全て内傾もしくは垂直切り落としの例である。また島木は上部の笠木に比べて厚さが薄い。柱は、方形の角材をベースとして、その角部を幅広く面取したもので、横断面が幅広く面取八角形であることに最大の特徴がある。また笠木・島木の厚さより、柱の幅の方がかなり大きい。この1式に含まれるのは、平尾社の石鳥居(豊後大野市108)、熊野神社の石鳥居(豊後大野市082)、黒松阿蘇社の石鳥居(豊後大野市068) 竹ノ内神社の石鳥居(大分市201)である。黒松阿蘇社の石鳥居は、笠木の端部小口が屋根部の小口と軒部の小口に分かれ、屋根部小口は垂直切り落としとして、軒部小口は湾曲して軒底面に続く。島木より外側の笠木下面が大きく湾曲していることと、額東の表裏両面に丹塗の日紋が彫刻されている。平尾社の鳥居は、1351年(観応2)に建てられてから、5回程度の修理を経ている。金石文で確認される最も古い年代は、島木の下面に陰刻された1509年(永正6)銘だけである。したがって笠木・島木は16世紀初頭の再建時のものである可能性が高い。さらに柱には江戸期の紀年銘が陰刻されている。しかし柱の特徴が、15、16世紀には存在しない幅広く面取八角形であることから、修理・補填する際に、経済的な面から残存する部材



第174図 石鳥居の分類 (1) (S=1/60)

の特徴に似せるなどのバランスを石大工がとったことが要因と推定する。鳥居の近くに古い幅広面取八角形の柱の残骸があることも、そのことを示唆している。また黒松阿蘇社は、1361年（延文6）4月5日に阿蘇惟村が出した「井田郷十二貫文寄進状」等の文書から、南北朝時代に創建されたと考えられる。また阿蘇社の由緒書には、「社殿を創建、此時華表一基を建つ」とあり、現存する石鳥居の特徴と年代的な鑑別がないので、1361年という南北朝時代における造立と推定する。なお熊野社の石鳥居（豊後大野市082）の柱も幅広面取八角形であるが、「正平十二年」（1357）の銘とともに「大工沙弥玄正」の銘が刻まれている。この熊野社の石鳥居に6年先行して造立された平尾社の石鳥居と、4年後に建てられた阿蘇社の石鳥居は、1351年から1361年までの10年間ことである。これらの神社の位置関係は、熊野社の北西3.4kmに黒松阿蘇社が位置し、南西3.5kmに平尾社の石鳥居が位置するなど近い位置関係がある。こうした事柄を考慮すると、1式鳥居は「大工沙弥玄正」が創始し、製作した石鳥居で間違いないだろう。

大野系2式 笠木頂部の反り増しは、両端部方向が数cmの高低差があるにすぎず、ほぼ直線的である。また鳥木は上部の笠木に比べて厚さが厚いか、厚くなる傾向が窺える。柱は、ほぼ方形であるが、その角部を幅狭く面取したもので、横断面形が幅狭面取方形であることに最大の特徴がある。また柱の傾斜（転び）は1式と同様になく、垂直に建つ。なお笠木・鳥木の厚さより、柱の幅の方が大きい。この2式に含まれるのは、上津神社山頂部の石鳥居（豊後大野市043）と下熊笠社石鳥居（豊後大野市149）である。上津神社山頂部の石鳥居は（写真1）、中世初期から宮司職を務める大野氏の宅地から南へ尾根を登りつめた山頂部参道に立っている。笠木・鳥木は左右二つの部材からなり、木材の繋ぎでいう「相欠きはぎ」で繋いでいる。右側の柱に「至徳三年十一月」、左の柱には「大願主藤原朝臣親世謹白」（大友親世）と彫刻されている。左の柱は、風化状況や表面の磨き調整から近世以降の修復にかかるものであるが、オリジナルな右側の柱と同様に幅狭面取方形とするなどバランスをとった作りである。したがってオリジナルな左の柱の表面にも大友親世の名前が彫刻されており、一種の記念碑として修復するためあつて忠実に彫刻したのである。

大野系3式 笠木頂部の反り増しが両端部のみに僅かにみられる例と、ほぼ直線的な例がある。共通点は、柱の横断面形が円形になる点である。この大野系3式に該当するのは、「応永二十年」年銘のある深山神社の石鳥居（豊後大野市022・写真2）と上津神社一ノ鳥居（豊後大野市044）である。前者の特徴として、鳥木が厚く発達していることと、僅かながら柱が内側への傾斜（転び）がみられることである。こうした違いはあるものの、笠木後部の全部もしくはほとんどが直線的という大野系に伝統的な作りを逸脱しているとまではいえない。また鳥木の長さより、かなり外側へ笠木が延びている状況が窺える。こうした深山神社の特徴からすると、従来の伝統的な大野系の技法の他に外来系の影響を受けているのかも知れない。上津神社一ノ鳥居は、山頂部にあった旧上津神社の西側の山裾部にある参道入口付近（現上津神社の神殿背後）に建てられていた。上津神社は上津八幡ともいい、古くより、深山八幡、浅草八幡とともに大野の三八幡としてしられ、その中心神社であった。そのため、緒方氏・戸次氏・大友氏等の守護・地頭により田地や物品が寄進されてきた。この一ノ鳥居も、立花道雪（戸次鑑連）の4代前の戸次親載が寛正3年（1461）に造立させたもので、額面の背面側に親載の名が彫刻されている。戸次氏が「大野荘東半部を本拠として影響下においていたことを示す記念物である。鳥居の笠木の端部が僅かに反る傾向が窺えるが、ほぼ水平である。また笠木の端部左側面が垂直で、その上部が三角形であることに特徴がある。また鳥木の厚さが笠木に対して約4分1前後しかない。柱の断面形は円形～楕円形である。

外来系 笠木頂部の反り増しと、これに連動する形で鳥木も端部で反ることが窺える例である。さらに構造的には、笠木・鳥木が三つの部材から成り立っており、木材の繋ぎでいう「傾斜はぎ」と「相欠きはぎ」技術を組み合わせたとような形で繋いでいる。特に特徴的なのは、鳥木が笠木の厚さに匹敵するほど厚い部分である。柱は円形で、両柱ともに二つの部材からなっている。この外来系に属する石鳥居は、深田の石鳥居（臼杵市044）と八津鳥神社の石鳥居（日出町019）で、大きな違いは前者が、柱の傾斜（転び）があるのに対し、後者は垂直であることである。ここでは深田の石鳥居を外来系1式、八津鳥神社の石鳥居を外来系

2式としておく。深田の石鳥居は、額東に「王」とあることから日吉神社（山王神社）鳥居といわれ、南北朝時代または室町時代前期に造立されたことが推定されている。一方、八津島神社の石鳥居は、1564（永祿7）年に大友宗麟が額主としてたてたことが城内文書に記されている。

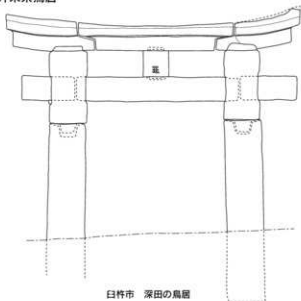
3. 編年

これまで分類してきた県内の中世の石鳥居は、大野系が3分類と、外来系に区分できた。この分類をもとに変化の方向性について検討してみたい。まず紀年銘との関係をもとにみる（表1）。大野系1式の紀年銘は、平尾社石鳥居が1351年、熊野神社の石鳥居が1357年、阿蘇社の石鳥居が1361年に造立されている。

このうち平尾社の石鳥居は数回の修理を経ているが、特に柱に当初の原形を留めているとの理解が前提である。このことから大野系1式は、石大工の玄正が製作したことが推定されるので、玄正の活動した14世紀中頃から後半頃までの範囲で作られた石鳥居と考えられる。したがって紀年銘を欠くものの、1式に分類した竹ノ内神社の石鳥居もこの頃に製作されたことがわかる。大野系2式の紀年銘は、上津神社山頂石鳥居が1386年、下野熊笹社の鳥居が1538年であり、14世紀の終わりから16世紀の前半まで作られていることになる。大野系3式の紀年銘は、深山八幡の石鳥居が1413年、上津神社一ノ鳥居が1462年に作られており、14世紀の中頃から後半に作られている。こうしてみると大野系2式は、大野系3式よりも古く出現したが、年代的に並行する部分も多い。しかし、変化の方向性は大野系1式、大野系2式、大野系3式の順に一部並行しながらも推移していったと推定される。

外来系については、外来系2式の八津島神社の石鳥居が1564年に造立されている。この外来系2式は江戸時代の作例だとしても差ほど違和感のない近世的な形をしている。そのうえで、外来系1式の深田の石鳥居をみると、柱が垂直に建つことと太いことが外来系2式との形態的な違いである。そして外来系1式の柱の横断面が円形であることは、大野系3式における横断面円形柱の年代的な動向も考えると15世紀の前半を遡らなないと考えられる。大野系の横断面円形柱の石鳥居においては、作例として上津神社一ノ鳥居以降の様相がわからない。しかし、外来系2式の八津島神社鳥居の存在からすれば、変化の方向性としては大野系2式でも年代の新しい下野熊笹社石鳥居にみられる柱のような幅状面取方形例が主体となることは考えにくい。おそらく16世紀頃からは次第に大野系が廃れ、外来系2式のような近世的な石鳥居に次第に移り変っていったことが予測される。

外来系鳥居



第179図 鳥居の分類 (2) (S=1/60)

4. 石鳥居の造立者

木製の鳥居に比べ、耐久性面では永い存続期間がみこめる一方で、運搬に労力のかかることは、誰しも予測できるのが石鳥居である。こうした、費用のかかる石鳥居をどのような階層が中心になってたてたのであろうか。費用がかかっていたこともあるのか、石鳥居の表面には発注者である大願主などの名前が陰刻されていたり、古文書等に記録されていたりする。これまで述べてきた中世石鳥居は10基で、このほかに2基の未確認事例がある。このうち、造立者の分かる石鳥居が6基ある。平尾社の石鳥居は1351年に建てられた際の陰刻は残存していないが、1509年再建した際の造立者は森迫盛久である。森迫氏は三重郷下村森迫を本貫とする大友家重臣で、大友初代の能直とともに関東から下向し、三重郷の森迫を本拠とする一族である。「明応七年（一四九八）七月二十五日」、森迫兵庫助繁房は大友奉行人として所領打渡状に連署するなど、森迫氏は大友家重臣としての位置を占めており、石鳥居を再建した森迫盛久もほぼ同時代の一族である。黒松阿蘇社の石鳥居は、既に記したように阿蘇惟村が1361年に造立している。阿蘇惟村は、阿蘇大宮司であり、大友氏との密約により1377年に肥後国の守護になった人物である。阿蘇社と石鳥居の存在は、阿蘇社のある黒松地区が阿蘇氏の影響下にあったことを示すものかもしれない。上津神社山頂石鳥居は1386年に豊後国守護大友親世が造立している。同じく上津神社一ノ鳥居は、大友氏の有力な庶家であった戸次氏9代の戸次親義が1462年に造立している。また八津島神社の石鳥居は、1564年に大友宗麟が造立している。以上のように、造立者が分かるのは5例であるが、本稿で言及した中世石鳥居10例のうち半数を占めている。この造立者には、他の石幢でしばしばみられるような一般民衆の名は出てこない。鳥居は公共性の高い神社の参道を跨ぐように建てられており、五輪塔・板碑などと違って多くの人々が目にするものである。造立者名を一瞥すると、石鳥居の製作、運搬にかかる費用は当時一般民衆に届かないほど高額であったことの反映であることが窺える。このようにみえてくると、石鳥居の造立者名について古文書への記載や石鳥居への陰刻がない例についても、実は有力な地頭クラスにかかる可能性が高い。とりわけ中世の石鳥居として県内最大である深田の石鳥居については、その巨大さからして守護もしくは有力な地頭が造立者であった可能性が極めて高い。公共性が高く、地域・地区の精神的中心ともいえる神社の目立つ場所に石鳥居を建てた背景には、人心収攬を得ることで地域支配の安定化を計ったのだろう。

おわりに

本稿では大分県内に残る中世の石鳥居について観察してきた。その結果、石鳥居は石材である阿蘇溶結凝灰岩の分布域である大野川中流域に多いことが分かった。中世の石鳥居は大野系と外来系に2大別され、大野系が1式～3式の3細別、豊後地域以外に由来する外来系が1式・2式の2細別できることがわかった。それらを紀年銘、古文書記録を参考にした組別で考えると、大野系1式が14世紀中頃から後半頃、大野系2式が14世紀中頃から後半頃で、大野系3式は大野系2式に一部並行しながら14世紀の終わりから16世紀の前半までに建てられていた。一方、外来系は1式が15世紀代で建てられ、近世的な形態とあまり変わらない外来系2式は16世紀代に建てられていた。下野熊笹社の石鳥居のように、造立が16世紀に下る大野系石鳥居の作例もあるが、基本的には大野系は終焉し、豊後地域においては外来系2式をもとに江戸期に向けて近世的な石鳥居が建てられはじめたと推定される。

石鳥居の造立者名をみると現実的に守護・地頭クラスしか発注できない費用のかかる石造物であったことがわかる。そのため、造られた後に災害で破損した際にも、その時期の様式をほとんど採用せず、破損せずに残された部分とのバランスを考慮した忠実な模倣を行っている。中世に支配者が支配地域の精神的な中心である地域の神社仏閣に田倉（神田・寺田）等を寄進することで、人心を収攬し、地域支配、荘園支配を安定させることを行ってきたが、石鳥居作らせたことも有力者が同様な効果を期待したことが背景にあるのであろう。

表1 大分県内の石鳥居

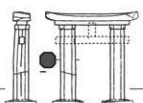
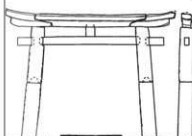
No.	石鳥居	所在地	分類	笠木の 角 度	島本 (厚)	柱の断面形	造立年代		行力造立者
1	平尾社石鳥居	豊後大野市千歳村	大野系1式	広角	薄型	八角形面取	観応2	1351	
2	熊野神社の石鳥居	豊後大野市犬飼町榮北	大野系1式	鋭角	薄型	八角形面取	永正6	1509	森迫盛久
3	阿蘇社の石鳥居	豊後大野市犬飼町	大野系1式		薄型	八角形面取	延文6	1361	阿蘇惟村
4	上津神社山頂部石鳥居	豊後大野市大野町	大野系2式	鋭角	厚型	方形面取	至徳3	1386	大友親世
5	深山八幡の石鳥居	豊後大野市領地町	大野系3式	広角	厚型	円形	応永20	1413	
6	上津神社一ノ鳥居	豊後大野市大野町	大野系3式	鋭角	薄型	円形	寛正3	1462	戸次親義
7	下野熊坐社の鳥居	豊後大野市犬飼町下津尾	大野系2式	広角	薄型	方形面取	天文7	1538	
8	八津島神社の鳥居	日出町	外系系2式		厚型	円形	永禄7	1564	大友宗麟
9	深田の石鳥居	臼杵市深田	外系系1式	鋭角	厚型	円形	不明	15C-16C	
10	竹ノ内神社の石鳥居	大分市野津原町	大野系1式	広角	薄型	八角形面取	不明	14C中頃	
11	未確認 三嶋神社石鳥居	杵築市山香町字本藤					文永2	1265	大友親時
12	未確認 天満社石鳥居	豊後大野市大野町酒井寺					至徳4	1387	



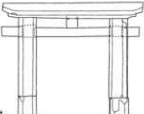
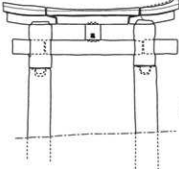


写真1 上津神社山頂部の石鳥居



写真2 深山八幡の石鳥居

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀			
14世紀			
15世紀			 <p>大分市 201 竹ノ内神社鳥居</p>
16世紀		 <p>日出町 019 八津島神社鳥居</p>	
17世紀			

第176図 鳥居変遷図① (S=1/100)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	臼田・玖珠
		 <p>豊後大野市 108 平尾社鳥居 (1351)</p>	
	 <p>臼杵市 044 深田の鳥居</p>	 <p>豊後大野市 044 上津神社一ノ鳥居 (1462)</p>	
		 <p>豊後大野市 149 大野熊堂社鳥居 (1538)</p>	

第177図 鳥居変遷図② (S=1/100)

(0) 笠塔婆

笠塔婆は、板状または柱状の背の高い塔身の上に笠・宝珠をのせた塔形の石塔であるが、大分県の笠塔婆は、類例としてはきわめて少ない。

中でも、特筆するものとして、豊後高田市富貴寺に残されている笠塔婆群（豊後高田市365）が最も古いものとしてあげられよう。ここには仁治2年（1241）・仁治4年（1243）・文永5年（1268）などの紀年銘をもつものをはじめとして、5基の笠塔婆がみられる。笠塔婆には造立者として「広増」の名が刻まれており、このような笠塔婆がここ以外に確認できないことから、単発的に製作され、その製作の系譜は受け継がれなかったことがわかる。

同じ造立者として「広増」の名が刻まれているものとして、別府市美術館に文永6年（1269）銘をもつ笠塔婆（別府市080）がある。これは、豊後高田市蕨陽平から持ち込まれたものと伝えられているが、底部の幅が広い三角状石柱の表面を削平した塔身上に笠を置き、表面上部にハクの梵字種子、その下に大きくキリークの梵字種子を平底彫りにする特徴は、富貴寺に所在する笠塔婆群ときわめて似ており、同じ一群のものとして把握すべきものであろう。

これに続く笠塔婆は、他の石塔群が文永・弘安期に製作の系譜を受け継ぎ数多く確認できるのとは異なり、大分県下ではほとんど確認できない。それは、富貴寺例が、阿弥陀三尊・釈迦三尊などをはじめとして、梵字種子により、仏菩薩をあらわし、供養安置したものであり、同様の機能もつ石塔は、板碑に確認できる。大分県下における板碑は、正応4年（1291）銘をもつ国東市護聖寺板碑（国東市170）が最古のものであり、以後、紀年銘資料は連続して確認できる。最古の紀年銘をもつ護聖寺正応4年銘板碑が山型から額部について別石である特徴から、千々和実が笠塔婆の宝珠・笠が板碑の山型・二条切込み・額部に通じるものであり、大分県の板碑の初期形態について、笠塔婆の形態的系譜上にあると考えたように、笠塔婆と板碑は通じる要素を多くもつ。

豊後高田市富貴寺笠塔婆群に続く笠塔婆としては、南北朝期中葉、由布市庄内町の狭いエリアにおいて貞治3年（1364）銘をもつ由布市香椎荘笠塔婆（由布市010・伝庄内町旧在）・応安元年（1368）銘をもつ由布市庄内町柿原笠塔婆（由布市061）がみられる。この両者には塔身上部に額部状の突出があり、板碑がもつ特徴を受け継いでいる。ただ、これらの系譜も長くは続かず、単発的に終わっている。

一方、臼杵市野津町には南北朝期後葉に一乗妙典一万部塔（臼杵市089・1383年銘）や芝尾笠塔婆（臼杵市091・1394年銘）などが造立されている。この両者は角柱状に整形された塔身の四面上方に梵字種子を刻んだものであり、富貴寺笠塔婆群や由布市庄内町の笠塔婆群の系譜上にあるものではなく、四面観の角柱であることから性格的には角塔婆に似ている。







この系統にある笠塔婆は大永5年（1525）銘をもつ豊後大野市朝地町泉御堂八幡社笠塔婆（豊後大野市166）、永祿7年（1564）銘をもつ豊後大野市三重町神目寺石幢（笠塔婆）（豊後大野市266）、永祿9年（1566）銘をもつ豊後大野市三重町地蔵原石幢（笠塔婆）（豊後大野市273）、永祿13年（1570）銘をもつ豊後大野市三重町植松石幢（笠塔婆）（豊後大野市262）、豊後大野市三重町平野石幢2号（笠塔婆）（豊後大野市284）など、旧大野郡域において戦国期のものが数多く確認できる。これらの笠塔婆は梵字種子が刻まれていても、時代相を反映して細く弱い様相をもつ。また、宝珠や笠についても笠上にひじょうに退化した露盤や火炎宝珠をもつものがみられるのは石幢をはじめとした県南部の石塔の特徴である。

戦国期には、この他の地域においても特徴的な笠塔婆が流行し、元亀元年（1570）銘をもつ日田市上津江村西堆谷笠塔婆（日田市105）には、扁平な方柱石の塔身の正面に月輪をもつ阿弥陀三尊の梵字種子が細く刻まれ、また、元亀2年（1571）銘をもつ九重町寺田逆修塔（九重町028）は扁平な方柱石の塔身の正面に地蔵2体が浮き彫りされており、これらは戦国期の板碑に通じるものであるが、これについては同系統の笠塔婆はきわめて少ない。











南北朝から整形された塔身をもつ笠塔婆に限定されることに比較して、自然石の塔身をもつ笠塔婆がみ

られる。天正11年（1583）銘をもつ九重町慈雲寺跡庚申塔（九重町025）は比較的薄い自然石の塔身の上に整形された笠をもつものである。笠を失ってれば、自然石板碑とも捉えられるものであろうし、そのような類例も存在する可能性は考えられる。大分県下においてはきわめて特異であるが、熊本県においてはひじょうに数多く存在する。慈雲寺跡庚申塔が存在する九重町は、中世、肥後から豊後に抜けるルートとしては最も重要なルートの一つであり、肥後の影響を受けた遺物も少なくない。自然石の塔身をもつ笠塔婆もその一つと考えられ、玖珠郡周辺に存在する自然石板碑には、笠が存在していないかどうか、今後、注意をしておく必要があろう。

このほかに、宇佐市をはじめとして戦国期に笠塔婆が数多く流行する。紀年銘をもつものとして永正10年（1513）銘をもつ宇佐市原岡家墓地笠塔婆（宇佐市388）、天正5年（1577）銘をもつ宇佐市内山墓地笠塔婆（宇佐市137）、天正17年（1589）銘をもつ宇佐市宗顕寺境内墓地笠塔婆（宇佐市042）などがあげられるが、ひじょうに小型であり、塔身に地藏を陽刻する特徴をもつものであり、紀年銘をもたないものに至っては爆発的に流行する。地藏を陽刻する同じ様相をもつ板碑も爆発的に流行し、笠塔婆と板碑の関連性は前述してきたが、上半部が板碑であるか、笠をのせているかの違いに過ぎず、まったく同じ意義のもと造立されているものと考えられる。

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀		 <p>豊後高田市 365 富貴寺 (1269 他)</p>	
14世紀			
15世紀			
16世紀	 <p>宇佐市 388 原岡家墓地 (1513)</p>	 <p>国東市 164 金剛院跡 (1519)</p>	<p>別府市 019 羅門社観音堂</p>
17世紀	 <p>宇佐市 135 神光寺</p>	 <p>国東市 039 河野家墓地</p>	

第178図 笠塔婆変遷図①(縮尺任意)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	日田・玖珠
 <p>由布市 061 柿原 (1368)</p>			 <p>1/80 日田市 048 元大波羅神社 (1350)</p>
	<p>臼杵市 091 芝尾 (1394)</p>		 <p>日田市 094 宮ノ尾</p>
 <p>由布市 025 山本洞屋姫</p>		<p>豊後大野市 284 平野石幢 2号 (亞塔婆)</p>  <p>豊後大野市 104 涼生 (1561)</p> 	 <p>日田市 105 西雑谷 (1570)</p>  <p>九里町 025 慈雲寺陸奥申塔 (1583)</p>
		<p>豊後大野市 262 柳松石幢 (1570)</p>	

第179図 笠塔婆変遷図② (S=1/60)

(1) 層塔

層塔は出現が最も古い石造物の一つであり、また、必ずしも多くない塔種である。もともと、層塔の場合、部材が散逸したり、他の塔種の部材が組まれていることも多く、オリジナルな組合せで残る可能性が低い塔種であるが、そのことを差し引いても、層塔は少なく、これは大分県の特徴ともいえよう。

大分県下に存在する層塔で最も古いとされる層塔は、紀年銘資料では文永2年(1264)銘をもつ臼杵市野津町水地九重塔(臼杵市111)があげられる。二層以上の軸部は笠と一石で作られ高さが低い特徴をもち、初層軸部は背が高く、彫り沈めた舟形内に頭数四仏を半肉彫りしている。これと同様なものが佐伯市上四十三重塔(佐伯市040)であるが、こちらには紀年銘はみられない。各層軸部の高さが低い特徴は、水地九重塔に近似するが、上四十三重塔は、笠と一石で作られた二層以上の軸部の高さが低い特徴をもち、四面とも観音開きの扉の中に如来形坐像を半肉彫りしている。初層の軸部は背が高く、各面、三尊立像を半肉彫りしている。上四十三重塔は水地九重塔と近似する様相も多く、同一工人により、ほぼ同時期に作られたものと考えて差し支えないであろう。

この両者に続く資料として、臼杵市泉入寺九重塔(佐伯市035)があげられよう。屋根や二層以上の軸部、初層軸部の型式等は、水地九重塔や上四十三重塔を継承するものであるが、時期がやや下るものの鎌倉期におさまるものであろう。これに続く型式をもつものとして、正和4年(1315)銘をもつ臼杵市満月寺層塔(臼杵市059)があげられる。満月寺境内には明治初年まで二基の石造層塔がみられたが、1基は、洪水により河岸が崩壊した時、石塔を壊して河岸の修理をし、昭和に至り、その残欠を使用し、現在の石造五重塔を修理したと伝えられているものである。そのため2基の石塔部材により組み合わせられたものであることになるが、各部位の特徴は近似するため、その2基は同時期に同一工人により立てられた同一型式のものである可能性が高い。紀年銘は初層軸部にみられる銘文によるものであるが、この五重塔も水地九重塔や上四十三重塔以来の系譜を受け継ぐものであろうが、水地九重塔や上四十三重塔、加えて泉入寺九重塔に比較すれば、やや型式差が大きい。

いずれにせよ、鎌倉後期に出現する層塔の系譜は臼杵市や佐伯市の県南地域に流行することがわかる。延文5年(1360)銘をもつ大分市楠木生五重塔(大分市254)をはじめ、大分市霊山寺九重塔(大分市239)・大分市堂山五重塔(大分市301)・津久見市世尊寺五重塔(津久見市029)・豊後大野市久部層塔(豊後大野市327)など南北朝期におさまる大分県中南部の層塔群は、上四十三重塔や水地九重塔以来の系譜上にある型式を受け継いでいる。

また、南北朝期中葉以降には、宇佐市緒方家五重塔(宇佐市334)・国東市国東町吉木九重塔(国東市283)・国東市国見町天満社層塔(国東市098)・杵築市天神山三重塔(杵築市208)など大分県北部一帯でも確認できるようになり、県下に広がりをもつようになる。

これに対し、大分県北部の国東半島周辺には、異なる系譜にある層塔が流行する。初層軸部だけでなく、二層以上の軸部も背が高く別石で作られている層塔が鎌倉後半に出現する。この特徴をもつ層塔は、古いものとして宇佐市豊前善光寺に所在する二重塔(宇佐市035)や豊後高田市間戸寺跡二重塔(豊後高田市395)があげられる。この両者は本来、三重以上の層塔であったものの、一部が失われ、二重になったものであるが、笠や軸部の特徴はうかがえ、鎌倉後半にさかのぼるものである。また、杵築市大田田原家五重塔(杵築市326)は、笠の軒部や基礎格状間の型式からこの両者に近い時期の製作であると考えられ、鎌倉後期に国東半島西部において出現したことがうかがえる。

この系統を受け継ぐ層塔は、宇佐市劍星寺層塔(宇佐市351)、臼杵市向山三重石塔(臼杵市007)などをはじめとして、少数ながら南北朝期以降にもみられる。

以上、大分県において定型化した2型式の層塔に加え、特異な型式をもつものが南北朝期以降、県下各地において散発的に出現する。

貞和4年(1348)銘をもつ杵築市山香町西明寺三重塔(杵築市046)は周囲の結界石を含め、きわめて良


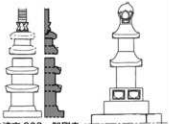







好に保たれている。平成9年、この三重塔の解体修理が行われ、初重軸部から銭貨20数枚と竹筒の容器が発見された事が報告されている。基礎上面の反花座の連弁は2枚重ねの単弁を彫出しており、国東半島周辺ではみない特徴をもつ。笠と二重・三重軸部は、別石ではなく造り出しており、比高も低い。その軸部には、横長長方形の2重枠を浅く平底に彫り込み、二重軸部には中に蓮台を、また、三重軸部には門相を彫り残している。また、露盤にみられる格状間楕様も雲型文様に似た形をもつ。

さらには、相輪下端に輪郭付の3弧2重の馬耳状突起がみられ宝篋印塔笠の隅飾に通じる形態をもつ。この特徴は永徳3年（1383）銘をもつ三社八幡宮宝篋印塔（杵築市196）出現以降、山香町を含めた周辺地域にみられる特徴であり、西明寺三重塔はその嚆矢ともいえる資料である。西明寺三重塔造立以前の国東半島にみられない各部位の諸特徴は、相輪下端宝篋印塔笠の隅飾に通じる馬耳状突起とともに、新たに取り入れられたものであり、その意味では、西明寺三重塔は、国東半島西南部において、新たな石塔型式の画期を生み出した石塔に位置づけられる資料であるが、この型式をもつ層塔は大分県下では他に例をみない。



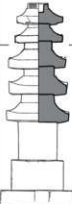






また、文明元年（1469）銘をもつ豊後大野市三重町川辺五重塔（豊後大野市258）は軸部が笠の露盤状を呈し、退化した連子窓を各層刻んでいる。加えて茶壺形で首部のある塔身と宝塔や宝篋印塔に特有の基礎をもち、層塔と宝塔の折衷系の様相をもつ石塔であることがわかる。倒壊して部材が散逸すれば本来の組合せが復元しにくいものの、これについても他に例をみない。

また、日田市専念寺層塔（日田市038）に関しては、背の低い軸部が笠と別石で作られた五重塔であり、何より特徴的なのは笠に隅飾りと上下の段型がみられる宝篋印塔の型式をもつことである。このように宝篋印塔の笠の型式をもつ層塔は関東地方や関西地方において少数例存在するが、大分県においては他に例をみない。

このように、南北朝期以降、県下各地において特異な型式をもつ層塔が単発的に出現し、消滅する。前述した2型式の層塔も戦国期には様々な部位が多様化し、変化していく特徴があるが、相対的に大分県下においては、少数であり信仰的背景も捉えにくい特徴をもつ。

	中津・宇佐	豊後高田・国東	杵築・速見
12世紀			
13世紀			 <p>杵築市 326 田原家 (1339)</p>
14世紀	 <p>中津市 202 智剛寺 宇佐市 035 善光寺</p>	 <p>1/100 国東市 283 吉木</p>	 <p>杵築市 046 西明寺 (1348)</p>
15世紀	 <p>宇佐市 286 白山神社</p>		 <p>杵築市 208 天神山</p>
16世紀	 <p>宇佐市 351 刺星寺</p>	 <p>豊後高田市 046 今倉家</p>  <p>国東市 098 天満社</p>	
17世紀			

第180図 層塔変遷図① (S=1/60)

大分・由布	臼津・佐伯	大野・竹田	日田・玖珠
	 <p>臼津市111 水地 (1267)</p>  <p>佐伯市040 上岡 1/160</p>		
 <p>大分市254 楠木生 (1360)</p>  <p>大分市239 霊山寺</p>	 <p>臼津市059 満月寺 (1315)</p>  <p>津久野市029 世尊寺</p>	 <p>日田市038 尊念寺 (1347)</p>	
	 <p>佐伯市105 果林正明寺(1411)</p>	 <p>豊後大野市258 川辺 (1469)</p>	

第181図 層塔変遷図② (S=1/60)

(2) キリシタン関係石造物

はじめに 発見研究史と分類

大分県内には、県南部を中心にキリシタン時代²¹⁾の石造物が多数残されている。キリシタン石造物はこれまで墓碑として認識されてきたために注目されること少なかったが、十字架を彫刻した碑が含まれている。

大分県内で最初に報告されたキリシタン石造物である昭和8年(1933)年発見の臼杵市野津町、寺小路磨崖十字架碑(伊東1933)がそうである。昭和12年(1937)に発見された竹田市直入町下河原、原の十字架碑を、マリオ・マレガ氏(マレガ1946)やディエゴ・パチェコ氏²²⁾などカトリック聖職にある研究者が早くから十字架碑と指摘していたにもかかわらず、昭和24年(1949)の県指定時にT字形の墓碑と理解され、その評価が研究者の間で改まるのは1980年代まで待たねばならなかった²³⁾。戦後になると昭和23年(1948)の臼杵市檮懐キリシタン墓碑群、昭和31年(1956)佐伯市宇目、重岡のいさ墓碑、昭和32年(1957)の臼杵市野津町、下藤常弥墓碑のキリシタン墓碑の発見が相次ぎ、その後昭和36年(1961)の豊後大野市朝地町、市万田十字架碑、昭和45年(1970)の竹田市直入町、日向塚十字架碑の発見が続いた。当時墓碑と十字架碑の区別はあいまいであった。

墓碑については長い研究史のうえに、立碑と伏碑の大別、伏碑が柱形と板状に分類され、さらに細分された(田中2012)。おなじころ従来の石造物として整形されたキリシタン墓碑とはことなる粗製伏碑が九州に分布することが判明した(神田2012)。しかし墓碑とは異なるキリシタン石造物が全国的な視野にたつて十字架碑と指摘されたのはごく最近の事で、平成24年(2012)の大石久一の研究が嚆矢であった(大石2012)。そこで大石は墓碑と十字架碑を大別し、さらに十字架碑をア)大十字架(クルサード)と、イ)礼拝碑に分け、大十字架は墓地の中央などに墓域全体のシンボルとして建てられた大型の十字架であり、礼拝碑は単独で礼拝用に使用される十字架碑であって、持ち運べるものとそうでないものがあることを示した。

以下まず大分の石造物の固有の特徴に触れ、その後石造物として代表的な墓碑と十字架碑を紹介したい。

1 キリシタン石造物の特徴

表1は平成24(2012)年発行の「日本キリシタン墓碑総覧」の大石久一氏の集計(大石2012)に、それ以後の発見品の数を加えた数値である²⁴⁾。上段2列の墓碑は立碑と伏碑に分け、十字架碑は大石氏の分類に従い下段に基数を示す。まず墓碑をみると数量においては極めて少ないことが指摘でき、しかも伏碑のみである。十字架碑については大十字架碑と考えられる石造物が大分県でのみ3基発見されており、礼拝十字架碑は長崎県の3例に匹敵する数である。このように大分県内には墓碑ではなく十字架碑が多い点の特徴とする。大分県南部で大型品が作成された背景には、加工のしやすい阿蘇溶結凝灰岩の存在と、古墳時代の石製表飾や磨崖石仏など通常なら石製品に置き換わることのない土製品や木製品を石造物で表現する豊後の長

表1 墓碑と十字架碑の県別分布数

キリシタン石造物/ 所在県	長崎県	大分県	熊本県	大阪府	京都府
立碑型墓碑	4基			6基	12基
伏碑型墓碑	142基	4基	14基	3基	8基
粗製伏碑	○	○			
大十字架碑		3基			
礼拝十字架碑	3基	4基			

* 「日本キリシタン墓碑総覧」と丸川義広2016「京都のキリシタン遺跡」「戦国河内キリシタンの世界」批評社をもとに集計。

い伝統が背景にあると推測される。

2 大分県内のキリシタン墓碑

キリシタン墓碑と認定したものは①銘文に洗礼名が記されているもの。②キリシタン墓碑の形式で製作されている石造物。具体的には半円柱状の伏碑ないし板状の伏碑である。このいずれかの条件を満たす石造物である。現状では確実なものは以下の3遺跡4例しかない。このほかに下藤キリシタン墓地の調査によって判明した屋根形石製品（第183図）を含めるが、無銘の粗製伏碑については現在資料取集中であり、一部の成果は特論にゆずる。

A 下藤常塚墓碑（白竹市076、写真1）白竹市野津町大字原字下藤通称山本の下藤共同墓地におかれている。墓碑は昭和32年（1957）安部淑氏によって発見された（半田1958）。発見場所は現在安置されている場所のすぐ東の山中斜面という。発見後一時期、野津キリシタン記念資料館におかれていたが、現在は発見場所のすぐ上の墓地の一角に覆屋が設けられてその中に安置され、白竹市の史跡に指定されている。その後述する十字架碑の頂部片が採掘され、平成23年（2011）以来の発掘調査によって天正7年（1579）に開設されたキリシタン墓地であることが明らかとなった（神田2012、大津2015）。

墓碑本体は硬質の凝灰岩製の半円柱形柱状伏碑で、関西型でもとくに摂津型に分類される（田中2012）が、寸法はどの関西の遺品より大きい。高さは48cm～49cmで、やや中央部が膨らんでいる。幅は51～52cm、奥行き60cm。正面観は方形にアーチをのせたもので、両側面は研磨して平らに整えている。正面の縁には半円状に幅1.5cmほどの断面方形の溝が認められるが、下端にはみえないのでこの溝おそらく逆半円形に巡っていたものと推定される。この特徴は、攝津1号墓碑の正面表現にも通じるものである。正面上部には円形に凹区を彫りくぼめ、豊後では珍しい花十字文を陽刻で彫りだす。十字架表現とその上部にかけては破損がいちじるしく、とくに花十字文は全体に故意に削り取られた状況である。その下に「常塚」（じょうちん）の名を刻む。「じょうちん」はjoachim=ヨアヒムという男性の教名の漢字表記である。その右下にも「生」と小さく刻まれている。さらにその下に何文字かが存在したと見られるがすでに破損して読むことができない。背面上部にも陰刻で十字架を刻んだ葉研削りの痕跡があるが、これも削り取られている。

この墓地に置かれて後、キリスト教弾圧期に十字架表現を削り取るなどの破壊行為がなされ、墓地南の山中斜面に遺棄されていたものと推定される。

B 攝津キリシタン墓碑群（白竹市042、写真2）白竹市大字攝津字西ノ平に所在する国次家の墓地の中に二基のキリシタン墓碑が存在する。石造の柱状伏碑で半円柱形と方柱形に細分される。ともに正面に十字架を刻み、その下部にゴルゴダの丘の表現を持つ。端正な十字架表現で凹みに墨をいれるか銘文がないのが惜しまれる。1号墓は柱状伏碑の墓碑としては国内最大級の大きさである。昭和23年（1948）年6月に1号墓が発見され、さらに2号墓が昭和24年（1949）4月に墓地の背後の茂みを清掃した際に発見されたもので、大分県の史跡に指定され、現在は覆い屋で保護されている（久多羅木1953）。

1号墓碑（図2）覆屋の中央に置かれた半円柱形柱状伏碑で、西九州型に分類される（田中2012）。硬質の凝灰岩を精巧に加工し、端正な印象をあたえる。正面に十字架を陰刻し墨を入れる。高さは正面において49cm中央部で50cmで膨らみはない。幅は66cm、長さ130cm。正面は丁寧に研磨され、背面と側面は幅広い工具痕を残す。正面の縁には幅



写真1 下藤常塚墓碑

2cm、深さ5mmほどの断面方形の溝が半円形に認められるが、下部には突き抜けない。この半円は非常に正確な円なので不思議に思っていたが、十字架表現の基部に円形の小孔があり、ここをコンパスの芯に当たるとすると丁度半径31cmの半円となる。この小孔をつかってコンパスで正面の形と溝を割り付けたものと推定される。中央には山形の台座と十字架が断面箱形の溝によって陰刻されている。山形の台座は幅23cm、高さ15cmで幅2cmの溝で作る。十字架は高さ25cm、幅18cm。この十字架の上下には十字架の軸の幅のラインと並行する2本の割付線刻が突き抜けている。コンパスの芯穴といひ割付線といひ、精巧な技術で作られている。台座と十字架には墨が塗られているが、残念なことに銘は存在しない。

2号墓碑(図3)1号墓碑の右側に置かれた方柱形柱状伏碑の墓碑である(田中2012)。本体は凝灰岩を加工して作り、高さ34cmただし正面は28cmである。幅32cmだが、奥では30cmとやや細くなる。長さは118cmである。正面には半円形の台座が手前に4cm手前に突出し、ゴルゴダの丘を表現している。その奥に1号墓同様に溝で高さ6cm幅10cmの十字架を陰刻する。凹部には墨が塗られている。背面は丸く調整されている。

C 重岡るい墓群(佐伯市152、写真3)佐伯市目町大字重岡字宮園334番地に渡辺家の累代墓地がある。その背後の丘陵上に所在するのがこの石造の扁平形板状伏碑の墓碑である。昭和31年(1956)夏に発見された。この墓は大正年間の初めころ渡辺家の当主が土中深く埋もれていたのを発見したが、そのときは異様な墓のあたりを恐れて再び土で覆ってしまった。それを発見当時の渡辺家の当主由忠氏が幼児の記憶をたどって、キリスタン墓ではないかと考え、再び発掘して当時大分大学教授であった半田康夫氏に連絡したものであるという(半田1957)。現在は大分県史跡に指定され、覆屋をもうけて保存されている。



写真2 撞壊キリスタン墓碑群

墓碑はかなり硬質の凝灰岩を精巧に加工した巨大な板状伏碑の墓碑である。文字のある正面は研磨され、両側面にはチョウナ痕が残り、背面はノミ痕をのこし未調整のままである。上面は工具痕が見え隠れしたまま粗い研磨がなされている。長さ178cm、幅85cm、高さは30cm以上である。上面は緩い曲面をなし、正面に「るいさ」「元和五年」「正月廿二日」の文字を刻む。上面奥に径28.5cmの円形の浅い窪みにハート形を4つ向かい合わせにしたような変形花十字文を刻み、その手前に10×8cm深さ7cmの方形の穴が掘られている。羽柴弘は、その穴にぴったりと入る石材が周囲にあることから十字架を差し込んだ納穴と推定している(羽柴1970)。

凝灰岩は地元の字目では採取できないので、当時当地は竹田に居城を構えた中川家の岡藩領であるから、大野郡あるいは直入郡等で製作されて持ち込まれたと推定される。元和5年(1619年)銘と「るいさ」銘文から見て女性の墓であることは疑いなく、半田康夫は当時岡藩の字目郡剛元役を勤めていた渡辺善衛門重福の妻の墓である可能性を指摘している(半田1957)。板状伏碑としては日本一大きなキリスタン墓である。故意に破壊された痕跡はないので発見の事情から見て、この墓はキリスト教傳布時に渡辺家の人々によって地下に埋めて隠された可能性が高い。

D 下藤屋根形十字架付石造物(第183図・白杵市076、写真4)2012(平成24)年白杵市教育委員会の調査中に発見された、屋根形の石造物である。阿蘇溶結凝灰岩製である。かつて里道整備時に現位置に移動したと推定される。石造物は低い切妻屋根状をなし、上からみると長辺94cm短辺84cmの矩形で、中央に棟の表現があり、罪標十字の陽刻がある方向を正面とすると、正面と背面の屋根側に隆帯を削り出す。それぞれ

幅は9cmと5cmほどである。棟の位置で高さ15cm、両端は12cmほどである。全体に中央のゆるく盛り上がるように削られ、柔らかい丸い印象を与える。屋根の下部はほぼ水平になるが、中央右寄りに径35cm深さ10cmほどの彫り窪めがある。全体の粗いノミ痕にかさねて細かいノミで調整を行っているが、それ以上の平滑化は行っていない。妻部正面にはバランス的にやや太い罪標十字架が陽刻されているが、表面の調整同様やや粗雑な感じをうける。さらに罪標十字架の中央から横木の左側にかけて幅4センチほどがノミで深く削られている。故意に削られたものと推定される。この石造物がなんであるかは、調査の状況からは墓地に因るものという以上の手掛かりはないが、その屋根状の形態と妻部に十字架の表現があるところから見て、本来は正面吹き抜けて側板2枚と背板1枚をめぐらせた上に、屋根材を懸けたと推定する。内面の円形の彫り窪めは内部に置かれたもの、たとえば木製の墓碑などの位置を示すものであろうか。現在のところ石造物としては国内に全く例がなく今後の資料の増加が待たれる。



写真3 重岡のいさ墓碑

以下は私見であるが、この石造物は屋根形である点から、埋葬後に置かれる霊屋を石造りで模倣した可能性がある。大分県の民俗では、霊屋は県南地域では屋根型で、野津ではそれを「天蓋」と呼ばれたという(染矢1986)。当時埋葬後にキリシタン風の木製の霊屋を置く習慣があり、それを石で製作したものが本例と考えられる。本来の意味での墓碑ではないが、ここでは個人に所属する可能性から墓碑に含めておきたい。

3 大分県内のキリシタン十字架架

3-1 大十字架架

キリシタンに改宗した村落を見下ろす位置に信仰の中心として建てられた十字架のことであり、ルイス・フロイスの「日本史」や宣教師の書簡などの史料に頻出する。大分県内で、この大十字架に該当するものは以下の3例である。

E 原の十字架架(竹田市050、写真5) 竹田市直入町大字長湯字原の現在丘陵斜面の平坦部に所在するが、本来は所在する丘陵上の「五十手(ごじゅうて)」墓地に建てられていたと推定され、昭和12年(1937)に発見された(田中

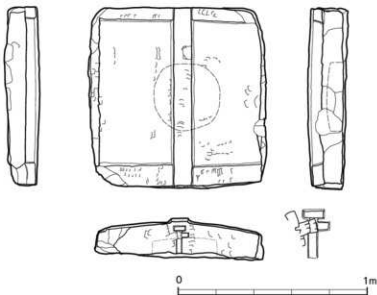


写真4 下藤屋根形十字架架付石造物

2016)。T字形の本体は硬質の凝灰岩を加工した罪標十字架の頭部である。本体の高さは37.5cmとされているが、その下に柵突起が存在するので、横木あるいは縦木にあたる別の部材と接合していたことが、後述する日向塚例から推測される。厚さは12cmである。幅は35cm、基部の幅16.5cm、罪標部の高さは16~17cmと均等ではない。正面に「INRI」の文字を刻む。INRIは「ナザレのイエス、ユダヤの王」(IESUS NAZARENUS REX IUDAEOM)を表現したものである。

F 日向塚十字架架(竹田市059、写真6) 竹田市直入町長湯の温泉街の近くにある独立丘陵中腹の眺めのよい場所に位置する。方形の基壇が造成され、その上に十字架の頭部、竿部、台石の3つの十字架の残片が置

かされている。昭和45年(1970)に発見された(佐藤1971)。T字形の石造十字架の頭部は、原の十字架と同形だが路はなく、原の十字架に比べてやや小型で、下方に柄突起が作られている。T字部の幅は上辺31.5cmで下辺は30cmでやや扁平である。厚さは11.5cmで、軸部の幅は15.5cmである。横幅や厚さは原の十字架頭部とはほぼ等しいが、高さは23~24cmで、罪標部の高さは13cmである。高さは原の十字架より低く、そ



第182図 下藤屋根形十字架付き石造

のため全体に小さい印象を与える。方形の柄突起は幅11cm、高さ5cmである。竿部は大きく上方が尖われ、基部に柄突起がある。幅24cm高さ36cm分が残存している。厚さは15cmで、柄突起は幅18cm、高さ8cm、奥行10cmにつきり、台石にぴったりはまる。台石は3分の1が欠失しているが、幅49cm、高さ16cm、奥行き28cmで、上部に竿部の柄を含む下部が入る柄凹部が二段に削りだされている。本来の形はしりえないが、地下に埋設した台石に竿部をさしこみ、さらにその頭部にT字部を取り付けたものと推定される⁽⁵⁾。

G 下藤墓地十字架頭部(白桦市076、写真7) 下藤キリシタン墓地で採集された石造十字架の頭部である。平成11年(1999)年に採集され、発見場所は「常弥」墓碑の位置するところの雨わずか数mの竹やぶの中であった(長田2003)。やや硬質の凝灰岩を加工してつくられ、幅約30cm奥行き15cmで下部は大きく欠損している。頂部はゆるい半円形の円頭型である。「INR」の文字を刻む面を正面とすると、文字は方形の掘り窪めのなかに葉研形りで刻まれ、ローマ文字の端部を三角形にひろげる書体である。十字架の頭部につけられた罪標を表現したもので、右側面には金槌を上に、釘抜きが下に表現されて、左側面にははしこの表現があり、いずれもキリストの受難具を表現したものである。背面には浅い円形の掘り窪めのなかに削り取られた十字架の陽刻の表現がある。この墓地に置かれて後、キリスト教弾圧期に十字架表現を削り取って打ち割られた後に、遺棄されていたものと推



写真5 原の十字架碑



写真6 日向塚十字架碑

定される。

3-2 礼拝十字架碑

大十字架の周囲あるいは、そういうところから離れた場所に置かれた礼拝用の十字架碑である。後者は十字架碑と十字架碑を結ぶ巡礼の道に置かれたものとも考えられる。

H 寺小路磨崖十字架碑 (白杵市078、写真8)

白杵市野津町大字宮寺寺小路のさらに通称小路と呼ばれる場所の、崖下の岩に刻まれている。昭和8年(1933)に発見された(伊東1933)。磨崖十字架が刻まれている岩の大きさは横270cm、高さ140cm以上、奥行きは100cmほどである。岩の石材の目と背後の岩壁の石理の目の方向の違いから見て、岩壁に彫られていた十字架碑が岩ごと現在の位置に落下してのではなく、すでに原位置に落下していた岩に彫刻したものと考えられる。正面の右半分をノミと研磨で平坦に整え、そこに径62cmの円形の浅い掘り窪めを背景につくり、さらに葉研彫りで円形のラインを強調する。その中央に干十字を浮き彫りし、二段山形の台座すなわちゴルゴダの丘を表現している。十字架の表現としては最も端正なもので、下部の台座表現と十字架表現に段差を刻み、頭部の罪標部と十字架との堺に軸の幅を変えて段を表現する。さらにイエスの手足に打ち込んだ釘を表現した菱形の陰刻が、3箇所に施されている。十字架は高さ42cm、幅36cm、罪標部の幅は14cmである。

ところで十字架表現の上部に当たる岩の上面に方形の溝と2箇所の円形の穿孔が施されている。穿孔は深さ数センチ、その位置はちょうど十字架の円弧の両端の上方にあたる。おそらく穿孔を使って固定する何らかの構造物による覆いが施されていたものと考えられる。岩は現在前のめりに傾いている。本来伏せられていたものを起したものである。十字架の罪標部がかなり破損していることから、罪標部を削り取ったうえで、キリスト教弾圧時に故意に伏せられた

可能性が高い。十字架碑そのものはそれほど大きくはなく、巨大な石の一部に刻まれている。周囲に墓地が作られるのにふさわしい場所ではなく、また大十字架でもない。単独の礼拝十字架碑として建てられたものであり、この場所は白杵方面から下藤に向かう道に面した位置にあったと考えられる。

I 市万田磨崖十字架碑 (写真9) 豊後大野市朝地町大字市万田に所在する。正面に十字架を刻んだ凝灰岩質安山岩である。現在コンクリートの基礎で固定された状態で豊後大野市史跡に指定されている。昭和36年(1961)年に北村清土氏らにより発見された。当時は現在と異なり正面を伏せる形で倒れて放置されていた。その石材を起したところ十字架が発見されたものである。高さ112cm以上幅109cmの方形の石材に加工して、その正面に干十字を浮き彫りし、十字架の基部に国内では類例の少ない波形台座を二重に葉研彫りして、ゴルゴダの丘を表現する。厚さは上端で20cm下部で29cmをはかる。十字架表現の高さは52cm、横幅は35cmを計る。十字架の上半は破損が激しく故意に削り取られた可能性が高い。集落の道のそばである



写真7 下藤墓地十字架碑頭部



写真8 寺小路磨崖十字架碑

が、大十字架碑が建てられるような景観の場所ではない。そういう意味では礼拝碑と考えることもできるが、周囲は江戸時代以後の神社、私堂が建てられた集落の宗教的中心地であり、奉納された十字架碑の可能性も考えられる。

J 西寒田クルスバ十字架碑（臼杵市069、写真10）豊後大野市犬飼町・臼杵市野津町の境界にあたる大字西寒田に所在する。西寒田クルスバ遺跡の頂部平坦面上に、伏せられて背面を露出させていたものである。平成 25年（2013）に発見したものである（田中2014）。高さ66cm幅70cm、厚さ30センチほどの硬質の凝灰岩を用い側面と背面は荒削りの状態で、細かい調整はない。正面はチョウナで平坦に削り出すが、研磨や細かい調整はなく未完成のような印象をあたえる。その正面に罪標十字架が線刻されている。罪標の幅は8cm、その中央から下に伸びる縦木の長さは26.5cm、横木は幅14センチで、罪標から8.5cmの所で交わる。交点から左は8cm、右は6cmと中央ではない。カリワリオは横線11cm、縦線はともに8cmである。表面がやや凹凸があるので一見稚拙に見えるが、薬研の底線は直線で丁寧に彫られている。墓碑であれば正面を平滑な碑面に整えるはずであるが、文字を記す用意をしていないところから見て、十字架碑であり、小型であるところから大十字架碑ではなく、奉納された礼拝十字架碑と考えられる。ただし、中世仏教の五輪等が供養塔として墓の上に置かれたように、キリスト教の十字架の「功德」をもって使者を供養する石造物の可能性を排除するものではない。



写真9 市万田磨崖十字架碑

まとめに代えて

以上がまだ詳細が明らかになっていない粗製伏碑形墓碑を除く、大分県内に現存するキリスト石造物のすべてである。以下に豊後のキリスト石造物の特徴をまとめておきたい。

1 分布について（図12）以上の墓碑と十字架碑からなるキリスト石造物の分布は、かつて大野郡に含まれていた佐伯市字目の1例（重圓のいき墓碑）を除いて、すべて臼杵市と豊後大野市と竹田市に限られる。分布地域が戦国時代にさかのぼれば大友領国の中核ともいふべき「南郡」地域にあたることは言うまでもないが、17世紀初頭に降りると、臼杵藩稲葉家領内と岡藩中川家領内に限られる事実は注目される。史料上キリストが多かったことが判明している、大分郡高田、海部郡大在などの



写真10 西寒田クルスバ十字架碑

熊本藩領や、細川藩領であった由布院などで、キリストン時代の石造物が全く知られていないこととときわめて対照的である。

2 墓碑について 墓碑形式は長崎熊本などの西九州地方のキリストン墓碑の形式と共通する。下藤常珠墓碑と撞懐1号墓碑は半円柱状柱型伏碑、撞懐2号墓碑は方柱形柱状伏碑である。重圓のいき墓碑は扁平板状伏碑である。前者は九州から関西に分布し、後者は九州のみに分布する。いずれも長崎を中心として西九州からの影響と考えられる。しかしいずれも個体としては極めて大型の墓碑であり、そこに大分県のキリストン墓碑の特徴がある。くわえて下藤常珠屋根形十字架付石造物のように、ほかの地域では石で作ることのない木製品を石造化している。これは大分県南部地域が、古墳時代には短甲型埴輪を石人に写し、中世には木

彫像を磨崖石仏に写した凝灰岩地帯の通時代的複製品製作環境によるものであろう。

3 十字架碑について 凝灰岩を利用した石造工芸が盛んな豊後南部で、木造十字架に代えて作られたものであろう。その際、直入郡の朽網地方では立体的な石造十字架（原、日向塚）が用いられているのに対し、大野郡（市万田、寺小路）では平面的な磨崖十字架になるという地域性を持つことは興味深い。模倣の対象となったものが木製の

墓碑

- A 下藤常珍墓碑
- B 榎懐墓碑
- C 重岡るいさ墓碑
- D 下藤屋根形石造物十字架碑
- E 原の十字架碑
- F 日向塚十字架碑
- G 下藤十字架碑
- H 寺小路十字架碑
- I 市万田十字架碑
- J 西寒田十字架碑



第183図 大分県内切支丹石造物分布図

十字架そのものと絵画などの画像という違いに由来するものであろうか。いずれの十字架碑にも罪標が表現されていることが共通している。「INRI」の銘があるものや釘の表現、カルワリヨの表現があるものもあるが、当時の十字架碑には少なくとも罪標十字架の形式的表現が不可欠であったことが知られる。

4 十字架碑の性格原の十字架碑、日向塚十字架碑と下藤遺跡十字架頭部残欠はその所在地の性格と大きさからみて、キリシタン村落の全体を見下ろす位置に作られた大十字架であると考えられる。そのほかの礼拝十字架碑は2種に区別できる。ひとつは大十字架のそばに奉納されたと考えられる西寒田クルスバ十字架碑である。長崎県西海市西彼町平原碑が最も近い類品である。もう一つはキリシタン村落の外の巡礼が通りやすい場所に作られたと考えられる礼拝碑である。寺小路磨崖十字架碑や市万田磨崖十字架碑がこれにあると推定される（田中2016）。

5 石造物の年代（第184図）キリシタン墓碑の年代はいずれも17世紀初頭である。重岡るいさ墓が元和5年（1619）の年代が銘文により判明するが、下藤常珍墓と榎懐1号墓碑はその墓碑型式から1610年前後と推定される。いずれも17世紀に入ってから禁教直前あるいは禁教が本格化する直前の製作である。十字架碑についてはいずれも年代の記載のあるものはないが、以上の十字架碑が所在する場所は江戸時代の臼杵藩と同藩領に限られ、年代の判明する最新のキリシタン墓碑が1619年の重岡るいさ墓を下限と考えられるので、いずれも禁教が実質的に厳しくなる1620年以前のキリシタン布教期の遺物と考えられる。臼杵市野津地区の石造物が下藤墓地が建設される1579年以後のものとして推定される以上に年代のきめてはない。

6 破壊あるいは隠匿の痕跡石造物に見られる破壊の痕跡と発見の経緯をみると、いずれの石造物も故意に破壊あるいは隠された痕跡が明瞭である。寺小路磨崖十字架、市万田磨崖十字架と下藤墓地屋根形十字架付石造物にはあきらかに十字架部分が故意に打ち欠き、削り取られており、寺小路磨崖十字架、市万田磨崖十字架碑は伏し倒されていた状況で発見されている。いずれもこの地域で禁教が強化された1620年ころには破壊されていたものと考えられる。

註1) フランシスコ・ザビエルがカトリックの布教を開始（天文18年1549）した戦国時代の1540年代末から、潜伏していたキリシタンが露見した『豊後崩れ』（万治3年1660）などの弾圧事件がはじまる直前の江戸時代前期1650年代までのほぼ110年間ほどを、寛政師と彼らから指導された俗人信仰組織による組織的なキリスト教と存続した大分県におけるキリシタンの時代と考えている。

註2) 松田毅一1969『キリシタン史実と美術』p110で、十字架頭部説を紹介し、岡氏1975『キリシタン研究第二部論攷編』でパチエ

コ氏の説であること公表している。

註3) 戦前の大分県のキリシタン石造物の研究史については、田中2016を参照。

註4) なお礼拝十字架碑には墓碑あるいは墓碑にかかわる施設の可能性の残る下藤墓地屋根型十字架碑と西寒田クスバ十字架碑を含めている。

註5) 板碑を地上に固定する方法として粘着した台石を埋め込む中世石塔の例としては豊後高田市真ノ田板碑がある。
栗原・原田編2000「真ノ田板碑」大分県文化財調査報告106 大分県教育委員会

(文献)

伊東石仏(東)1933「大野郡野津市村のクルス」『白杵史談』9 白杵史談会

マリオ・マレガ1946「続豊後切支丹史料」(豊後切支丹遺跡の章)ドンボスコ社

久多羅木儀一郎1953「南津留の切支丹墓」『大分県文化財調査報告書』第1集、大分県教育委員会

半田康夫1957「豊後字目村発見の切支丹墓とかくれ切支丹使用の柄説」『大分県文化財調査報告書』第5集
大分県教育委員会

半田康夫1958「新たに発見した豊後キリシタン遺物・遺跡」『大分大学学芸学部研究紀要』7 (人文科学)

羽柴弘1970「埋匿されていた墓石重岡のいさの墓についての考察」『大分県地方史』54・55合併号、大分県地方史研究会

佐藤満洋1971「新発見のT字形墓石について」『キリシタン文化研究会会報』14-1、キリシタン文化研究会

染矢多喜男1986「第3章 儀礼」『大分県史 民俗篇』大分県

長田大輔2003「野津市のキリシタン墓碑とその問題点」『二豊の石造美術』22、大分県石造美術研究会

大石一久編2012「日本キリシタン墓碑総覧」南島原市教委 (のち長崎文献社より出版)

大石一久2012「日本キリシタン墓碑総覧—分析と課題」『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教委

田中裕介2012「日本における16・17世紀キリシタン墓碑の形式と分類」『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教委

神田高士2012「下藤地区共有墓地の発掘調査と16・17世紀のキリシタン墓地」『大分県地方史』214 大分県地方史研究会

田中裕介編2014「キリシタン墓と中国人墓に見る大航海時代の外来墓制に関する基礎的研究」(科研費報告書) 別府大学文学部

大津祐司2015「豊後国大野郡野津院下藤村の村落構造—指導者リアンとキリシタン墓地—」『史料館研究紀要』19 大分県立先哲史料館

田中裕介2016「豊後キリシタン遺跡の研究史・戦前篇」『大分県地方史』227 大分県地方史研究会

田中裕介2016「大分県内のキリシタン十字架碑」『国東市キリシタン墓現況調査報告書』国東市文化遺産活用実行委員会

神田高士編2016「下藤地区キリシタン墓地」白杵市教育委員会

(3) 外来系石造物

大分県は凝灰岩や安山岩の軟質石材が豊富に産出するため、石造物製作が根付き、全国的にみても、卓越した石造物地域となっている。そのため、他県と比較すれば他地域からもたらされた石造物、および他地域の石塔型式の影響を強く受けた石造物は格段に少ない現状にある。しかしながら、それらは少数ながら今回の調査において確認できた。それらは大きく分けて、①大分県に産出しない花崗岩製石塔、②西九州・南九州に特有の屋根(笠)裏に垂木をもつ石塔、③「豊島石」(香川県豊島に産出する火山凝灰岩)を石材とした「ラントウ」④大分県に産出しない砂岩製石塔⑤伊予「白石」製石塔などである。以下では、それぞれについて触れてみたい。

①大分県に産出しない花崗岩製石塔

大分県の沿岸地帯には、花崗岩製石塔が流入しているが⁽¹⁾、周防灘の対岸にあたる周防・長門から玄界灘沿岸など他地域と比較するとその量は少ない。国東市安国寺所在層塔のように明治時代以降に持ち込まれたことが伝えられている類例もみられるが、現在、確認されている花崗岩製石塔は国東市国東町大聖寺墓地宝篋印塔基礎(国東市123)、国東市安岐町實際寺開山堂横層塔笠(国東市374)、大分市光西寺墓地宝塔(大分市073)、大分市大友府内町遺跡5次調査出土五輪塔火輪(大分市067)、大分市佐賀岡浄度寺跡石塔相輪(大分市181)、津久見市保戸島虎御前墓五輪塔火輪・水輪(津久見市060)、佐伯市米水津東林庵五輪塔空風輪・水輪(佐伯市145)、佐伯市米水津迎接庵墓地一石五輪塔(佐伯市144)、佐伯市蒲江楠本浦五輪塔火輪(佐伯市149)などが確認されている。

これらは国東半島以南の豊後水道・別府湾に面した沿岸部に分布する傾向があり、海を介してもたらされたことは明らかである。これらの石塔がどの地域からもたらされたかは、明確に言及できないが、花崗岩が関西地方から瀬戸内海にきわめて多く分布する石材であり、石材分布域に花崗岩製石塔が分布することに加えて、花崗岩製石塔が西日本各地に運ばれていることから、大分県の花崗岩製石塔も海運の結果、もたらされたものである。比較的の乏しい大分県佐賀岡から佐伯市にかけての地域だけでなく、国東市国東町大聖寺墓地、国東市安岐町實際寺、大分市光西寺墓地、大分市大友府内町遺跡など大分県北中部にも存在する。これらの類例に関しては、石塔が容易に手に入る地域にあり、国東市安岐町實際寺は国東半島における重要な臨濟宗寺院であり、大分市は大友氏が関係する交易の拠点となる良港に恵まれた地域であり、大分県の北中部ではあえて、花崗岩の優位性にこだわった様子がかがえよう。

②西九州・南九州に特有の屋根(笠)裏に垂木をもつ石塔

九州には屋根裏に垂木を彫出する石塔が少なくない。これらの分布をみると西九州や南九州の凝灰岩地帯の石塔に多くみられる特徴がある。凝灰岩という軟質石材ゆえ、細かい彫削が可能であり、垂木も飛檐垂木や地垂木に加え、隅垂木と軒桁の接点には木鼻と考えられる方形の突出などもみられる。

大分県下にはこのように屋根裏に垂木がみられる石造物はほとんどみられず、屋根裏に1段の板垂木とされるものがみられるのみである。筋垂木に関しては、別府市をはじめ、旧速見郡域に少数例存在するが、この地域の垂木は形態化した様相をもち西九州や南九州に流行するものとは異なる。紀年銘資料として元亨2年(1322)銘をもつ別府市御藏権現宝塔(別府市014)のように鎌倉時代後期には出現しているが、この石塔自体、各部位の特徴が異質であり、この石塔系譜は大分県下に根付いた一地域色であると理解すべきであろう。

しかし、大分県南部の沿岸部にはきわめて細かい垂木が彫出された石塔が流行し、臼杵市泊ヶ内(臼杵市068)、佐伯市弥生尺間観音庵、佐伯市弥生堤内天神脇(佐伯市033)、佐伯市弥生八坂寺(佐伯市036)、佐伯市鶴見常光庵(佐伯市056)、佐伯市鶴見常照庵(佐伯市061・第186図3)、佐伯市鶴見西生庵墓地(佐伯市073・第186図2)、佐伯市蒲江浦追(佐伯市157・第186図1・4・5・6・7)などにおいて確認できる。

いずれも組合せが確実な資料はみられないが、部材が五輪塔火輪や宝篋印塔笠、宝塔笠などであることからわかる。宝塔笠の下面に筋垂木を彫出するのは理解できるが、宝篋印塔笠や五輪塔火輪に筋垂木を彫出するのは違和感がある。一般的に宝篋印塔笠には、笠裏に段型が存在するが、佐伯市弥生町尺間観音庵には筋垂木を

彫出する資料が、少なくとも7基分みられる。現在は5基にまとめられて組まれており、各部材の規模等からそのセット関係は危ういものと考えられ、塔身に在銘のものが4点存在し、内2点が天授3年(1377)銘、内2点が文中2年(1373)銘、また、1点が建徳元年(1370)銘をそれぞれもつため、これらの一群の各部材は型的にみても齟齬はなく、1370年代頃に製作されたものと考えて差し支えないものと思える。同じ様相をもつ宝篋印塔は佐伯市弥生町堤内天神廟(佐伯市033)にも存在し、佐伯市の一部の地域に独特な様相をもつ宝篋印塔が南北朝期の後半から室町期に流行したことがわかる。

また、五輪塔火輪に垂木が彫出されるのも違和感があるが、佐伯市鶴見常光庵五輪塔笠や佐伯市蒲江浦迫五輪塔笠には確実に「ラ」の四方門の梵字種子が刻まれているため、五輪塔火輪に間違いはない。しかしながら、佐伯市蒲江浦迫五輪塔群には五輪塔の部材しか確認できないが、その中に相輪の破片がみられるうえ、五輪塔水輪には宝塔特有の首部がみられる。これらのことから浦迫五輪塔群の五輪塔は純粋に五輪塔の形態を保っているものではなく、五輪塔と宝塔の折衷形態をもつものであったことが想定できる。折衷形態の中で火輪にみられる垂木は宝塔の要素が取り入れられたものと考えられる。佐伯市蒲江浦迫五輪塔群にみられる相輪の破片には下端の連弁に猪ノ目模様がみられ、これについても大分県には確認できない西九州・南九州特有のものである。このように五輪塔火輪の要素をもちながら宝塔の折衷形態をもつ要素は、臼杵市泊ヶ内五輪塔にみられる五輪塔頂部に薄く一段の露盤を設けていることにも確認できるが、泊ヶ内五輪塔は戦国期のものと考えられ、大分県下の戦国期の五輪塔をみても五輪塔と宝塔の折衷形態はごく普通に確認できる。

これらの石塔群の帰属時期は、宝篋印塔では前述したように紀年銘資料として尺間観音庵宝篋印塔の建徳元年(1370)銘以降に確認できるが、五輪塔に関しても紀年銘がみられないもの南北朝期後半のものにはじまると考えられる。宝篋印塔と五輪塔が同一工人の作であるかどうかに関しては、明確に言及できないが、宝篋印塔が短期間で終わることに対して、五輪塔は下限が戦国期まで下り、また、分布範囲にしても宝篋印塔が佐伯市弥生の狭い範囲に限定されることに比較して、五輪塔は臼杵市以南の沿岸部に広く分布する特徴をもつ。

③「豊島石」を石材とした「ラントウ」

「ラントウ」とは、家型の屋根をもち、屋根下には側壁・奥壁の扁平石に加え、前面には観音開きの扉石をもつ石殿型の石造物である。正面の扉や両側面には蓮華文が浮き彫りされ、奥壁内面には五輪塔・石仏・位牌などを浮彫りしている。香川県豊島に産出する火山礫凝灰岩である「豊島石」を石材とし、近世初期から近世中期まで主に製作されている。その分布は香川県豊島をはきむ瀬戸内に面した岡山県・香川県をはじめとして、瀬戸内沿岸部の遠隔地まで運ばれている。

大分県下では、別府市吉弘統幸墓(別府市057)・大分市佐賀岡錦江寺墓地ラントウ(大分市178)・大分市佐賀岡地蔵寺墓地ラントウ(大分市179)・佐伯市米水津田鶴音石殿187・佐伯市蒲江黒木家石殿(佐伯市147・第187図8)・佐伯市蒲江西野浦集落No2墓地ラントウ(佐伯市170)・佐伯市蒲江楠木浦石殿(佐伯市168・第187図9)・佐伯市蒲江長光寺墓地ラントウ(佐伯市166)などにみられる。中でも、残りが最もよい黒木家石殿は、背の高く照りの強い寄棟造りの屋根の下面に垂木を表現している。また、側壁外面に蓮華模様を薄く陽刻し、奥壁内面に五輪塔を薄く陽刻し、前面には観音開きの扉の納穴がみられるが、現在は破損し取り外され、扉部材の破片がラントウの横に置かれている。総高1.8mを測り、大分県下に所在するラントウの中では、最大級を誇る(第187図8)。また、楠木浦石殿は同規模同型式のものが2基、並置されているが、1号板碑を図化した(第187図9)。基本的に黒木家石殿に近似するが、奥壁内面には2基の板碑形を薄く陽刻している。板碑形の表面には刻字されている痕跡がみとれるが、摩滅が著しく判読できない。

ラントウはいずれも江戸時代前期のものであるが、現在に継承される墓地中にあり、江戸時代の規模の大きな花崗岩製墓碑とともにみられる傾向があることから、各地域の富裕層の墓碑として取り入れられたことがわかる。

④大分県に産出しない砂岩製石塔

大分県下で製作された石塔には、前述した花崗岩とともに、石材として砂岩が使用されることはない。よって、砂岩製石塔は他所から持ち込まれていることになるが、沿岸部において少数例、確認されている。その類例として、大分市佐賀岡錦江寺墓地一石五輪塔（大分市178）、大分市佐賀岡地蔵寺墓地一石五輪塔（大分市179）、大分市佐賀岡古宮一石五輪塔（佐伯市176）、佐伯市米水津潮月禅寺一石五輪塔（佐伯市070）などが確認されているが、砂岩製石塔がいずれも小型の一石五輪塔であるため、このほかに持ち込まれているにしても、現状で確認できないものも多いと考えられる。

西日本における砂岩製一石五輪塔は、大阪の泉南淡輪付近に産する和泉砂岩製のものが多く確認され、近畿圏だけでなく広域に運ばれている。大分県下における砂岩製一石五輪塔の産地については言及できないが、海



写真1 錦江寺墓地ラントウ・一石五輪塔



写真2 地蔵寺墓地ラントウ・一石五輪塔

を介して持ち運ばれたことは疑いの余地がなく、中でも、大分市佐賀岡錦江寺墓地一石五輪塔、大分市佐賀岡地蔵寺墓地一石五輪塔のあり方は示唆的である。この2例については、一石五輪塔が前述した豊島石を石材としたラントウ内に納められている。両者ともラントウが風化により、ほぼ倒壊しているが、3基ずつの砂岩製一石五輪塔が納められていることが確認できる。前述したように、ラントウが香川県豊島からもたらされたことがわかるため、一石五輪塔とともにセットで持ち込まれたものである可能性が考えられる。

⑤伊予「白石」製石塔

愛媛県松山市や伊予市には粉砕された花崗岩粒を含む黄灰色をした凝灰岩を石材とした石塔が分布する。一般的に伊予の「白石」と呼ばれる石であるが、伊予の白石を石材とした石塔は愛媛県だけではなく、瀬戸内海全域に分布している。この伊予の白石を石材とした戦国期のものと考えられる五輪塔部材は大分県下では別府市野口原五輪塔群（別府市071）中に確認できる²⁰。伊予の白石を詳細に観察すれば、在地の凝灰岩との違いは明確であるが、花崗岩や砂岩に比較すれば、一見して判別がつかない。伊予白石製石塔は豊後水道を挟み、対岸の在地石塔であるゆえ、今後、その確認数は確実に増えるものと想定される。

以上、外来系石造物について、整理して紹介した。西九州・南九州に特有の屋根（笠）裏に垂木をもつ石塔については、他所から持ち込まれたものではなく、その影響を強く受け、在地で製作された可能形が強いものと考えられるが、その他のものはいずれも海を介して持ち運ばれたものであることは疑いの余地がない。明治時代以降に持ち込まれたことが伝えられている国東市安国寺所在層塔のような類例もみられるが、ほぼ、中世～江戸時代前期に持ち込まれたものであろう。その時期をみると、花崗岩製石塔が南北朝期後半以降に、また、砂岩製石塔が戦国～江戸時代前期に、豊島石製ラントウが江戸時代前期、伊予白石製石塔が戦国期にそれぞれ持ち込まれたものと考えられる。

また、分布をみると、いずれも沿岸部にみられ、中でも、大分市佐賀岡や佐伯市の沿岸部に濃密な分布が確認できる。これらの地域には近隣地に石材産出地が存在せず、そのため石塔の残存数も極めて少ない。数が少

ない在地石塔の供給を補うものでもあるが、この地域にはリアス式海岸ゆえの自然の良港が存在し、海運隆盛のひとつの産物として評価すべきであろう。

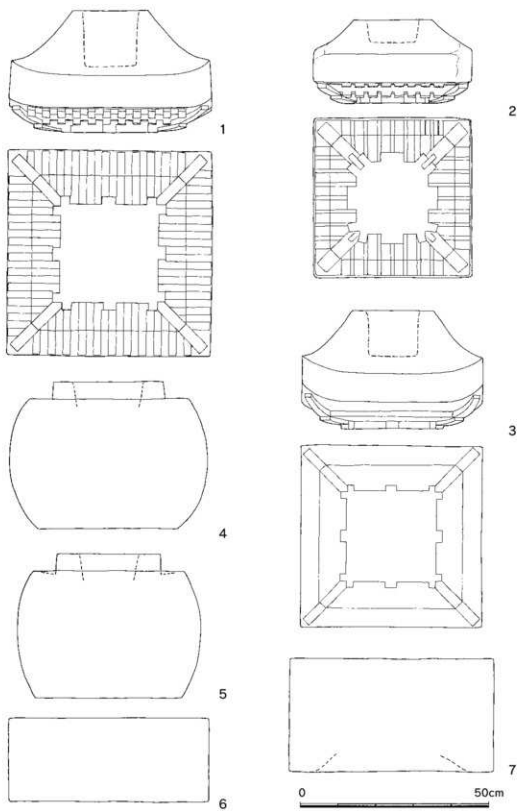
豊後水道を挟んで対岸の四国には、阿蘇溶結凝灰岩製石塔が搬出されており²⁾、また、中世史を紐解いても四国との交流の足跡は数多く確認できる。伊予の白石を石材とした石塔のように人的交流のもとでもたらされたと考えられる石塔もあれば、汎西日本の範囲で海運に伴い運ばれた石塔も存在する。石のもつ性格上、重量物であり、海運のバラストとしての機能に適しているため、御影石製石塔や和泉砂岩製石塔のように、広域に分布する石塔は、海運ルートによって遠隔地に運ばれたものと考えられ、遠隔地の香川県豊島のラントウもこの類に含めるべきであろう。花崗岩や砂岩を石材とした石塔の明確な産地が確実に特定できないが、将来、それぞれの石材産地の同定が可能となれば、交流の足跡がより明確になるであろう。

〈参考文献〉

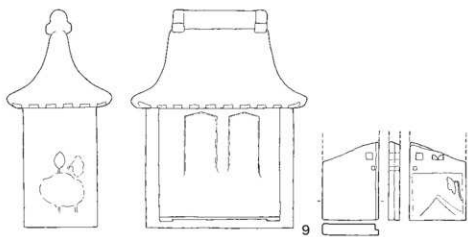
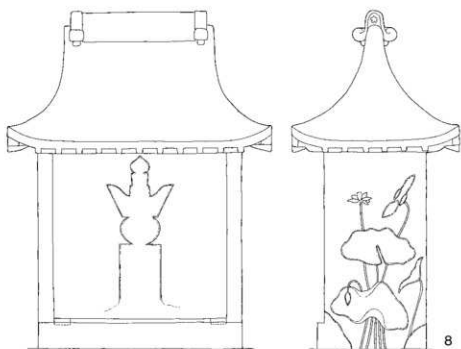
- (1) 原田昭一・江藤和幸2011「豊前・豊後における搬入された中世の花崗岩製石塔」『御影石製中世石造物の分布調査とその学際的研究』
- (2) 黒川信義2011「伊予の白石で造られた石造物」『石造物が語る中世の佐田岬半島—運び込まれた各地の石材—』岩田書院
- (3) 黒川信義・原田昭一2009「海を渡った石造物—愛媛県西予市神谷神社所在宝塔の紹介を通して—」『石造文化研究』第28巻 おおいた石造文化研究会
原田昭一2011「大分県から来た石造物」『石造物が語る中世の佐田岬半島—運び込まれた各地の石材—』岩田書院



第185図 大分県における外来系石造物の分布



第186图 外来系石造物实测图(1)



0 1m

第187图 外来系石造物实测图(2)

第4章 特論

第1節 中世における五輪塔造立の展開 一大分県的事例を中心に

菊地 大樹

はじめに

1990年代初頭、時代ははまだバブル経済に躍り、都市部では再開発がさかんに行われていた。その動きに連動してか、農村部では圃場整備事業が推進され、大分県においても多くの歴史的景観が過去のものとなった。そういった中でも、中世の荘園景観を記録等の方法により保存してゆこうとする運動が市民や研究者・文化財担当者間に広がり、大分県では宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）によって荘園遺跡調査が進められる。現在は豊後高田市に属する豊後国田楽荘の故地が、2010年に重要文化的景観に選定されるにいたったのは、その成果の一つといいたいだろう。

さて、そのような中世荘園の文化的景観は、様々な耕地や水路、城跡などの遺跡、寺院・仏像・墓地など様々な要素から構成される。その一つ一つに注目し、有機的・総合的に関連づけてゆくことから、豊かな荘園景観が復元されてゆくのだが、大分県の場合は特に、石造物が大きく地域を特徴づける文化財であるといえよう。今回の大分県教育庁埋蔵文化財センターによる県内石造物の悉皆調査事業は、このような地域の特徴を具体的かつ網羅的に調査し、あわせて保存・活用を図ってゆくうえで不可欠のものであり、意義深いものとなった。ここではその調査に参加した過程で得た若干の知見を示し、今後の石造文化財の利活用に資したいと考える。具体的には特に、「五輪塔」に注目する。五輪塔は、平安時代後期から中世を通じて江戸時代まで造立され、もっとも日本列島に広く流布している塔形である。特にその表面に刻まれる「種子」という要素を分析することから、中世の人々の信心のあり方に近づくことも可能であろう。

1. 五輪塔研究の諸前提

1.1 石塔の種類と構成要素

まず、図1を示す。

この図から、五輪塔が密集している状態がよく分かるであろう。この図は、国東市国東町大聖寺跡の石塔群（国東市123）であるが、この他にも県内のいたるところに、石塔の集



図1 国東市国東町大聖寺跡五輪塔群

中している場所がある。聖地や霊場が一つの宗教的求心力を発揮して人々の信心を吸い寄せ、おびただしい数の石塔を造立せしめたのである。

なかでも、しばしばこれらの石塔集中心地点を特徴づけているのが、中世におびただしく造立された五輪塔である。五輪塔とは石塔の一種である。五輪は五大とも言い、古代インドにおいて世界を構成すると考えられた地・水・火・風・空を指している。これらにそれぞれ、立方体・球・四角錐（後述のようにまれに三角錐）・半月・宝珠の形を与え、積み重ねて塔形に仕立てたのが五輪塔である。大分県では、五輪塔を「イグリンサン」と呼んで信心している地域もあり、民俗的にも生活に密着した宗教的表象として長く親しまれてきたと言えよう。なお、この他にも石塔には様々な種別がある。たとえば石材を縦に板状に整形し、その表



図2-1 佐伯市上岡十三重塔



図2-2 杵築市材前墓地国東塔

面に本尊や銘文を彫りつけた板碑がある。また、四角形の基壇の上に立方体の塔身を積み、さらに隅飾や相輪を伴う屋根を載せた宝篋印塔もある。そして、大分県でも国東半島にのみ分布すると言われる宝塔の一種である国東塔も石塔であり、十三重塔のような、大型でバランスのとれた作りの石塔もある(図2)。

先述の国見町旧大型寺跡や同千燈寺跡(国東市077)など、もともと寺院があった場所には、五輪塔をはじめとする石塔が累々と残されている。このような点において、「石造物王国」とも言うべき大分県であるが、何万点という石塔の中でもかなりのパーセンテージを五輪塔が占めていることが、今回の調査でも改めて確認された。従って、五輪塔を分析することで、大分における石塔遺立の意味を考えてゆく手がかりが得られるであろう。

全国に分布する五輪塔に目を転じてみると、最も典型的なサンプルの一つとして、神奈川県鎌倉市極楽寺にある忍性の墓所に造立された五輪塔を挙げることができる。この他にも典型となる五輪塔はいくつかあり、これらは基準作として特に重視されている。忍性五輪塔は、高さ335cmとかなり大型のものだが、これらのサンプルと国東半島の五輪塔を比較すると、後者はもう少し小振りのものが多い。中には数十cm程度の小型の五輪塔もある。

このような五輪塔を歴史資料として研究する場合に、どのような形態的特徴があるか、どういう場所に建っているか、つまり景観の中に位置づけてみるなど、いろいろな方法があるだろう。それは五輪塔が持つ様々な特徴や性格が豊かであることを示しているが、それらの特徴の一つとして、表面に彫られた銘文に注目することができる。大分県における石造五輪塔の銘文は、おびただしい数が知られている。たとえば、大分市後藤碩田墓地の五輪塔を取り上げてみると、その地輪には玄善が逆修のために、正平13年(1358)にこれを建てたという趣旨の銘文が刻まれている。逆修とは、生きているうちに死後の自分の引を済ませてしまうことで、現代で言えば生前葬のようなものである。このように、五輪塔の銘文から供養の趣旨が追善であるとか逆修であると読み取ることによって、当時の人々の信心のあり方に迫る方法もある。あるいは別の五輪塔でみると、永徳2年(1559)10月7日に、吉弘一盛という人のための供養をした、この人物は38歳で、肥後姫隈の陣で亡くなった、という趣旨のことが刻まれている(豊後大野市153・犬飼石仏五輪塔)。五輪塔の銘文は、こうした歴史上の人物がいつ、どうして亡くなったかを知ることができる貴重な歴史資料である。

1.2 五輪塔供養の背景と種子（梵字）

しかしながら、本稿ではあえてこうした銘文ではなく、それらとは性格の異なる別の文字的要素に注目したい。それは「種子」であり、梵字とか悉曇と言われることもある。サンスクリット語に起源を持つ文字の一種で、この一字一音あるいはその組み合わせが特定の仏菩薩等を象徴している。

先述のように、五輪塔は「地・水・火・風・空」という5つのパートから成っており、それらが結合することで、宇宙そのものを象徴している。それゆえに五輪塔は、密教の最高尊である大日如来の象徴とも見られてきた。密教が流行・発展してゆくとともに、日本独自の石造物として五輪塔が定着していく。その過程で、中世の人々の間には、五輪塔を大日如来と一体化した尊格であるとする上述のような見方が一般的となっていく。

さらに密教では、大日如来と人間が一体化することによって、即身成佛を目指す。つまり大日如来と、それを象徴する五輪塔、そして自分が一体となった姿を究極の理想とするのである。のちに詳しく見るように、五輪塔が舍利容器あるいは舍利を理納した上に建てられる墓上標識（墓石）として流布してゆく背景には、上述のような思想にもとづいて、被供養者の成仏を願う人々の信心があったのであり、五輪塔は舍利信仰とも密接な関係を持ってゆくことになる。

そのようなわけで、五輪塔には大日如来や宇宙の一体化を象徴する種子が刻まれるようになる。よく知られているように、密教には胎藏界と金剛界という二つの世界観が形成された。それぞれが壮大な仏の宇宙を象徴し、その中核には五仏と言われる五体の主尊が配置されている。このような世界観を背景に、五輪塔にも五仏の種子が刻まれるようになり、さらに進んで、「キャ・カ・ラ・バ・ア」という五輪塔に特有の種子も現れてくる。これは少しずつバリエーションを持っていて、たとえば「キャー・カー・ラー・パー・アー」「ケン・カン・ラン・パン・アン」「キャク・カク・ラク・バク・アク」と四種類に変化していく。それらは五輪塔の四方の表面に、空=キャ、風=カ、火=ラ、水=バ、地=アあるいはその変化した種子として配された。この種子の組み合わせは大日如来を象徴する真言でもあり、またこれを五輪（五大）種子ともいう。

1.3 五輪塔出現の背景

次に、こうした密教の教理を前提として、その中からどのように五輪塔が現れてきたのかを考えてみたい。先述のように、五輪塔は中国を経て日本に伝来した密教の中から生み出されてきた。一般に密教においては、ある主尊や象徴を意味づけ、儀礼を行うための作法書として、儀軌が作られる。五輪塔の場合は、『大日経（疏）』悉地出現品あるいは『尊勝仏頂修瑜伽法儀軌』といった密教系の經典や注釈書・儀軌に五輪塔についての記述が見えるので、すでに観念的には早い時期から五輪（五大）思想が成立していたことが分かる。ただし今のところ、中国には直接それに当たる作例が見出せないで、三次元的な形象としては、日本列島の中で独自に成立・展開していったものと考えられる。その時期について、従来は12世紀頃に五輪塔が石塔として出現してくると考えられていたが、石塔ではないにしても、五輪塔は9世紀頃にはすでに造立されていたかも知れないと考えられるようになってきている。遅くとも



図3 奈良市伴臺重源五輪塔



図4-1 白柵市中尾五輪塔
嘉応2 (1170)・7・23銘



図4-2 白柵市中尾五輪塔
承安2 (1172)・8・15銘

11世紀には、白河天皇の中宮藤原賢子の遺骨を五輪塔の中に入れて葬ったという記録があり、五輪塔の起源は12世紀よりもっと遡るのではないかとされている。

ところで一般的に、五輪塔は四方から礼拝するようにできている。ところが一方で、三角五輪塔と言われるものがあり、その火輪は四角錐ではなく三角錐になっている(図3)。現存事例としては比較的珍しい形であるが、内藤栄氏によれば、初期の五輪塔はむしろ三角形が基本だったのではないかという。賢子の墓から江戸時代に出土した五輪塔については図が残されており、それは三角五輪塔であった可能性が高い。現在滋賀県胡宮神社に伝わっている三角五輪塔は、東大寺を鎌倉時代初期に復興した俊乗房重源によって寄進されたものであるが、重源はもともと醍醐寺僧なので、恐らく三角五輪塔をめぐる知識を共有していて、火輪が三角形の特徴的な五輪塔を造っていったのではないかと推察される。

これに対して、後に一般的になってくる五輪塔の基本形は、「地・水・火・風・空」の五つのパートに対して、先述のようにそれぞれ「キャ・カ・ラ・バ・ア」という種子およびそのバリエーションが配されている。これに五輪塔の四方が、発心・修行・菩提・涅槃の四門であるなどの解釈が施され、「ケン・カン・ラン・パン・アン」などと、一面ずつ変化してゆくように造形されているのである。

2.石造五輪塔の出現

2.1 大分県の五輪塔はどのように出現したのか

以上のような五輪塔をめぐる当時の歴史知識を前提に、次に具体的に大分県内の五輪塔について検討してゆきたい。白柵市中尾には、よく知られた初期型の五輪塔がある(白柵市047、図4)。これはひとつが嘉応2年(1170)、もうひとつが承安2年(1172)に建てられたことが銘文から分かる。形態的な特徴としては、典型的な五輪塔は地・水・火・風空の四つの部材から成るのに対し、中尾五輪塔は全ての部位を一石で造り出している(一石五輪塔)ことが注目される。中尾にあるもうひとつ別の無銘の五輪塔もまた一石であり、造立時期はだいたい同じではないかと思われる。

この他に、国東市国東町浜崎の不動院跡にも、同じように一石から作り出された五輪塔群(国東市153)が存在する。これは「祖形五輪塔」と呼ばれているが、果たしてこれが起源となって後の五輪塔に続いてい

くのか、逆にある時期の五輪塔が退化してこのような形になったのか、つまり五輪塔造立の一番初期に位置づけられるのか、それともむしろ後期に位置づけられるのか、この五輪塔群には全く銘がないので断定できない。ただし、白杵の初期型一石五輪塔と比較すると、形態的特徴が似ていることは確かである。

ちなみに、岩手県平泉町の中尊寺にはやはり初期の五輪塔があり、これは承安4年(1169)という紀年銘がある。まさに白杵中尾の五輪塔とほとんど同じ時期に、ひとつは九州で、もうひとつは奥州で石造五輪塔が出現していたわけである。平泉の五輪塔は、形態的には白杵の五輪塔とかなり異なるものの、両者がほとんど同じ時期に列島の東西の周縁に現われてきている以上、ここには何らかの関連があると考えるのが自然であろう。たとえば、豊後国白杵荘は摂関家領であり、もう一方の平泉を拠点とした奥州藤原氏もまた摂関家と密接な関係にあったことが知られている。このような関係を背景に、間接的にせよ五輪塔を造る文化が、畿内を中心として豊後国や陸奥国に流布していったと考えられるかと思う。



図5 国東市国東町中妙吉寺跡一石五輪塔

2.2 五輪塔における初期の種子

次に、この中尾五輪塔の種子について考えてみたい。図5は、国東市国東町妙吉寺跡の一石五輪塔(国東市038)である。無銘だが、一石五輪塔としては比較的早い時期に造られたものと考えてもよいのではないかと思う。注目したいのは、石塔に書かれている種子で、中尾五輪塔にせよ妙吉寺跡五輪塔にせよ、そこに刻まれる種子は五輪(五大)種子ではない。たとえば中尾五輪塔でいえば、胎藏界の五仏(アーンク・ア・アー・アン・アク)と大日の三身真言(法身=ア・パン・ラン・カン・ケン/報身=ア・ビ・ラ・ウン・ケン/応身=ア・ラ・ハ・シャ・ノウ)、つまり「キャ・カ・ラ・バ・ア」ではない。別の種子とか真言のセットが初期五輪塔には多く見られるのである。最近出版された『日本石造物辞典』によれば、大日三身真言を刻む五輪塔の事例は稀有であり注目に値する、という。しかもそれは、初期五輪塔に多い。

そこで、最初のうちは五輪塔の四方に対して試行錯誤的にいろいろな種子のセットを当てはめていく中で、最終的に「キャ・カ・ラ・バ・ア」に収斂していくのではないかとの見通しを立



図6 別府市野田羽室御霊神社五輪塔群

てることができないだろうか。先ほど示した妙吉寺跡五輪塔にしても、五輪(五大)種子ではなく、金剛界五仏(パン・ウン・タラク・キリク・アク)と大日三身真言の組合せである。図6は、別府市野田羽室御霊神社、龍門氏墓地の五輪塔群(別府市025)である。これも金剛界五仏と大日三身真言、あるいは金剛

界四仏（水輪の四方にウン・タラク・キリーク・アク）を刻んでいる。こうした「キャ・カ・ラ・バ・ア」以外の種子の組合せを、初期五輪塔の特徴と考えてみると、かつて望月友善が、図6のような事例を「大体鎌倉末期頃に多く、他の時代には見られない」特徴ではないかと指摘したことには、若干の再検討が必要ではあろう。

2.3 五輪塔四方四仏の成立

先述のように、五輪塔発生初期に位置づけられる可能性のある三角五輪塔は、側面が三方なのに対して、後の五輪塔は四方から礼拝する形に発展していく。すると、当初は大日三身真言を三方に刻むのが適当であったが、四方の五輪塔が一般的になっていったため、各面にどのような種子の組み合わせを彫るか、いろいろ試行錯誤したであろう。そのような中で、五輪塔が四面の塔形として定着していくとともに、四つの種子からなる真言あるいは四つの真言の組み合わせが定着していくのではないかと考えられる。そのような動向に適合的な種子・真言として選ばれたのが、「キャ・カ・ラ・バ・ア」という五輪（五大）種子に他ならない。

つまり、われわれは一般的に、まず権威のある経典やその注釈書、儀軌などによって思想や儀礼が完成し、それらをおぼえマニュアルとして、さらに具体的に種々の造形や創作が行なわれていったと考えがちである。しかし五輪塔については、まず権威ある教理があつてそれが徐々に下降しながら社会に受容され、実践されていくのではなく、逆に文獻的にはあまりはっきり説かれていなかった造形として、在地において発展してゆく中で、それにふさわしい教理があつたから成立してくると考えるのがむしろ実態に即していると思われる。つまり、五輪塔が四方から礼拝する形式の塔形として定着していくに従つて、その四面にふさわしい種子・真言を考えるという方向性が見えてくるのである。当時の仏教は、決して上から下に向かって固定した教理を押しつけた訳ではなく、もっと民衆的なレベルで形成されてきた教理や思想が、上部の考え方を変えてしまう場合もあることを示す好例ではないかと思う。

3. 五輪塔造立の盛行と種子の展開

3.1 様々な種子のバリエーション

先述のような経緯を経て五輪塔が石塔として確立してくると、またそこから、さらに新しいバリエーションが生まれてくる。たとえば白杵市野津町八里合備後尾一石五輪塔（白杵市101）は、弘安8年（1285）に造立されたものなので、13世紀後半、先ほどの中尾五輪塔よりはだいぶ下の作例であるが、それでも一石五輪塔である。しかし一方で、その四面には、五輪（五大）種子が刻まれている。つまりこの場合、紀年銘のある基準作を指標にしてあまり厳密な編年をすることにはそれほど意味がなく、だいたい12世紀からゆるやかに四面の塔形と五輪（五大）種子の組み合わせが現われ、13世紀後半になって五輪（五大）種子を刻む方向に取組んでいくのだろうと考えられる。

もっと時代が下つて文安3年（1446）頃に造られたものに、白杵市久木小野磨崖群碑（白杵市008）がある。ここには十三仏とか不動明王種子、マンダラ石があるが、それに混つて卒塔婆のレリーフがあつて、その表面には「キャ・カ・ラ・バ・ア」が刻まれている。本稿では、「キャ・カ・ラ・バ・ア」は五輪塔の成



図7 宇佐市安心院町最明寺五輪塔

立とともに定着した種子と見てきたが、それが今度はさらに違った塔形のものにも転用されていくわけである。つまり、五輪塔とその他の石塔の間の境界が曖昧になり、種類は違っても塔形として一括して考えられるようになって、こうした交流が進んでゆくのであろう。

3.2 種子を荘厳する円相の意味

こうした五輪塔の発展を、さらに種子にこだわって見た場合、種子そのものではなく種子を装飾（荘厳）する要素にも注目したいと思う。五輪塔の場合には、種子に円相が施されることが多い。元来、密教の観想においては、種子の周りに円相が描かれるイメージを持つことが一般的である。そこで、種子の周りを円相が荘厳しているパターンを、大分県内の五輪塔の中から探してみよう。たとえば宇佐市安心院町最明寺の五輪塔（宇佐市262）は、正元元年（1259）の紀年路を持つが、鎌倉時代の五輪塔についていろいろな手掛かりを与えてくれる重要な基準作である（図7）。この五輪塔に施されたのは五輪（五大）種子であるが、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の各種子を円相で囲っている。このように、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の種子を荘厳する例は、いくつかある。大分市小野鶴にある西光寺の五輪塔（大分市055）もまた、県内の円相を持つ五輪塔の基準作となると考えられるが、これには正応五年（1292）の銘がある。

このような円相について、望月友善は「だいたい鎌倉期に大友一族ゆかりの所にあつて、伝承ではあるが有力者の墓に比定されているものが多い」という。望月の説には一応同意できるものの、ここでは政治史や身分制とは違う観点からもこの問題を考えてみよう。そもそも五輪（五大）種子は、「キャ・カ・ラ・バ・ア」が一つの組み合わせとして一体化していることに元来の意味がある。ところが先述の13世紀の二つの基準作をよく観察してみると、「キャ・カ・ラ・バ・ア」のそれぞれ個別の種子に対して円相を施し、荘厳しようとする意識が垣間見られるのではないか。ここには、五輪（五大）種子が元来持っていた宗教的な教理体系が、時代とともに変化してゆく様相が表れているのである。

たとえば豊後大野市長畑にある、正平11年（1356）年の路を持つ小切畑の五輪塔（豊後大野市049）は「キャ・カ・ラ・バ・ア」ではなく、水輪の四方に金剛界の四仏の種子（ウン・タラク・キリク・アク）を刻んでいる（図8）。こうした金剛界四仏種子を刻む例は、宝篋印塔にも多くある。豊後大野市吐師川面墓地の例に見られるように、南北朝期の作で宝篋印塔の塔身の四方に金剛界四仏を刻むことはよく行われる。このような石塔における種子の変化の様相を総合的に考えてみると、元来宝篋印塔に一般的であった



図8 豊後大野市長畑小切畑五輪塔



図9 豊後大野市表五輪塔

種子が五輪塔に流れこんできたり、一体と認識されていた種子のセットが崩れていったり、そうした種々の交流が起きていることが予想される。

図9は豊後大野市の表五輪塔（豊後大野市048）であるが、南北朝期の正平23年（1368）に造られている。水輪の種子に着目してみると、ひとつは「アク」、そして別の二つにはそれぞれ「ウーン」、「タラク」と、金剛界四仏をさらに分解したかのように別個に種子が配当されている。つまりこれらの種子からは、複数の種子を一つの真言として定型的な組み合わせでとらえていた段階から、バラバラにひとつひとつの種子を本尊とみていく方向に人々の信心がソフトした様相を読み取ることができる。その動向に従って、ひとつひとつの種子を荘厳するための円相を作ろうという発想が生まれてきたのではないか。図10は白杵市深田の満月寺五重塔（白杵市059）で、石塔の四方におそらく金



図10 白杵市深田満月寺五重塔



図11-1 水輪に種子バク（大日如来）



図11-2 水輪に種子バイ（薬師如来）



図11-3 水輪にサ（観音菩薩）



図11-4 水輪に力（地藏菩薩）

剛界四仏と思われる、「ウン」や「タラク」が、円相を伴って彫られている。こうした種々の石塔と五輪塔の種別間の交流があって、ますます種子の荘嚴が進んでいくのだろう。

図11は杵築市生桑寺五輪塔群（杵築市201）だが、水輪に「バク」とか「バイ」など様々な種子が彫ってあって、もはや種子の組み合わせという考え方がまったく読み取れなくなっている。おそらく比較的ポピュラーな種子のうちの任意のひとつを選んで彫っているのであろう。

3.3 大友氏と五輪塔

最後に、大友氏と五輪塔の関係についても少しふれておきたい。なぜなら、大分県内の初期の五輪塔の流布を考える上で、関東から西遷してきた大友氏が在地の文化にどのように接触していったのかを知ることがポイントになると考えられるからである。たとえば、豊後大野市大野町の常忠寺には大友能直の五輪塔（豊後大野市031）、大分市常楽寺には大友頼泰の五輪塔（大分市087）と伝えられる供養塔があり、この他にも大友氏関係というと由布市扶間町の扶間氏墓地（由布市105）などが知られている。伝大友能直五輪塔は、四方に金剛界五仏（バン・ウン・タラク・キリク・アク）と大日三身真言が配されている。これは、本稿で考察してきたことを踏まえれば、初期五輪塔の種子の系譜を引いていると考えられる。それが伝大友頼泰五輪塔の段階になると、五輪（五大）種子になり、さらに円相を伴っている。このように、大友氏歴代の供養塔と言われている五輪塔は、はっきりとは言えないけれども、だいたい大分県内における五輪塔一般と、種子の展開が一致している。そうすると大友氏は、突然新しい五輪塔の形式とか種子とか、新しい荘嚴の仕方を中央から持ち込みながら入部するのではなく、在地の五輪塔そのものの地獄的な展開を吸収しながら、豊後において領主として定着していくのかと思われる。

おわりに

本稿では五輪塔に即しながら、本調査における成果を踏まえてあらためて県内の作例を通観し、特に種子の変遷に注目しながら編年的な見通しを述べてきた。本稿でも見てきたように、五輪塔の四方に刻み付けられる種子は、緩やかにではあれ時期に即して様々なバリエーションを看取することができる。その画期をあえておおまかに予想すれば、それは南北朝期であろう。中世石塔にとって、南北朝期は全国的に大きな画期になる。五輪（五大）種子のセットが崩れていく時期、あるいは円相が荘嚴として一般化してくる時期、さらに五輪塔が他の塔形と交流しながら新しい展開を示す時期、そういう種々の点を細かく検討してゆくことで、より正確な五輪塔の編年と変遷の意味を見出すことができそうである。やはり南北朝期は、石造物から見た場合でも、仏教とか身体、死をめぐる列島の人々の心性の重要な転換点となった時期であるという見直しを、最後に述べておきたい。

- (1) 海老澤真・服部英雄・飯沼賢司編「重要文化的景観への道」勉誠出版、2012年。
- (2) 石造物の種別を詳しく解説したものは多くあるが、全国的な傾向を知る上では、日本石造物辞典編集委員会編「日本石造物辞典」（吉川弘文館、2012年）が最新の成果である。また、大分県教育庁埋蔵文化財センター編「大分の石造物～中世編～」(〈豊の国考古学ライブラリー2〉、同センター、2016年)は、大分県の石造物に関する簡にして要を得た解説である。
- (3) 以上は、内藤栄「舍利荘嚴美術の研究」（青史出版、2010年）参照。
- (4) 内藤前掲書。
- (5) 日本石造物辞典編集委員会編「日本石造物辞典」、吉川弘文館、2012年。
- (6) 望月友善「大分の石造美術」木耳社、1975年
- (7) 菊地大樹「日本中世における宗教的教訓言説の成立と流布」『歴史学研究』932、2015年
- (8) 望月前掲書。

はじめに

石塔には様々な種類・塔形がある。それぞれを源流に遡ってゆくといずれもがインドの釈迦の墓塔＝ストゥーパに行き着く。表面装飾を除くなら、ストゥーパは基礎・半球形塔身・傘蓋(相輪)の三部分構成が基本である。ストゥーパをさらに遡ると、遺体・遺骨を埋めた単なる土壇頭に行き着くだろう。だから塔、特に仏塔は本来、塔身だけでその機能を十全に果たすべき物であるが、尊いものである故に、幾重にも荘厳が重ねられてきたのである。塔身以外の相輪・露盤・屋蓋・基礎等すべて荘嚴の結果である。その荘嚴のあり方＝理念の違いによって様々な塔に分化してきたのである。

塔の上部荘嚴では水煙から露盤間の装飾の重層化、特に九輪部傘蓋の多重化は見やすい所といえる。塔身下部の荘嚴としては、基礎・基壇などが重層化をよく示す。塔身は尊いものであるから直接地上に置かれるのではなく、高きに置かれ祀られる。その機能を果たしたのが基礎・基壇である。さらに上下に施された荘嚴部は、付加された荘嚴部分を含めてが塔と見做されるようになり、その度ごとに基礎の下にさらに基礎・基壇を重ね、それが幾重にも重ねられてきた。現在の塔形は、荘嚴の重層結果に他ならない。

本稿では各種荘嚴の内、塔の下部に配された基壇・階等の塔を高位置に置くための構築物を中心に、大分の石塔におけるその展開のあり方と、その背景にある石塔に対する視点・視線の問題について考える。そのことを通じて、塔が如何なる存在として捉えられてきたかの一面が見えてくると思われるからである。

1. 宝篋印塔に見る荘嚴重層の展開

塔における荘嚴付加の具体的な展開としては宝篋印塔の場合が解り易く、先ずその重層化の展開を見ておこう。宝篋印塔は一般的には相輪→蓋→塔身→基礎の四材構成である。塔の構成要素の有り様を上から順に確認する。相輪部はさらに水煙(石塔の場合水煙を有する事例は少ない。)・宝珠・請花座、九輪、請花座があり、その下に反花座があるものもある。そして伏鉢だが、伏鉢下に反花座が配される場合もある。普通、蓋部(屋根)最上部が露盤だが、相輪部分と一体で作られているものも多い。

相輪部と蓋部との分別は伏鉢下にあるのが普通だが、伏鉢が蓋の最上段につく事例も少数ながらみられる。蓋の最上層階に格状間の配される事例もあり、その場合、そこが壇であることが明確に意識されている。そして壇の所も含めて相輪として一石で造るものもみられる。

蓋の最も特徴的な所は、軒部の上下四隅に載る隅飾(方立とも称す)と軒の上下に配される階状整形である。蓋部は宝篋印塔全体の中で宝篋印塔らしさを最も表現している箇所といえる。蓋は普通は一石形成だが、上階の途中に切れ目があって二石構成になるものや、さらに下の階が別石作で三石構成のもの。さらには隅飾を別石にする場合もある。軒の下部は普通、階になるが、請花座を配する場合もある。

その下が塔身。塔身には月輪が入るものや輪郭の入るものなど細部を見ると、様々なタイプがある。

その下が基礎で、普通は上階も含めて一石で作られるが、古い大型の物では、階部分を別石にする事例も見られる。大型故に石材の都合もあって、別材にした可能性もあるが、やはり、そこで切つてもよいとの意識があったとすべきで、以下の部分とは機能的に違っていたとすべきであろう。古い事例では上に階の配される物が多く、室町期以降になると反花座になるものが増える傾向がうかがえる。

基礎の下の部分は全体として壇上横基壇の表現と見てよい。上が礎石、下が地覆石で、間に束石・羽目石の表現が入る。そして羽目石の部分に格状間が配される場合もある。そして格状間は基礎・基壇である事の記号的性格を有している。以上が宝篋印塔の基本的構成といえる。

宝篋印塔形全体の有する意味を合いを考える上で、先ず注目すべきは請花座、格状間など同形部位の重なりである。相輪の上部にある請花は上の宝珠を受ける台座であり、下の請花座も同様にそれ以上の全体を受



図1 法隆寺四天王持物塔



図2 京都・高山寺宝篋印塔



図3 奈良・観音院宝篋印塔



図4 奈良・円福寺宝篋印塔



図5 東大寺石獅子



図6 チベット・晋蘭石経塔

ける台座であることは明瞭である。露盤の部分はさらに注目される。露盤には格状間の配される場合もあり、格状間の配置は基礎の部分にもみられる。台座である事を主張する装飾が同一塔内に重なっている事になる。

さてこの露盤部分への格状間の配置は、この部分が台座的役割を有する事の装飾的・記号表現である。格状間の本来の構造的機能は台座プレ防止の補強部材なのである。格状間を有する露盤はその直上の伏鉢の台座なのである。伏鉢はインドのストゥーパの塔身に当たる部分が小型化したもので、相輪部全体としての仏塔の最下段に格状間を配した台座があるという構造なのである。

次に露盤の下の（蓋の上部）階段には、二つの意味が重なっていると思われる。一つは宝篋印塔全体で建築物であり、屋根の四隅にある隅飾り（方立）は屋根である事の記号であるから、全体として屋根の傾斜を表現しているといえる。傾斜ならば、直線的に傾斜させて作ればよいのだが、傾斜の階段状表現には中国や

朝鮮の石塔からの影響を考えるべきであろう。中国の磚や石磚で作った塔は磚を斜めに設置すると磚は滑り落ち易くなるので、平坦に重ねて積み上げると必然的に階段状にならざるを得ない。その場合、階段を斜面の表現と一応は言えるが、問題は中国の(石製)宝篋印塔にはそのような斜面が無く、屋根の上に直接相輪がのっていることである。その場合、今一つ別の役割を考える必要がある。露盤を受け、さらに高く見せるための階段としての役割である。おそらく蓋の上階は屋根の斜面であると共に、露盤下のさらなる台座としての二つの役割・意味が重なっている。次は軒下部の階は何かという問題である。宝篋印塔全体の視点で見ると、建築物の屋根とそれを支える持ち送りの部分と言うことで一応はよいだろう。朝鮮の石塔でも軒下部の同様表現は見られるので、一応はそれでよいといえる。図1は法隆寺四天王の持っている塔である。図2は京都高山寺の塔である。これらを見ると、塔身直下の階は塔身を受ける台座である事は明瞭である。しかしそれだけではやはり問題がある。この問題解決に示唆を与えるのは奈良の観音院宝篋印塔図3と円福寺宝篋印塔図4で、いずれも軒下に請花座が配されている。この上下の連台は塔身を扶んで一対の関係にあることは明瞭である。その場合この塔身を扶んだ上下の階も一対の関係で考える必要があるだろう。そうすると蓋の下階は屋根を支える持ち送りというわけにはいなくなる。塔身状の箱形を扶んで蓮華座が上下向かい合う形で配される物として須弥壇がある。須弥壇の場合、上下が連台となるものもあり、階段になるものもある。

図5は東大寺の石獅子だが、この返り花座と請け花坐に扶まれたところを塔身に読み替えて見ると、宝篋印塔の塔身部分そのものといえる。図6はチベットの塔だが隅飾を付けたと宝篋印塔のものになる。この塔の塔身は宝篋印塔の蓋の様なものの上にある丸い部分で、伏鉢が大きくなった物で、その下の階段部分は台座なのである。そして須弥壇の部分も、宝篋印塔では塔身に読み替えられているのである。

ただ、これは形の上での源流の話で、日本における展開ではないといえる。宝篋印塔は今述べた様に、露盤以下の各部が塔全体としてみたときの各部の役割と、各部が本来有していた台座の性格とを複合して有しており、それらが積み重なってできあがってきた塔なのである。

2. 宝篋印塔形の源流

しかし宝篋印塔を全体として見るとき、一番大事なのはやはり塔身の部分である。図7は中国の銭弘假塔だが、日本の宝篋印塔とは様相がかなり異なる。塔身には柱とアーチの表現があり、四隅には猛禽類の鳥(カルラ)がいて四方を睨みつけて塔を守護している。アーチと柱の部分を見ると建築物そのものといえる。図8は中国・福建省泉州・洛陽橋南辺に建つ石塔である。伏鉢から上は亡失するが、先の銭弘假塔形を石に移したものと見える。これは下にさらに台座が付加されており、そこには台座を支える力士像が配されている。この時点で上の台座までが塔全体と認識されており、さらにそれを支える台が付加されたのである。図9は廈門・梅山寺塔で、軒先中央には鬼面が配され四方を睨みつけている。この外反する軒先部分は新しい泉州・開元寺塔などになると文字が入り、中国的に変化している。

軒先の外反形は宝篋印塔の源流を考える上で重要である。図10は韓国の統一新羅時代初期寺院・松林寺塔内発見の舍利容器である。これは韓国の物であり、宝篋印塔よりもさらに古い遺品であり直接の系譜関係は云々出来ないが、中国の建築物の系譜を引くものであることは明瞭であり、中国にあつたであろう同様遺品の系譜を引くもので、中国の宝篋印塔もその系譜上に展開するのである。松林寺舍利塔でさらに注目すべきは隅飾である。同様裝飾が隅だけでなく、中央とその中間にも付けられている。さらに天蓋が二重になっていて、上段にも隅飾がつく。同様事例は韓国慶州・感恩寺塔内発見の舍利容器にも見られる。これも天蓋軒先の外反と二重天蓋で、隅飾も隅だけでなく多数連っている。この様なものが中国の宝篋印塔の当初の屋根部の原形と考えられる。図11の法隆寺金堂の天蓋や橘夫人の念持仏の厨子も韓国舍利容器と同構造といえる。これも須弥壇を塔身に置きかえたと宝篋印塔的になる。

大分の石塔の中には相輪下の露盤に隅飾を配したものがあるが、これは天蓋の上段と共通した性格を有す



图7 中国·钱弘俶塔



图8 中国·洛阳桥南边石塔



图9 中国·厦门梅山寺塔



图10 韩国·松林寺舍利容器



图11 法隆寺金堂天蓋



图12 隋·虞弘墓石棺彫刻



图13 中国·龙门石窟结摩诃像



图14 摺印梵字宝篋印塔



图15 中国·天中万寿塔

ると考える。

中国の宝篋印塔の塔身四面にはジャータカが表現されており、受容初期には西方風というカインド風を意識したモチーフが採用されているが、泉州・開元寺塔の表現に見られる様に人物の服装が中国化するように次第に中国的に変化してゆく。中国風解釈が進む中で蓋から下部分全体の理解も変化してゆく。本来、仏伝図などは塔の下部に連続配置されていたものであるが、本来の脇役が次第に主体変化していったのである。舍利から仏像へ転換と同じ変化で、同様変化は常に繰り返されることであるが、宝篋印塔ではこの時、台座が塔身へと変身するのである。

そしてこの塔身の形は中国の「床」に読み替えられたのである。床とは「床前観月光」の床で、中国ではこくありふれた家具と言える。四柱で支えられた天蓋が附属し、周囲に帳が垂下し、床の下部には台座があり、台座には格狭間が表現されている。図12は隋の唐弘墓石棺の彫刻だが、表現が少し西域風といえ、もう少し中国的なものとしては龍門石窟の中の維摩詰像（図13）が挙げられる。維摩は俗人であり、普段坐っている床の中にあるところが表現されている。宝篋印塔塔身部分のある種費人が坐している床に読み替えているのである。図14は刷り物の宝篋印塔だが、蓋が二段に表現されており、床の天蓋形をよく残している。宝篋印塔は各時代、各地域の様々な要素を取り込み、読み替えられて、その姿を変化させてきたと言える。

重層化の果てに中国の天中万寿塔（図15）のようになる。これは山の上に立っているのが遠望できる程の大型塔である。普通の宝篋印塔の下に壇が付き、さらに下に脚台を付けてひとつの台にしている。さらに同じものが重なり、その下に現代のものだが石垣状のものが付き、それがさらに幅の広い大きな石垣で作った台の上に乗っている。宝篋印塔は最終的にはこういう形になってゆく。

ただ注意しないといけないのは、蓋上に載る伏鉢と相輪部分はこの自体で塔としての意義があるのだが、宝篋印塔の場合、塔としての伏鉢・相輪を乗せ、上に上げるため次々と台を重ねて行ったというのではなく、あくまでも塔身部分を中心で、この石造設備が塔である事を示すための記号として相輪部分が乗せられているということである。

宝篋印塔はどんどん大きくなっていくというか、いろいろな要素が附加され大きく高くなる性格をその成立当初から、他の塔以上に強く持っていると言える。近世の宝篋印塔はその様な性格がさらに発展した形で展開する。

3. 格狭間の機能

格狭間はいわゆる文様ではない、文様化したとき、それは本来持っていた構造的役割を失っており、文様の配された物が台座・基壇である事を単に示す記号となっている。本来の格狭間とは台座・基壇さらには机状物の脚補強の爲に天板と脚の取り付く両部分の補強のために取り付けられた線形材の造り出す空間の形であって、格狭間を構成する実体は周辺部にある。

補強材部位に刻まれる形にはいくつかのタイプがあり、石田茂作は①合掌式・②連弧式・③肘木式・④葉状尾式・⑤交混式の五タイプに分類し、その番号順の変化の相を示している。石田の示す①～③の形の源流は中国の仏像台座などに見られる牙床に有り、そのイメージは床・机類の脚間の上辺に下げられた垂幕の裏にあると考える。④の葉状式は柱の柱頭を飾ったアカンサスなどの植物の葉がイメージされており、両者の原イメージは全く異なり、その間に連続した形の変化を見ることは出来ない。格狭間の形の問題は補強部分の形を如何に見立てたかにある。石田の示す③の図は肘木とは云えないが、肘木式と名付くべきものは存在するといつてよい。

建築物の基壇側面の羽目石に格狭間の配される事はあるが、その場合羽目石自体が補強材の力学的役割を果たしている。そして羽目石の役割はそれだけで無く、基壇内部に突き固められている土の保持が主たる役割と言える。だから建築物の基壇格狭間は本来格狭間の不要場所に配されている事になる。故に、格狭間はもう少し小振サイズの工芸品的な構造的な台に発したと考えられる。その様な遺品として、床・礼盤・厨

大分県石造物基礎遺跡角度一覧表(1)

名称	地名番番号	所在	時代区分	時代記号	時代	西暦年	延滅角度
金高墓地国東塔	豊後高田市 422	豊後高田市平野大曲	2-2	○	南北朝	1375	40
西原・宝塔	宇佐市 292	宇佐市安心院町山藏西原	2-2	○	南北朝		40
富貴寺国東塔	豊後高田市 365	豊後高田市路	1-3	◆	鎌倉		43
西中尾・三社八幡宮宝篋印塔	杵築市 196	杵築市山香町西中尾	2-3	○	南北朝	1373	43
小谷観音堂国東塔	杵築市 045	杵築市山香町内河内	2-3	○	南北朝	1372	46
宝命寺国東塔	国東市 391	国東市武蔵町小城	2-2	○	南北朝		48
石丸国東塔	杵築市 338	杵築市大田石丸	1-3	◆	鎌倉	1330	49
奈良博公舎国東塔		奈良市奈良国立博物館	1-3	◆	鎌倉末		50
薬師堂国東塔	豊後高田市 413	豊後高田市奥中城山	3-3	△	室町		50
万福寺国東塔	国東市 036	国東市国見町藤海	2-4	○	南北朝		51
許波多社国東塔	国東市 030	国東市国見町西方寺・許波多社	3-	△	室町		51
下時枝・善光寺方形宝塔	宇佐市 035	宇佐市下時枝	2-2	○	南北朝		53
仁園国東塔	国東市 076	国東市国見町千穂千燈寺	2-2	○	南北朝		55
藤城寺宝塔	豊後大野市 281	豊後大野市三重町内山	2-3	○	南北朝	1375	55
許波多社宝篋印塔	国東市 032	国東市国見町西方寺・許波多社	3-	△	室町		55
財前家墓地国東塔	杵築市 260	杵築市大田小野田原河内	1-3	◆	鎌倉	1321	56
米浦宝篋印塔	国東市 118	国東市国東町米浦	2-	○	南北朝		56
原国東塔	杵築市 027	杵築市山香町山浦	2-1	○	南北朝	1333	56
下中尾・地藏堂宝篋印塔	杵築市 050	杵築市山香町下中尾	3-1	△	室町	1383	57
羽室・御雲神社五輪塔	別府市 025	別府市野田羽室	1-3	◆	鎌倉		58
白砂村莊国東塔		京都市左京区	1-3	◆	鎌倉		58
坂本五重層塔	杵築市 326	杵築市大田書掛	2-3	○	南北朝		58
密伝寺国東塔	杵築市 239	杵築市年田	2-3	○	南北朝		58
石堂宝篋印塔	国東市 051	国東市国見町野田	3-	△	室町		59
長本家墓地国東塔	国東市 132	国東市国東町堅来	1-3	◆	鎌倉	1323	60
芦屋市山本家国東塔No.2		兵庫県芦屋市東山町	1-3	◆	鎌倉		60
神宮寺層塔	国東市 179	国東市国東町橋手	2-	○	南北朝		60
下弘坊国東塔	国東市 069	国東市国見町千穂千燈寺	2-1	○	南北朝		60
下時枝・善光寺五輪塔	宇佐市 035	宇佐市下時枝	2-1	○	南北朝		60
岩宮八幡宮	杵築市 297	杵築市大田水松	2-2	○	南北朝		60
塔の木・宝塔	宇佐市 348	宇佐市安心院町鳥越	2-2	○	南北朝		60
下川久保地藏堂国東塔	日出町 036	速見郡日出町赤松下川久保	2-3	○	南北朝	1378	60
千穂寺国東塔	国東市 069	国東市国見町千燈寺	2-3	○	南北朝		60
岩戸寺国東塔	国東市 081	国東市国東町岩戸寺1232	1-	◆	鎌倉		61
别宮社国東塔	国東市 007	国見町伊美	1-2	◆	鎌倉		61
法教寺跡国東塔	国東市 069	国見町千燈寺	1-3	◆	鎌倉		61
十三重層塔	佐伯市 040	佐伯市上岡	1-3	◆	鎌倉		61
三社神社宝篋印塔	豊後高田市 179	豊後高田市真玉町西弘	2-3	○	南北朝		61
密伝寺宝篋印塔	杵築市 239	杵築市年田	2-3	○	南北朝		61
薬師堂宝篋印塔	国東市 040	国東市安岐町諸田	3-1	△	室町		61
天満社七重塔	国東市 098	国東市国見町岐部	1-2	◆	鎌倉		62
藤成就寺国東塔	日出町 035	速見郡日出町	1-3	◆	鎌倉	1311	62
西明寺三重層塔	杵築市 046	杵築市山香町内河内辻小野	2-1	○	南北朝	1348	62
泉福寺跡国東塔	杵築市 029	杵築市山香町山浦	2-2	○	南北朝	1352	62
塔の木・国東塔	杵築市 047	杵築市山香町貫井	2-3	○	南北朝	1384	62
長本家宝塔(国東塔)	国東市 132	国東市国東町東堅来字鳴	1-	◆	鎌倉		62.5
吉本九重石塔	国東市 283	国東市国東町大字北江	1-	◆	鎌倉		63
照恩寺国東塔	国東市 386	国東市武蔵町三井寺	1-3	◆	鎌倉	1316	63
両子寺宝塔	国東市 156	国東市安岐町両子山	1-4	◆	鎌倉		63
神宮寺国東塔	国東市 179	国東市国東町橋手	2-1	○	南北朝	1336	63
寺ノ下国東塔	国東市 063	国東市国見町野田	2-2	○	南北朝	1352	63
川面墓地宝篋印塔	豊後大野市 047	豊後大野市大野町土師	2-2	○	南北朝	1346	63
龜達寺国東塔	杵築市 346	杵築市大田波多方	2-3	○	南北朝	1376	63
踏宝篋印塔	国東市 064	国東市国見町藤来	2-3	○	南北朝		63.5
万福寺裏庭宝塔	国東市 036	国東市国見町藤海	3-	△	室町		63.5
三柱神社宝篋印塔	杵築市 350	杵築市大田笠口	2-3	○	南北朝		64
中山寺墓地宝篋印塔		兵庫県宝塚市中山寺	2-3	○	南北朝		64

大分県石造物基礎遺減角度一覧表(2)

名称	地名番番号	所在	時代区分	時代記号	時代	西暦年	遺減角度
長安寺国東塔	豊後高田市 323	豊後高田市加礼川屋山	1-3	◆	鎌倉		65
芦屋山由本家国東塔No. 1		兵庫県芦屋市東山町	2-1	○	南北朝	1337	65
真覚寺国東塔	国東市 063	国見町千艘	2-2	○	南北朝		65
常光寺宝篋印塔(向右)	国東市 100	国見町小熊毛常光寺	2-2	○	南北朝		65
白池地蔵・宝篋印塔	別府市 037	別府市鉄輪白池地蔵	2-2	○	南北朝		65
重木・国東塔	杵築市 051	杵築市山香町日指	2-3	○	南北朝	1375	65
西行戻し宝篋印塔	国東市 074	国見町千艘	2-4	○	南北朝		65
下川久保地蔵堂宝篋印塔	日出町 036	速見郡日出町赤松下川久保	3-1	△	室町	1390	65
波瀬瀬不動三尊塔権仏前五輪塔	豊後大野市 153	大野郡大野町田原波瀬瀬	3-1	△	室町	1382	65
熊野墓地国東塔	豊後高田市 422	豊後高田市平野	2-2	○	南北朝	1375	66
慈雲寺国東塔	国東市 006	国見町伊美	2-3	○	南北朝		66
西行戻し上宝篋印塔	国東市 074	国見町千艘	3-	△	室町		66
杉原地蔵堂宝篋印塔	大分市 301	大分市杉原	3-1	△	室町		66
新庄国東塔	杵築市 231	杵築市日野	2-3	○	南北朝		67
吉武家宝篋印塔	国東市 081	国東町岩戸寺	3-	△	室町		67
杉原地蔵堂五重層塔	大分市 301	大分市杉原	3-1	△	室町		67
東京都・根津美術館国東塔		東京都・根津美術館/速見郡日指	2-3	○	南北朝	1344	68
国東国東塔	杵築市 096	杵築市山香町今畑中尾	1-3	◆	鎌倉		68
神宮寺国東塔	国東市 179	国東市国東町横手	2-	○	南北朝		68
安部秀別宅国東塔	杵築市 239	杵築市年田	2-3	○	南北朝		68
穴井彰通氏宅宝篋印塔	玖珠町 032	玖珠郡玖珠町岩室阪口	2-3	○	南北朝	1374	68
松尾・才田宝塔	豊後大野市 304	豊後大野市三重町松尾高田	2-3	○	南北朝	1373	68
川辺宝塔	豊後大野市 259	豊後大野市三重町川辺	3-1	△	室町	1393	68
岩戸寺宝篋印塔	国東市 081	国東市国東町岩戸寺	3m	△	室町		68
岩戸寺国東塔	国東市 081	国東市国東町岩戸寺	1-3	◆	鎌倉	1283	69
平尾社宝塔	豊後大野市 105	豊後大野市千歳町新殿	2-1	○	南北朝	1340	69
護聖寺宝篋印塔(上)	国東市 170	国東市安岐町朝来	2-2	○	南北朝		69
川面墓地宝篋印塔	豊後大野市 047	豊後大野市大野町上脚	2-3	○	南北朝	1371	69
川ノ上墓地宝塔	宇佐市 259	宇佐市院内町上副	3-3	△	室町	1556	69
玉林寺宝篋印塔	国東市 150	国東市国東町見地	2-	○	南北朝		70
叶瀬園音堂国東塔	豊後高田市 044	豊後高田市香々地町叶瀬	2-3	○	南北朝		70
長谷川市蔵氏宅宝篋印塔No. 2		兵庫県宝塚市塚本谷	2-3	○	南北朝		70
釜ヶ迫国東塔	国東市 345	国東市安岐町弁分	2-1	○	南北朝	1335	71
楠木生・五重層塔	大分市 254	大分市楠木生	2-3	○	南北朝	1360	71
法泉地蔵観音堂宝篋印塔	豊後大野市 290	豊後大野市三重町法泉庵	2-3	○	南北朝	1370	72
中尾五輪塔	豊後大野市 270	豊後大野市三重町久田中尾	2-3	○	南北朝	1381	72
観音寺宝篋印塔	国東市 085	国東市国東町成仏	3m	△	室町		72
羽田・大分社宝塔	大分市 100	大分市羽田	2-1	○	南北朝	1345	73
常光寺宝篋印塔(向左)	国東市 100	国東市国見町小熊毛常光寺	2-2	○	南北朝		73
長谷川市蔵氏宅宝篋印塔No. 1		兵庫県宝塚市塚本谷	2-2	○	南北朝	1362	73
西光寺国東塔	国東市 243	国東市武蔵町吉広	2-3	○	南北朝	1387	73
元大波羅宮宝篋印塔	日田市 048	日田市元宮原	2-1	○	南北朝	1347	74
福蔵寺宝篋印塔	国東市 107	国見町向田	2-2	○	南北朝		75
吉祥寺宝篋印塔	別府市 073	別府市乙原	2-3	○	南北朝	1355	75
玉林寺宝篋印塔	国東市 150	国東町見地	3m	△	室町		76
浄霊寺宝篋印塔	豊後大野市 285	三重町内山	2-3	○	南北朝	1375	77
胎蔵寺墓地国東塔	豊後高田市 422	豊後高田市平野	3-1	△	室町	1527	77
智恩寺国東塔	258	豊後高田市船	1-3	◆	鎌倉		78
火男火大神社宝塔	別府市 014	別府市東山区鶴見岳	1-3	◆	鎌倉	1322	78

子などがある。それらの内でも古い遺品は格状間部分が吹き抜けになっている。しかし次第に羽目板を積みそこに格状間形を配する様になる。台座の補強を羽目板で行った時点以降、羽目板上に配された格状間はその配された物が台座であることを示す記号の性格を有した文様へと変化したと言える。

石塔の台座の場合、建築的構造の特殊な物を除いて、最初から記号的な物として配されている。先述の宝篋印塔の露盤部分・基礎部分に見られる格状間は本来格状間の有したであろう力学的・構造的機能は無く、

台座であることを示す記号なのである。だから宝篋印塔の蓋上の格状間を配した最上階は相輪を載せる台座であり、特に直上の伏鉢の台座であり、最上階を含めてそれ以上が塔であることを示し、基礎部の格状間も同じく、塔身を載せる為の台座であることを示している。以上を整理すると、

- ①露盤を含めた相輪全体が一つの塔で、宝篋印塔全体が塔であることを印として機能している。
- ②蓋上の階は、塔としての相輪を高位置に置くための意味を有す。
- ③軒部が塔の最下段になる。
- ④軒上の階は全体として屋根の傾斜の意味も有す。
- ⑤蓋下の階は、塔身を扶んだ、下の（基礎上の）階と合わせて須弥壇の役割を果たす。
- ⑥基礎はその須弥壇を載せる台であると共に宝篋印塔全体の基礎としての意味を有す。

とまとめられる。この重なりは基礎を含めた物が塔形と認識され、それに基礎を追加していった過程を示している。その過程は塔の下に更に基礎が付加される形でさらに展開するが、大分県の石塔でそれらの動きがどの様に展開するのかを、以下、具体的に検討する。

4. 大分県石造品に見る石塔下設備の具体的相

国東塔・宝篋印塔の塔下設備

以下、大分県内石塔の塔下設備特に階（階段状基壇）を中心に検討する。この一覧表は大分県石造品で図面があるものを中心に集めたもので、多くは「大分の石造美術」（望月友善）からの引用と、今回の調査資料と菅見の報告書等で取りあげられた在紀年銘造品で図面のあるものからなる。

宝塔・国東塔、宝篋印塔が中心で、一部層塔も含まれる。五輪塔は地輪下の蓮台は別にして階段状の基壇を有する有効な資料は少ない。大分における国東塔・宝篋印塔との性格的な違いが反映していると考えられる。国東塔・宝篋印塔の方が見せる塔であり、記念性を強く持つことを示しているといえる。

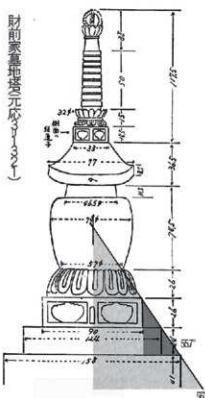


図 16-1

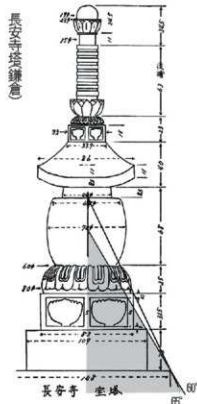


図 16-2

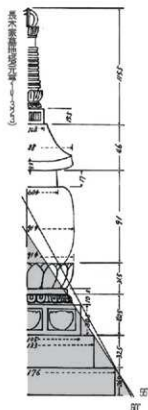


図 16-3

図 16 遞減角度 60° で頂点が塔身中央にくるもの

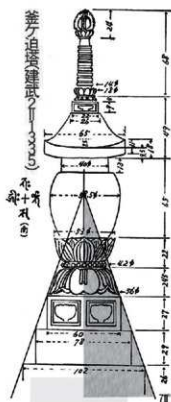


図 17-1

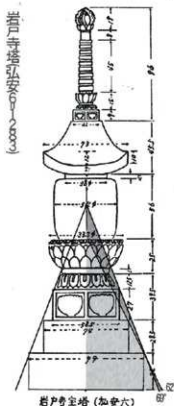


図 17-2

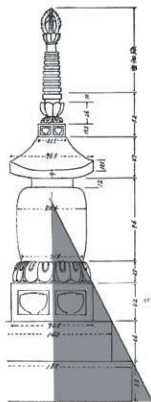


図 17-3

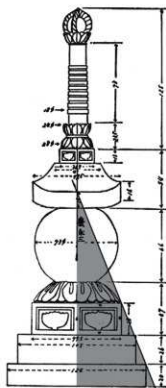
図 17 高角度で頂点が塔身中央にくるもの

(1) 階段状基壇の遞減角度

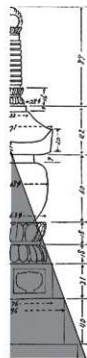
階段状基壇は上段ほど幅が狭くなるが、各階の上端角部を直線で結び、その遞減角度を計測した。図面上で分度器で計測しているので、厳密なものとは言えないが、大過は無いだらう。この表は、遞減角度を低角度から急角度への順で列べてある。この表を通して、基壇・基礎が如何なる機能・意味を持つかを考える。

時代判定は、基本的に引用元の意見に従っている。「時代」項目で鎌倉・南北朝・室町で判定時代を示し、「時代区分」でその細分類をしている。これはデータベースでの整列順の決定用で、各時代を1-4で区分してある。印象でありすべて現物に当たった物ではなく、厳密なものではない事、ご承知下さい。更に、表を一瞥するだけで、奈辺に何時時代の物が集中するのかの判別がし易いように「時代記号」の項目を付加した。◆=鎌倉、○=南北朝、△=室町となっている。

遞減角度は40度～78度の間に見られる。一



東京 報津島神社 空塔
図 18-1



叶洞能堂空塔
図 18-2

図 18 高角度で頂点が塔身上部にくるもの

番注目されるのは、60度から63度あたりに古い時代の遺品が集中していることである。60度前後の基壇は何を表現しているのか。通減角度60度なら頂角も60度で、通減ラインを延長して、そこに示される三角形は正三角形になる。そして正三角形の頂点が塔身の中心に位置する(図16-1~2)。それが設計の基本思想なのである。古い塔でも高角度で頂点

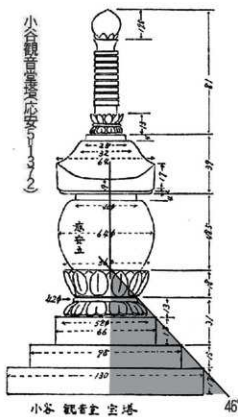


図 19-1

図 19 低角度で頂点が塔身下部にくるもの

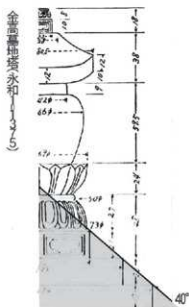


図 19-2

を塔身中央に持ってくるタイプもある(図17-1~3)。頂点を塔身の中央に持ってくる意図は、その両側の通減ラインの目指すところが塔身中央にあり、塔を見る人の視線を塔身中央に導くのである。この設計思想の背景にあるものは、当然の事ながら塔身が最も重要な場所であることを意識させる事であり、屋根や基礎は塔身を保護する設備だとする塔本来の意義を強く示している。塔の存在とは本来そういう物なのである。

ところが、一覧表からは時代の進展と共に通減角度が高角度化と低角度化の両方向へと広がる傾向が見て取れる。通減角度が高化した場合、結果的に三角形の頂点位置は次第に高位置、塔身の最上部・蓋部との接点辺りに移動する(図18-1~2)。この位置は相輪から基礎までの塔全体のほぼ中央に当たる。すなわちこの時点での設計思想の背景にある意識は、塔身に焦点を当てるのではなく、塔全体に焦点が拡散しているのである。それは塔身の重要性レベルの低下といえる。しかし塔と基壇との一体化の意識は強く、さらに塔を高く見せようとする意識は強うかがえるのである。

反対に、通減角度低下の場合、三角形の頂点位置は塔身下部部に移動する(図19-1~2)。その場合、塔身への視線・合焦点の意識は弱く、塔を全体としてながめてそれを段・壇の上に乗せるという意識が強うかがえる。設計思想における塔身重要性レベルの低下は、通減角度高化の場合と同じといえるが、さらに塔全体を見る時の視線が高さではなく、塔の位置する平面空間の結界の方に意味を見出そうとの傾向がうかがえる。

以上、基壇通減が形成する三角形頂点の位置する場所の検討から、それらが塔身の上端部、塔身中央、塔身下部部に位置する三タイプの存在が確認できた。国東塔を中心に見たが、宝篋印塔の場合は高位置にくる物が多い傾向はうかがえる。また、層塔の場合は塔全体の中央にくる物もあるようで、さらに高位置になる場合もある。いずれの場合も塔身重視レベルの低下傾向を指摘できる。

階段状基壇の場合、基本的に通減率は同じであり、我々が登り降りする階段に例えるなら、段高・踏幅が同じである事が階段であることの基本条件と言えるが、石塔の基礎部分ではそうなることは特に多いのだが、階段状基壇の最上階が、通減ラインから飛び出す場合も見られる。丁度、我々が階段を上っていて急に

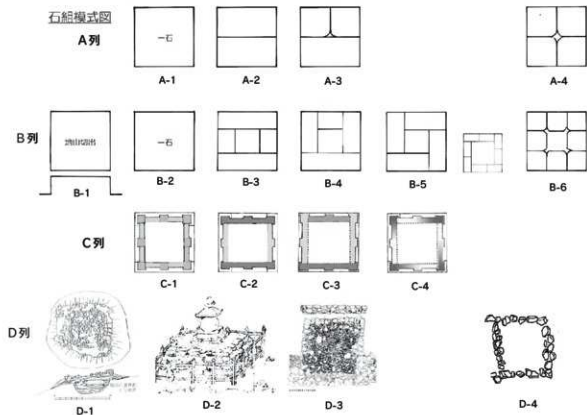


図 20 基壇石組模式図

段差の高い段に出くわす場合に相当し、そこから上の階の異質性を意識させるものになっている。その異質性が最下段に見られる場合もある。その場合、階段でいうなら踏み幅が上の階と比べて広いということである。この場合、上の階段に自然に続くのではなく、ここから先の空間性の違いを印象付けている。この異質性はとは要するに塔に対する結界性と言い換えてもよいだろう。階段の通減角度の検討からは、その結界性を高さに求める方向と、広さに求める方向があり、それらが通減角度の二分化と連関しているのである。基壇の検討を通して石塔守護の結界行為の意識の違いも見えてくる。

石塔の基壇の基本的構造は一番上に格状間の入った石塔基礎（須弥壇）が乗り、それは高さの結界であり、そこに至る階段が中段にあり、その下に空間結界のための界があると言う三重構造「壇・階・界」だとと言える。この組み合わせが塔の中に何重にも重なっているのである。

(2) 基壇石組みの様相

次に階段状の基壇の石の組み方を見る。図20の上二列の模式図が基壇石組で、様々なタイプがある。最上列（A列）が上段の階で二列目（B列）が下段の階で、図の左から右へ変化・展開する。上段の階は、一石成形のものを最初に置いているが、これはかなり理想的なもので、実際には二石のものが多い。大型品の場合、一石作成に困難が伴い、便宜上、石材を組み合わせるわけだが、本来は一石のものが理想としてはある。石塔は大雑把に言うとも古いものほど大きく、新しくなるほど小型化する。小型石塔の場合、わざわざ石をさらに小さく分割するのは面倒でもあり、倒壊し易くなるので、時代的に新しいものでも小型遺品の場合は一石製品も多い事は注意が必要である。

図の二列目に、地山切出を置いたが、実際にいくつか地山切り出しの例はあるが、これも理想的な物といつて良い。すべては理想的なものから始まるのであり、実例が少なくとも理念的存在の想定は重要である。次段階以降は上階・下階とも石の組み方では同じ意識展開を見せる。

塔は本質的に中軸性を有し、本来、四面から見られるべきものだが、人間は物を見るとき実際には一方からしか見られないので、次第に正面観が成立してくる。正面観が成立すると、側面・背面は手を抜いてもいいという意識が出て、正面だけは継ぎ目のない石を使い、側面・背面に繋ぎ目を持っていくようになる。

三段目の図は壇上積基壇の展開を示すものだが、この(B-4)の場合、正面と背面を意識したもの(B-3)が先にあり、次いで正面だけを意識したものになる。この場合、背面にいたっては継ぎ目が二つもある。次の(B-5)は1箇所だけ継ぎ目はあるものの、四面どこから見ても同じ形である。その横の少し小さい図は継ぎ目が二箇所だが、同じ意識とみてよい。

さらに大型化すると調達石材の関係で、繋ぎ目が増えるということになる。さらに展開すると正方形の石を並べたもの(B-6)になる。階が二段ある場合でも小型塔の場合には一石のものが、再度出現することもある。ただ、A列もB列も石の組み方の意識は同じだといえる。

ここで正面観の成立の段階が見えてくる。先述のように、人間は同時に多方向から物を見ることは不可能なので、当然そうなるが、石塔を広い聖地の中央に建立したとき、周囲を旋回すれば四面とも見られるが、やがて大事な塔が端に追いやられことになる。場が石塔を中心としたものではなく、そこで儀礼を実施する人間のための場となると、塔が端に追いやられ、背後を見ることがなくなると、正面だけが旺盛され、他面は省略されるようになる。これらは石塔が置かれた場の変容に対応した展開と言えるだろう。

(3) 壇上積み基壇石組みの展開

図20-Cこれは畿内の事例だけが、壇上積基壇の石組平面を模式化した図である。古いもの(C-2)は隅石や束石、羽目石は部材毎に別石で作られる。次いで正面と背面、側面の対面同士で同形に作る(C-3)ようになり、次に正面だけ継ぎ目のない形(C-4)になる。最後には全く同形のものを四面分作り、突き回すように(C-5)つなぐものが出てくる。この場合、接合部は隅にくるので目立ちにくい。他のタイプの場合、形の違う部材を二、三種類作る必要があるが、これだと全く同じ形のものを四面分作るだけで済み、どの方向に嵌めることも可能となり工事手順の簡略化も図られる。作り方としては合理化・省力の進展がうかがえる。その展開背景には小型化傾向の進展も伴うことが指摘できる。関西では壇上積み基壇石組は時代順にこの様な展開を示すことはほぼ確認されている。

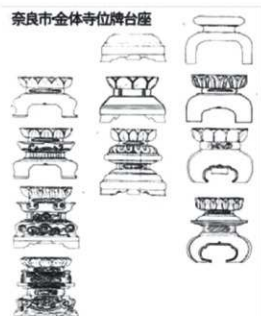


図 21 金体寺位牌堂の位牌台座



図 22 徳川將軍家位牌

(4) 石組墓の石組展開

図21の下端（D列）は石組墓である。発掘事例や絵図で見ると全部が階段状ではなく、壇になっている。石組墓の展開を簡単に見ておく。石を積み上げて壇にする意識が強いと小口積みにする。斜面に作られた場合（D-4）などでは、正面に当たる部分で、高く積み上げる必要のある場合、長軸を中心に向けて並べるが、やがて正面だけにその木口積みを残し他の面は長辺を外面向ける横積みになっている。その後続く石組墓は横積みになってゆく。この動向は高い壇が低下する動きといえる。高く積み込むためには根を深く確保する必要があるが、それを放棄して区画する方向に意識が向いていることがうかがえる。

石塔の基壇は、先述の遮減角度が低下する方向に動く場合、最終的には最下段は境界するための区画に変化してゆく展開が見られる。石組墓の石組展開と切石積み基壇とは共通した心意展開が見られるのである。

(5) 基壇の展開とその心意

石塔は付加物が増え、いろいろな要素が追加されてゆく。台に乗せた物が台共々塔形と認識され、それをさらに台に乗せる、それが繰り返されるのである。これは中国の宝篋印塔だけに限って見られるものではなく、日本でも同様で、いつの時代でも同じことが繰り返して展開するものである。

図21は奈良市の元興寺のすぐ近くにある金体寺の位牌堂（既破却）に納められていた位牌の台座各種だが、脚の形式に大きく3タイプがある。その変化の粗は、初期のシンプルなものから徐々に装飾が増大する方向を見せる。ただ近世位牌の場合、注意が必要なのは、時代が降っても単純なものは存在する。近世の位牌の場合、多くは位牌の牌身下部に長い柄があり、そこにさまざまな装飾部品を串刺し状に差し込める構造になっている。金体寺の位牌は基本的に多くは奈良町住人の人の位牌であり、加飾化は要は金次第の傾向が見られる。そして近世中期以降、加飾化傾向はさらに増大する方向で展開する。

図22は徳川将軍家の位牌だが、等身大の大きなものである。初代家康のものは四角い台が付くだけだが、四代家綱のものは台が低くなり、上にもう1段付加される。五代綱吉以降、加飾化さらに進展する。位牌は礼拝対象の人に見せることが本質であり、そのこと故に加飾化の進展は止まらないのである。

宝篋印塔は中世の終わりで造立は一旦ストップするが、江戸時代中期以降再度造立が展開する。それは死者の供養のためではなく、国家安穏・風雨和順・五穀豊穡などの銘文が多く記され、世俗の安寧祈願のための石塔に性格を変化させてゆく。そうすると宝篋印塔の基壇はさらに高化現象を見せる。日本の中世では基本的に供養塔として造立される宝篋印塔だが、中国の石造の大型宝篋印塔の古い遺例は、橋辺や港湾の突堤やそこを見渡す山頂などでの造立が目立ち、交通の安全を願っての造立が多い。宝篋印塔の源流といわれる銭弘淑塔も戦死者供養の意識はあるにしても、その供養を通じての国家の安定が主願意といえる。宝篋印塔は当初から見るため、見せるための塔としての性格を有しており、基礎が重なってゆく性格を最初から持っている塔だと言えるのである。

5. 壇から見た財前家墓地の展開 蓋上に載る伏鉢と

ここで今回調査した中での具体的な一例を見ておく。財前家墓地の中央には三基の国東塔が板石組壇上に並んでいる（件案書260）。石塔を見ることで造立順序は自明であるが、基壇表面だけでなく、厚さも実測し石組の平面構造を確認することでも展開順序は見えてくる。（図23）。図24-3が現状平面図（基壇側壁配置横断面図）である。石材の

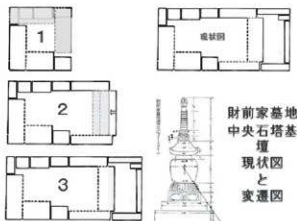


図23 財前家墓地中央石塔基壇の変遷

厚さに注目して見ると、三種の厚さの石材が使われている事がわかる。ただ、基壇の隙間から鍵形に先を曲げた針金を差し込んで、その引っ掛かりで厚さを測っており、板材の一部分の厚さを測っているだけなので、その数値が板材の平均的な厚さとするにはやや問題は有るかもしれない。

現状図の左下部分が一番厚い石材を使っている。それと同じ厚さの石材が基壇全体の中央右寄りの所にも配置されている。それらが当初石塔、墓地入り口側の石塔所用の物であったと考えられる。おそらくAの石材は1の彩色部分に使われていたと考えられ、それが最初に造立された大型の石塔の基壇の用材で、図24-1のように平面正方形の一基の石塔の基壇であった。

次いで中央の塔が造られるが、側壁石を追加して当初の奥壁石を2の彩色していない部分に移動して、長方形の二基並列石塔基壇に作り替えたと思われる。この時点で石塔及び基壇の正面が90°変化して南が正面に変化したと考えられる。何故そうしたのかと言うことが問題になってくる。この二塔の関係は夫婦・親子二代・初代～二代などの関係が考えられる。この問題は財前家の「家」の成立・展開の問題と深く関わってくると思われる。多くの事例からは夫婦と考えたいところだが、絶対にそうとは言いつけられない。今後の課題である。

さらに二基目に接続して三基目の基壇が作られ、石材はさらに薄くなっている。その時に、Aの石材は彩色してない方に移動される。図23-2の基壇側壁横断面図の上には石塔が乗る板石が渡されているが、A石材は二基目と三基目の塔を乗せる板石を支える共用の根太の役割を果たす為に少し移動させられたのである。三基目は初代夫婦の子供・二代目・三代目なのかの問題が出てくる。基壇が延長される度に、新補の石材が薄く変化していく事が見て取れる。短小軽薄化が石塔の基本的展開とは言えるが、三段階にわたり石材が順次薄くなることには興味が引かれる。前代の大きさを超える事はできなかったのか、単に経済的な実力の問題なのか、薄板を石材を作る技術の問題を含め考えるべきことは多い。

とにかく財前家墓地の中央の三基の石塔は造立の度に石壇が改修延長され、一体の物として管理された事が明瞭である。これらは表面観察だけではわからないことで、今後、石塔調査における三次元的な観察の必要性を示していると言える。

4. まとめ

最初に宝篋印塔形の成立をみて、そこに基礎・台座の重なりを確認し、塔形への思いが荘嚴のあり様を規定し、荘嚴の重なり個性が塔形を作りあげてきた事を確認した。

塔身（軸部）を高位置に置くための装置として壇・台・階（段）・界・柱（竿）などが見られる。そのうちで、特に石塔に多用されるものとして壇・台・階がある。それらが大部分の石塔で如何なる展開を示すのかを、宝篋印塔、宝塔・国東塔を中心に見た。階段状の基壇が多く採用されているが、造塔者の塔に対する思いを見る上で、階段状基壇の避減角度に注目した。避減角度の傾向は、鎌倉時代の遺例では60°前後が多く、南北朝・室町と時代の降下に伴い高角度になる方向と低角度になる方向とに分化してゆくことが解った。60度、すなわち正三角形は三角形の一番安定した形と言える。その頂点が古い遺品では塔身の中央にくるように設計されており、塔身に対する思いの強さが知られる。

そして、高角度になると、避減の形成する三角形の頂点が塔身の最上部あるいは塔高全体の中心位置にくるようになる。低角度の場合は、頂点が塔身の下端部にくるようになる。

この両方向の展開に共通するのは、塔身部に合焦点していた視線の塔全体への拡散であり、塔身重視の視力の低下である。

あと一つ注目したのが、基壇石材の組み合わせ方である。大きな流れとして正面観の成立と共に、石材接合部が正面からは見えなくなり、側面・背面に配するようになる。正面からの視線に対して、基壇を大きく立派に見せんとする計らいである。さらに壇上積み基壇では複数部品を一石形成した全くの同形部材を組み合わせるという合理化が展開する。石組草では壇が築城区画へ変化する方向も見られる。これらの動きと連動し

て石塔基壇の展開は有るはずである。

財前家墓地の中央にある壇を共有する三基の塔（杵築市260）は一族の何らかの関係性を見せているはずであり、その壇の拡大の背景にあるものはさらに追求されねばならない。

今回検討を加えたのは国東塔・宝篋印塔が中心で、層塔も少数含まれる。五輪塔は地輪下の蓮台は別にして階段状の基壇を有する有効な資料は少ない。大分における国東塔・宝篋印塔と五輪塔の性格に違いが表面化していると考えられる。国東塔・宝篋印塔の方が記念性を強く見せる塔であるのに対し、五輪塔は個人の供養に強く傾く塔で、性格的に少し異なる。その辺りが基壇のあり方に反映していると言えるだろう。基壇とは本体を支える思いが表出されたものであると同時に、その本体が如何なる物であるべきかを規制する役割も果たすものである。石塔の性格の大きな枠組みを知るために調査されるべきものといえる。

大分県の石塔基礎調査がこれでほぼ終わり、膨大な量の石塔の所在が確認された。この調査は、基本的に塔本体の調査で、基壇までコマコマと見ている余裕はなかった。基礎の石組がどうなっているかはこれまでほとんど研究されていない。しかし基礎の石の組み方からは、石塔造立者たちの思い、塔に対する認識のあり方が見えてくるのである。今後、この基礎調査資料が切っ掛けとなり、石塔基礎の研究の進展することを期待したい。

はじめに

大分県の中世石造文化を考える場合、先ず着目しておかなければならないのが、宇佐・中津から国東半島にかけての県北部と、県庁所在地である大分市以南の県中・南部とでは、その展開の様相に大きな違いが見られる点である。そこには、石造物製作の素材である石材の違いを基本に、ひいては石彫技術、製作者集団の相違があり、それはもちろん石造物の形式上の違いとなって現れている。さらには、それら石造物の造立を支えた歴史的環境としての信仰集団の相違となっていることにも注目する必要がある。

このような観点をもとにしながら、ここでは大分県の中世において展開した石造文化の特色について、県内に特有な石塔形式である国東塔の成立の問題をはじめ、石造物の製作者である工工のこと、信仰集団としての講衆のことなど二三の問題に焦点をあてて略述する。

1. 造立の発端—如法経信仰と石造物—

古墳時代の石棺や古代寺院の礎石・石壇などを除いて、石塔や石碑など、大分県における信仰の所産としての石造物はいつ頃から始まっているのか、その発端は県北の宇佐市、稲積山という、まさに稲モミを積んだようにきれいな裾野をもった山にある。稲積山石柱塔婆（宇佐市138）は、現在は山上から下ろされ破損が著しいが、もとは安山岩の柱状節理による3基の角柱塔婆からなっていたようである。そのうちの1基に、長寛元年（1163）の紀年銘ほかの銘文が刻まれている。

〈稲積山石柱塔婆銘〉

ケン・カン・ラン・パン・アン 如法妙法蓮華経一部 長寛元年八月廿三日供養畢 右志者が僧頼藏聖人出離生死頼証菩提也 願主散位御馬所檢校宇佐宿禰頼次

僧頼藏というと、彦山と並ぶ北部九州における修験のメッカ、求菩提山を中興した人物として知られ、もとはこの稲積山のある宇佐郡辛島郷（宇佐宮領）の出身とされている。この頼藏のための妙法蓮華経（法華経）の供養塔婆ということで、願主に「散位御馬所檢校宇佐宿禰頼次」とあるのも両者の関係物語っている。康治元年（1142）、頼藏は求菩提山護国寺の堂舎を再興し、同年には現在国宝になって

いる銅板法華経を埋納している。それには作者として、石柱塔婆の願主（宇佐宮）御馬所檢校宇佐宿禰頼次との関係が考えられる「宇佐宮御馬所檢校紀重水」の名が記されている。頼藏と求菩提山、銅板法華経、そして宇佐宮領辛島郷の中に稲積山があり、そこ建てられた亡き頼藏のための法華経供養の石柱塔婆に同じように宇佐宮の関係者が願主となっているのである。

大分県下最古の石塔としてももう一つ注目されるものに、国宝白杵石仏のホキ第一群の崖の上に立つ中尾一石五輪塔2基（白杵石048）がある。このうち大きい方（写真①）の四側面の三面に法身（ア・パン・ラン・カン・ケン）・報身（ア・ビ・ラ・ウン・ケン）・応身（ア・ラ・ハ・シャ・ナウ）の大日真言種子、一面に胎藏界五仏（ア・アー・アン・アク・アーク）種子をそれぞれ上下逆転して薬研形りし、地



写真1 白杵・中尾五輪塔（嘉応2年）

輪のア種字の左右に嘉応2年（1170）の紀年銘が刻まれている。

〈中尾一石五輪塔銘一〉

嘉応二季歳次□寅／七月二十三日

もう1基の小さい方には、四面に五輪五大種字がこれも上下逆転して葉研彫りされ、承安2年（1172）の紀年銘ほかの銘文が刻まれている。

〈中尾一石五輪塔銘二〉

承安二年□次壬辰八月十五日日次辛亥 千部如法経 願主遍照金剛□□

ここに「千部如法経」とあるのは、規則にしたがって法華経千部を書写し供養したことを意味する。ちなみに、これと関わりのあるものとして、五輪塔の崖下にある磨崖仏ホキ第一群（白杵市048）のうち第三窟が考えられる。これには紀年銘はないが、作域から五輪塔銘に刻まれた1170年前後の時期が考えられる。智拳印を結んだ金剛界大日如来を中心に、その左右に定印の阿弥陀、施無畏印の釈迦の三如来、それらの外側に二菩薩が表される。注目されるのは、三如来の坐る各変態座の正面に孔が穿たれ、蓋ができるようになっていてることである。一説では、崖上の五輪塔銘にいう千部如法経がこの中に納められたのではないかといわれており、まさに経塚と同じような法華経理納の思想がここにはみられるのである。

このように、大分県で最初の石塔である稲積山石柱塔婆と中尾一石五輪塔が、いずれも如法経信仰にもとづく造立であったことは、その後の中世の石造文化の展開のあり方を考えると、きわめて意義深いことのように思われる。しかし、それらの造立を支えたのが、前者が天台僧頼職に関わる宇佐宮御馬所檢校ら宇佐八幡宮の勢力を背景とした人びと、後者が白杵石仏群を造頭したとみられる豊後大神氏系白杵氏に関わる人びとという、いずれも強大な地域の支配者層であったという点に、石造物造立が一般化していく中世とは異なる状況を見ることができよう。

2. 如法経信仰と石塔 一 国東型宝塔の成立一

次に中世大分の石造物の中で前代からの伝統的信仰を継承しながら、その形式と機能性において独自の発展を遂げたものに、県北部の国東半島を中心に展開した国東塔（国東型宝塔）がある。

国東塔の成立は平安時代以来の如法経信仰と関わっている。宝塔と如法経の関りを示すものに国東市・千燈寺宝塔（国東市070、写真2）がある。この宝塔は、形式的には平安期の特徴をもち、相輪・宝珠を欠失するが、笠は軒口が薄く緩やかな反りを示す。塔身は尻すばみの副長で、笠をのけると国東塔と同じように頸部の上面から円い孔が穿たれている。また、塔身の前面にも長方形の開口部があり、蓋を外すと中が見えるようになっている。内部はちょうど経筒がすっぽり入るくらいの空洞になっており、おそらく経塚に関わる遺物、つまり経筒の外容器ではないかと思われる。これを伝える千燈寺は六郷山の天台山岳寺院であり、六郷山のなかにも如法経信仰は必然的にあるわけで、このような下地があつておそらく国東塔が成立したと考えられる。

年代的に次に注目されるものに、弘安5年（1282）銘の屋成家塚地宝塔（中津市236、写真3）がある。県北部は中津市本耶馬溪にある八面山南麓の谷筋の古塚にあり、夥しい宝塔や五輪塔などとともに中世石塔群



写真2 千燈寺宝塔

を形成している。塔身に次のような陰刻銘がある。

〈屋成家墓地宝塔銘〉

奉造立供養宝塔一基 為正阿弥陀仏尊靈比丘尼信阿 沙弥速智爾靈住生極楽也 弘安五年壬午十一月廿九日孝子各敬白

これは追善供養の宝塔で、「正阿弥陀仏」「比丘尼信阿」の二人はおそらく時衆と思われる。先ほどの平安時代の2件を除けば、中世の在銘石塔としては大分県内でこれが一番古いことになる。塔身が膨らみのない寸胴で首が長く、台座の上面に蓮弁を陽刻する。その形はまさに、愛媛県の檀原経塚から出た、銅製宝塔（現奈良原神社蔵）の形式をそのまま踏襲している。大分県下の宝塔が、このような平安期以来の埋経思想や如法経信仰を引きずった時点でスタートしているところに、大きな特徴があるといえる。

この如法経信仰と石造宝塔が、形式の上でも機能性の上でも結合したものが「国東塔」である。国東市国東町の岩戸寺国東塔（国東市081、写真4）を初見とする国東型宝塔の特徴は、塔身と基礎の間に蓮華座を設ける、つまり塔身を仏体と同じように扱っているところにある。

そして塔身首部の上面から孔を穿って、中に奉養物（仏の教えそのものである法華経つまり如法経）を納入できるようにしてある。また、上に笠を乗せても後から追加納入できるように塔身の肩口にも納入口が穿たれている。岩戸寺国東塔には、次のような陰刻銘がある。

〈岩戸寺国東塔銘〉

如法経奉納石塔一基 右志者為当山平安 仏法興隆広作修善 乃至法界平等利益 弘安六年大歳□未九月日大勸進 金剛仏子尊忍 造立者専日坊

造立の趣旨としては、「為当山平安仏法興隆」ということで非常に普遍的な内容を記す。弘安六年（1283年）は、在銘国東塔の中では最古である。「大勸進金剛仏子尊忍」「造立者専日坊」とあり、専日坊が作者である可能性が高い。ここに如法経とあるのは、文字どおり「法の如く（法華経を）書写した経典」のことであるから、規則に則って書写した法華経の納入安置を目的としてこのような石塔が造られたことを意味している。岩戸寺国東塔以外にも、鎌倉末期頃までの早い時期の国東塔には、銘文の中に同様のことが記されている。

○伊美別宮社国東塔（国東市007） 正応三年 敬白 奉造立塔婆一基 安置仏舍利一粒 奉法納如法経三部



写真3 屋成家墓地宝塔



写真4 岩戸寺国東塔

○塔ノ御堂国東塔（豊後高田市265）	延慶三年	妙法蓮華經者諸仏出世之 戒壇衆生成仏之直道也 仍如法 經談卷
○照恩寺国東塔（国東市386）	正和五年	右志者□□宝石塔一基 奉納如法書写一乘妙法蓮華經
○石丸国東塔（杵築市338）	元徳二年	奉納妙法華經三部
○両子寺国東塔（国東市156）	（鎌倉末）	奉納如法書写一乘妙法蓮華經

鎌倉末期頃までに造られた国東塔で、正応3年（1290）の伊美別宮社塔には「奉法納如法經三部」とあるほか「奉安置仏舍利一粒」ともあって、仏舍利と一緒に安置したことがわかる。納経塔だけではなく舍利塔としての機能ももたせた可能性がある。以下、正和5年（1316）の照恩寺塔に「奉納如法書写一乘妙法蓮華經」とあるのを筆頭に、いずれの国東塔の銘文からも如法書写の教典が他ならぬ妙法蓮華經、つまり法華經であったことがわかる。このように、少なくとも鎌倉時代末期までに造立されたいわゆる初期国東塔には、塔身に孔が穿たれているのを裏付けるかのように、如法書写の法華經を奉納する旨の文言が記されているのである。これが年代が下がってくると、塔身の中に孔を穿てて肩口に納入口を設ける、という形式のみが連綿と受け継がれていく。実際に如法書写したものを納めたかどうかは不明であるが、これら初期の国東塔を別として、南北朝から室町期の国東塔になると、銘文からも如法書写の文言も消えていく。

国東塔の塔身に如法書写の法華經を納めるというのは、国東半島が平安時代以来の天台山岳仏教の聖地であったことを考えると、その根拠には、宝塔を建て、その中に一乘妙法の法華經典を安置することが人びとの現世利益と仏法の繁栄、ひいては国家の安泰につながるという、天台仏教の祖祖である最澄以来の法華一乘思想が深く介在しているように思われる。

このような、国東塔という独特な宝塔が出現してくる背景については、この岩戸寺国東塔が造られた弘安6年（1283）は、文永・弘安の役、つまり元寇の時期にあたる。北条執権下の鎌倉幕府は異国調伏の祈禱を全国の主要な社寺に命じた。これに先んじて、幕府から関東祈禱所に認定されていた岩戸寺を含めた国東半島の六郷満山の寺々にも異国調伏の祈禱命令が下されており、弘安7年（1284）には『異国降伏御祈禱卷数目録』を幕府に提出している。元寇による社会不安のなか、祈禱をはじめさまざまな法会が催され、その一環として法華經を如法書写し、石塔の中に安置をするということが行われたのである。

さらに、もう一点注目しておきたいのは、伊美別宮社国東塔の銘文のなかに、如法經と一緒に「仏舍利一粒」が安置されたことが記されていることである。つまり、成立期の国東塔は舍利塔の機能も併せ持っていた可能性があるということである。そういう目で見ると、塔身を蓮華座上にのせる国東塔の独特な形式は、奈良・西大寺の叡尊ら戒律復興期の律僧たちの周辺で行われた、仏舍利信仰の中で多く造られた金銅製舍利塔の緻密な構造の反映とみることにはできないだろうか。特に、他の国東塔とは異なる、きわめて細緻な造形をみせる岩戸寺国東塔と、律僧達の中で多く造られた舍利塔との間には形式的な脈絡が存在するようにも思われる。国東塔という独特な形式の成立に、単に天台仏教における如法經信仰、最澄以来の法華一乘思想だけではなく、釈迦在世の教えに立ち戻ろうという西大寺派律宗に代表される戒律復興の思想が介在していたとも考えられよう。岩戸寺国東塔にみる、長柄で各部材を連結する堅固な構造が、叡尊周辺で造立された石塔類、例えば宇治・浮島の十三重塔や奈良・般若寺の十三重塔などの延長線上にあるようにも思われる。



写真5 法泉庵宝篋印塔

3. 中世石造物の作者 一大工僧から專業石工へ

豊後大野市三重町にある法泉庵宝篋印塔（豊後大野市290、写真5）は、塔身四方に金剛界四仏種子（ウーン・タラク・キリク・アク）を薬研彫りするほか、基礎四面に長文の陰刻銘があり、石塔の造立に関わるさまざまな情報を提供してくれている。

〈法泉庵宝篋印塔銘〉

地藏講結衆帳次第不同（以下人名64名）右功德衆之素意者為惡六道能化之誓約
救六趣感酬之苦域上界面々之直信人々各 各之仰崇若余者品此嚴切者
毎日晨朝之（カ・地藏）風透私有之妄雲無仏 者□之悟□任禪□々之本□焉
正平廿五年庚戌卯月廿四日 大工玄正 鍛冶妙心

これによって、この宝篋印塔が正平25年（1370）に「大工玄正」を作者として製作されたこと、その造立にあたっては、この地に結成されていた「地藏講」の結衆64名の人びとが願主となって参加をしたことなどが知られる。作者である大工玄正については、この法泉庵塔をはじめ、作者名が記されたものだけでも以下の所在が知られている。

- 原田葉師堂宝篋印塔（豊後大野市132） 正平一八年（1363） 大工玄聖 豊後大野市千歳
- 法泉庵宝篋印塔 正平二五年（1370） 大工玄正／鍛冶妙心 豊後大野市三重町
- 西岸寺宝篋印塔（豊後大野市271） 建徳元年（1370） 大工玄正 豊後大野市三重町
- 南光庵宝篋印塔（豊後大野市232） 永和二年（1376） 大工玄正 豊後大野市大野町

これに無銘のものも入れると、14世紀後半～15世紀初頭にかけての約50年間に、10数基の同じような玄正様式の宝篋印塔が造られている。いずれも、隅飾突起に蔵手文を二重に入れ、笠上の段形に連子窓を設け、水煙を細かに筋彫りする。さらには基礎と基壇の間に複弁式の蓮弁を刻むなど、溶結凝灰岩の柔らかさを存分に活かした緻密な意匠をもっている。大工玄正は、おそらく一定規模の工房を抱えた石工集団、いわば「玄正派」の機軸的な存在ではなかったかと思われる。ちなみに、地藏講結衆64名の中には「玄正」も願主として名を連ねており、石工が信仰集団としての結衆・講衆の一構成員でもあったことを示している。

なお、この玄正派の活動拠点として可能性が考えられるのが、近年まで石材の産地として知られた大分市吉野地区である。つまり、同吉野地区儀徳にあるこれも玄正系の宝林寺跡宝篋印塔（大分市316）の銘文に次のようにあるのが注目される。

〈宝林寺跡宝篋印塔銘〉

奉造立宝林寺念仏講衆結縁信男信女 応永三十一年甲辰二月七日 願主各（以下61名連署）
当寺開基玄泰禪師 当住良舜 大工玄如

応永31年（1424）、宝林寺念仏講の結衆61名による宝篋印塔を玄正の弟子とみられる「大工玄如」が製作しているのである。宝林寺の開基に「玄泰禪師」とあり、また61名の交名の中にも「玄」字の付く人物が散見されるなど、古くからの石材産地という土地柄とも併せ考えるとその可能性は高いといえる。ここで、大分県内の中世石造物に名を残す作者つまり石工について列挙すると、以下のとおりである。

〈大分県下の中世石造物に登場する石工銘〉

(県北部)

○岩戸寺国東塔 国東市081	弘安6年(1283)	造立者専日坊
○三社八幡宝篋印塔 杵築市196	応安6年(1373)	大工賀安
○伊美別宮社国東塔 国東市007	正応3年(1290)	大工浄淨慶
○熊野墓地国東塔 豊後高田市422	応安8年(1375)	大工道心五郎太郎
○財前家墓地国東塔 杵築市260	元応3年(1321)	大工僧良戒
○文殊仙寺十王像 国東市083	永和4年(1378)	沙弥本心造之
○長木家墓地国東塔 国東市132	元亨元年(1321)	大工僧尊智
○塔ノ本国東塔 杵築市047	永徳4年(1384)	大工五郎太郎
○根津美術館国東塔 国東半島旧在	康永3年(1344)	大工一玄
○下山宝篋印塔 杵築市039	南北朝後期	大工善徳□□
○元大波羅社宝篋印塔 日田市048	貞和3年(1347)	大工一乘
○別府神和園板碑 別府市036、国東半島旧在	永享2年(1430)	大工三郎太郎
○西明寺三重塔 杵築市046	貞和4年(1348)	工巧上阿
○岩戸寺仁王像 国東市081	文明10年(1478)	作者清晋
○掛樋板碑 国東市363	延文5年(1360)	大工妙空・西蓮
○正覚寺懸所石幢 宇佐市282	大永2年(1522)	石切新九郎 小工宇佐清光

(県中・南部)

○蓮城寺宝塔 豊後大野市282	永仁4年(1296)	大仏師□□
○天神石幢 豊後大野市234	康正3年(1457)	大工太郎四郎
○満月寺層塔 臼杵市059	正和4年(1315)	合力作者阿闍梨円秀
○上津神社鳥居額 豊後大野市044	寛正3年(1462)	大工麻生兼光
○住吉八坂社燈籠 豊後大野市大野町	正中2(1325)	大工浄忍
○大化石幢 豊後大野市212	寛正3年(1462)	大工道参
○平尾社宝塔 豊後大野市105	暦応3年(1340)	大工絆五
○二段富士幢 豊後大野市 大野町	文明12年(1480)	大工藤原氏道監
○柴北熊野社鳥居 豊後大野市082	正平12年(1357)	大工玄正
○三宮八幡鳥居額 豊後大野市緒方町	明応7年(1498)	大工兵五郎
○原田薬師堂宝篋印塔 豊後大野市132	正平18年(1363)	大工玄聖 五郎次郎
○法泉庵宝篋印塔 豊後大野市290	正平25年(1370)	大工玄正
○名塚薬師堂板碑 臼杵市099	永正2年(1505)	大工道林鍛冶妙心
○柴山板碑 豊後大野市127	永正9年(1512)	大工梅木与
○西岸寺宝篋印塔 豊後大野市271	建徳元年(1370)	大工玄正 三右衛門助
○浄運寺宝篋印塔 豊後大野市285	文中4年(1375)	大工為宗
○下赤峰地藏堂石幢 豊後大野市298	永正10年(1513)	大工小坂中菟六郎 中阿三郎
○南光庵宝篋印塔 豊後大野市232	永和2年(1376)	大工玄正
○平石石幢 豊後大野市218	大永5年(1525)	大工与十郎
○久田五輪塔 豊後大野市270 三重町	康暦3年(1381)	大工十阿
○三徳石幢 豊後大野市206	享祿3年(1530)	大工僧□慶
○勝光寺石幢 大分市274	永徳3年(1383)	大工正中彫造
○中尾大日堂石幢 豊後大野市 三重町	天文2年(1533)	大工王□□

- 醍醐寺烏居額 豊後大野市大野町 至徳4年(1387)
石工行一 仏師栄作 筆写惠忠僧
- 住吉八坂社烏居額 豊後大野市大野町 康応元年(1389)
大工了観
- 柴山石幢 豊後大野市120 天文2年(1533)
作者明峰松風木□
- 池田宝篋印塔 豊後大野市012 朝地町 応永21年(1414)
大工具泰
- 植松石幢 豊後大野市262 永祿13年(1570)
石工月舟
- 宝林寺跡宝篋印塔 大分市316 応永31年(1424)
大工玄如
- 越生石幢 豊後大野市207 元亀2年(1571)
大工正野与兵衛房丸
- 宮生宝篋印塔 豊後大野市朝地町 応永32年(1425)
大工□□
- 石打地藏石碑 佐伯市134 天正2年(1574)
作者守□
- 塔ノ平宝篋印塔 豊後大野市231 嘉吉2年(1442)
大工太郎四郎
- 平井観音堂板碑 豊後大野市019 天正6年(1578)
大工山崎三郎兵
- 中角石幢 豊後大野市大野町 文安4年(1447)
大工右近三郎 衛尉

在銘品から判断する限り、石造物に作者名を記すようになるのは、永仁4年(1296)の豊後大野市三重町蓮城寺宝塔の「大仏師□□」を例外として、県北部の方が早く、13世紀後半頃から作者(石工)名が現れるようになる。若戸寺国東塔の「造立者専日坊」が作者なのか明確でないが、正応3年(1290)に伊美別宮社国東塔を制作した「大工僧浄慶」をはじめ、鎌倉末期までに造られた初期国東塔の作者はいずれも「大工僧○○」と名のっている。大工僧というのは僧籍にある石工達、おそらくは天台六部山の僧侶であり、修行の一環として石塔を刻んだのだらうと思われる。このように、県北とくに国東半島の中世石造物は、先ず六部山の天台僧侶達によって造り始められたと考えられるのである。

それに対して、県中・南部においてはいかがであろうか。同地域で中世もわりと早い時期、鎌倉末期頃までに造立されたものは、いずれも比較的大型で、それも中央のものを直接写したような整った形式のものが多いことが注目されてよい。おそらくは、中央から下向してきた工人達の手によるものと考えられ、例えば、文永4年(1267)銘の臼杵市野津町水地九重塔や貞和4年(1348)銘の同満月寺層塔(臼杵市059)、無銘だが鎌倉中期頃の佐伯市上岡十三重塔(佐伯市040、写真6)など、基礎側面に壇上積形式の格狭間をもつ石塔は、復尊や忍性ら西大寺真言律宗の周辺で造立された石造物に通じる様式を見ている。

ちなみに、水地九重塔が造られた文永4年は、守護大友氏3代頼泰が初めて豊後に向向してきた時期にあた



写真6 上岡十三重塔



写真7 熊野墓地国東塔

り、その時期が重なっているのは、彼が中央の工人を随行して来たからではないだろうか。

そこには、大友氏による新政権の樹立と、その地方支配の手段としての宗教政策一例えば、豊後府内には、後に十刹に数えられる臨濟宗万寿寺が創建し、旧仏教天台宗の円寿寺が再興され、さらには西大寺流律宗の拠点寺院として金剛宝成寺が創建するなど一が強く関わっているように思われる。そうした中、寺院の創建・再興や石造物の造立などに関わって、新技術とともに中央の工人達が導入されたことは充分考えられるところである。

こうした中央の工人達の下向による新技術の導入は、石造物造立の一般化の傾向とも相まって、その量産化と石工集団の形成を促したであろうことは充分察せられるところである。県北部の僧籍石工である大工僧に次いで登場する「大工一玄」、県南部の「大工浄忍」をはじめ、在銘品から約20年間の活動期間が知られる上記「大工一玄」ら、僧籍にない、つまり「大工僧」を名のらない石工達は、まさにこうした石造物製作を生業とした専門的の石工たちであったと考えられる。ただ、彼らがいずれも法名を名のっていることから、何らかの信仰集団に所属ないし関係していた一例えば、大工一玄が「地藏講結末」の一員であったように一のであろう。そういう視点からすれば、県北部の豊後高田市熊野墓地国東塔（豊後高田市422、写真7）を応安8年（1378年）に制作した「大工道心五郎太郎」、県南部では嘉吉2年（1442年）の豊後大野市大野町塔ノ平宝篋印塔（豊後大野市231）の「大工太郎四郎」を初見として、南北朝末期から室町時代の石造物に多く見られる俗名を名のる石工たちの登場は、石塔の造立が仏法という作善につながるものとされた中世的な発想から離れ、まさに自立した職能人としての石工集団の成立を示していると言えるのではないだろうか。石造物の作者である石工達の自立と専門化が中世後半期の大きな特徴の一つといえることができる。

4、造立者層の拡大―講衆の成立と展開―

最後に、中世石造物の造立を支えた人びと、つまり造立者層の拡大という観点から見ていく。平安末期に登場した石造物造立の機運が、鎌倉時代後半から南北朝には最高潮に達したことは、遺品の多くが物語っているところである。それらの製作を支えた階層も、支配者層や僧侶など上層クラスの人びとから、後には中層階級を中心に庶民層まで拡大していった。多い場合には、宇佐市安心院町佐田社板碑一号（宇佐市298）に見られるように、結縁願主が88人という大集団を形成していることもある。また、豊後大野市三重町法泉庵宝篋印塔（豊後大野市290）のように、願主64名の名前がすべて陰刻されるという極端な例もある。県北部ではまとめて「願主〇〇人」とし、県中・南部で結縁者全員の名を記す傾向があるのは、比較的硬い安山岩と軟らかい溶結凝灰岩という石材の違いもあろうが、そこには石造物造立にかかわる人びとの意識の違いも介在しているのかも知れない。

いずれにせよ、個人では到底なし得ない石造物の造立が、集団を形成することにより容易になり、仏教信仰の裾野が広がった中世後半期、造塔の気運に拍車がかかったことはいままでもない。造立者層の拡大ということからすれば、石造物造立の盛行を促した直接的な要因として、さまざまな「講衆」の成立ということが挙げられる。講そのものについては、古代以来さまざまなものが行われているが、「講衆」といった場合、何らかの信仰を目的として集団化した人たちのことを意味する。信仰の成立なしに集まった人々を講衆とは呼ばないのである。この辺は注意しておかなければならず、何らかの仏教的な作善に参加する人びとの集まりを講衆というのである。

講衆はまた、「結衆」あるいは単に「〇〇衆」とも呼ばれ、これが、人びとの精神的かつ実生活面での拠りどころとなり、中世社会をその根拠において支えた原動力であったといっても過言ではない。

以下に掲げてあるのは、大分県内の中世石造物のなかで、銘文により明らかに「講衆」を結成しているとみなされる結縁集団の例である。

(講衆・結衆による石造物造立例)

- 岩尾板碑 国東市174 元亨4年(1324)
紀近定 同願主 僧義覺 元亨四年七月十二日
別時衆 已上□□□□ 大願主末弘
- 佐田社板碑一号 宇佐市298 正慶元年(1331)
右志者为天長地久御願門満也 正慶元□□□八月十八日
四十八日時衆八十八人各敬白 願主示阿
- 大年社板碑一号 宇佐市291 建武元年(1334)
建武元年八月二十八日/四十八日衆各敬白
- 其ノ田板碑二号 豊後高田市362 建武元年(1334)
建武元年甲戌十一月廿二日 地藏堂講衆等各敬白
- 善門坊跡板碑 杵築市042 康永4年(1345)
別時衆敬建
- 表宝篋印塔 豊後大野市047 貞和2年(1346)
願主道寂 貞和二年丙戌十一月五日 一結講衆 敬白
- 甲尾山宝篋印塔 杵築市060 貞和5年(1347)
毘沙門講衆□□人敬白
- 泉福寺跡国東塔 杵築市029 觀応3年(1352)
觀応三壬辰十 廿 講衆
- 岩瀬觀音堂宝塔 竹田市094 文和3年(1354)
敬白奉建立石塔婆一基 得見此塔礼拝供養当□□□皆近阿耨多羅三藐三菩提
時衆等成阿道意□妙□阿信心
大願主等 住持□□ (以下30數人連名)
右志者为天長地久御願門満 国土泰平万民与衆殊者一結衆
現当二世所願成就及以法界平等 利益仍所奉建立如件
文和三年癸午七月十七日各々敬白
- 滝神社五輪塔 玖珠町
二十五人之別時衆各敬白
- 法泉庵宝篋印塔 豊後大野市290 正平25年(1370)
地藏講結衆帳次第不同 大願主僧良智 (以下、64名連名)
右功德衆之素意者为惡六道能化之誓約 救六趣感酬之苦城上界而々之直信人々各
各之仰崇若尔者品此嚴切者 每日晨朝之(力) 風速弘有々之安雲無仏 者□之情哀任揮刻々之本□焉
正平廿五年庚戌卯月廿四日 大工玄正/鍛冶妙心
- 小谷国東塔 杵築市045 応安5年(1372)
応安五大歳壬子九月八日 一結講衆 (14名連名)
願主大法師円松 大旦那比丘尼正鉄 大法師永秀 大勳進長生
- 淨蓮寺宝篋印塔 豊後大野市285 文中4年(1375)
文中四年乙卯十一月□□□ 大願主真阿 沙弥玄用 (以下、15人連名)
結縁者 尼罕阿 □智 大工為成 中阿 □□ 右志者为別時衆現世 安穩後生善處也 仍所修如件
- 坪片宝塔 竹田市 天授3年(1377)
一結衆人數次第
- 中尾五輪塔 豊後大野市270 康暦3年(1381)

康暦三辛酉年二月廿日 □・・・ □・・・ 大工十阿 一結衆敬白

○極楽寺跡宝塔 白杵市112 永徳2年(1382)

別時結衆敬白

○川辺宝塔 豊後大野市259 明徳4年(1393)

逆修講之人数(この間12人連名) 明徳四年癸酉十月廿二日 大願主各々敬白

○覚正寺支坊石幢 宇佐市252 大永2年(1522)

(2行墨書) 大永二年□□九月廿日敬白 念仏講人数次第

興禪寺中□□□融□ 副大和守秋月□□ 石切新九郎

○向原石幢 別府市037 永祿11年(1568)

于時永祿十一白戌辰仲陽 □□庚申各々一結衆敬白

○大衆寺石幢 宇佐市166 天正2年(1574)

庚申供養結衆九人等敬白

ここには、「時衆」集團のほか、「別時衆」の集團、「地藏堂講衆」や「毘沙門講衆」など、さまざまな講衆・結衆が形成され、信仰のあかしとしての石塔を造立している。

ここで注目しておきたいのは、県北部に比べ県中・南部、というより安山岩と溶結凝灰岩とでは、溶結凝灰岩を使用する県中・南部の方が、より多人数の集團による造塔例が多いということである。ちなみに、講衆22例中18例までが溶結凝灰岩製であり、それも年代が下るほどその傾向が強くなっていく。例えば、室町後半期から江戸初期にかけて、六道救済の信仰を反映して、県中・南部を中心に頻繁に造立をされた六地藏石幢には、多くの場合、数十人単位の人びとによる結衆をともなっている。石塔造立が多人数化していくなか、石造物の素材の問題として、より大量生産ができる溶結凝灰岩が大量需要に適合したという事情があったのではないだろうか。また、石造物の作者の問題として、県南部の方に早くから専門的な石工集團が形成されていたという事情が存在するのではなかろうか。

石造物造立の基盤となる仏教については、国東半島を中心とした県北部が中世全般を通して、六郷山の天台旧仏教の勢力が強かったのに対して、県中・南部にあつては、念仏系あるいは浄土系の鎌倉新仏教が早くから浸透し、講衆成立の信仰基盤となっていたと考えられる。中世後半期の庶民はさまざまな講衆を形成することにより、単独では成し得ない石塔の造立を容易ならしめたのである。このような講衆が、人びとの日常生活と結びついて、庚申講などに代表される近世的な講組織へと変貌を遂げていったのである。

以上、大分県の中世石造文化の多様な展開のうち、基本的な二三のテーマについて略述してきた。ここでは、それら石造文化を支えた背景としての講衆の成立とその意義ということで拙論を終わることとする。

はじめに

豊前・豊後の地域においては、14世紀後半以降に禅宗の活動によって、多くの石像が造立される。その最大の例が豊前国の羅漢寺の五百羅漢像を中心とする石像群（中津市217）である。江戸時代後期に作成された『豊鐘善鳴録』によれば、暦応年間（1338～42）に円庵昭覚なる豊後国田染出身の禅僧が臨濟宗の寺として、跡田の地に入り、羅漢寺を創建、十六羅漢の画像を祀った。その後、円庵のもとに、訪れた逆流建順という禅僧と意気投合し、現在の羅漢寺の位置の無漏窟という岩屋に五百羅漢をはじめとする700体余の石仏を造り安置した。しかし、美術史の大家等によって江戸所時代の作とする説が唱えられ、この記録を裏付ける研究作業が進まなかった。

しかし、古羅漢の観音菩薩坐像（中津市207）の左膝に納入された五輪塔、光明真言記載紙片（正平十七年九月十二日銘）、人の歯の発見、別府大学と地元の方々との羅漢寺石造物の調査によって、銘文をもつ地藏石造がいくつか確認され、その中から「晚愚禪門」「応安七 二 八日」という銘文が発見された。これらの発見により、『豊鐘善鳴録』の記録の信憑性が高まった。さらに、『豊鐘善鳴録』の記述の基になった『豊州羅漢窟記』（応安4年11月12日、東福寺住持高庵芝丘作成）という縁起の写本が東京大学史料編纂所で確認されたことにより、これらの羅漢像は1年ほどで製作され、今日残る羅漢像としては日本最古のものであることが明らかにされた（三谷2010）。その結果、2014年8月、無漏窟の五百羅漢像が国の重要文化財に指定されたのである。



無漏窟



無漏窟の五百羅漢像

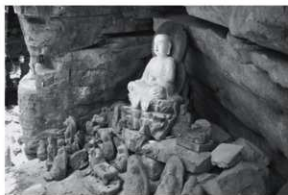
1. 幻住派と石像造立

本論では、羅漢寺の石像群の問題は主題とはしないが、この羅漢石像を造った円庵昭覚と逆流建順は、法燈派の名僧三光国師（孤峰覚明）の弟子で三光国師が住した出雲国雲樹寺の住持を務めたことが解明されている（三谷2010）。『豊州羅漢窟記』では、円庵昭覚は羅漢寺の当初、幻住庵という庵寺を築き、その後入った逆流がこれを再建し、安心庵としたと記されている。この幻住庵とは中国の名僧幻住普応国師（中峰明本）が営んだ庵であり、この国師の流れを幻住派といった。なぜ、法燈派の円庵昭覚が幻住庵を営んだのだろうか。昭覚の師孤峰覚明は入元し、天目山に参じ中峰明本に師事した。この孤峰覚明から幻住国師の教えを受け継いだ可能性がある。

実は、大分県では、幻住派や幻住国師の教えの痕跡がかなり多く見られる。杵築市の竹の尾城跡には、木付頼直が造立した石造地藏菩薩（像高85.0cm、安山岩）と幻住普応国師の石像（像高57cm、安山岩）が残っている（杵築市130）。同じ杵築市の藤には、頼直が娘のために造立したという石造地藏菩薩がある。前者は男性的な風貌をしている対し、後者はその伝説にあるように女性的な風貌とかなり異なった容姿



竹の尾城跡石像



轟地蔵

をもつが、美術史的には14世紀後半のものともみられている。特に竹の尾城跡の石造地藏菩薩はその横に造立の経緯を記載した石碑が建てられており、製作経緯、時期が画定できる貴重な石造文化財である。この石碑については、碑石（中央部）高87.0cm、幅45.0cm、奥行14.5cm、方形の基礎石高26.0cm、幅51.0cm、総高113.0cm、材質は「安山岩」である。その石碑形式、位牌型と形式から見ると、銘文の時期ではなく後世すなわち近世のものではないかという考古学関係者の意見もあるが、この形状からみると、下の写真にあるように、中国の石碑の形状を模したものとみ方がよいと考える。



中国山西省太原晋祠の石碑 宋代



中国陕西省西安碑林 明代

碑文には次のような内容が記されている。



宝樹院碑

寶樹院碑
 藤氏大牧助木付頼直法名廣禪字梅岩
 康應元年己巳霜月十五日、謹登願心、穿岩
 為寶樹、鑿石為地蔵、成就現前佛果、寶助
 來世冥福、又應永三年丙子三月念四日、重
 安本師幻住菩薩因師石像、欲報法恩、
 建石碑畢、恭陞大夫歸石、為佛國者書側
 寶樹院中安地藏、堅固願心奉石同
 無量劫家風高、堅固願心奉石同

この地蔵菩薩は、木付広輔(頼直)が康応元年(1389)11月15日に発願し、「成就現前佛果資助來世冥福」のため、岩を穿って宝殿を造り安置したと書かれている。また、その後、応永3年(1396)3月24日には「本師玄住普応国師」像を造立し、併せてこの石碑を製作した。宝樹院の地蔵に幻住主人翁を添えたのは本来木劫まで木付家の家風を富ませ、堅い願心はまさに石の如きであるからだと記されている。この碑の題は「宝樹院碑」とあり、この竹の尾城の地に宝樹院という寺院が建立されたことが明らかとなる。迎接寺所蔵の「迎称寺由来」によれば、宝樹院は、木付頼直入道広輔の菩提寺である。木付氏は初代以来、一遍の流を汲む時宗を菩提寺としてきたが、頼直は、菩提寺として宝樹院を定め、本師として中国の禪僧幻住普応国師の像を製作した。宝樹院は、禪宗寺院であることは間違いなく、頼直の段階で木付氏も大友家と同じく、禪宗へと傾倒したことが明らかである。幻住普応国師とはどのような僧侶であろうか。また、木付頼直は出家し、普応国師を本師として何故仰いだのだろうか。

2. 大友氏と幻住派

幻住普応国師とは、杭州の奥の天目山の中峰明本のことである。中峰明本は幻住派の始祖として著名な名僧である。幻住とは定住処を定めず、「幻住庵」という庵寺を各所に造り、そこに仮寓したことからそのように呼ばれた。遊行行脚の後、天目山に帰り、靈隠寺や徑山万寿寺から招かれても応じず、延祐5年(1318年)には、皇帝仁宗によって宮中に召されたが、応じなかった。権力とは生涯距離をとり続けた人物である。

至治3年(1323年)8月14日に、61歳で没した。皇帝文宗は、智覚禪師と諡し、塔を法雲と号した。1334年には、皇帝順帝が、「天目中峰和尚広録」30巻を入蔵させ、普応国師と加諡した。

中峰明本の弟子たちは先に述べたように幻住派と称したが、普応国師(中峰明本)の教えを受けながらも、まとまった一派をなしたものではない。14世紀に活動した普応国師に感化され、本師といたく日本の禪僧としては、遠溪祖雄、無隠元晦、大拙祖能、明叟齊賢、復庵宗己、古先印元、業海本浄などがある。今日幻住派の流れを汲むと思われる禪宗寺院には、幻住国師の頂相がいくつ伝存している。

ところで、大友氏と普応国師(中峰明本)とはどのような関係あったのだろうか。静嘉堂文庫所蔵の8月15日付けの「与大友直庵尺牘」と題する書状がある。元代の著名な禪僧中峰明本(1262~1322)が、豊後国守護であった大友直庵(貞宗)に宛てた書状(全文十四行)で、この書状では、「日本から来た晦禪人(無隠元晦)が自分の左右にあって世話をしてくれている。(貞宗より)賢禪人が来て貞宗の手紙と砂金を届けてくれた。晦禪人は私の姿を写し贄を求めたので、それを当座の返礼とする」と述べている。文中の晦禪人(無隠元晦)は豊前出身の僧侶で、この書状を大友氏の許にもたらした人物である。無隠元晦は、豊後守護の大友貞宗と関係が深く、彼の援助を受けて入元したといわれる(伊藤2012)。

無隠元晦は延慶年間(1308~11)に入元し、中峰明本の許に参じた。いわゆる幻住派というべき僧侶である。嘉暦1(1326)年、来日する清拙正澄に従って、古先印元らと共に帰国し、建仁寺(京都)に住した清拙の接化を助ける。その後、大友直庵の招きで博多近隣の多々良浜にあった顕孝寺へ入る。次いで博多聖福寺に移った。顕孝寺は大友氏の外交活動の拠点となった禪寺であり、聖福寺も都市博多の基盤として貿易拠点となっていた。無隠元晦は最新の仏教を学び、大陸とのコネクションももっていた禪僧として人気があったことがうかがわれる。その後、鎌倉の円覚寺、建長寺、京都の建仁寺、南禅寺に歴住する。晩年は故郷の豊前に帰り、福智寺で延文3年(1358)10月17日に遷化した。

博多幻住庵は、延元元年(1336)に無隠元晦が馮出に開山し、大友氏時の開基となった(現在は崇福寺の寺内に移されている)。大友氏は、府内万寿寺を開いた5代貞親以来禪宗に深く傾依し、その弟で6代貞宗は無隠元晦を通して、中峰明本と交流をもち、その子息氏泰は、北条高時の招聘で来朝した元の禪僧清拙正澄(中国禪宗界巨匠江正印の実弟)に傾依し、同慈寺を建立、蜀峰清繼居士と称し、禪に浸潤する余り、家督を弟氏時に譲った。氏時自身も禪宗に傾依。特に無隠元晦や大拙祖能などの幻住派僧侶と密接な関係を



聖福寺幻住庵
無隠元晦像



豊後高田市施恩寺
無隠元晦像

の存在から無隠の教えを受けた人物と考えられる。大友貞宗（直庵）の戒名は顕孝寺殿直庵であり、顕孝寺は直庵創設の寺院と考えられる。

もう一人、大友氏時とかかわりに深い幻住派の大拙祖能という禅僧がいる。大拙祖能は康永3年（1344）に入元、天目山の中峰明本の高弟千巖元長に謁し、弟子となる。中峰の直弟子ではないが、幻住国師の教えを受け継ぐ名僧である。延文3年（1358）に帰朝し、延文4年（1359）に大友氏時が請じて博多顕孝寺の住持となる。その後、豊前の天目寺に寓し、1362年、豊後万寿寺の住持となる。大友氏との関係が深く、大友貞宗の知遇を得た中巖円月の創建した下野利根吉祥寺（群馬県利根郡川場村）の2代住持となり、何度も再住した。この寺院のある利根荘は大友氏が地頭職を有し、関東における大友氏の重要拠点であった。2代目親秀は「利根」を称し、川場村には大友館跡が発掘されている。吉祥寺には、氏時夫妻の墓もある。



大友氏時夫妻の墓

3. 木付頼直と幻住派

さて、ここで最後に木付頼直と禅宗の関係をさぐってみよう。木付3代貞重は、大友貞直とともに上京、建武4年（1337）正月11日、東洞院烏丸の戦いで、貞直とともに戦死し、急遽、頼直は4代目として、その跡職を継ぐことになった。この4代目頼重は建武4年（1338）から応永3年（1396）ころまで活動し、木付氏の八坂下荘の支配を確立した人物であり、初期からの本拠鴨川地区の竹の尾城から台山、現在の杵築城の地に館を移したのもかれであった。

木付氏も頼直以降禅宗寺院を積極的に造立し保護してゆく。菩提寺である宝樹院は勿論であるが、この寺院は残念ながら廃絶している。また、頼直がかかわり、今日まで残る寺院もある。それが杵築の城下にある安住禅寺である。この寺は、初代親重が正元元年（1259）に創建したといわれる古刹で、文和2年（1353）5月18日の年紀をもつ県内最古の梵鐘があり、「藤原君頼直」が大檀越として製作したものであった。木付頼直は、応安8年（1375）8月22日の尼正安造領配分状の奥に「任此状、可全相互知行之状、如件 広輔（花押） 外題安堵の署名を行っており、宝樹院碑の造立に先立って、出家していたことはまちがいない。頼直の出家は、宝樹院碑として中国風の偈文を作成し、菩提国師を本師としてその頂相石像を造立

もつことになった。

博多聖福寺の幻住庵には無隠元晦の石像が残されている。また、国東半島の香々地谷の施恩寺には、幻住庵と同じく、無隠の頂相石像（豊後高田市101）が安置されている。開山南暎は田原本家四代貞広の次男であるが、かれの禅僧としての事蹟は不明である。施恩寺の無隠元晦の石造頂相はもともとその塔頭にあったものあり、また、現在は、その横に開山南暎禅師の石造頂相が安置されている。南暎は田原貞広の子息であり、その活躍の時期は、14世紀中期から後半である。石造頂相

するくらいであるから、単なる隠居出家ではなく深い帰依があったことが推測される。

頼直の幻住派への傾倒は現在のところだれによってもかば解明できないが、大友氏とその一族に幻住派の影響を与えたのは、すでに紹介した無隠元晦もしくは大拙祖能以外には考えにくい。南北朝の内乱期、大友惣領家氏泰、氏時、親世に従い、各地を転戦し、博多などでも彼ら著名な幻住派僧と知遇した可能性は高い。本稿は、杵築市の一角にある石像とその造立にかかわる碑文から14世紀後半を中心とした禅宗の幻住派僧と大友氏の関係を考察してみた。

〈参考文献〉

- (1) 三谷絃平「豊前羅漢寺の成立とその歴史的背景：南北朝期の法燈派禪の展開と中国羅漢信仰とのかかわり」別府大学『史学論叢』No.40 2010年
- (2) 伊藤幸司「中世博多の幻住僧」『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』10号 2012年

はじめに

筆者はかつて『日本キリシタン墓碑総覧』に日本のキリシタン墓碑の形式分類を行った(田中2012)が、そのなかで、紀年銘資料あるいは画像資料による裏付けが得られなかったために、以下で紹介する奇棟形墓碑をキリシタン墓碑の中に含めなかった。この奇棟形墓碑というのは、大分県臼杵市野津所在(鍋田キリシタン墓碑群)のことである。その後奇棟形墓碑のなかに、臼杵市野津下藤キリシタン墓地(神田編2016)に共通する石組遺構の上に置かれた状態で現存する墓地を大分県臼杵市野津の神野(この)家墓地において確認したことから、この鍋田墓碑もキリシタン墓碑であると考えるに至った。本稿はその経緯をのべて類例をあげ、現状で考えうる年代観を述べるものである。

1 既往の研究

キリシタン墓碑にどのようなものがあるかという研究はすでに100年以上の歴史がある。日本国内でキリシタン墓碑が知られる以前に、清国北京にマテオ・リッチやフェルピーストなどの17世紀に中国布教をおこなったイエズス会宣教師の墓地が残されていることは、1902年の北清事変によるその破壊と、賠償による復旧が行われたことから、当時の北京駐留の日本人の知るところであり、その復旧された教会と墓地を、多くの東洋史学者が訪ねている¹¹⁾。

その後長崎市と京都市さらに大阪府で洗礼名を刻んだ墓碑が大正年間に次々と発見されるに及んで、京都帝国大学考古学研究室による調査が行われた(濱田・新村編1923)。そこで既成の日本式墓碑に十字架文と洗礼名を刻んだ立碑型の墓碑と、北京の墓碑に似てヨーロッパに由来すると想定された「鐘型」つまり半円柱形伏碑の存在を明らかにされた。この研究に刺激されて昭和の初期に長崎では立碑や伏碑の存在が次々と報告され、その成果は片岡弥吉によってまとめられた(片岡1942)。そこでは板状伏碑が初めてまとめられて分類報告された。このようにキリシタン墓碑に関する立碑形、半円柱形伏碑、板状伏碑という3分類はその後も基本分類として踏襲されている(大石編2012)。奇棟形墓碑は板状墓碑の細分の中に加わるべき形式である。

2 鍋田墓地の奇棟形墓碑(臼杵市073、写真1)

この形式の石造物がキリシタン墓碑の一種ではないかとはじめて注目したのはマリオ・マレガ氏である。1930年代後半に大分県のカトリック教会の主任司祭であった師は、戦国時代から江戸時代の日本教会の歴史に関心をもち、大分県内のキリシタン遺跡の調査を行った。その中で昭和13年(1938)にこの墓地を発見した¹²⁾。その後「町村別 大分県史跡伝説地詳図」(十時1940)にキリシタン墓地として地図におとされ、発見者のマレガ氏は「豊後切支丹資料」(マレガ1946)の中で「豊後切支丹遺跡」の一節をもうけ、「国民学校(田中註=戸上小学校、現在廃校)の近くに鍋田という共同墓地があり、そこには豊後にて最も大きな切支丹墓が8基ある。その形は古代の石棺の蓋と同じ形である。大きさは長さ二米三十釐、幅一米である。それ等の墓は臼杵藩の切支丹土族の佐藤家の墓であった。」と記述した(マレガ1946)。その後半田康夫氏が昭和33年(1958)ころ同墓地を調査し、4基を確認し計測している(半田1958)。氏はその後鍋田の墓碑群について「これらの墓には十字章や銘文がないので、禁教時代の潜伏キリシタンの墓ではないかと思う。」(半田1961)と禁教令以前の墓碑よりものちの新しい時代のもではないかという年代観を一定の根拠をもとにのべた。最近では五野井隆史がヨーロッパの墓碑との類似から鍋田墓碑に触れている(五野井2012)。まず墓地と墓碑を紹介しよう。

墓地は現在佐藤家と渡辺家の累代墓を中心に鍋田地区の数家の墓地が作られている。その間に、戦国時



写真1 鍋田キリシタン墓地

代16世紀ごろの五輪塔の部材が数点集められているそばに2号墓と3号墓が並列して配置され、4号墓はやや離れた位置に、1号墓は墓碑が移動した状態で墓地の端に置かれている。墓碑が本来の位置を保っていると考えられる1・2・3号墓は東西方向に置かれている。墓碑の番号は半田1958を踏襲した。

なおマレガ氏の発見当初は8基とされるが、半田氏の報告の段階で4基に減少しており、マレガ氏が長さ230cm幅1mと記載した大きさに該当する墓碑も現存しない。以下4基の墓碑の計測値は表1に掲載した、その際50年近く前の半田康夫氏の計測値も併記した、長さや幅の数値の違いは我々が墓碑の中軸線で計測したのに対し、半田氏らは各辺で計測していることにあり、高さの違いは墓碑が傾斜しているために誤差が大きくなることによる。

石材はいずれも硬質の凝灰岩で、少なくとも野津地区で産出するものである。

1号墓碑(図1、写真2) 道路法面の階段を上ってまっすぐ数mいったところにある伏碑で、全長164cmの寄棟形で、平面形は長方形というよりやや小判型で、棟の高さは低い。全体に整形されているが、丁寧ではない。

2号墓碑(図2、写真3) 墓地奥の佐藤家累代墓の背後奥に3号墓と並列しておかれている。全長162cmで、1号墓とほぼ同じであるが、幅は狭く、平面形は長方形で、大棟も長く、整形が行き届いて端正な印象を与える。

3号墓碑(図3、写真4) 全長109cmと小ぶりであるが、大棟が長くかつ高く作っているため、寄棟の形態が強調される。幅は2号墓とほぼ同じである。1・2号墓は成人埋葬の大きさに符合するで、3号墓は小児埋葬の墓碑である可能性があるが、17世紀の中葉に近づくに

表1 鍋田キリシタン墓碑計測表

墓碑番号	長さ	幅	高さ	大棟の長さ	軒の高さ
1号	164(158)	82(77)	18(24)	76(85)	8(9)
2号	162(160)	68(67)	22(27.5)	107(109)	10(9)
3号	109 (108)	63(60)	29(23)	64(65)	7(11)
4号	150以上	40以上	—	—	—

*括弧内は半田1958の数値

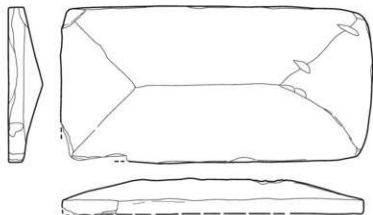


図1 網田キリシタン墓1号墓碑



写真2 網田キリシタン墓1号墓碑

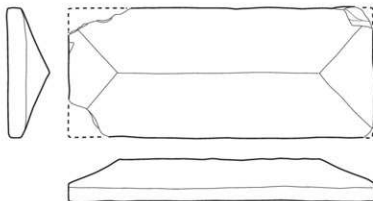


図2 網田キリシタン墓2号墓碑



写真3 網田キリシタン墓2号墓碑

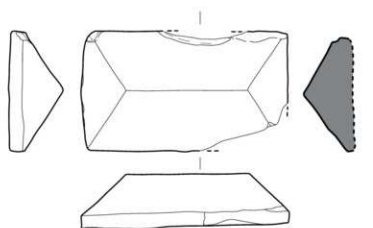


図3 網田キリシタン墓3号墓碑



写真4 網田キリシタン墓3号墓碑



図1～3 網田キリシタン墓実測図

つれて長さのみが短くなる傾向があるので、やや時期の下る成人墓碑の可能性も残されている。

4号墓碑 半田1958では板状伏碑にあたる「平型」とされた伏碑であるが、石材の加工の状態が整形される以前の粗加工の状況であるので、粗製伏碑と考えられる。現状では半ばうもれ背面の中央部が露出しているので、実測は見送ったが、全長150cmをこえる大型墓碑である。

以上が彌田墓碑群の寄棟形伏碑の現状である。

3 神野家墓地のキリシタン墓碑

白竹市野津町川登に所在する神野家の墓地中に所在する。平成25年（2013）に神田高士氏、大石一久氏、森脇あけみ氏が確認し、筆者も現当主の神野文夫氏のご案内で、その5月の墓地を観察して墓碑のなかに寄棟形の墓碑4基と墓碑を支える石組遺構を存在を確認した。

神野家墓地全体は現存120基ほど、おそらく本来150基をこす墓碑群からなる近世～現代にいたる墓地である。神野家住宅背後の丘陵斜面の何段か削平して墓域を造成している。慶長10年（1605）年に墓地がはじまったと考えられ、上中下三段の墓域からなり、入り口には墓地全体の供養塔がある。下段はキリシタン墓碑を含む17世紀から18世紀前半代の墓域、中段は宝暦2年（1752）ころに追加されたと考えられる墓域、上段は1865年ころに造成された墓域である。埋葬が増加するにしたがって丘陵の上方に拡大したものである。神野氏一族の墓地で、他姓の埋葬は行われていない。1660年代の寛文年間に仏教型の板碑形墓碑に転換している。今回報告するのはそれ以前にさかのぼると推定される墓碑である。現在数基の寄棟形墓碑が見いだされ、25号墓の墓碑の下には大型碑を利用した石組遺構が残されている。また当初寄棟形墓碑のみであった墓碑の上に、後になって仏教の墓碑を樹立して、伏碑を墓碑の台座に見せる加工がおこなわれているのがこの墓地の特徴であり、その点からも寄棟形墓碑がさかのぼる墓碑と考えられた。計測値を表2に示した。石材は凝灰岩製である。野津でもこの辺りには凝灰岩は産出しないので、野津市周辺からもたらされたものと考えられる。

下段18号墓碑（図4、写真5）19号墓碑の上に重なっておかれていたもので、本来の位置からは動いている。全長75cmの小型品で大棟全体はかなり低いが全面を細かく調整し、平面形も長方形で端正である。

下段19号墓碑（図5、写真6）18号墓碑とともに、墓所の端に重なられていた墓碑である。全長114cm平面形は直線的な長方形で、棟筋も通っている整形品である。以上の2基は本来の位置から移動しているの、下部に石組遺構が存在したかどうか不明である。

下段28号墓碑（図6、写真7）18号墓と同様の全長72cmの小型品であるが、寄棟形墓碑の背面上部に高さ45cmの板碑型の近世墓標を建てている。墓標は御影石系の薄桃色の花崗岩で、柄突起のないタイプのため、墓碑の上部に墓標下部がすっぽり入る柄凹部を彫り込んでいる。墓標の銘文はほとんど読み取れないが「寛文」の年号がわずかに読み取れる。寛文年間の被葬者に当初はこの型式の寄棟形のキリシタン墓碑がたてられていたことを示している。その後仏教形式の墓標を追加したものである。そのために石材が異なることになったと推定される。

下段42号墓碑（図7、写真8）28号墓と同様に寄棟形の墓碑の上部に柄穴が後になってほられたもので、半分に折れて、積み重ねられていた。本来の位置は不明である。

以上の4基が寄棟形の伏碑である。この墓碑がキリシタン墓碑であることの証左

表2 神野家墓地キリシタン墓碑計測表

墓碑番号	長さ	幅	高さ	大棟の長さ	軒の高さ
18号	75	53	18	47	12
19号	114	78	21	66	13
28号	72	57	23	40	13
42号	63 (98)	63	31	50 (70)	16

*42号の括弧内は復元値

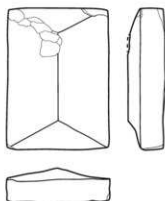


図4 神野家墓地18号墓碑

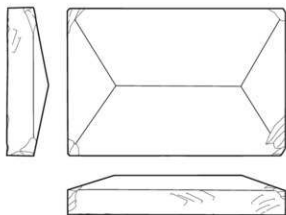


図5 神野家墓地19号墓碑

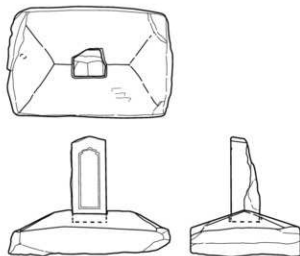


図6 神野家墓地28号墓碑

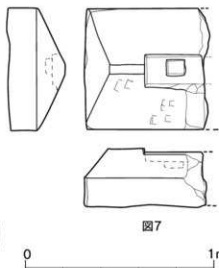


図7

図4～7 神野家墓地キリシタン墓実測図



写真5 神野家墓地18号墓碑



写真6 神野家墓地19号墓碑



写真7 神野家墓地28号墓碑



写真8 神野家墓地42号墓碑

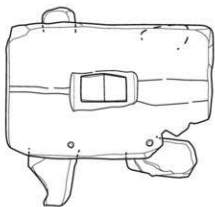


写真9 神野家墓地25号墓碑

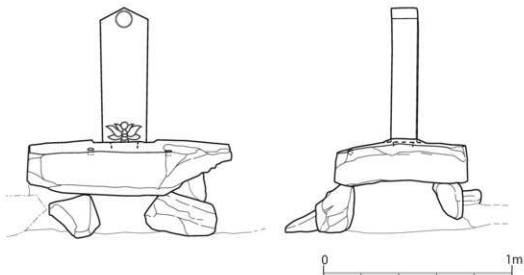


図8 神野家墓地25号墓碑実測図

となった25号墓(図8、写真9)は自然石からなる石組みの上に全長108cmの扁平平板状伏碑を置いたもので、その背面上部には後で柄穴を穿って明暦2年(1656)銘の近世仏教式墓標が追加されている。墓標型式は17世紀末まで下ると推定される。つまり1656年に亡くなった男子成人は初めキリシタン墓の様式で葬られ、そのご仏教に改宗した子孫によって戒名がつけられ新たな墓標がキリシタン墓碑を改造してその上に建てられたと考えられる。

この25号墓と同じことが28号墓と42号墓で行われている。その墓碑形式は寄棟形伏碑であり、改造が行われずに片付けられていた18号と19号墓碑も同じく寄棟形伏碑であるので、キリシタン墓碑であると判断した。

おわりに

寄棟形石造物をキリシタン墓碑と推定する出発点となったのは、下藤キリシタン墓地での墓上施設としての石組遺構の発見である。石組遺構自体は伏碑を載せるものも載せないものもあるが、その存在はキリシタン墓地認定の強力な証拠となり、西寒田クルスバ遺跡(白杵市069)、岡ナマコ墓、栗ヶ畑亀甲墓地、そして神野家墓地もその一つである。神野家墓地では寄棟形墓碑がキリシタン墓碑として使用されていたと考えられ、それが鍋田墓碑をキリシタン墓碑と考える手掛かりとなった。同時に神野家墓地のキリシタン墓碑は1650年代から60年代の年代を与えることができ、その頃の伏碑がいずれも長さか110cm以下に短小化していることがうかがわれる。鍋田墓碑(白杵市073)はいずれも神野家墓碑より長く大きく、17世紀でも初頭に近い墓碑であると考えられる。いずれの墓碑にも銘文が記されていないことからすると、白杵藩がキリシ



表3 日本における戦国時代から近世初期のキリスト教墓碑の基本分類

タン禁止政策に乗り出した慶長17年（1612）から豊後崩れが本格化する1660年代にかけて寄棟形墓碑や粗製伏碑が使用されたと考えられ、当初の成人の身長に符合した長大なものから次第に1メートル前後の墓碑に短小化していったと推定される。同時に寄棟形墓碑の存在は、豊後において1660年代の豊後崩れの時期までは、禁教後もキリシタン式の埋葬がおこなわれていたこと。つまりキリスト教信仰を維持した人々があったことを示すものであろう。

以上のように大分県臼杵市野津地域に残された寄棟形の大型石造物を17世紀前半のキリシタン墓碑の一形式とすると、現在知られているキリシタン墓碑の分類は表3のようになる。

本稿を草するにあたり、実測に協力いただいた別府大学の諸君、神田高士氏、大石一久氏に感謝すると

もに、神野文夫ご夫妻には調査中さまざまなご便宜を図っていただいた。記して感謝します。

註1) 田・新村編1923p68-69には1688年に死去したフェルビースト(南惟仁)墓の写真と略図が掲載され、1610年逝去のマテオ・リッチ墓も同一形式であることが述べられている。彼らイエズス会士の墓碑が、日本のキリシタン墓碑を認定する権の一つの参照軸になっていたのである。

註2) 『日本カトリック新聞』1938、1.23日号は「切支丹伝説の地に聖堂の遺跡を発見大分教会マレガ師の苦心」と題された記事があり、そのなかでマレガ氏らによって鍋田共同墓地において8墓の墓碑が発見されたと報じた。

(文献) (発表年代順)

濱田耕作・新村出編1923『吉利支丹遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告7冊

十時英司編1940『町村別 大分県史跡伝説地詳図』郷土史跡伝説研究会

片岡弥吉1942『長崎県下キリシタン墓碑総覧』『キリシタン研究』1輯 キリシタン文化研究所

片岡弥吉1976『キリシタン墓碑の源流と墓碑形式分類』『キリシタン研究』16集 吉川弘文館

マリオ・マレガ1946『続豊後切支丹資料』ドンボスコ社

半田康夫1958『新たに発見された豊後キリシタン遺物・遺跡』『大分大学学芸学部研究紀要』7号(人文科学) 大分大学学芸学部

半田康夫1961『豊後キリシタン遺跡』いずみ書房

片岡瑠美子2012『キリシタン墓碑に関する研究史』『キリシタン墓碑の調査』(科研費報告書) 長崎純心大学

五野井隆史2012『キリシタン墓碑の源流について』『キリシタン墓碑の調査』(科研費報告書) 長崎純心大学

大石一久編2012『キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会

田中裕介2012『日本における16・17世紀キリシタン墓碑の形式と分類』『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会

神田高士編2016『下藤地区キリシタン墓地』臼杵市教育委員会

はじめに

中世石造物には国東塔を含む宝塔や宝篋印塔など、塔の内部（塔身や基礎、基壇部）に経や遺物を納入するための納入孔を持つものや納入孔がなくても塔身の内部が割っていたりするものがある一方、板碑や角柱塔婆、一石五輪塔などのように塔身そのものには空間を持つべくもないものがある。しかしながら、後者についても石塔直下や至近の地下に何らかの埋納施設を有するものがあることが知られている。

発掘調査事例

大分県内でよく知られた事例としては、其ノ田板碑（豊後高田市362）の例がある。富貴寺の約300m南西側（下流）の川沿いに並んで立つ2基の大型板碑（県指定）は、碑面に彫られた銘文から同じ建武元（1334）年に、1基は「沙弥道安」と「沙弥明道」の二人の「精霊」を訪うために「法阿」が造立し、もう1基は「地藏堂講衆」が造立したことがわかる。そこが河川改修によって削られることになり、周辺部の発掘調査を行ったところ、板碑の前には川原石を敷き並べた「集石遺構」が展開し、その隣接地点から2基の墓（いずれも土葬）が見つかったのである。この2基の墓が「沙弥道安」と「沙弥明道」の二人の墓の可能性は高い。何故ならば、通常の板碑の立地とは異なり、河川沿いの川原とも呼べる場所に立っていることは、その「場」に何らかの意味があったからであり、それが遺体を埋葬した地を意味している蓋然性が高いからである。同様の例は、杵築市大田の森の木遺跡でも確認されている。川原に築かれた「如法経」と彫られた板碑（時期は室町期か）が置かれていた集石遺構（上部には江戸期の石塚が築かれていた）の内部から、3基の小石室に納められた骨蔵器（1基は納経の可能性が高い）が出土している。時期は13世紀前半と考えられるが、同様の立地に墓が築かれた事例である。川原に立つ板碑などの石塔が、埋葬地の至近に供養塔として造立されたものである可能性が高いことを考えれば、他の立地のものについても、供養の為に建てられたのであれば、埋葬地からそれほど遠くない地点である可能性も高いのではなかろうか。

さらに、発掘調査では埋葬施設と密接に結びつく事例もある。豊後高田市真玉町にある城前遺跡（豊後高田市187）では、崖面に狭く細長い平坦地を幾段か造成し、そこに墓坑を穿ち石塔を建てていたのが確認されている。調査前は、山裾や斜面に転倒した五輪塔や板碑が散在しているだけで、外面上は何ら埋葬地を示すものはなかった。唯一、すぐ横の崖面には「ガラジン様」と呼ばれている岩窟があり、内部に中世後半期と考えられる男女や僧形の丸彫り石像が置かれていたことから、何らかの供養が行われた場であったことは予想されていた。しかし、発掘調査を行うと、大小7箇所のテラスに50基の墓坑が穿たれているのが確認されたのである。多くは2基で一つのまとまりを持ち、いくつかの内部からは火葬骨が出土している。つまり、某所で茶毘に付されたのち拾骨し、墓坑に納めたのである。時期は紀年銘の記された石塔は無いので確定はできないが、石塔の形状や僅かな出土遺物からは室町期のものと推測出来る。「ガラジン様」の男女像に象徴される「夫婦」が、あらかじめ掘られた墓坑に並んで納骨されるというやや特異な事例ではあるが、単なる五輪塔散布地の地下にもこのような遺構が埋まっているという良い事例である。

地頭の墓所

また、地頭クラスの墓地とされる場所が県内でも何箇所か確認されている。これらの発掘調査事例は無いが、地表下に埋葬遺構を伴うであろうことは予想される。いくつかの事例を見ておきたい。

国東半島のほぼ中央部にある田原別符（杵築市大田）の地頭であった田原氏（大友氏）は、丸山墓地と呼ばれる墓地を築いている。永和元（1375）年の銘のものを含む30数基の五輪塔や宝篋印塔（杵築市327）があり、五輪塔には全高170cmを超える大型のものも含む。墓地は丘陵の先端部に立地し、眼前に広がる平

野との比高差は10mほどである。丘陵裾には桂川が流れ、そこを挟んだ北側の平野部には発掘調査によって田原氏館と推定される館跡が確認されている。すなわち、館の東辺の延長線上に墓地が位置することになるのである。逆に西辺の延長線上には石造五重塔と大型五輪塔がある。つまり、石造物が館と密接な位置関係を有しているのである。

同様の事例は中津市三光の深水荘の在地領主であった深水氏の場合でも確認出来る。深水氏は、スリヤネ城と呼ばれる館を丘陵上部の平坦地に築いた。その館からさらに一段高くなった丘陵の裾部、館から比高差10m程度のところに宝篋印塔や宝塔、五輪塔で構成される墓地（中津市157）を築いている。こゝも、墓地から眼下に館を望むことができるのである。このように、墓地と館、屋敷は指呼の中にあることがあった。

また、地頭クラスの墓地については、先記した丸山墓地の他、扶間氏墓地（由布市105）、八坂氏墓地（杵築市201）、竈門氏墓地（別府市025）など、大型のものを含む五輪塔群で構成される場合が多い。さらに、八坂氏墓地は地面に礫が敷かれていた可能性があり、この点では屋成家墓地（中津市236）などと同様の形態を示すものであろう。発掘調査でも、今成館跡の発掘調査で見つかった内部に小礫を敷き、周囲を大型の礫で区画するものや、先述した其ノ田板碑（豊後高田市362）の前面の礫敷きのあり方などとも共通する点である。そこからは、礫による区画を連続した埋葬施設が地下に埋まっていることを推測させる。

墓地の景観

発掘調査を伴わずに中世墓地の景観を論ずるのは無謀とも思えるが、今回の調査を通して地表面から観察できたことを述べておきたい。

前記したように、中世墓地には礫敷きが目立っているものがある。その礫敷きかいくつかの区画が連なったものであったかは、地表面から観察出来た事例はない。また、豊後高田市内の事例であるが、尾根上に複数の石棺状の石組みが露出し、至近に五輪塔が点在しているものがあつた。大分県内の発掘調査で、中世の石棺が確認された例はないが、杵築市大田にある財前家墓地国東塔（杵築市260）の修理にともなう解体したところ、基壇内部が石棺状に空間となり、そこに遺体が埋葬されていたのが確認されている。このように同じ土葬でも、木棺ではなく石組みまたは石棺に納めた事例は確かに存在する。

次に、五輪塔や宝塔が複数基、基壇状の高まりの上に立てられているものが確認されている。その場合、基壇は扁平な安山岩が小口積みで積み重ねられていることがある。豊後高田市雲仙寺の墓地（豊後高田市157）のように、崖面にテラスを造り出すために安山岩の板石を重ねたものと、同じく豊後高田市山口古墓（豊後高田市339）のように単独の基壇を作り出すものがある。また、明確な基壇状の施設はないものの、中世石塔が散在する同じ場所で、板状安山岩に縦線を刻んだり、墨書が残っていたりするものが複数あつた。いずれも国東半島で確認されたものである。これが、経を記したものであれば、経塚と墓地との近縁性を示すことになる。国東塔などでも「如法経」や「法華経」などの文言を刻んだものがあり、塔身に納めるのか、地下に納めるのかという違いであろうか。

近世墓地との繋がりが

今回の調査では、住宅地図に記載のある「墓地」を全て調査対象としたことから、「墓地」で中世石塔が見つかると事例が多かった。現在の地図に記載のある墓地なので、当然現役の墓地であり、近代以降の墓石に混じって江戸期の墓石がある、という至極通常の墓地である。その墓地で中世石塔が見つかると、まんべんなく分布しているのではなく、墓地の一角にまとまっている場合が多かった。この中には、当然江戸期以降に一箇所にまとめられたというものも含まれるであろうが、造立当時の状況を反映したものもあると思われる。墓地を形成した「イエ」や村のあり方も反映したものと考えられるので、それぞれの事例に応じて考えていくしかないだろう。また、五輪塔が散見出来る「墓地」は、江戸期の墓標の紀年銘を見ると、17世紀まで遡ることが多いとも言える。このことは、五輪塔の終焉時期の問題になる。大分県内では、通常の

「墓地」で見られるような五輪塔に江戸期の年号を刻んだものは未確認である（寺の墓地ではいくつかの事例がある）。しかし、状況から考えて17世紀まで五輪塔が造立されたことは確かであろう。ただし、五輪塔が確認される「墓地」では、年号の刻まれる事例がほとんど無い自然石塔婆がある場合が多い。この自然石塔婆については、戦国期から慶長、元和年間頃のものがあることから、墓石の大きな流れとしては、五輪塔→自然石塔婆→近世墓碑ということになるだろう。

まとめ

いくつかの事例を見ながら、今回の調査で明らかになった石塔群の位置づけについて考えてきた。地表に建てられ、その後長い間信仰や供養の対象として祭られ、そしてイエの断絶や講組織の解体、寺や村の廃絶など様々な原因によって本来の意義を失ってしまった石塔を、現段階で表面的な観察のみで、その意義に迫ることは困難なことではあるが、今回のような悉皆的調査を行うことによって、そして発掘調査事例との比較を通して、僅かながらではあるが曙光が見えてきたように思う。地表面観察の重要性をあらためて認識したとともに、農村部（もちろん、都市部では早くに失われてしまっているが）の「原風景」の急変を目の当たりにするにつけ、このような調査がもう少し早い時期にできていたならば、とも思うのである。

第5章 総括

第1節 大分県における石造物の展開とその意味するもの

大分県は「石造文化財の宝庫」といわれる。その背景には豊富な石材がある。県中南部の阿蘇溶結凝灰岩、県中北部の安山岩である。国指定特別史跡・国宝に指定されている臼杵石仏（臼杵市041他）をはじめ、国・県指定物件が250件を前後する数にものぼるように全国的にも質量とも卓越した中世石造文化財に恵まれているが、中世に限らず、近世にも多種多様の石造物がみられるうえ、近世～近代には石橋が全国一多い地域としても有名である。これも、良質な火成岩がいたるところで採取できる好条件に恵まれた土地ならではのものである。

大分県の石造文化財は、平安時代後期に始まる。臼杵石仏をはじめとして豊後高田市熊野磨崖仏（豊後高田市423）・大分市大分元町石仏（大分市076）・大分市高瀬石仏（大分市091）・豊後大野市菅尾磨崖仏（豊後大野市146）など平安期に遡る磨崖仏の優品は少なくない。磨崖仏が生まれる絶対条件として、良質な露岩の存在がある。前述した、阿蘇溶結凝灰岩は県の中南部に多く、また、国東半島や県北部には角礫凝灰岩や安山岩の露頭が多いため、それぞれ岩質にあった磨崖仏が刻まれている。

大分県における石塔の出現に関しては、五輪塔に始まる。わか国最古の在銘五輪塔である岩手県平泉釈尊院五輪塔（1169年）に次ぐ古さをもつ臼杵市中尾に所在する2基からなる五輪塔（臼杵市047）は、嘉応2年（1170）銘をもつものと、承安2年（1172）銘をもつものである。この両者は一石で形成されている特徴をもち、この特徴は臼杵市や国東市において確認できる。承安2年銘をもつ中尾五輪塔地輪には「十部如法経」とあり、納経のために建塔されたものであることがわかる。紀年銘がみられないが、国東市国見町妙吉寺一石五輪塔は平安時代末～鎌倉時代前半のものと考えられ、水輪部に奉納坑が穿たれており、目的は断定できないものの、納経である可能性が高い。

五輪塔とともに古式の石塔に位置付けられるものは、宝塔である。紀年銘資料はみられないが、平安時代後期におさまるものと考えられる豊後高田市香々地町坊中岩屋宝塔（豊後高田市151）や、平安時代末～鎌倉時代初のものと考えられる国東市国見町千灯寺宝塔（国東市070）に出現期の類例をみる。千灯寺宝塔は本来、千灯寺跡奥の院の岩屋に置かれていたものであり、坊中岩屋宝塔とあわせて、古式の宝塔は岩屋に置かれている特徴をもつ。また、千灯寺宝塔には塔身に納入孔が穿たれ、塔身横に方形の蓋石が嵌められている特異な形態をもち、納経のためのものであることがうかがえる。

このように、五輪塔・宝塔が平安後期に出現し、その機能として納経を目的としたものから始まることが考えられる。これに続き、宇佐市安心院町最明寺五輪塔（宇佐市262）・豊後高田市富貴寺笠塔婆群（豊後高田市365）など五輪塔や笠塔婆が鎌倉時代中葉にみられる。五輪塔は一石形成のものに加えて組合せのものが出現するが、この時期の類例はきわめて少ない。石塔が系譜を遡って出現するのは文永～正応期（1264～1292）の鎌倉時代後葉からである。

宝塔に関しては、中津市本耶馬溪洞屋成家墓地宝塔（中津市236・1282年銘）、国東市国東町岩戸寺宝塔（国東市081・1283年銘）、豊後大野市蓮城寺宝塔（豊後大野市282・1296年銘）など各地においてそれぞれ特有の形態をもつ宝塔が出現する。また、板碑は国東市安岐町護聖寺1号板碑（国東市170・1291年銘）、宝篋印塔は紀年銘がみられないものの文永・弘安期のものと考えられる臼杵市深田宝篋印塔（臼杵市053）、層塔は臼杵市野津町水地九重塔（臼杵市111・1264年銘）がみられる。この時期の石塔には共通する様相があり、屋成家墓地宝塔・岩戸寺宝塔・蓮城寺宝塔・深田宝篋印塔、加えて紀年銘がみられないが同時期のものと考えられる佐伯市上岡十三重塔（佐伯市040）などは、いづれも他の石塔をモデルとしたものではなく、工芸品や絵画などの塔婆をモデルとした形態的特徴をもつ。これらの中でも、屋成家墓地宝塔・岩戸寺宝塔などそれぞれの地域に根付いた型式の嚆矢となるものもあれば、蓮城寺宝塔・深田宝篋印塔・上岡十三重塔のように単発的に消えていくものもみられる。しかし、宝塔（国東塔）・五輪塔・板碑は

いずれも鎌倉後期から南北朝期にかけて質量とも隆盛をきわめる時期となる。

鎌倉時代後期～南北朝期前葉には、それぞれの塔形において特有の主旨がみられる。例えば、国東塔は六郷山寺院の講堂周辺に置かれていることが多い。六郷山寺院における講堂は当時、中心伽藍とされるものであり、寺院の中心的な空間に置かれていることや、塔身に納経のためと考えられる奉納坑をもつ点が共通している。また、五輪塔は墓塔として造立されていることが多く、瀧門氏のもたとされる別府市御雲神社五輪塔群（別府市023）や扶間氏のもたとされる由布市扶間町扶間家墓地（由布市105）をはじめ、各地を代表する有力武士の墓として採り入れられているものが多い。これに対し、板碑は杵築市大田財前家墓地板碑（杵築市260）や国東市川原板碑（国東市264）にみられるように、歴史的環境の中で生き続けるものは、中心となる塔婆を取り囲む位置に建てられており、忌日・年忌が確認できるものもみられ、石塔造立の契機としたものが多くみられる。

これに対して、南北朝期中葉には石塔の様相に変化がみられる。宝篋印塔の再出現や流行、加えて様々な塔婆に結束の存在が確認できる銘文がみられることである。宝篋印塔の流行は神宗の教線拡大が背景にあるものと考えられ、禅宗僧侶の墓塔である重刹無縫塔もこの時期から室町期にかけて流行する。また、この時期には、「結束」・「一結束」・「講案」・「時案」などの銘がみられる結束の塔婆が、宝篋印塔・宝塔・板碑をはじめとして様々な塔種において流行する。南北朝期中葉には集村化の走りが確認でき、集村化された地域の信仰の場として村のお堂に力を出し合っひときわ大きな塔婆を造立し、結束の証とする風習がみとれる。加えて、南北朝期後葉以降には結束の塔婆に交名を列記する類型がみられはじめる。

このような結束の塔婆は室町期から戦国期に至り、宝篋印塔から石幢（六地藏塔）や石殿にその主役を譲り、小庵・小堂前や墓地、さらには何らかの結界の地にひときわ大きく造立されている。紀年銘資料でみれば、石幢（六地藏塔）は大分市中間石幢（大分市308・1399年）に出現し、徐々に数を増やし戦国期に流行し、また、石殿も豊後高田市真玉寺石殿（豊後高田市・1459年）以来、戦国期に流行する。石殿・石幢（六地藏塔）が六地藏や十王をはじめとした尊像を刻み、同じ信仰背景のもとで造立されていることがわかるが、石殿が宇佐市から国東半島の狭いエリアに流行していることに対して、石幢（六地藏塔）は県下全域でみられる。

加えて、南北朝期以降、丸彫りの石仏が多く造顕されるようになる。中でも、地藏や十王をはじめとした像様が南北朝期後葉以降、国東半島からその付け根である旧速見郡域において流行する。地藏や十王が多くみられることから、これらは石殿・石幢（六地藏塔）と同じ信仰背景のもとで造立されていることが考えられるが、同じ地域である国東半島では、石仏が石殿・石幢（六地藏塔）に先行して出現するが、大分県中南部においては石幢（六地藏塔）のみであり、地藏・十王信仰に伴う石造物は国東半島周辺において多様である。

石塔全体の傾向であるが、室町期には石塔自体、数が少なくなり、それを前後する時期を比較すれば、石造物に大きな変革がみられる。戦国期には石幢など結束の塔婆を除けば、五輪塔・宝塔・宝篋印塔・板碑などをはじめ様々な石塔が小型化・粗雑化していく。中には一石五輪塔のように、より簡素化された石塔も出現・流行する。これらにみられる銘文から、この時期のほとんどの石塔は墓碑の機能をもつものであることがわかり、近世の墓碑に通じる要素がここに出現する。戦国期には南北朝期後半にはじまる集村化が急速に進展し、集落規模も拡大する。併せて集団墓地が形成され、数多くの墓が営まはれはじめるが、石造物の変化はこのような社会的変化に呼応している。戦国期に流行する様々な小型石塔は、慶長・元和・寛永年間等、近世に至っても何ら変わることはなく、大きな転換期を迎えるのは寛文期（1661～1672年）に至ってからである。寛文期には中世的な石塔が一斉に消え、板碑型墓碑の出現をみて近世墓が始まる。また、新たに墓地造営される地域が非常に多く確認でき、近世墓の確立により、中世的な石造物が駆逐されてしまった感がある。この背景には幕藩体制下での寺壇制度の強制があると考えられ、近世的な人民統制が石造物の変化に反映されていると考えられる。

また、中世から近世への移行期に、大分県においてきわめて特徴的なキリシタン関連石造物の流行をみる。キリシタン大名で有名な大友宗麟の庇護のもと、多くのキリシタンが大分県下に存在したことは、宣教師であるルイス・フロイスによって著された「日本史」をはじめとした史料によりうかがえる。布教は府内や臼杵、朽網、野津、湯布院などの地に及び、キリシタンへ改宗したことがわかるが、臼杵市野津寺小路磨崖十字架（臼杵市078）や豊後大野市朝地町市万田干字クルス、竹田市原のキリシタン墓十字架（竹田市050）・日田塚十字架（竹田市059）、佐伯市重岡キリシタン墓・臼杵市槇橋キリシタン墓など、様々な様相をもつキリシタン関連石造物がみられるのも、大分県の特徴であろう。

以上、大分県における石造物をまとめた。その特徴として、全国的にみても軟質石材地帯であるため、比較的早くから製作されはじめ、みられない塔形がないといつてよいほど、多種多様なものがみられ、これが最も大きな特徴である。また、石塔自体はあくまでも一つの遺物にすぎないが、全国的にみても歴史的環境の中で生き続けているものも少なくない。大分県が「石造文化財の宝庫」といわれる所以である。

第2節 今後の石造物の保護について

今回の9ヶ年にわたる調査によって、大分県内約3,600箇所に約30,000基にのぼる中世石造物があることがわかった。これら中世石造物は、遺跡の発掘調査でも出土することがあり、その場合は埋蔵物としての文化財の取扱いを受け、保護の対象になる。しかし、今回確認された約30,000基はすべて地上にあるものであり、県や市町村の有形文化財としての指定を受けている約800基および墓地などの史跡として指定されているものをのぞくと、保護の対象とされるいわゆる「文化財」ではないことになる。しかし、多くの発掘調査事例が示しているように、石造物は地下に埋納遺構を伴うものがあることを考えれば、石造物はあくまで地上の表徴として捉えるべきものであり、地下遺構と一体となって保護されるべき「文化財」としての扱いを受ける必要がある。さらに言えば、仮に地下に何ら遺構を作らないものでも、遺立そのものがその「場」に何らかの作用を及ぼしている（及ぼすことを期待して建てられた）のであり、石造物そのものを埋蔵文化財の「遺跡」あるいは「遺構」として捉えるということも必要となってくるであろう。

そのように考えれば、今後の保護を考える場合には、今回調査対象となった約3,600箇所の約30,000基の石造物を二つに分けることになる。すなわち、遺立された場所から動いていないものと後世に動いた（動かされた）ものの2種類である。ただし、後者においてもある一定のエリア内（例えば墓地）で動いている（組み合わせを失って、積み重ねられているなど）場合には、広い意味では動いていないと捉えるべきであろう。そうすれば、前者と後者の一部については、「遺跡」あるいは「遺構」として埋蔵文化財包蔵地に加えることができ、法的に保護の対象となってくる。

問題は後者の残り、すなわち本来遺立された場所から何らの関わりも持たない地点に移動したものである。正確には判断しかねるが、石造物として優れたものほどこのように本来の場所から移されていることが多いように感じる。これには石造物が売買の対象となって移されることのみならず、地域の人が石造物そのものの価値を評価して、よかれと思って保護、保存のために移されたものも含まれるだろう。これらは、幸い指定文化財になっている場合が多い。しかし、今回の調査によってそこから漏れているものも多数確認された。今後は優れた五輪塔はもちろんであるが、五輪塔以外の塔形は県内で約7,000基、その内完形あるいはほぼ完形に近い状態で保たれているものが3割から4割程度であることを考えれば、石造物としてはっきり一般の人にも認知出来るものは約2,500基ということになる。このうち約800基が指定になっていることを考えると、残り約1,700基程度の保護が問題となってくるのがわかる。この数字は、市町村や県で指定するのにそれほど困難な数字とは思えない。

大分県内の中世石造物の約4分の3を占める五輪塔（約21,000基）は、本来の組み合わせを失ってしまっている場合がほとんどといつて良い。一石五輪塔2,810基と一応空風輪から地輪まで揃っている（厳密に遺立当時から組み合わせが替わっていないかは詳細に検討していない）もの2,805基を除く15,000基あまり

は部材にばらけてしまっている。しかし、先述したように、ある一定のエリア内で動いていると判断出来る事例が大部分を占めている。具体的には近世以降の墓地の片隅や、墓地内の一定のエリアに集められていたり、大きな宝塔や宝篋印塔の回りに集められていたりすることが多いのである。これらは、たとえばばらになっていたりとしても、その場にあるということが意味を持つと言える。そうすれば、ある程度数の数がある場合には、その地点を埋蔵文化財包蔵地にすることによって、保護の対象とするという道が見えてくる。

このように、石造物のあり方によって考え方はやや異なるものの、①市町村あるいは県指定の有形文化財あるいは史跡として保護する、②石造物のある場所を「埋蔵文化財」として保護の対象とする、という二つの方法によって多くの中世石造物が保護の対象となるのが望ましいと考える。しかし、本来は石造物のある地域の人々が生活の中で守っていくというのが石造物を後世に伝える最も望ましい姿ではある。しかしながら、山間部などでは集落そのものが消滅の危機に瀕しており、廃屋が連なる村の草むした墓地の中に中世石造物が主を失って静かに立っているという光景に何度も出くわした。やはり、行政の手で何とか守り伝えていかないと、数十年後には石造物の在処が誰にも判らなくなるであろうということを今回の調査で痛感した次第である。

今回の調査は、時間的制約から表面的な調査にとどまった。地域で調査を行う場合に、地域の人からの聞き取りはほとんどできなかった（当初からの方針でもあるが）。しかし、少し余裕のある場合に聞き取りをすると、表面的な調査では知ることのできない石造物を紹介してくれたり、石造物にまつわる話を語ってくれたりした。このような、もう一步踏み込んだ調査は県立歴史博物館が「国東半島の荘園村落遺跡調査」で行ってきたが、やはり大きな成果をあげている。今後、このような地域に密着した調査を他地域でも行う必要性を感じた。そうすることが、それぞれの地域で文化財や歴史資料としての石造物を将来に伝えていこうという機運を醸成することにもつながっていくであろう。近い将来、今回の資料をベースとした新たな展開を期待したい。

金石文年表

- 1 年表に記載する金石文は慶長5年（1600）までとし、調査で所在が確認できなかった石造物であっても銘文が公表されているものは収録した。
- 2 文献記載の金石文と報告書地名表編との対応を図るため、地名表番号と名称を併記した。
- 3 文献記載の銘文は現地確認結果等で一部修正を加えたものがある。また、銘文があるとされるもののその内容が不明なものは網掛けで表示した。
- 4 年表に記載の銘文は現地での確認の他、主に以下の文献によった。
 - ・日名子太郎1940『大分懸金石年表』（私家版）
 - ・望月友善1975『大分の石造美術』木耳社
 - ・矢野東鐵雄1985『二豊金石文年表』（私家版）
 - ・伊東 東・芦刈政治2011『増補訂正 大野郡金石年表』（私家版）
- 5 金石文の拓本は別冊に掲載の予定である。

番号	西語	和語	原文	所在地	市町村名	地名漢字番号	名称	石塔類別	備考
254	1370	徳安3年	徳安三年戊辰前住僧二世世樂師種子鑿第十一月■■■■■ 鹿去	鹿後大野村鹿野町島田 神角寺北ノ坊	鹿後大野村	鹿後大野村	神角寺北ノ坊寫字印石塔遺構	五輪塔	
255	1370	徳安3年	徳安三年己卯二月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	石室	
256	1371	徳安3年	建徳三年壬子三月	鹿後大野村大野町大野町大字十十坊	鹿後大野村	鹿後大野村	鹿後大野村中央公民館石塔群	板碑	
257	1372	建徳3年	今山三山口是我有其有泉石山口口口 建徳三年三月二十三日口口口口	鹿後大野村大野町大野町大字三三坊 金島ノ坊	鹿後大野村	鹿後大野村	金島寺跡石塔群	宝篋印塔	
258	1372	建徳3年	建徳三年壬子三月	鹿後大野村大野町大野町大字三三坊 金島ノ坊	鹿後大野村	鹿後大野村	鹿後大野村大野町大野町大字三三坊 金島ノ坊	宝篋印塔	
259	1372	徳安5年	徳安五年大徳壬子九月八日 一給講書 大匠師源正次法師源清 抄巻通口大神佛	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
260	1373	徳安5年	上大徳師源正次法師源清 抄巻通口大神佛	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
261	1373	徳安5年	抄巻通口大神佛	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
262	1373	徳安6年	徳安六年己卯二月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
263	1373	徳安6年	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
264	1373	徳安6年	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
265	1373	徳安6年	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
266	1374	徳安7年	徳安七年庚辰三月廿七日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
267	1374	徳安7年	徳安七年庚辰三月廿七日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
268	1374	徳安7年	徳安七年庚辰三月廿七日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
269	1374	徳安7年	徳安七年庚辰三月廿七日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
270	1374	徳安7年	徳安七年庚辰三月廿七日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
271	1374	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
272	1375	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
273	1375	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
274	1375	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
275	1375	文中4年	文中四年甲辰十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
276	1375	文中4年	文中四年甲辰十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
277	1375	徳安6年	徳安六年己卯二月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
278	1375	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
279	1376	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
280	1376	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
281	1376	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
282	1376	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	
283	1376	文中3年	文中三年己卯十一月廿一日 鹿去	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市	鹿後高田市 鹿後高田市 鹿後高田市	宝篋印塔	

番号	酒器	和紙	紙文	所在地	市町村名	地名標 番号	名称	石種類別	備考
321	1383	永徳3年	静口一重紗巻一乃面、雨無紗石巻縁、雨無不老行巻紗具、雨無無紗巻縁、右	白村市津町老老心芝	白村市	089	芝一重紗巻一乃面塔	空塔婆	
322	1384	永徳5年	永徳一乃面、永徳三乃面、白	白村市三重町大字野野	白村市	194	山内五石塔群	五輪塔	
323	1384	永徳5年	永徳一乃面、永徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	194	成命寺石塔群	空塔	
324	1384	永徳5年	永徳一乃面、永徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	210	宝生堂宝願印塔及び石塔群	宝願印塔	
325	1384	永徳9年	永徳一乃面、永徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	017	宮ノ道(塔の本)国庫塔	国庫塔	
326	1384	永徳9年	永徳一乃面、永徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	017	宮ノ道(塔の本)国庫塔	国庫塔	
327	1385	至徳2年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	234	青字田面像石厨石塔群	五輪塔	
328	1385	至徳2年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	234	青字田面像石厨石塔群	五輪塔	
329	1386	至徳3年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	103	木野五輪塔、宝願印塔及び石塔群	宝願印塔	
330	1386	至徳3年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	103	木野五輪塔、宝願印塔及び石塔群	宝願印塔	
331	1386	至徳3年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	105	地明区集積、五輪塔	集積、五輪塔	
332	1387	至徳4年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	043	上津神社本堂西側鳥居	石鳥居	
333	1387	至徳4年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	172	樋口宝願印塔、五輪塔	宝願印塔	
334	1387	至徳4年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	943	国光寺石塔群	国庫塔	
335	1387	至徳4年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	172	樋口宝願印塔、五輪塔	宝願印塔	
336	1387	至徳4年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	058	福願寺宝願印塔	鳥居	
337	1387	至徳4年	至徳一乃面、至徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	234	青字田面像石厨石塔群	五輪塔	
338	1387	萬暦元年	萬暦一乃面、萬暦三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	9	西岸寺宝願印塔、西岸寺石厨	宝願印塔	地名、歳と年号不一致、要 確認
339	1388	萬暦2年	萬暦一乃面、萬暦三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	165	及び石塔群	鳥居	
340	1388	萬暦2年	萬暦一乃面、萬暦三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	003	宝願寺石塔群	宝願印塔	
341	1388	萬暦2年	萬暦一乃面、萬暦三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	078	鼓風寺石塔群	五輪塔	
342	1389	萬暦3年	萬暦一乃面、萬暦三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	165	甲賀電燈社碑之厨石塔群	石碑	
343	1389	萬暦3年	萬暦一乃面、萬暦三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	086	下山寺石塔群	石厨	
344	1389	萬暦3年	萬暦一乃面、萬暦三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	086	下山寺石塔群	石厨	
345	1390	明徳元年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	046	西明寺石塔群	宝願印塔	
346	1390	明徳元年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	046	西明寺石塔群	宝願印塔	
347	1390	建徳元年	建徳一乃面、建徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	9	石塔	石厨	
348	1391	明徳2年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	234	青字田面像石厨石塔群	画像石	
349	1391	明徳2年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	234	青字田面像石厨石塔群	宝願印塔	
350	1391	明徳2年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	115	磐津神社参道置石塔群	五輪塔	
351	1392	明徳3年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	119	風庫塔	石碑	
352	1392	明徳3年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	119	風庫塔	五輪塔	
353	1392	明徳3年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	119	風庫塔	五輪塔	
354	1393	明徳5年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	232	重磨寺玉室石仏像群	砂蔵石仏	
355	1393	明徳5年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	232	重磨寺玉室石仏像群	空塔	
356	1393	明徳5年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	259	石道至徳(川辺塔)及び石 厨	空塔	
357	1393	明徳5年	明徳一乃面、明徳三乃面、白	白村市山内町大字野野	白村市	006	上徳堂寶篋塔	宝願印塔	

番号	酒類	和紙	版文	所在地	市町村名	地名・番号	名称	石塔種類	備考
391	1414	徳永21年	徳永二十一年四月四日		豊後高田市	091	熊毛寺縁石五層塔	板碑	
392	1415	徳永23年	徳永廿三年庚申三月	豊後高田市大字一ツ木 柳屋寺	豊後高田市	091	熊毛寺縁石五層塔	五輪塔	
393	1416	徳永24年	徳永廿四年丙午五月	豊後高田市大字西宮 西宮寺	豊後高田市	093	熊毛寺縁石五層塔	五輪塔	
394	1417	徳永24年	前住第四段縁石小幡(前幡) 徳永廿四年丙午四月十四日	豊後大野市大字野原町大字島田 神角寺	豊後大野市	005	神角寺之五輪堂裏面基壇	五輪塔	
395	1418	徳永25年	前住第四段縁石小幡(前幡) 徳永廿五年丙午二月二日	国東市大字野原町大字島田 神角寺	国東市	100	熊毛寺五層塔	石塔	
396	1418	徳永25年	前住第四段縁石小幡(前幡) 徳永廿五年丙午二月二日	豊後大野市大字野原町大字島田 神角寺	豊後大野市	091	熊毛寺五層塔	五輪塔	
397	1419	徳永26年	豊山庵山正堂縁石向 徳永廿六年己亥三月十二日	豊後大野市大字野原町大字一ツ木 柳屋寺	豊後大野市	072	熊毛寺五層塔	空塔	
398	1419	徳永26年	徳永廿六年己亥三月十二日	豊後大野市大字野原町大字一ツ木 柳屋寺	豊後大野市	023	和心の大宮五層堂内階塔	宝篋印塔	
399	1419	徳永26年	徳永廿六年己亥三月十二日	豊後大野市大字野原町大字一ツ木 柳屋寺	豊後大野市	023	和心の大宮五層堂内階塔	宝篋印塔	
400	1420	徳永27年	徳永廿七年甲午三月十三日	豊後高田市大字大野原 多野原寺	豊後高田市	419	金高基石塔群	五輪塔	
401	1420	徳永27年	徳永廿七年甲午三月十三日	豊後高田市大字大野原 多野原寺	豊後高田市	419	金高基石塔群	五輪塔	
402	1420	徳永27年	徳永廿七年甲午三月十三日	豊後高田市大字大野原 多野原寺	豊後高田市	419	金高基石塔群	五輪塔	
403	1420	徳永27年	徳永廿七年甲午三月十三日	豊後高田市大字大野原 多野原寺	豊後高田市	419	金高基石塔群	五輪塔	
404	1420	徳永27年	徳永廿七年甲午三月十三日	豊後高田市大字大野原 多野原寺	豊後高田市	419	金高基石塔群	五輪塔	
405	1423	徳永30年	徳永三十年甲辰三月廿三日	豊後大野市大字野原町大字一ツ木 柳屋寺	豊後大野市	033	天神廟石塔群	空塔	
406	1423	徳永30年	徳永三十年甲辰三月廿三日	豊後大野市大字野原町大字一ツ木 柳屋寺	豊後大野市	033	天神廟石塔群	空塔	
407	1423	徳永30年	徳永三十年甲辰三月廿三日	豊後大野市大字野原町大字一ツ木 柳屋寺	豊後大野市	033	天神廟石塔群	空塔	
408	1424	徳永31年	徳永三十一年甲辰三月廿三日	豊後大野市大字野原町大字一ツ木 柳屋寺	豊後大野市	033	天神廟石塔群	空塔	
409	1425	徳永32年	徳永三十二年乙巳四月廿七日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	024	字底堂裏面塔 石塔と彫石塔群	宝篋印塔	五層月計神明寺一帯(確認)
410	1425	徳永32年	徳永三十二年乙巳四月廿七日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	024	字底堂裏面塔 石塔と彫石塔群	宝篋印塔	
411	1426	徳永33年	徳永三十三年丙午三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	014	南法王殿基堂表碑	板碑	
412	1426	徳永33年	徳永三十三年丙午三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	014	南法王殿基堂表碑	石塔	
413	1426	徳永33年	徳永三十三年丙午三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	014	南法王殿基堂表碑	石塔	
414	1426	徳永33年	徳永三十三年丙午三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	014	南法王殿基堂表碑	石塔	
415	1426	徳永33年	徳永三十三年丙午三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	014	南法王殿基堂表碑	石塔	
416	1426	徳永33年	徳永三十三年丙午三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	014	南法王殿基堂表碑	石塔	
417	1427	徳永34年	徳永三十四年丁未三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	012	王座石塔と彫石塔群	五輪塔	
418	1428	徳永35年	徳永三十五年戊申三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	005	熊毛寺縁石五層塔	五輪塔	
419	1429	徳永36年	徳永三十六年己酉三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	005	熊毛寺縁石五層塔	五輪塔	
420	1430	徳永37年	徳永三十七年庚戌三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	005	熊毛寺縁石五層塔	五輪塔	
421	1430	徳永37年	徳永三十七年庚戌三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	005	熊毛寺縁石五層塔	五輪塔	
422	1430	徳永37年	徳永三十七年庚戌三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	005	熊毛寺縁石五層塔	五輪塔	
423	1432	徳永40年	徳永四十年癸丑三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	006	神和石塔群	石塔	大分の石成基壇(望月)取載
424	1433	徳永41年	徳永四十一年甲寅三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	154	北谷佛碑 石塔群	板碑	
425	1433	徳永41年	徳永四十一年甲寅三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	154	北谷佛碑 石塔群	板碑	
426	1435	徳永43年	徳永四十三年丙辰三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	141	熊毛寺縁石五層塔	宝篋印塔	
427	1436	徳永48年	徳永四十八年己酉三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	105	熊毛寺縁石五層塔	石塔	
428	1436	徳永48年	徳永四十八年己酉三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	105	熊毛寺縁石五層塔	石塔	
429	1436	徳永48年	徳永四十八年己酉三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	105	熊毛寺縁石五層塔	石塔	
430	1437	徳永49年	徳永四十九年庚戌三月廿一日	豊後大野市大字野原町大字野原	豊後大野市	315	堂内空塔	空塔	

番号	西暦	和暦	原文	所在地	市町村名	地名集番号	名称	石塔種別	備考
431	1339	永享11年	(藤文石印) 西永享十一年中華	佐伯山原山本堂(平) 永享十一年中華	佐伯市	113	吹留庵長徳石塔群	宝篋印塔	
432	1411	寛元元年	時大僧師願誓 願誓元年申年二月十四日禮拜佛子各某甲	豊後大野市御前町大字島田 神外寺北	豊後大野市	005	神外寺北之石塔宝篋印塔東塔五輪塔及び石塔群	宝篋印塔	
433	1441	寛元元年	時高吉元年中月五日願主 願誓乙酉	竹田市玉衣字一本松	竹田市			石塔	
434	1442	寛永2年	悲願石塔願主 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市大野町大字夏足寺塔/平	豊後大野市	21	夏足寺塔及び宝篋印塔	宝篋印塔	
435	1443	寛永3年	參詣願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市御前町大字夏足寺塔出立ノ芝	豊後大野市	22	小願願願堂五輪塔塔及び石塔群	宝篋印塔	
436	1444	寛永3年	悲願願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市大野町大字町野ノ隈	豊後大野市	053	九品菩薩石塔 五輪塔塔群	石塔	
437	1445	寛永29年	一生之現願願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市大野町大字宮道寺塔	豊後大野市	037	宮々石塔願主	石塔	半田茂存、名称が願誓でいえず。
438	1445	寛永2年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市大野町大字矢田 中角	豊後大野市	230	部之志保塔	宝篋	
439	1445	寛永23年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市大野町大字小野字山中	日田市	008	久木小野のワンダラ石	佛壇碑	
440	1446	寛永3年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市大野町大字矢田 中角	豊後大野市			石塔	
441	1447	寛永4年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	大分市原系字原系 願成寺	大分市	153	長瀬堂五輪塔石塔群	五輪塔	
442	1447	寛永4年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	宇布市下高瀬	宇布市	008	久木小野のワンダラ石	佛壇碑	
443	1447	寛永4年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	日田市大字久木小野字山中	日田市	008	久木小野のワンダラ石	佛壇碑	
444	1447	寛永4年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市御前町一真田 戸崎池藏堂	豊後大野市	020	戸崎五輪	石塔	
445	1447	寛永4年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	津久見市大字上青江野山	津久見市	005	村上神社宝篋印塔	宝篋印塔	
446	1448	寛永5年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	日田市御前町大字大野	日田市	098	元寇之塔	宝篋	
447	1449	寛永6年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市大野町大字代三玉	豊後大野市	046	代三玉公民館石塔及び石塔群	石塔	
448	1449	寛永6年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	日田市御前町大字大野	日田市	082	大野孝松社五輪塔	五輪塔	塔は本編に収めず、(宝篋) 豊永年1月石材の換置に
449	1449	寛永6年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	玖珠郡玖珠町大字山崎 龍神社	玖珠町			石製佛札	
450	1449	寛永6年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	玖珠郡玖珠町大字赤木 宝八幡	九重町	005	宝八幡宮東塔 飯碑及び同宮石塔群	飯碑	
451	1450	寛永2年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	竹田市大字川字東原 龍宮堂	豊後大野市	230	龍宮堂塔及び石塔群	宝篋	
452	1451	寛永3年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	竹田市	竹田市			五輪塔	
453	1451	寛永3年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	豊後大野市大野町大字赤木 大聖寺	豊後大野市	069	大聖寺宝篋印塔 願主宝篋印塔 願主五輪塔 大聖寺五輪塔 願主及び之の形の石塔群	宝篋印塔	
454	1452	寛永3年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	中津市本城町成町大字藤田	中津市	218	藤田寺塔 願主五輪塔 願主石塔群	無縁塔	
455	1452	寛永5年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白	竹田市城原大字下坂田 法光寺址	竹田市			五輪塔	
456	1453	享徳2年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白						
457	1454	享徳3年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白						
458	1454	享徳3年	願主各々敬白 願誓元年申年正月十一日大願主各々敬白						

番号	西暦	和暦	概文	所在地	町町村名	地名票番号	名称	石種類別	備考
696	1528	享禄3年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字水中地跡	豊後大野市			石佛	
697	1528	享禄3年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字水中地跡	豊後大野市			石佛	
698	1528	享禄3年	大木村内 秋吉石塔 一尊 大木村内 秋吉石塔 一尊	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	015	秋吉石塔	石佛	
699	1529	享禄3年	大木村内 秋吉石塔 一尊 大木村内 秋吉石塔 一尊	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	9	秋吉石塔	石佛	
700	1529	享禄3年	砂有一之石 原田先重之墓所 砂一之石 原田先重之墓所	玖珠郡九里町松木本村	九里町	007	松木自然石塔碑	自然石塔碑	
701	1529	享禄3年	竹田神社 石佛 竹田神社 石佛	竹田市神原、出合	豊後大野市			石佛	
702	1529	享禄3年	竹田神社 石佛 竹田神社 石佛	竹田市神原、出合	竹田市	151	吐合石佛	石佛	
703	1530	享禄3年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	206	三徳石佛及び五輪塔	石佛	
704	1530	享禄3年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	9		石佛	
705	1531	享禄4年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	144	高石石佛及び森道回春庵基	宝篋印塔	
706	1531	享禄4年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	144	高石石佛	宝篋印塔	
707	1531	享禄4年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	027	古傳家の石佛及び五輪塔	石佛	
708	1532	享禄4年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	320	高石石佛及び五輪塔	石佛	
709	1532	享禄4年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	320	高石石佛及び五輪塔	石佛	
710	1532	享禄4年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	320	高石石佛及び五輪塔	石佛	
711	1532	天文5年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	026	神起池石佛及び五輪塔	石佛	
712	1532	天文5年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	白村市	131	乙見石佛	石佛	
713	1532	享禄5年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	149	野口公民館石佛	石佛	
714	1532	享禄5年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	9		石佛	
715	1533	天文2年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	120	柴山石佛及び石塔群	石佛	
716	1533	天文2年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	021	石田基高石塔群	石佛	
717	1533	天文2年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	134	高石石佛	石佛	
718	1534	天文3年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	205	門橋碑	石佛	
719	1534	天文3年	豊後国津和野村長谷山内山田村三寶寺本願寺二階御堂行願堂石佛	豊後大野市三重町大字東御字上	豊後大野市	205	門橋碑	石佛	

番号	西暦	和暦	原文	所在地	市町村名	地名登録番号	名称	石塔類別	備考
808	1550	天文19年		山形市山形町西町山形屋敷、本郷、本村	山形市			宝篋印塔	
809	1551	天文20年	水鏡 天文廿年壬辰九月日	山形市水鏡大字下丁字新原	山形市			宝篋印塔	
810	1551	天文20年	青柳河原御前権左衛門右近衛正房	山形市野田町野田	山形市			石碑	
811	1551	天文20年	子爵 天文廿一年八月十七 天口扇屋	山形市野田町野田	山形市			石碑	
812	1552	天文21年	子爵 天文廿一年八月十七 天口扇屋	山形市野田町野田	山形市			石碑	
813	1552	天文22年	子爵 天文廿一年八月十七 天口扇屋	山形市野田町野田	山形市	332	井ノ原石塔群	宝篋印塔	
814	1553	天文22年	(續文正) 天文廿二年(以下不詳) 因十六日(以下不詳) 因十六日(以下不詳) 因十六日(以下不詳) 因十六日(以下不詳)	大分市磯崎 粟田寺	大分市	042	粟田寺石塔群	石塔	
815	1553	天文22年	名字数考之	豊後大野市三重町大字坂守中 井上	豊後大野市			宝篋	
816	1554	天文22年	天正四年(以下不詳) 天正四年(以下不詳) 天正四年(以下不詳) 天正四年(以下不詳)	豊後大野市三重町大字田上 藤島徳藏	豊後大野市	260	藤島徳藏無縁石塔群	宝篋	
817	1554	天文23年	子爵 天文廿二年(以下不詳) 天正四年(以下不詳) 天正四年(以下不詳) 天正四年(以下不詳)	宇佐市下久保 福成	宇佐市			自然石塔	
818	1554	天文23年	子爵 天文廿二年(以下不詳) 天正四年(以下不詳) 天正四年(以下不詳) 天正四年(以下不詳)	豊後大野市三重町大字 中津留	豊後大野市			宝篋印塔	
819	1554	天文23年	名字数考之	豊後大野市朝陽町大字志賀 雲城寺	豊後大野市			宝篋印塔	
820	1554	天文23年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	105	藤西氏墓塔 五輪塔群	五輪塔	
821	1554	天文23年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市			石碑	
822	1555	天文24年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	337	藤西氏墓塔 五輪塔群	石碑	
823	1555	天文24年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	849	藤西氏墓塔 五輪塔群	石碑	
824	1555	天文24年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	294	高野六地藏堂	宝篋印塔	
825	1555	天文24年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	294	高野六地藏堂	石塔	
826	1555	天文24年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	130	松川石塔	石塔	
827	1555	天文24年	名字数考之	豊後大野市三重町大字長善 龍徳山	豊後大野市	030	長善五輪塔及石塔群	五輪塔	
828	1555	天文24年	名字数考之	宇佐市下久保 福成	宇佐市	274	福成寺石塔群	宝篋	
829	1556	弘治2年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市			宝篋	
830	1556	弘治2年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	032	高野六地藏堂石塔群	石碑	
831	1556	弘治2年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	171	藤津氏墓塔	石碑	
832	1556	弘治2年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市			石碑	
833	1557	弘治3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	097	上ノ久石塔	石碑	
834	1557	弘治3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	018	藤西氏墓塔	自然石塔	
835	1557	弘治3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	210	天野氏墓塔五塔	宝篋	
836	1557	弘治3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	097	松宮寺石塔群	無縁塔	
837	1557	弘治3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市			五輪塔	
838	1558	永禄2年	名字数考之	豊後大野市三重町大字大化 大蔵谷	豊後大野市	288	百枝公民館墓塔	石塔	
839	1558	永禄2年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	066	甲ノ原公民館墓塔	石塔	
840	1560	永禄3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	007	平良五輪塔	宝篋印塔	
841	1560	永禄3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	007	平良五輪塔	宝篋印塔	
842	1560	永禄3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	007	平良五輪塔	宝篋印塔	
843	1560	永禄3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	007	平良五輪塔	宝篋印塔	
844	1560	永禄3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	101	本山五輪塔及石塔群	宝篋	
845	1560	永禄3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	097	白濁地蔵堂石塔	石塔	
846	1560	永禄3年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	087	折立地蔵碑	石碑	
847	1561	永禄4年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	181	井ノ原五輪塔無縁塔	無縁塔	
848	1561	永禄4年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	081	高野石塔及石塔群	石塔	
849	1561	永禄4年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	104	藤西氏墓塔及石塔群	宝篋	
850	1561	永禄4年	名字数考之	山形市朝陽町朝陽 藤津寺	山形市	144	藤西氏墓塔及石塔群	宝篋印塔	

番号	西暦	和暦	原文	所在地	南町村名	通名番号	名称	石塔類別	備考
907	1584	天正12年	山東市神田町高輪 曹隆寺	山東市	曹隆寺			石塔	
908	1584	天正12年	曹隆寺	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
909	1584	天正12年	曹隆寺	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
910	1585	天正13年	天正十三年乙酉三月七日	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
911	1585	天正13年	天正十三年乙酉三月七日	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
912	1585	天正13年	天正十三年乙酉三月七日	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
913	1585	天正13年	天正十三年乙酉三月七日	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
914	1586	天正14年	天正十四年丙戌年 佛堂宮堂御南町大津東門神橋 駒太守御南口右衛門御傳	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
915	1586	天正14年	天正十四年丙戌年 佛堂宮堂御南町大津東門神橋 駒太守御南口右衛門御傳	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
916	1586	天正14年	天正十四年丙戌年 佛堂宮堂御南町大津東門神橋 駒太守御南口右衛門御傳	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
917	1587	天正15年	天正十五年丁未 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
918	1587	天正15年	天正十五年丁未 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
919	1587	天正15年	天正十五年丁未 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
920	1587	天正15年	天正十五年丁未 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
921	1587	天正15年	天正十五年丁未 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
922	1588	天正16年	天正十六年戊戌年 花畑御南院殿	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
923	1588	天正16年	天正十六年戊戌年 花畑御南院殿	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
924	1588	天正16年	天正十六年戊戌年 花畑御南院殿	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
925	1588	天正16年	天正十六年戊戌年 花畑御南院殿	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
926	1588	天正16年	天正十六年戊戌年 花畑御南院殿	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
927	1589	天正17年	天正十七年己丑年 二月十九日 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
928	1589	天正17年	天正十七年己丑年 二月十九日 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
929	1589	天正17年	天正十七年己丑年 二月十九日 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
930	1589	天正17年	天正十七年己丑年 二月十九日 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
931	1589	天正17年	天正十七年己丑年 二月十九日 重頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
932	1590	天正18年	天正十八年戊戌年 七月十一日 (以下不詳)	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
933	1590	天正18年	天正十八年戊戌年 七月十一日 (以下不詳)	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
934	1590	天正18年	天正十八年戊戌年 七月十一日 (以下不詳)	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
935	1590	天正18年	天正十八年戊戌年 七月十一日 (以下不詳)	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
936	1592	天正20年	天正二十年壬辰年 正月五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
937	1592	天正20年	天正二十年壬辰年 正月五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
938	1592	天正20年	天正二十年壬辰年 正月五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
939	1592	天正20年	天正二十年壬辰年 正月五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
940	1592	天正20年	天正二十年壬辰年 正月五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
941	1592	天正20年	天正二十年壬辰年 正月五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
942	1593	天正21年	天正二十一年癸巳年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
943	1593	天正21年	天正二十一年癸巳年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
944	1593	天正21年	天正二十一年癸巳年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
945	1593	天正21年	天正二十一年癸巳年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
946	1594	天正22年	天正二十二年甲午年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
947	1594	天正22年	天正二十二年甲午年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
948	1594	天正22年	天正二十二年甲午年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
949	1594	天正22年	天正二十二年甲午年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	
950	1594	天正22年	天正二十二年甲午年 正月十五日 和頼	曹隆寺	曹隆寺			石塔	

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおいたのちゅうせいせきぞういぶつ たいしゅう そうかつへん
書名	大分の中世石造遺物 第5集 総括編
副書名	
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第97集
編著者名	小柳和宏・原田昭一・後藤一重・綿貫俊一・横澤悠・藤澤典彦・菊地大樹・渡辺文雄・飯沼賢司・田中裕介・江藤和幸・三谷結平
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分市牧録町1番61号
発行年月日	2017年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
けんしていせきや なりけぼら 県指定史跡屋 成家墓地	なかつしほんやぼけい まちしちやかた 中津市本耶馬溪 町下屋形	44203		33° 28' 54"	131° 12' 55"	2011.10.30 / 2011.11.1	80	大分県古代・中 世石造遺物分布 調査(測量調査)
こりょうそのくらすば いせき 御霊園クルスバ 遺跡	うすきしのつまち ささむた 臼杵市野津町 西寒田 よんこおのしいぬかい まちささむた 豊後大野市大洞 町西寒田	44206	206220	33° 4' 40"	131° 39' 37"	2011.11.22 / 2011.12.20	約1,500	大分県古代・中 世石造遺物分布 調査(測量調査)
		44212	212706					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
県指定史跡屋 成家 墓 地	墓地	中世	石造物		
御霊園クルスバ 遺 跡	墓地	中世～近世	キリシタン墓、 石造物		

要 約	大分県教育委員会では国庫補助事業として平成20年度から「大分県古代・中世石造遺物分布調査」を実施し、県内に3,605箇所の中世石造物所在地と、約28,000基の石造物を確認した。本書では主要な石造物の実測図及び銘文一覧を収録し、地域ごとの石造物の特徴をまとめ、大分の中世石造物について概観した。
-----	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第97集

大分の中世石造遺物

第5集総括編

2017（平成29）年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-0152 大分市牧録町1番61号
TEL. 097-552-0077

印刷 株式会社電子印刷センター
〒874-0011 別府市内かまど1393番地
TEL. 0977-66-5365

